子孫ーー今」○盡んなる貌。左、僖五「均服ーー」

【振鼎】シンテウ ○ふるひおそれてつつしむ。北史、齊神武帝紀「機略嚴明、事無二疑滯一、于レ是朝野ーー」○亂れたる規律などをきびしく改めただす「官紀ーー」

【振卹】シンジツ あはれみめぐむ。南史、吳平侯景傳「會二年荒一、計レ口ーー」＝振恤・振救。

【振宣】シンセン ふるひのべて明かにす。柳宗元文「ーニー幽光」

【振貸】シンタイ にぎはしかす。漢書、文帝紀「議レ所二以ーニー之」

【振盪】シンタウ ふりうごかす。盪は動。＝振動。

【振鐸】シンタク すずをふり鳴らす、鐸は古、教令を宣する時振りし大鈴。周禮「司馬ーレ、摯吏作レ旗」

【振掉】シンテウ ふるひうごく。蘇轍詩「海水ーし魚鼈驚」＝振動。

【振天】シンテン 聲が天上にまでふるひ響く。家語「子路曰、願得下白羽若レ月、赤羽若レ日、鐘鼓之音、上振二於天一、旌旗繽紛、下蟠中於地上」

【振天府】テンフ 國明治天皇の思召を以て日清戰役の戰利品及戰爭に關係あるものを陳列したまへる宮城内の建物。

【振動】シンドウ ○ふるひうごく。又、ふるひうごかす。史、留侯世家「天下ーー」＝振掉・振盪。○物理學にて物體が一定の路を上下前後に往復する運動。

【振德】シントク すくひめぐむ、德は惠施。孟、滕文公「ーニー之」

【振筆】フンピツ 勢よく筆をふるひて疾書すること。廣川書跋「張長史時ーーー大呼、以發二其鬱怒不平之氣一」

【振貧】シンヒン 貧者をすくひにぎはす。漢書「虛二郡國倉廩一以ーレー」＝振窮。

【振武】シンブ 武勇をふるひあらはす。國語「ーニー于外」

【振怖】シンフ ふるひおそれる。戰國策「燕王ーニー大王之威」＝震怖。

【振捲】シンケン すくひなでやすんずる。晉書「日二陰德陽德一、主二周急ーーー」

【振憤】シンフン ふるひいきどほる。韓詩外傳「ーー者、不レ可二勝數一」

【振奮】シンフン ふるひ勇む。韋應物詩「ーーー士卒驍」

【振揚】シンヤウ ふるひあげる。晉書、謝瑛傳「宜下ーニー仁風一、開中其自新之路上」

【振賚】シンライ にぎはしたまふ。北史、袁翻傳「翻請爲二西軍死亡將士一舉レ哀、存而還者、竝加二ーーー」＝振救。

【振慄】シンリツ ふるひをののく。史、司馬穰苴傳「三軍之士皆ーー」＝悚慄。

【振廩】シンリン 倉をひらきて救助米を與ふ。振は發。左、文十六「ーレー同レ食」

【振旅】シンリヨ 振は整、旅は衆、いくさに勝ち兵をととめ整へて還る。左、隱五「三年而治レ兵、入而…ーー」

【振鈴】シンレイ 合圖又は事を警告する時にすずをふりならす。又、其のすず。

【振厲】シンレイ 勇みふるひて勢はげし。范鎮文「威ーー、氣物鬱」

【振鷺】シンロ 鷺が勢よく羣り飛ぶ。詩、周頌「ーー于飛、于二彼西雝一」

【振出】ダシフ 國○爲替ヲ。又は手形を出す。○藥を袋に入れ湯に浸して藥氣をだす。又、其の藥。○雙六の采をふりはじめる場所。

【挺】 センセン 先

○ながし(長)○ひく(引)○のがる(遁)

【掇】 ソンシュン 願 眞

○おす(推)○おしひらく(擠・推排)○おしつける、つかむ(搶)左、定八「涉佗ーニ衛侯之手」○おさへる(按)

【挼】 ダ ダキ 歌 支 タイ 灰

㊀もむ(按揉)兩手にてすりもむ。㊁接。㊂神に供へる黍稷の屬、供米クマ(祭神食)

【挼迹】ダセキ こする、もむ。楊萬里詩「隱レ窗偶見負喧蠅、雙脚ーー弄二晚晴一」＝擦塗。

【挼祭】ダサイ 神に食物を供へて祭る。又、其の食物。儀禮、特牲饋食禮「祝命ーー」注「ーー、祭神食也」

【挺】 ティチャウ 迅

○ぬく(拔)呉語「ーー鈹搢」鐸「ぬきんづ(特拔)すぐれる、まさる「ーー秀」「英ー」○なほくもつ(直持)○ゆるやか(寬)禮、月令「ーニ重囚一、益二其食一」○ひく(引)引き出す「ーー身」○なほし、ただし(直)まっすぐ。○俗に直立して屈せざる義。○脛に通ず。儀禮、鄉飲酒禮「薦二脯五ーー」○梃に通ず。韓愈文「南牆鉅竹千ーー」

同訓異義 挺・擢・拔・抽・振・脫の別は擢(手部十四畫)の條を見よ。

【挺確】カイ すぐれてただしくたしか。唐書「入對ーー」

【挺傑】ケツ すぐれてぬきんでる。又、其の人。晉書「英姿ーー」＝挺特。

【挺劍】ケン つるぎをぬく。戰國策「唐雎ーレー而起」

【挺爭】ソウ 身をぬきんでてあらそふ。

徐陵、與二楊僕射一書「摯囚ーー、踏賢戰力」

【挺槍】テイサウ やりをぬき出す。唐書「躍レ馬ーレー、刺二於萬衆中一」

【挺秀】テイシウ ぬきいですぐれる、卓然として不羣なり。晉書、王承傳論「英姿ーー、藉二甚一時一」＝特秀。

【挺身】テイシン ○身を引きぬく。漢書、劉屈氂傳「ーレー逃、亡二其印綬一」獨り身を引きて難を逃れる。○自らに先だちて進み出る。蔡軾、留侯論「拔レ劍而起、ーー而鬬」

【挺進】テイシン 獨りぬきんでてすすむ。

【挺出】テイシツ 特にぬきんでる。杜甫詩「自謂顏ーー、立登二要路津一」

【挺穢】テイスイ 稻の穗がぬき出る。又、其のぬき出でたる穗。潘岳、射雉賦「曄ニーー之傾掉一」

【挺節】テイセツ 堅く節操を持して屈せず。唐書、杜甫傳論「數嘗二惡亂一、レーー無所汙」

【挺然】テイゼン 衆人にぬきいづる貌。晉書、劉毅傳「方正亮直、ーー不レ羣」

【挺戰】テイセン 身をぬきんでて眞先に進み戰ふ。南史、宗越傳「單身ーー、衆莫二能當一」

【挺挺】テイテイ ただしくなほき(正直)貌。左、襄五「周道ーー、我心炯炯」

【挺特】テイトク 特に衆にぬきんでる。班固表「英資ーー」

【挺拔】テイバツ ぬきんでる。宋史、沈遼傳「幼ーー不羣」＝挺秀。

【挺立】テイリツ ぬきんでたつ。南史、徐孝嗣傳「孝嗣幼而ーー」＝挺秀・挺特。

【捏】 デツネチ 厨

通音ネツ 捏は譌字

○ひねりあつめる(捻聚)土をこねて種種の物を造る。轉じて牽合附會して無根の事を構成する義「ーー造」○おす(捺)

【捏造】デツゾウ ○土などをこねて物の形をつくる。○轉じて根も葉も無き事實を構成する。

【捏】

捏(淘條)の譌字。

【挴】 バイ 簡

むさぼる(貪)楚辭、天問「穆王巧ーー」

【捌】 ハツハチ 黠

もと扒に作る

○やぶる(破)○うつ(擊)○わかつ(分)○やっ、數字の八に代用す、主に官文書、證書等に用ふ。○さらひ、禾穀を掊ッき聚める具「ーー挹」○國さばく、物を賣りて片づける。又、是非を判斷する。

【拚】 ハン 元

○ひるがへる。＝翻。○俗に拌又拚に通用す。

【捗】 ハン 願 諫

㊀をさむ(收斂)㊁えつ(打)○國はかゆく、はかどる「進ーシンチョク」

【捕】 ㊀ホ・ブ 遇 ㊁博に同じ。

㊀とる(取)とらふ(擒捉)「ー魚」○罪人を召しとる、其の所に居る者を追ひ捉へるを逮といひ、亡げて居所の不明の者をたづねて捉へるを一といふ。○巡警(我が巡査の類)一に巡ーといひ、略して單にーといふ。㊁うちとる(擊取)

同訓異義 捕・取・執・秉・把・操・採・捉等の別は取(又部六畫)の條を見よ。

【捕按】ホアン とらへてしらべる。漢書「不レ避二貴戚一以ーーー」＝捕治。

【捕影】ホエイ 影をとらへる、とらへどころなきに喩ふ。漢書、郊祀志「求レ之漫漫、如二係レ風ーレー、終不レ可得」

【捕魚】ホギョ 魚をとらへる。吳志「司馬自能結レ網、手以ーレー」

【捕獲】ホクワク とらへる、いけどる。梅堯臣詩「津頭吏卒雖ニーーー、官司直惜二儒衣裳一」＝捕拿。

【捕鯨】ホゲイ くぢらをとらへる「ーー船」

【捕繫】ホケイ とらへつなぐ。捕縛して獄に繫ぐ。漢書、杜周傳「ーニー豪傑」。

【捕斬】ホザン とらへきる。

【捕獣】ホジウ けものをとらへる。

【捕捉】ホソク とらへる。唐書、懿宗、登二寶位一敕書「ーー未レ獲」＝擒捉。

【捕拿】ホダ おさへとる、拿は拏の俗字。＝拿捕・捕獲。

【捕治】ホチ 罪人をとらへてしらべる。漢書、廣漢傳「吏ーーー」

【捕鳥】ホテウ とりをとらへる。

【捕亡】ホバウ にげたる者をとらへる、逃亡せし罪人をとらへる。

【捕縛】ホバク とらへてしばる。

【捕風】ホフウ 風をとらへる、とらへどころなき喩、捕影に同じ。韋應物詩「持レ索ーー幾時得」事の證左なきものをーー捉影といふ。

【捕吏】ホリ とりて、罪人をとらへる役人。

【捕虜】ホリョ とりこ。＝俘虜。

【捕獵】ホレウ 狩りとる。遼史、道宗紀「咸雍六年、禁二漢人ーーー」

【捋】 フ 尤

手を以て掬ひ聚めるる。抔に通ず。

【挽】 ベンバン 願 阮 銑 輓に通ず

○ひく(引)引き張る「ー强」強はつよ弓。○すすむ(進)前か

らひっぱりて進める「—車」○死者を葬る時、其の棺の繩を牽き送る「—歌」○圖ひく、鋸ガにて木材をきり割く「ホ—ガビ」○ろくろ鉋ガにて器物を造る「—物細工」

同訓異義 挽・牽・引・援・曳・延・惹等の別は牽（牛部七畫）の條を見よ。

【挽引】イバン 重き物などをひく。禮記、疏「力政、——築作之事」

【挽歌】バン 葬る時に柩の車の綍ブを牽く者のうたふ歌。とむらひうた。晉書、樂志「—出乎漢武帝」古今注「薤露・蒿里二章、李延年今爲二二曲、薤露送二王公貴人、蒿里送二士大夫庶人、使二挽柩者歌一之、世呼爲二—一」＝輓歌。

【挽强】バンキョウ 强き弓をひく。老學庵筆記「以レ—、名二子秦隴間一」

【挽回】バンカイ もとにひきもどす。

【挽牽】バンケン ひく、ひっぱる。一統志「舟行—五百人方可レ渡」

【挽詩】バン 挽歌に同じ。

【挽車】バシャ ○車をひく。○死人をのせて引くくるま。＝輓車。

【挽滿】バンマン 强くひきしぼりたる弓を引く。後漢書、梁竇傳「能—」＝挽强。

【挽物】モノ 圖ろくろざいく。

【挪】ヤ 廣 挪（手部九畫）に同じ。

○もてあそぶ、からかふ（弄レ手相弄）「—揄」○あざける（嘲）

【捋】㊀ラツ・ラチ ㊁レツ 私 屑

㊀とる（取）○指さきにてつまみ取る。詩、周南「采二采卷耳一」薄言—之」○なでる、する（摩）㊁とる（采）

【捧】ヒン 畫 陌

○わき、わきのした。＝腋。史、商君傳「千羊之皮、不レ如二一狐之—一」轉じて宮城正門の左右の小門「左右—門」又、宮殿の左右の旁舍、又、轉じて、宮庭「宸—」「禁—」「宮—」「仙—」○やつくち、衣服のわきの下の所「逢—之衣」○わきばさむ（挾持）こわきに抱へる。左、僖三五「—以赴外」○たすける（挾扶）人を善き方に導く。詩、陳風、衡門、序「誘二其君一也」前に在りて導くを誘といひ、傍に在りて扶けるを—といふ。

【拔】エキ 八 畫

○わき、わきのした。＝腋。史、商君傳「千羊之皮、不レ如二一狐之—一」轉じて宮城正門の左右の小門「左右—門」又、宮殿の左右の旁舍、又、轉じて、宮庭「宸—」「禁—」「宮—」「仙—」○やつくち、衣服のわきの下の所「逢—之衣」○わきばさむ（挾持）こわきに抱へる。左、僖三五「—以赴外」○たすける（挾扶）人を善き方に導く。詩、陳風、衡門、序「誘二其君一也」前に在りて導くを誘といひ、傍に在りて扶けるを—といふ。

【拔閣】エキ 王宮の門。又、王宮のうち。盧藏用文「東西—、備二忠讜之美一」＝宮掖・禁闈。

【拔誘】イウ 助けみちびく。＝誘掖。

【拔垣】エキ 宮中の正殿の傍に在る垣。杜甫詩「花隱—暮」書言故事「前世文士以二中書在左右、謂爲二右曹一、又稱二西掖一」劉公幹詩、誰謂相去遠、隔二此西—一」

【拔省】シャウ 宮城內の官署、即ち宮內省。唐書、劉祥道傳「—崇峻、王言祕密」＝宮省・禁省・禁署。

【拔庭】テイ おくごてん、宮中正殿の旁舍、皇妃宮女の居所。漢書、百官公卿表「武帝更名二永巷一、曰二—一」＝後庭。

【拔門】モン 宮城の正門の左右の小門。康熙字典「宮旁舍曰二掖庭一、殿旁垣曰二掖垣一、宮闕旁小門曰二左右—一、皆取二肩腋之義一」漢書、成帝紀「閉二入尙方—一」

【掩】㊀エン ㊁アン 琰 感

㊀おほふ。おほひかくす。○をさむ（斂）さへぎる（遮）○かくす（隱翳）○備へざるに乘じて之を襲ひ取る、不意うちにする。曲禮「大夫不二—一」○なでる（撫）○ぜにうち（意錢）「博—」○とづ（閉）おほひとぢる。南史、袁粲傳「席門常—」○やむ（止）班昭、女誡「室人和則謗—」㊁おほふ（覆取）＝揜。

【掩蔽】ヘイ おほひかくれる、蔽は草盛んなり。魏武帝賦「日—而四移」

【掩映】エイ おほひかくす、映は隱。李白、大鵬賦「—二—乎四海之中一」＝掩翳。

【掩翳】エイ ○おほひかくす。東京夢華錄「綵樓相對、繡旆相招、—二—天日一」○おほはれたるかげ。

【掩掩】エン にほひの盛んなる貌。宋玉、高唐賦「越香—一」＝馥郁。

【掩蓋】ガイ ○おほふ。又、おほひ。○兵用語、敵彈を防ぐ爲めに壕塹等の上に水平に作る屋根。○圖祕密にしかくす。＝掩飾。

【掩卷】エンクワン 書物をおほひて讀むことを止める。李白詩「片言苟會レ心、—レ忽而笑」

【掩擊】ゲキ 敵の不意を襲ひうつ。後漢書、虞詡傳「設レ伏、羌果大奔、—大破レ之」＝掩襲。

【掩護】ゴ 敵の攻め來るを遮り掩ひて、みかたを護る「—射擊」

【掩殺】サツ 敵の不意に乘じて殺す。金史、石抹卞傳「乘レ夜—二—關子山一」

【掩耳】ミミ 圖 みみをおほふ、聞かざらんとする義。韓愈文「言語纖及、輒—レ—」朱熹文「成書不レ出二姓名一、以避二近レ名之譏一、此與二掩レ耳偷レ鈴之見一何異」自ら欺くに喩ふ。

【掩疵】シヨウシ きずをおほふ、過失を隱す義。謝偃文「誠責レ躬而咎レ己、豈藏レ瑕而—レ—」

【掩襲】シウ 敵の不意をうつ。晉書、羊祜傳「祜每與二吳人一交レ兵、不レ爲二—一之計一」＝掩擊・掩討。

【掩蔽】ヒン 風が物を吹き離かす貌。柳宗元文「振二動大木一、—二—衆草一」＝奄冉。

【掩塞】ソク おほひふさぐ。吳越春秋「上天蒼蒼、不レ可二—一」＝掩閉。

【掩討】タウ 敵の不意を襲ひてうつ。魏志「—二—逆節、折二衝四海一」＝掩擊。

【掩涕】テイ 泣き顏をおほひかくす。離騷「長太息以—レ—兮、哀二民生之多艱一」

【掩鼻】ビ 臭氣の耐へ難きにいふ。孟、離婁「西子蒙二不潔一、則人皆—レ—而過レ之」

【掩閉】ヘイ おほひとぢる。後漢書、袁閎傳「母去便自—一」＝掩塞。

【掩蔽】ヘイ おほひかくす、轉じて見開の出來ざるやうにへだてをする。

【掩沒】ボツ おほはれかくれる。廣川書跋「蹇壓—、故不三復得二其全文一」

【掩目】モク 目をおほひかくす。後漢書「陳琳曰、諺有二—捕レ雀、微物尙不レ可二欺以得一レ志、況國家大事乎」掩レ耳盜レ鈴と同じく自ら欺くに喩ふ。

【掞】㊀エン・セン 鹽 ㊁剡（刀部八畫）に同じ。㊀のぶ（舒）又、おほふ（蓋）左思、蜀都賦「摛藻二天庭一」○かがやく。＝談。㊁するどくとがる（銳利）

【掞藻】ソウ 詞藻を舒べ發する。文辭の典麗なるをいふ。柳顧言詩「—麗二參星一」＝摛藻。

【掐】カフ 洽

つめにてさす（爪刺）つめにておさへる（爪按）

【掐摘】カテキ 爪にてかきとる。顏氏家訓「吳郡陸襄父閑、被レ刑、終身布衣、疏飯蔓菜、有二切割一、皆不レ忍レ食、居家惟以二—一供レ廚」

【掔】カン・ケン 先 刪

○かたし（固）○あつし（厚）○ひきさる（牽去）＝牽。史、鄭世家「—羊以迎」○もつ（持）○うつ（擊）

【掎】キ 紙 支

○かたかたひく（偏引）かた方を引く。○あしとる。一脚を牽く。漢書、班固敍傳「秦失二其鹿一、劉季逐而—之」○はなつ（發）班固、西都賦「機不虛—」○したがふ。○ぬく。

【掎止】シキ 後より引き止める。晉語「—二—晏葉一焉」

【掎摭】セキ 引きよせて收め取る。詩品「辨二彭清濁一、—二—病利一」＝摭拾。

【掎角】カク つのとり、あしとる、鹿を捕ふるに前のつのをとり、其の後の足をとる。前後相應じて敵に當るにいふ。左、襄十四「譬如レ捕レ鹿、晉人角レ之、諸戎掎レ之」轉じて兵を駐めて敵を制する義、角一に捐に作る。

【掬】キク 屋 匊に同じ

○すくふ、むすぶ、兩手にてすくふ。左、宣十二「舟中之指、可レ—也」○轉じて心情の十分に外に見はるるにいふ、すくひ取るべき義「眞情可—」杜子春傳「饑寒之色可—」○左右のたなごころ。○はなれる（離）○一升の量、又、一三合の量、左右の掌に滿つるほどの量。

【掬月】ゲツ 水中の月をすくひ取る。掬水參看。

【掬囊】ジキウ 一つかみの土くれ。抱朴子「龍門沸騰、非二—所一レ過」

【掬水】キクスイ 水を兩手にてすくふ。又、すくひたる水。于良史詩「—月在レ手、弄レ花香滿レ衣」

【掬泉】キクセン 手にていづみをすくふ。徐照詩「過レ景因開レ畫、思レ茶亦—レ—」

【掬弄】キクロウ 水をすくひもてあそぶ。陸游詩「摘嗅砌下花、—二—澗底泉」

【据】㊀キヨ ㊁キヨ 御 魚

㊀はたらく、拮—は口と手と共に作す。○手を擧げて持つ。㊁よる、據に通ず、しっかりと持つ。漢書、酷吏傳「趙禹—」法守レ正」○てのやまひ（手病）○すくなるうなじ（直項）がっじゃう。司馬相如、大人賦「—以驕驁」○圖する。現狀の儘にするおく。

【据置】ヂキ 圖現狀の儘に爲し置く。現狀維持。

【掘】㊀クツ ㊁コツ ㊂ケツ ㊃ゴツ 月 月 月 物

㊀ほる（搰）○つく（突）○ひとりぬき出る（特起）＝崛。○つくす（盡）㊁あぐ（揚）○あな、いはや。窟に通ず。うがつ（穿）㊂穴をあける。㊃兀に同じ、兀然として動かざる貌。莊、田子方「—若槁木」

【掘開】クワイ ほりひらく。

【掘起】キク 特にぬき出て起る。＝崛

起。

【掘金】クツキン かねを地よりほり出す。述異記「使二人一ーレー」

【掘鑿】クツサク ほりうがつ。＝掘穿。

【掘井】クツセイ ほりゐる ねどをほる。孟子「有レ爲者、譬若レ掘レ井」

【掘穿】クツセン ほりうがつ。＝掘鑿。

【掛】 クワイ ケ 卦 通音 ケイ

○かく、かかる。＝挂。ひっかかる、ひっかける。○わかつ（別）

國○カカリ事務の擔任「戸籍ー」又費用「ーり負け」又、家屋の構造。○カカル手はじめ、著手する「仕事にとりーる」○カケ かけ賞。

同訓異義 カカル 掛・挂・係・懸・繫等の別は係（人部七畫）の條を見よ。

【掛金燈】クワイキン 酸漿ガキの異名（救荒本草）＝姑娘菜・燈籠兒。

【掛冠】クワイクワン 官にて制定せし冠をかけてかぶらず、辭職する義。後漢の逢萌が王莽に事ふるを欲せず、冠を東都の城門に掛けて家族をつれて遼東に客となりし故事（後漢書、逢萌傳）に本づく。陸游詩「已聽二彈冠一欲二一一一」（彈冠は冠の塵をはらふ、出仕の用意）＝挂冠。

【掛錫】クワイシヤク 巡行の僧のしばらく止り住する義。飛錫の對。釋氏要覽「今僧止所レ住處、名二一一一者、凡四天比丘、行必持二錫杖一、持レ錫有二十五威儀一、凡至二室中一、不レ得レ著レ地、必掛二於壁牙上一、故云二一一一」

【掛鐘】クワイショウ 掛け時計。

【掛軸】クワイジク 書畫のかけもの。愚陵書畫記「唐五代皇朝等名畫ー一」

【捲】 ㊀ケン ㊁ケン・クヮン 先 銑

㊀いきほひ（氣勢）「ー勇」○いさむ。○こぶし「控ー」拳に通ず。○ーは力を用ふる貌。㊁まく、卷に通ず「席ー」○をさむ（收）

【捲握】ケンアク 手ににぎる。後漢書、張讜傳、注「ーー猶二掌握一也」

【捲結】ケンケツ まきむすぶ。釋名「氣在レ外ーー二之一也」

【捲捲】ケンケン 力を用ひて勞する貌。莊、讓王「ーー乎后之爲レ人、篤力之士也」

【捲紗】ケンサ うすきしゃをまきあげる。蘇軾詩「翠袖ーレ紅映レ肉」

【捲手】ケンシユ にぎりこぶし。淮南子「五指之更彈、不レ若二一一之一拳一」

【捲土重來】ケンドチヨウライ 土を卷く勢を以て重ねて來る、一旦衰へたる勢力を回復して再び襲ひきたる義。捲一に卷に作る。杜牧詩「江東子弟多二才俊一ーー未レ可レ知」

【捲髮】ケンパツ かみを辮髮にくむ。

【捲勇】ケンユウ 腕力强し。捲は拳。齊語「有二一一一股肱之力一」＝拳勇。

【捲簾】ケンレン すだれをまく。王勃、滕王閣詩「珠簾暮捲西山雨」

【捲尺】ケンシヤク 地面を丈量するに用ふる尺。布革を以て帶の如くに作り、自由に卷舒すべし。＝皮帶尺。

【掀】 ㊀ケン ㊁キン 文 元

㊀あぐ（擧）かかぐ、手を以て高くさし擧げる。左、成十六「ー公以出二於淖一」○ーは高くそびゆる貌。韓愈詩「虵虺首ーー」㊁ひく（引）＝掣。

同訓異義 アガル 掀・擧・揭・稱・扛・昂・颺・抗の別は擧（白部十一畫）の條を見よ。

【掀腫】キンショウ ふくれあがる。腫脹して憤起する。清異錄「一日復作、左腮ーー」

【掀鼓】ケンクワウ 辟の大いなる義。陸龜蒙詩「海上風雨來、ーー雜二飛電一」

【掀簸】ケンハ あふりあがる。又、あふりあげる。韓愈詩「颶風有レ時作二ーー一」蘇軾詩「風颶助二凝洌一、幃帳困二ーーー」＝翻簸。

【掀播】ケンハ あがる。昊葉詩「我將呼二巨鰲一、滄海欲二ーー一」

【掀翻】ケンハン あがりひるがへる。指月錄「大地ーー無二覓處一」

【掀舞】ケンブ まひあがる。朱熹詩「空質麗二晴暉一、龍鸞共ーー」

【控】 ㊀コウ ㊁コウ ㊂カウ 東 送 江

㊀ひく（引）弓を引く。○ひかへる、引き止める、ひかへて制する「ー馬」「提ー」○とどむ（止・制）○つぐ（告）告げうったへる。詩、鄘風「ー二于大邦」○なげる（投）莊、逍遙遊「ー二於地一而已」㊁ひく（引）引き去る、のぞく（除）○ひく、弓を引く。㊂うつ（打）莊、外物「ー二其顙」○國ヒカ ひかへめにする。書きとめ置く、しばらく待つ「ー所」○ヒヒ 原本のうつし（副本）

【控壓】コウアツ ひかへおさへる。杜牧詩「ーー平江十萬家」

【控咽】コウエン のどをしめつける、要所をおさへる義。周邦彥文「扼レ襟ーレ、屏二藩喪裏一」

【控鶴】コウカク ○仙人の飛びて天に昇るに喩ふ。孫綽賦「王喬ーレ以冲レ天」○宿衛近侍の臣の稱、唐の武后ーー府を置く。天子宿衛の兵をーー軍と稱す。

【控御】コウギヨ 馬をひかへて制使する如くに人の自由を制して治める、御は馭。晉書「善二于懷撫一、短二于ーー一」＝控馭。

【控馭】コウギヨ 控御に同じ。庾信詩「ーー五十州、風行數千里」

【控擊】コウゲキ ひき止めてふせぐ。宋史、李綱傳「ーー以扼二其衝一」

【控弦】コウゲン 弓を引く。又、其の兵士。漢書、趙敬傳「ーー四十萬騎」

【控制】コウセイ おさへてとりしまる、操制する。唐書、王忠嗣傳「帶二四將印一、勁兵重地、ーー二萬里」＝控御。

【控訴】コウソ 第一審の裁判に對して不服の時、再び裁判を求める爲めに裁判所に訴へ出る義。＝控告。

【控除】コウジヨ ひき去る、さしひく。俗に扣除とも書く。

【控攀】コウハン たづなをひかへて制する。攀はたづな。呂覽「約二審之一而以控二其攀一」＝控馭。

【控馭】コウギヨ 控馭に同じ、勒はくつわ。＝控攀・控制。

【掊】 コク 屋 ワク

○まどふ、或惑に通ず。○くらし（惛）

【混】 コン 阮

○まじふ。＝混。○あはす、合同する。王褒、洞簫賦「帶以象牙一二其會合一」○おこる、おこす（起）振起する。

【採】 サイ 隊 古、采に作る

○とる（取）手に取る「收ー」「博ー」「訪ー」「捃ー」○きこる（樵）大なる者を薪といひ、小なる者をーといふ。戰國燕策「芻牧薪ー、莫二敢闚一東門一」○えらぶ、擇び取る。○つむ（摘）

同訓異義 トル 採・取・執・秉・把・操・撮・捕・捉の別は取（又部六畫）の條を見よ。

【採抱】サイホウ 水などをくみとる。水經、注「ーー二河流一、釀二成芳酎一」

【採荷】サイカ はちすをとる。梁書、江革傳「年十七作二ーー詞一」

【採掘】サイクツ 鑛石を地よりほり出す。

【採光】サイクワウ ひかりを取る、あかりをとり入れる。又、あかりとり。

【採鑛】サイクワウ あらがねを掘り取る、鑛物を採掘する「ーー冶金」＝採礦。

【採獲】サイクワク とり得る。唐書「ーー刊綴爲二五十篇一」

【採決】サイケツ 議長が議場にて議案の可否をとりきめる。

【採擷】サイケツ ○つまみとる。謝朓詩「遇レ君時ーー、玉座奉二金巵一」○衣の裾をかかげ折りて帶に插み、物を其の中に貯へる。＝采擷・採襭。

【採工】サイコウ かねほり（天工開物）＝採礦夫。

【採拾】サイシヨウ ○薪をとり木の實をひろふ。後漢書、江革傳「嘗ーー以爲レ餐」○ひろひ取る。＝採集・採摭。

【採集】サイシヨウ とりあつめる「植物ーー」

【採斫】サイシヤク てにとりてきる。蘇軾詩「窮探到二案背一、ーー二黃楊子一」

【採珠】サイシユ 水に入りて眞珠を取る、唐の元稹にーー行あり。晉書「合浦郡百姓、惟以二ーー一爲レ業」

【採摭】サイセキ ひろひとる、摭は拾。書經、序「ーー二羣言一」＝拾摭・采摭。

【採琢】サイタク とりてみがく。晉書、戴逵傳「荊璞發二ーー之榮一」

【採擇】サイタク とりえらぶ、多くの中よりえり取りて用ふる。

【採摘】サイテキ つまみとる。李益詩「ーー愧二芳鮮一、奉レ君議幕節」

【採點】サイテン ○試驗の答案に點數をつける。○投票又は勝負などの數をしらべる。

【採銅】サイドウ 地を掘りて銅をとる。唐書「元和中、歲ーー二十六萬有奇」

【採納】サイナフ 人を引き入れ用ふる。取り上げる。又、うけ入れる。後漢書、耶顗傳「宜下ーー二良臣一以助中聖化上」

【採訪使】サイハウシ 官名、唐玄宗、諸道ーーを置き、官人の善績を考課し、三年に一奏せしむ。

【採伐】サイバツ 林木をきり出す。＝伐採。

【採藥】サイヤク くすりの草をつみとる。晉書「康嘗ーレ游二山澤一」＝采藥。

【採用】サイヨウ ○とりもちふる。○人をとり用ふる。＝擧用・登用。

【採掠】サイリヤク 財をかすめ取る。晉書、石勒載記「ーー無レ所レ獲、軍中大飢」

【採蓮】サイレン ○はちすを取る。○樂曲の名。樂府集「樂府江南弄曲、梁武帝製、曲和云、ーー渚、窮冶舞二佳人一、曲名取レ此」

【掃】 サウ 號 皓 もと塲に作る

○はらふ、はく（除）はらひきよめる「灑ー」「淨ー」○さっぱりとなくなる、全くなくなる。「ー地」○なでる（抹）する（刷）杜甫詩「淡二娥眉一朝至尊」○すつ（弃）

同訓異義 ハラフ 掃・拂・擦・禳・祓・禊・除・撥○掃は箒にてはくなり、洒掃・掃除などと用ふ、轉じて何にても、一いきにさらりと掃ふに用ふ「十里脩篁翠掃天」の類。○拂はばっばっと少しづつはらふなり、拂子にて、拂ふやうにする義。禮記「進二几杖一者拂レ之」○擦は推し除ノけてやる義、盜賊蟲蛇などをはらふに用ふ。○禳はいのりて、はらひのぞく。左傳「有二水旱疾疫一則禳レ之」○祓は災を除き、福を求むる意、はらひきよめる。國語「祝祓レ社」○禊はみそぎして災をはらふ義、修禊と熟す。○除はよそへかたづけること、除レ惡・除レ草・除レ災などに用ふ、不潔などを除きてさっぱりとする義。○撥はねかへすこと。書經「撥レ亂反レ正」曲禮「衣毋レ撥」

【掃雲帚】竹の異名〔竹譜〕

【掃海】兵用語。海中に敷設せられ又は沈没せし危險物をとりはらふ作業。

【掃灑】はきて水すすぐ。後漢書、趙孝傳「一一待レ之」李白詩「爲レ余一一石上月」＝灑掃・洒掃・掃除。

【掃帚】はははき。書苑「取二一一一一沾二泥汁一書壁」

【掃刷】はらふ、刷も掃。爾雅、注「拭拭一一、皆所三以爲二潔清一」＝掃除・掃拭。

【掃愁帚】うれひをはらふははき、酒の異名。蘇軾、飲酒詩「應レ呼二釣詩鈎一亦號一一一」釣詩鈎も酒の異名、詩趣をつり出すつりばり。

【掃拭】はらひぬぐふ。李白詩「一一青玉篋、爲レ余拂二金罍一」＝拂拭・掃除。

【掃彗】はははき。爾雅、注「其形孛孛如二一一一」＝掃帚。

【掃清】はききよめる。李白詩「長嘯萬里風、一二一胸中愛」

【掃晴娘】てりてりばうず、晴を祈るまじなひに紙にて人形を作り、竿につるすもの。陔餘叢考「吳俗久雨後、閨閣中有レ剪レ紙爲二女形一、手持二一帚一、懸二簷下一、以祈レ晴、謂二之一一一、按元初、李俊民有二一一詩一、卷レ袖寧裳手持レ帚、挂向二陰空一便掃レ手、其形可二想見一也」

【掃蕩】○さっぱりとはらふ。○盜賊などを平げほろぼす。○害毒・弊害などを除き去る。晉書、劉琨傳「一二一仇恥」

【掃榻】榻コシカケの塵をはらふ、人を歓迎する義。陸游詩「南臺中丞一一見、北門學士倒レ屣迎」

【掃地】○地をはらひきよめる。國史補「韋應物立性高傑、鮮食寡欲、所在焚レ香一一而坐」○轉じて全く盡きて殘るものなき義。漢書、魏豹傳、贊「秦滅二六國一而上古之遺烈、一一而盡矣」

【掃除】ちりをはらひのぞく。史、信陵君傳「趙王、一一自迎」＝掃清・掃刷。

【掃滌】はらひきよめる。滌は水をそそぐ。南史、宋高祖紀「百年榛穢、一朝一一」＝掃除・掃洒。

【掃殄】はらひほろぼす。殄は滅。＝掃滅。

【掃墓】墓參り、墓祭をいふ〔清通禮〕

【掃滅】はらひほろぼす。元好問詩「温柔與二敦厚一、一一不二復留一」＝掃殄。

【掃部寮】國昔、宮中の掃除を司る役所、其の長官を掃部頭といふ。

【捨】シャ 馬 省して舍に作る

○すつ、すてる（弃・棄・釋）うちゃる。宋書、殷淳傳「愛二好文義、未嘗遠一」○佛喜一は神佛の事に金品を寄進する。施しすてる。○佛中一は善事を行ひて心に欲望のなき義。傳燈錄「行道布施無所希望、是謂中一」

【捨身】シャシン ○いのちをすてる。○佛身をすてて出家する。韓愈文「一一施佛」＝舍身。

【捨施】施しすてる。隋煬帝、寶塗經藏願文「一二一淨財、豈可二稱計一」

【捨置】國物をすてるやうに安くうる、なげうり。

【捨假名】國漢文を和讀するために、字の右旁にそへることば。

【捨子】國すてられし小兒。＝棄子・棄兒。

【捨詞】國すてぜりふ。かへりがけに盲ひ放す惡口。

【捨扶持】國德川時代にみより無き者に惠與せし扶持米。

【掌】シャウ 養

○てのひら、たなごころ（手心）「抵一」「反一」「合一」○つかさどる（主）「分一」「兼一」「典一」書、周官「冢宰二邦治一」○つかさどる事。つとめ「職一」○ささく（捧持）詩、小雅「王事鞅一一」鞅は荷、一は捧げ持つ。荷ひ捧げて走りいそがはしくして容儀を正す暇なきを鞅一といふ。詩、小雅「或王事鞅一」

【掌握】○掌中ににぎる。漢書、張敞傳「海內之命、斷二于一一一」○ひとにぎり。又、それ程の少許。列、湯問、注「鄒子之所レ言盡其一一耳」

【抵掌而談】掌をうちて盛んに談ずる。戰國策、蘇秦見、說二趙王于華屋之下一、一一」

【反掌】てのひらをかへす、事の極めて易きに喩ふ。說苑、正諫「變二所レ欲爲一易二於一一一」

【指掌】事の明白にして且つ容易なる義。論、八佾「其如レ示二諸斯一乎、指二其掌一」

【掌故】○禮樂の故實などをつかさどる官。東方朔、客難「使二蘇秦張儀與レ僕並生二於今之世一、曾不レ得二一一一一」○故實、慣例。史、龜策傳「因二襲一一一、未レ遑二講試一」

【掌跡】てのひらのあと。逃異記「其一一猶在焉」

【掌大】手のひら程の大さ。

【掌中珠】手の中のたま、人の愛子をいふ。杜甫詩「掌中探見一珠新」

【掌典】國宮內省式部職の職員、祭典の事をつかさどる。

【掌統】つかさどりすべる。唐書「將軍各二人、一一一北衙禁兵一」

【掌握】手中に取扱ふ、容易に已の思ふ通りにする。孟、公孫丑「治二天下一可レ運二之掌上一」

【掌裡】掌中に同じ、裡は中。

【授】ジュ 宥

○さづく、あたへる（予）「天一」「神一」「褒一」○つたへる、教へる「口一」「傳一」「教一」「訓一」「指一」わたす（付與）○さづけ、さづかり。史、淮陰侯傳「陛下所謂天一、非二人力一也」

【授衣】ジュイ 陰暦九月の異名。ながつき。詩、豳風、七月「七月流火、九月一一」

【授戒】佛門に入りし人に五戒・十戒・具足戒等の戒律を授ける。

【授業】○學業を敎へさづける。漢書、董仲舒傳「孝景時爲二博士一、下レ帷講誦、弟子傳以二久次一相一一、或莫レ見二其面一」○生產の業をさづける。＝授產。

【授產】生活する爲めに產業をさづける。

【授賞】ほうびをあたへる。公羊傳、注「明君見レ勞一一」

【授爵】爵位をあたへて華族に列せしめる。

【授受】授けると受けると、うけわたし。孟、離婁「男女一一不レ親」

【授首】殺される、己の首を人にあたへる義。諸葛亮文「擧レ兵北征、夏侯一一」

【授時曆】元代のこよみ、農民に稼穡の時節を授ける義〔元史、曆志〕書經の「敬二授人時一」の語に本づく。

【授命】いのちをなげ出して盡力する。論、憲問「見レ利思レ義、見レ危一一」＝致レ命・捐レ軀。

【授與】わたしあたへる「證書一一式」

【捶】 ㊀スキ ㊁タ 紙 寄

㊀うつ、むちうつ（以杖擊）「鞭一」「輕一」＝棰。○つく（撞）禮、內則「欲乾肉則一而食之」○馬をうつむち「馬一」＝箠。㊁はかる（搥）物の輕重をはかる。

同訓異義 捶・扑・拊・撻・征・伐・討等の別は征（彳部五畫）の條を見よ。

【捶擊】むちうつ。史記「一一問レ之」＝捶撻。

【捶殺】むちうちころす。北史、王文同傳「小有二違逆一者、輒覆二面子地一而一二一之」

【捶楚】むちうつ。漢書、路溫舒傳「一一之下、何求而不レ得」

【捶打】むちうつ。南史、劉溯傳「奴婢輩一二一之」＝捶撻・捶扑・鞭打。

【捶撻】むちうつ。賈書、樂志「嫂一二一婢過レ苦」＝鞭撻・笞撻。

【捶罵】むちうちてののしる。釋惠洪詩「往往遭二一一」

【捶拊】むち。史記「執二一一一以鞭笞天下一」＝箠策。

【捶扑】むちうつ。魏志、何夔傳「加二其一一之罰一」＝敲扑・捶打。

【推】 ㊀スキ ㊁タイ 支 灰 通音スキ

㊀おす。○うつる、おしうつる。うつす（遷移）易、繫辭「寒暑相一而歲成焉」○えらぶ（擇）○上としてたふとぶ、奉じいただく「一戴」○すすむ（奬進）えらびて上に薦める。書、周官「一賢讓能、庶官乃和」○たづねる、究める（尋繹）「一本」○なじる（窮詰）㊁おす、おしおとす（排擠）○おしひらく「一開」○すすむ（進）おし進める。後より送りて前に進める。左、襄十四「或一之、或輓之」輓は前よりひっぱる。○うつす（移）移し去る。○ゆづる（讓）己の有る所を讓りて人に與ふ。史、淮陰侯傳「一食食我」○ゆだぬ（諉）「一辭」○國強ひて、たって、敢て。＝押。

【推移】うつりかはる、おしうつる。屈原、漁父辭「聖人不レ凝二滯於物一、而能與世一一」

【推諉】己の責任を他人におしつける、己の義務を他に嫁する。諉は託。

【推右】おしたふとぶ。宣和書譜「爲二時人一所一一一一」＝推尙。

【推挹】おし進める。重んじておしたてる。南史、任昉傳「沈約一代辭宗、深所一一一」

【推引】人を引き立て用ひる。唐書、蕭穎士傳「以レ一一後進一爲二己任一」

【推衍】次條に同じ、衍は敷衍。

【推演】おしひろめる。漢書、外戚傳「不レ知レ一一一聖德一述二先帝之志一」蜀志、諸葛亮傳「一一一兵法一作二八陣圖一」＝敷衍・推衍。

【推恩】恩愛を人におし及ぼす。孟、梁惠王「故一一、足三以保二四海一」

【推劾】罪を吟味する。宋書「官吏一一罪三百日、獄未レ具」＝推問。

【推解】食を推し衣を解きて人に與ふ、恩惠を施す義。史記「漢王解レ衣衣レ我、推レ食食レ我」

【推校】おしかんがへる。柳宗元文「一二一千古、無レ所二與讓一」

【推敲】詩句を鍛煉する。湘素雜記「劉公嘉話云、賈島初赴二舉京師一、

一日於二驢上一得レ句、云、鳥宿池邊樹、僧敲月下門、始欲著二推字一、又欲レ著二敲字一、煉レ之未レ定、遂於二驢上一吟哦、時時引レ手作二ーーー之勢一、時韓愈吏部權京兆、島不レ覺衝二至三第三節一、左右擁至二ニ前一、島具對二所レ得詩句一云云、韓立レ馬良久、謂レ島曰、作敲字佳矣、遂與並レ轡而歸」

【推聚】カスキ 賢人をおしすすめる。書、周官「ーレ一讒レ能」

【推讓】ケスキ 人を推したふとびて自らへりくだる。南史、宋彭城王義康傳「與二王弘一共輔二朝政一、弘既多レ疾、且每レ事ーー、自レ是內外政務一斷二之義康一」

【推轂】スキクク ○車のこしきをおす、人をおしすすめる義。史、魏其武安傳「ーニー趙綰爲二御史大夫一」○人を助けて事を成さしめる。史、荊燕世家「ーニー高帝一就二天下一」

【推薦】スキサク ○おし考へる。後漢書、劉植傳「斯固原レ情比レ迹、所レ宜ニーー者也」＝推考・推量。○おもひやる、想像する。

【推參】スキサン 國自分から進んでまゐる、參上する。

【推辭】スキジ おしてことわる、辭退する。

【推刃】スキジン やいばをおす。魏志「不レ能下ーレ爲二天下一報中仇」

【推進】スキシン 他人をおしすすめる。呉志「多レ所ニーー」

【推尙】スキヤウ おし尊ぶ。唐書、呂温傳「藻翰精富、一時流輩ーー」＝推尊。

【推奬】スキヤウ ほめすすめる。杜甫詩「平昔鑑ニーー」＝推譽。

【推讓】スキヤウ 他人をおしすすめて自らゆづる。史記「先二富有一、而後ニーー」

【推頌】スキヤウ 人をおしすすめてほめる「韓愈、何蕃傳」＝推奬。

【推誠】スキヤウ まごころを人に移し及ぼす。中說「推レ之以レ誠、不レ言而信」

【推斥】スキヤウ おししりぞける。劉禹錫詩「四節相ーー、冬季風且涼」

【推薦】スキヤウ 人を上におしすすめる。晉書「時賢並相ーー」＝推舉・推轂。

【推選】スキヤウ 推しえらぶ。

【推測】スキヤウ おしはかる。李商隱、進賀狀「驗ニーー一則咸如二周卜一」

【推尊】スキヤウ すすめたふとぶ。麻九疇詩「聲史ーー爲二第一一」＝推尙。

【推戴】スキヤウ 上におしいただく。宋史、王彥昇傳「爲レ衆ーー」

【推薦】スキヤウ おしうどかす。王曾賦「縱二陰陽之ーー一、我實難レ移」

【推擇】スキヤウ 人を登用する、推は下より推擧する、擇は上より選拔する。史、淮陰侯傳「不レ得ニーー一爲レ吏」

【推知】スキヤウ おしはかりてしる。＝揣知。

【推治】スキヤウ 罪をおしはかりただす。周禮「ーー獲實」＝推問。

【推重】スキヤウ おしおもんずる。又、たふとび重んぜられる。宋書「賈恩少有二志行一、爲二鄉曲一所ニーーー」＝推尊。

【推挽】スキヤウ 次條に同じ。

【推輓】スキヤウ 車を後より推し、前より輓く。轉じて、人をおしすすめる義。左、襄十四「衞君必入、夫二子者、或輓レ之、或推レ之、欲レ無レ入得乎」＝推挽・汲引。

【推服】スキヤウ たふとびて心から從ふ。南史、陳武帝紀「明達果斷、爲二當時一ーー」

【推分】スキヤウ 己の分限をおしはかりてそれに安んずる。晉書、王導傳「任レ眞ーレ一、濟如也」＝揣分。

【推步】スキヤウ 天文學の語。日月五星の運行の度數をおしはかりて曆をつくる術。抱朴子「黃帝精ニーー」

【推本】スキヤウ もとを究めたづねる。漢書、劉向傳贊「有レ意三其ーニー之一也」

【推命】スイメイ 十一星の運行を以て、人の運命を推し究める術。因學紀聞「以二十一星行歷一推二人命貴賤一、始二於唐貞元初、都利術士李彌乾一」

【推問】スキモン 罪を取調べる。晉書「其父母尋訪得二李氏一、ーー皆符驗」＝推治・推究審問。

【推擧】スキヤ すすめほめる。飲酒止文「昨書ーー、皆過二其實一、謙遜レ席不二敢當一」

【推來】スイ 未來のことをおしかんがへる。揚雄文「因レ往以ーレ一、蹤二千世一無レ不レ可レ知也」

【推量】スイリヤウ おしはかる。＝推察・推測。

【推理】スキリ 道理を推しきはめる、理によりて推しはかる。

【推曆】スキレキ 曆をおしはかり定める。漢書、律曆志「ーレ一生レ律」

【推論】スキロン ○次第に廣く論じ及ぼす。○或事理に本づきて更に他の結論におしうつる。

【接】セイ 齊 ㊀ 俗字

すむ、すみか。謝靈運詩「恣二此永幽ーー」＝栖。

【掣】㊀セイ ㊁セツ 屑 齊

㊀ひく（曳）ひきとどめて自由を得しめず「牽ー」「ー肘」㊁ぬく（拔）「ー鑑」

同訓異義 ヒ 掣・牽・引・挽・援・曳・延等の別は牽（牛部七畫）の條を見よ。

【掣曳】セイエイ ひきとめて妨げる。爾雅、釋訓、疏「羣臣小人、無二敢我ーーー」

【掣肘】セイチウ 人の肘をひきて自由をさまたげる。人の事に干涉して妨げる義、肘は臂の筋。呂覽、審應「宓子賤治二亶父一、恐下魯君之聽二說人一而令中己不レ得レ行二其術一也、請二吏二人于君一、俱至二亶父一、令二之書一、子賤從レ旁時擊二搖其肘一、書之不レ善、則子賤爲レ之怒、吏患而辭、歸報二于君一、君曰、宓子以レ此諫二寡人之不肖一也」に本づく。家語には、亶を單に作る。唐書、陸贄傳「不レ宜ーニー於內一也」

【掣電】セイデン 時の極めて煜きにいふ。杜甫詩「走過ーー傾レ城知」朱熹詩「回レ首十年齊ニーーー」

【掣臂】セイヒ ひぢをひきおさへる。宣和畫譜「ーレ一者數四」＝掣肘。

【捷】セフ 葉

○かち、かつ（尅・勝）「克ー」「戰ー」○ぶんどりもの、戰利品。左、莊三一「齊侯來獻戎ー」○かちごらせ（勝報）「奏ー」○かり（獵）○すばやし、とし（速・敏疾）「敏ー」○ちかし（近）○つづく（接續）

同訓異義 ツ 捷・勝・克・贏・戡の別は勝（力部十畫）の條を見よ。

【捷巧】セフカウ すばやくしてたくみ。管子「有二大略一者、不レ可三貴以ーーー」

【捷黠】セフカツ すばやくしてさかし。周禮、注「鴉鵲是小鳥ーー者也」＝敏慧。

【捷給】セフキフ 應對がすばやくして窮する所なし。漢書、張釋之傳「豈教二此齒夫喋喋利口ーー一哉」

【捷勁】セフケイ すばやくしてつよし。北史、眞臘國傳「拳髮垂耳、性氣ーー」

【捷徑】セフケイ ○捷は速、ちかみち。離騷「夫唯ーー以窘二步」○轉じて或事物に通達し得る簡易なる方法「詩學ーー」

【捷疾】セフシツ すばやし。史、殷紀「帝紂資辨ーー、聞見甚敏」＝捷敏。

【捷書】セフショ かちいくさのしらせ。蘇軾詩「ーー夜到甘泉宮」＝捷報。

【捷成】セフセイ すみやかに成る。荀子「君子事業ーー」

【捷捷】セフセフ 勞動のすばやき貌。詩、大雅「征夫ーー」

【捷足】セフソク はやあし。史、淮陰侯傳「秦失二其鹿一、天下共逐レ之、高材ーー者先得爲」＝疾足。

【捷速】セフソク すばやし、さとし。南史、謝莊傳「其ーー如レ此」＝捷疾。

【捷猱】セフダウ すばやきましら、猱は猿。甘澤謠「飛走若ニーー登レ木無レ有二蹶失一」

【捷報】セフハウ かちいくさのしらせ。陶水蕪談「未レ逾レ月、而ーー聞」

【捷敏】セフビン すばやし、さとし。劉向新序「聰明ーー、人之美才也」＝機敏・敏捷・警敏。

【捷步】セフホ すみやかにあゆむ。後漢書「ーニー深林一、尙苦レ不レ密」

【捷路】セフロ ちかみち。＝捷徑。

【接】㊀セフ ㊁セツ 葉 洽 通參

㊀まじはる（交）○あふ、あはす（合・會）呉語「兩君偃兵ー好」○うける（承）史、平準書「漢興ーー秦之敝」○招きもてなす、招待する「迎ー」「款ー」○もつ（持）○つぐ、つづく（續）「隣ー」「つらねる（連）「連ー」曲禮「堂上ー武」○ちかづく（近）「近ー」○はやし（捷）㊁とる（扱）○棺のはねかざり。＝翣。

同訓異義 ツ 接・續・繼・嗣・綴・襲・尋・次・亞・聚の別は續（糸部十五畫）の條を見よ。

○ハウ 接・交・雜・錯・混・參・閒等の別は交（亠部四畫）の條を見よ。

【接意】セツイ 他人の心にかなふやうにする。曹植文「承二顏色一以ーレ一」

【接延】セツエン 人を引き入れてもてなす。舊唐書「請ニ於二私居一ーーー賓客上」

【接昇】セツカイヒツスイ さかひがつづく。史記「楚魏與レ秦ーレ一」＝接境・接壤。

【接好】セツカウ 互によしみをまじへあはす。呉語「兩君釁レ兵ーレ一」

【接合】セツガフ つながりあひて一つになる。又、つぎあはせる。

【接近】セツキン ちかづく、ちかよる。向秀文「余少與二嵇康呂安一、居止ーー」

【接閭夫】セツキヨフ 人夫をいふ。居家必用「ーーー謂下以二異姓一繼二寡婦一者上」

【接遇】セツグウ もてなしあしらふ。史、屈原傳「入則レ王圖二議國事一、以出二號令一、出則ーニー賓客一應二對諸侯一」

【接見】セツケン 人をひき入れて面會する。白虎通「以レ時ーーー也」＝引見・延見。

【接轂】セツコク こしきを接す、車の近く相連るをいふ。漢書、游俠傳「萬章與二中書令石顯一相善、亦得二顯權力一、門車常ーレ一」

【接骨】コツ 手足などのほねの折れたるをつぎあはせる。

【接骨木】ボクコツ にはとこ、山野に自生する灌木、葉は對生して臭氣強し、四月頃小白花を著く。

【接膝】シツ ひざをつきあはす。陶潛、閑情賦「願ーレー以交レ言」

【接刃】ジン ○はものをあてる。漢書「爭ーニー于公之腹、以復二其怨一、而成二其功名一」○戰をひらく。晉書「大軍相臨、交レ鋒ーレー」＝開仗。

【接軫】シン 車の前後の横木の連接する義にて、多くの車の連り行くをいふ。洛陽伽藍記「雲車ーレー、羽蓋成レ陰」＝連軫。

【接手】シュ ○手をつらねる。戰國策「ーレー俛レ首欲レ言而不レ敢」○國受け取る。＝落手。

【接樹】ジュ つぎ木。又、木をつぐ。王晃詩「ーレー濕封レ泥」＝接木・騙樹。

【接踵】シュウ かかとをつづける。轉じて物事の繼續と起りて絶えざる義。戰國策、韓魏父子兄弟ーー而死二於秦一者世矣」

【接觸】ショク ちかづきふれる。

【接線】セン 幾何學の語、圓の一點に觸れる線。

【接戰】セン 敵に近づきてたたかふ。庾信文「河橋ーー、秋水則三日不レ洮」

【接續】ゾク つながる、つづく。

【接續詞】ゾクシ 國文法上の語、語句又は文章を接續する詞、又・且・及・與の類。

【接待】タイ ○あしらひもてなす。晉書、胡奮傳「甚見二ーーー一」○國人に飲食物を施す。佛祖統記「法師宗曉、鑿二義井於城南樂社一、曰二法華泉一、以飲二行者一、作二亭其上一、施二湯茗一、無問二道俗一、結二屋數楹一、創爲二ーーー一」

【接納】ナフ 近づけて其の言を聽き入れる。後漢書、岑彭傳「光武深ーニー之一」

【接比】ヒ ちかづきつらなる。漢書、地理志「吳越與レ楚ーーー」＝鄰比。

【接武】ブ 武は跡、後者の足、前者の跡の半をふむ、故に接といふ。曲禮「堂上ーレー、堂下布レ武」

【接物】ブツ 人に交る、物は人物「處世ーーー」漢書、司馬遷傳「敎以レ愼二于ーーー」

【接吻】フン 人の脣又は手などに己の脣を當て吸ひて、親愛の意をあらはす交際法。英語キッスの譯語。

【接木】ボク 木をつぐ、つぎ木。金史、曹望之傳「栽花ーレー」＝接樹。

【接伴】ハン 賓客をもてなす。又、其の事をつかさどる人。宋史、李繼昌傳「至二境首一ーーー」

【接引】イン ひきよせてちかづける。宋書、張敷傳「少有二盛名一、高祖見而愛レ之、以爲二世子中軍參軍一、數見二ーーー一」

【措】㊀ソ ㊁サク 隋 遇 一に厝に作る錯に通ず

㊀おく(置)○あぐ(擧)○なげ置く、投げる。論、子路「民無レ所ーー手足」○しきほどこす(施布)○もちふる(用)○やめる、すておく(委置)中庸「學之弗能、弗ーー也」○まじはる。○ふるまひ「擧ー」「失ー」○はかり辦ずる「ー辦」㊁とらへる(追捕)○せまる(迫)＝笞。○はさむ。

【措置】チ とりはからひ、處置計畫する。又、とりはからひ。宋史、李植傳「ーーー有レ方、廷議倚重」

【措止】シ 事の始末をつける。＝措置。

【措辭】シ 文詩の詞づかひ。＝錯辭。

【措大】ダイ 書生をいふ。能く大事を擧措する義。老ーーは老書生、窮ーーは貧書生。五雜俎「今人以二秀才一、爲二ーーー一」宋史、杜衍傳「某本一ーー耳」

【措置】チ 事をはかりて始末をつける。宋史「親往ーー」＝措止・措辦・厝置。

【措辦】ベン はかりて處置する。＝籌辦。

【掫】㊀ソウ ㊁ソウ 有 尤

㊀よまはりする。又、よまはり(行夜)左、昭二十「賓將ーー主人辭」㊁うつ(擊)○あさがら(麻幹)一說、たきぎ(薪)

【捉】㊀ソク 月 シュツ 國 ㊁サイ 隊

㊀もつ(持)とらへる(捉)頭髮を持つ。淮南、氾論「溺則ーー其髮而拯」○てにもつ(手持)○ぬきとる(拔取)○むかひ當る(交對)抵觸する。晉語「我夏交ーー」○する(摩)㊁おす(推)

【捉胡】コ くびすぢをつかむ。漢書、金日磾傳「ーレー投二何羅殿下一」注「胡頸也、捉二其頸一而投二殿下一也」

【捉搏】ハク 頭髮をつかみ手にて擊つ。荀子「詈侮ーー、捶笞臏脚」

【掇】ダ 歌

○くだく(摧)○する、兩手にて相切摩する。＝按。

【掬】タウ 豪

○えらぶ(擇)○とる(抒)○俗に手さぐりで物を取る義。轉じてする、人の懷中物などをすり取る。

【掬兒】タウ すり、ちぼ。＝掬摸。

【掬摸】バク ○手さぐりて他人の物を盜み取る。○すり、きんちゃくきり。＝掬兒・攫客。

【掟】タウ チャウ 極

○ふるひはる(揮張)○國おきて、規則。

【搖】タウ チャウ 庚

○ふる(觸)手を以て物に觸れる「ー撥」○つく(撞)

【掉】㊀メク ㊁トク 覺 屋 通じて棹に作る

㊀うつ(擊)○なげうつ(擲)㊁擊つこころ。

【掇】タツ テツ 屑 屬

○とる、ひろひとる(拾取)「采ー」「拾ー」詩、周南「采采芣苢、薄言ーレー之」○かすめとる。史、張儀傳「燒ー焚ー杅君之國」

【掇遺】ケツ 先人の遺事をひろひあつめる。文獻通考、經籍考「聖宋ーー一卷」

【掇拾】シフ ひろひとる。＝採摭。

【掇拾】シフ ○ひろひとる。楊基詩「明朝買レ魚期二再酌一、我自ーー山中薪」＝收掇・采掇。○採り集める。宋史、歐陽修傳「周漢以降、金石遺文、斷簡殘編、一切ーー、成二集古錄一」＝拾掇。

【掇薪】シン たきぎを拾ひ取る。唐書、潘ー哇ーレー」

【捺】ダツ ナチ 曷 通音

○おす、手にて重く按ずる「ー印」○からめとる(搦捕)○書法の名、微しく右の方に斜に書きさげる字體、卽ち、人・大などの類。

【捺印】イン 印をおす、はんをつく。又、其のおしたる印形。

【捺落】ラク 梵語地獄。名義集「ーー迦、或那落迦、此云二不可樂一」＝奈落。

【探】タン 覃

○さぐる、さがす、手にてさがし求める。○遠くさぐり究める「窮ー」易、繫辭「ー賾索隱」○うかがふ(伺)「ー偵」○おしはかる、推測する。○もとめる(索)たづねもとめる「ー勝」「ー梅」「幽ー」○こころみる(試)「ー湯」「試ー」

【探觀】タン 詩を作るに韻字を探りて分ち取る。

【探閱】エツ さぐりけみす。李羣玉詩「洞宮四百日、玉籍恣ーーー」

【探海燈】トウカイ 軍艦・要塞などに備へ付け、夜中海上を照して敵艦の來襲などを防ぐに用ふるあかり、英語サーチライト。＝探照燈。

【探騎】キ 敵狀を探偵する騎兵。張籍詩「軍中ーー暮出レ城」

【探求】キウ さぐりもとめる。孫賓文「且於ーーー爲レ廣」

【探究】キウ さぐりきはめる。蘇軾詩「高人固多暇、ーー亦頗熟」＝探討。

【探花】カ ○はなをさぐる。皮日休詩「野客正閑移レ竹遠、幽人多病ーレー稀」○科擧時代、殿試に第三番目に及第せし人の稱「陔餘叢考」

【探抉】ケツ さがしえぐる、さがし出す。柳宗元文「ーーー邃隱」

【探險】ケン 危險の地を冒しさぐる。

【探檢】ケン さぐりしらべる「南極ーー」

【探索】サク さぐりもとめる。易、繫辭「探レ賾索レ隱、鉤レ深致レ遠」

【探賾】サク 深く隱れたる事をさぐり求める。探索を見よ。

【探子】シ 國軍事探偵。

【探尋】ジン さがしたづねる。法書要錄「ーーー潭流、志逸肥遁」

【探賞】シャウ 勝景をさぐり賞す。梅堯臣詩「在昔ーー猶可レ數、深景秀句今得レ傳」

【探春】シュン 春のけしきをさぐりもとめる。蘇軾詩「東郊欲レ一ーー、未レ見驚花迹」

【探春之遊】ユウ 唐代、春初に郊外に遊ぶをいふ。天寶遺事「長安士子、春時鬬レ花、以二奇多者一爲レ勝、皆以二千金一市二名花一植二於庭中一、正月各乘二車馬一、郊宴、爲二ーーー一」

【探勝】ショウ よき景色の地を尋ねて遊ぶ。

【探測】ソク さぐりはかる。高啓詩、中、開得二深泉一ーーー毀二修綆一」

【探題】ダイ ○詩歌の會の席上にて題をさぐりて分ち取る。○國役僧の名、經典の論議の題を出し又判斷する者。○國鎌倉時代の地方官、其の地の內治を司り、又外寇をふせぐ「筑紫ーーー」

【探討】タウ さぐりたづねる。孟浩然詩「ーー意未レ窮、廻艇夕陽晚」＝探究・探尋。

【探湯】タウ ○熱湯をさぐり試みる。恐れ戒しむる義。論、季氏「孔子曰、見レ善如レ不レ及、見二不善一如レ探レ湯」○國ダチ古、正邪を判する爲め、神に誓ひて熱湯に手を入れしめしこと、邪なる者はただれるといふ。

【探端】タン 事のはじめをさぐる。禮記、疏「鄭注云、ーレー知レ緒」

【探知】チ さぐり知る。

【探偵】テイ さぐりうかがふ。又、其の人。

【探偵物】テイモノ 國犯罪人逮捕の顚末を筋書とせし小說又は演劇の類。

【探梅】バイ うめの花をさがしめづる。陸游詩「僧約溪橋共ーレー」

【探訪】ホウ 出來事をさぐりたづねる。又、其の人。

【探卵之患】ランノウレヒ たまごをさぐらるうれひ。己の住家を襲はるるにいふ。北史、齊孝昭帝紀「鸇鳥捨

レ巢、必有ニ――一」

【探匿】タントク あまねくさぐる。路賓王詩「林泉恣ニ――一、鳳彩晉徘徊」

【掉】 チウ ダウ 蕭 效 嘯 遥 晉 タウ

○ふるふ(振)左、昭十一「尾大不ー」○うごかす(搖)「ー舌」「ー頭」○ただす(正)整頓する。左、宣十二「ー軼而還」

【掉舌】タウゼツ したをふるひて辯論する。史、淮陰侯傳「伏レ軾掉ニ三寸舌一、下ニ齊七十城」「蘇舞飲詩「ーレー滅ニ四寇一、盡レ地收ニ幽燕一」」

【掉尾】ビウ ○尾をふるふ。上林賦「捷レ鰭ーレー、振レ鱗奮レ翼」○最後の活動の勢よきにいふ。文章の結尾の力あるにもいふ。孔武仲詩「悠然ー一波間去、須レ信人生不レ及レ魚」

【掉頭】ベウ むちむしふるふ。李白詩「雙雙ーレー行、遊獵向ニ秦關一」

【捻】 ㊀デフ・ネフ ㊁デツ 屑 葉 厲

㊀ひねる(指捻)ねぢる。○よる(搓)「紙ーヨリ」○つまむ、ひねる(拈)「ー香」○こねる(捏)○ー紅は詞曲の名。○ー子、又、匪は清の咸豐の時、黨を結びて北方の數省を擾掠せし亂賊。㊁おさふ(按)

【排】 ㊀ハイ ㊁ハイ 佳 卦

㊀おす(推)おしひらく「ー難」史、樂噲傳「迺ー闥直入」○しりぞく(斥)おしのける。「詆ー」「ー斥」「ー闢」○つらぬ、ならべる(列)「ー列」○ならび、ーは一列。○おく(安置)○彭ーはたて(楯)㊁ふいがう、端に通ず。

同訓異義 排・竝・併・并・駢・比・雙の別は竝(立部五畫)の條を見よ。○ヒ排・開・闢・辟・啓・發・拓等の別は開(門部四畫)の條を見よ。

【排斡】アツ おしめぐらす。韓愈詩「力雖ニ能ーー、雷電怪ニ詞語一」

【排行】ガイ ○一族中にて尊卑屬、又年齡の順によりて排列し、某ニ某三などと呼ぶ義。柳宗元、與ニ韓愈一論レ史書「十八丈退之侍者」ニ羅行。○列をなしてならぶ。陳與義詩「ー一立ニ曉晴」」

【排陷】カイ しりぞけおとしいる。後漢書、陳蕃傳「ーニー忠良」ニ排擠。

【排忌】キイ おしのけてきらふ。五代史「內相ーー」

【排毀】キイ しりぞけそしる。拾遺記「妙年者爭嫉レ之、競相ーー」

【排卻】キヤク おししりぞける。參同契「ーニー衆陰邪、然後立ニ正陽一」ニ擯卻。

【排虛】ハイキヨ そらをおしわける。淮南子「鳥ーレー而飛」

【排空】ハイクウ そらをおしわける。魏濟詩「早晚時應レ至、輕舉一ーレー」

【排擊】ゲキ おししりぞけてうつ、排斥駁擊する。漢書「ーー剿割、而衆理解也」

【排二】ジイ 圖次男、排三は三男、以下之に準ず。排行參看。

【排字】ジイ 圖活字を植うる。

【排出】シユツイ そと〳〵おし出す。

【排擠】セイ おしのけておとしいる。史、酷吏傳「張湯爲ニ廷尉一、治ニ淮南獄一、ーニー莊助」ニ排陷。

【排斥】セキ おしのけしりぞける。後漢書、宦者傳序「竟見ーニー」ニ損斥。

【排泄】ハイセツ 無用の廢物を體外へおし出す、汗・屎・尿の類。

【排泄器】ハイセツキ 排泄を掌る器官。腎臟・尿管など。

【排闥】ハイタツ 勢よくとびらをひらく(史、項羽紀)闥は小門。

【排置】ハイチ 順序正しくならべおく。梅堯臣詩「ーー屋角邊」

【排除】ハイジヨ はらひのぞく。ニ排去。

【排詆】ハイテイ おししりぞけそしる。北史、元諧傳「性剛愎好ーーー」ニ詆排。

【排突】ハイトツ おしわけつきあたる。晉史、裴之證傳「武帝設ニ無遮會一、儀象驚、ーニー陛衝」

【排入】ハイニユウ さまたげる者をおしのけて入る。晉書「ーニー羽營」

【排比】ハイヒ 順序よくならべる。唐會要「繕卷錯亂、卿爲レ殿ーー」

【排擯】ハイヒン おししりぞける。李路文「四漢則王氏擯レ朝、ーニー宗室」ニ排斥・擯斥。

【排拂】ハイフツ おひらく。陳書「必ーニー異家」」ニ排斥。

【排悶】ハイモン 心のうさをはらひ遣る。杜甫詩「故林歸未得、ーー强戰レ詩」

【排闥】ハイタツ 布帛等のへり。宋史、儀衛志「畫薄旅皆錯采爲レ之、ーー以ニ黃紫赤三色一」」

【排律】ハイリツ 詩の一體、五言又は七言の對句を八句以上偶數にならべしもの、古は長律といひ、唐以後ーーといふ。文體明辯「ーー原ニ於顏延之・書贈諸人一」」

【排列】ハイレツ 順序よくならべつらねる。

【捭】 ㊀ハイ ㊁ハク 麻 陌

㊀ひらく(開)擺に通ず。○うつ(擲)㊁さく、分ちさく。禮、禮運「燔黍ー豚」ニ擘。

【捭闔】ハイカツ 開き閉づ、巧に抑揚操縱する辯論術。鬼谷子、捭闔「ーニー之者、料ニ其情一也」」

【掊】 ボウ 蕭 效 嘯 遥 晉 タウ

○ふるふ(振)左、昭十一「尾大不ー」○うごかす(搖)「ー舌」「ー頭」○ただす(正)整頓する。左、宣十二「ー軼而還」

【掉舌】タウゼツ したをふるひて辯論する。史、淮陰侯傳「伏レ軾掉ニ三寸舌一、下ニ齊七十城」「蘇舞飲詩「ーレー滅ニ四寇一、盡レ地收ニ幽燕一」」

【掉尾】ビウ ○尾をふるふ。上林賦「捷レ鰭ーレー、振レ鱗奮レ翼」○最後の活動の勢よきにいふ。文章の結尾の力あるにもいふ。孔武仲詩「悠然ー一波間去、須レ信人生不レ及レ魚」

【掉頭】ベウ むちむしふるふ。李白詩「雙雙ーレー行、遊獵向ニ秦關一」」

【捻】 ㊀デフ・ネフ ㊁デツ 屑 葉 厲

㊀ひねる(指捻)ねぢる。○よる(搓)「紙ーヨリ」○つまむ、ひねる(拈)「ー香」○こねる(捏)○ー紅は詞曲の名。○ー子、又、匪は清の咸豐の時、黨を結びて北方の數省を擾掠せし亂賊。㊁おさふ(按)

【捧】 ホウ 董

○ささぐ、兩手にてうやうやしく物を承ける「承ー」「拜ー」○すくふ(掬)○俗に奉(大部五畫)に同じく用ふ。

【捧檄】ホウケキ 任官の召レ狀をささげもつ。親の爲めに志を屈するにいふ。後漢書「毛義家貧、以ニ孝行一稱、南陽人張奉慕ニ其名一往候レ之、坐定而府檄適至、以レ義爲ニ安陽令一、義ーレー而入、喜動ニ顏色一、奉心薄レ之、後義母亡、遂不レ仕」

【捧持】ホウ 兩手にてささげもつ。杜牧詩「大人親ーー」

【捧讀】ホウトク 恭しくささげよむ。柳宗元、謝ニ李夷簡一書「過蒙ニ存問一、ーー喜懼、淚然涕流」ニ奉讀。

【捧腹】ホウフク 手にてはらを抱へる、大いに笑ふ貌。ーー絕倒」俗に抱腹に作るは非。史、日者傳「司馬季主ーレー而大笑」

【捫】 ボン モン 元

○なでもつ(撫持)○さぐる、なでる(摸)さする、ひねる。史、高祖紀「漢王傷胷乃ー足」

【捫蝨】ボンシツ しらみをひねる、蝨は一に虱に作る。晉書、苻堅載記「桓溫入レ關、王猛被レ褐而謁レ之、一面談ニ當世之事一、ーレー而言、旁若レ無レ人」この故事に本づき甚だ無頓著の義とす。

【捫著】モンチヤク 圖ごたごた、もめ、紛議。ニ鬧著・紛爭。

【捫腹】ブク はらをさする。蘇軾詩「散步逍遙自ーレー」

【捫籍】モンラク つたをつかみひく。孟浩然詩「ーレー亦踐レ苔」」

【掠】 ㊀リヤク ㊁リヤウ 藥 漾 略に通ず

㊀かすめる(抄掠)「寇ー」「殺ー」○他人の物をうばひとる(奪取)「ー奪」「侵ー」「剽ー」「劫ー」○かする、ふれちがひて過ぎる(拂過)赤壁賦「ー予舟而西也」○書法の名、左に出でて鋒の輕からんことを欲すろもの。ニ長撇。㊁罪人をむちうつ(拷笞)○うばひ取る。

【掠治】リヤクチ むちうちて罪を治める。漢書、陳萬年傳「下レ獄ーー」ニ拷治。

【掠笞】リヤクチ 罪人をむちうつ。史、張儀傳「ーー數百不レ服」

【掠劫】リヤクフ かすめおびやかす。世說「輜重甚盛、戴淵使ニ少年ーー」」

【掠水】リヤクスイ みづの上をかする。杜牧詩「沙上驚鴻ーレー分」

【掠盡】リヤクジン かすめぬすむ。北史、寡翻傳「唯以ニーーー一爲レ資」ニ剽掠。

【掠奪】リヤクダツ かすめうばふ。申鑒「暴迫而取レ之、謂ニ之ーー」」ニ略奪・奪掠。

【掠美】リヤクビ 他人の美をかすめ取りて己の美と爲す。左傳「己惡而ーレー爲レ昏」」

【捩】 ㊀レイ ㊁レツ 霽 屑

㊀ばち、琵琶の撥。梁簡文帝詩「插ー鼻琵琶」」ニ棍。㊁ねづ、ねぢれる(拗)韓愈、送窮文「ー手翻羹」もとる、もとらす(紾)戾に通ず。○をる(折)○圖ねぢ(螺旋)

【捩柁】レイダ かぢをねぢて舟を轉ずる。杜甫詩「牙檣ーー青樓遠」」

【掄】 ロン リン 元 眞

えらぶ(擇)人材を選ぶ「ー賢」」

【掄材】ロンサイ 人才を選ぶ。唐書「文部始ーレー、銓授レ位」」

【掄擇】ロンタク えらぶ。歐陽詹詩「ーー期ニ精專一」」

【捥】 ㊀ワン ㊁ワン 換 翰

㊀ひらく(開)擺に通ず。○うつ(兩手旁擊)○なげうつ(擲)㊁さく、分ちさく。禮、禮運「燔黍ー豚」ニ擘。

【捥闔】カイ 開き閉づ、巧に抑揚操縱する辯論術。鬼谷子、捥闔「ーニー之者、料ニ其情一也」」

【掊】 ボウ

捫(手部十畫)の古字。

【捫】 ヒ 寘

あたふ(予)ニ畀。

【掊】 ヒヨウ 蕭

やづつ(箭筒)又、其のふた。

【掊】 ㊀フ・ホ 虞 ㊁撫(手部十二畫)の古字。

㊀ふせぐ(捍)㊁なづ「ー循」

【掊】 ㊀ホウ 尤 有 ㊁ホウ・フ 遇 ボク 屋

㊀とる(把)地中よりほり取りて出す。漢書、百官志「鹽官ー坑而得鹽」○をさむ、あつめる(聚斂)「ー克は稅を多くむさぼり取る。○ふかし(深)○へす(減)かく。㊁うつ(擊)「ー擊」○さく。莊、胠篋「ー斗折衡」ニ剖。㊂たふす、たふる。史、呂后紀「ー兵罷去」兵は武器。ニ仆・踣。

【掊擊】ホウゲキ うつ、うたれる(攻擊)莊、人閒世「自ーニー於世俗」」

【掊克】ホウコク 嚴しく稅を取り立てる、聚斂する。詩、大雅「曾是ーー」又、其の事を爲す人。孟、告子「ーー在レ位則有レ讓」讓は責。

【掊擊】ホウゲキ あつめひろふ。文心雕龍「ーニー千里、其儁一矣」」

【捧】 ホウ 董

○ささぐ、兩手にてうやうやしく物を承ける「承ー」「拜ー」○すくふ(掬)○俗に奉(大部五畫)に同じく用ふ。

【捧檄】ホウケキ 任官の召レ狀をささげもつ。親の爲めに志を屈するにいふ。後漢書「毛義家貧、以ニ孝行一稱、南陽人張奉慕ニ其名一往候レ之、坐定而府檄適至、以レ義爲ニ安陽令一、義ーレー而入、喜動ニ顏色一、奉心薄レ之、後義母亡、遂不レ仕」

【捧持】ホウ 兩手にてささげもつ。杜牧詩「大人親ーー」

【捧讀】ホウトク 恭しくささげよむ。柳宗元、謝ニ李夷簡一書「過蒙ニ存問一、ーー喜懼、淚然涕流」ニ奉讀。

【捧腹】ホウフク 手にてはらを抱へる、大いに笑ふ貌。ーー絕倒」俗に抱腹に作るは非。史、日者傳「司馬季主ーレー而大笑」」

【捫】 ボン モン 元

○なでもつ(撫持)○さぐる、なでる(摸)さする、ひねる。史、高祖紀「漢王傷胷乃ー足」

【捫蝨】ボンシツ しらみをひねる、蝨は一に虱に作る。晉書、苻堅載記「桓溫入レ關、王猛被レ褐而謁レ之、一面談ニ當世之事一、ーレー而言、旁若レ無レ人」この故事に本づき甚だ無頓著の義とす。

【捫著】モンチヤク 圖ごたごた、もめ、紛議。ニ鬧著・紛爭。

【捫腹】ブク はらをさする。蘇軾詩「散步逍遙自ーレー」」

【捫籍】モンラク つたをつかみひく。孟浩然詩「ーレー亦踐レ苔」」

【掠】 ㊀リヤク ㊁リヤウ 藥 漾 略に通ず

㊀かすめる(抄掠)「寇ー」「殺ー」○他人の物をうばひとる(奪取)「ー奪」「侵ー」「剽ー」「劫ー」○かする、ふれちがひて過ぎる(拂過)赤壁賦「ー予舟而西也」○書法の名、左に出でて鋒の輕からんことを欲すろもの。ニ長撇。㊁罪人をむちうつ(拷笞)○うばひ取る。

【掠治】リヤクチ むちうちて罪を治める。漢書、陳萬年傳「下レ獄ーー」」ニ拷治。

【掠笞】リヤクチ 罪人をむちうつ。史、張儀傳「ーー數百不レ服」」

【掠劫】リヤクフ かすめおびやかす。世說「輜重甚盛、戴淵使ニ少年ーー」」

【掠水】リヤクスイ みづの上をかする。杜牧詩「沙上驚鴻ーレー分」

【掠盡】リヤクジン かすめぬすむ。北史、寡翻傳「唯以ニーーー一爲レ資」ニ剽掠。

【掠奪】リヤクダツ かすめうばふ。申鑒「暴迫而取レ之、謂ニ之ーー」」ニ略奪・奪掠。

【掠美】リヤクビ 他人の美をかすめ取りて己の美と爲す。左傳「己惡而ーレー爲レ昏」」

【捩】 ㊀レイ ㊁レツ 霽 屑

㊀ばち、琵琶の撥。梁簡文帝詩「插ー鼻琵琶」」ニ棍。㊁ねづ、ねぢれる(拗)韓愈、送窮文「ー手翻羹」もとる、もとらす(紾)戾に通ず。○をる(折)○圖ねぢ(螺旋)

【捩柁】レイダ かぢをねぢて舟を轉ずる。杜甫詩「牙檣ーー青樓遠」」

【掄】 ロン リン 元 眞

えらぶ(擇)人材を選ぶ「ー賢」」

【掄材】ロンサイ 人才を選ぶ。唐書「文部始ーレー、銓授レ位」」

【掄擇】ロンタク えらぶ。歐陽詹詩「ーー期ニ精專一」」

【捥】 ㊀ワン ㊁ワン 換 翰

㊀ひらく(開)擺に通ず。○うつ(兩手旁擊)○なげうつ(擲)㊁さく、分ちさく。禮、禮運「燔黍ー豚」ニ擘。

【捥闔】カイ 開き閉づ、巧に抑揚操縱する辯論術。鬼谷子、捥闔「ーニー之者、料ニ其情一也」」

【掊】

捫(手部十畫)の古字。

㊀うで。史、封禪書「捉—」＝腕。
㊁ねぢる（捩）

九畫

【握】 ㊀アク ㊁ヲク 屋 覺

㊀にぎる、にぎり（握）もつ（持）「把—」掌中ににぎり持つ、外に在るは持、內に在るは—。○にぎりこぶし（拳）○てのうち（手裡）「掌—」○とばり、幄に通ず。○古の算法の名。○ひとにぎり程の量。㊁そなへ、そなふ（具）○—齷はこせこせする貌。＝局促。

【握月擔風】アクゲツタンフウ 風月を愛する情の甚だしき義。春宴錄「虞松方ノ春言、——、旦留ニ後日ニ、呑ノ花臥ノ酒、不ノ可ノ過ノ時」

【握卷】アクケン 書を手にもつ。齊書、孝義傳「夜讀ノ書隨ニ月光ニ—ノ—升ノ屋」

【握拳】アクケン にぎりこぶし。易林「空手—ノ—」

【握權】アクケン 權力をにぎりて自由にする。揚雄、解嘲「且ノ—ノ—爲ニ卿相ニ、夕失ノ勢、則爲ニ匹夫」

【握齷】アクアク 心せまくこせつく貌。史、司馬相如傳「委瑣ノ—拘ノ文牽ノ俗」＝偓促・握齷・局促。

【握齷】アクアク 前に同じ。史、酈食其傳「其將皆ノ—、舊ニ苛禮ニ自用、不ノ能ノ聽ニ大度之言ニ」＝齷齪。

【握手】アクシュ 互にてをにぎりて親愛の情を示す。後漢書「馬援與ニ公孫述一少同ニ里閈一相善、以爲既至當ニ—ノ—、如ニ平生歡」」歐米人にも此の作法あり。

【握持】アク にぎりもつ。後漢書、杜林傳「林前於ニ西州一得ニ漆書古文尚書一卷」常寶ニ愛之ニ、雖ノ遭ニ艱困ニ、——不ノ離ノ身」

【握髮】アクハツ 賢者を見るの急なる義、周公の故事（史、魯世家）吐哺握髮（三〇八頁一段）參看。韓愈文「周公之爲ニ輔相ニ、其急ニ於見賢也、當ニ一食ニ、三吐ニ其哺ニ、方ニ一沐ニ、三握ニ其髮ニ」＝捉髮・握沐。

【握臂】アク ひぢをにぎる。戴復古詩「新交ノ—ノ—行、肝膽猶楚越」

【握符之尊】アクフノ 天地の符瑞を握りて天子の位に在る。班固、東都賦「聖皇乃握ニ乾符ニ、闡ニ坤珍ニ」乾符坤珍は天地の符瑞。

【握沐】アクボク あらひ髮を結び了るを待たず、髮をにぎりながら士を見たりし周公の故事によりて、政治に精勵する義。又、賢者を優待する義。世說「昔周公猶ノ—ノ—吐ノ食、以接ニ白屋之士ニ、天下歸ノ德」＝握髮。

【握力】リヨク 物をにぎるちから。

【握腕】アクワン かひなをにぎる。親む義。晉子夜秋歌「—ノ—同遊戲」

【揠】 アツ 黠

ぬく、ひきぬく（拔）孟、滕文公「宋人有ノ閔其苗之不ニ長而—ノ之者ノ」苗のしんをひきぬく。

同訓異義 揠・擢・挺・拔・抽・脫の別は擢（手部十四畫）の條を見よ。

【揖】 ㊀イフ ㊁シフ 緝 一音 緝 イツ

㊀忍しくする、兩手を胸にあてる、手をこまぬきて、或は上下にし、或は左右にする禮法、手の上よりして下に極るを長—といふ「拱—」「答—」○轉じてゆづる（遜・讓）の義とす。○すすむ（進）○くむ。王禹偁文「平ニ江瀨ニ」＝挹。㊁あつめる、輯に通ず。○あつまる（聚）○あはす（合）

【揖客】カイフ 平揖して拜せざる客、即ち主人と庭を分ちて抗禮する者。漢書、汲黯傳「夫以ニ大將軍一有ニ—ノ—、顧不ノ重耶」大將軍は衛青。

【揖讓】イフジヤウ ○拱手の禮をなしてへりくだる。論、八佾「子曰、君子無ノ所ノ爭、必也射乎、——而升下而飲」○位を讓りあふにいふ。征誅の對、堯の舜に授け、舜の禹に授くる如きは——なり、湯の桀を放ち、武王の紂を伐ち、兵力を以て國を得たる如きは征誅なり。

【揖遜】ユフソン 〈りくだる。宋史、上ニ徽號一樂章「——之美、放勳比ノ隆」

【揖揖】シフシフ あつまる貌。詩、周南「螽斯羽ノ—兮」＝輯輯。

【掾】 エン 獮

○したやく（官屬）漢書、蕭何傳「爲ニ沛主吏ノ—」正を—といひ、副を屬といふ。○國ノ丞の音を借用す「常陸大ノ—國香」

【掾史】ジヨウシ 屬官。後漢書、百官志、郡國皆置ニ諸曹ノ—」＝丞史。

【揜】 エン アン 琰 盛

○おほふ（覆）孟、萬章「從而—之」おほひて一ぱいになる。禮、禮器「豚肩不ノ—豆」＝掩。○閉ぢ藏す、おほひ隱す。大學「—其不善ニ而著其善」○くるしみせまる（困迫）禮、表記「篤以不ノ—」○—然は疾く歸る貌。

【揜取】ジヨウシユ おほひとる。穀梁傳、注「—ニ—衆食」

【援】 ㊀エン ㊁エン ㊂エン 元 盛 願

㊀ひく（引）「引—」ひっぱる。孟、離婁「—之以ニ手ニ」○ひきと

る（引取）手に取る「—筆」○ぬく（拔）○牽き持つ、すがり攀づる「攀—」中庸「在下位不ノ—上」○刃の直くして上に達するもの。○たすく（扶）すくふ（拯）㊁たよる。○たすく、たすけ（救助）「應—」魯語「爲ニ四鄰之ノ—」○まじはる（接）㊂ひきもつ（引持）晉語「侏儒不ノ可ノ使ノ—」

同訓異義 援・助・輔・弼・扶・佐等の別は助（力部五畫）の條を見よ。○援・牽・引・挽・曳・惹・彈・摟・擊の別は牽（牛部七畫）の條を見よ。

【援引】エイイン ○ひく、ひっぱる。後漢書「其有ノ更相ノ—、希ノ附ニ權強ニ者ノ」○證を引く。公羊傳、序「—ニ—他經ニ失ニ其句讀ノ—」

【援應】エイオウ あひ應じてたすけあふ。＝應援。

【援救】エイキウ すくふ。又、すくひ。後漢書「求ニ—ノ—、以濟ニ其患ニ」＝救援。

【援據】エイキヨ 證據を引く。爾雅疏、序「事有ニ隱滯ニ、—ノ—徵ノ之」

【援軍】エイグン すくひの軍隊。＝援兵。

【援擊】エイケキ よきすがりて禁違を求める。晉語「董叔娶ニ於范氏ニ、曰將以求ニ—ノ—也」

【援護】エイゴ たすけまもる。又、たすけ。＝援庇。

【援助】エイジヨ たすけ。後漢書「招ニ匈奴ニ、迎ニ烏桓ニ、以爲ニ—ノ—」＝援救。

【援拯】エイジヨウ たすけすくふ。舊唐書「左右ノ—、後得ニ累居ニ郡守ニ」＝援救。

【援庇】エイヒ たすけかばふ。元稹文「無ニ親黨爲ニ臣ノ—ノ—」＝援護。

【援筆】エンヒツ 筆をとりてかく。魏志、陳思王植傳「—ノ—立成、可ノ觀」

【援兵】エイヘイ すくひの兵士。＝援軍。

【援糧】エイリヤウ すくひの糧食。

【援路】エイロ すくひのみち、援兵の來るみちすぢ。

【揩】 ㊀カイ ㊁カイ ㊂カツ 佳 卦 黠

㊀ぬぐふ、する、こする（摩・拭・擦）「淨—」「磨—」㊁—排はつよくつく（强突）○つづみの一種「—鼓」㊂たたく、うつ。○樂器の名、之を撲りて以て樂を止むるもの。禮、明堂位「拊搏玉磬ノ—擊」＝敔。

【揩磨】カイマ すりみがく。桂海蟲魚志「—ノ—染ノ皮」

【揀】 カン 潸 筋に通ず

○えらぶ（選・擇）選拔する「選—」「料—」范益謙、座右誡「凡喫飲食不ノ可ノ—擇去取」○わかつ（分別）

同訓異義 揀・撰・選・擇・擇・簡の別は選（手部十二畫）の條を見よ。

【揀選】カンセン 人才をえらぶ。清會典「欽ニ派ノ—大臣ニ司ノ之」

【揀擇】カンタク わかちえらぶ。魏志、袁紹傳「博愛容ノ衆、無ノ所ノ—ノ—」＝選揀。

【揮】 キ 微

○ふる、ふるふ（奮・振）振りまはす「—刀」「—筆」○ふるひあらはす「發—」○うごかす（動）○そそぐ（灑）そそぎすてる。左、僖二三「奉匜沃盥、既而—之」○つくす（竭）○ふりまきちらす（散）○さしづするはた、さいはい（麾）采配ハイをふる、さしづする「指—」○しるしばた（幡）○雀は疾き貌。

同訓異義 揮・奮・震・振・戢・頓・篩の別は奮（大部十三畫）の條を見よ。

【揮羽】カハねうちはをふるひうごかす。曹植詩「—ノ—遊ニ清風ニ」

【揮毫】カガウ 筆をふるひて書畫をかく、毫は筆。杜甫、飲中八仙歌「—ノ—落ノ紙如ニ雲煙ニ」＝振筆。

【揮汗】キカンフ あせをふりそそぐ。戰國齊策「臨淄之途、車轂擊、人肩摩、連衽成ノ帷、舉袂成ノ幕、—ノ—成ノ雨」人の甚だ衆き形容。

【揮霍】キクワク ○疾き貌。陸機、文賦「紛紜—ノ—」一說、手を搖かすを揮、手を反へすを霍といふ。○輕がるしく財物を散ずる義。

【揮拳】キケン こぶしをふりまはす。

【揮洒】キサイ 次條に同じ。

【揮灑】キサイ 筆をふるひ墨をすすぐ。書畫をかく義。宣和畫譜、岑宗旦得ノ酒輒醉、長哦—ノ—、以爲ニ眞樂ニ」＝揮洒。

【揮掃】キサウ 勢よく筆をふるひはらひて書畫を書く。謝游、草書歌「忽然—ノ—不ニ自知ニ」

【揮散】キサン ふるひちらす。柳宗元文「論戡辨問、貫ニ穿上下ニ—ノ—而咸同、幽昏而大明」

【揮斥】キセキ ほしいまま（放縱）にふるまふ、一切を指揮して旁に人なきが如きをいふ。又、奮迅なり。莊、田子方「至人者上國ニ背天ニ、下潛ニ黃泉ニ、—ノ—ニ八極ニ、神氣不ノ變」其の氣度の大いなるをいふ。

【揮染】キセン 筆をふるひ紙をそめる、書畫をかく。唐書、懷素傳「無ニ紙可ノ—書、種ニ芭蕉ニ供ニ—ノ—」＝揮灑。

【揮洒】キサイ なみだをふるひ落す。晉書、姚襄載記「莫ノ不ニ北望ニ—ノ—」＝揮淚。

【揮毛】キウ ふるひすてる。文同詩「鄰兵厭ニ寶玉ニ、得ノ此只ノ—ノ—」

【揮指】キシ かきならす。張隱、無絃琴賦「振ニ素手ニ以ノ—ノ—」

【揮發】キハツ 化學にて、液體が普通の溫度にて氣體となりて飛びちる職

「ー油」＝揮散。

【揮筆】キヒツフル 筆をふるひ書をかく。李頎詩「興來灑ニ素壁一、ー如ニ流星一」＝揮毫。

【揮袂】キベイ たもとをうちふる、勢よくふるまふ形容。阮籍詩「ー揮ニ長劍一」

【揮鞭】キベンヲフルフ むちをふるふ。蔡邕文「不レ動ニ干戈一、ー而定」

【揮揚】キヤウ ふるひあげる。晉書、禮志「立レ德濟レ世ーニ仁風一」＝發揚。

【揮淚】キルイヲフルフ なみだをふりちらす「ー一斬ニ馬謖一」は慈愛の心を割きて軍法に行ふ義。蜀志、諸葛亮傳に見ゆ。

【揆】キ 紙

○はかる（度）はかり知る「測ー」「度ー」○はかりごと、のり（法）みち（道）孟、離婁「先聖後聖其ー一也」○百ーは堯舜時代の官名、宰相の職。書、堯典「納ニ于百ー」「百事を一度する義。轉じて後世宰相をーといふ「首ー」○國人民が黨を結びて上に反抗する擧動「百姓一ー」

同訓異義 揆・計・謀・圖・量・度・稱・測・料・揣・商等の別は計（言部二畫）の條を見よ。

【揆策】キサク はかりごと。又、はかりごとを運らす。聖主得ニ賢臣一頌「圖レ事ーー、則君不レ用ニ其諫一」

【揆敘】キジヨ はかりついづ。孟子題辭解「包ニ羅天地、ーニ萬類一」

【揆水】キスイ みづの深さをはかる。陸機文「臨レ淵ーレ、而淺深難レ察」

【揆測】キソク はかる。曆志「三代之興、皆ーニ天行、考ニ正星次一」＝揆度。

【揆度】キタク はかる。書經、傳「ーニ優劣一」＝測度・度揆。

【換】クヮン 翰

○かふ、とりかへる（交易）「交ー」音書、阮孚傳「嘗以ニ金貂一ニ酒」○あらためかへる「改ー」「易ー」○かはる、うつりかはる（交替・變移）「物ー星移」○あらためる（改）○畔ー・叛ーは強くほしいまま（恣睢）

同訓異義 換・變・化・易・替・代・更・渝等の別は變（言部十六畫）の條を見よ。

【換衣】クヮンイ きものをきかへる。ころもがへ。事文類聚「進士新及第、ーレー、以ニ故衣一予レ人」＝更衣。

【換易】クヮンエキ とりかへる。穀梁傳、注「擅相ーー」＝更換。

【換鶩】クヮンガク 王羲之が道德經を書きて鶩と交換せし故事。晉書、王羲之傳「義之性愛鶩、山陰有ニ一道士、養ニ好鶩一、義之往觀焉、意甚悅、固求レ市レ之、道士云、爲寫ニ道德經一、當ニ舉レ羣相贈一耳、義之欣然寫畢、籠レ鶩而歸、甚以爲レ樂、其任率如レ此」

【換氣】クヮンキ 新らしき空氣を入れかへる。

【換銀】クヮンギン りゃうがへ。＝換錢・兌換。

【換刑】クヮンケイ 法律上、罰金・科料等を納めざるかはりとして拘留に處する。

【換言】クヮンゲン いひかへる、他の言葉にて言ひあらはす。

【換骨奪胎】クヮンコツダツタイ 古人の詩文の意を取り、其の語を換へて己の作とする。冊府新話「文章雖レ不レ要レ蹈ニ襲古人一言一句一、然自有ニ奪胎換骨等法一、所レ謂靈丹一粒、點鐵成レ金也」冷齋夜話「不レ易ニ其意一而造ニ其語一、謂ニ之換骨法一、規ニ模其意一而形ニ容之一、謂ニ之奪胎法一」

【換算】クヮンサン ○單位の異なる數量に計算しかへる。○りゃうがへ。

【換姓】クヮンセイ めうじをとりかへる。＝改姓。

【換錢】クヮンセン りゃうがへ。それを業とする家を錢莊といふ。＝換銀・兌銀。

【揭】ケツ ケイ 屑 月

○かかぐ、たかくあげる（高舉）貫誼、過秦論「ー竿爲ニ旗」○になふ（擔）おふ（負）戰國策「馮煖于是、乘ニ其車一ニ其劍一」○ーはながし（長）○しるし（表標）○かかげしらせる（表示）「ー示」「表ー」○車の疾き貌、偈に通ず。○かかぐ、からげる。衣をかかげて淺き水を渉る。詩、邶風「淺則ー」

同訓異義 揭・挑・褰の別は挑（手部六畫）の條を見よ。

【揭竿】ケイカン ○きをたてる。賈誼、過秦論「斬レ木爲レ兵、ーレ爲レ旗」倉卒に事を擧げ、値に竿を揭げて以て號召す。○轉じて後世、亂を倡ふる義と爲す。

【揭曉】ケイゲウ 揭示してさとす。曉は諭。

【揭載】ケイサイ 新聞雜誌等に詩文などをのせる。

【揭示】ケイシ 政令をかかげしめす。宋史、食貨志「ーニ不レ實者、民得ニ自ー」＝揭帖・揭貼。

【揭帖】ケイテフ 次條に同じ。古、帖・貼通ず。通雅「納ニ執政一、分令ニ諸房ーー」

【揭貼】ケイテフ かかげはりだす。宋史、高宗紀「書ニ之屏風一、以レ時ーー」＝揭帖。

【揭膀】ケイバウ 看板をかかげる。周伯琦詩「明朝ーレ醉ニ黃封一」

【揭斧】ケイフヲカフ ぶをかかげる。淮南子「操レ釣上レ山、ーレ入レ淵」物を用ふるに其の所を得ざる喩。

【揭陽】ケイヤウ 縣の名、漢代に置く、其の故城は今の廣東省ーー縣の四に在り。

【揭櫫】ケイレツカツ すだれをかかげる。韓偓詩「半身映レ竹輕開レ語、一手ーレ微轉レ頭」＝褰簾。

【揭蹇】ケツケン ○いちじるしく明か。○そばだつ貌。張衡、西京賦「豫章珍館、ーー中峙」

【揭傑斯】ケイケツシ 元の人、字は曼碩、翰林に入り侍講學士たり、遼金宋三史を總修す、最も文詩に長ず。

【揭揭】ケツケツ ○長き貌。詩、衛風「苕英ー」○高き貌。劉向、九歎「服覺酷以殊レ俗兮、貌ーー以巍巍」○疾く驅る貌（漢書、注）

【揵】ケン 阮 先

㊀あぐ（擧）司馬相如、上林賦「ー鰭掉尾」○になふ、肩にて物を持ち擧げる。㊁とづ。とざし（閉）○ふさぐ（塞）○まじふ（接）○かたし（難）○せき、水決の口を塞ぐ處に竹を樹て其の中に草と土とを塡めたるもの。漢書、溝洫志「下ニ淇園之竹一以爲ー」○封界を立てる。

【揅】ケン 阮 先

㊀あぐ（擧）司馬相如、上林賦「ー鰭掉尾」○になふ、肩にて物を持ち擧げる。㊁とづ。とざし（閉）○ふさぐ（塞）○まじふ（接）○かたし（難）○せき、水決の口を塞ぐ處に竹を樹て其の中に草と土とを塡めたるもの。漢書、溝洫志「下ニ淇園之竹一以爲ー」○封界を立てる。

【劄】サツ 黠 薩

㊀人の臂のほそ長くうるはしき貌。㊁そけて小さき貌。

【插】サフ 洽 俗字 插は俗字

○さす、さしはさむ、刺し入れる「亂ー」「種ー」○になひぼう（擔棒）○すき。＝鍤。

同訓異義 插・挾・夾の別は挾（手部七畫）の條を見よ。

【插秧】サフヤウ 稻の苗をうゑ、田植をする。高適詩「淡水堪レ垂レ釣、江田耐レ插ーレ」

【插羽】サフウ 兵の召狀に鳥の羽をさす、其の速かならんことを示す。漢書、高帝紀「羽檄徵ニ天下兵一」注「邊有レ警、輒露檄ーレ」

【插花】サフクワ ○花をかんざしにさしはさむ。張耒詩「ーレ野婦抱レ兒至、曳杖老翁扶レ背行」○いけばな（活花）

【插篦】サフヒ をさしはさむ、さしゐ。

【插刺】サフシ ○さす。○さしはさむ。元稹詩「ーニ頭鬢一相誇張」○荷なひ棒にて禾束をつきさす。急就篇、顏師古注「ーニ禾束」

【插嘴】サフシ 口差し出口する。

【插入】サフニフ さしはさみいれる。

【插繪】サフエ 文書の中に圖解する爲めに加ふる繪畫。＝插畫。

【插木】サフボク 植物の枝を切り、其の一端を土中に埋めて根を生ぜしめる法。

【揣】シ タン 紙 寒 スキ

㊀はかる（量度）おしはかる。㊁の一音 高さんはかる。孟、告子「不ー一其本而齊ニ其末一」○さぐる（探）「ー知」○さだめる（定）○さぐりこころみる（探試）○のぞく（除）㊂聚める貌、まるくあつまる。馬融賦「冬雪ニ封乎其枝」＝摶。

同訓異義 揣・計・謀・圖・量・度・料・忖・商等の別は計（言部二畫）の條を見よ。

【揣骨】シコツ 骨をなでさぐる、相術の一法。劇談錄「開成中、有ニ龍復本者、無目、善聽レ解ーレ、言ニ休咎一必中」

【揣度】シタク おしはかる。柳宗元文「退自ーー、惕然汗流」＝忖度。

【揣知】シチ さぐりてさとる。漢書、翟方進傳「ーニ其指一、不ニ敢發言」

【揣摩】シマ ○已の心を以て人の心をおしはかる。戰國策策「蘇秦乃夜發レ書、陳レ篋數十、得ニ太公陰符之謀一、伏而誦レ之、簡練以爲ニーー」○轉じて古人の文字を玩索して之に倣ふ。

【揉】ジウ ジウ 尤 有

㊀みだれまじる。史記「百家競列、事跡錯ー」○もむ、手にてひねり柔げる。王氏談錄「手自和ー」○したがふ（順）やはらげる、柔順ならしめる。詩、大雅「ニ此萬邦」＝柔。㊁ためる、木を矯めて屈伸する。易、繫辭「ー木爲レ耒」かがむ（屈）○國「ー木爲レ耒」かがむ（屈）○國ねる「ー療治」

【揉輪】ジウリン 車の輪をためてまるくする。管子「不レ明ニ於化一、而欲ニ變レ俗易レ教、猶ニ朝ーレ而夕欲ニ乘車一」

【搢】シン ジン 眞 軫

㊀なでる（摩）㊁なでて、なぐ

○手部（九畫）揖・楫・揭・揭・揭

虹霓」

【揚鄉】ヨウキヤウ あげなげうつ。舊唐書「米至二京師一、或砂礫糠粃、雜二乎其間一、開元初、詔、使二一一而較二其虛實一」

【揚且皙】ヨウショセキ 揚は眉上の廣きなり、皙は膚の白きなり。詩、鄘風「揚且之皙也」

【揚搉】ヨウカク あふられあがる。呂覽「舟中之人盡一一入二于河一」

【揚簸】ヨウハ あふられあがる。王禹偁詩「糠粃任二一一一」

【揚旌】ヨウセイ はたをあげる。沈約詩「摧レ轂二鯨鯢一、一レ九河陰」

【揚帆】ヨウハン ほをあげる。劉潛詩「一レ乘二浪華一」＝擧帆。

【揚眉】ヨウビ まゆをあげて見る。列子「一レ而望レ之、弗レ見二其形一」

【揚眉吐氣】ヨウビトキ 志を得る形容。李白文「何惜二階前盈尺之地一、不レ使二白一——、激二昂青雲一耶」

【揚袂】ヨウベイ たもとをあげる。李白詩「一レ正二北辰一、開レ襟攬二羣雄一」

【揚纁】ヨウクン むちをあげる、勢よく馬をかるにいふ。溫庭筠詩「岸上一レ烟草迷」

【揚名】ヨウメイ なをあげる。孝經「立レ身行レ道、一二一子後世一」

【揚揚】ヨウヨウ 得意なる貌。史、晏子傳「意氣一一、甚自得也」

【揚雄】ヨウユウ 字は子雲、漢の蜀郡成都の人、詞賦に長ず、口吃にして劇談すること能はず。而して沈思を好む、方言・法言・太玄經等の著あり。

【揚厲】ヨウレイ 高く發揚する。韓愈文「一二一無前之偉績」

【揄】

㊀ユ ㊁エツ ㊂イウ・ユ ㊃トウ 尤 尤 蕭 虞

㊀ひく(引)ひきずる(曳)史、貨殖傳「一長袂蹁二利屣一」○一揚はほめそやす。○邪一は手を擧げてからかふ、邪は揶。㊁一狄は翟ヒを畫きたる夫人の服。＝褕。㊂あぐ(擧)米を臼より出す。詩、大雅「或舂或一」㊃ひく(引)○たる(垂)

【揄狄】ヨテキ 雉子を畫きたる衣、古、三夫人及上公の妻の命服。禮、玉藻「夫人一一」＝褕狄。

【揄袂】ユウベイ そでを長く引き垂れる。莊、漁夫「披髮一一」

【揄揚】ユヨウ 引き擧げる、轉じてほめそやす、譽め言ふ。班固、兩都賦序「雍容一一、著二於後嗣一」

十畫

【捻】

㊀アク・ヤク 厄 扼・扼と通ず ㊁エツ

㊀とる(捉)もつ(持)捉へ持つ、しめつける。史、劉敬傳「一二天下之吭」急所をおさへる。○にぎる(握)「一腕」史、周本紀「釋弓一劍」○てにみつ(滿手)㊁もつ(持)

【捻咽】ヤクイン のどをつかむ、急所をおさふるに喩ふ。解嘲「捻二其咽一、尤二其氣一」＝捻吭。

【捻吭】ヤクカウ のんどをしめつける、要害の地に據りて敵を制する譬。史、劉敬傳「今陛下入レ關而都、案二秦之故地一、此亦捻二天下之吭一、而拊二其背一也」＝捻亢。

【捻殺】ヤクサツ にぎりてしめころす「詩、齊風、南山小序、注」

【捻腕】ヤクワン うでをきびしくにぎる、奮ひて意氣どむ貌。史、刺客傳「偏袒一一而進」＝捻捥・扼腕。

【搖】

エウ 蕭 嘯

○うごく、うごかす(動)ゆるぐ、ゆるがす「漂一」「蕩一」「震一」○おこる(作)○歩一はくびかざり(首飾)○一一はおちつかず、託する所なし。又、憂ふる貌。○扶一は暴風。○遙に通ず、消一は逍遙。

同訓異義 搖・動・撼・蕩の別は動(力部九畫)の條を見よ。

【搖曳】エイ ゆらゆらと動かしひく貌。鮑照詩「飈戾長風振、一一高帆擧」

【搖搖】エウ ○心うれへておちつかざる貌。詩、王風「行邁靡靡、中心一一」○舟などのゆらゆらとうごく貌「歸去來辭」

【搖演】エイ うごかしひらく。常袞文「披二拂丹草一、一二一青蕚一」

【搖撼】カン うごく。うごかす。宋史、蘇轍傳「多起二邪說一、以一二一在位一」

【搖兀】ゴツ ゆりうごく。范成大詩「竹輿一一走婆娑」

【搖膝】シツ ひざを動かす。北史「一レ一吟咏」

【搖車】シヤ 小兒を容れて牽き動かし眠らしむる車。戒菴漫筆「古人製二小兒睡車一、曰二一一一」

【搖槳】シヤウ 棹をうごかす。李華詩「一レ一曙江流、江清山復重」

【搖旌】セイ ゆらめくはた、心のおちつかざるに喩ふ。白居易詩「年光同二激箭一、鄉思極二一一一」

【搖蕩】タウ ゆれうごく、ゆりうごかす。史、司馬相如傳「隨レ風潰淡、與レ波一一」＝搖動・搖盪。

【搖盪】タウ 前條に同じ。盪は震動。

【搖櫂】タク かいをゆり動かして船をやる。常建詩「春風又一一」

【搖動】ドウ ゆるぎうごく。北史、韋世康傳「汾絳猶是周齊分界、恐生二一一一」＝搖蕩。

【搖尾乞憐】ヤクビキツレン 人の卑屈にしてこびへつらふこと、狗の如くなるに喩ふ。韓愈文「若二僥レ首帖レ耳、搖レ尾而乞憐者、非二我志一也」

○手部（十畫）搖・擺・搖・搖・搴・搴・搴

【搜集】さがしあつめる。南史、梁安成王秀傳「―ニ―經記」

【搜奬】さがして引きたてる。南史、宋高祖紀「―ニ―忠烈」

【搜案】さがしあつめる。隋書、經籍志「後齊遷ル鄴、頗更―ル」

【搜選】さぐりえらぶ。後漢書「太子官屬、宜ル―ニ―令德」

【搜討】さがしもとめる、討は尋。韓琦詩「求者如ル麻幾百年、宜乎今日難ニ―ル」

【搜探】さがしさぐる。韓維詩「花ニ有勝跡一窮ニ―ル」＝搜索。

【搜剔】隱れたる物事をさがし出して惡しきをのぞく。晁沖之詩「―發ニ清新」

【搜爬】さがしてかきあつめる。孔平仲詩「搔突盤靈驥、―塵庶汗」

【搜訪】さぐりとぶ、人才をさがしたづねる。晉書、山濤傳「甄ニ拔隱風、―ニ―賢才」＝尋訪。

【搜覓】さがして取る。宋史、張浚傳「以ル―ニ―豪傑ニ爲ニ先務」

【搾】（國字）音サク。しぼる、おして汁を取る「壓―」「―取」

【搊】シウ　尤

○とる（拘）○つめびき（手彈）樂器を撥弄する「―琵琶」

【搢】㊀シン　㊁セン　霰　銑

㊀はさむ、さしはさむ（插）束帶の時、笏を帶にはさむ。＝縉。○ふるふ（振）「―鐸」㊁さしはさむ、薦に通ず。

【搢笏】しゃくを大帶にさしはさむ「禮、內則」

【搢紳】古、官人が笏を大帶に插むをいふ。轉じて貴顯の人の稱。晉書、輿服志「所謂―ル之士者、搢ル笏而垂ニ紳帶一也」＝縉紳・薦紳。

【搶】㊀シャウ・サウ　㊁シャウ・サウ　㊂シャウ・サウ　㊃サウ　陽　漾　養　庚

㊀つく（突）突きあたる。○こばむ（拒）○あつまる（集）とびかすむ（飛掠）莊、逍遙遊「飛―榆枋」㊁帆に風を受けてのぼる「棹―」㊂かすめ取る、爭ひ取る。○ふれる（觸）○つく（突）㊃―攘はみだれる（亂）貌。○攙―は、ははきほし（彗星）＝欃槍。

【搶攘】みだれる貌。漢書、賈誼傳「國制―ル、非ニ舊有ニ紀」

【搶奪】かすめうばふ。康熙字典「今律法有ニ白奪―ル」

【搶地】地を突く。戰國魏策「布衣之怒、亦免ル冠徒跣、以ル頭―ル―耳」

【搶風】帆に風を受けて上る。庾闡賦「舵子―ル―、榜人逸ル浪」

【損】ソン　阮

○へる、へらす（減）少くする「加―」「增―」「減―」「虧―」史、呂不韋傳「有ル能增ニ一字者上、予ニ千金ニ」○おとす（貶）へりくだる「抑―」晉書、平安王孚傳「常自退―」○うしなふ（失）不利益。易、謙卦「滿招―」○そこなふ、やぶる（傷）つかれる。吳志、樓玄傳「勞ニ聖慮ニ」○易の卦名、兌下艮上。○國そこなふ、しそんじる、しくじる「書きー―ッず」

【損友】交りて益なき友。論、季氏「損者三友、友ニ便辟、友ニ善柔、友ニ便佞、損矣」

【損抑】おさへしりぞける、慢心を抑へて へりくだる。後漢書、光武帝紀」＝抑損。

【損益】○へると、ますと、少くすると增し加へると。論、爲政「子曰、殷因ニ於夏禮、所ニ―ニ―可ル知也」＝增減・增損。○そんと、まうけと、損失と利益と。

【損害】へされそこなはれる。利益をそこなひへらす。

【損耗】へる、へらす。南史、傳縡傳「貨賄公行、帑藏―ル」＝損失。

【損缺】そこなひかく。荀悅文「清節毀傷、公魏―ル」

【損減】○おとしへす。史、樂書「君子以ニ謙退一爲ル禮、以ニ―ニ―爲ル樂」○そんをする。＝損失・減損・缺損。

【損失】そこねうしなふ、そんをする。後漢書、和帝紀「芻藁若ル有ル所ニ―ニ―」＝失損。

【損傷】そこなひやぶれる。劉禹錫詩「危根易ニ―ニ―」

【損省】へらしはぶく。後漢書、桓帝紀「詔曰、其輿服制度、有ニ踰ル侈長ル飾者一、皆宜ニ―ニ―」

【損消】そこなひへる。阮籍詩「飄色改ニ平常一、精神自―ル」

【損瘠】おとろへやせる。蘇頲文「―ル相仍、流庸莫ル返」＝痩損。

【損膳】食膳の費をへらす。史、平準書「天子乃―ル」

【損敗】そこなひやぶれる。隋書、食貨志「每年收積、勿ル使ニ―ニ―」

【損貶】へらしおとす。唐書「日膳豐鮮無ニ―ニ―」

【損名】名をおとす、評判のあしくなる義。唐書「急刻少ル恩、由ル是―ル―」

【損抑】おさへしりぞける、おさへてへりくだる。宋書、王僧綽傳「懼ニ其太盛、勸令ニ―ニ―」＝損抑・抑損。

○手部（十畫）損・搥・搭・搗・搶・搖・搭・搭・搭

○手部（十一―十一畫）搏・搤・搦・搶・搬・搴・搔・搖・搗・搘・搜・搢・搢・搢

詩、魏風「一一女手、可二以纖一纖」＝纖纖。

【執】シ 圓

○にへ、物を執りて相見るの禮と爲す、面會の時の禮物。＝贄。○とる（執）○いたる（至）○きはむ（極）轉じてまこと、ねんごろの義とす「眞一」「懇一」○すすむ、すすめる（進）いたす（致）「一詔」○やぶる（傷）くだく（折）禮、月令「雪霜大一」○たけし（猛）「一獸」鷙に通ず。○姓、一虞は晉人。

【執拘】シウ とらへる。つなぎとどむ。韓愈詩「富貴自一一、貧賤亦煎焦」

【執獸】シウ あらあらしきけもの、虎彪の屬。曲禮「前有二一一一、則載二虎韜一」

【摴】シュウ 冬

○つく（衝・撞）左、文十一「一一其喉、以戈殺之」○うつ（擣）

【操】㊀セウ ㊁サウ・セウ 豪 藻 宵

㊀とらへ、うつ（拘擊）㊁とる（取）西京賦「一一龍鱗」＝鈔・抄。

【摭】セキ シャク 陌 藥

とる、ひろひとる（拾取）「採一」「收一」漢書、司馬遷傳「采一經一傳」＝拓。

同訓異義 摭・拾・掇・摘の別は拾（手部六畫）の條を見よ。

【摭採】ひろひ取る。＝採摭・摭采・摭拾・摭摭。

【摭拾】ひろひとる。＝採拾・摭採・摘採。

【摭拭】とりぬぐふ。李白詩「一一欲一圖一之、中眉路無一梯」

【摺】㊀セフ ㊁ラフ・ロフ 合 葉

㊀たたむ（疊）折りたたむ。○紙を折りたたみしもの、奏一は上奏文を書きし本。○ひだ。○やぶる（敗）㊁をる（折）くじく（挫）＝拉。○圖する、印刷する。

【摺扇】あふぎ、せんす。＝摺疊扇・樂頭扇。

【摺奏】上奏文の天子に直進するもの。＝圖摺子。

【摺疊】たたむ。文苑集僑「此乃拆卸一一之亭也」

【摺木】をりでほん。王氏書苑「智永千文、唐粉蠟紙一一、內一幅廊紙、是眞迹」

【摺脚】わきばらをくじく。淮南子「一一一傷幹」

【摺齒】齒をくじく。史、范雎傳「折一脇一一」

【摺拉】とりひしぐ。庾信文「硎谷一一」

【摛】セン 先

さしはさむ（插）俗に扞に作る。

【摠】ソウ 董 惣は俗字

○すぶ、束め束ねる。＝總。○すべて、みな（皆）○おほし（衆）○むすぶ（結）離騷「一一余轡乎扶桑」

【摶】㊀タン ㊁セン ㊂テン 銑 先 寒

㊀ひねりあつめる（揑聚）○まろし（圓）手にてまろめる。曲禮「毋一一飯」○よる。よりかかる、憑藉。莊、逍遙遊「一一扶搖而上者九萬里」一說、摶に作る。㊁ほしいままにす（擅）古、專に通ず。○にぎる（握）握り領する。史、田齊世家「一一三國之兵」㊂たば（把束）

【摶心】心をもっぱらにする、摶は專。史、始皇紀「一一一意志」

【摶沙】團結力の乏しきに喩ふ。蘇試詩「親友如二一一一、放一手選復散」

【摶苴】茗荷の異名。＝蘘荷。

【摶委】○きびを、にぎりまろめる。儀禮「一一授一祝、祝授一尸」○黃鳥の異名「詩、周南、疏」

【摶埴】やきもの師、埴は黏土。周禮、考工記「一一之工二」摶一に摶に作る。

【摶飯】○めしをまろめる、字解參看。○にぎりめし、むすび。

【摘】チ 支

○しく（布）梁簡文帝文「英名遠一」○ひらく（發）○のぶ（掞・舒）

【摘藻】字句を美くしくのべしく。藻は詞藻。班固、答賓戲「馳辯如二瀉波一一一如二奉華一」

【摘】チキ タク

○あばく（發）他人の惡をあばきあらはす。＝摘。○うごかす（動）さわがす（擾）○ひろふ（拓）○つむ、つまむ（手取）「一瓜」說文「一、拓二果樹實一也」○

【摘】チョ 魚

○のぶ（舒）○樗に通ず、樗蒲は賭博の戲。

多くの中よりつまみ取る「一要」「一出」○さす（指）指一は指さし示す。傳毅、舞賦注「指一行列使整齊也」

【摘要】多くの中の要所をつまみとる。又、其のかき物。

【摘靈】きずをひろひだす。後漢書、陳元傳「抉一瑕一一、掩二其弘美一」

【摘花】花をつみとる。＝摘英。

【摘觖】あばきだす、觖は抉。漢書、孫寶傳「故欲二一一以揚二我惡一」＝摘抉・摘發・擿發・挑發。

【摘載】要點をつまみて書き載せる。＝摘記。

【摘草】くさをつみとる。つみくさ。韋應物詩「凌一露摘二幽草一」

【摘插】つまみはさむ。宋石城樂「一一環鬢前」

【摘書】ぬきがき。

【摘茶】ちゃをつむ。僧惠洪詩「一一時節亂山間」

【摘蔬】つまみとる。元稹詩「一一園蔬美」

【摘芳】花をつみとる。江淹賦「一一拾一蕊」＝摘花。

【摘發】隱れたる惡をあばき擧げる。後漢書、賈復傳「相監司以一一其姦」＝擿發・摘觖。

【摘問】ぬきだしてとふ。唐書、鄭滑傳「試舉二諸條一一一之」

【摘錄】要點をつまみだしてしるす。＝摘記。

【摸】㊀バク ㊁ボ・モ 篠 遇 通音 ボ・モ

㊀さぐる、さがす、さがしもとめる（索）手にて捉る。○つかむ（捫）㊁うつす（寫）のっとる「描一」＝摹。

【摸擬】なぞらへ、まねる。蘇軾詩「紛紛一一俱堪笑」

【摸索】てさぐりにてさがす。隋唐佳話「暗中一一、赤可一識」

【摸寫】手にてまねてうつす。後漢書、蔡邕傳「碑始立、其觀覽及一者、車騎日千餘兩」摸一本摹に作る。

【摸搨】碑文などをすりうつす。北史、崔浩傳「舒人多一一之」

【摸棱】事を曖昧にして是非を決せざる態。唐書、蘇味道傳「味道爲一相、嘗謂人曰、決一事不一欲二明白一、誤則有一悔、一一持二兩端一可也、故世號二一一手一」棱は四角の木、之を摸す、右すべく、左すべし、故にいふ、俗に稜に作る。一說、蘇味道が國事を問はれたる時には確答せず、嗤狀稜を撫でるのみ、故にいふと。

【摸稜】前條を見よ。

【摑】ヒョク 職

さく（割）韓非、顯學「不一一痤則寢食」痤は癰。

【摽】㊀ヘウ ㊁ヘウ ㊂ハウ 篠 蕭 豪

㊀うつ（擊）左、哀十二「長木之斃、無一不一也」＝敷。○おちる（落）草木が枯れおちる、實が熟して落ちる。○うれひて、むねうつ（拊心）詩、邶風「寤辟有一一」㊁きっさき（刀末）「一末」○すてる（捐）○さしまねく（麾）孟、萬章「一一使者」○高く擧る貌。㊂なげうつ。＝拋。

【摽擊】うつ。左、哀十二、注「長木斃二路子地、不二擲一物而後一一」

【摽然】高く擧る貌。管子、修靡「一一若二秋雲之遠一」

【摽梅】梅が熟し過ぎて落ちる、女子の嫁期のすぎたる戲。詩、召南「摽有一梅、其實七兮、求一我庶士、迨二其吉一兮」

【摽揚】其の善を表し揭げる。後漢書、海內希一風之徒、遂共相一一」＝標榜。

【摽拂】うつ。淮南子「擺投一一、手若二廋蒙不一失一」絃一」

【摽末】刀のきっさき。僅少の義とす。漢書、王莽傳「一一之功、一言之勞」

【摹】ボ モ 虞 通じて摸 模に作る

○のっとる（規）ならふ（倣）「規一」○うつす、手にて書畫などをうつす（手寫）「臨一」「鉤一」「傳一」＝摸。

【摹倣】まねびならふ。洞天清錄集「漸一一之二、遂得二天趣一」＝摸倣。

【摹本】原本をまねうつしたる書物。皇朝類苑「今傳二樂毅論一者、皆一一也」＝摸本。

【摹臨】手本にまねてうつす。宣和畫譜「故俗畫一一、莫二克髣髴一」＝臨摹・摸臨。

【摹寫】まねてうつす。＝摸寫。

【擣】ホウ 冬

○さぐ（奉）搗に通ず。史、龜策傳「一策定數」○ぬふ、針にて衣をぬふ。＝縫。○おほひなり（大）莊、盜跖「一衣淺帶」＝逢。

【摩】マ 歌 古、磨と通ず

○する、こする（摺）○なでる（撫）「案一」○すりけす（消滅）すりへらす。史、平準書「姦或盜、一一錢裏取鎔」○みがく（研）「研一」「切一」○とぐ（研）

○せまる（迫）ちかづく（近）「―天」○轉じて殆ど匹敵する「―李杜」○揣―はおしはかる。

【摩訶】マカ　梵語、大・多・勝の三義あり（智論）

【摩崖】マガイ　名山の巖石上に刻みし碑文。泰山に多し「―碑」＝磨崖。

【摩挲】マサ　すれ合ひて音を發する。晁補之、新城游北山記「窓間竹數十竿、相―、摩切切不已」

【摩乾軋坤】マケンコン　天地に近づき迫る義。劉蕡文「於鏘龍虎之叢、摩乾軋坤、魁華山而獨尊」

【摩抄】マショウ　手にてこする、抄はする。韓愈、石鼓歌「誰復著手更―」

【摩擦】マサツ　する、こする。

【摩切】マセツ　○すりみがく、轉じて、人をはげますにいふ。宇文之邵文「以禮節厲恥、―二臣下」○せまりちかづく。王庭珪詩「劍戟相―」

【摩娑】マサ　圖○酒をいふ。印度には、穀酒・果酒・藥酒の三種あり。○美地と譯す、切利に屬する上天の稱（翻譯名義集）

【摩頂】マチョウ　頭上をなでる。孟、盡心「墨子兼愛、―放踵、利二天下一爲之」

【摩天】マテン　天にせまりちかづく。天をこする。李白詩「吾觀―飛、九萬方未已」＝摩乾。

【摩登伽】マトウカ　圖作惡業と譯す。婆羅族にして卑賤の業を營む男子の通稱。

【摩登祇】マトウギ　圖惡作業と譯す。婆羅族にして卑賤の業を營む女子の通稱。

【摩尼】マニ　圖珠の通名、摩尼寶珠の略、龍王の腦中に在りといふ、清淨なる珠。翻譯名義集「―、圓覺鈔、又云二如意一、謂意中所レ須財寶衣服飲食種種之物、此珠悉能出生、令二人皆得一如レ意、故名爲レ寶」＝如意珠。

【摩挲】マサ　なでさする。蘇軾詩「欲レ把二齎殘一手―上」＝按摩。

【摩拂】マフ　すれあふ。詩疏廣要「牝牡飛鳴、翼相―」

【摩滅】マメツ　すれてきえる。孔安國、尚書序「錯亂―、弗レ可二復知一」＝磨滅。

【摩耶】マヤ　圖○摩訶摩耶の略。唐に大術或は大幻と譯す（西域記）○―夫人は淨飯王の后、釋迦の母。

【摩羅】マラ　○圖華鬘。翻譯名義集「西域結鬘師、多用二蘇―華一」○百合の異名（本草）

【摩羅伽陀】マラカダ　圖七寶の一、金翅鳥の口邊より出づる綠色の珠、能く一切の諸毒を避く、世に希有なるを以て寶となす（智度論）

【摩利支天】マリシテン　圖印度の神、火星の女神、國を護り兵戈を救ふ大力ありといふ、故に武士・力士等の守り神とす。

【摩壘】マルキルスキ　○敵壘に接近する。左、宣十二「―レ而還」○他人の詩文などの古の大家に匹敵するを稱揚していふ「擊二李杜壘一」

【摠】レン　銑

おふ（負）になふ（擔）擔ひて物を運ぶ「―水」

【摟】ロウ　尤

○ひく、ひきあつめる（曳聚）。孟、告子「五伯者―諸侯以伐諸侯者也」○ひく（牽）ひっぱる、つれ出す。孟、告子「踰東家牆而―其處子」

【摝】ロク　屋

ふる（振）うごかす（動）周禮、夏官「三鼓―鐸」

十二畫

【擅】エイ・アイ　霽　寘

ゑしゃく、ゑしゃくする、手をこまぬき上下して敬意を表する。＝揖。

【擱】カン　翰　通じて惝に作る

○たけし（猛）○つよく怒る（勁忿）貌。

【擱然】カンゼン　ひどくいかる貌。左、昭十八「今翰寧―授レ兵登レ陴」＝惝然。

【擕】ケイ　齊

○さす、さしまねく「―日」＝麾。○ふるふ（揮）○さく（裂）

【擕】キ　支

○たすける（佐）

【擕挹】ケイユウ　へりくだりしりぞく。王儉、褚淵碑文「功成弗レ有、國衆二―一」＝謙挹・擕謙。

【擕謙】ケンケン　へりくだる。擕は謙をさしまねき表はす、一說、謙謙を發揮する。易、謙卦「六四、无レ不レ利―」＝謙遜。

【撅】ケツ　月

○かかぐ、衣をかかぐ。禮、內則「不レ涉不―」＝揭。○ほる（掘）うがつ。杜牧註、孫子序「―其城郭」○とる（把）○うつ（擊）唐書、褚遂良傳「―高昌、纓突厥」○なげる（投）

【撟】ケウ　蕭　篠

○ほしいまま（擅）○いつはる（詐）かこつける（託）漢書、高五王傳「―制以令天下」＝矯制。○强き貌。○せのびする。○手をあぐ（舉手）○たむ（矯）曲を正す。漢書「―枉過其正」○まける、屈曲させる。○あがる（擧）

【撟然】ケウ　○强き貌。荀、臣道「―剛折鳴立而無二傾側之心一」○あがる貌。史、扁鵲傳「舌―而不レ下」

【撥】ゲキ　陌

○もつ（持）○うつ（擊）史、孫子傳「救鬬者不レ搏―」

【撮】○サツ　○サイ　○サン　寒　泰　曷

○とる、つかむ、つまむ（握）兩指又は三指にてつまむ「把―」又其のつまむ程の少量。中庸「今夫地、一―土之多也」又量名、圭の四倍、一圭は黍六十四粒。○あつめる（聚）○すべてとる（總取）漢書、司馬遷傳「―名法之要」○もとどり（髻會撮）○のりもの（乘載器）尸子「行險以―」○圖とる、うつしとる「―影」

撮は撮・取・執・乘・把・操・採・摠・捉等の別は取（又部六畫）の條を見よ。

【撮影】エイ　圖寫眞をとる。

【撮土】ドウ　ひとつまみほどの少しの土。字解參看。＝撮壤。

【撮壤】ジョウ　つまみてこする。楞嚴經「如レ以二手掌一―虛空上」

【撒】サツ　曷

○ちらす（散）○まく（撒）まきちらす「―水」○はなつ（放）○なげうつ（擲）

【撒金】サキン　金銀の粉末を、梨子の皮の斑點の如くちらしたる塗物、梨子地。

【撒火】サクヒ　字畫の名、火を灬と書く時の稱。＝連火。

【撒壞】サイ　ばらばらにこはす。吳志、潘濬傳、註「出見二燒醫一、手自―」

【撒菽】シュク　まめをまく。陶游詩「風摩如二驟濤一、雨點如二―一」

【撒水】スイ　みづをまく「―車」

【撒屑】セツ　せんす。＝摺疊扇。

【撒布】ブ　ふりまく、ふりかける。

【撫】ブ　○撫（手部十一畫）の俗字。操（手部十三畫）の俗字。

【撰】○サン・セン　○セン　○サン　○セン　銑　銑　早　銑　感

○えらぶ、詩文をつくる（述作）或は纂・譔に作る。○のり（則）易、繫辭「體二天地之一」○こと（事）○そなふ（具）論、先進「異乎三子者之一」○のぶ（述）○えらぶ、よりわける。＝選。○やる（遣）○もつ（持）曲禮「君子欠伸―杖屨」○かぞふ（數・計）＝算。はかる（計）○あつむ（集）

【撰述】ジュツ　撰・譔・選・擇・簡・揀○撰は造也と註す、文章を作るには、譔・撰何れにてもよし、撰述と連用す。唐書、百官志「史館修撰、掌レ修二國史一」○譔は善言也と註す、すぐれて善き言を、えらび錄するなり。禮記、古之君子、論二譔其先祖之美一、而明二著之一後世一者也」○選はよりすぐること、文選・詩選は、詩文のよきものをよりぬく意なり、撰述には用ひず。論語「選二於衆一舉二皐陶一、不仁者遠矣」○擇はよしあしをよること。中庸「擇レ善而固執レ之」○簡は擇よりは一層すぐれて、善き方を取るなり。八家文序「於二賈董班馬之後一、獨簡二此八大家者一」○揀は簡に同じく、又擇の意を兼ぬ、揀擇と連用す。

【撰次】ヒン　順序を立ててえらぶ、えらびて綱次する。後漢書「―レ天子至二于庶人一、冠昏吉凶終始制度」

【撰集】シュウ　えらびあつめる、文をえらびて集め錄する。後漢書、班固傳「令二班固―二其事一」

【撰人】ジン　次條に同じ。文獻通考「周公謚法一卷、不レ著二―名氏一」

【撰者】シャ　詩文、又、書物などの作者。＝撰人・著者。

【撰述】ジュツ　書物をえらびつくる。晉書、孔衍傳「凡所二―一百餘萬言」＝著述・著作。

【撰答】トウ　君命により作りて報答する。齊書、陸慧曉傳「―二詔草一」

【撰著】チョ　撰述に同じ。

【撰定】テイ　えらびさだめる。晉書、張華傳「―二官書一」

【撰碑】ヒ　いしぶみの文をえらび作る。聖宋撰遺「近―レ獲二潤筆二百千一」

【撰文】ブン　文章をえらびつくる。又、其の文。

【撰曆】レキ　こよみをつくる。劉歆文「張蒼―、皆成二于帷幕一、貫二于王門一」

【撰錄】ロク　えらびしるす、えらび集めて著錄する。南史、王韶之傳「當時詔命表奏輒手自書寫、泰元末安時、大小悉―」

【撹】ジン　サン　セン　寒　覃　豐

○とる（取）○つまむ（摘）つまみとる。○ひきさく（搴）

【搉】シャ 馬 俗に扯に作る

○ひらく（開）○さく（裂）

【搉裂】ヒキサク 手にてひき裂く。梼発臣詩「日長ーー防二嬰孩一」＝扯裂。

【撜】㊀シュウ ㊁タウ 庚 篠

㊀たすく、すくふ。＝佑。㊁ふる（觸）＝振。

【撕】㊀セイ ㊁シ 支 齊

㊀ひっさける（提）○提ーは手を携へる。轉じて教へ導く義〔漢書、賈誼傳、註〕㊁さく（析）手にて物を裂く。＝斯。

【撋】㊀ゼン ㊁ジュン 先 眞

㊀くだく（摧）○もむ、もみくだく。㊁ぬぐふ（拭）

【撩】リョウ 篠

○おさふ（抑）へりくだる、抑損する。○法度にしたがひ、趨ムカフく。○くじく（挫）○ーーはあつまる貌。甘泉賦「齊總總以ーー、其相膠葛兮」

【撩節】節制をなしおさへる。抑損して節制する。曲禮「君子恭敬ーー、退讓以明レ禮」

【撱】㊀タ・ダ ㊁キ 紙 支

㊀せまくながく（狹長）して四角を去る。㊁すてる（棄）

【撐】タウ 庚 撐は俗字

○つっぱり、ひかへばしら（斜柱）○強ひてささへる（勉強支持）「支ー」○あく（飽）○さをさす（棹）舟を行る。朱熹詩「破月衝煙取次ー」

【撐拄】ささふ。ささへ。林景熙詩「天地綱常要二ーーー一」

【撐刺】舟にさをさす。韓琦詩「縱レ賞緩二ーーー一」

【撐船】船にさをさす。楊萬里詩「峽裏ーレー更不レ行」＝棹舟。

【撐腸】はらに飽き足る。蘇軾詩「不レ願ーレー拄レ腹文字五千言、但願一甌常及睡足日高時」

【撐突】ささへつく。杜甫、觀二打魚一詩、ーニー波濤一挺又入」

【撐】撐（前條）の俗字。

【撞】タウ ドウ 江 絳

○つく（突）つきあたる（衝突）

○つきうつ（擊・擣）「擊ー」「衝ー」

同訓異義 撞・衝・突・搗・撐・舂・搶の別は衝（行部九畫）の條を見よ。

【撞球】玉突の遊戯。＝圖彈子。

【撞壞】つきくづす。晉書、欲レーニーー之二邪」

【撞撃】つくと、うつと。論衡「夫以レ鐘撞レ鐘、以レ算撃レ鼓、不二能鳴一者、所レ用二ーーー之者小也」

【撞鐘】「善待レ問者如レーレー」

かねをつく。禮・學記

【撞搏】うちあたる。韓愈詩「峽山逢二颶風一、雷霆助二ーーー一」

【撞撐】物をつき撃つ貌。李益詩「仙鐘ーー迎二海日一、海中礙礙三山出」

【撞著】○つきあたる。○あとさきがそろはず。著は助字。禪林類聚、看經門「須彌山高不レ見レ嶺、大海水深不レ見レ底、簸レ土揚レ塵無レ處レ尋、回レ頭ーーー自家底」

【撞突】つきあたる。王起任賦「若乃飛二鸞刀一以ーーー」

【撞入】つきいる。漢書、樊噲傳「噲直ーーー」＝突入。

【撞木】しゅもく、鉦をならすに用ふる丁字形のつち〔文獻通考〕

【撓】㊀ダウ 巧 ㊁カウ 篠 ㊂ゼウ 四 ㊃ゼウ 五 ㊄ゲウ 六 蕭 蕭 蕭

㊀うごく、うごかす。○みだす（擾）みだる、みだれ敗れる。左、成二「師徒ー敗」㊁かく（搔）○つまむ（抓）○かがむ（屈）まがる（曲）「屈ー」「折ー」正しからず。呂覽、知度「枉辟邪ーの人至矣」○ためる、正當にせず（矯）史、酷吏傳「ー法治之」○よわし（弱）㊂みだる、かきまぜる（攪）㊃たわむ（揉）○うごく（動）㊄めぐる。＝繞。㊅ー挑ーはめぐりまとふ（宛轉循環）莊、大宗師「ー挑無極」

【撓曲】たわめまげる。＝曲撓。

【撓屈】たわめかがむ。秦觀文「不レ爲二利害之所一ーー者、所謂人節也」＝屈撓。

【撓結】情をまげる。後漢書「ーレー則違二廢禁典」

【撓擾】くるしめきわがす。後漢書、仲長統傳「ーニー百姓」＝擾亂。

【撓折】くじく。後漢書、袁紹傳「ーニー棟梁、孤二弱漢室一」＝挑折、撓屈。

【撓直】すぐなるものをたわめ曲げる。荀悅文「ーレー爲レ曲、斫方爲レ圓」

【撓敗】みだれやぶれる。字解參看。

【撓亂】みだる。左、成十三「ーニ

ー我同盟一」＝擾亂。

【搭】搭（手部十畫）に同じ。

【撣】㊀タン ㊁ダン 寒 旱

㊀ふる（觸）○はじく、塵を拂ひ去る、彈に通ず。㊁ひっさけもつ（提持）○ーーはいましむ（儆戒）又、つつしむ（敬）

【撣撣】提げ持つ。又、いましめつつしむ貌。太玄經「何レ編滿レ肩、提レ編ーー」何は荷。

【撣】タン 寒 翻

さぐる。＝探。

【撤】テツ 屑 古、徹に通ず

○すてる（捨）のぞく（除去）論、鄉黨「不ー」黍食」やめにする、廢する「廢ー」「ー去」○とりのける「ー膳」○ひらく（發）○ぬく（抽）○はぐ、むく（剝）

【撤去】とりのける。宋史「每レ至レ官、有司例設二供帳一、悉命ーー」＝撤廢。

【撤回】一度出したるものを取戻す「職案をーーす」

【撤饌】膳にそなへたる供物をさげる。

【撤退】すてて其の場をしりぞく。

【撤廢】とりのけやめる。

【撤備】そなへの兵をひきあげる。唐書、回鶻傳「閉レ營ーレー、乃縱二擊之一」＝撤兵。

【撤兵】出陣せし兵をひきあげる。

【撤簾】天子年幼なれば、太后簾を垂れて政を聽く、既に政を天子に歸すをーーといふ。垂簾之政參看。

【撚】デン 銑

○ひねる、指にてひねる、ねぢる、よりをかける。○ふみにじる（蹂）○したがふ（從）○とる（執）○琵琶を彈く指の運びかた。白居易詩「輕攏慢ー抹復挑」

【撚紙】こより。＝捻紙・撚子。

【撚絲】ひねりいと。＝縒絲。

【撚斷】ひねりきる。盧延讓詩「吟成一箇字、ーー數聚眉」

【撚抹】ひねりなでる。葛長庚詩「挑攏ーー緩復急」

【播】㊀ハ ㊁ハ 箇 歌

㊀しく（布）しき及ぼす。徧く施行する「流ー」「傳ー」「弘ー」○まく、たねをまく、うう（種植）「ー種」○あぐ（揚）左、昭四「ー於諸侯」○のぶ（舒）○はなつ（放）○すてる（放棄）周語「ー其淫心」○ちらす（散）○うつる（遷）のがる（逋）さすらへる。書、大誥「伐殷逋ー臣」○唐の州名、今の貴州遵義縣の西。韓愈、柳子厚墓誌銘「劉禹錫當謫「州」㊂しく（布）○あふる、ゆりうごかす（搖）論、微子「ー蠢武」＝簸。○圖音バン

ー州は播磨。

同訓異義 播・布・敷・鋪・蒔・席の別は布（巾部二畫）の條を見よ。

【播越】所を失ひて遠方ににげさすらふ。左、昭二六「不穀震盪ー寡在二荊蠻一」＝播蕩・流離。

【播棄】すてる。禮、泰誓「力行無レ度、ーニー黎老」

【播化】廣く萬物を生ずる。魏徵賦「覽二大鈞之ーー、參二草木之殊類一」

【播告】ひろくつげ知らす。書、盤庚「王ーニー之」＝布告。

【播灑】まきそそぐ。又、まきちらす。管子「掌上則ーー」

【播種】たねをまく。孟、告子「今夫蒔麥ーレー而耰之」

【播植】まきうゑる。南史、陳霸洗傳「性好ーーー、躬勤二耕穡一」

【播殖】まきうゑる。國語「周棄ーニー百穀一」＝播植。

【播選】遠方にさすらふ。韋嗣立詩「相逢共ーー」＝流離遷徙。

【播蕩】さすらふ、流浪する。左、襄十二五「夏氏之亂、戎公ーーー」＝播越。

【播揚】しきあがる。嘯賦「散二滯積一而ーー」

【撲】㊀ハク・ボク 屋 覺

㊀うつ（擊）たたく「亂ー」○うちあふ（相撲）○たふす、たふる（踣）㊁つる（杖）申鑒「桎梏鞭ー、以加二小人一」＝扑。○かすめうつ（拂著）岑參詩「花ー玉缸春酒香」○すこしうつ（小擊）○未だ調習せず。荀、臣道「若馭ー馬一」○圖相ーは角觝。

同訓異義 撲・打・拍・搏・拊・征・伐等の別は征（彳部五畫）の條を見よ。

【撲鎩】かがみをなげうつ。魏志、夏侯惇傳、注「軍中號レ惇爲レ盲、惇惡之、每照レ鏡悲怒、輒ーニー於地一」

【撲螢】ほたるをうちてとる。高觀國詩「ーレー涼夜沈沈月」

【撲朔】つまづく貌。蹼する。木蘭辭「雄兔脚ーー、雌兔眼迷離」

【撲殺】うちころす。唐書「何不レーニー此孽一」

【撲打】うつ。南史「左右失レ旨者、手加ニーー一」＝打撲。

【撲盪】ボクタウ うちたひらげる。魏志、「遂駐二大軍一、分レ兵一一」

【撲殄】ボクテン うち滅ぼす。唐書、李晟傳「賊既敗、當二乘レ機一一一」。撲滅。

【撲滅】ボクメツ うちこわす。俗齊巳詩「到頭須二一一一、卻散與二仙人一」

【撲焉】ボクエン 未だ調習ならざるうま。字解參看。

【撲罰】ボクバツ うちたたく刑罰。後漢書、左雄傳「孝明皇帝始有二一一一、皆非二古典一」

【撲筮】ボクセイ ふでをなげうつ。韓愈詩「推レ書一レ歎二旅慮一」。擲筮。

【撲滿】ボクマン 錢を貯ふる器、土にて作り、口小にして、入るれば復た出だす可からず、錢滿つれば撲ち毀して之を出だす。堅瓠集「一一即今小兒積受鏹、以レ土爲レ之、畜レ錢之具、可レ入不レ可出、滿則撲之」

【撲滅】ボクメツ うちほろぼす。又、撃ち消す。書、盤庚「若二火之燎二于原一、不レ可二嚮邇一、其猶可二一一一」。撲殄。

【撲落】ボクラク 散り亂るる貌。成彥雄詩「鴉兒鯉魔喚不レ醒、滿窗一一銀蟾影」

【撥】

㊀ ハツ・バチ 月屋
㊁ ヘツ

㊀のぞく（除）すてる。○をさむ（治）公羊、哀十四「一一亂世、反諸正」○ねぢひらく（捩開）○はねひらく、發揚する。曲禮「衣冉一」○はなつ（發）○めぐらす（轉）○たゆ（絕）○はらふ（拂）○そる（反）はねかへる「反一」○あぐ（揚）○ばち、絃を鼓する具。白居易詩「曲終收二一當二心畫一」○ひつぎなは（紼）○ひく、かきならす「弄一」㊁たて（大楯）史、孔子世家「矛戟劍一」。敵。

【撥棄】ハツキ はらひすてる。杜甫詩「要撃隔二軍壘一、一一不レ擬レ道」

【撥去】ハツキヨ のぞき去る。漢書、司馬遷傳「秦一一二古文一、焚二滅詩書一」

【撥剔】ハツテキ かきのける。崔道融詩「酒醒一一殘灰火」

【撥鐙法】ハツトウホウ 書法の名、鐙を挑かるが如く、急ならず徐ならざる義。鐙は燈火。樓鑰詩「李王深得一一、筆力遒勁雄二江東一」。一說、鐙はあぶみ、人の竝びて馬に乘り、鐙の相犯さざる如くする義。廣川書跋。

【撥忙】ハツボウ 忙しき事を拂ひ除く。樂萬里詩「一一也到池亭上、昨日卷荷今蕊開」

【撥剌】ハツラツ 弓をひき張る貌。張衡、思玄賦「彎二威弧之一一一兮」

【撥亂反正】ハツランハンセイ 亂を平げ除きて治平にかへす。漢書、高帝紀「帝起二細微一、撥二亂世一、反二之正一、平二定天下一」

【撥簸】ハツハ すだれをかかげる。白居易詩「香爐峰雪一レ一看」

【撫】

ブ 麌 通じて拊に作る

○なでる（摩）なで安んずる、愛しいたはる「愛一」「存一」「綏一」「恩一」魯語「鎭一敝邑」○なぐさめる（慰勉）「慰一」○よりたもつ（據有）○したがふ（循）○もつ（持）○うつ（拍）○よる（據）よりかかる。曲禮「國君一式」○おほふ（掩）○おさへる（按）

【撫安】ブアン なでやすんずる。吳志「孫策命レ懋、往一一二之一」

【撫慰】ブイ やすんじなぐさめる。吳越春秋「修レ德行レ惠、一一百姓一」。綏慰・撫勞・慰撫。

【撫有】ブイウ なで安んじてたもつ。穀梁傳、注「臨一一二之一也」

【撫育】ブイク いつくしみやしなふ。後漢書、齊武王傳「一一恩愛甚篤」。撫字・撫養。

【撫鼓】ブコ むねをなでさする。陸機文「一レ一論レ心、有レ時而謬」

【撫掌】ブシヤウ てすりをなでる。王褒賦「一レ一兮遠望、念レ君兮不レ忘」

【撫鞠】ブキク なでやしなふ。潘岳文「嗟爾毋氏勉勞一一」。撫育。

【撫琴】ブキン ことをひく。王粲詩「獨夜不レ能寐、攜レ衣起一レ一」。撫箏。

【撫御】ブギヨ いたはりてすべ治める、いつくしみ使ふ。宋史、高繼勳傳「性謙有二機略一、善一一二士卒一」。撫馭。

【撫馭】ブギヨ いつくしみてつかふ。いたはりつかふ。南史、廬欽傳「善一一得二人死力一」。撫御。

【撫訓】ブクン なでをしへる。北史、李賢傳「一一二諸弟一、友愛甚篤」。撫教。

【撫軍】ブグン ○軍の總督、太子の稱。左、閔二「太子君行則守、有レ守則從、從曰二一一一、守曰二監國一、古之制也」○將軍の名號。魏、司馬師を以て一一大將軍と爲す。○明清の世、巡撫の別稱。

【撫教】ブケウ なでをしへる。史記「一一萬民一而利二海之一」

【撫結】ブケツ したしみて交をむすぶ。後漢書「一二一雄傑、慢二嘲羌虜一」

【撫劍】ブケンフス けんをなでる。孟、梁惠王「夫一レ一疾視曰、彼惡敢當、我哉、此匹夫之勇、敵二一人一者也」

【撫絃】ブゲンフス 琴瑟をかなでる。淮南子「搏レ琴一レ一」

【撫箏】ブサウ 琴をかなでる。晉書、桓伊傳「一レ一而歌二懇詩一」。撫琴。

【撫字】ブジ なでいつくしむ、字は愛育。後漢書、程姜慈愛溫仁、一一益篤」。撫育。

【撫柔】ブジウ なでやすんずる。柳宗元文「統二制三軍一、一一萬人一」。撫和・撫輯。

【撫緝】ブシフ 次條に同じ。五代史、韓建傳「一一二兵民一」。安緝。

【撫輯】ブシフ なでやはらげる。宋史、理宗紀「深入二蠻地一、一一有レ方」。撫和・撫柔。

【撫心】ブシン 心をなでをさめる。宋玉賦「一一一定氣」

【撫掌】ブシヤウ 手のひらをうつ。庾信文「陸士衡聞而一一、是所二甘心一、張平子見而慚之、固其宜矣」

【撫恤】ブジツ やすんじめぐむ。北史、原賀傳「有二惠政一、善一一」。撫卹。

【撫循】ブジユン なでしたがへる。撫撫。

【撫軾】ブシヨク 車の前のよこぎをなでて操る。王褒文「一レ一歎兮作レ詩」。撫式。

【撫綏】ブスイ 民をなでやすんずる。書經「一一二萬方」

【撫世】ブセイ ○世人をなぐさめ安んずる。莊子「以此進爲而一レ一、則功大名顯」○世を掩ふ。荀、寄坐「勇力一レ一」。蓋世。

【撫接】ブセツ したしみちかづく。宋書、袁顗傳「惟賦レ詩談レ義而已、不レ能一一二諸將一」

【撫存】ブソン なでいつくしむ、存は慰問ふ。後漢書、張純傳「修二復祖宗一一二萬姓一」

【撫鎮】ブチン なでしづめる。北史「選二豪右一、爲二守令一以一一之一」。撫撫。

【撫定】ブテイ やすんじしづめる。漢書「項羽立二韓公子橫陽成一、爲二韓王一、欲三以一一二韓地一」。撫鎭。

【撫納】ブナフ なでてとりいれる。吳志、步騭傳「承レ制遣レ使、宣レ恩一一」

【撈】

ラウ 豪 號
レウ

㊀とる（取）水中に入りて物をとる「漁一」㊁とる、鉤にてひっかけて取る

【撈魚】ラウギヨ うををすくひとる。漁撈。

【撈採】ラウサイ 水をくぐりて物を取る。元史、食貨志「聽二民於二湯村直沽口一一一一」

【撩】

レウ 蕭

○をさむ（理）をさめ撃へる。○なぶる、いどむ、からかふ（挑弄）○かすめとる、かすむ（掠取）○みだる。○繚。

【撩戰】レウセン 戰をいどむ。魏志、龐德傳「但持二長矛一一一」。挑戰。

【撩撥】レウハツ つまみとる。元稹、春詩「一一芳情遍、搜求好處終」

【撩亂】レウラン みだれあふ貌。元稹詩「關雎一一驚」。繚亂・紛亂。

【撩理】レウリ をさめととのふ。段玉裁文「理レ亂謂二之一一一」。整理・圖料理。

十三畫

【撝】

㊀ カツ 黠 葉
㊁ エフ

㊀けづる（刮）○縅一は屈折する貌。○むちうつ（撻）㊁箕の物を掃き入れる處（箕舌）

【撼】

カン 感

○うごく、うごかす（搖）ゆるがす「震一」韓愈詩「蚍蜉一一大樹」。撼。○さわがす、ごたつかせる。宋史、蘇軾傳「元豐舊黨、多起二邪說一、以搖一一在位一」○心をうごかす、感に通ず。

同訓異義 撼・搖・動・蕩の別は搖（手部十畫）の條を見よ。

【撼膝】カンシツ ひざをゆりうごかす。莊子、「陋巷窮時、聊一一レ一以書レ紳」

【撼動】カンドウ ゆりうごかす。撼搖。

【撼頓】カントン うごきたふれる、動搖顛躓。韓愈文「天雪冰寒傷レ汝、暴露一一險阻、不レ得二少息一」

【撼琴】カンキン うごかしせまる。巖下放言「排二雲雨一、一一二牛空一」

【撼鈴】カンレイ すずをならす。顧況、彈二箜篌一歌「一絃一絃如レ一一」

【撼龍撥沙】カンリヨウハツシヤ をかを動かし沙を揚げる、墓所の地を相する義、龍は堅に通ず、丘阜をいふ、山陵の形勢に九星を配して吉凶を卜する、其の事を記したる書を撼龍經（一卷）といふ。

【擒】

キン 侵 通じて禽に作る

○とりこ、とらはれ（捕虜）「就一一」○とらふ（捉）「縛一」とりこにする。いけどる「生一」漢書、春秋「七縱七一」

同訓異義 擒・禽・囚・俘・虜の別は囚（口部二畫）の條を見よ。

【撿斬】とりこにすると、きり殺すこと。又、とらへて斬る。宋史、太祖紀「―二―三十八人」＝捕斬。

【撿經】とりこにすると、ゆるすこと。李益、鵰鴨賦「透爲二―一、更相觸撟」

【撿捉】とらふ。爾雅、釋鳥、疏「鳥―力小、可二―一而取之」

【撿賊】賊をとらへる。杜甫詩「射人先射馬、―レ―先擒レ王」

【撿拷】とらへる。葉適文「皆以二鍰殺刑獄搏擊―一」爲レ職」

【撿縛】いけどりしばる。金剛經鳩―摩羅―二―五六人」＝捕縛・縛擒。

【據】キョ

圖 通じて据に作る

○よる(依)「依―」よりかかる。○たよる(依託・賴)論、述而「―於德、依於仁」○より保つ「割―」○よりどころ「根―」「典―」「援―」○まもる(拒守)史、趙奢傳「先―北山上者勝」○おく、おさへる(按)○やすんず(安)○ひく(引援)證を引く「證―」○圖よんどころ。よんどころなしは、やむを得ざる義。

同訓異義 杖持なり、手に从ひ虡の聲、俗に右旁を處に作るは非。

同訓異義 據・寄・憑・凭・賴・仗・倚等の別は寄(六部八畫)の條を見よ。

【據有】よりたもつ。

【據論】正道にしたがひよる。唐書、孫伏伽傳「至誠據倚―レ、懇切指二陳失一、無所諱」＝仗義。

【據火】螢の異名。本草「螢火、一名―一、一名挾火」

【據經】聖人の經書を根據とする。宋書「―レ―斉議」

【據膝】ひざにもたれよる。莊子「左手―レ―右手持レ頤」

【據城】城にたてこもる。

【據軾】車のまへの横木による。莊子「―レ―低レ頭」

【據槊】腰掛にもたれよる。唐書「初義琰使二高麗一、其王―レ―召見」

【擐】クワン

圖 貫

つらぬく(貫)きる、主として甲冑をきるにいふ。

【擐甲】甲冑をきる。左、成二「―レ―執レ兵」

【擎】ケイ

庚

○ささぐ(捧)○あぐ(擧)「提―」○ゆだめ、弓を正しく矯める器。

【擎天】樹などの高くそびゆる義。宋史、劉永年傳「生四歲、仁宗使レ賦二小山詩一、有二一柱―レ―之語一」

【撤】

擎(前條)に同じ。

【擕】

攜(手部十八畫)の俗字。

【擒】

攜(手部十八畫)の俗字。

【撽】ケキ カク

敖 通音

うつ(擊)莊、至樂「―以馬捶」

【擖】ケキ

敖 通音

○うつ(打・撲)たたく(扣)書、金縢「―石拊石」○うちならす「―鼓」「―柝」「戛―」○ころす(殺)せめころす(攻殺)「攻―」「突―」史、高祖紀「急―之勿―失」○ふれる(觸)「目―」○あたる、抵觸する「肩摩轂―」○おそふ(襲)○ささふ(支)○くじきおさへる(摧抑)○なじり責める「駁―」漢書、翟方進傳「搏―豪强」○やいば(兵刃)○男のかんなぎ(男巫)＝覡。

同訓異義 擊・打・撲・征・伐・討等の別は征(彳部五畫)の條を見よ。

【擊蕙圖】宋の司馬光が、幼時羣童と戲れ居りし時、一兒誤りて水甕中に墜ちしかば、直に甕を擊ち破りて、之を救ひたる故事を畫きたる圖(冷齋夜話)

【擊毬】てまりをうちなげて優劣を競ふ技。唐書、讓皇帝憲傳「具レ樂縱飲、――鬪雞爲レ樂」＝打毬。

【擊琴】ことをかなでる。皮日休詩「天籟如レ―レ―」＝鼓琴。

【擊磬】磬をうつ。論、微子「――蹇入二于海一」

【擊劍】劍をつかふわざ、劍術。漢書、司馬相如傳「少時好二讀書一、學二――一」

【擊鼓】つづみをうつ、進軍の時に鼓をうつ。詩、衞風「――其鏞、踴躍用レ兵」

【擊殺】うちころす。魏志、許褚傳「―二―他等」

【擊斬】うちてきりころす。史、高祖紀「乃前拔レ劍―二―蛇」＝擊殺。

【擊攘】古の遊戲、攘は木にて造り、形履の如し、其の一を地にたて、三四歩を去り、他の一攘にて之をうつ。史、五帝紀「帝遊二康衢一、老人―レ―而歌二于路一」

【擊攘集】二十卷、宋の邵雍の詩集、其の詩俗流に超脫す、寒山拾得より出づといふ。

【擊攘】うちて追ひはらふ。＝擊退。

【擊刺】○兩軍が戈矛を以て相攻める。○劍を用ひて人をさし殺す。又、其の術、劍術。晉書、劉聰傳「十五學二―一、猛臂善射」＝擊劍。

【擊節】ひやうしをとる。劉都賦「巴

姬彈レ絃、漢女―レ―」

【擊鮮】獸の肉を屠るをいふ。鮮は新殺の肉。晉書、孝友傳「――就養、盡禮忘レ劬」

【擊鼓】賊をうつ。文天祥、正氣歌「或爲二―レ―笏、逆豎破頭裂」

【擊退】うちしりぞける。＝擊攘。

【擊柝】ひやうしぎをうちて、夜まはりする。孟、萬章「抱關―レ―」

【擊斷】○刑罰をほしいままにする。史、范雎傳「涇陽華陽、―レ―無レ論」○うちてたちきる。史、仲尼弟子傳「―二―子路之纓」」

【擊筑】筑(樂器の名)をうち鳴らす。戰國策「高漸離―レ―、荊軻和而歌」

【擊沈】敵の軍艦などを大砲にてうちしづめる。＝擊沈。

【擊擣】うつ。韓愈詩「文章自娛戲、余石日―レ―」

【擊破】うちやぶる。漢書、高帝紀「漢王引レ兵、北―二―絲公」

【擊搏】うつ。宣和畫譜「如レ畫二鷹隼一、使二人見レ之、則有二―レ―之意一、然後爲レ工」

【擊缶】ほとぎをうつ。史、淳祖如傳「秦王爲―レ―」缶一に瓿に作る。

【擊拊】樂器などをうちたたく(唐書、禮樂志)＝擊搏・擊拍。

【擊拍】擊拊に同じ(「蘇軾、石鼓歌」)

【擊波】うちほろぼす。史、始皇紀「擊レ兵―二―之」＝討滅。

【撿】ケン

球 檢に通用す

○つかぬ(束)しめくくる、とりしまる。○かんがへる(按)○とどむ、とらへる(拘)○あぐ(擧)○かぎる(局)○さがす(按)○はかりかんがへる。晉書、周顗傳「王導料―中書故事」○めぐりしらべる(巡察)○いがた(模型)

【撿按】しらべる。

【撿校】○唐代の官名(唐書、百官志)＝檢校。○圖法事を點檢する僧職。○古の官名。

【撿束】○とりしまる。○警察官が公力を以て一時人の自由を束縛する。

【撿點】心をしめくくりていましめる。魏志、賈逵傳、注「告二子弟、使二各自―一」

【操】

㊀ サウ・ソウ ㊁ サウ・ソウ

豪 號

㊀とる(把)もつ(持)手にとりて持つ「―刀」○あやつる、はたらかせ使ふ「―舟」㊁みさを、堅く執り守る所の志行「貞―」「節―」「松柏―」「歲寒―」○おもむき(風調)南史、袁粲傳「清整有風―」○琴の曲調「琴―」○圖人を程よくあやなす。又、あやつり芝居。

同訓異義 操・取・執・秉・把・採・撮・捕・捉等の別は取(又部六畫)の條を見よ。

【操韻】みさをと氣韻。宋史、文同傳、同以レ學名レ世、――高潔、自號二笑笑先生一」＝操守。

【操竿】竿は笙の類、それをとる、齊の宣王竽を好む、故に――は君の好に適する義とす。王安石詩「―レ―入レ齊人、雅鄭亦復殊」

【操行】おこなひ、みさを。南史「―爲二鄉里所稱一」＝操履・素行。

【操琴】ことをとる。嵇康文「舅姑若命二之鼓一琴、必正坐―レ―、而奏レ曲」

【操業】みさをと、わざと。晉書、猶當二崇一其―一、以弘中風尚上」

【操堅】みさをがかたい。東方朔文、「操愈堅而不レ衰」

【操檢】心のしめくくり。南史、孝義、何子平傳「幼持二―一、敦厲二名行一」

【操觚】觚は木の方なる札、古、事を記すに用ひしもの、故に筆をとり文を作る義。陸機、文賦「或―レ―以卒爾、或含毫而遐然」

【操作】はたらく、仕事をする。後漢書、梁鴻傳「著二布衣、――而前」

【操舟】ふねをあやつる。莊、達生「津人―レ―若レ神」

【操柑】かぢをあやつる。後漢書、袁紹傳「將軍兄弟―レ―者也」

【操心】自ら其の心を持ち守る。孟子「其―レ―也危、其慮レ患也深」

【操舍】とりて堅く守ると、すつると。孟、告子「操則存、舍則亡、出入無レ時、莫レ知二其鄉一、惟心之謂與」

【操尙】品行がすぐれて高し。晉書、羊祜傳「祜執レ謙沖虛、―レ―清遠、雖高而體卑、位優而行恭」＝節操。

【操守】とりまもる。又、みさを。唐書、裴度傳「神觀邁爽、――堅正」＝操持・操韻。

【操縱】あやつる、操はとる、縱ははなつ、巧に人を使ふ。

【操策】書きつけをもつ。陸雲賦「―レ―染レ翰、思涩情煩」

【操柁】かぢをあやつる。晉書、夏統傳、―レ―正レ艫、折二旋中流一」

【操揺】うつ。宣和畫譜「――之次、忽見二浮雲在レ空」

【操持】とりまもる。李商隱詩「李杜――事略齊」＝操守・操植。

【操植】みさを、植は意志。晉書、裴湛傳「湛少有二――一」＝操守。

【操學】たづなをとる。後漢書、靈帝紀「帝駕二四驪一、躬自―レ―」

【操筆】ふでをとる。後漢書「陳延尉宜二便―レ―」

【操矛】ほこをとる。後漢書、鄭太傳「關西諸郡、婦女猶數レ戰―

ー挾ー弓負ー矢」＝執矛・挾矛。

【擇索】ケツサクスイ　すきを取る。徐穉文「有客能ーー、而捨二其良田一」

【擇履】ケツリ　おこなひ。履はふみ行ふ。北史、庾質傳「ーー貞懿、立言忠鯁」＝品行・操行・操守・素行。

【擇練】ケツレン　兵をねる（調練）＝練兵。

【擇弄】ロウ　あやつり弄ぶ。後漢書、竇武傳「ーニー國權、濁二亂海內一」

【擢】サク　ショク・ソク　沃　覺

○さす、水中の魚などをやすにてつきさして取る。莊、則陽「冬則ー鼈於江」＝籍。○やす、魚を刺して捕ふる具。

【擬】セツ　屑

かぞへる（數）＝擇。

【擅】セン　諫

○もっぱら（專）○ほしいまま、ほしいままにする、わがまま。己の意に任せて事を處置する「專ー」「獨ー」「ー權」○よりたもつ（據有）

同訓異義　擅・縱・横・放・肆・恣の別は縱（糸部十一畫）の條を見よ。

【擅劫】セツコウ　思ふままにおびやかす。漢書、高帝紀「ーニー諸侯兵、入ー關」

【擅權】セツケンシイマニス　權力をほしいままにする。漢書「振ー政ーレー、而背二宗室一」＝專權・擅柄。

【擅殺】セツサツ　ほしいままにころす。宋史、仁宗紀「詔獲二劫盜一者、奏裁毋二ーーー」＝專殺。

【擅志】シ　ほしいまま。淮南子「無二ーー之志一、無二矜伐之色一」＝專恣・放恣・放肆。

【擅赦】シヤ　ほしいままにゆるす。隋書、權武傳「酒酣遂ーーニ所部內獄囚一」

【擅斷】ダン　ほしいままに事をとりきめる。陳琳文「ーニー萬機」＝獨斷。

【擅長】チヤウ　獨り其の技に秀でる義。

【擅場】ジヤウ　場中敵なき第一人者、すぐれたるうでまへ。張衡、東京賦「秦政利臂長距、終得二ーーー」

【擅朝】チヤウ　朝廷の權をほしいままにする。漢書、成帝紀論「外氏ーレー」＝專朝。

【擅發】ハツ　ほしいままに兵を出す。五代史「太祖以二其ーーレ兵授二矢國威一、遣二劉捍一代二重師一」

【擅美】ビ　うつくしき名をひとりにて占める。宋書、謝靈運傳「標レ能ーレー、獨映二當時一」

【擅柄】ヘイ　權力をほしいままにする。道德指歸論「專レ權ーレー、人之所レ長也」＝擅權。

【擅命】メイ　命令をほしいままにして節制を受けざる義。三國志「阻レ兵ーレー、人自封殖」

【擅利】リ　利益をひとりにてほしいままにする。史、貨殖傳「得二丹穴一而擅二其利一數世」＝專利。

【擅横】ワウ　ほしいまま。擅恣横暴。

【撾】タ　麻

○うつ（擊）「ー擊」「亂ー」「連ー」○たたく、なぐる。魏志、太祖紀「ー二婦翁」○拳ーは鼓を擊つ。

【撾鼓】コウ　つづみをうつ。岑參詩「軍中置レ酒夜ーレー、錦筵紅燭月未レ午」

【撾殺】サツ　うちころす。吳志、薛綜傳「ーニー主簿、仍見二鞭逐一」＝撲殺。

【撾達】タツ　うつ。魏書、沈文秀傳「文秀曰、二國大臣無二相拜之禮一、白曜忿レ之、乃至ーーー」

【擇】タク・ヂヤク　陌　藥

○えらぶ（選簡）善きものをよりとる「揀ー」「選ー」「簡ー」「鉴ー」「捨ー」○よりわける（別）孟、梁惠王「則牛羊何ー焉」○えらび。

同訓異義　擇・撰・選・簡・揀の別は撰（手部十二畫）の條を見よ。

【擇友】タク　友をえらぶ。大戴禮「上親レ賢、則下ーレー」＝擇交。

【擇交】コウ　○交るべき國をえらぶ。史記「安民之本、在二乎ーー」○交るべき友をえらぶ。白居易詩「乃知ーレー難、須レ有二知レ人明一」

【擇行】コウ　擇言ーーを見よ。

【擇吉】キツ　よき日をえらぶ。史記「ーニー月日一」婚嫁喪葬等の日をえらぶにもいふ。

【擇鄉】キヤウ　鄉の善惡をえらぶ。荀、勸學「君子居必ーレー、遊必就ー士」＝擇處・擇里。

【擇賢】ケン　賢者をえらぶ。左傳「年均ーレー、義均則卜、古之道也」＝簡賢。

【擇遣】ケン　えらびて遣す。蘇軾文「朝廷ーー大臣爲二劉人所一愛信一者」

【罔レ有二擇言】ケンタクケン　言語皆法にかなひて選び拔くべきものなし。書、呂刑「罔レ有二擇言在レ躬」

【擇言擇行】ケンタクケン　えらびぬくべき言行。孝經「非レ法不レ言、非レ道不レ行、口無二擇言一、身無二擇行一」無とは言行皆法にかなひて、えり拔くべきものなき義。

【擇種】シユ　たねをえりぬく。說苑「田者ーレー而種レ之」

【擇處】シヨ　居處をえらぶ。說苑「君子居必ーレー、游必擇レ士」＝擇鄉。

【擇善】ゼン　善をえらぶ。中庸「ーレー固執之者也」

【擇レ能】ノウ　才能ある者をえら

ぶ。左傳「子產之從レ政也、ーレー而使レ之」

【擇拔】バツ　よりぬく。＝選拔。

【擇筆】ヒツ　ふでをえらぶ。廣川書跋「余求二前人論一書、必先ーレー、至二于動作皆得一如レ意、非レ是則未二嘗書一也」

【擇木】ボク　木をえらぶ。左、哀十一「鳥則ーレー、木豈能擇レ鳥」臣が主を擇びて仕ふるに喩ふ。新論「鳥有二ーレー之性一、魚有二選レ潭之情一」

【擇良】リヤウ　よきものをえらぶ。宋書、謝靈運傳「非レ龜非レ筮、ーレー選レ奇、觀レ榛開レ徑、尋レ石覓レ崖」

【擇鄰】リン　近所をえらぶ。景福殿賦「偉二孟母之ーーー」＝擇里。

【擇滅无爲】ムイジヤウ　佛三无爲の一。擇力所得の滅といふ義。大藏法數「擇卽揀擇、滅卽寂滅、謂離聞之人、用レ智揀擇、遠二離見思繫縛一、卽證二寂滅眞空之理一、是名二ーーー一」

【撻】タツ　曷

○うつ、むちうつ（打）杖・鞭などにてうつ「朴ー」「鞭ー」「捶ー」うたれる。書、說命「若ーニ于市一」○とし（疾速）詩、商頌「ー彼殷武」○弼の側の矢をあてがふ處、韋にて作る。

同訓異義　撻・拊・扑・捶・征・討・擊等の別は征（彳部五畫）の條を見よ。

【撻辱】ジヨク　むちうちはづかしめる。漢書「未三嘗ーニー人一」＝笞辱。

【撻笞】チ　むちうつ。白虎通「或曰、ーー之刑也」＝笞撻・扑撻。

【撻罰】バツ　むちうちつみする。又、其の刑罰。元稹詩「誅求與二ーーー、無二乃不二逡巡一」＝扑刑。

【撻戮】リク　うちてはづかしめる。周禮「ーーー而罰レ之」＝撻辱。

【擔】一タン　二セン　三タン　覃　豏　勘

㊀かつぐ、になふ、肩ににになふ。背ににになふは負。○轉じて自分にひきうける「ー任」○武ーは山名、成都城內の西北隅に在り。蜀志、先主紀「卽皇帝位於成都武ーの南」㊁かす（假）㊂にもつ（荷物）左、莊二「ー弛二于負ー」○か、荷物の數。湘山也錄「置二宮醮十一一爲レ贅」

【擔荷】タン　○にもつをになふ。管子「負ー任ーレー」○にもつ。

【擔架】カ　傷病者を載せて運ぶ具。

【擔笈】キフ　本箱をおふ。北史、高允傳「允性好二文學一、ーーレー負レ書」＝負笈。

【擔鼓】コウ　牽牛星の異名。爾雅、注「今荊楚人呼二牽牛星一爲二ーーー一、擔者荷也」

【擔屎漢】カンシレ　肥桶を荷ふ男、屎は糞、人をそしりていふ。大藏一覽「文殊普賢是ーーー」＝擔糞漢。

【擔當】タウ　擔任に同じ。

【擔任】ニン　責任を負ひて任務を引き受ける。又、其のうけもち。＝擔當。

【擔板漢】カンパン　板をになふ者の、一方は見ゆれども他方は見えざる如く、一を知りて、其の二を知らざる者に喩ふ。漢は男。碧巖錄「擔夫」フ　荷をかつぐ男。唐書、李白傳「見二公主ーー爭レ道」＝擔僕。

【擔負】フ　になふ。詩經「百祿是荷」毛傳「謂レーニー天之多祿」＝負擔・荷負。

【擔糞】フン　肥桶を荷ふ。南史、到溉傳「以二ーーー自給」

【擔保】ホ　ひきあて。抵當の物品。

【擔僕】ボク　荷物をになふしもべ。范成大詩「ーーー與夫盡勞悴」

【擘】ハク　陌　ヒヤク

○さく（裂）分け割く、つんざく（劈）○弓を張る。康熙字典「弓弩手張曰ー」○おやゆび（大指）轉じて一番すぐれたるもの。孟、滕文公「吾必以仲子爲二巨ー焉」

同訓異義　擘・劈・裂・割・剖・析の別は裂（衣部六畫）の條を見よ。

【擘畫】ハク　きりもりして處分する。

【擘裂】ハク　ひきさく、つんざく。孟郊詩「ーーー少室峰」＝劈裂。

【擘踐】セツ　つんざきつかむ。埤雅「羅遇レ人、則擘而攫レ之」

【擘窠】ハククワ　篆刻に用ふる書體。一說大いなる文字。淵鑑類函「顏眞卿請乞二御書題二放生池碑額一表曰、臣今謹據レ石ーーー大書一本隨レ表奏進」

【擘指】シ　おやゆび。爾雅、釋蟲、注「頭大如二人一ーーー」＝拇指・巨指。

【擘牋】セツ　紙を裁ちきる。北夢瑣言「羅紹威ーレー起草、下レ筆成レ文」＝擘箋。

【擘張】チヤウ　手にていし弓をはる。又、其のいしゆみ。漢書、申屠嘉傳、注「今之謂以レ手張者、曰ーーー」

【擘膚】フ　はだをつんざく。岑參詩「烈風擘二我膚一」

【擘柳風】フウ　春の疾風。風土記「河朔春時、疾風數日、一作三日乃止、曰二吹花ーーー一」

【擺】ハク　陌

てごたへ。

【擺撼】カン　射て物にあつる聲。張衡、西京賦「流鏑ーー」

【擺】一ヘキ　二キ　陌　錫

㊀うつ、むねをうつ（拊心）通

じて辟に作る。○かがむ、手足を屈折する。莊、馬蹄「擿―爲禮」＝擊。㊁さく（析）ひらく（開）

【擗摽】ハウ　むねうちてかなしむ。張協、七命「氣盡爲之―」＝辟摽。

【擗踊】ハウヨウ　甚だしくかなしみてむねをうち、をどりあがる。孝經、喪親「―哭泣」

【擇】　擇（手部十二畫）に同じ。

【擄】　擄（手部九畫）に同じ。

【擁】㊀ヨウ　㊁ヨウ　多　腫

㊀いだく、かかへる（抱）○おほふ（蔽）とりかこむ。○もつ（持）「―書」「―帚」○まもる（衛・護）たすける「―立」○くま（曲隈）○かこひ（範圍）○羣りしたがふ（羣從）㊁さへぎる（遮）ささへる（障）禮記「女子出門必―蔽其面」○ふさぐ、塞に通ず。

同訓異義　擁・抱・懷の別は抱（手部五畫）の條を見よ。

【擁閼】アツ　ささへとどむ、ふさがる。史、朝鮮傳「又――不通」＝壅塞・壅遏。

【擁箠】ヨウ　たすけそだてる、鞠は育。漢書、敍傳「―――孝昭」

【擁衛】ヨウイ　かばひまもる。後漢書、虞延傳「常懇三甲冑「―――親族」」

【擁護】ヨウ　たもちまもる。皇甫謐文「―――函夏」

【擁笏】コツ　しゃくをもつ。唐書「觀紫衣―」」

【擁劍】ケン　○劍を手にする。○はさみの偏大なる蟹。

【擁護】ゴ　とりかこみてたすけまもる。漢書、陳湯傳「郅支盤下漢―――呼韓邪」而不助」己」＝擁衛。

【擁膝】シツ　ひざをいだく。駱賓王詩「伏」枕憂思深、―」獨長吟」＝抱膝。

【擁樹】ヨウジュ　水をいだきかこむ。杜甫詩「返照入」江翻三石壁一歸雲―」失三山村」

【擁書】ショ　書物をかかへ持つ。蔡邕、楊復傳「―」抱」籍」＝藏書。

【擁書萬卷】マンガンショ　多くの書册を藏する。北史、李謐傳「丈夫――、何假三南面百城」」

【擁腫】ショウ　はれあがる、木のふしこぶなどにいふ。擁は臃の假借字。莊、逍遙遊「其大本―――、而不」中三繩墨」」

【擁篲】セイ　ははきをかかへもつ。漢書、高帝紀「太公―」迎」門卻行」＝擁帚。

【擁柱】チウ　はしらをいだく。史、齊世家「―」而歌」

【擂】㊀ライ　㊁ライ　灰　隊

㊀する（磨）みがく（研）物を研磨する。㊁石を上よりおとす。＝礌。○うつ（擊）莊、至樂「―以三馬捶」」○國する、すりつぶす「―鉢」

【擂鼓】コライ　つづみをうつ。＝擊鼓。

【擂槌】ツライ　すりこぎ、れんぎ。

【擂木】コギ　國れんぎ、擂鉢にて物をすりつぶす木棒。＝擂粉木。

【擂鉢】バチ　國物をすりくだくに用ふるはち。

【擄】ロ　麌　鹵に通ず

○う（獲）虜に通ず。○かすむ（掠）「―掠」

【擊】㊀エフ　㊁エン　琰　アフ　洽

㊀おさふ（按）一本の指にて按へる。＝擫。㊁もつ（持）

【擫】　擊（前條）に同じ。

【擫籥】ヤク　指にてふえをおす。南都賦「彈」琴―」、流鳳徘徊」

【擄】カウ　梗

手にてはなをかむ（手捻鼻膿）

【擱】カク　藥　閣の俗字

おく、さしおく。手に持ちし物を下に置く。

【擱筆】カクヒツ　ふでをさしおきて書きやめる。＝閣筆。

【擬】ギ　紙

○おしはかる（度）推測する。○かたどる（像）○まねる（摹倣）「模―」くらべる（比）「比―」○にる、まがふ（似）漢書、王孫宏傳「倫―於君」○なぞらふ、あてがふ。適用する「倫―」「準―」「―律」「―判」○欲する、爲さんとする勢を示す。

【擬議】ギ　おしはかる、裁度する。易、繫辭「―――以成三其變化」」

【擬絕】ギケツ　經書にまれて作る。擬は模擬。徐陵文「七十之歲、揚雄―――、六十之年、平津對策」

【擬古】コギ　古體になぞらへて作る「―――文」」　詩品新語「―――詩離三於近似」」

【擬作】ギサク　にせてつくる、まねて作る。又、其の作品。

【擬人法】ジンパフ　修辞法の一、無情の物を人類にみたてていふ法、竹を「此君」松を「十八公」又「花笑ふ」「鳥歌ふ」の類。

【擬態】ギタイ　動物學の語、己の身を保護せんために、他物の形態に擬似せしめる、即ち尺蠖ドリムシが樹枝の狀をなせる類。

【擬度】ギタク　なぞらへはかる。易、繫辭、疏「―――之而後言」＝度擬。

【擬定】ギテイ　かりにはかりてさだめる。

【擬把】ハ　わりあててとる。雜隱詩「―――金錢一醉三高譚」」

【擬判】ハン　假定の事實に對して如何に裁判すべきかを決斷する義。

【擬律】リツ　法律を事實にあてはめる。

【擧】　擧（日部十一畫）の本字。

【擦】サツ　黠

○さする。○なでる。摩の急なる發「摩―」

【擣】㊀ジュ　㊁ズキ　麌　支

㊀そむ（染）韓愈文「耳―目染、不學以能」㊁ひたす（揖）濡に通ず。○もむ。＝搗。

【擠】セイ　霽　齊

○おす（推）おしおとす。○おしのける（排）「排―」○おとしいれる（陷）韓愈、柳子厚墓誌銘「反―之又下石焉」○そこなふ（害）○おつ、おちいる（墜）左、昭十三「小人老而無子、知―于溝壑矣」

【擠害】ガイ　人をおとしいれそこなふ。元史「別兒怯不花傳與三阿魯圖一謀、――――」」

【擠陷】カン　惡意を以て人を罪におとしいれる。唐書、李泌傳「楊炎罪不―至死、杞―――之」」杞は盧杞。

【擠排】ハイ　おししりぞける。又、おしひらく。馮子振文「擠三斥日月、――――」極籠」」＝排擠。

【擠拘】キヨウ　人をおとしいれおさへつけて、進み登ることを得させぬ。唐書「當爲三張延賞一――、內怨望」

【擡】タイ　灰

○あぐ、もたぐ、もちあげる（擧）○うごかす（動）

【擡價】カイ　ねだんを高くする。

【擡擧】キヨウ　さしあげる、人物を拔きすすめる。元稹詩「大都只在三人――」」

【擡頭】タイトウ　文中にて貴人の姓名の上を一字分だけあけて尊敬の意を表する書式。明律附解「第一――、第二――」」

【擢】タク　覺　通音チキ

○ぬく（拔）○ひく（引）○ぬきだす（抽出）拔き出して登用する「拔―」「選―」「超―」樂毅、上書「―之于賓客之中」○ぬきんづ、獨り出づる貌。○あぐ（擧）○そびゆ（聳）高く立つ。班固、西京賦「―雙立之金莖」そばだつ。○さる（去）すつ（徹）

同訓異義　擢・挺・拔・抽・擢・脫○擢は同じものの中よりぬき出すなり。戰國策「擢三之乎賓客之中、而立三之乎羣臣之上一」○挺は自らぬけ出るなり、挺身逃亡は、獨り身をぬきて逃るなり。○拔はぬき出すなり、拔刺・拔擢などと用ふ。易經「確乎不可拔」○抽は引き出す意なり、抽斗は筆笥のひきだしなり。孟子「抽矢扣輪」○擢はしんをぬくなり。孟子「宋人有下擢三其苗一而長者上」擢刀も同じ。○脫はぬけてはだかになるなり、ぬぐと訓む、蟬脫殼の類。

【擢擧】キヨ　ひきぬきてあげ用ふる。＝擢擢。

【擢賢】ケンケン　賢者をぬき出し用ふる。後漢書「――子衆愚之中」」

【擢秀】シウ　○人にすぐれひいでる。又、其の人。徐勉文「雄州――、蒭冠

○手　部　（十四―十五畫）擺・擯・擽・擲・擴・擴・擴

○手　部　（十五―十七畫）　攀・攝・攀・攫・攝・攝・攝・攀・攀・攀

叔魚―…」

【攝籙】ロク　圖籙は符、天子に代りて符を取る職。摂政の異稱。

【攝受折伏】シヤウジユ　佛　攝受は苦修練行して、其の心を修攝する職。折伏は順逆二緣に對して、たとひ杖木の難にあふとも、佛法の職を說きかすする義。

【攝然】ゼン　やすらかなる（靜謐）貌。漢書、嚴助傳「天――、人安二其生一」

十九畫

攜　ケン　咸　同

とる、ひろふ「―遮」＝攜・捃。

攢　㊀サン　㊁サン　寒　翰　俗字

㊀あつまる（聚）○むらがる（簇）○おほふ、葬らずして其の柩を掩ふ。宋史、哲宗孟皇后傳「遺命擇地―殯」○えらぶ（擇）㊁をる（折）

同訓異義　攢・聚・集・纂・輯・萃等の別は聚（耳部八畫）の條を見よ。

【攢起】サン　あつまりたつ。夏侯湛文「長堞――、柔條列布」

【攢宮】サン　天子の暫く殯する所の稱。宋史、高宗紀「以二孟忠厚・充二――總護使一」

【攢瀆】サン　あつまれる貌。漢咄唇歌「嚮下何―――、榮華各有時」

【攢聚】シユウ　むらがりあつまる。李適詩「石林上――、金淵下明滅」

【攢叢】ソウ　あつまる。江淹、柑橘賦「――石徑、雜二蔡山道一」

【攢眉】ビ　眉を蹙めて舒べず、憂ある狀。楚辭「――向レ月兮擠二雅琴一」

【攢米】ベイ　あつまりかさなれるみね。駱賓王詩「――街二宿霧一」＝疊峰。

【攢鋒】ホウ　ほこさきをあつめる。顏延之文「――成レ林、按レ鞍爲レ圍」

【攢立】リツ　むらがりたつ。史、司馬相如傳「――叢倚」

攤　㊀タン　㊁ダン　寒　翰

㊀ひらく（開）「―書」○ゆるむ、ゆるし（緩）○ちらす（散）「―錢」㊁おさへる（按）

【攤戲】ギ　攤錢に同じ。南史「見二後閣小兒―――」

【攤書】シヨ　書物をひらく。世說「王戎滿牀―レ―」

【攤錢】セン　ぜにうちのあそび（博戲）杜甫詩「白盡―レ―高浪中」＝攤賭・攤戲・攤莆。

【攤飯】ハン　飯後のひろね（晝睡）詩人玉屑「東坡謂二晨飲一爲二澆書一、李黃門謂二午睡一爲二――」

攤　ビ　支　僧

○やぶれる（弊）○鐘のしゅもくのあたるところ（鐘受）擊處）

攤　レイ　リ　紙　麻　シ　紙

○をる、くじく（折）○さく（撕）

攣　㊀レン　㊁レン　先　霰

㊀かかる、つながる（係）相牽繫して絕えず。○ひく、ひきつながる（牽繫）○きびし（急）㊁かがまる（拘牽）○ひきつる「痙―」手足のかがまる病。史、蔡澤傳「蹇鶴膝―」○こふ、したふ「拳―」戀に通ず。

【攣病】ビヤウ　手足のまがりて、のびざる病。柳宗元、捕蛇者說「可下以已二大風――癘一、去二死肌一、殺中三蟲上」

【攣拘】コウ　つなぎしばられる。束縛せられる。後漢書、曹褒傳「帝知二掌察――」」韓愈詩「――風二吾眞一」＝拘攣・拘束。

【攣子】シ　ふたご。戰國策「夫――之相似者、惟其母知レ之而已」

【攣如】ジヨ　引きつながりて絕えず、如は助字。易、中孚「九五、有レ孚、――无レ咎」

【攣蹇】ケン　手足まがりて伸びず、ねざり。陸游詩「――豈不レ苦、害貓在二四支一」

【攣攣】レン　こひしたふ貌。漢書、李夫人傳「上所以――顧二念我一者、乃以二平生容貌一也」＝戀戀・皤皤。

二十畫

攪　カウ　ケウ　巧　通音　カク

○みだす、みだる（亂・撓）「亂―」詩、小雅「祇―我心」○かきまはす「―拌」

【攪撓】カウ　かきみだす。元稹詩「羣動皆――、化作二流渾渾一」＝攪亂。

【攪攪】カウカウ　いりみだれる貌。韓愈詩「――爭附託、無二人角一雌雄」

【攪亂】カウラン　かきみだす。詩經詩「――羈思、爲停レ觴」＝亂攪。

【攪拌】カウハン　かきまぜる。

攫　㊀クワク　㊁ヨク　藥　陌

㊀うちとる（撲取）禮、儒行「鷙蟲―搏」○つかむ「拏―」爪又は指先にて握り取る。㊁とる（取）

【攫援】クワエン　琴の絃をつかみひく。淮南子「――攜拂」

【攫客】クワク　掏摸に同じ。

【攫金】クワキン　金をつかみかすめる。列、說符「因攫二其金一而去」

【攫攫】ラン　毛羽のなき貌。荀、賦論「――分其狀屢化如レ神」

攪

攪　ラン　感　擊に通ず

○とる、手に持つ「收―」六韜「主將之法在レ務―英雄之心」○すべくくる「總―」

同訓異義　攪・取・秉・把・操・採等の別は取（又部六畫）の條を見よ。

【攪秀】シユウ　勝れたる景色をつらねおさめる。丁復詩「――目顯顯」＝攪勝。

【攪轡】ビヤウビ　たづなをとる。後漢書、范滂傳「登レ車――、慨然有下澄二淸天下一之志上」＝執轡。

【攪筆】ランピツ　ふでをとる。＝援筆・執筆。

支部

支

支　シ　支

○ささふ（拄）ささへたもつ。左、定元「天之所―不―可―壞也」ささへ。○もつ（持）もちこたへる。○ふせぐ（拒）○わかつ、わかれる、わかれ（分）○はかる、かぞへる、かんぢゃう（計算）「度―」○えだ、草木の枝。詩、衛風「芄蘭之―」＝枝。○えだ（庶）妾腹の子。○本家より わかれしちすぢ、分家。詩、大雅「本―百世」○わりふ（劵）○てあし「四―」肢に通用す。○てあて（給與）わかち與へる「―給」○はらふ、仕拂ふ「―出」○えと「干―」十二―は十干に配する、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二辰の稱。○支那の略語「日―兩國」○燕―は一に焉支に作る。又、臙脂に通用す、紅色を取る草の名。古今注「燕―西方土人以染レ紅」○國名。さはり「差―」

【支移】イ　わかちうつす。宋史、食貨志「移レ此輸レ彼、移レ近輸レ遠、謂二之――」

【支頤】イヤクイ　ほほづゑをつく。白居易詩「溯晚―レ―坐」

【支葉碩茂】シエキモ　枝も葉も、大きく茂る、碩は大。本家も分家も榮える喩。漢書、敍傳「侯王之祉祚、及宗子公族灌溉、――」

【支閉】カイ　圖仕拂。

【支解】カイ　其の四支即ち兩手兩足を解く、古の酷刑。漢書「――人民」

【支抗】カウ　ささへふせぐ。晉書「攻無二堅城、夏口武昌、無二相――」

【支協】キヤウ　ねぎらひの金品を分ち與ふ。宋史、馬先祖傳「――軍民」

【支干】カン　えと。十二支と十干と。五に相配して年月日時方位等に當てる。史、歷書、索隱「甲子是陽氣、――之首」

【支給】キウ　わりあててはかりあたへる。明律、收受――官物」

【支計】ケイ　かんぢゃう、けいさん。晉書、安平王孚傳「匿二度支尙書一、專掌二軍國――」＝會計。

【支孽】ゲツ　妾腹の子。史、呂后紀贊「大臣葅醢、――芟夷」＝庶孽・支子・支庶。

【支劵】シケン　支は兩分せし一片。てがた。＝左劵。

【支吾】ゴ　ささふ。さからふ。朱熹文「不レ可二――一」枝梧に同じ、枝は水柱、梧は斜柱。史、項羽紀「諸將懾服、莫二敢枝梧一」

【支子】シ　○妾腹の子。曲禮「――不レ祭、祭必告二於宗子一」＝庶子・孽子・支庶。○本妻腹の長子外の子。

【支障】シヤウ　さしさはり、さしつかへ。＝故障。

【支出】シユツ　○金錢のしはらひ（支拂）○妾腹の子。

【支庶】シヨ　妾腹の子。漢書「封二吳芮庶子二人一爲二列侯一、故贊曰廢流二――一」＝支子・支孽。

【支節】セツ　骨節に同じ。羅隱、衆叟遣意「混沌氏以二――一爲二山嶽一、以二腸胃一爲二江河一」

【支川】セン　えだながれ、本流よりわかれる（弊）○鐘のしゅもくのあたるところ（鐘受）擊處）

【攝籙】ロク　圖籙は符、天子に代りて符を取る職。摂政の異稱。

【攝受折伏】シヤウジユ　佛　攝受は苦修練行して、其の心を修攝する職。折伏は順逆二緣に對して、たとひ杖木の難にあふとも、佛法の職を說きかすする義。

【攝然】ゼン　やすらかなる（靜謐）貌。漢書、嚴助傳「天――、人安二其生一」

十九畫

攜　ケン　咸　同

とる、ひろふ「―遮」＝攜・捃。

攢　㊀サン　㊁サン　寒　翰　俗字

㊀あつまる（聚）○むらがる（簇）○おほふ、葬らずして其の柩を掩ふ。宋史、哲宗孟皇后傳「遺命擇地―殯」○えらぶ（擇）㊁をる（折）

同訓異義　攢・聚・集・纂・輯・萃等の別は聚（耳部八畫）の條を見よ。

【攢起】サン　あつまりたつ。夏侯湛文「長堞―――、柔條列布」

【攢宮】サン　天子の暫く殯する所の稱。宋史、高宗紀「以二孟忠厚・充二――總護使一」

【攢瀆】サン　あつまれる貌。漢咄唇歌「嚮下何―――、榮華各有時」

【攢聚】シユウ　むらがりあつまる。李適詩「石林上――、金淵下明滅」

【攢叢】ソウ　あつまる。江淹、柑橘賦「――石徑、雜二蔡山道一」

【攢眉】ビ　眉を蹙めて舒べず、憂ある狀。楚辭「――向レ月兮擠二雅琴一」

【攢米】ベイ　あつまりかさなれるみね。駱賓王詩「――街二宿霧一」＝疊峰。

【攢鋒】ホウ　ほこさきをあつめる。顏延之文「――成レ林、按レ鞍爲レ圍」

【攢立】リツ　むらがりたつ。史、司馬相如傳「――叢倚」

攤　㊀タン　㊁ダン　寒　翰

㊀ひらく（開）「―書」○ゆるむ、ゆるし（緩）○ちらす（散）「―錢」㊁おさへる（按）

【攤戲】ギ　攤錢に同じ。南史「見二後閣小兒―――」

【攤書】シヨ　書物をひらく。世說「王戎滿牀―レ―」

【攤錢】セン　ぜにうちのあそび（博戲）杜甫詩「白盡―レ―高浪中」＝攤賭・攤戲・攤莆。

【攤飯】ハン　飯後のひろね（晝睡）詩人玉屑「東坡謂二晨飲一爲二澆書一、李黃門謂二午睡一爲二――」

攤　ビ　支　僧

○やぶれる（弊）○鐘のしゅもくのあたるところ（鐘受）擊處）

攤　レイ　リ　紙　麻　シ　紙

○をる、くじく（折）○さく（撕）

攣　㊀レン　㊁レン　先　霰

㊀かかる、つながる（係）相牽繫して絕えず。○ひく、ひきつながる（牽繫）○きびし（急）㊁かがまる（拘牽）○ひきつる「痙―」手足のかがまる病。史、蔡澤傳「蹇鶴膝―」○こふ、したふ「拳―」戀に通ず。

【攣病】ビヤウ　手足のまがりて、のびざる病。柳宗元、捕蛇者說「可下以已二大風――癘一、去二死肌一、殺中三蟲上」

【攣拘】コウ　つなぎしばられる。束縛せられる。後漢書、曹褒傳「帝知二掌察――」」韓愈詩「――風二吾眞一」＝拘攣・拘束。

【攣子】シ　ふたご。戰國策「夫――之相似者、惟其母知レ之而已」

【攣如】ジヨ　引きつながりて絕えず、如は助字。易、中孚「九五、有レ孚、――无レ咎」

【攣蹇】ケン　手足まがりて伸びず、ねざり。陸游詩「――豈不レ苦、害貓在二四支一」

【攣攣】レン　こひしたふ貌。漢書、李夫人傳「上所以――顧二念我一者、乃以二平生容貌一也」＝戀戀・皤皤。

二十畫

攪　カウ　ケウ　巧　通音　カク

○みだす、みだる（亂・撓）「亂―」詩、小雅「祇―我心」○かきまはす「―拌」

【攪撓】カウカウ　かきみだす。元稹詩「羣動皆――、化作二流渾渾一」＝攪亂。

【攪攪】カウカウ　いりみだれる貌。韓愈詩「――爭附託、無二人角一雌雄」

【攪亂】カウラン　かきみだす。詩經詩「――羈思、爲停レ觴」＝亂攪。

【攪拌】カウハン　かきまぜる。

攫　㊀クワク　㊁ヨク　藥　陌

㊀うちとる（撲取）禮、儒行「鷙蟲―搏」○つかむ「拏―」爪又は指先にて握り取る。㊁とる（取）

【攫援】クワエン　琴の絃をつかみひく。淮南子「――攜拂」

【攫客】クワク　掏摸に同じ。

【攫金】クワキン　金をつかみかすめる。列、說符「因攫二其金一而去」

【攫攫】ラン　毛羽のなき貌。荀、賦論「――分其狀屢化如レ神」

攪

攪　ラン　感　擊に通ず

○とる、手に持つ「收―」六韜「主將之法在レ務―英雄之心」○すべくくる「總―」

同訓異義　攪・取・秉・把・操・採等の別は取（又部六畫）の條を見よ。

【攪秀】シユウ　勝れたる景色をつらねおさめる。丁復詩「――目顯顯」＝攪勝。

【攪轡】ビヤウビ　たづなをとる。後漢書、范滂傳「登レ車――、慨然有下澄二淸天下一之志上」＝執轡。

【攪筆】ランピツ　ふでをとる。＝援筆・執筆。

支部

支

支　シ　支

○ささふ（拄）ささへたもつ。左、定元「天之所―不―可―壞也」ささへ。○もつ（持）もちこたへる。○ふせぐ（拒）○わかつ、わかれる、わかれ（分）○はかる、かぞへる、かんぢゃう（計算）「度―」○えだ、草木の枝。詩、衛風「芄蘭之―」＝枝。○えだ（庶）妾腹の子。○本家より わかれしちすぢ、分家。詩、大雅「本―百世」○わりふ（劵）○てあし「四―」肢に通用す。○てあて（給與）わかち與へる「―給」○はらふ、仕拂ふ「―出」○えと「干―」十二―は十干に配する、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二辰の稱。○支那の略語「日―兩國」○燕―は一に焉支に作る。又、臙脂に通用す、紅色を取る草の名。古今注「燕―西方土人以染レ紅」○國名。さはり「差―」

【支移】イ　わかちうつす。宋史、食貨志「移レ此輸レ彼、移レ近輸レ遠、謂二之――」

【支頤】イヤクイ　ほほづゑをつく。白居易詩「溯晚―レ―坐」

【支葉碩茂】シエキモ　枝も葉も、大きく茂る、碩は大。本家も分家も榮える喩。漢書、敍傳「侯王之祉祚、及宗子公族灌溉、――」

【支閉】カイ　圖仕拂。

【支解】カイ　其の四支即ち兩手兩足を解く、古の酷刑。漢書「――人民」

【支抗】カウ　ささへふせぐ。晉書「攻無二堅城、夏口武昌、無二相――」

【支協】キヤウ　ねぎらひの金品を分ち與ふ。宋史、馬先祖傳「――軍民」

【支干】カン　えと。十二支と十干と。五に相配して年月日時方位等に當てる。史、歷書、索隱「甲子是陽氣、――之首」

【支給】キウ　わりあててはかりあたへる。明律、收受――官物」

【支計】ケイ　かんぢゃう、けいさん。晉書、安平王孚傳「匿二度支尙書一、專掌二軍國――」＝會計。

【支孽】ゲツ　妾腹の子。史、呂后紀贊「大臣葅醢、――芟夷」＝庶孽・支子・支庶。

【支劵】シケン　支は兩分せし一片。てがた。＝左劵。

【支吾】ゴ　ささふ。さからふ。朱熹文「不レ可二――一」枝梧に同じ、枝は水柱、梧は斜柱。史、項羽紀「諸將懾服、莫二敢枝梧一」

【支子】シ　○妾腹の子。曲禮「――不レ祭、祭必告二於宗子一」＝庶子・孽子・支庶。○本妻腹の長子外の子。

【支障】シヤウ　さしさはり、さしつかへ。＝故障。

【支出】シユツ　○金錢のしはらひ（支拂）○妾腹の子。

【支庶】シヨ　妾腹の子。漢書「封二吳芮庶子二人一爲二列侯一、故贊曰廢流二――一」＝支子・支孽。

【支節】セツ　骨節に同じ。羅隱、衆叟遣意「混沌氏以二――一爲二山嶽一、以二腸胃一爲二江河一」

【支川】セン　えだながれ、本流よりわか

廿一畫

攤　ハン　寒　翰

欄（木部二十一畫）の俗字。

攤　㊀ラン　㊁レイ　寒　翰　簡

㊀はだか、毛羽なし。㊁わかる、わかつ（分割）

○ともがら、黨に通ず。○うつ（擊）槌にて打つ。

れたる水。莊子「九州名川三百、—三千、小者無數」＝支流。

【支線】シセン 汽車などのわかれの線路。えだみち。本線・幹線の對。

【支族】シゾク 次條に同じ。

【支屬】ゾク わかれのつづきあひ、分家の一族。漢書、辛慶忌傳「宗族——至二千石者、十餘人」

【支隊】タイ 本隊より分れし軍隊。＝分隊。

【支度】タク ○はかる。北周書、王悅傳「——路程」國○あらかじめ物事の用意する。＝準備。○身じたくする。○食事する。

【支持】ヂ ささへもつ。杜甫詩「形容眞漸倒、答效莫——」

【支胤】ヂイン わかれのちすぢ。唐書、竇威傳「賛、自魏就ル唐、——扶疏」

【支廨】チカイ わかれの役所。＝支部・出張所。

【支柱】シチウ ささへばしら。つっかひぼう。＝枝柱。

【支店】テン 國でみせ。本店の對。＝分店。

【支途】ト 金錢のつかひみち、支出のみち。＝費途。

【支那】ナ から、もろこし。漢土、唐土、秦の梵音の音譯「慈恩傳」＝震旦。

【支派】ハ ○えだ川、本流より分れし小川。＝支流・支川。○本部のわかれ。北齊書「是以具書二其——」＝支部。

【支配】パイ 事をそれぞれ手配して處置する。北史、唐邕傳「文襄崩、事出二倉卒一、文宣部二分將校一、鎮二壓四方一、夜中召ル邕——」、造次便了、帝甚重ル之」

【支配人】ニン 會社商店等の事務をすべくくりて支配する人。

【支拂命令】シハライメイレイ 債權者が債務者に債務の辨濟を要求する爲め區裁判所に申請せし時、裁判所が債務者に對して發する命令、此命令を受けて支拂はず、又抗議せざる時は強制執行せらる。

【支部】ブ 本部より分れしもの。＝支派。

【支分】フン 細かに分ちて取る。戰國策「——二方城膏腴之地、以薄ル鄭」

【支分節解】シブンセツカイ 書物を解釋するに、支體を分ち、關節を解く如く、詳悉なる義。朱熹、大學章句序「此書之旨、——、脈絡貫通、詳略相因、巨細畢舉」

【支別】ベツ わかれ。後漢書「其先魏之——、食二采馮城一、因以氏焉」

【支辨】ベン 金錢を仕拂ふ、勘定をすます。

【支脈】ミヤク 山などのわかれ出てたるもの。

【支用】ヨウ わりあてて用ふる。宋史、職官志「雜物庫掌受二內外雜輸之物一、以備中——上」

【支離】リ ○分れ散りて全からず「——滅裂」王延壽賦「——分赴」○かたは、不具者。莊、人間世「——二其形一者、猶足下以養二其身一終中其天年上」

【支離滅裂】レツリツ ちりぢりばらばら。めちゃめちゃ。駱賓王詩「生涯一滅裂、岐路幾徘徊」前條參看。

【支流】リウ ○本流より分れながれる川。唐書、南蠻傳「——三百六十」＝支川・枝流。○本家より分れ出てたる別家。

【支路】ロ えだみち、わきみち。幹路の對。＝岐路・旁徑。

六畫

【枝】シ 國 敓は俗字

○なっとう。○しほまめ。五味を調するに用ふ、みその類。史、貨殖傳「——千合」

八畫

【敓】キ 攴

○かたむく(傾)「斜——」「傾——」○そばだつ。○たひらかならず。○もちさる(持去)

【敓架】カ 机の上の板の斜になりたるもの、見蹇ケンの類。三才圖會「陸法言切韻曰、曹公作二——一臥視ル書、今爛架卽其制也」＝敓案。

【敓莢】キ 物のそばだつ貌。吳融、江行「——側側海門帆、軋軋啞啞洞庵櫓」

【敓善】キ 金屬にて作る容器、水を八分目程入れるやうに作る。滿つればくつがへる、以て中庸の訓戒とす。家語、三恕、孔子觀二於周廟一、有二——一焉、使二子路取ル水試ヒ之、滿則覆、中則正、虛則敓」荀、宥坐、註「——傾敓易ル覆之器」

攴部（欠）

【攴】ホク 國 或は扑・樸に作る

○うつ、すこしくうつ(小擊)○國しぶん。攴と文との中間の字形なるが故。

【欠】支(前條)に同じ、文とは別。

二畫

【收】シウ 尤 宥 ㊀シウ ㊁

㊀をさむ、をさまる、とり入れる。作物サクを取り入れる「田——」千字文「秋——冬藏」○とる(取)あつめ取る「——斂」○とらふ、とらへる(捕)罪人を捕へる。○やむ、とどむ(息)○事の結末「——工」「——場」○あつむ、あつまる(聚)ととのへる(整齊)

「禮、樂記「夏楚二物、——其威——也」夏楚は學生を罰する鞭。○車の後の横木(軫)○夏の時の冠、髮を——斂する所以。○をさまりたる財物。㊁かりいれおほし(穫多)禮、月令「農事備——」

同訓異義 收・修・治・理・斂・藏・納・御の別は修(人部八畫)の條を見よ。

【收按】アン とらへて其の罪を吟味する。漢書、趙廣漢傳「——致ル法」

【收綰】ワン 釣瓶なはをひきあげる。周易集解「以二繩汲一——ル也」

【收瘞】エイ をさめらづめる、をさめ葬る。北史、東魏孝靜紀「——二骸骨一」＝收葬。

【收益】エキ ○利益ををさめる。とり入れる利益。○法律にて物より生ずる天然又は法定の果實を收めとるにいふ。

【收蝦】カ えびをとる。劉基詩「守卒——レ屋棲池」

【收獵】リウ わらをとりいれる。史、蕭相國世家「毋三——レ一爲二禽獸食一」

【收監】カン とらへて牢にいれる、獄につなぐ。＝下獄・投獄・入監。

【收穫】クワク 穀物をとり入れる、穀物のとり入れ。書經「——有二多少一」

【收管】クワン 罪人を保管する。明律「凡婦人犯ル罪、除二犯奸及死罪收禁外、其餘雜犯責付二本夫一——」

【收繫】ケイ 捕へて獄につなぐ。漢書、王章傳「下二延尉獄一、妻子皆——」＝拘禁。

【收斂】レン とりあげてをしへる。周禮「任ル之以ル事、而——二之一」

【收檢】ケン とりまとめる。後漢書、張衡傳「——遺著、畢ル力補綴」

【收採】サイ をさめ取る、又とりあげ用ひる。北史、梁彥光傳「不ル謂天恩復垂二——一」＝採收。

【收債】サイ 貸金をとりたてる。史、孟嘗君傳「馮公、無二他伎能一、宜可ル令——ル」

【收載】サイ とりをさめてのせる。史記「除公常下——之一」

【收斐】ヒ をさめはうむる。魏志「袁譚死、王猶詣二太祖一、乞——二云、受二袁氏恩一、得——、就ル戮無ル悔」

【收藏】ゾウ をさめたくはへる。文子「——蓄積、而不ル加ル富」

【收藏家】カ 書畫古物書籍などを愛して集め藏める人。

【收支】シ 金穀などの收入と支出と。宋史、食貨志「其五曰——」＝出納。

【收事】ジ 賦稅と使役と。漢書、宣帝紀「毋三——一盡二四年一」

【收齒】シ とり上げて朝官に列せられる。歐陽修文「誤蒙二甄擢一、遂見二——」

【收拾】シフ ひろひをさめる。散りたる者を一處にあつめる。歐陽修詩「殘章與二斷藁一、草草各——」

【收集】シフ をさめあつめる。後漢書、班固傳「總二攬賢才一、——明智一」

【收斡】シウ とりあつめる。朱熹文「敢——二遺文一、藏二之家廟一」＝收集。

【收受】シウ うけいれる、うけ取る。＝收納。

【收熟】シウ とり入れてよきやう、十分にみのる。陳子昂文「白露時降、百穀——」

【收縮】シウ ちぢまる。ちぢめる。詩經、傳「霜降而——二萬物一」

【收恤】シウ 貧人をおさめめぐむ。史、文帝紀「賞二賜長老一、——二孤獨一」

【收旌】セイ 旗を取り收をさめる。曹植、七啓「——ル弛ル旆」＝收旆。

【收稅】ゼイ 稅をとりいれる。唐書、定二天下酷月一、以ル月——ル」＝徵稅、征稅。

【收生婆】セイバ とりあげばば、產婆をいふ(五雜俎)嫗一に媼又婆に作る。＝穩婆。

【收摭】セキ とりあげひろふ。申鑒、遠ル至二漢興一、——散滯一」＝收拾。

【收攬】セン をさめてほしいままにしめ有する。魏書、李崇傳「世哲爲二相州刺史一、亦無二清白狀一、鄴洛市廛——其利一、爲二時論所ル鄙」

【收族】ゾク 家族をまとめて世話する。禮記「敬ル宗故——ル」

【收粟】ゾクタイム もみをとりいれる。唐書、歲——ル——二千萬石」

【收掃】タク とりえらぶ。歐陽修文「往往舉ル見二——一」

【收畢】ヒツ 國受取證。＝收畢手。

【收得】トク 穀類などをとりいれる。

【收納】ナフ とりいれをさめる。

【收入】ニフ 金穀などををさめいれる。又とりいれ。詩經、豳「年豐——餘ル前也」

【收旆】ハイ はたを取りをさめる。王道詩「桑師——ル赤西還」＝收旆。

【收縛】バク とらへしばる。三輔黃圖「——考問」

【收綸】リン つりいとををさめる、釣をやめる。杜甫詩「釣艇——ル歸、春鳥接ル翅鷗」＝收綸。

【收米】ベイ とりいれし米。張耒詩「淮頻耕田倍二——一」

【收沒】ボツ 財產又は或物件を官にとりあげる。南史「復加二——一」＝沒收。

【收葵】キウ ひきとりてそだてる。後漢書、任隗傳「賑二恤宗族一、——孤寡一」

【收用】ヨウ とりあげてもちふる「土地——法」

【收容】ヨウ とりいれる、ひきとる。

【收攬】ラン とりあげてたもつ。をさめとる。攬は持つ。晉書、周嵩傳「——英奇、遂纘二漢業一」

【收纜】ランタイム ともづなをひきあげ

て出帆する。鮑照詩「一レ一辭二帝鄉一」

【收綸】シウリンクワン つりいとをさむ、釣をやめる。陰鏗詩「林零正下レ葉、釣晚欲レ一レ一」＝收綸。

【收掠】シウリヤク をさめかすめる。晉書、石勒載記「分遣二諸將一一二野穀一」

【收斂】シウレン ○穀物果實などをとりいれる。陸游詩「霜晴一一少レ在レ家」＝收穫。○租稅をとりたてる。禮記「命二百官一始一一」○ひきしめる。

【收斂劑】シウレンザイ 下痢を止むるくすり。

【收殮】シウレン とりおき、死人のとりおきをする。

【收賄】シウワイ まひなひを取る、賄賂ワイをもらふ「一一罪」

【攷】考（老部）の古字。

三畫

【改】イ 紙 改とは別 殺一は大剛卯、以て鬼魅を逐ふ。

【攸】㊀イウ ㊁イウ 有 尤 ㊀ところ（所）大雅「爲二韓姞一相一」又、助語として用ふる。書、洪範「彝倫一一」敍」○一は遠き貌。○水を行く。○一然はゆったりとして自得する貌。悠に通ず。㊁かかりて危き（懸危）貌。

【攸攸】イウ 遠き貌。漢書、敍傳「一一外寓」＝悠悠。

【攸乎】コウ かかりてあやふき貌。左、昭十三「漸乎一一」

【攸然】ゼン はやく水中を行く貌。又、ゆったりと自得する貌。孟、萬章「始舍レ之圉圉焉、少則洋洋焉、一一而逝」＝悠然。

【改】カイ 簡 改に作るは非 ○あらたむ「一過」「悛一」易、益卦「有二過則一一」○あらたまる。「一歲」○かふ、かはる（更）「修一」「刪一」「變一」

【既往已に過あれば之を欠ゥちて改むる會意。

【同訓異義】改・革・更・悛○改は下地あるものを除きて、新にするなり、改歲・改過などの如し。○革はさらりと速に變へること。易經「湯武革レ命、應レ天而順レ人」○更は改と略ゝ同じ、更代・更衣などの如し。○悛は我が過惡を止め改むるに用ふ。梁武紀「曉以二禍福一、如其不レ悛、以レ順討レ逆」

【改異】イ 特別なる者としてもてなす。後漢書「特加二一一」

【改易】エキ ○あらたまりかはる、あらためかへる。漢書、何武傳「一二大臣一」＝改變・改革。○國德川時代に士分に科せし刑罰。其の家祿を沒收し士籍を除く。

【改嫁】カイ 改醮に同じ。後漢書、列女傳「呼レ榮欲レ一二之一」

【改號】ガウ 名をあらためる。春秋、注「荊始一レ一曰レ楚」

【改革】カイカク あらためかへる。又、あらたまる、革は易。＝改易。

【改刊】カイカン けづりただす。曹植詩「古人寫二鳥跡、文字無二一一」

【改舊】カイキウ ふるきしきたりをあらためる。周書、稽二諸典故一、創レ新一レ、方始備焉」

【改化】カイクワ 改めてよき敎に從ふ。史、始皇紀「黔首一一、遠邇同レ度」

【改レ科】カイクワクヲ 法律の條目を改む。晉書、刑法志「改二投書棄市之科一」

【改過】カイクワ あやまちをあらためる。書、仲虺之誥「一一不レ吝」

【改悔】カイクワイ くやみあらためる。論衡「蹶然起坐、心覺二一一」

【改換】カイクワン かへる、かはる。魏收文「一二朝章一」＝易換・更換。

【改觀】カイクワン みえをあらためる、今までとはみかへる。北夢瑣言「朱溫盛禮郊理、人士一一」

【改元】カイゲン 元年、又、年號を改める。中說「一一立レ號非レ古也」

【改弦】カイゲン 琴の調子を改める。法度を變へるに喩ふ。董仲舒文「瞽レ之琴瑟不レ調、甚者必解而更二張之一、乃可レ鼓也」に本づく。宋書、樂志「琴瑟殊未レ調、一一當二更張一」

【改弦易轍】カイゲンエキテツ 前條に同じ。易轍は車の路をかへる。晉書「愛二易轍之勤一、而得二覆車之軌一」＝改絃易調。

【改悟】カイゴ 過をさとりてあらためる。＝改悛。

【改悛】カイシン 前條に同じ、痞は悟（漢書、五行志）

【改樣】カイヤウ あらためかまへる。陳書「一二享宇一、修二山池卉木一」

【改歲】カイサイ 改年に同じ。

【改遷】カイセン あらためつくる。宋史、律歷志「請レ一二新曆一」＝改作。

【改裝】カイサウ よそほひをあらためる。後漢書、禰衡傳「鼓史何不レ一レ、而輕敢進乎」

【改罪】カイザイ あらためてはらむる。左、醫元「一二惠公」

【改作】カイサク あらためつくる、つくりかへ。論、先進「何必一一」

【改札】カイサツ 國切符をしらべる義、ふだをあらためる「一一掛」

【改寬】カイクワン 文章の字句をあらためる、寬は易。晉書、阮籍傳「無レ所二一一、辭甚清壯」

【改修】カイシウ あらためなほす。晉書、高陽王睦傳「退靜思レ愆、一二其德一」

【改心】カイシン こころをあらためる、心を入れかへる。＝改過。

【改造】カイゾウ あらためすすむ、善き方に改め進行する「一一黨」

【改鑄】カイチユ あらためている。後漢書「宜一一二大錢一」

【改宗】カイシウ しゅうしがへ。今まで信仰せし宗旨をかへて他の宗敎に入る。

【改稱】カイシウ となへをかへる。

【改色】カイシヨク いろを變へる。李德林詩「歲寒無二一一、年長有二倒枝一」

【改正】カイセイ あらためただす。漢書、谷永傳「無レ所二一一」＝更正。

【改醮】カイセウ 二度のよめいり。醮はしうげんの杯。晉書「李密父早亡、母何氏一一」＝再嫁・再醮。

【改悛】カイシン 過をくいあらためる。＝改悟・改悔。

【改撰】カイセン あらためてえらぶ。舊唐書「故復請レ一二實錄一」

【改俗】カイゾク 惡しき習俗をあらためる。東觀漢記「鄧訓拜二張掖太守一、以レ身率レ下、河西一レ一」

【改題】カイダイ だいもくをかへる、題號を改める。

【改道】カイダウ これまで行ふ所の道をあらためる。白虎通「王者有二一レ一之文一」

【改置】カイチ あらためおく。周書「一二宿衞官員一」

【改築】カイチク 家などを建てなほす。

【改轍】カイテツ 車の通る路を改めかへる、以前の仕方を改めるに喩ふ。曹問、六代論「觀二前車傾覆一、而不レ改二其轍一也」＝易轍。

動けて攻め守る事を同じくする。

【攻勢】セイ せめる方のいきほひ。守勢の対。

【攻戰】コウ 攻め戰ふ。又、城を攻めると野に戰ふと、攻城野戰の略。

【攻討】コウ せめうつ。呉志、呂岱傳「—一年破之」＝攻伐。

【攻寄】コウ せめよせる。朱熹詩「物欲互—、孤根孰能任」

【攻伐】バツ せめうつ、伐は罪ある者をうつ。國語「有二刑罰之辟一、有二—之兵一」

【攻拔】バツ 敵の城を攻め取る。

【攻剽】ヒウ 人を攻めおびやかして物を奪ふ。史、酷吏傳「—爲二羣盜一」

【攻疐】チン いしばりにて病を治療する。宋史「若復加二—一、必傷二元氣一矣」

【攻捨】シヤ ○せめうつ。＝攻伐。○治療に同じ。宋濂詩「醫言瀉熱勝、良劑急—」

【攻略】リヤク 土地をせめとる。

【攻療】レウ やまひを治めいやす。孔叢子、嘉言「獻二—之方」＝治療。

四書

【政】㊀ セイ・シヤウ　㊁ セイ・シヤウ　敬・庚

㊀まつりごと。「仁—」「德—」「苛—」論、爲政「爲—以德」○國家の法制禁令。同書「道之以—」、齊之以刑」○轉じて物事を整へをさめる方法「家—」「觴—」○ただす(正)詩文などの添削「乞—」「郢—」○まさに、助語、まさしくの義、正に通ず。㊁みつぎ(賦稅)＝征。

同訓異義 政・正・方・適・祇等は正(止部一畫)の條を見よ。

【政要】セイ 行政の要領。後漢書「宜下拔二靈得失一、指中陳—上」

【政綱】セイ まつりごとのおほづな、政治の綱紀。

【政局】セキヨク 政治の局面、政海のなりゆき。

【政化】セイ 政を施し民を教化する、政治と教化と。後漢書、伏湛傳「禮樂—之本」

【政刑】セイ 政事と刑罰と。＝刑政。

【政經】セイ 政事ののり。李彭年文「—有レ序、德洽二人心一」＝政道。

【政敎】セイ ○まつりごとと、をしへと。史、申不害傳「內修二—一」○政治と宗敎と。

【政見】セイ 政事上の意見。

【政機】セイ まつりごとを行ふ權力。＝政柄。

【政策】セイ 政事上のはかりごと。＝政略・政術。

【政事】セイ 政は大いなるまつりごと。事は小なるまつりごと。詩、邶風「—一埤二益我一」

【政事堂】セイ 政を議する所、今の內閣。文獻通考、職官考「開元中、張說奏、改二—一、爲二中書門下一」

【政社】セイ 政事上意見を同じくする者の組織せる團體。＝政黨。

【政術】セツ まつりごとのてだて。後漢書、安帝紀「詔舉下明二—一、達二古今一、能直言極諫者、各一人上」＝政策。

【政樞】セイ まつりごとの要。唐書、勃海二—一、博達二謀猷一」＝政要。

【政聲】セイ 善き政を行ふといふほまれ。後漢書、杜根傳「位至二邑郡太守一、甚有二—一」

【政績】セキ まつりごとのいさを。南史、韋叡傳「所レ居必有二—一」

【政體】タイ まつりごとのたてかた。國家が主權を行使する形式。晉書、劉頌傳「詳二辨刑名一、該二殿—一」

【政道】ダウ まつりごとを施すみち。後漢書、安帝紀「克念二—一」＝治道・政治。

【政黨】タウ 政治上、同じ意見の人が相集まりて組織する團體。＝政社。

【政黨內閣】ナイカク 主義を同くする政黨員が組織する內閣。

【政談】ダン 政事に關する談論。＝政論。

【政治】チ ○まつりごと。＝政事。○まつりごとがよく行はれる。書經「道治—一、澤二潤生民一」

【政治家】カ ○國家の政を施す人。＝爲政者。○政治上の事にたづさはる人。

【政治學】ガク 國家の起源・組織及性質其他政策等を研究する科學。

【政廳】チヤウ 政を取扱ふ役所。主に關國又は海外の領地にあるものの稱。

【政條】ジヤウ 政令法律の類。元史、楊惟中傳「宜二暢國威一、敷二布—一」

【政典】テン まつりごとに關する法令。周禮「四曰—一、以平二邦國一、以正二百官一」

【政塗】トウ まつりごとのしかた。塗は途。梁書、武帝紀「思レ弘二—一、莫レ知二津濟一」＝政道・治道。

【政者正也】セイシヤヤ 政の字の本義は天下を正すの意。論、顏淵「季康子問二政於孔子一、孔子對曰、——、子帥以レ正、孰敢不レ正」

【政費】セイ 政事上に要する費用。

【政府】フ まつりごとを行ふ最高の役所。宋史、歐陽修傳「其在二—一、與二韓琦一同レ心輔レ政」＝內閣。

【政柄】ヘイ まつりごとを執る權力。左傳「蔡謂國而三世執二其—一」＝政權。

【政變】ヘン 政治上のうつりかはり、政治上のみだれ。

【政本】ホン ○農をいふ。帝範「夫食爲二人天一、農爲二—一」○禮をいふ。禮記「禮其政之本與」

【政綱】セイ 政治上のきまり。北齊書

「朝章直綱、——疎闊」＝法紀。

【政務】ム まつりごとのつとめ。後漢書、仲長統傳「審二此以爲一—一」

【政略】リヤク ○政事上のはかりごと。＝政策。○國農くかけひきの義。

【政令】レイ まつりごとのおきて。憲法・法律規則など。又、政府の命令。

【政論】ロン 時の政事の是非得失につきての議論。＝政談。

【政如二蒲盧一】ノ 蒲盧は蓋盧は盧に通ず、生長極めて速かなれば、政の擧がること速かなるに喩ふ。一說に、蒲盧は細腰蜂をいふと。中庸「夫政也者、蒲盧也」

【政如二登衞一】ノ まつりごとの相似たるにいふ。登の祖周公、衞の祖康叔は兄弟なりしによる。論、子路「登衞之政、兄弟也」漢書、馮奉世傳「兄弟繼レ踵相因循、聰明賢智惠二吏民一、——」

【政所】ドコロ 國○昔公家などの邸にありて財政及雜事を掌りし所。○檢非違使などの役所。

【放】㊀ ハウ　㊁ ハウ　養・漾

㊀はなつ、はなちやる、ゆるしてにがす、にげる(逸)孟、盡心「如追二豚一」○おふ(逐)島ながしにする、流罪に行ふ「流—」書、舜典「—驩兜于崇山」○はなたれる。屈原、漁父辭「屈原既—、游二於江潭一」○ほしいまま(肆)「—肆」○しまりなし「意—」「任—」○ちらす(散)○發する「—光」○のべる(展)「—大」○さる(去)○おく(置)○すつ(捨棄)○すたる(廢)○ゆるす(縱)○外に出る「—洋」㊂よる(依)論、里仁「—乎利一而行」○まなぶ(學)ならふ＝倣。○くらぶ(比)○いたる(至)孟、離婁「—乎四海」○いたす(至)

同訓異義 放・縱・橫・肆・恣・擅の別は縱(系部十一畫)の條を見よ。

【放佚】イツ ほしいまま、佚は逸。正法念經「此—過、一切過中最爲二勝上一」＝放逸。

【放逸】イツ ○きままに。後漢書、仲長統傳「棄二—一、而赴二束縛一」＝放佚・放縱・放溢。○佛教大煩惱地法の一として、二十隨煩惱の一に數ふ。正法念經「此—過、一切過中最爲二勝上一」逸一本佚に作る。

【放溢】イツ ほしいままにして法度にはづれる。魏志、高堂隆傳「精誠不レ制、則—無レ極」＝放逸・放肆。

【放遠】エン はなちとほざける。王珪文「簡二拔俊賢一、—二邪佞一」

【放翁】オウ 宋の陸游の號。宋史、陸游傳「范成大帥レ蜀、游爲二參議官一、以二文字一交、不レ拘二禮法一、人譏二其顏放一、因自號二—一」

【放下】カ ○すておく。＝放棄・放置。○手からはなち出す、投ずる。

【放衙】ガ 役所がひけて、官吏が散りて退く。蘇軾詩「擁レ褐—一人寂寂、脫レ巾漉レ酒髮蓬蓬」

【放歌】カ 大聲にてうたふ。杜甫詩「白日—一須縱レ酒」＝高歌。

【放效】カウ 人の行に見ならふ。漢書、賈禹傳「亦相—一」＝倣效。

【放校】カウ 學校から放逐せられる、退學を命ぜられる。

【放傲】カウ 高ぶりてほしいまま。洛陽伽藍記「性愛二恬靜一、丘園—一」

【放學】ガク 學課終りて休みとなる。陸游詩「貪看忘卻還レ家飯、恰似二兒童—一時一」＝放課。

【放銜】カン くつわをはなつ。易林「—レ垂レ轡、奔馬不レ制」

【放棄】キ ○ゆるしはなつ。春秋、疏「寬二其罪一、而—二之一也」＝放免。○なげやりにしてすてる。呉越春秋「大王—二忠直之言一」＝放擲。

【放牛兒】ギウ 牛かひわらは。＝牧童。

【放吟】ギン 聲をはり上げて詩を吟ずる。＝高吟。

【放禽】キン 鳥をはなつ。梁簡文帝文「解レ網—レ、穿レ泉掩レ翁」

【放殛】キヨク おひはらひの罪にする。又、其の刑。殛は誅責。書、舜典、疏「鯀則—一不レ赦」

【放勳】クン 史臣が帝堯を贊美する語、其の勳業の四達する義。因りて堯の號と爲し、或は其の名とす(書、堯典)

【放火】クワ ひをつける、つけび。易林「從レ風—レ、—、蘖芝俱死」

【放課】クワ 其の日の課業がをはる。＝放學。

【放曠】クワウ ほしいままにして心ひろし。晉書、桓石秀傳「性—一、常七二釣林澤一」＝放達。

【放言】ゲン ほしいままにいふほしいままなることば。論、微子「隱居—一」＝放論。

【放言高論】ゲンカウロン 思ひのままに言論する。文章軌範、侯宇集、小序「——、筆端不二暫束一」

【放達】タツ はなちにがす。後漢書、李恂傳「恂到二田舍一、爲レ所二執獲一、羌素聞二其名一、—二之一」

【放古】コ 古にならふ。漢書「宜少—レ以自節一焉」

【放轡】ハイ 馬のおもがひをはなつ。白居易詩「—レ體安騎二蹇馬一」

【放債】サイ 金を人に貸して利を取る、かねかし。〔容齋隨筆〕

【放殺】サツ おひはらふと、うちほろぼすと、堯舜の禪讓に對して湯武の桀紂を討伐せしをいふ。＝放伐。

【放散】サン ○わがまま。阮籍文「其民—一清亂、藪竄澤居」○まきちらす。＝發散。

【放士】シ 放人に同じ。山海經「其縣

多二――一」

【放志】ハウシ　ほしいままなる志。又、志をほしいままにする。陸雲賦「眇二區外一而――兮、眷二天路一而恰レ顧」

【放恣】ハウシ　ほしいまま。孟、滕文公「諸侯――、處士横議」＝放肆・放縱。

【放資】ハウシ　もとでをおろす、資本を投下する。＝投資。

【放肆】ハウシ　ほしいまま。關尹子「一鰕至微、亦能――乎大海」＝放恣・放縱・放逸。

【放囚】ハウシウ　囚人をゆるしやる。

【放人】ハウジン　世をのがれて志をほしいままにする人。中說「陶元亮――也、歸去來有二避レ世之心一焉」

【放心】ハウシン　○うっかりとしてゐる心、放逸せし良心。書、畢命「雖レ收二――一、閑レ之維難」○安心する。＝放神・放慮・放念。

【放神】ハウシン　○心をほしいままにする。韋應物詩「――遣レ所レ拘」○安心。＝放心・放慮。

【放生】ハウセイ　佛功德を積むため、魚鳥などをはなちやる。列、說符「正旦――レ、示レ有レ恩也」蘇軾詩「――魚鼈逐レ人來」

【放生會】ハウセイクワイ　佛魚鳥を放ちて法を修する法會、唐の肅宗天下に詔して放生池を置くこと金石錄に見え、我國にては、元正天皇養老四年、石清水にて行ひしに始まる。乾淳佛時記「四月八日、爲二佛誕生日一、諸寺各有二浴佛會一、是日西湖作二――一、小舟競二寶龜魚螺蚌一、令二放生一」

【放鑄】ハウシ　ほしいままに鑄る。漢書、食貨志「使二民――一」

【放率】ハウシツ　うまれままにてきっぱりとしてかざらず。晉書、桓伊傳「帝彌賞二其――一」

【放縱】ハウジウ　わがまま。王僧孺文「天然――、極有二筆力一」＝放肆・放逸。

【放醉】ハウスイ　ほしいままにふる。白居易詩「尋レ春――尙二粗豪一」

【放惰】ハウダ　ほしいままにしておこたる。杜牧文「疎愚――」

【放蕩】ハウタウ　○ほしいまま、檢束クワクソクなし。魏志、武帝紀「少機警有二權數一、而任俠――、不レ治二行業一」＝放逸。○國酒色などの慾をほしいままにする。

【放逸】ハウイツ　心をほしいままにして物に拘ハカらず。世說、任誕「劉伶恆縱レ酒――」＝放曠。

【放誕】ハウタン　ほしいままに大言する、放縱にして妄言する。南史、檀超傳「少好二文學一、――任レ氣」＝縱誕。

【放膽文】ハウタンブン　文法字句などには甚だしく拘泥せずして、大膽に思ふままにかきたる文。小心文の對（文章軌範、小序）

【放置】ハウチ　すておく、なげやりにしておく。

【放逐】ハウチク　おひはらふ。史、項羽紀贊「――二――義帝一、而自立」

【放黜】ハウチツ　はなちしりぞける。書經「崇信姦回、――二――師保一」＝放逐・貶黜。

【放擲】ハウテキ　なげやりにする、うっちやる。＝放棄。

【放任】ハウニン　自然のなりゆきにまかせる、なげやりにする。干渉の反對。

【放念】ハウネン　心をやすくする。＝放心・放神・放慮。

【放伐】ハウバツ　おひはらふと、うちほろぼすと（顧璘、鳴蛙賦）＝放殺。

【放飯流歠】ハウハンリウセツ　大いに食ひ、流しこむ如く飲む。曲禮「毋二放飯一、毋二流歠一」

【放紛】ハウフン　もつれる。蘇軾詩「收二拾散亡一理――一」

【放辟邪侈】ハウヘキジシ　ほしいままにして心がねぢける。孟、梁惠王「苟無二恒心一、――無レ不レ爲已」

【放步】ハウホ　きままにあるく。朱熹詩「出レ門――人爭看」

【放烽】ハウホウ　のろしをあげる。唐書「其――レ有二一炬二炬三炬四炬一」

【放牧】ハウボク　牛馬などをはなしがひにする。後漢書、光武紀「牛馬――」

【放邁】ハウマイ　ほしいままにしてすぐれる。北史「容貌魁偉、――自高」

【放民】ハウミン　ほしいままなるたみ。謝朝詩「狂歌作二――一」＝放人。

【放免】ハウメン　○はなちゆるす「無罪――」唐書、高俊傳「王國――」○國古、檢非違使ケビイシの認に使はれし下役、もとゆるされし罪人が勤めたるが故。

【放夜】ハウヤ　城門を開きて夜遊をゆるす。四都雜記「正月十五夜、勅二金吾一弛レ禁、前後各一日、謂二之――一」

【放洋】ハウヤウ　船にて海外に行く。春渚紀聞「安靖陳睦、奉二使三韓一、――之日、海濤大洶湧」＝出洋。

【放慝】ハウトク　たかがり、たかを使ひて小鳥などをとる。北魏書、烏洛侯傳「――走狗」

【放浪】ハウラウ　きままにさまよふ。金史、元德明傳「――二――山水間一」＝放蕩不羈。

【放捋】ハウラツ　國ほしいままにして酒色などにふける。馬が捋を放れる轡、捋は馬場のかこひ。

【放濫】ハウラン　ほしいままにしてみだりなり。後漢書、葉茂傳「賓客――」

【放懶】ハウラン　ほしいままにしてものうし。白居易詩「怕レ寒――日高臥」＝放惰。

【放纜】ハウラン　ともづなをはなつ。韓維詩「野艇時――」

【放流】ハウリウ　罪を得て逐はれさまよふ。史、屈原傳「屈平雖――、願二楚國一繫二心懷王一」

【放慮】ハウリヨ　心をゆるす、安心する。＝放心・放念。

【放論】ハウロン　ほしいままにあげつらふ。史記「莊子敝二道德一――」＝放言。

【放下僧】ハウカソウ　國鳴鼓ツヅミ・木魚などを鳴らして、歌舞などする僧形の者、田樂法師の類。＝放下師ハウカシ

【放】ハン　剽

わかつ（分）＝頒。

五　畫

【叟】　更（日部三畫）の本字。

【故】コ　遇

○ふるし（古・舊）「――國」○ことさらに、わざと。史、信陵君傳「朱亥――不二復謝一」○こと（事）「――ながら「大――」「細――」「他――」「世――」易、繫辭「知二幽明之一――」○むかし（昔）いにしへ（古）○もと（本）以前。○ふるき物事「稽――」「法――」○ゆゑに、かるがゆゑに、上を承けて下を起す語。論、子罕「吾少也賤、――多二能鄙事」左、隱元「太子少、葬――有闕」○たくみ（巧）○しりあひ（知人）「――舊」○なくなる、死する「物――」○ならはし（先例）○ゆゑ。○ときあかし、意味（訓詁）○常ならざる事が（喪病災難の類）曲禮「君無――、玉不レ去レ身」

同訓異義　故・陳・古・舊の別は陳（阜部八畫）の條を見よ。○故・本・原・舊・元・素・雅・固等の別は本（木部一畫）の條を見よ。

【故衣】コイ　ふるききもの。新衣の對。古辭「新衣誰當補、――誰當綻」

【故意】コイ　わざとする心、有心故造。楊萬里詩「羣兒有二新舌一、六學無二――一」

【故宇】コウ　昔住みし家。楚辭「爾何懷二乎――」

【故驛】コエキ　昔のしゅくば。

【故葉】コエフ　ふるきは。張正見、桃賦「風落二新枝一、霜飛二――一」

【故苑】コエン　ふるきその。釋洪偃詩「龍田罷二――一、汾水結二餘波一」＝故園。

【故堰】コエン　ふるきゐせき。晉書、孔愉傳「修二復――一、灌二田二百餘頃一」

【故園】コエン　○ふるさと。柳宗元詩「憑寄還鄉夢、殷勤入二――一」＝故山・故里・故鄉。○ふるきその。＝故苑。

【送レ故迎レ新】ソウコヲムカフシン　前官を送りて、新任を迎ふる。漢書、王嘉傳「孝文時、吏或居レ官數月、而――、交二錯道路一」

【故家】コカ　ふるくよりつづけるいへ。孟、公孫丑「――遺俗、流風善政」＝舊家。

【故溪】コケイ　ふるき城のほり。柳宗元詩「阿誠連二――一」

【故記】コキ　ふるきかきもの。呂覽「嘗讀二――一」＝舊記。

【故蕎】コキヤウ　ふるきくつのひも。梁簡文帝詩「苦階沒二――一」

【故舊】コキウ　むかしよりのなじみ。論、泰伯「――不レ遺、則民不レ偸」＝故人。

【故琴】コキン　ふるきこと。盧照隣詩「――無二復雪一、新樹但生レ煙」

【故鄉】コキヤウ　ふるさと。史、高祖紀「咸加二海內一兮歸二――一」＝故里・故國。

【故墟】コキヨ　むかしの城あと。詩譜「成王封二母弟叔虞於巍之――一」＝故址・廢墟。

【故吾】コゴ　むかしの自己。今吾の對。莊、田子方「雖レ忘二乎――、吾有二不忘者存一」

【故袴】ココ　ふるきはかま。列子「卜子使二其妻寫レ袴、妻問曰、今袴何如、夫曰、象吾――一」

【故國】ココク　○ふるくよりあるくに。孟、梁惠王「所謂――者、非レ有二喬木一之謂一也」＝舊國。○ふるさと。杜甫詩「相逢――人」＝故園・故鄉。

【故歲】コサイ　ふるきとし。まへのとし。喬知之詩「――雕梁燕、雙去今來隻」＝舊歲。

【故巢】コサウ　ふるす。晉書、呂光載記「燕雀何徘徊、意欲レ還二――一」

【故壍】コサク　ふるきさず。戰國策「――未レ息、驚心未レ去」＝古壍・舊壍。

【故殺】コサツ　故意にて人を殺す。一時の怒に乘じて人を殺す類。謀殺の對。

【故山】コザン　ふるさと。謝靈運詩「――日既遠、風波豈還時」劉子龜詩「――終勝二他山好一、新交不レ如二舊好一」＝故鄉・故園・故里。

【故志】コシ　○もとのこころざし。○ふるき記錄。後漢書「皆懷下陵二藏澤一、修中其――上矣」＝故記・舊記。

【故址】コシ　ふるき城、又、家のあと。賀鑄詩「人生物數不二相待一、摧頹――秋風前」＝故墟。

【故事】コジ　ふるごと、昔ありし事實。漢書、蘇武傳「明二習――一」＝古事。

【故紙】コシ　ほぐ、ふるきほぐかみ。北齊書、韓軌傳「安能作二刀筆吏一、返披二――一乎」＝反故。

【故絲】コシ　ふるきいと。梁簡文帝詩「縫鉞能二――一」

【故資】コシ　もとからの資財。漢書、婁敬傳「因二秦之――、甚美膏腴之地一、此所謂天府」

【故式】コシキ　ふるきしきたり。舊き儀式。潘尼頌「弛二齋禁一、反二――一」＝舊式。

【故實】コジツ　○ふるき事實。魯語「必問二於遺訓一、而咨二於――一」＝故例・掌故。○國古の儀式禮法などの後世のてほんとなるもの「――家」

【故人】コジン　○ふるきとも。史、范雎傳「綈袍戀戀、有二――之意一」常建詩「――家在二桃花岸一」○朋友に對して自ら稱す。後漢書、楊震傳「――

知レ君、君不レ知ニ―一何也」○死せし人、物故せし人。

【故人疎】ふるき友の情もうとくなる。孟浩然詩「不才明主棄、多病――」。

【故人之意】むかしなじみの親しき心。史、范雎傳「以三綈袍戀戀有二――一、故釋レ之」

【故心】ひさしく思ひたる心。何遜詩「――不レ存レ此」

【故榭】ふるきうてな。温庭筠詩「芳筵想像情難レ盡、――荒涼路已迷」

【故粧】もとのとほりのよそほひ。梁簡文帝詩「――猶累日」

【故障】圖○さしつかへ、さしさはり。＝事故。○不服の申したて。

【故紮】ふるきわた。晉書、周顗傳「收二得數枚素麦一、盛二――一而已」

【故蹤】ふるきあしあと、もとの形跡。謝朓詩「牧羊尋二――一」

【故棲】もとのすみか。孟郊詩「鶴禽思二――一」

【故俗】ふるきならはし。漢書、雲去病傳「因二其――一、脅二屬國一」

【故栗】ふるきもみ。管子「發二――一」

【故態】むかしのやうす。後漢書、馮光傳、帝笑曰、狂奴――也」＝舊態。

【故道】ふるきとほりみち。漢書「五月漢王、引兵從二――一、出褒レ雍」

【故宅】昔のいへ。水經「孔廟即夫子之――也」＝舊宅。

【故地】むかし所有せし地。殷堯藩詩「此去多應レ敗二――一」

【故池】ふるいけ。謝靈運詩「――不二更穿一」

【故智】前人のちゑ。史、韓世家「秦王必祖二張儀之――一」

【祖二故智一】ふるき計略にならふ。前條參看。

【故儒】ふるきとも。徐彦伯詩「浩歌向二蘭渚一、婉戀――心」

【故疇】もと作りしはたけ、疇はあぜ。陸雲賦「望二――之迴邃一兮」

【故寵】昔にかはらぬ寵愛。史、晉仲達傳「將軍又何以得二――一乎」

【故程】もと來しみち。劉言史詩「偶隱二下山雲一、荏苒失二――一」

【故轍】前に通りし車のあと。轉じ詩「量レ力守二――一」

【故都】ふるきみやこ。史、項羽紀「韓王成因二――一、都二陽翟一」＝舊都・古都。

【故櫝】ふるきひつ。蘇軾詩「請歸覲二――一、靜夜琅當レ反」

【故敗】ふるびてやぶれる。魏書、劉仁之傳「衣服――」

【故買】けいずかひ、不正なと知りながら買ひ入れる。「――犯」

【故方】ふるき藥方。史、扁鵲傳「盡去二其――一、更悉以二禁方一與レ之」

【故房】ふるくすまひしへや。李白詩「新寵方妍好、掩レ淚出二――一」

【故船】ふるきおほぶね。王褒詩「波生從二――一、沙漂湧二新潮一」

【故法】ふるきおきて。詩經、箋「紂之亂、乃不レ用二先王之――一之所レ致」

【故夫】もとのをっと。李商隱詩「不レ許文君憶二――一」＝先夫・前夫。

【故府】ふるきくら。國語「君若使三有司求二諸――一、其可レ得也」

【故弊】ふるびてやぶれる。又、其の物。南史「衣被二――一」＝故敗。

【故綱】ふるきやしろ。韓愈文「因二其――一、易而新レ之」

【故窓】ふるきつかあな。唐書、肅宗后吳氏傳「合二葬建陵一、啓二――一」

【故編】ふるきしょもつ。楊萬里詩「長亭夜灑レ足、吹レ燈呻二――一」

【故步】もとのあゆみぶり。後漢書、班固傳「薛陵餘子、有レ學二步于邯鄲一者、未レ得二髣髴一、失レ其――一、匍匐而返」

【故墉】ふるきとりで。耶律楚材詩「頹垣繞二――一」

【故老】としよりて事に明かなる人。後漢書、胡廣傳「國有二大政一、必諮二之於前訓一、諮二之於――一」＝古老。

【故吏】舊時の屬官。漢書、尹翁歸傳「悉召二――五六十人一」

【故里】ふるさと。白居易詩「二疏返二――一、四老歸二西山一」＝故山・故園・故鄉。

【故侶】ふるき友だち。劉禹錫詩「――不レ可レ追」＝故友・故人・故儔。

【故壘】ふるきとりで。晉書、李矩傳「也二手韓王――一」

【故例】昔の事がら。＝先例・故實。

【故經】もとのうまや。杜甫詩「馬嘶思二――一、歸鳥戀舊巢」

【故路】もとのみち。劉詵詩「白髮涉レ江尋二――一」＝故道。

六畫

【效】カウ　俗字は効

○いたす（致）さづける（授）左、文八「―節於府人」○のっとる（法）「則―」○いさを（功績）「勳―」「殊―」○かたどる（象）○ならふ、まなぶ（學）＝倣。○しるし、ききめ（功驗）「靈―」「驗―」荀、議兵「彊弱存亡之―」○つとむ（力）○そなふ（具）

【效尤】人の惡事をまねする、尤はとがめ。左、莊二十「原伯曰、鄭伯―レ、其亦將有レ咎」

【效義】正しき道をいたす。北齊書、高乾傳「正是英雄―レ之會也」

【效逆】不順なることをいたす。左傳「去レ順―レ、所二以速一也」

【效愚】まごころをつくすことの謙辭。漢書、主父偃傳

【效果】できばえ、じあげ。

【效驗】しるし、ききめ。潛夫論「論士必定二於志行一、毀譽必參二於――一」

【效祥】めでたききざしをあらはす。宋史「皎鑒澄徹、――千年」

【效情】まごころをつくす。史記「――正レ義」

【效誠】まごころをいたす。款曲を通ずる義。嵇康文「九土述職、貢二方物一、以――耳」

【效績】いきを。呂覽「故――銘二乎金石一」＝功績。

【效答】しるし、こたへ。樂書、劉孝綽傳「捕レ影繫レ風、終無二――一」

【效忠】まごころを君にいたす。張九齡詩「古節猶不レ棄、今人爭――」

【效能】○はたらき。＝效力。○ききめ「――書」＝效驗。

【效驗】カウセン　次條を見よ。

【效驗】カウセンナフ　已の醜をかくりみずして強ひて人眞似をする。學ぶとの善からざる喩。莊、天運「四施病レ心而曙二其里一、其里之醜人見而美レ之、歸亦捧レ心而曙二其里一、其里之富人見レ之、閉門而不レ出、貧人見レ之、挈二妻子一而去レ之走、彼知レ美レ曙、而不レ知二曙之所一以美一」曙は嗔、又、顰に同じ、眉をひそめる義。

【效命】イノチヲイタス　いのちをすてる。史記「此乃臣―レ之秋也」＝致命。

【效用】○ききめ、はたらき。○はたらきをいたす。獨孤及詩「少年當――レ」

【效力】はたらき、ききめ。文同詩「少睡始知茶――」＝效驗・効力。

【敃】敏（支部八畫）に同じ。

【敉】ビ　紙　弭に通ず

○なでる（撫）○やすんず（安）○いつくしむ（愛）

七畫

【敎】カウ　俗に教に作るは非

○をしへる（誨）知らざることを告げさとらす。又、其のをしへ「儒―」「聖―」「名―」「明―」管子、弟子職「先生施―」○いましめ（訓誨）○ならふ（效）上の施すところにして下の效ふ所。○みちびく（導）「―導」○つける（告語）○さづける（授）○のり（法）さしづ、命令、諭告。獨斷「諸侯之言曰―」後世は、親王后妃太子の命令にも用ふ。○助辭、しむ、せしむ（令）何何をして何何せしむと返り讀む。○宗教の簡稱「回―」「基督―」○清時代、教職を簡稱して單に―といふ。

同訓異義　敎・誨・訓○敎は效也、訓也、命也と註す、上より下に敎ふるなり。荀子「以レ善先レ人謂二之敎一」釋名に「敎ハ效ナリ、下ノ法效スル所ナリ」とあり。○誨は言を以て人を敎導するなり。毛詩、鄭箋「事未レ至、則豫敎レ之、臨レ事則誨レ之」とあり。書經「朝夕納レ誨、以輔二主德一」○訓は古より定めたる法則に從ひ、敎ふるなり。敎訓・訓導と熟す。詩經「古訓是式」○敎・令・使・遣・俾の別は令（人部三畫）の條を見よ。

【敎案】○諸學科の敎授の順序・方法などを書きしもの、敎授草案の略。○圖基督敎と人民との紛爭に關する案件。

【敎意】敎訓の趣旨。中說「旁行而不レ流矣、安知二――一哉」

【敎肆】をしへならはす。頭陀寺碑「方廣東被、――南移」＝敎習。

【敎育】をしへそだてる、しつけ。孟、盡心「得二天下英才一而――之」

【敎員】生徒に學業ををしへさづける人。＝師匠・先生・敎師・敎官。

【敎戒】をしへいましめる。漢書、陳萬年傳「萬年召レ咸、――於牀下」＝敎誡・訓戒・敎訓。

【敎誡】前條に同じ。

【敎學相長】敎ふると學ぶと相須つて、我學業を增進する。禮、學記「雖レ有二嘉肴一、弗レ食不レ知二其旨一也、雖レ有二至道一、弗レ學不レ知二其善一也、是故學然後知二不レ足一、敎然後知二困一、知レ不レ足、然後能自反也、知レ困然後能自強也、故曰――也」

【敎義】宗敎上の主たるむね。＝宗旨。

【敎行證】圖敎は佛一切の言敎、行は敎によりて修行進取する義、證は言敎所詮の義理に證契する義。翻譯名義集「青龍疏云、有二――、名爲二三法一」

【敎訓】をしへる、をしへ。左、文十八「顓頊氏有二不才子一、不レ可二――一」＝敎誨・敎誡。

【敎化】○敎へ導きて善に化せしむ、敎育感化。漢書、禮樂志「――浹洽、民以和睦」＝薰化。○圖敎法を垂れて化導する。法華經「轉二無上法輪一、――諸菩薩」

【敎科】敎授する科目「――書」

【敎會】基督敎徒の集會所。

【敎誨】をしへる、をしへ。詩經「――爾子一、式穀似レ之」＝訓誨。

【教官】ケウクワン ○教化に從事する役人〔周禮〕○官學の教員。

【教勸】ケウクワン はしへすすめる。杜牧文「廣二狹俗所一未レ習、一一成レ之」

【教觀】ケウクワン 佛一宗の教義たる教相と各宗旨の眞理の觀得と。

【教刑】ケウケイ 學校にて行ふ刑罰。書、舜典「扑作二一一」

【教外別傳】ケウグワイベツデン 經典又は言語などによらず、以心傳心を旨とする禪宗の教義、卽ち直指人心見性成佛といふ特別の傳〔祖庭事苑〕

【教唆】ケウサ をしへそのかす、教へてわる智慧をつける。品字箋「以レ言弄レ人、謂二之唆唆一一」

【教相判釋】ケウシヤウハンシヤク 教判を見よ。

【教示】ケウジ をしへしめす。元稹詩「父兄相一一、求レ利莫レ求レ名」

【教師】ケウシ ○教員に同じ。○耶蘇教の傳道師「宣一一」

【教祖】ケウソ ○教へ習はす。梁簡文帝文「業レ徒一一、學侶成レ羣」○教師。

【教主】ケウシユ 宗教をはじめし人。教祖。

【教授】ケウジユ ○をしへさづける。史、仲尼弟子傳「子夏居二西河一一一、爲二魏文侯師一」○學官の職名。書言故事「宋元豐、始興二三舍、諸大郡府始置二一一人一」○圓高等學校以上の教師の職名。

【教訓】ケウクン をしへならす。漢書、公孫弘傳「及二一一服習之至二可二牽持駕服一」＝教授。

【教書】ケウショ ○大統領の諭告書。○圓將軍の命令書。

【教練】ケウレン はたおるわざををしへる。古樂府「十三教二汝織一」

【教授】ケウジユ 教へならす。周禮「服不氏掌養二猛獸一而一一之」＝教訓。

【教戰】ケウセン 戰爭の法ををしへる。蘇軾文「旦暮一レ一」

【教道】ケウダウ 次條に同じ。韓詩外傳「謹二其一一一」＝訓道。

【教導】ケウダウ をしへみちびく。又、をしへ「一一職」「一一團」＝教道。

【教治】ケウチ をしへをさめる。周禮「平二一一、則冢宰聽レ之」

【教敕】ケウチヨク をしへいましむ。參同契「嚴父施レ令、一二子孫」＝教戒。

【教程】ケウテイ 教範に同じ。

【教典】ケウテン ○教育を掌り王を佐けて邦國を安んずる法則。又、人民を教へる法令。周禮、天官「二曰、一一」○宗教上の經典。

【教育】ケウイク をしへただす。漢書、光治レ內、君侯治レ外、宜下有二以一一、使中光母レ負二天下一」光は霍光。＝教訓督察。

【教坊】ケウバウ 歌舞ををしへる所。唐書、百官志「開元二年、置二一一於蓬萊宮側、京都置二左右一一、掌二俳優雜劇一」

【教判】ケウハン 圓教相判釋の略、釋迦一代の教理を其の宗派の見地より分類する義。例へば天台宗にて五時八教となす類。

【教範】ケウハン 教へるのり、教育の方法。又、其の形式。＝教程。

【教鞭】ケウベン ○兒童を教へるため教師の執りて指示するむち。○轉じて教師となるを「執二一一一」といふ。

【教本】ケウホン をしへのはじめ。禮記「祭者教之本也」

【教命】ケウメイ 皇后のおほせ。五代史、唐劉后傳「皇太后及皇后、交二通藩鎭、太后稱二詔令、皇后稱二一一一」＝令旨・懿旨。

【教諭】ケウユ をしへさとす。禮記「是以一一而德成也」＝教論。

【教論】ケウロン ○前條に同じ。○中學程度の學校の教師の職名「中學校一一」

【教練】ケウレン 兵卒ををしへねる。＝訓練。

【教勸】ケウクワン をしへいましめる。後漢書、馬廖傳「廖性寬緩、不レ能一一二子孫一」＝教戒。

【教學半】ケウガクハンナリ 人を教ふるも亦我學を助くる故に、其の學ぶ業の半に居るとの義。禮記「兌命曰、敎學半」敎は敎。

【敖】

㊀ガウ・ゴウ ㊁ガウ・ゴウ 豪 號

㊀たはむる（戲）あそぶ（遊）遊戲「意一」「遊一」詩、邶風「以一以遊」遨。○傲。○かまびすし。＝喧。○蟹のはさみ。＝螯。○いる。＝熬。○一一は身の長き貌。又、欣ぶ貌。詩、衞風「碩人一一」又、おごる貌。爾雅「仇之一一」○よろこばし。㊁おごる、おごり（倨）＝傲。○あなどる（慢）「一慢」○なぶる（調弄）

【敖遊】ガウイウ あそぶ。詩、邶風「以敖以遊」蘇軾賦「挾二飛仙一以一一、抱二明月一而長終」＝敖翔。

【敖敖】ガウガウ 字解を見よ。

【敖惰】ガウダ おごりおこたる。大學「之二其所一一一」而辟焉」

【敖蔑】ガウベツ おごりあなどる。王沈、釋時論「一一一道素、慢二吁權門」

【敖民】ガウミン なまけ遊ぶたみ。漢書「朝無二廢官、邑無二一一」註「敖謂二逸遊一」

【敖不レ可レ長】ガウフカカチヤウ おごる心は、增長すべからず。曲禮「一一、欲不レ可レ縱、志不レ可レ滿、樂不レ可レ極」

【救】

キウ 宥 或は捄に作る

○すくふ、苦む者を助ける「一助」「一援」すくひ。○たすく、たすけ（助）○まもる（護）○いましむ（禁）○とどむ（止）過を匡タし止める「匡一」論、八佾「女弗能一與」○をさめる（治）呂覽、勸學「是一病而飲

之以薑也」

圓圖 救・捄・拯・援・濟○救は助けまもり、また防ぎ止むる意あり、兵敗求レ救、匡二救其惡一の如し。○捄は救に同じ。○拯は助けて引き擧ぐる意、拯レ溺の如し。○援は引なり、引きよせて助くるなり。孟子「嫂溺、援レ之以レ手」○濟はわたすとも訓む、わたれぬ場をわたしてやる意。韓文、原道「爲二之醫藥一、以濟二其夭死一」

【救援】キウエン すくひたすける。＝救助・援救。

【救解】キウカイ 人の罪をすくふ爲めにいひわけする。宋史、孫思恭傳「歐陽修出二政府一、思恭盡レ力一一」

【救扞】キウカン すくひてふせぎまもる。册府元龜「命二左右一一一獲レ免」

【救急】キウキフ きふばをすくふ、危急の難を救ふ。

【救窘】キウキヨウ すくひふせぐ。國語「如レ墜二大川一、濟而不レ可二一一一也」

【救火】キウクワ 火をすくふ、火事を消し止める。鄧析子「不レ治二其本一而務二其末一、譬如二拯レ溺錘一之以レ石、一一投レ之以薪」

【救火夫】キウクワフ 消防夫。願體集「凡城郭村鎭、公設二一一一數十名、使二其晝夜巡邏一」

【救荒】キウクワウ 飢饉をすくふ、凶年の困苦を助けすくふ「一一本草」＝救凶。

【救荒植物】キウクワウショクブツ 飢饉などしに穀類野菜の代用食料に供せられる植物。

【救護】キウゴ すくひまもる。救助保護。周禮、疏「一一、使二天下得二其所一也」

【救災】キウサイ わざはひをすくふ。左傳「一一一恤」鄭道也」

【救濟】キウサイ すくふ。吳志「思下平二世難一、一中一粢庶上」＝救恤・濟救・拯救。

【救時】キウジ 時世をすくふ。時弊を匡救する。唐書、姚崇傳「崇爲二一一宰相一」＝救世。

【救恤】キウジユツ すくひあはれむ〔唐書、蘇世長傳〕＝救濟。

【救助】キウジヨ すくひたすける。戰國策「至二其相一一一如一也」＝救恤。

【救世】キウセイ 世をすくふ。唐書、儒學傳「武爲二一一砭劑一」砭は醫の用ふる石針。劑は藥。

【救世軍】キウセイグン 耶蘇教の一派、軍隊組織にて傳道するもの、英人ブースの首唱。

【救世主】キウセイシユ 世をすくふぬし。罪惡によりて滅亡する人類を救ふ主の義、耶蘇教の異稱。＝救主。

【救難】キウナン なんぎをすくふ。史記「常出二奇計一、救二紛糾之難一」＝拯難。

【救弊】キウヘイ 衰へやぶれたるをすくふ。宋史、黃震傳「安有二先儒爲レ法、不レ思レ救二其弊一耶」＝拯弊。

【救命】キウメイ 人命をすくふ。

【救命帶】キウメイタイ 水に溺るるをふせぐ爲めゴック製の環狀の袋の中にコルクをつめしもの。＝救命浮環。

【救藥】キウヤク すくふ。又、病をなほす。詩、大雅、板「多將熇熇、不レ可二一一一」

【救療】キウレウ すくひいやす。北史、李元忠傳「性仁恕、無二貴賤一、皆爲二一一一」＝療救・救藥。

【敔】

ギヨ

○いましむ（禁）○とどむ（止）○樂器の名。木にて作り、長さ一尺、形、伏虎の如く背に二十七のきだきだあり、音樂を止むる時の合圖に用ふる「柷一」

【敘】

ジヨ 圓 叙は俗字、通じて序に作る

○ついで（次第）「秩一」ついづ。次第順序をつける。書、舜典「百揆時一」○物事のいとぐち（緒）○はしがき。＝序。○のぶ（述・抒）「暢一」○つらぬ（陳）陳述する「一別」○官位を進める「一位」○圓宴會をいふ。王羲之、蘭亭記「亦足以暢一幽情」の意に本づく。

【敘位】ジヨイ ○位記を授ける。○國昔、正月五日に諸臣に位を賜ひし公事。

【敘勳】ジヨクン 勳等を授け勳章を賜ふ。

【敘景】ジヨケイ けしきをのべ記する、風景をのべ作る。

【敘次】ジヨジ ついで、しだい。＝順序・序次。

【敘事】ジヨジ 事實を其のまゝのべる。又、其の文詩。

【敘事詩】ジヨジシ 議論などを交へず、主として事實をのべたる韻文の一種。敘情詩の對。

【敘情詩】ジヨジヤウシ 自己の感想を表はす韻文の一種。敘事詩の對。＝抒情詩。

【敘爵】ジヨシヤク ○爵位をさづける。○國古、始めて從五位下に敘せられるをいふ。

【敘述】ジヨジユツ 次第を立ててのべる。＝敘說。

【敘說】ジヨセツ 次第をたててとく。又、其の文章。＝敘述。

【敘任】ジヨニン 位を授け官に任ずる。

【敘別】ジヨベツ わかれをつげる。元稹詩「逡巡來一一、頭白顏色驚」＝告別。

【敘論】ジヨロン ○次第を立てて說き立てる。又、其の論說。○書物の初に出す議論。

【敘】

敘（前條）の俗字。

【敓】

タツ 易

ぬすむ、うばふ（强取）奪に通ず。

【敕】チョク

本、勑に作る、一に勅に作る熟語は勅（力部七畫）を見よ

○いましむ（誡・警）○ただす（正）○かたむ（固）○をさむ（理）○つつしむ（謹・飭）「一身」○みことのり「詔一」○つぐ（語）○すすむ（勸）○いそぐ（急）○しるす（書）○こころむ（試）○ととのふ（整）○つかる（勞）○せむ（責讓）○一勒チョクはえびすの種族の名「一勒歌」

【敗】ハイ　卦

○やぶる、やぶれ（破）成の反對「成一」○まける。勝の對稱「勝一」「大一」○そこなふ、こぼつ（毀・損）「損一」○くづれる（頽）「頽一」○くつがへる（覆）○つひゆ（潰）○くづす（壞）○しほむ（彫）丁卯集「葉殘花一尚維舟」○くさる（腐）「腐一」「臭一」論、鄉黨、魚餒而肉一」○ほろぼす（滅）○わざはひ（凶殘）○司一は官名、陳・楚にては司寇を司一といふ。

同訓異義　敗・破・壞・傷・毀・隳・敝の別は破（石部五畫）の條を見よ。

【敗衣】ハイイ　やぶれぎもの。司空曙詩「安貧貧著二一一一」＝敝衣・弊衣。

【轉敗爲功】ハイヲテンジテコウトナス　失敗を利用して反りて之をてがらに變ずる。史、管仲傳「其爲政也、善轉敗而爲功」

【敗荷】ハイカ　やぶれたる蓮の葉、荷はは ちす。＝枯荷。

【敗朽】ハイキュウ　くさる。參同契「金性不二一一、故爲二萬物寶」＝腐朽・腐敗。

【敗棋有二勝著一】ハイキニユウショウアリ　負け碁に反りて勝つ手あり「楊愼、病榻手吹」五代史、周臣傳論「勝者所用敗者之棋也、爲之易二置其處一而勝矣」

【敗笈】ハイキュウ　こはれたる本箱。蘇舜欽詩「侈侈張二一一一」

【敗卻】ハイキャク　やぶれてしりぞく。史、淮陰侯傳「一一二彭城」＝敗退。

【敗軍】ハイグン　まけいくさ。又、まけたる軍勢、敗兵。史、項羽紀「諸一一皆會」

【敗軍將不可以言勇】ハイグンノショウハフカヲモツテユウヲイフベシ　敗北せる將は、再び軍事を說くの資格なし。史、淮陰侯傳「廣武君辭謝曰、臣聞、敗軍之將、不可以言勇、亡國之大夫、不可以圖一存、今臣敗亡之虜、何足三以權二大事一乎」

【敗績】ハイセキ　やぶれつひゆる。＝潰敗。

【敗壞】ハイカイ　やぶれくづれる。後漢書、虞詡傳「若衣一一、一以相補、猶有所完」＝弊壞・敗類。

【敗業】ハイギョウ　仕事をしくじる。戰國策「是故事無二一一一」＝敗績。

【敗鼓】ハイコ　やぶれだいこ。韓愈、進學解「牛溲馬勃、一一之皮」

【敗穀】ハイコク　穀物をやぶりそこなふ。禮記「介蟲一一、戎兵乃來」

【敗碎】ハイサイ　やぶれくだける。禮記、疏「若鍛、則一一不直」

【敗喪】ハイソウ　やぶれほろぶ。王羲之文「安西一一、公私惋怛」＝敗亡。

【敗散】ハイサン　やぶれちる。宋書、鄒鮮之傳「民敵一一、自然之理」

【敗子】ハイシ　やくざなる不孝の子。史、李斯傳「韓子曰、慈母有二一一一」

【敗死】ハイシ　戰にまけてうちじにする。

【敗紙】ハイシ　ほご、かみくづ。志林「以二一一牛幅、書二其上一」＝反故・故紙。

【敗將】ハイショウ　いくさにまけたる大將。敗軍の將。

【敗傷】ハイショウ　やぶれそこなふ。韓非子「藏二大器一而數徙之、則多二一一一」

【敗菅】ハイカン　女郎花ヤマハギの異名、野生の草花の一、高二三尺、秋小黃花を綴生す。＝苦蔗菜〔古今書統〕

【敗絮】ハイショ　ぼろぼろのふるわた。齊書、卞彬傳「一一不能二自釋一」

【敗蕉】ハイショウ　やぶれたるばせを。張時徹詩「嚴霜切重衾、疾風梳二一一一」

【敗績】ハイセキ　○戰ひて大いにやぶれる、其のいさをを失ふ義。左、莊十一「大崩曰二一一一」○廣く事のやぶれるにいふ。國語「國無二一一一」＝敗績。

【敗戰】ハイセン　たたかひにやぶれる。又、まけいくさ。＝敗軍。

【敗氈】ハイセン　やぶれたる毛布。五代史、李愚傳「一一弊席、四壁蕭然」

【敗訴】ハイソ　まけくじ、訴訟にまける。

【敗走】ハイソウ　やぶれてはしる。宋史、岳飛傳「單騎持二丈八鐵槍一、刺二殺黑風大王一、敵衆一一」＝敗北・敗遁。

【敗退】ハイタイ　まけてしりぞく、敗れて退卻する。＝敗卻。

【敗類】ハイルイ　やぶれくづれる。＝敗壞・類敗。

【敗壞】ハイカイ　たたかひやぶれる。五代史、荷存霈傳「大小百餘戰、未二嘗一一一」

【敗兆】ハイチョウ　戰にまける前兆。

【敗天公】ハイテンコウ　やぶれ笠、天の形は笠の如し、故に天公といふ。本草綱目、注「弘景曰、此乃所二戴竹笠之敗者（中略）等天論云、天形如二笠而冒二地之表一、則天公之名、蓋取二乎此一」

【敗德】ハイトク　德義をやぶる、不德義「一一漢」＝悖德。

【敗遁】ハイトン　戰やぶれてにげる〔水經、注〕

【因敗爲成】ハイニヨリテセイトナス　失敗を轉じて成功と爲す義。劉琨文「昔、曹洙三北、而取二功于柯盟一、馮異垂翅、而

奮二翼于澠池一、皆能——」史、管仲傳「其爲政善轉敗爲功」

【敗亡】ハイボウ　やぶれほろぶ。＝敗滅・敗喪。

【敗紡】ハイボウ　やぶれたるふね。溫庭筠詩「荷盡平橋闊、葦稀一一沈」

【敗報】ハイホウ　まけたるしらせ。＝敗聞。

【敗筆】ハイヒツ　ちびふで、つかひふるしのふで。太平廣記「僧智永學書、一一如二丘山一」＝退筆・禿筆。

【敗屬】ハイゾク　やぶれくさる。宋史、謝德權傳「唐祿多患二地下濕一、德權累壁爲蠹、以藥防之、遂無二一一一」＝腐敗。

【敗聞】ハイブン　まけたるしらせ。＝敗報。

【敗兵】ハイヘイ　戰にまけたる兵。＝敗卒。

【敗敝】ハイヘイ　やぶれ。やぶれ。貫父文「衣服一一」＝敗弊・破敝。

【敗壁】ハイヘキ　やぶれたるかべ。孫覿詩「破扉風自掩、一一雨先頹」＝破壁。

【敗艇】ハイテイ　やぶれたる底浅く平かなる舟。廬山記「龍逢委二船山頂一、今有二一一一」

【敗北】ハイボク　まけてにげる、北は陰にて背く故に敗走の義とす。史、項羽紀「未嘗一一一」＝敗走・敗遁。

【敗戮】ハイリク　まけてほろぶ。魏志、王昶傳「皆以二頑邪一一一」＝敗亡。

【敗滅】ハイメツ　敗亡に同じ。

【敗餘】ハイヨ　まけたるあと。

【敗蠅】ハイヨウ　やぶれただる。朱子題跋「此紙幸脫二于一一之中一」＝腐敗糜爛。

【敗柳】ハイリウ　枯れかかれるやなぎ。韓偓詩「一一凋花松不知」＝殘柳・衰柳。

【敗禮】ハイレイ　禮をやぶる。書經「欲敗一度、縱一一」

【敏】ビン　軫

○とし、はやし、すばやし（疾）すみやか（速）「精一」「明一」「銳一」「捷一」論、學而「一二於事一而愼於言」○おごそか（莊）○つつしむ（敬）○つとむる（勉）○さとし、かしこし（聰）「警一」「察一」「聰一」「穎一」論、公冶長「一而好學」○おほゆび、足の拇指。

【敏銳】ビンエイ　さとくするどし。唐書、張薦傳「薦一一有二文辭一」＝銳敏・穎敏。

【敏黠】ビンカツ　さとくわるがしこし。遼史、太祖紀「謂二左右一曰、諸弟性雖二一一而善一、奸稔惡、皆自矜一有二出一人之智一」

【敏給】ビンキュウ　さとくしてくちまへがうまし「史、夏紀」＝捷給・辯給。

【敏活】ビンクワツ　さとくしてはたらきあり。＝敏慧。

【敏慧】ビンケイ　さとし。五代史、謝彥章傳「惜二其一一一以爲一子、授二之兵法一」＝機敏・慧敏・銳敏。

【敏悟】ビンゴ　さとし。宋史、元絳傳「生而一一、五歲能作一詩」＝悟敏。

【敏識】ビンシキ　さとくしる。賈至文「雅志沖澹、一一精通」

【敏疾】ビンシツ　すばやし。高適文「懷二果斷之沈潛一、任二性情之一一」＝敏速。

【敏政】ビンセイ　まつりごとを勉め行ふ。中庸「人道一一」

【敏切】ビンセツ　さとくして適切なり。魏志、王肅傳「辭義一一、辨而有一禮」

【敏捷】ビンセツ　すばやし。蜀志、張裔傳「幹理一一」＝捷敏。

【敏贍】ビンセン　さとくして智が十分に足る。南史、臧盾傳「爲人、一一有二風力」

【敏速】ビンソク　さとくすみやかなり。晉書、車胤傳「機悟一一、甚有二鄉曲之譽一」＝敏疾。

【敏達】ビンタツ　さとくして事理に通達する。漢書、京房傳「一一好一政、欲二爲一國忠一」＝通敏。

【敏智】ビンチ　さとし。又、さとき智慧。劉攽文「一一通達」＝聰敏。

【敏有一功】ビンナレバ　すばやく事を勤むれば成功あり。論、陽貨「寬則得一衆、信則民任焉、敏則有一功、公則說」

【敏邁】ビンマイ　すぐれてかしこし。東軒筆錄「歐陽永叔之詩、才力一一」

【敏腕】ビンワン　圖うできき。すばやき手腕「一一家」

【敕】チョク　八　畫

勅（力部七畫）に同じ。

【敢】カン　感

○あへて、あへてす、おしきってする。一不は反語。不一は打消し。轉じて失禮ながらの意。○おかす（犯）いさむ（勇）進取する「勇一」「一爲」「果一」

同訓異義　敢・勇敢などと連用す、憚らざる義なり、敢冒之士とは、憚らずして直冒する士をいふ。又、うやまひの意に用ふ、敢告二天地之神一の如し、天地の神に告ぐることは、憚り多きことなれども、憚ることなくといふ意なり。○肯は可也と註す、得心する義なり、肯諾とはうなづきて、うけがふ義なり、非一不二敢冒一乃不二肯冒一爾、とかけば、憚りて冒ふことを得ざるにはあらざれども、冒ふことをうけがはずといふ義なり。

【敢爲】カンイ　思ひきりて行ふ。韓愈、進學解「勇二於一一」

【敢毅】カンキ　おしきりてつよし。唐書、石雄傳「一一善戰、氣壓二軍中一」＝果毅。

【敢決】カンケツ　おしきって決斷する。杜甫

詩「壯夫思ニ―一、哀韶惜ニ精靈一」＝果決・敢斷。

【敢爭】カンすすみてあらそふ、思ひきって爭ひいさめる。

【敢死】カンシ・しにものぐるひ。＝必死・殊死。

【敢然】カンゼン　思ひきってしっかりする貌。＝斷乎。

【敢戰】カンセン　心を決して劇がしく戰ふ。「五代史、唐廢帝紀」＝血戰。

【敢斷】カンダン　思ひきりて決斷する。大戴禮「誠立而―一」＝勇斷・果斷・剛斷・敢決。

【敢直】カンチョク　心勇ましくして正し。唐書、段平仲傳「朝廷有ニ得失一、未三嘗不ニ論奏一、世推ニ其―一」

【敢往】カンワウ　おもひきり勇往して顧みず。漢書、鼂縱傳「治―一」

【散】

㊀サン　㊁サン　㊂早　㊃寒

㊀ちる、ちらす「分―」曲禮「積而能―」○はなればなれになる（分離）衆の對「離―」○はなつ（放）外に出る「放―」○ひま（閑暇）「閑―」韓愈、進學解「投閒置―」○しく（布）○むだ。○ほしいまま（放）自ら檢束せず「―人」「―儒」○こぐすり、藥石の粉。○さかだる（酒尊）㊂琴曲の名。晉書、嵇康傳「廣陵―」○足がひょろめく。史、信陵君傳「槃―行汲」＝跚。○國ちる、にじみ廣がる「墨が―る」

【散位】サン　國くらゐのみありて職掌無きもの、さんに。

【散意】イサン　心を他の方にちらす。阮瑀文「抱懷數年、未ノ得ノ―」

【散佚】イツ　次條に同じ、佚は逸。

【散逸】イツ　○四方にちり失せる。北史「山東寇亂、學者―一」＝散佚・散軼。○世事に關係せずしてひまである。南史、梁忠烈世子方傳「性愛ニ林泉一、好ニ―一」

【散軼】イツ　ちり失せる、軼は逸。＝散佚・散逸。

【散員】サン　定りたる任務なき人數。又、其の人。隋書、李德林傳「既是四省―一、非ニ其所ニ好」白居易詩「―足ノ庇ノ身、薄俸可ノ養ノ家」＝閑員。

【散蕙】ウ　きばらし、うさはらし。＝散ニ鬱陶一「北夢瑣言」

【散液】エキ　ちり解ける。齊民要術「下ノ水十日、塊既―一」

【散樂】ガク　○俗間野人の音樂。周禮、旄人「掌ノ教ノ舞ニ―一」○國後世の能樂の源をなせる古の舞樂。さるがく「猿樂」

【散花】クワ　ちる花。又、花をちらす。陸游詩「釣ノ魚―一洲」

【散會】クワイ　集會が終りて各自退散する、おひらき。

【散官】クワン　常職なくひま多き官「通鑑、唐玄宗紀、注」＝散職・閒職。

【散關】クワン　一名大―一、陝西省寶雞縣の西南に在り、秦・蜀往來の要道たり。＝崤谷。

【散缺】ケツ　ちりてかけ失せる。魏書、樂志「樂章―一、伶官失ノ守」＝殘缺。

【散見】ケン　あちらこちらに散りて見える。

【散在】ザイ　諸所にちりてある。

【散材】ザイ　無用の木。やくにたたぬ人に喩ふ。陸游詩「社櫟終然幸ニ―一」＝散木。

【散財】ザイ　○錢財をわかちやる。書經「散ニ鹿臺之財一」○國ぜいたくなる失費。

【散齊】サイ　古、七日閒のものいみ。齊は齋。禮記「故―一七日以定ノ之」

【散策】サク　杖を曳きてそぞろあるきす。蘇軾詩「―一塵外遊」

【散史】シ　民閒にありて文筆に從事する人、在野の文人又歷史家。

【散志】シ　こころざしを他に馳せる。禮記「齊者不ノ樂ノ冒、不ニ敢散ニ其志一也」

【散絲】シ　いとをちらす。ちらしたるいと。張協詩「密雨如ニ―一」

【散積】シ　たくは（をちらす。五代史「勸ニ其ニ―ノ以禳之」

【散賜】シ　わかちあたふ。漢書、儒林張山傳「―ニ九族一、田畝不ノ益」

【散失】シツ　ちりてなくなる。＝散逸。

【散人】ジン　自ら檢束せざる人。又、世の用をなさざるひまびと。書言故事「唐陸龜蒙以ノ舟載ニ茶竈笠釣具一、往ニ來江湖一號ニ江湖―一」

【散盡】ジン　ちらしつくす。李白詩「―空掉ノ臂」

【散釋】シャク　ちりとける。後漢書「神色自若、辭對無ノ變、事途―一」

【散殊】シュ　いろいろにことなる。禮記「天高地下、萬物―一、而禮制行焉」

【散儒】ジュ　自ら檢束せずして世の用とならざる儒者。荀、勸學「隆ノ禮雖ノ未ノ明、法士也、不ノ隆ノ禮、雖ニ案繩墨一―也」

【散絮】ジョ　わたをちらす。ちりたる綿。李建勳詩「狂酒玉壺初―ノ―」

【散宄】ジョウ　務なくひまなり。王禹偁詩「平生好ニ泉石一、況復官―一」＝閑散。

【散職】シキ　定まりたる務なき官吏。白居易詩「―一無ニ拘束一」＝散官。

【散錢】セン　○ぜにをちらす。晉書「蒙遜升ニ南景門一、ノ以賜ニ百姓一」○ぜにざしにとほさざるばら錢。西陽雜俎「根下大蠻二、―一實ノ之」

【散地】チ　○無用の地。白居易詩「―一閒居少ニ鷗鴨一」○自國內にて戰ふ時は、兵士家を思ひて散じ易し、之を―一といふ。孫子、九地「諸侯自戰ニ其地一者、爲ニ―一」

【散置】チ　ちらしおく。晉書、麻襦傳

「乞得ニ米穀一不ノ食、輒―ニ一大路一」

【散罫】ケイ　竹くじをちらす。世說「每與ニ夫人一燭下ノ―一算計」

【散茶】チャ　國ひきちゃ。＝抹茶。

【散擲】テキ　ちらしなげる。蘇軾詩「石間―一如ニ風雨一」

【散敗】ハイ　ちりやぶれる　ちらしくづす。南史、垣護之傳「―一而歸」

【散芳】ハウ　かをりをちらす。謝靈運文「淵轉ノ渚而―ノ―」

【散樸】サンパク　きぢのままにてかざりなき古の風を失ひなくす。吳均詩「三皇已―ノ―、五帝初尙ノ賢」

【散髮】ハツ　○かみをちらす。後漢書、袁閎傳「終―ノ―絕ノ世」○國ざんぎり（斬髮）結髮の對。

【散布】フ　ちりしく。韓愈詩「攢生猶有ノ隙、―一忽無ノ痕」

【散文】ブン　字數・平仄・韻・對句などに制限なき文、卽ち有韻及駢儷の文に非ざる普通の文。韻文の對。

【散粉】フン　ちりたるこな。宗懷詩「―一初成ノ蝶、翦綵作ニ新梅一」

【散葉】ヨウ　ちりみだれる。文心雕龍「憲章―一、彝倫攸ノ斁」＝散亂。

【散兵】ヘイ　まばらに兵を配置する。隋書「馬步隊與ニ軍中―一、交爲ニ兩番、五日而代」

【散步】ポ　そぞろあるき。金史、太祖紀「―ニ門外、南望ニ高阜一」瑯環記「古之老人、飯後必―一」＝散策・漫步・閒遊。

【散木】ボク　用に適せざる木。莊、人閒世「―一也、以爲ノ舟則沈、以爲ニ棺槨一則速腐、以爲ノ器則速毀、以爲ニ門戶一則液樠、以爲ノ柱則蠹、是不材之木也、無ノ所ノ可ノ用」

【散漫】マン　ちらばりてとりとめなし。唐書、五行志「朱全忠決ニ其堤一、因爲ニ二河一、―ニ千餘里一」

【散陽】ヨウ　冬時に陽氣の藏まらざる義。國語「天無ニ伏陰一、地無ニ―一」

【散藥】ヤク　こなぐすり（粉藥）

【散亂】ラン　ちりみだれる。史、始皇紀「天下―一」＝散案。

【散吏】リ　閑散なる官吏。千寶、晉紀總論「王弼者青州之―也」＝散官。

【散慮】リョ　心のうさをはらふ。張九齡文「林澤之閒、聊足ノ―ノ―」

【散僚】リョウ　下級の官吏。又、務少くひまなる官吏。舊唐書「夫御ニ宰相一當ノ委ノ之信ノ之親ノ之禮ヲ之、如手ノ事不ノ効、于ノ國無ノ勞、則罷ニ之一―一黜ニ之遠郡一」

【散錄】ロク　順序次第を立てず、筆にまかせて書きとめたるもの、そぞろがき。＝漫錄・漫筆・隨筆。

【敞】

シャウ　㊇

○たかし（高）土地高く見はらしよし。史、淮陰侯傳「行營高―地」○たかく、たひらか（高平）「夷―」「平―」○ほがらか。○ひろし、寬大なる貌。○ひらく、平かに開く。○あらはれる（露）

【敞豁】クワツ　ひろくうちひらける。杜甫詩「亭臺隨ニ高下一、―一當ニ清川一」＝弘敞・廣敞。

【敞麗】レイ　ひろくうるはし。洛陽伽藍記「修梵寺北有ニ永和里一、里中皆高門華屋、齋館―一」

【敦】

㊀トン　元　㊁タイ　㊂タン　㊃テウ　㊄トン　㊅トン　㊆タイ　㊇ヒ　㊈ヒ　㊉ヒ　㊊ヒ　㊋ヒ　㊌ヒ　㊍ヒ　㊎ヒ　㊏ヒ　㊐ヒ　㊑ヒ　㊒ヒ　㊓ヒ　㊔ヒ　㊕ヒ　㊖ヒ　㊗ヒ　㊘ヒ　㊙ヒ　㊚ヒ　㊛ヒ　㊜ヒ　㊝ヒ　㊞ヒ　㊟ヒ　㊠ヒ　㊡ヒ　㊢ヒ　㊣ヒ　㊤ヒ　㊥ヒ　㊦ヒ　㊧ヒ　㊨ヒ　㊩ヒ　㊪ヒ　㊫ヒ　㊬ヒ　㊭ヒ　㊮ヒ　㊯ヒ　㊰ヒ　㊱ヒ　㊲ヒ　㊳ヒ　㊴ヒ　㊵ヒ　㊶ヒ　㊷ヒ　㊸ヒ　㊹ヒ　㊺ヒ　㊻ヒ　㊼ヒ　㊽ヒ　㊾ヒ　㊿ヒ　(51)ヒ　(52)ヒ　(53)ヒ　(54)ヒ　(55)ヒ　(56)ヒ　(57)ヒ　(58)ヒ　(59)ヒ　(60)ヒ　(61)ヒ　(62)ヒ　(63)ヒ　(64)ヒ　(65)ヒ　(66)ヒ　(67)ヒ　(68)ヒ　(69)ヒ　(70)ヒ　(71)ヒ　(72)ヒ　(73)ヒ　(74)ヒ　(75)ヒ　(76)ヒ　(77)ヒ　(78)ヒ　(79)ヒ　(80)ヒ　(81)ヒ　(82)ヒ　(83)ヒ　(84)ヒ　(85)ヒ　(86)ヒ　(87)ヒ　(88)ヒ　(89)ヒ　(90)ヒ　(91)ヒ　(92)ヒ　(93)ヒ　(94)ヒ　(95)ヒ　(96)ヒ　(97)ヒ　(98)ヒ　(99)ヒ　(100)ヒ　(101)ヒ　(102)ヒ　(103)ヒ　(104)ヒ　(105)ヒ　(106)ヒ　(107)ヒ　(108)ヒ　(109)ヒ　(110)ヒ　(111)ヒ　(112)ヒ　(113)ヒ　(114)ヒ　(115)ヒ　(116)ヒ　(117)ヒ　(118)ヒ　(119)ヒ　(120)ヒ　(121)ヒ　(122)ヒ　(123)ヒ　(124)ヒ　(125)ヒ　(126)ヒ　(127)ヒ　(128)ヒ　(129)ヒ　(130)ヒ　(131)ヒ　(132)ヒ　(133)ヒ　(134)ヒ　(135)ヒ　(136)ヒ　(137)ヒ　(138)ヒ　(139)ヒ　(140)ヒ　(141)ヒ　(142)ヒ　(143)ヒ　(144)ヒ　(145)ヒ　(146)ヒ　(147)ヒ　(148)ヒ　(149)ヒ　(150)ヒ　(151)ヒ　(152)ヒ　(153)ヒ　(154)ヒ　(155)ヒ　(156)ヒ　(157)ヒ　(158)ヒ　(159)ヒ　(160)ヒ　(161)ヒ　(162)ヒ　(163)ヒ　(164)ヒ　(165)ヒ　(166)ヒ　(167)ヒ　(168)ヒ　(169)ヒ　(170)ヒ　(171)ヒ　(172)ヒ　(173)ヒ　(174)ヒ　(175)ヒ　(176)ヒ　(177)ヒ　(178)ヒ　(179)ヒ　(180)ヒ　(181)ヒ　(182)ヒ　(183)ヒ　(184)ヒ　(185)ヒ　(186)ヒ　(187)ヒ　(188)ヒ　(189)ヒ　(190)ヒ　(191)ヒ　(192)ヒ　(193)ヒ　(194)ヒ　(195)ヒ　(196)ヒ　(197)ヒ　(198)ヒ　(199)ヒ　(200)ヒ　(201)ヒ　(202)ヒ　(203)ヒ　(204)ヒ　(205)ヒ　(206)ヒ　(207)ヒ　(208)ヒ　(209)ヒ　(210)ヒ　(211)ヒ　(212)ヒ　(213)ヒ　(214)ヒ　(215)ヒ　(216)ヒ　(217)ヒ　(218)ヒ　(219)ヒ　(220)ヒ　(221)ヒ　(222)ヒ　(223)ヒ　(224)ヒ　(225)ヒ　(226)ヒ　(227)ヒ　(228)ヒ　(229)ヒ　(230)ヒ　(231)ヒ　(232)ヒ　(233)ヒ　(234)ヒ　(235)ヒ　(236)ヒ　(237)ヒ　(238)ヒ　(239)ヒ　(240)ヒ　(241)ヒ　(242)ヒ　(243)ヒ　(244)ヒ　(245)ヒ　(246)ヒ　(247)ヒ　(248)ヒ　(249)ヒ　(250)ヒ　(251)ヒ　(252)ヒ　(253)ヒ　(254)ヒ　(255)ヒ　(256)ヒ　(257)ヒ　(258)ヒ　(259)ヒ　(260)ヒ　(261)ヒ　(262)ヒ　(263)ヒ　(264)ヒ　(265)ヒ　(266)ヒ　(267)ヒ　(268)ヒ　(269)ヒ　(270)ヒ　(271)ヒ　(272)ヒ　(273)ヒ　(274)ヒ　(275)ヒ　(276)ヒ　(277)ヒ　(278)ヒ　(279)ヒ　(280)ヒ　(281)ヒ　(282)ヒ　(283)ヒ　(284)ヒ　(285)ヒ　(286)ヒ　(287)ヒ　(288)ヒ　(289)ヒ　(290)ヒ　(291)ヒ　(292)ヒ　(293)ヒ　(294)ヒ　(295)ヒ　(296)ヒ　(297)ヒ　(298)ヒ　(299)ヒ　(300)ヒ　(301)ヒ　(302)ヒ　(303)ヒ　(304)ヒ　(305)ヒ　(306)ヒ　(307)ヒ　(308)ヒ　(309)ヒ　(310)ヒ　(311)ヒ　(312)ヒ　(313)ヒ　(314)ヒ　(315)ヒ　(316)ヒ　(317)ヒ　(318)ヒ　(319)ヒ　(320)ヒ　(321)ヒ　(322)ヒ　(323)ヒ　(324)ヒ　(325)ヒ　(326)ヒ　(327)ヒ　(328)ヒ　(329)ヒ　(330)ヒ　(331)ヒ　(332)ヒ　(333)ヒ　(334)ヒ　(335)ヒ　(336)ヒ　(337)ヒ　(338)ヒ　(339)ヒ　(340)ヒ　(341)ヒ　(342)ヒ　(343)ヒ　(344)ヒ　(345)ヒ　(346)ヒ　(347)ヒ　(348)ヒ　(349)ヒ　(350)ヒ　(351)ヒ　(352)ヒ　(353)ヒ　(354)ヒ　(355)ヒ　(356)ヒ　(357)ヒ　(358)ヒ　(359)ヒ　(360)ヒ　(361)ヒ　(362)ヒ　(363)ヒ　(364)ヒ　(365)ヒ　(366)ヒ　(367)ヒ　(368)ヒ　(369)ヒ　(370)ヒ　(371)ヒ　(372)ヒ　(373)ヒ　(374)ヒ　(375)ヒ　(376)ヒ　(377)ヒ　(378)ヒ　(379)ヒ　(380)ヒ　(381)ヒ　(382)ヒ　(383)ヒ　(384)ヒ　(385)ヒ　(386)ヒ　(387)ヒ　(388)ヒ　(389)ヒ　(390)ヒ　(391)ヒ　(392)ヒ　(393)ヒ　(394)ヒ　(395)ヒ　(396)ヒ　(397)ヒ　(398)ヒ　(399)ヒ　(400)ヒ　(401)ヒ　(402)ヒ　(403)ヒ　(404)ヒ　(405)ヒ　(406)ヒ　(407)ヒ　(408)ヒ　(409)ヒ　(410)ヒ　(411)ヒ　(412)ヒ　(413)ヒ　(414)ヒ　(415)ヒ　(416)ヒ　(417)ヒ　(418)ヒ　(419)ヒ　(420)ヒ　(421)ヒ　(422)ヒ　(423)ヒ　(424)ヒ　(425)ヒ　(426)ヒ　(427)ヒ　(428)ヒ　(429)ヒ　(430)ヒ　(431)ヒ　(432)ヒ　(433)ヒ　(434)ヒ　(435)ヒ　(436)ヒ　(437)ヒ　(438)ヒ　(439)ヒ　(440)ヒ　(441)ヒ　(442)ヒ　(443)ヒ　(444)ヒ　(445)ヒ　(446)ヒ　(447)ヒ　(448)ヒ　(449)ヒ　(450)ヒ　(451)ヒ　(452)ヒ　(453)ヒ　(454)ヒ　(455)ヒ　(456)ヒ　(457)ヒ　(458)ヒ　(459)ヒ　(460)ヒ　(461)ヒ　(462)ヒ　(463)ヒ　(464)ヒ　(465)ヒ　(466)ヒ　(467)ヒ　(468)ヒ　(469)ヒ　(470)ヒ　(471)ヒ　(472)ヒ　(473)ヒ　(474)ヒ　(475)ヒ　(476)ヒ　(477)ヒ　(478)ヒ　(479)ヒ　(480)ヒ　(481)ヒ　(482)ヒ　(483)ヒ　(484)ヒ　(485)ヒ　(486)ヒ　(487)ヒ　(488)ヒ　(489)ヒ　(490)ヒ　(491)ヒ　(492)ヒ　(493)ヒ　(494)ヒ　(495)ヒ　(496)ヒ　(497)ヒ　(498)ヒ　(499)ヒ　(500)ヒ　(501)ヒ　(502)ヒ　(503)ヒ　(504)ヒ　(505)ヒ　(506)ヒ　(507)ヒ　(508)ヒ　(509)ヒ　(510)ヒ　(511)ヒ　(512)ヒ　(513)ヒ　(514)ヒ　(515)ヒ　(516)ヒ　(517)ヒ　(518)ヒ　(519)ヒ　(520)ヒ　(521)ヒ　(522)ヒ　(523)ヒ　(524)ヒ　(525)ヒ　(526)ヒ　(527)ヒ　(528)ヒ　(529)ヒ　(530)ヒ　(531)ヒ　(532)ヒ　(533)ヒ　(534)ヒ　(535)ヒ　(536)ヒ　(537)ヒ　(538)ヒ　(539)ヒ　(540)ヒ　(541)ヒ　(542)ヒ　(543)ヒ　(544)ヒ　(545)ヒ　(546)ヒ　(547)ヒ　(548)ヒ　(549)ヒ　(550)ヒ　(551)ヒ　(552)ヒ　(553)ヒ　(554)ヒ　(555)ヒ　(556)ヒ　(557)ヒ　(558)ヒ　(559)ヒ　(560)ヒ　(561)ヒ　(562)ヒ　(563)ヒ　(564)ヒ　(565)ヒ　(566)ヒ　(567)ヒ　(568)ヒ　(569)ヒ　(570)ヒ　(571)ヒ　(572)ヒ　(573)ヒ　(574)ヒ　(575)ヒ　(576)ヒ　(577)ヒ　(578)ヒ　(579)ヒ　(580)ヒ　(581)ヒ　(582)ヒ　(583)ヒ　(584)ヒ　(585)ヒ　(586)ヒ　(587)ヒ　(588)ヒ　(589)ヒ　(590)ヒ　(591)ヒ　(592)ヒ　(593)ヒ　(594)ヒ　(595)ヒ　(596)ヒ　(597)ヒ　(598)ヒ　(599)ヒ　(600)ヒ　(601)ヒ　(602)ヒ　(603)ヒ　(604)ヒ　(605)ヒ　(606)ヒ　(607)ヒ　(608)ヒ　(609)ヒ　(610)ヒ　(611)ヒ　(612)ヒ　(613)ヒ　(614)ヒ　(615)ヒ　(616)ヒ　(617)ヒ　(618)ヒ　(619)ヒ　(620)ヒ　(621)ヒ　(622)ヒ　(623)ヒ　(624)ヒ　(625)ヒ　(626)ヒ　(627)ヒ　(628)ヒ　(629)ヒ　(630)ヒ　(631)ヒ　(632)ヒ　(633)ヒ　(634)ヒ　(635)ヒ　(636)ヒ　(637)ヒ　(638)ヒ　(639)ヒ　(640)ヒ　(641)ヒ　(642)ヒ　(643)ヒ　(644)ヒ　(645)ヒ　(646)ヒ　(647)ヒ　(648)ヒ　(649)ヒ　(650)ヒ　(651)ヒ　(652)ヒ　(653)ヒ　(654)ヒ　(655)ヒ　(656)ヒ　(657)ヒ　(658)ヒ　(659)ヒ　(660)ヒ　(661)ヒ　(662)ヒ　(663)ヒ　(664)ヒ　(665)ヒ　(666)ヒ　(667)ヒ　(668)ヒ　(669)ヒ　(670)ヒ　(671)ヒ　(672)ヒ　(673)ヒ　(674)ヒ　(675)ヒ　(676)ヒ　(677)ヒ　(678)ヒ　(679)ヒ　(680)ヒ　(681)ヒ　(682)ヒ　(683)ヒ　(684)ヒ　(685)ヒ　(686)ヒ　(687)ヒ　(688)ヒ　(689)ヒ　(690)ヒ　(691)ヒ　(692)ヒ　(693)ヒ　(694)ヒ　(695)ヒ　(696)ヒ　(697)ヒ　(698)ヒ　(699)ヒ　(700)ヒ　(701)ヒ　(702)ヒ　(703)ヒ　(704)ヒ　(705)ヒ　(706)ヒ　(707)ヒ　(708)ヒ　(709)ヒ　(710)ヒ　(711)ヒ　(712)ヒ　(713)ヒ　(714)ヒ　(715)ヒ　(716)ヒ　(717)ヒ　(718)ヒ　(719)ヒ　(720)ヒ　(721)ヒ　(722)ヒ　(723)ヒ　(724)ヒ　(725)ヒ　(726)ヒ　(727)ヒ　(728)ヒ　(729)ヒ　(730)ヒ　(731)ヒ　(732)ヒ　(733)ヒ　(734)ヒ　(735)ヒ　(736)ヒ　(737)ヒ　(738)ヒ　(739)ヒ　(740)ヒ　(741)ヒ　(742)ヒ　(743)ヒ　(744)ヒ　(745)ヒ　(746)ヒ　(747)ヒ　(748)ヒ　(749)ヒ　(750)ヒ　(751)ヒ　(752)ヒ　(753)ヒ　(754)ヒ　(755)ヒ　(756)ヒ　(757)ヒ　(758)ヒ　(759)ヒ　(760)ヒ　(761)ヒ　(762)ヒ　(763)ヒ　(764)ヒ　(765)ヒ　(766)ヒ　(767)ヒ　(768)ヒ　(769)ヒ　(770)ヒ　(771)ヒ　(772)ヒ　(773)ヒ　(774)ヒ　(775)ヒ　(776)ヒ　(777)ヒ　(778)ヒ　(779)ヒ　(780)ヒ　(781)ヒ　(782)ヒ　(783)ヒ　(784)ヒ　(785)ヒ　(786)ヒ　(787)ヒ　(788)ヒ　(789)ヒ　(790)ヒ　(791)ヒ　(792)ヒ　(793)ヒ　(794)ヒ　(795)ヒ　(796)ヒ　(797)ヒ　(798)ヒ　(799)ヒ　(800)ヒ　(801)ヒ　(802)ヒ　(803)ヒ　(804)ヒ　(805)ヒ　(806)ヒ　(807)ヒ　(808)ヒ　(809)ヒ　(810)ヒ　(811)ヒ　(812)ヒ　(813)ヒ　(814)ヒ　(815)ヒ　(816)ヒ　(817)ヒ　(818)ヒ　(819)ヒ　(820)ヒ　(821)ヒ　(822)ヒ　(823)ヒ　(824)ヒ　(825)ヒ　(826)ヒ　(827)ヒ　(828)ヒ　(829)ヒ　(830)ヒ　(831)ヒ　(832)ヒ　(833)ヒ　(834)ヒ　(835)ヒ　(836)ヒ　(837)ヒ　(838)ヒ　(839)ヒ　(840)ヒ　(841)ヒ　(842)ヒ　(843)ヒ　(844)ヒ　(845)ヒ　(846)ヒ　(847)ヒ　(848)ヒ　(849)ヒ　(850)ヒ　(851)ヒ　(852)ヒ　(853)ヒ　(854)ヒ　(855)ヒ　(856)ヒ　(857)ヒ　(858)ヒ　(859)ヒ　(860)ヒ　(861)ヒ　(862)ヒ　(863)ヒ　(864)ヒ　(865)ヒ　(866)ヒ　(867)ヒ　(868)ヒ　(869)ヒ　(870)ヒ　(871)ヒ　(872)ヒ　(873)ヒ　(874)ヒ　(875)ヒ　(876)ヒ　(877)ヒ　(878)ヒ　(879)ヒ　(880)ヒ　(881)ヒ　(882)ヒ　(883)ヒ　(884)ヒ　(885)ヒ　(886)ヒ　(887)ヒ　(888)ヒ　(889)ヒ　(890)ヒ　(891)ヒ　(892)ヒ　(893)ヒ　(894)ヒ　(895)ヒ　(896)ヒ　(897)ヒ　(898)ヒ　(899)ヒ　(900)ヒ　(901)ヒ　(902)ヒ　(903)ヒ　(904)ヒ　(905)ヒ　(906)ヒ　(907)ヒ　(908)ヒ　(909)ヒ　(910)ヒ　(911)ヒ　(912)ヒ　(913)ヒ　(914)ヒ　(915)ヒ　(916)ヒ　(917)ヒ　(918)ヒ　(919)ヒ　(920)ヒ　(921)ヒ　(922)ヒ　(923)ヒ　(924)ヒ　(925)ヒ　(926)ヒ　(927)ヒ　(928)ヒ　(929)ヒ　(930)ヒ　(931)ヒ　(932)ヒ　(933)ヒ　(934)ヒ　(935)ヒ　(936)ヒ　(937)ヒ　(938)ヒ　(939)ヒ　(940)ヒ　(941)ヒ　(942)ヒ　(943)ヒ　(944)ヒ　(945)ヒ　(946)ヒ　(947)ヒ　(948)ヒ　(949)ヒ　(950)ヒ　(951)ヒ　(952)ヒ　(953)ヒ　(954)ヒ　(955)ヒ　(956)ヒ　(957)ヒ　(958)ヒ　(959)ヒ　(960)ヒ　(961)ヒ　(962)ヒ　(963)ヒ　(964)ヒ　(965)ヒ　(966)ヒ　(967)ヒ　(968)ヒ　(969)ヒ　(970)ヒ　(971)ヒ　(972)ヒ　(973)ヒ　(974)ヒ　(975)ヒ　(976)ヒ　(977)ヒ　(978)ヒ　(979)ヒ　(980)ヒ　(981)ヒ　(982)ヒ　(983)ヒ　(984)ヒ　(985)ヒ　(986)ヒ　(987)ヒ　(988)ヒ　(989)ヒ　(990)ヒ　(991)ヒ　(992)ヒ　(993)ヒ　(994)ヒ　(995)ヒ　(996)ヒ　(997)ヒ　(998)ヒ　(999)ヒ　(1000)ヒ

○たかく、淳厚なる貌。○ひらく、寬大なる貌。○ひろし、平かに開く。○あらはれる（露）

㊀あつし（厚）人情あつくして輕薄ならず「―厚」孟、盡心「薄夫―」○さかんなり（盛）○―粹は十二支の午、困―は十干の子（爾雅、釋天）○つとむ（勉）○せまる（迫）詩、邶風「王事―我」○大いなり。㊁黍稷を盛る器。周禮、天官「若合ニ諸侯一則共ニ珠槃玉―一」古、槃を以て血を盛り、―を以て食を盛る。㊂衆りむらがる貌。㊃ゐる（彫）○ゐがく（畫）㊄平地に在るをか。○たく（竪）「―杖」㊅くらし、渾―は開通せざる貌。左、文十八「天下之民謂之渾―」＝混沌。

同訓異義　敦・厚・篤・淳・渥・醲の別は厚（厂部七畫）の條を見よ。

【敦悅】エツ　あつくよろこぶ。後漢書、鄭興傳「執義堅固、―ニ詩書一」

【敦睦】ボク　あつく丁寧にしらべる。潘尼文「留ニ精儒術一、―ニ古訓一」

【敦雅】ガ　てあつくしてみやびやか。

【敦樂】ラク　あつく好む。聖賢羣輔錄「退ニ隱山谷一、―ニ詩書一」＝敦好。

【敦學】ガク　あつく學ぶ。蘇頲詩「用ノ儒今作ノ相、―ノ蓄爲ノ師」

【敦圉】ゴ　盛んにいきまく、敦は大、圉は强、大いに氣が激する。左思、魏都賦「白虎―ニ乎崑崙一」

【敦化】カ　てあつきをしへ。又、篤厚の風に化する。中庸「小德川流、大德―一」

【敦業】ギョウ　仕事に手あつくする。管子「上惠ニ其道一、下敦ニ其業一」

【敦愿】ゲン　人情あつくしてすなほ。史、貨殖傳「政尙ニ忠樸一、猶有ニ先王之遺風一、潁川―一」

【敦固】コ　あつくしてかたし。後漢書、吳良傳「資質―一、公方廉恪」

【敦厚】コウ　人情あつし。禮、經解「溫柔―一、詩敎也」＝敦篤・敦厖。

【敦至】シ　てあつくいたる。後漢書、鄭均傳「恩禮―一」

【敦實】ジツ　○すなほにしててあつし。＝敦厚・朴實。○稻の異名。春秋繁露「宗廟之祭、冬上ニ―一、―稻

也、冬之所二爭實一也」

【敦尙】トンシヤウ あつくたっとぶ。闕盧見閑志「高麗國——二文雅、漸染二華風一」＝敦崇。

【敦崇】トンスウ あつくたっとぶ。晉書、載記「祇礪自修、——二儒學一、工二談論一、善屬レ文」

【敦忠】トンチウ 心あつくして誠あり。史記「端直——、事業有レ常」

【敦篤】トントク てあつし。後漢書、朱穆傳「癒時澆薄、慕二尙——一」＝敦厚・敦實。

【敦厖】トンバウ 風俗厚し、厖は厚、一に龐に作る。左、成十七「民生——、和平以聽」＝敦龐・敦厚。

【敦龐】トンバウ 前條に同じ。

【敦勉】トンベン あつくつとめる。史、始皇紀「安和——、莫レ不レ順レ令」

【敦朴】トンボク てあつくしてすなほ。史、文帝紀「示二——一爲二天下先一」＝敦樸・質朴・敦愿。

【敦睦】トンボク あつくむつまし。宋史、賈偁傳「閨門——、人無二讒慝一」

【敦穆】トンボク 人情であつくやはらぐ。夏侯湛、昆弟誥「——二于九族一」＝敦和・敦睦。

【敦喻】トンユ ねんごろにさとす。晉書、李胤傳「宣旨優詔——」＝敦諭。

【敦和】トンワ あつくやはらぐ。禮記「樂者——、率レ神而從レ天」＝敦穆。

【敝】 ヘイ 𢾊 或は弊・弊に作る。

○やぶれる（敗・壞）論、子罕「衣—狐袍」○やぶれごろも（敗衣）○すつ（棄）○つかれる、つからす（罷）苦める「罷—」「勞—」左、襄九「以—楚」○まける、敗られる。左、僖十「—二於韓」○おほふ、おほひ、蔽に通ず。○ひとはばきれ（一幅巾）○政惡しく風俗が衰へる「衰—」「彫—」禮、禮運「刑肅而俗—」○自己の物に冠していふ謙辭「—邑」「—屋」「—國」

同訓異語 敝・破・敗・壞・傷・毀等の別は破（石部五畫）の條を見よ。

【敝惡】ヘイアク やぶれてきたなし。唐書、崔発傳「主者不レ虔、祭器——」

【敝衣】ヘイイ やぶれたる著物。史、范雎傳「范雎聞レ之、爲微行、——閒步」

【敝帷】ヘイイ やぶれたるとばり。禮、檀弓「——不レ棄、爲レ埋レ馬也」

【敝邑】ヘイイフ わが國といふ謙辭。左、隱四「衞告レ宋曰、君爲レ主、——以レ賦從」＝敝國。

【敝絰】ヘイケイ やぶれたるどてら。崔融文「靈機休廢、——闕如」＝敝縕袍。

【敝縕袍】ヘイウンハウ やぶれたるどてら。李俳參看。

【敝國】ヘイコク 國家の疲弊せし後を引き受けるの。史、項羽紀「秦攻レ趙、戰勝則兵罷、我承二其敝一」＝承弊。

【敝屣】ヘイシ 敝履に同じ。

【敝蓋】ヘイガイ やぶれたる車のおほひ。禮、檀弓「——不レ棄、爲レ埋レ狗也」

【敝褐】ヘイカツ やぶれたるあらぬの。邶經詩「東風吹二——一、水氣撲二虛簷一」

【敝甲】ヘイカフ やぶれたるよろひ。史、楚世家「我有二——一、欲三以觀二中國之政一」＝弊甲・弊櫱。

【敝鬼】ヘイキ 物をやぶる惡鬼。後漢書「生爲二惡吏一、死爲二——一」＝厲鬼。

【敝笱】ヘイコウ 草木が茂りて日光を蔽ふ。司馬相如、上林賦「罕筚參差、日月——」＝蔽笱。

【敝裘】ヘイキウ やぶれたるかはごろも。李參詩「自美悲二明鏡一、青春換二——一」

【敝筐】ヘイキウ やぶれたる竹かご。搜神記「崔文子學二仙于王子喬一、子喬化爲二白蛇一、而持レ藥與二文子一、文子驚怪引レ戈擊レ蛇中レ之、因墮二其藥一、俯而視レ之、王子喬之尸也、置二之室中一、覆以二——一、須臾化爲二大鳥一、翻然飛去」＝破筐。

【敝居】ヘイキヨ 敝廬に同じ。

【敝宮】ヘイキウ やぶれたるはこ。易林「破筐——、棄捐于道」＝敝篋。

【敝蹤】ヘイソウ ○やぶれたるわらぐつ。＝敝屣・敝履・敝屣。○つまらぬ物の譬にいふ。蜀志、董和傳「猶レ棄二——一而獲二珠玉一」

【敝屣】ヘイシ 破れげた。梅堯臣詩「每愛前峰妍、閒穿二——一登」＝弊屐。

【敝篋】ヘイキウ やぶれたるはこ。宋史、章惇傳「——貯二玉杯一」

【敝帶】ヘイタイ やぶれはばき。魏文帝、典論「里語曰、家有二——一、享二之千金一、此不二自見一之患也」人各自ら其の有する所のものを善と爲すに喩ふ。＝弊帶。

【敝履】ヘイリ 次條に同じ。

【敝蹝】ヘイシ ○やぶれ草履。孟、盡心「舜視レ棄二天下一、猶レ棄二——一也」＝敝屣。○惜むに足らざる廢物に喩ふ。

【若レ棄二敝蹝一】ガイジラスツシル やぶれたるわらぢをすつるが如し、惜むに足らざるに喩ふ。前條參看。

【敝廬】ヘイロ おとろへたる家がら。己の家がらを謙していふ。魏書、劉文晏傳「臣之——出レ自二平原一」

【敝衲】ヘイノウ やぶれたる僧衣。長阿含經「尊者迦葉著二——一」

【敝兵】ヘイヘイ 兵をつからしそこなふ。戰國策「——勞レ衆、不レ足二以成一名」

【敝履】ヘイリ ○やぶれたるはきもの。＝敝屣。○惜むに足らざる譬に用ふ。

【敝廬】ヘイロ ○あばらや。孟浩然詩「南山歸——一」○己の家の謙辭。左傳「杞梁之妻曰、有二先人之——在一」＝弊廬・敝居。

【敬】 九畫 キヤウ 敬

○うやうやし（恭）「恭—」「愛—」周語「一者禮之本也」○うやまふ、うやまひ、つつしみ、つつしみの貌に在るを恭、心に在るを敬といふ。○いましむ。○つつしむ（肅・愼）論、子路「執事—」○俗に物を人に贈る義、—意を致すの意「奠—」

同訓異語 敬・謹・愼・恭・肅・恪の別は謹（言部十一畫）の條を見よ。

【敬愛】キヤウアイ うやまひいつくしむ。廐場詩「公子——客、樂飲不レ知レ疲」

【敬異】キヤウイ 特別にうやまふ。東觀漢記「鄉黨士大夫、莫レ不レ——之一」

【敬意】キヤウイ うやまひのこころ。邵軫雲韶樂賦「昭二——一於廉直一」

【敬挹】キヤウイ たっとびうやまふ。南史、王慮之傳「宗人江槩位至二侍中一、性素侈、惟見レ軻則——焉」＝敬揖。

【敬遠】キヤウエン ○うやまひてとほざける。論、雍也「敬二鬼神一而遠レ之」○國語「用レ之表面は敬ふ如く見せて實は疎ふ義」——主義」

【敬應】キヤウオウ つつしみしたがふ。書經「罪戒不レ讓、敢不二——一」

【敬億】キヤウオク 敬ふ心をいだく。鮑照文「助レ人爲レ悲、猶加二——一」

【敬同】キヤウドウ 君と親とに事ふるには敬意を同じくす。孝經「資二於事一父以事レ君、而——」

【敬戒】キヤウカイ いましむ。左傳「與二三子一生在二——一、不レ在レ富也」

【敬勤】キヤウキン うやまひて力を盡す。韓愈、衞府君墓銘「克自——」

【敬謹】キヤウキン うやまひつつしむ。宋皇太子冠樂章「陛階而升、——將レ冠」

【敬共】キヤウキヨウ つつしみうやまふ。左傳「——朝夕」＝敬恭。

【敬恭】キヤウキヨウ つつしみうやうやし。詩經「——二明神一」＝恭敬。

【敬具】キヤウグ つつしみて申しのべる、うやうやしく具陳する。手紙の文の終に置く語。

【敬懼】キヤウグ うやまひおそれる。書經、傳「有土之君、不レ可レ不二——一」＝敬畏。

【敬空】キヤウクウ 賤者より尊者に呈する書翰の末尾に書する語。補筆談「前世卑者致二書于尊一、書尾作二——字一、如二從レ尊幣一卑」

【敬遇】キヤウグウ うやまひもてなす。困學紀聞「武王出門銘、——二賓客一、貴賤無レ二」＝敬待。

【敬處】キヤウシ つつしむ。つつしみ。皮日休詩「開レ卷讀數行、爲レ之加二——一」

【敬賢】キヤウケンケイス 賢人を敬ふ。漢書、谷永傳「——下レ士、樂レ善不レ倦」

【敬語】キヤウゴ 敬意を表する爲めに用ふることば。

【敬厚】キヤウコウ うやまひてあつくもてなす。後漢書、桓榮傳「帝笑指レ之曰、此眞儒生也、以レ是愈見二——一」＝敬重。

【敬祭】キヤウサイ 祭事をつつしみうやうやしくする。史、封禪書「吾甚重レ祠、而——レ——」

【敬止】キヤウシ つつしみてとどまるべき所にとどまる。詩經「穆穆文王、於緝熙——」

【敬事】キヤウジ ○事をつつしみておこなふ。論、學而「——レ而信」○うやまひつつしみて君父につかへる。

【敬視】キヤウシ つつしみてみる。禮記「膳宰之饌、必二——一之」

【敬慎】キヤウシン つつしみて慎しむ。北史、王肅傳「並二——一之」＝敬愼。

【敬身】キヤウシン 身をつつしむ。禮記「君子無レ不レ敬也、——レ爲レ大」＝謹身。

【敬神】キヤウシン かみをうやまふ。禮記「夏道尊レ命、事レ鬼——レ、而遠レ之」

【敬慎】キヤウシン つつしむ。又、つつしみ。禮記「——者仁之地也」＝恪慎。

【敬親】キヤウシンシイ おやをうやまふ。孝經「——レ者不三敢慢二於人一」

【敬謹】キヤウキン つつしみてゆづる。孝經「先レ之以二——一」

【敬若】キヤウジヤク うやまひしたがふ。後漢書、明帝紀「——昊天、以綏二兆人一」

【敬終】キヤウシユウ 事の結末をつつしみて全くする。禮、表記「事レ君慎レ始而——レ」

【敬從】キヤウジユウ うやまひしたがふ。吳志「大小——、不二以爲一恨」

【敬順】キヤウジユン つつしみしたがふ。左傳「兄愛而友、弟敬而順」

【敬承】キヤウシヨウ ○つつしみてうけつぐ。孟、萬章「啓賢能——二繼禹之道一」○他人の言をつつしみてうけたまはる。後漢書、光武帝紀「皇天大命、不レ可二稽留一、敢不二——一」

【敬稱】キヤウシヨウ 人をうやまひて呼ぶとなへ。閣下・足下の類。

【敬職】キヤウシヨク 職務をつつしみて大切にする。忠經「天下——レ、萬邦以寧」

【母レ不レ敬】ボフフケイ 禮は敬を以て主とするをいふ。曲禮「——、儼若レ思、安二定辭一、安民哉」

【敬禪】キヤウゼン つつしみて位をゆづる。任昉文「今便——二于樂一」

【敬慕】キヤウボ うやまひたふとぶ。禮記「君子雖二自卑一、而民——二之一」＝尊敬・敬重。

【敬遜】キヤウソン つつしみてへりくだる。漢書、匡衡傳「聖王溫恭——、承レ親之禮也」

【敬待】キヤウタイ うやまひあしらふ。後漢書、杜根傳「酒家知二其賢、厚——之一」＝禮待・敬遇。

【敬勝レ怠則吉】ケイタイハイニカツバ 恭敬の心が懈怠の心に打ち克つ時は吉なり。荀、議兵「——怠勝レ敬則滅」

【敬諾】キヤウダク つつしみてうけがふ。穀梁傳「世子曰、——」

【敬憚】キヤウタン うやまひおそれる。史、周昌傳「呂公太子傅臣、素所二——一乃可一」＝敬畏。

【敬慕】キヤウボ うやまひてほめる。陶手雜

絲「僚吏皆――」

【敬聽】ケイチヤウ　つつしみてきく。蔡邕文「李爾苗民、慎不二――一」

【敬忠】ケイチユウ　敬ひて忠をつくす。論、爲政「使二民――以一」

【敬重】ケイヂユウ　うやまひおもんず。＝尊重。

【敬寵】ケイチヨウ　敬ひ愛する。漢書、宣元六王傳「――異二于他國一」＝敬愛。

【敬弔】ケイテウ　死者をうやまひ弔ふ。李密、祭文「臨レ風――、願與レ神遊」

【敬白】ケイハク　つつしみて申す、多く書簡文の末尾に置く語。＝謹言・肅白。

【敬敏】ケイビン　つつしみてさとし。周禮「書二其――一任恤者一」

【敬敷】ケイフ　つつしみてひろく布き及ぼす。書、舜典「――二五教一在レ寬」

【敬服】ケイフク　うやまひて心から從ふ。搜神記「百姓――、從者如レ歸」

【敬復】ケイフク　つつしみてお返事を申す、多くは書翰文の冒頭に置く語。＝拜復。

【敬慕】ケイボ　敬ひしたふ。南史、劉歊傳「學徒――、不二敢指斥一」＝欽慕。

【敬以直内】ケイイチヨクナイ　恭敬もて心の内を正しくする。易、文言「――、義以方レ外」

【敬覽】ケイラン　つつしみてみる。蘇軾文「新詩幸得二――一、不レ意餘生復見二斯作一」

【敬禮】ケイレイ　つつしみて禮する。又、其の禮「最――」

【数】俗に數（攴部十一畫）の略字とす。

十畫

【敧】ガイ　灰

○をさむ（治）○隕――は人名、昔、高陽氏の八才子の一人。

【敲】カウ　肴

○たたく（叩）「――門」「推――」うつ（擊）○すつ。○しもと、むち。短き杖、扑は長き杖。賈誼、過秦論「執二扑一以鞭笞天下」

同訓異義　敲・叩・扣・款　○敲はたたきて音聲を出す、叩より重し、敲レ金・敲門と用ふ。○叩は擊也、たたきうつ、叩レ門・叩レ首と用ふ。論語「以レ杖叩二其脛一」○扣は叩に通ず。晉書、張華傳「扣レ之則鳴矣」○款はたたきておとづれる。說文に、意有レ所レ欲也と註す。柳文「有二梓人一款二其門一願傭」

【敲戛】カウカツ　たたきうつ。徐寅詩「蘭亭如見レ月、――有二金聲一」

【敲撼】カウカン　たたきうごかす。韓愈文「――挫撼、竟遭二斥斧一」

【敲金戛石】カウキンカツセキ　金石をたたき鳴らす、詩文の聲調のすぐれたるをいふ。韓愈文「未二必不レ如二吹竹彈絲――一也」

【敲擊】ケウゲキ　うつ、たたく。李紳詩「秋風動搖神女佩、月明――水精盤」

【敲折】ケウセツ　たたきをる。蘇軾詩「鏘然――青珊瑚」

【敲扑】カウボク　○むち。賈誼、過秦論「履二至尊一而制二六合、執二――一以鞭笞天下」○罪人をむちうつ。

【敲門】カウモン　門をたたき人を訪ふ。賈島詩「鳥宿池邊樹、僧敲月下門」＝叩門・敲門。

【敲拉】カウラフ　たたきくだく。梅堯臣詩「――碎二圭璧一」

【敲】敲（前條）の俗字。

十一畫

【敺】驅（馬部十一畫）の古字。孟、離婁「爲淵――魚者、獺也」

【敻】㊀ケイ　㊁ケン　敬　藏

㊀はるか、とほし（遠）「――絲」李華、弔古戰場文「――不見人」＝迥。○ながし（長）○――はみる（視）㊁もとめる（營求）

【敻古】ケイコ　遠きいにしへ。晉書、愛自二――一、是謂二元紀一」＝遠古。

【敻絶】ケイゼツ　はるかに遠し、絶は遠。顏延年賦「別レ輩越レ羣、絢練――」

【敻然】ケイネン　遠き貌。＝敻乎。

【數】㊀シユ　㊁ス　㊂サク　㊃ソク　㊄シ・ク・ソク　廣　遇　覺　屋　沃　㊀㊁の通音スウ

㊀かぞふ（算）はかる（計）計算する。○しらべる（閱）○せむ（責）罪を責める。○――られる程の、二三の、五六の、若干の「――月」「――人」㊁かず、多少の量。○量をつもるに用ふる記號。○しな（差異）○まはり（技術）孟、告子「夫奕之爲――、小――也」○はかりごと（謀略）「術――」○算術「――學」「禮樂射御書――」㊂しばしば「頻――」しばしばする。論、里仁「事君――斯辱矣」○ちかし（近）はやし（疾）○うながす。㊃――はせまりうながす（迫促）○すみやか（速）㊄こまかし（細密）「――碁」

同訓異義　數・屢・亟　○數はたびたびと訓し、頻數・頻數などと熟す。論語「朋友數斯疏矣」○屢は毎毎なり、數と同じくして、稍緩なり。論語「樂レ人以二日給一、屢憎二於人一」○

亟は、すみやかと譯し、急亟と連用す、極めてせっせっと、せわしき意なり。孟子「亟餽二鼎肉一」

【數窮】スウキウ　しばしばくるしむ。老子「多言――、不レ如レ守レ中」

【數興】スウコウ　しばしばおこる。後漢書、梁統傳「征二伐遠方一、軍役――」

【數數】サクサク　○たびたび。白居易詩「乘レ閒――來相訪」＝屢次。○ソクソクいそがはしき（迫促）貌。莊、逍遙遊「彼其於レ世未二――然一也」

【數噸】ヒツウ　たびたびかむ。禮記「――毋レ爲二口容一」

【數白】ヒツハク　しばしば申しあげる。漢書「往者――、三光垂レ象、變動見レ端」

【數汎】シバハンカン　しばしばうかぶ。荀粲詩「――二明月沼一、頻遊二向日灣一」

【有レ數存二焉于其間】スウアリテソノカンニヒヒトシ　自然の道理の其の間に存するにいふ。莊、天道「得二之于手一、應二之于心一、口不レ能レ言、――」

【數家】スウカ　○五六の家。劉長卿詩「苦封三徑絕、漢向二――一通」○術數を修めたる人。漢書、東方朔傳、注「――、術數之家也」

【數行】スウカウ　○はらはらと落ちる涙など。柳宗元詩「今來――淚」○五六くだり。李士謂詩「蜀國魚牋――字」

【數學】スウガク　計算の理論・法式等を研究する學問。＝算道・算數。

【數奇】スウキ　ふしあはせ、數は運命、奇は耦の對にて相合はざる義。史、李將軍傳「以爲李廣老――、毋レ令レ當二單于一、恐不レ得レ所レ欲」

【數器】スウキ　權衡ハカリ周禮、注「同二其――一、使三權衡之輕重無二異同一也」

【數口】スウコウ　五六人。又、其の家族。孟、梁惠王「――之家可二以無レ飢矣」

【數罪俱發】スウザイグハツ　一人にて二つ以上の罪を犯したることのあらはれる義。

【數四】スウシ　みつよつ。又、三四たび。裴度文「斷蓬之風――」＝再四。

【數詞】スウシ　文法にて數又は量を示すことばの。

【數斟】スウシン　二三杯酒をくむ。陶潛詩「班荊松樹下、――已復醉」＝數酌。

【數術】スウジユツ　はかりごと。蜀志、陳祇傳「多二技藝一、挾二――一」＝術數。

【數職】スウセツ　たびたびたたかふ。韓詩外傳「――則民疲」

【數多】スウタ　たくさん、あまた、多數。＝夥多。

【數百】スウヒヤク　二三百、又は五六百。史記「騎――」

【數量】スウリヤウ　○かずと、ぶんりゃうと。○かさ、分量。

【數奇】スウキ　國○ものずき。＝好奇・好事。○みやび、風流・風雅「――者」○茶の湯の技「――屋」

【數珠】ズヅ　佛數箇の珠を貫きて環とし、念佛を唱ふる時、つまぐりて度數を計ふるに用ふる具。釋氏要覽「梵語鉢塞莫、梁云二――一、此乃是引二接下根一、率二課修業一之具也」＝念珠。

【數罟】スウコ　目のこまかきあみ。孟、梁惠王「――不レ入二洿池一」

【敵】テキ　錫

○あひて、我にてむかふもの「――國」「――軍」孟、梁惠王「仁者無――」○あたる（相當）我と對等のもの「匹――」「棋――」「酒――」楚語「且夫自――以下」○たぐふ、むかふ（對）○あた、かたき（仇怨）「仇――」○ともがら、たぐひ（輩匹）

【敵意】テキイ　仇敵とする意思。又、あたをするかんがへ。

【敵應】テキオウ　相對してこたへる。易經「上下――、不二相與一也」

【敵愾】テキガイ　君の恨み怒る所に當る。左、文四「諸侯敵二王所レ愾、而獻二其功一」

【敵儀】テキギ　敵のいつはりたくめるはかりごと。韓非子「參伍既用二於內一、觀聽又行二於外一、――得」

【敵耦】テキグウ　たぐふ、對等にならぶ、耦は二人對耕する、一に偶に作る。禮記「舅姑若使二介婦一毋三敢――二子家婦一」＝匹敵。

【敵國】テキコク　○己の國にあたをなす國。史、吳起傳「君不レ修レ德、則舟中之人皆――也」○對等の力ある諸侯の國。孟、盡心「征者上伐レ下也、――不二相征一也」

【敵國外患】テキコクグワイカン　外に在りて我に害を爲すもの。孟、告子「入則無二法家拂士一、出則無二――一者、國恆亡、然後知下生二於憂患一、而死中於安樂上」

【敵視】テキシ　讎と見なしてにくむ。

【敵讎】テキシウ　あた、かたき。書經「小民方興、相二爲――一」宋史、張復傳「臣每感慨、自期三彗殲二――一」＝讎敵・仇敵。

【敵情】テキジヤウ　敵軍のやうす。＝敵狀。

【敵手】テキシユ　あひて、己と五分五分の者「好――」晉書、謝安傳「安棋劣二于玄一、是日玄懼二兵至一、遂爲二――一」

【敵戰】テキセン　敵としてたたかふ。國語「夫吳之與レ越也、仇讎――之國也」

【敵前上陸】テキゼンジヤウリク　敵軍の守備せる地に船をつけ危險を冒して上陸を强行する。

【敵對】テキタイ　敵としてはむかふ、敵として對抗する。

【敵彈】テキダン　敵のうちだす銃砲のたま。＝敵丸。

【敵場】テキヂヤウ　敵兵の出沒する地。又、敵の領土。吳志、張紘傳「斬二將搴レ旗、威震二――一、此乃偏將之任、非二主將之宜一也」＝敵地。

【敵背】テキハイ　敵軍の背後ウシロ。

【敵侔之國】テキボウノクニ　力の相ひとしき國、對等の國。戰國策、韓與レ魏、――

也」

【敵虜】テキリヨ　かたきのえびす。魏文帝詩「不レ戰屈二ーーー一」

【敵禮】テキレイ　對等の禮。匹敵の禮。左傳、疏「王以二ーーー一待レ之」

【敷】フ　虞

○しく(布施)布き及ぶ、分ち布く、ひろがる。書、大禹謨「文命ー二于四海一」○つらぬ、つらなる(陳)○ちらす(散)○あまねく(徧)ひろく(廣)詩、大雅「罔二ーー求先王一」○國シク「疊をーく」○ーしく物「ー金」「ー地」「ー居」○シキの語に借用す「鬱陶ー天氣」「宜ー」

解釋　敷は數の古字、甫に从ひ方に从ふ。

同訓異義　敷・布・鋪・舖・席・播の別は布(巾部二畫)の條を見よ。

【敷英】フエイ　敷き廣がりて、花さく。王羲之文「俯植二桑果一、今盛ーレー」

【敷榮】フエイ　草木が茂り榮える。王逵、蜀葵花賦「仰二椒屋一而ー、植二蘭房一而舒レ藻」

【敷衍】フエン　○廣くしきのべる。舊唐書、代宗紀「播二除沴氣一、ーーー德音一」＝敷暢・流播。○意義などを廣く引きのばして說く。宋史、范冲傳「ーーー經旨、因以規諫」＝敷演。

【敷演】フエン　弘くしきのばす。成公綏文「分二賦物理一、ーー無方」

【敷求】フキウ　廣くさがし求める。書經「ーーー哲人」

【敷化】フクワ　教化をあまねく布く。宋書「ーーー所レ蒞、惠訓融遠」＝布化。

【敷教】フケウ　○をしへをしき弘める。書、舜典「敬敷二五教一在レ寬」○宗教を傳へひろめる。＝布教。

【敷弘】フコウ　しきひろめる。晉書「出贊二衮職一、ーーー五教一」＝弘敷。

【敷告】フコク　あまねくつげる。晉書、劉曜戰記「可ーーー天下一、使也知二區區之朝思一聞レ過也」＝普告・布告。

【敷贊】フサン　のべたすける。宋書、劉穆之傳「翼二新王化一、ーーー百揆一」

【敷枝】フシ　ひろがれるえだ。神異記「ーーー一里餘」＝敷條。

【敷施】フシ　あまねく政教をしきほどこす。書、皋陶謨「翕受ーーー」傳「翕、合也」＝布施・普施。

【敷秀】フシウ　しげりさかえる。宋書「發レ榮ーレー」

【敷政】フセイ　まつりごとをしく。詩、商頌「ーーレー優優、百祿是遒」

【敷設】フセツ　しきまうける、かまへおく「鐵道ーーー」＝布設。

【敷宣】フセン　あまねくのべしめす。晉書、下壺傳「ーーー五經一、實在レ任レ人」

【敷奏】フソウ　敷は陳、奏は進、忠言などをのべすすめる。書、舜典「ーーー以レ言、明試以レ功」＝奏聞。

【敷道】フダウ　道を敷きひろめる。晉書、成帝紀「王以二明德茂親一、居二宗師之重一、宜二ーーレー養レ德、靜二其操一」

【敷治】フチ　まつりごとを布く。孟、滕文公「學レ舜而ーーー焉」＝施政。

【敷陳】フチン　しきのべる。謝靈運詩「析レ理實ーーー」

【敷暢】フチウ　しきのべる。書經、序「約レ文申レ義、ーーー厥旨」

【敷條】フデウ　木の枝が茂りひろがる。應瑒賦「朝ーレー以誕レ節、夕結レ秀而垂レ華」＝敷枝。

【敷天之下】フテンノシタ　普き天下をいふ(詩、周頌、般)＝普天之下。

【敷納】フナウ　言を以て敷き弘めて、君の心に納れる。書、益稷「ーーー以レ言、明庶以レ功」

【敷敷】フフ　ひろくつらなる貌。韓愈詩「ーーー花披レ萼」

【敷揚】フヤウ　のべあらはす。柳宗元文「陛下奉二率前規一、ーーー盛典」

【敷居】フキ　閾　引戸・引障子などを細きみぞに承けてあけたてするもの、しきみ。＝閾。

【敷金】フキン　國　借家人が豫め家主に預け置く保證金。

【敷島道】フシマノミチ　國　やまとうたのみち、和歌の道。

十二畫

【敲】ケウ　蕭

○たたく、たたかる。書、舜典「ーーー朴」○つながりつらなる(擊連)

【整】セイ　梗　整は俗字

○ととのふ、ひとしくす(齊)物事が亂れずして正しくそろふ。○をさむ(理)ととのへる。孟、梁惠王「爰ーー其旅」○俗に完全にして未だ分解せざる義。○ー數は除ワルし盡すことの出來る數。分數及小數の對。

解釋　攴に从ひ、束に从ひ、正に从ふ、之を束ね、又、少しく之を攴ウちて正しからしむる會意。

同訓異義　整・調・齊・勻の別は調(言部八畫)の條を見よ。

【整毅】セイキ　正しくととのひてつよし。唐書、范希朝傳「治レ軍ーーー」

【整襟】セイキン　襟を正して容儀をととのへる。陳傳至詩「逢レ人強ーーレー」＝正襟。

【整車】セイシヤ　軍隊をととのへそなへる。左傳「子姑ーーレー而經レ武乎」＝整旅。

【整厳】セイセン　正しくおごそか。宋史、馬從先傳「從先性ーーー、雖二盛夏一、不二袒跣一」＝厳整・整肅・端整。

【整笏】セイコツ　しゃくを正しく持つ。謝朓文「ーーレー侍レ升平之禮」

【整妝】セイシヤウ　よそほひをととのへる。舞賦「顧二形影一、自ーーー」

【整肅】セイシユク　ととのひておごそか。晉書、何曾傳「曾性至孝、閨門ーーー、自レ少及レ長、無二聲樂嗜幸之好一」＝整厳。

【整峻】セイシユン　正しくして高し。北史「學涉二經史一、風儀ーーー」＝峻整・方峻。

【整飾】セイシヨク　ととのへかざる。李尤、鏡銘「ーーー容顏」

【整整】セイセイ　正しくととのへる貌。宣和書譜「宋綬嘗爲二小字正書一、ーーー可レ觀」＝整然。

【整齊】セイセイ　正しくそろふ。呂覽、簡選「行陣ーーー」＝齊整・正正。

【整然】セイゼン　ととのへる貌。＝整整。

【整陣】セイジン　軍のせいぞろへ。

【整飭】セイチク　ととのへる、事に條理ある義。唐書、呂諲傳「少力二於學一、志行ーーー」＝整頓。

【整調】セイテウ　國　短艇ボートにて舵手の次に居て漕手の氣勢をととのへる漕手。

【整頓】セイトン　ととのふ。又、ととのへる。史、張耳陳餘傳「宜レ二ーーー其士卒一」＝整飭。

【整武】セイブ　いくさの備へをととのへる。楊戲、諸葛丞相贊「受レ遺阿衡、ーーレー齊レ文」

【整民】セイミン　民ををさめて秩序あらしむ。左、莊十三「夫禮所二以ーーー也」

【整理】セイリ　正しくをさめととのへる。左、莊十三、疏「ーーー天下之民一」＝整頓。

【整旅】セイリヨ　軍勢をととのへそろへる。

十三畫

【整】セイ　陌

整(前條)の俗字。

【斁】㊀エキ　㊁ト　遇　敷は俗字

㊀いとふ(厭)あきる、うむ(倦)詩、周南「服之無ーー」おこたる(解)○をはる(終)㊁やぶる(敗)「耗ー」書、洪範「彝倫攸ーー」

【斂】レン　琰　斂に作るは非

○をさむ(收)尸に衣キせるを小ーといひ、尸を棺に入れるを大ーといふ。○やめる、しまふ「ーー手」○あつむ(聚)とる(取)聚め取る。○ひきしめる「收ーー劑」

同訓異義　斂・修・治・理・收・藏・納・御の別は修(人部八畫)の條を見よ。

【斂去】レンキヨ　手ををさめて去る。宋史、何灌傳「斂竊以爲レ神、遽巡ーーー」

【斂穀】レンコク　穀物をとりをさめる。管子「今上ーレー以レ幣」

【斂晉】レンコン　たそがれ。蘇軾詩「山色空濛已ーーー」＝黃昏。

【斂屏】レンヘイ　尸をうづめはうむる。唐書、裴冕傳「王鉄死、李林甫方用レ事、僚屬皆引去、獨冕爲二ーーー、由レ是稍知レ名」

【斂藏】レンザウ　をさめたくはへる。周禮「以レ時斂而藏レ之」

【斂膝】レンシツ　ひざを正しくして坐する。晉書、陶侃傳「終日ーーー危坐、閫外事、千緒萬端、罔レ有二遺漏一」

【斂衽】レンジン　えりをただしくしてつつしむ。漢書、張良傳「南面稱レ伯、楚必ーーー而朝」＝整襟。

【斂手】レンシユ　手を出さず、おそれつつしみてほしいままにせず。後漢書、鮑永傳「世祖曰、貴戚且ーレー以避二二鮑一」＝束手。

【斂迹】レンセキ　あとををさむ、おそれてほしいままにせず。唐書、劉栖楚傳「宿姦老蠹爲ーーー」

【斂足】レンソク　足をつつみて進まず。歐陽修詩「駑駘羣馬ーーー避」＝裹足・斂步。

【斂容】レンヨウ　容貌をととのへてつつしむ。漢書、霍光傳「虛己ーーー」

【斂翼】レンヨク　○つばさををさめる。白居易詩「晨雞纔發レ聲、夕雀俄ーーー」○退きちぢかまるに喻ふ。王粲賦「就二隅角一而ーーー」

十四畫

【斃】ヘイ　霽

○たふす、たふれる(朴踣)殺し仆す。檀弓「射之ー一人」○死する。○ほろぶ(滅)やぶれる(敗)左傳「多行二不義一必自ーー」

【斃死】ヘイシ　たふれしぬ。＝僵死・僵斃。

【斃踣】ヘイホク　たふれる。司馬光、劉子「天威違レ顏不二咫尺一、隕越ーーー爲二聖朝羞一」＝僵斃・顛踣。

【斃而后已】ヘイジノチヤム　死に至るまで勤めて止まず。禮、表記「俛焉日有二孳孳一、ーーー」＝死而後已。

十五畫

【㪅】タイ　灰

○國の名。后稷の封土。＝邰。○縣の名、漢置く、今の陝西省武功縣の西南。

十六畫

【斆】カウ　效　本、學又、斅に作る

○をしふ、をしへ(教)みちびく(導)さとす。書、盤庚「盤庚ーー于民」○さとる(覺悟)

【斆學半】カクガハンナリ　人に教ふるも亦我が學を助くることあるが故に、

其の學ぶ業の半に居るとの義。書、說命「惟――、念二終始一典二于學一、厥德修罔レ覺」

文　部

【文】㊀ブン・モン　㊁ブン・モン　問文

㊀あや、はなやか（華）質の對。禮儀作法などになれて優雅なる義。論、顏淵「君子質而已矣、何以―爲」○つや（光澤）○いろ（采色）衆くの采色をあつめてよく調和せるもやう。禮、樂記「五色成―而不レ亂」○かた（形象）事物の現象「天―」「地―」○すぢ（條理）○もじ「一字」○ことば（語句）○語句の集りて成るもの「一辭」「一章」「奇―」「雄―」○一章の一體。文體明辯「此類獨以―名者、蓋―中之一體也、其格有散―、有韻語、或倣楚辭、或爲四六」○ふみ（書籍・記錄）○がくもん、―學・道藝。武の對「斯―」「修―」論、學而「行有餘力、則以學―」○のり（法度・法律）「舞―」○禮樂・制度・教育などの十分に調和して、發達する義「下明」論、八佾「郁郁乎―哉」○よし（善）○うつくし（美）○みやびやか。○錢の枚數「受一―」㊁かざる、うはべをかざりつくらふ。過を掩ふ。論、子張「小人之過也、必―」○修めとのへる（修飾）論、憲問「―之以禮樂」○塗る。○圖手紙。書物。○一厘の穴錢の稱。

【文案】ブン　○つくゑ。世說、任誕「關二署―一」○文を作るかんがへ、文章の草案。

【文意】イブン　文章の意味。元史、韓性傳「作二大義一、操レ筆立就、――蒼古」

【文囿】イブン　文學の社會。蘇軾文「縱二橫武庫一、炳二蔚――一」＝文苑・文圃。

【文運】ブン　文學の盛んになる運命。袁桷詩「清寧間二――一、覽二彼古帝都一」

【文曜】ブン　日・月・星辰の類。晉書、天文志「――麗二乎天一」

【文耀】ブン　うつくしきひかり。劉陶文「敞二三光之――一、視二山河之分流一」

【文鯆魚】ブン　とびのうを、體蒼黑色、長一尺許、ひれ長大にして翼の形をなし、よく海面に出でて飛ぶ。

【文苑】ブン　多くの能文者、又文學上の社會。――傳

【實レ文爲レ活】ブンヲ　文章を以て生活の資とする。杜甫詩「故人南都去、去衆作レ碑錢、本――、讚二宣倒懸一」

【屬レ文】ブンヲ　文章を綴る、文を作る。漢書、賈誼傳「能誦二詩書一―レ―」＝作文。

【工レ文】ブンニタクミニス　文をたくみに作る。張說文「形有二萬變一、非レ―レ莫二之寫一」

【舞レ文弄レ法】ブンヲマヒハシハフモテアソブ　條文を曲解し法律を濫用する。史、貨殖傳「吏士――、刻レ章僞レ書」

【守レ文】ブンヲマモル　成法に遵ひて政を施し武力や暴力を用ひず。唐書、姚宋傳贊「善―レ―、以持二天下之正一」

【以レ文會レ友】ブンヲモテトモヲアツム　文學を講ずるために友を會するときは道益明かなる義（論、顏淵）

【善レ文】ブンヲ　たくみに文を作る。柳宗元文「長對而廣顯、好レ學而―レ―」＝能レ文・工レ文。

【勁文】ブンヲ　文を石にきざみつける。梁簡文帝文「翠石―レ―」

【文雅】ブン　文學ありてみやびやか。文苑傳「――斯盛」＝風流。

【文巧】ブン　かざりいつはる（管子）

【文行忠信】ブンコウチウシン　文藝・德行・忠誠。僞を言はず、この四つは孔子の人を敎へし道。論、述而「子以四敎、――」

【文豪】ブン　文章にすぐれたる人。宋名臣言行錄「眞―代之――也」＝文雄・文棟・文宗。

【文格】ブン　○文章の品格。于頔文「深論二窮――一」○文のきそく。＝文則・文體。

【文樂】ブン　文道の音樂。武樂の對。公羊傳「婦人無二武事一、鼎奏二――一」

【文學】ブン　○學問の總稱。史、灌夫傳「不レ喜二――一、好二任俠一」＝學藝。○詩文・小說等に關する學問。○學問に關する官職、儒官。史、蒙恬傳

【文甲】ブン　琉璃ライの異名。漢書、西域傳「明珠――、通犀翠羽之珍」

【文蛤】ブン　はまぐり、文は殼にうつくしき小紫斑ある故。

【文翰】ブン　かきもの、翰は筆。晉書、溫嶠傳「詔命――亦悉豫焉」＝文書・文詞。

【文義】ブン　文章の意味。南史、陳澄傳「讀レ易三年、不レ解二――一」＝文意。

【文綺】ブン　うつくしきかざり、あやもやう。吳志、華覈傳「美貌者、不レ待二華采一、以崇レ好、艷姿者、不レ待二――一以致レ愛」＝文綵。

【文蔡】ブン　あやあるくつひも。楊綏植文「大聖之所レ履、豈遠異二夫――一」

【文龜】ブン　うつくしき模樣あるかめ。爾雅、五曰二――一」

【文禽】ブン　あやある羽毛の鳥、山雉の異名。應璩詩「――蔽二綠水一」

【文錦】ブン　あやあるにしき。淮南子「管子――也」＝文繡。

【文魚】ブン　あやあるうを。山海經「瞻水其中多二――一」

【文具】ブン　○法文のみそなはる。漢書、龜錯傳「其敝徒――、亡二惻隱之實一」○圖文房具、筆墨硯の類。

【文化】ブンクワ　○學問進歩して文明の世となる。東晳文「――內綏、武功外悠」○刑罰威力を用ひずしてさとし導く、文德を以て感化する。說苑「凡武之興、爲レ不レ服也、――不レ改、然後加レ誅」

【文化史】ブンクワシ　學問・藝術・政治・教育・風俗・經濟などを系統的に研究して社會の發達を明にする歷史。＝文明史。

【文火】ブンクワ　ぬるび。烈火を武火といふの對。釋皎然詩「――香偏勝」

【文華】ブンクワ　文明の光。後漢書、班彪傳「敷二――一、以緯二國典一」

【文會】ブンクワイ　文學に關するあつまり。舊唐書、楊師道傳「――之盛、當時莫レ比」

【文幄】ブンクワク　あやあるとばり。袁宏詩「――曜二瓊扇一」

【文官】ブンクワン　文を以て仕ふる役人。武官の對。後漢書、禮儀志「立春遣二使者、齎二東帛一、以賜二――一」

【文藝】ブンゲイ　文學藝術。中論「盛德之士、――必萃」

【文敎】ブンケウ　文學のをしへ、文治を以て民を導く。書、禹貢「揆二――一」

【文樾】ブンゲツ　ぶれぶみ。晉書、劉超傳「專掌二――一」

【文鷁】ブンゲキ　天子の遊樂に用ふるうつくしき舟。鷁は水鳥、其の象ヲを舡首に畫く。司馬相如、子虛賦「游二於清池一、浮二――一」＝龍舟。

【文憲】ブンケン　がくもんのみち、文學ののり。宋靖文「多才之英、篤藝之彥、役レ心精微、耽二此――一」

【文獻學】ブンケンガク　民族の言語文學を研究して其の文明の性質を明にする學問。

【文獻不レ足】ブンケンフソク　文は典籍、獻は賢人、徵證すべき典籍と賢者とに乏し。論、爲政、子曰、夏禮吾能言レ之、杞不レ足レ徵也、――故也、足則吾能徵レ之矣

【文狐】ブン　あやあるきつね。曹植文「曳二――一掩二狡兎一」

【文庫】ブンコ　○書物を納めおくくら。宋史、金耀門有二――一、藏二三司帳簿一」○文書、筆紙などを入れる手箱。

【文語】ブンゴ　○文字と、ことばと。論衡「故其――與レ俗不レ通」○圖文章に用ふることば。口語の對。

【文穀】ブンコク　あやあるちりめん。曹植文「被二――一之華袿一」

【文采】ブンサイ　あやかざり、文章光彩。連文釋義「采爲二文之質一、文爲二采之華一」＝文綵・文彩。

【文犀】ブンサイ　あやある角を有する犀。後漢書、馬援傳「援征二交趾一、載二薏苡一歸、人以爲二明珠一――」

【文綵】ブンサイ　あや。古詩「――雙鴛鴦、裁爲二合歡被一」＝文采。

【文蔡】ブンサク　○文章。唐書、裴矩傳「有二――智數一」○あやもやう。＝文綵。

【文札】ブンサツ　かきつけのふだ。

【文士】ブンシ　文學に長ずる人。韓詩外傳「君子宜避二三端一――之筆端、武士之鋒端、辯士之舌端」

【文史】ブンシ　文章と歷史と。隋書、劉炫傳「翫二――一以怡レ神、閱二魚魯一以散レ慮」

【文事】ブンジ　文學のをしへ、學問上のことがら。書經、傳「武功成、――修」

【有二文事一者必有二武備一】ブンジアルモノハブビアリ　文學の事ある者は、必ず武藝のそなへがある。孔子の語。史、孔子世家「臣聞――、有二武事一者必有二文備一」

【文思】ブンシ　作文の思考。文を作るかんがへ。楊基詩「酒酣――涌」

【文梓】ブンシ　木目うつくしきあづさ。史、優孟傳「以二雕玉一爲レ棺、――爲レ槨」

【文詞】ブンシ　文辭に同じ。

【文駟】ブンシ　うつくしき四頭立の馬。顏延之文「――列二乎華廐一」

【文辭】ブンジ　文章のことば。史、孔子世家＝文詞・文章。

【文繡】ブンシウ　あやのぬひとり。禮、月令「――有レ常」

【文質彬彬】ブンシツヒンヒン　あやと質とが適度に雜りて均しき貌。論、雍也「――、然後君子」

【文集】ブンシフ　文章を集めたる書。古今原始「――起二于漢武帝一」

【文人】ブンジン　○文德ある人。書、文侯之命「追二孝于前一――」○文學ある人。典論「――相輕、自レ古而然」

【文人相輕】ブンジンアヒカロンズ　文章家は互に相輕んじあなどる。典論「――、自レ古而然」

【文身】ブンシン　いれずみ（刺青）禮、王制「東方曰レ夷、被髮――、有レ不二火食一者」

【文箴】ブンシン　作文上のいましめ、作文の心得。唐詩記事「李德裕嘗爲二――一」

【文臣不レ愛レ錢】ブンシンセズニ　文臣は高潔にして金錢を愛惜せず。宋史、岳飛傳「或問二岳飛一、天下何時太平、飛答曰、――、武臣不レ惜レ死、則天下平矣」

【文昌】ブンシウ　北斗星の魁前に在る六つの星。五雜俎「俗以レ魁故、祠二――一以祈二科第一」。

【文章】ブンシウ　○あや、かざり、もやう。史、禮書「刻鏤――所二以養目也」○禮樂制度などの一國の文明を形成するもの。又、文德の完全にして美くしき義。論、泰伯「煥乎其有二――一」○文字をつらねて思想を寫すもの。典論「――經國之大業」

【文章四友】ブンシウノヨトモ　李嶠・崔融・蘇味道・杜審言（唐書、杜審言傳）

【文章宿老】ブンシウシユクラウ　文藝界の老先生。唐書、李嶠傳「才思、然其仕前與二王勃・楊盈川一接、中與二崔融・蘇味道一

齊レ名、晩諸人咨、而爲ニ——一、一時學者取レ法焉」

【文章絶唱】ブンシヤウゼツシヤウ　文の美にして類なき義。鶴林玉露「太史公伯夷傳、蘇東坡赤壁賦、——也」

【文章一小技】ブンシヤウイツセウノギ　文章は一小技藝、嘗し杜甫が激する所ありて作りし句なりといふ。杜甫詩「——、於レ道未レ爲レ尊」

【文章經國之大業】ブンシヤウケイコクノタイゲフ　文章は國家ををさむる一大事業。典論「——、不朽之盛事、年壽有レ時而盡、榮樂止ニ於其身一、二者必至之常期、未レ若ニ文章之無レ窮」

【文弱】ブンジヤク　おとなしくしてよわし。世說、賞譽「士龍爲レ人、——可レ愛」＝柔弱。

【文酒】ブンシユ　詩文　作り酒を飲む。南史、江革傳「優游閒放、以ニ——一自娛」＝詩酒。

【文儒】ブンジユ　文學に長ずる學者。晉書、儒林傳「逮ニ于孝武一、崇ニ尙——一」

【文綬】ブンジユ　あやある印の紐。虞世南文「帶ニ——一而旁垂」

【文書】ブンシヨ　かきもの、公用書類。漢書、刑法志「——益ニ于几閣一」＝公牘。

【文章】ブンシヤウ　文章のしるし。禮記、序「——詳悉、義理精審」

【文飾】ブンシヨク　○あやかざり。宋史、陳元發傳「言無ニ——一、洞ニ見肝膈一」○あやまちを掩ひかざる。南史、孔範傳「每レ有ニ惡事一、範必曲爲ニ——一」

【文焰】ブンエン　南天燭ナンテンショクの異名。

【文綽】ブンシヨク　あやあるおりもの。周禮、春官、玉府「金玉兵器——」

【文政】ブンセイ　文治を主とするまつりごと。後漢書、南單于傳論「帝方厭ニ兵間一、修ニ——一、未ニ之許一也」＝文治。

【文質】ブンシツ　文に巧なりとのほまれ。宋史、孔文仲傳「文仲與ニ弟武仲・平仲一、皆以ニ——一起、江西時號ニ三孔一」＝文學・文名。

【文石】ブンセキ　あやあるいし、石の文理あるもの。山海經「曁諸之山、其陽多レ金、其陰多ニ——一」

【文籍】ブンセキ　書物。孔安國、尙書序「造ニ書契一、以代ニ結繩之政一、由レ是——生焉」

【文綺雖レ華、腹不レ如ニ一囊錢一】ブンキスイカ、フクフシニイチノウセン　學問に長ずとも、之を實行せざれば、一囊の錢にも及ばず。後漢書、趙壹傳「河清不レ可レ俟、人命不レ可レ延、順風激ニ靡草一、富貴者稱レ賢、——、伊優北堂上、抗髒倚ニ門邊一」

【文選】ブンセン　國くわつじひろひ、活版所にて活版を組立てる爲めに活字をよせあつめる者。

【文宣王】ブンセンワウ　孔子のおくりな。唐の玄宗開元二十七年八月、孔子を先聖と稱し、追謚して——といふ。

【文犀】ブンサイ　うつくしきあやあるたるき。七啓「形軒紫柱、——華梁」

【文祖】ブンソ　陶堯の始祖。書、舜典、注「——者堯始祖之廟」

【文組】ブンソ　あやあるくみひも。阮籍、大人先生傳「挾ニ金玉一垂ニ——一」

【文宗】ブンソウ　文章の宗師、文學の大家。晉書、陸雲傳「百代——一人而已」＝文豪・文雄。

【文繒】ブンソウ　あやあるきぬ。說文「繒、——也」

【文過ニ其實一】ブンクワスギノ　文飾が實地よりも過ぐ。後漢書、馮衍傳「以ニ文過一、其實一、遂廢ニ於家一」

【文體】ブンタイ　文章のすがた、文の體裁。隋書、經籍志「——三變、邪正或殊」

【文旦】ブンタン　柚の別種。漳州府志「柚最佳者、曰ニ——一」＝香櫞。

【文談】ブンダン　文章に關するはなし。＝文話。

【文壇】ブンダン　文學上の社會。＝文苑・文林・文園・文場。

【文治】ブンチ　文を以てをさめる。杜牧詩「朝廷用ニ——一、大開ニ官職場一」

【文致】ブンチ　○かざる。漢書「——太平一」＝文飾・潤色。○法律を弄びて人を罪する。漢書「詆欺——、微細之法、悉闢除」

【文陣】ブンジン　文學上の社會。戰場の陣だてに比していふ。玉堂遺事「張九齡爲ニ——雄帥一」＝文壇・文場。

【文陣雄帥】ブンジンユウスイ　文章の大家。唐書、蘇廻傳「張九齡嘗覽ニ廻文卷一、謂ニ同列一曰、蘇生之俊瞻無レ敵、眞——也」＝文場元帥。

【文場】ブンヂヤウ　○官吏を登用する試驗場。又、文壇の稱。劉孝綽文「藝府——、詞人髦士」○文壇に同じ。

【文場元帥】ブンヂヤウノゲンスイ　文壇の大將。事文類聚「唐張九齡號ニ詞人之冠一、又號ニ——一」

【文家】ブンカ　文章の草稿を埋めしつか。

【文通】ブンツウ　圖おとづれ、たより。＝書信・書信・消息・通信。

【文典】ブンテン　文章に關する法則。＝文法。

【文不レ加レ點】ブンカクカテン　一點の加筆すべきなし。文を作りて全く美なる義。摭言「李白在ニ翰林一、詔草ニ白蓮花序及宮詞一、方大醉、中貴人以レ水沃レ之、稍醒索レ筆、——」

【文天祥】ブンテンシヤウ　字は宋瑞、文山と號す、宋末の忠臣、元兵と戰ひ、兵敗れて執へられ、屈せず、正氣歌を作りて志を見はし、遂に死に就く。

【文恬武嬉】ブンテンブキ　天下太平にして文武の官吏安逸嬉遊する義。韓愈、平淮西碑「相臣將臣、——」

【文同】ブンドウ　宋人、字ハ與可、竇竹及山水を善くす。

【文棟】ブントウ　文人なかまのかしら、文壇の棟梁。棟はむなぎ。鍾繇文「平原兄弟、鬱爲ニ——一」＝文宗。

【文德】ブントク　學問の德、文敎の力。漢書、刑法志「——者帝王之利器」

【文膱】ブントク　公務上のかきもの。迴賢詩

「——日冗繁、民力愈疲竭」＝公牘。

【文馬】ブンバ　うつくしく飾れるうま。史、宋世家「兵車百乘、——四百匹」

【文房】ブンバウ　○文書を作るへや。南史、江革傳「——之職、總卿昆季」○讀書のへや。杜牧詩「形弓陋ニ武庫一、金印逐ニ——一」

【文如ニ春華一】ブンクワノハルノハナノゴトシ　文詞のはなやかなる義。曹植文「——、思若ニ湧泉一」

【文起ニ八代之衰一】ブンキハチダイノスヒヲオコス　蘇軾の潮州韓文公廟碑中の語、韓愈が古文に復古せし功を稱していふ。八代とは、東漢・魏・晉・宋・齊・梁・陳・隋。

【文法】ブンパフ　○法律規則。漢書、翟方進傳「知能有レ餘、兼通ニ——一吏事一」○文章の規則。＝文典。

【文法吏】ブンパフリ　法律に通ずる吏。漢書、元帝紀「宣帝所レ用多ニ——一、以ニ刑名一繩レ下」

【文範】ブンパン　文章のてほん。

【文者實レ道之器也】ブンハミチノウツワナリ　文章は道を載せて、千載につらぬくうつは。李華、崔孝公文集序」

【文皮】ブンピ　あやあるかは、虎豹の皮。淮南子「東北方之美者、有ニ斥山之——一焉」

【文備】ブンビ　學問上の用意。史、孔子世家「有ニ武事一者、必有ニ——一」

【文憑】ブンピヨウ　證書をいふ、文書の憑證たる者。

【文武兼備】ブンブケンビ　文と武とを兼ね備へる。唐書、裴行儉傳「行儉提ニ孤軍一、深入ニ萬里一、兵不レ血レ刃、而叛黨禽夷、可レ謂ニ——一矣」

【文物】ブンブツ　文化に關する、禮樂典章など。李白詩「朝野盛ニ——一、衣冠何翕絕」

【文武之勳】ブンブノクン　文と武とのいさを。蔡邕文「昭ニ公——一焉」

【文武兩道】ブンブリヤウダウ　文と武との二道。李義山集、貫ニ忠孝之兩全一、則忠可レ移レ孝、正ニ文武之二道一、則武可レ輔レ文」

【文柄】ブンペイ　文學上、又は文治上の權力。姚合詩「相府執ニ——一」

【文豹】ブンペウ　まだらのあやある豹。後漢書、臧國傳「國多ニ——一」

【文廟】ブンベウ　孔子廟。明永樂八年、先師廟を改稱して——と爲す。

【文辯】ブンベン　文章と辯說と。淮南子「治レ國有レ理、不レ在ニ——一」

【文畝】ブンポ　紙の異名。

【文圃】ブンポ　文學をまなぶところ。又、文學の社會。駱賓王文「馳ニ——一以遊レ魂」＝文園・文苑・文林。

【文簿】ブンボ　かきもの、ちやうめん。晉書「——盈積、斷決如レ流」

【文墨】ブンボク　○詩文書畫などのわざ。史、蕭相國世家「＝文筆。○簿書などをしるす。漢書、杜周傳「竝起ニ——小吏一」

【文罔】ブンマウ　おきて、罔は網に同じ、法禁なり。史、游俠傳「雖ニ時扞ニ當世之一、然其私義廉潔退讓、有ニ足レ稱者一」＝文網・法網。

【文網】ブンマウ　前條に同じ。

【文脈】ブンミヤク　文章上のすぢみち。＝文理。

【文無害】ブンムガイ　刑法を濫用して人を害する所なき義。文は刑法。史、蕭相國世家「以ニ——一、爲ニ沛主吏掾一」

【文名】ブンメイ　文譽に同じ。

【文明】ブンメイ　○あやありてあきらか、人文が十分に發達して光明ある義。易、文言「見龍在レ田、天下——」○文德の輝ける義。書、舜典「濬哲——」

【文明史】ブンメイシ　文化史に同じ。

【文命】ブンメイ　天子の文德の敎命。書、大禹謨「——敷ニ于四海一」

【文面】ブンメン　○かほにいれずみする。唐書、南蠻傳」○圖手紙のおもて。

【文野】ブンヤ　世のひらけると、ひらけぬと、文明と野蠻と。

【文雄】ブンユウ　文章にひいでたる人。唐明皇文「有レ典有レ則、是爲ニ——一」＝文宗・文豪。

【文譽】ブンヨ　文に巧なるほまれ。宋史、陳宜中傳「少甚貧、而性特俊拔、既入ニ大學一、有ニ——一」＝文名・文聲。

【文螺】ブンラ　ほらがひ。殼にあや模樣がある故。唐書、四域傳「毒瑁——石坩」

【文吏】ブンリ　○文官をいふ。武官の對。後漢書、光武紀「帝退ニ功臣一而進ニ——一、戢ニ弓矢一而散ニ馬牛一」○主として法律を司る官吏。漢書、何武傳「武疾ニ朋黨一、問ニ——一、必於ニ儒者一、問ニ儒者一、必於ニ——一、以相參檢」

【文理】ブンリ　文脈に同じ。

【文林】ブンリン　○文學者のなかま。＝文壇。○詩文をあつめたるもの。

【文綾】ブンリヨウ　あやぎぬ。唐書、地理志「河南府河南郡、土貢ニ——一、絁穀絲葛」＝文繒。

【文練】ブンレン　あやあるねりぎぬ。斎知之詩「平砧搗ニ——一」

【文話】ブンワ　文章に關するはなし。＝文談。

【文王之囿】ブンワウノユウ　周の文王の動物を畜へる園。孟、梁惠王「——、方七十里」

【文字】ブンジ　○文と字と。說文序「俠レ類象形謂ニ之文一、形聲相益謂ニ之字一、著ニ於竹帛一謂ニ之書一」○文章、章句「不朽の大——」

【文字飲】ブンジイン　詩文などを作りながら酒をのむ。韓愈詩「不レ解ニ——一、惟能醉ニ紅裙一」

【文字交】ブンジカウ　詩文などの交。宋史、陸游傳「范成大帥レ蜀、游爲ニ參議官一、以ニ文字一交、不レ拘ニ禮法一」

【文殊】モンジユ　圖妙吉祥と譯す、曼殊師利ともいふ。明かに佛性を見て法身・般若・解脫の三德を具足し、不可思議の智慧を具す。放鉢經「——乃佛

道中父母也」

【文選爛秀才半】モンセンランシウサイナカバナリ　宋代科擧の士、競ひて四六駢儷の文を學び、詩文選を誦せり、故に文選に爛熟せば試驗に及第し、秀才となるべき資格の半分を得たりとの譏。老學庵筆記「國初尚二文選一、當時文人專三意此書一、故草必稱二王孫一、梅必稱二驛使一、月必稱二望舒一、山水必稱二清暉一、至二慶曆後一、惡二其陳腐一、諸作者始一一洗之、方二其盛時一、士子至爲レ之語曰二——一、建炎以來尚二蘇氏文章一、學者翕然從レ之、而蜀士尤盛、亦有レ語曰、蘇文熟喫二羊肉一、蘇文生喫二藜羹一」

【文盲】モウ　國あきめくら、無學の者。

【文月】フミヅキ　國陰曆七月の異稱。

【孝】　三畫

孝（子部十三畫）の俗字。

【斉】　四畫

齊（部首十四畫）の略字。

【斎】　六畫

齋（齊部三畫）の略字。

【斌】　七畫

ヒン　眞　彬に通ず

文と質とが程よく調和する。

【斌斌】ヒン　文と質と相雜りて均しき貌。禮、主制、注「並行——然」＝彬彬。

【斑】　八畫

ハン　刪

○まだら、ぶち。種種の色がまざりし模樣（雜色、駮文）○轉じて總體中の一部分「一—」

【斑衣】イン　あやもやうのある派手なきもの。蒙求「老萊——」＝斑爛之衣。

【斑鳩】キウ　小鳥の一、いかるが、しめより稍大、背黃色、頭黑し、一名まめまはし。＝鵏・桑扈。

【斑石】セキ　滑石の異名。

【斑節蝦】セツカ　くるまえびの異名。

【斑然】ゼン　まだらなる貌。禮、檀弓「貍首之——」

【斑竹】チク　まだらの紋ある竹。唐書、地理志「嶺南雷州、土貢——」

【斑禿】トク　頭髮がまだらにはげる。唐書、吳烏后傳「肅宗在二東宮一、李林甫陰構二不測一、太子內憂鬢髮——」

【斑白】ハク　白髮まじりの老人。一說、斑は班の誤。禮、王制「——之者、不二提挈一」＝頒白（孟、梁惠王）

【斑駁】ハク　種種の色彩の雜れる貌。後漢書、五行志「五色大鳥、見二于新城一、衆鳥隨レ之、時以爲二鳳皇一、衆鳥之性、見二非常——一、好聚二觀之一」

【斑斑】ハン　まだらなる貌。李白詩「挑レ燈淚——」

【斑文】ハンモン　虎豹などの皮のまだら。上林賦「被二——一、跨二野馬一」＝斑紋。

【斑猫】ハウ　毒蟲の名、體一寸許、灰黑色にして赤や青又は黑の斑點あり、みちしるべ。＝斑蝥・斑蝥。

【斑紋】モン　斑文に同じ。

【斑枝花】ヤウ　熱帶地方の植物の一、果實は桃に似、中にわたの如き者をふくむ、採りて木棉の代用とす。

【斑爛】ラン　あやある貌、まだらにて美くし。高士傳「老萊子孝二奉二親一、行年七十（中略）身著二五色——之衣一」＝煽爛・爛斑。

【斐】　尾

ヒ

○あやある貌。あやありてうるはし。大學「有二君子一、匪に通ず。○うるはし（美）

【斐然】ゼン　あやある貌。論、公冶長「狂簡——成レ章、不レ知レ所二以裁一之」＝斐如・斐爾・斐斐。

【斐斐】ヒ　文采アある貌。楊戲文「藻麗鮮理、——有レ光」＝斐尾。

【斐亹】ビ　文采ある貌。孫綽賦「彤雲——以翼レ蠖」

【斐文】ブン　うつくしきあや。禮、緇文「不レ器其德、有二斐斯文一」

【斑】　九畫

ハン　刪

まだら、色雜にして純ならず。

【斑斕】ラン　まだらにて美くし。拾遺記「有二——自然雲霞龍鳳之狀一」＝斑爛・爛斑。

【爛】　十七畫

ラン　刪

斑—はまだら（雜色）又文采ある貌。蘇軾詩「曉得二異石一、青—斑」＝斑爛。

斗部

【斗】　有

トウ　通音ト

○ますめ（量目名）とます、十升ます。○ます、量器の總稱。史、李斯傳「平二斛度一量一」○少しの量。沈佺期詩「笥—愧二相貽一」○ひしゃく、酒を酌む柄杓「玉—」○南北に在る星宿ヒシュクの名「南—」「北—」○たちまち（忽）韓愈詩「一覺霜毛一半加」○ますの隅の如くかどだちて皎シロキ狀「一入」○どら。○ひつき（二十八宿の一）○科—はおたまじゃくし（蝦蟆子）○斛—はひのし。○才—はどら。

【斗掎】イ　よりかかりなきこしかけ。

【斗格】カク　ますかき、とかき。＝概。

【斗擻】カク　たちまちおぼゆ。韓愈詩「吟二君詩一、毳看二雙鬢一、——霜毛一半加」

【斗筲】セウ　二十八宿中の斗星と箕星と。

【斗牛】ギウ　北斗星と牽牛星と。晉書、張華傳「初吳之未レ滅也、——之間、常有二紫氣一」赤壁賦「徘徊於——之間」

【斗栱】キウ　柱上のますがた、梁棟を拱持する所以の者（爾雅）＝科栱。

【斗雞】ケイ　時計、もと雞の形を作りて時刻をしらしめたるに起る。

【斗斛】コク　量の名、ます。斛は十斗。管子「衡石也——也」

【斗筲】セウ　○斗は一斗ます、筲は一斗二升を入れる竹器。○轉じて人の器量の小なるにいふ。論、子路「——之人、何足レ算也」

【斗室】シツ　一斗ます程のへや、極めてせまきへや。黃中堅詩「——何來豹脚蚊、殷如二雷鼓一聚如レ雲」

【斗升活】トウシヤククワツ　少しばかりの惠に命がたすかる。莊、外物「我東海之波臣也、君豈有二斗升之水一而活レ我哉」

【斗酒】トシュ　斗のさけ。世說、言語「戴逵若（名は顒）春日攜二雙柑——一、斗酒人間二何之一、答曰往聽二黃鸝聲一、此俗耳鍼砭、詩鵲鼓吹」

【斗出】シツ　突き出る。

【斗稱】シウ　ますと、はかりと。淮南子「令二官市、同二度量、鈞二衡石一、角二——一、端二權槩一」

【斗蹙】シウ　けはしくそばだつ。水經、注「二壁爭レ高、——相亂」

【斗食】トウ　一日に一斗餘を稟けて之を食む少祿の者、賤吏の稱。戰國策「邑中自二——以上、至二尉內史及王左右一」

【斗絕】ゼツ　山勢ますの隅の如く急に角だちて突き入る。斗入を見よ。

【斗折蛇行】セツジャカウ　北斗星の折れ曲れる如く、蛇のうねり行く如き狀。柳宗元、小石潭記「潭西南而望、——、明滅可レ見」

【斗藪】ソウ　さっぱりとはらふ。皮日休詩「百緣——無二塵土一」＝抖擻。

【斗大】ダイ　一斗ますほどの大いさ。魏志、姜維傳、注「維死時見レ剖、膽如二——一」晉書、周顗傳「取二金印如二——一」

【斗膽】タン　一斗ます程の大いなるきも、廣き度胸。胡曾文「推二葛亮之心一、負二姜維之——一」斗大を見よ。

【斗帳】チヤウ　ちひさきとばり。釋名「小帳曰二——一」

【斗儲】チヨ　すこしのたくはへ。左思詩「內顧無二——一」

【斗刀】トウ　どら。蘇軾文「弓弩——」＝刀斗。

【斗桶】トウ　十升を盛る器。史、商君傳「平二——一權衡丈尺一、行レ之」

【斗南一人】トナンイチ　北斗星以南の第一人の義。唐書、狄仁傑傳「顧仁傑曰、狄公之賢、北斗以南一人而已矣」＝天下一人。

【斗入】ニウ　ますの曲れる如く、かどだちて入る。史、封禪書「成山——海」注「謂二斗絕曲入レ海」

【斗米】ベイ　一斗のこめ。史、廉頗藺相如傳「一飯、——肉十斤」

【斗柄】ヘイ　北斗星の杓子形の柄に當る星、卽ち第五より第七に至る三星。鶡冠子「——指レ東、而天下知レ春」＝斗杓。

【斗杓】ヒウ　斗柄に同じ（晉書、天文志）

【斗量】リウ　○斗ますにてはかる。○轉じて斗升にて量る程多くある義。吳志、吳主傳「孫權遣二趙咨一使レ魏」注「咨博聞多識、應對辯捷、魏文帝善レ之曰、吳如二大夫一者幾人、咨曰、聰明特達者八九十人、如二臣之比一、車載——、不レ可二勝數一」

【斗糧】リウ　わづかの兵粮。戰國策「不レ費二——一、不レ煩二一兵一」

【斗祿】ロク　すこしのぶち。歐陽修詩「試問塵埃勤二——一」

【料】　六畫

レウ　嘯

○はかる（量）○かんがへはかる（度）おしはかる（推測）史、李斯傳「君侯自—、能孰與蒙恬」○かず、かぞふ（數）升目を數へはかる。○はかり、ます。史、孔子世家「嘗爲二季氏吏一、量平」○をさむ（理）○なでる（撫）莊、盜跖「—虎頭、編虎須」○小さきふりつづみ（小鼓）○しろ、たね（材質）「資—」「材—」○てあて、あてがひ（給與品）「給—」「食—」

同訓異義　料・計・謀・圖・量・度・稱・權・測等の別は計（言部二畫）の條を見よ。

【料揀】カン　はかりえらぶ。韓愈詩「蟠蟄恐—」＝料簡。

【料簡】カン　○はかりえらぶ。蔡邕文「沙二汰虛宄一、—二貞實一」＝料揀・料檢。○グワン　國かんがへ、窟見、又は宥恕ユウジヨの義。＝了簡。

【料峭】セウ　春風の寒き貌。蘇軾詩「漸覺東風——寒」

【料度】レウタク　はかりかんがへる。＝忖度。

【料地】チ　國使用に供する土地「御—」

【料得】トク　おしはかる。杜甫詩「蒼天變化誰—」

【料理】リウ　○事をはかりをさめる、きりもりする。晉書、王徽之傳「桓沖

謂曰、卿在ノ府日久、比當ニ相ー—ー」○國食物をにたきする、割烹。又、其の食品。

【料量】リャウ ますにてはかる、ますめ。轉じて會計の義。史、孔子世家「嘗爲ニ季氏吏ー、ー平」

【料力】ナリキリ ちからをはかる。史、仲尼弟子傳「勾踐頓首再拜曰、孤嘗不ノ—ノ—、以興ノ吳戰、困ニ於會稽ー、痛入ニ于骨髓ー」

七畫

【斛】コク 屋

○量目の名、斗の十倍（一石）○ます、ますめ。史、李斯傳「平ニ斗ー度量」○石ー・木ーは竝に藥の名。

【斜】㊀シャ ㊁ヤ 麻 麻

㊀ななめ、はすかひ「横ー」○かたむく、さか「傾ー」○正しからず。○よこさま（横）陸游詩「日淡風ー江上路」○狹ーは花柳の巷、いろざと。古樂府「長安有狹ー道狹不容車」㊁谷の名、陝西省漢中府に在る、終南山の谷。西口を褒、東口をーといふ「褒ー」○國ななめならずと打ち消しに用ひておほかたならず、甚だしき義とす。

【斜雨】ななめにふるあめ、はすかひにふる雨。林逋詩「細風ー—不ノ堪ノ聽」

【斜影】ななめなるかげ。王僧孺詩「翠枝結ニ—ー、綠水散ニ圓文ー」

【斜榮】ななめにまつはる。梁簡文帝詩「北窗向ニ朝鏡ー、錦帳復ー—」

【斜漢】天の河。謝朓詩「玉繩隱ニ高樹ー、ー—耿ニ層臺ー」

【斜敧】ななめにかたむく。杜甫詩「舟楫任ニ—ー—ー」＝傾敧・傾斜。

【斜暉】ゆふ日のひかり。徐陵詩「岸烟起ニ黃色ー、岸水帶ニ—ー—ー」＝晚暉・夕暉・斜照・斜曛。

【斜窺】ななめにうかがふ。向子諲詩「ー—ー秋水長、軟語春驚近」

【斜據】ななめによる。

【斜曛】斜暉に同じ、曛はいりひ。＝夕曛。

【斜貫】ななめにうがつ。北月錄「ー—ニ—一淡ー」

【斜徑】ななめなるこみち。元行恭詩「草深ー—沒、水盡曲池空」

【斜傾】ななめにかたぶく。溫庭筠詩「千巖萬壑應ニ愧慢ー、流水ー—出ニ武關ー」＝傾斜。

【斜月】ななめにかたむくつき。子夜歌「涼風開ニ窗寢、ー—垂光照」

【斜巷】いろざと、狹斜の巷の略。長安の大道の裏なるななめにせまき遊里より出づ。＝遊里・遊郭。

【斜插】ななめにさしはさむ。白居易詩「水邊ー—一漁竿」

【斜視】○ななめに見る。何遜文「托ニ—ー子遺簪」○やぶにらみ「ー—眼」＝斜眼。

【斜日】ゆふひ。盧世南詩「綠野明ニ—ー、青山淡ニ晚煙ー」＝夕日・夕陽・斜陽・斜照・斜曛。

【斜簪】ななめにさしたるかんざし。沈約詩「ー—映ニ秋水ー、開ノ鏡比ニ春妝ー」

【斜斜】○正しからざる貌。杜牧詩「整整復ー—、隨ノ旗簇ニ晚沙ー」○雨雪などのよこにふる貌。劉克莊詩「曉風細細雨ー—」

【斜豎】ななめに立つ。梁簡文帝文「石砌危横、崖階ー—」

【斜睨】ななめに見る。劉峻詩「前望蒼龍門、ー—白鶴館」＝斜窺・斜視。

【斜對】ななめに相向ふ。

【斜嵩】ななめにそびゆ。孫覿詩「樓高ー—酒旗風」

【斜長石】斜柱狀をなして多量に曹達を含める長石。＝曹達長石。

【斜瞥】よこ目にちらりとみる。張炎詞「倚ニ銀屏ー—」

【斜封】ななめにふうじる。唐代、請謁によりて官に除する時の辭令書に用ふる。唐書、選舉志「中宗時、韋后及太平安樂公主等用ノ事、於ニ側門ー降ニ墨敕ー—ー授ノ官、號ニ—ー官」

【斜面】ななめにして水平ならざる平面。

【斜陽】ゆふひ。杜牧詩「暮靄生ニ深樹ー、ー—下ニ小樓ー」＝夕陽・斜照。

【斜巖】ななめなるわたどの。唐太宗詩「ー—連ニ綺閣ー」

八畫

【斝】カ 馬 鈴は俗字

獻酬の禮に用ふるたまのさかづき（玉爵）狀は食器の如く兩方耳あり夏に醆といひ、殷にーといひ、周に爵といふ「玉ー」「壽ー」「瑾ー」

九畫

【斟】シン 侵

○くむ（勺）くみとる（酌取）「ー」酒」「共ー」「淺ー」○ます（金）○はかる（計）○物事をほどよくはかる「ー酌」

同訓異義 斟・酌・汲・挹の別は汲（水部四畫）の條を見よ。

【斟慌】ためらひ、うたがふ（遲疑）後漢書、馮衍傳「志ー—而不ノ濟」

【斟酌】くみはかる、事を量りて理に中ずる。又、取りて行ふ。周語「書艾修ノ之、而後王ー—焉」＝參酌。

十畫

【斟】カク 覺

はかる（量）＝角・較。

【斡】㊀アツ 曷 ㊁クワン 早 ㊀の通音アツ

㊀ひしゃくのえ（盤柄）○車の輪。○めぐる、めぐらす（轉・旋）㊁つかさどる（主領）漢書「ー在縣官」斡に通ず。

【斡運】めぐり行く。張華詩「大儀ー—ー」＝旋轉運行。

【斡旋】めぐる、めぐらす。曹圓の義、事を程よくとりもつ。蘇轍、祭ニ司馬丞相ー文「一二卿士、代ノ天ー、事棼如ノ絲、衆比如ノ櫛、治亂之機、開不ノ容ノ髮」＝周旋。

【斡流】めぐりながれる。賈誼賦「ー—而遷兮、或推而還」斡は轉。

斤部

【斤】キン 文

○はかり（權ニ輕重之器）○めかたの稱、十六兩。○まさかり、大をの。孟、梁惠王「斧ー以ノ時入ニ山林ー」○きる、木を斫る（斫）○ーはあきらか（明察）又、いつくしみ（仁）○國めかたの稱、普通は百二十匁、肉類等は百二十匁。

【運ノ斤成ノ風】極めて巧妙なる工匠の形容。莊、徐無鬼「郢人堊ニ漫其鼻端ー若ニ蠅翼ー、使ニ匠石斲ー之、匠石ー—、聽而斲之、盡ノ堊而鼻不ノ傷、郢人立不ノ失ノ容」

【斤斤】○あきらかに察する貌、斤は听の假借字。詩、周頌「自ニ彼成康ー、奄ニ有四方ー、ー—其明」○つつしむ貌。後漢書、吳漢傳「ー—謹慎」○意を細事に注ぐ義「ー—較量」

【斤斲】きる、けづる。歐陽修詩「昨日丁丁斤且斲、今朝朱欄横ニ翠幕ー」

【斤斗】とんぼがへり。＝筋斗。

【斤斧】をの、まさかり。淮南子「草木未ノ落、ー—不ノ得ノ入ニ山林ー」＝斧斤。

【斤量】○はかりにてめかたをはかる。又、其のはかり（衡）○りゃうめ、目方。

一畫

【斥】㊀セキ 陌 ㊁タク 陌 ㊂タク 藥

㊀しりぞく（屏・卻）おふ（逐）○おしのける、とほざく（遠）「排ー」○はかる（度）○あらはる（見）「充ー」○さす、ゆびさす（指）○ひらく（開）○ひろける（廣）「ー土」○うかがふ（候）ものみ。○のぞむ（望）○ひがた、鹽氣ある地（鹹地）「ー鹵」「廣ー」○ちひさき澤。○きし（厓）○ー蜢は屈蟲＝尺蠖。㊁さく（裂）＝坼（土部五畫）㊂揮ー はほしいまま（放縱）莊、田子方「揮ニ八極ー」

同訓異義 斥・退・屏・卻・黜・擯・貶の別は退（辵部六畫）の條を見よ。

【斥鷃】小鳥の名、斥は澤、鷃は文ノのなきうづら（莊、逍遙遊）

【斥棄】しりぞけすつ。韓愈詩「ー—與馬ニ背ニ厥孫ー」

【斥騎】ものみの騎兵。

【斥遣】しりぞけはなつ。韓愈文「ー—ニ—浮華ー、好ニ此絲紵ー」

【斥遣】しりぞけ責める。後漢書、李固傳「黃門宦者、一皆ー—」

【斥候】ものみ、敵情を探偵する兵。左、襄十一「納ニ—ー—、禁ニ侵掠ー」＝斥兵。

【斥竄】しりぞけられて遠方に流される。遼史、耶律石柳傳「柳上書曰、臣前爲ニ姦臣ー所ノ陷、ー—ニ邊郡ー」

【斥逐】しりぞけ逐ふ。史、始皇紀「西北ー—ニ匈奴ー」

【斥黜】しりぞける。後漢書、陳蕃傳ー＝斥棄。

【斥賣】品物をしりぞけ賣る。史、貨殖傳「畜牧及ノ衆、ー—求ニ奇繒物ー」

【斥獻】退け廢する。漢書、名信臣傳「輒ー—ニ之ー」

【斥兵】ものみの兵。史、白起傳「犯ニ秦ー—ー」

【斥鹵】しほ氣ある不毛の地。鹹地の東方なるを斥、西方なるを鹵。史、夏本紀「海濱廣潟、厥田ー—」

【斥疵】怒しきものをしりぞける。謝靈運文「驅ノ妖而ー—」

【斥絕】しりぞけて交をたつ。史、天官書「君臣ー—不ノ知」

【斥退】しりぞける。後漢書、伏湛傳「微過ー—、久不ニ復用ー」

【斥地】土地を開拓する。鹽鐵論「聖主ー—ノ、非ノ私ニ其利ー」

四畫

【斯】シ 陽

○をの、柄をさす孔の、方形なるをの。詩、豳風「取ニ彼斧ー」○そこなふ（戕）

【斧】フ 虞

○をの、よき、まさかり、木を伐る具「一斤」「巨ー」「樵ー」○兵器「ー鉞」○きる（斫）をのにて物をきる「ー其吭」

【斧鉞】フイ　異風の赤地に柄のなき斧を畫がけるもの、天子の背後に立てて南面し、以て諸侯に對す。斧は威を示す。柄なきは設けて用ひざる義。曲禮「天子當ル扆而立」注「天子ーー、南鄉而立」＝斧依。

【斧鉞】フエツ　○をのと、まさかりと、金斧と黄鉞と。連文釋義「戚爲ル斧、揚爲ル鉞、斧小ニ于鉞、鉞大ニ于斧」○轉じて、重刑の義。國語、注「ーー大刑也」○天子が出征の大將に授くる刑具。＝鉄鉞。

【斧柯】フカ　をののえ。六韜「兩葉不ル去、將ル用ニーーー」＝斧柄。

【斧斤】フキン　をの、まさかり。孟、梁惠王「ーー以ル時入ニ山林一、材木不ル可ニ勝用一也」＝斤斧。

【斧鑕】フシツ　重刑の名、斬罪と、かまにて煮られると。徐陵文「甘從ニトーー」

【斧藻】フサウ　けづりかざる、修飾する義。法言「吾未ル見ル好ルーニ其德一、若ルーニ其藻一者ル歟」

【斧鑿痕】フサクコン　詩文書畫に彫斫ヂウチのあとあるをいふ。鑿はのみ、小刀細工のあと。韓愈詩「徒觀ニ——」宣和畫譜「邊鸞長ニ于花鳥一、精ニ于設色一、如ニ其工之無ニ斧鑿之痕一」

【斧質】フシツ　斧は刑具、質は鑕ヂツ古、罪人を斬るには鑕上に加（斧にて之を斬る。史、藺相如傳「蹲頓肉袒伏ニ——一」＝斧鑕。

【伏ニ斧質一】フクフシツニ　斬罪に處せらるるをいふ。前條參看。

【斧鑕之刑】フシツノケイ　死刑たいふ。鑕は質に同じ。元稹文「——坐迫、椒蘭之氣外蕭」

【斧政】フセイ　をのにてただす、人に詩文の添刪を乞ふ謙辭。＝斧正・斲政。

【斧斨】フヤウ　畫家の用語、石のしわを畫くに斧にてさきたるあとの如き筆を用ふるもの。妮古錄「皴法、董源麻皮皴、范寬雨點皴、李將軍小ーー皴、李唐大ーー皴、云云」

【斧木】フボク　けづりたるままの木。南史、劉善明傳「善明身長七尺九寸、質素不ル好ニ聲色一、所ル居茅齋ーー而已」

【揚ル斧入ル淵】ヨウフヲニユルル　物を用ふるに其の所を得ざるに喩ふ。淮南子「以ニ其所一修、而游ニ不用之鄉一、猶ル樹ニ荷山上一、畜ニ火井中一、操ル釣上ル山、揚ル斧入ル淵」

五　畫

【斫】シヤク　藥　又、斷に作る

○きる「刀ー」「ー木」「ー營」「ー斬」○うつ（擊）

同訓異義　斫・斬・斷等の別は斬（大畫）を見よ。

【斫營】シヤクエイ　敵營中にきりこむ。吳志、甘寧傳「受ル勅、出斫ニ敵前營一」

【斫鱠】シヤククワイ　なますをつくる。梅堯臣詩「冷氣射ル屋汗收ル額、便教ニーー傾ニ大白一」

【斫斬】シヤクザン　きる、刀にてきる。枚乘文「ーー以爲ル琴」＝斬斫。

【斫剌】シヤクシキ　きりころす。後漢書、臧洪傳「何罪復見ニーーー」＝斫斬。

【斫水】シヤクスイ　刀にて水をきる。能はざるに喩ふ。韋應物詩「持ル索捕ル風幾時得、將ル刀ーー幾時斷」

【斫稻鍬】シヤクタウツ　いねかり鎌。

【斫鏟】シヤクツ　きると、うつと。列子「入ル火不ル熱、ーー無ニ傷痛一」

【斫斷】シヤクダン　きりたつ。四京雜記「在ル船者ーニ其纜一」

七　畫

【斬】㊀サン　㊁サン　藥　通音

㊀きる（截）きりはなす「ー首」「要ー」たつ（裁）○つく（盡）たつ（絶）孟、離婁「君子之澤、五世而ー」○きりころす「ー殺」「擒ー」○喪服「ー衰」○ー新は極めて新しき義。㊁かる（芟）

同訓異義　斬・斫・斷・截・鑽・切・伐　○斬は人を斬殺するなり、轉じて何物にても、斬りはなすに用ふ。禮記「爲ニ宮室一、不ル斬ニ於邱木一」○斫は斬に略ゝ同じ、ひといきに、きりおとす義、斫ル首・斫ニ竹木一の類。○截はそろへてきるなり、はさみを翦刀といふ、剪は俗字。○鑽はたつとも訓む、寸寸に斷ちきるなり。○鑽はきりにてもみ込むなり。孟子「鑽ル燧改ル火」○切は刀にて刻みきるなり、亟而切ル之爲ル膾とは、さしみ庖刀にて、さしみをつくることをいふ、膾はさしみなり。○伐は斬り倒すこと。詩經「伐木丁丁」

【斬刻之衰】ザンコクノスイ　喪中のかなしみ。禮、雜記「三年之喪如ル斬、期之喪如ル刻」刻も斬。

【斬刈】ザンガイ　○草木をかる。論衡「山野草茂、鉤鎌ーー、乃成ニ道路一也」○きりころす。金史、移剌成傳「整ル兵奮擊、ーー甚衆」＝斫刈。

【斬奸】ザンカン　わるものをきる、奸惡を斬り殺す。

【斬奸狀】ザンカンジヤウ　次條に同じ。

【斬姦狀】ザンカンジヤウ　惡人をころす趣意を認めしかきつけ。＝斬奸狀。

【斬殺】ザンサツ　敵のからべをきる、殺は首殺。宋史、徽宗紀「四邊用ル兵、能招ニ納羌人一者、與ニーーー同ル賞」

【斬獲】ザンクワク　敵人のくびをきる。隨游文「被ル堅執ル銳提ル戈ーー」＝斬首。

【斬決】ザンケツ　きりやぶる。揚雄、博士箴「秦作ニ無道一、ーニ天紀一」

【斬衰】ザンサイ　喪服の最も重きもの、不邊を裁ちしままにて緝ツヅめ縫はざるを斬といふ、衰は裳に對して上衣をいふ。禮記「ーー括髮以ル麻」緝め縫ふを齊衰シといふ。

【斬罪】ザンザイ　くびきりの刑。

【斬殺】ザンサツ　きり殺す。周禮、秋官、掌戮「ーーー賊諜一」

【斬新】ザンシン　甚だあたらし、唐人の方言。斬はきはだちて甚だしき義。杜甫詩「ーー花蕊未ニ應飛一」洛浦禪師偈「ーー日月、特地乾坤」斬を嶄と書くは誤。

【斬ル將刈ル旗】ザンシヤウカイキ　敵の大將をきり、敵の旗をきり倒す。史、項羽紀「爲ニ諸君一潰圍、ーーー」

【斬斫】ザンシヤク　きる。晉書「便皆ーー」

【斬首】ザンシユ　くびをきる。＝斬頭・馘首。

【斬蛇劍】ザンジヤケン　漢の高祖が白蛇をきりし名劍。西京雜記「高祖斬ニ白蛇一劍、十二年一如ニ磨瑩一、刃上常若ニ霜雪一」

【斬斷】ザンダン　きりたつ。杜甫詩「天兵ーー青海戎、殺氣南行動ニ坤軸一」

【斬馬劍】ザンバケン　馬をきる程のするどきつるぎ。漢書、朱雲傳「朱雲曰、臣願賜尚方ーーー、斷ニ佞臣一人頭一、以厲ニ其餘一」

【斬伐】ザンバツ　○伐ち滅ぼす。詩、小雅「ーーニ四國一」○罪ある者をきりころす。漢書「ーー不ル避ニ貴勢一」○樹をきる。呂覽、季夏「命ニ虞人一、入ル山行ル木、無ニ或ーーー」

【斬髮】ザンパツ　髮をかる、ざんぎり。

八　畫

【斷】サク　藥　壹　シヤク

○きる（斬）＝斫。○たつ（斷）○けづる（削）

【新】

刻（刀部八畫）に同じ。

【斯】シ　支

○この。論、雍也「ーー人而有ニーー疾也」これ、代名詞。論、公冶長「ー焉取ーー」ここ。論、子罕「有ル美ニ玉於ニ一」かく（此）○すなはち（卽）論、公冶長「再ー可矣」○さく（析）詩、陳風「斧以ーー之」○あざやか（鮮）しろし（白）○いやし（賤）○無意味の助字。詩、召南「螽ー羽、詵詵兮」○ー須はしばらく、又俄頃ニハの義。

同訓異義　斯・之・此・是・維・惟等の別は之（ノ部三畫）の條を見よ。

【斯界】カイ　國この道の社會。

【斯須】シユ　しばらく。禮、祭義「禮樂不ル可ーー一去レ身」＝須臾・俄頃・暫時。

【斯道】ダウ　○仁義の道、聖人の道。論、雍也「子曰、誰能出不ル由ル戶、何莫ル由ニーーー也」○轉じて、各自が其の奉ずる道、又技藝。

【斯文】シブン　この學、この道。論、子罕「天之將ル喪ニーーー也、後死者不ル得ル與ニ於ーーー也」＝斯道。

【斯民】シミン　このたみ。孟、萬章「子將ル以ニ斯道一覺ニ中ーー上也」

【斯人而有ニ斯疾一】コノヤウニシテアリ　深く其の病に罹りしを惜むにいふ。論、雍也「伯牛有ル疾、子問ル之、自ル牖執ニ其手一曰、亡ル之命矣夫、斯人也而有ニ斯疾一也、斯人也而有ニ斯疾一也」

九　畫

【新】シン　眞

○あらた、あたらし。陳舊の反對「鮮ー」「斬ー」○あらたにす、舊を改める。易、大畜「日ー其德」○あたらしきものごと。論、爲政「溫故知ー」○はじめ（初）「ー年」「嘗ー」○開墾してより二年目の田畝の稱。○西漢の末、王莽の簒立せし國號。

【新案】シンアン　あたらしき工夫。＝新意匠。

【新衣】シイ　あたらしきもの。古辭「ーー誰當補、故衣誰當綻」

【新院】シンヰン　園上皇の二人以上ある時、其の新しき方の稱。本院・中院等の對。

【新陰】シインイン　あたらしき木かげ。白居易詩「春禽餘弄在、夏木ーー成」

【新雨】シウ　あらたにふりしあめ。魏略「時天ーー、地有ニ泥潦一」岑參詩「殘雲收ニ夏暑一、ーー帶ニ秋風一」

【新英】シエイ　あらたに開きたる花。元稹詩「ーー蜂採掇」

【新醴】シンエキ　あたらしきさけ（周禮、疏）＝新酒。

【新屋】シンオク　新に作りし家。蘇軾詩「共入ニーー一長ニ子孫一」＝新家。

【新柯】シンカ　あたらしきえだ。劉基、枯樹圖歌「ーー花萬萼柯壯」

【新開】シンカイ　新墾に同じ。

【新學】シンガク　○あらたに倡へ出したる學說。文心雕龍「ーー之銳則逐奇而失ル正」○初學をいふ。朱熹文「年少ーー、未ル能ル有ニ以扣一也」

【新嫁娘】シンカジヤウ　はなよめ。王建、新嫁娘詩「三日入ニ廚下一、洗ル手作ル羹湯一、未ル諳姑食性、先遣ニ小姑嘗一」＝新婦。

【新銜】シンカン　新らしき位、あらたに授かる位階。銜は位階。元稹詩「鮑永授ニーーー一」

【新奇】シンキ　あたらしくめづらし。宋史、幀繅傳「上疏進言者多矣、今皆以爲ニ陳腐一、而別取ニーーー之說一」

【新鬼】シン　あらたに死せし人。左、文二「吾見二ー一大、故鬼小」杜甫詩「ーー煩寃苦鬼哭」

【新規】シン　○あたらしきのり。文獻通考「立二ーー一」＝新律。○國あらた、あたらし。

【新義】ギン　あたらしき說。晉書、王接傳「接注二公羊春秋一、多有二ーー一」

【新禧】シン　新年のよろこび「恭賀二ーー一」＝新祉。

【新舊】シンキウ　あたらしきと、ふるきと。晉書、張華傳「撫二納ーー一、戎夏懷レ之」

【新菊】シンキク　あらたに芽を出したるきく。許渾詩「ーー亦侵レ籬」

【新機軸】シンキジク　今までのものとちがひて「ーきは新らしき工夫。＝新案。

【新華】シンクワ　あらたに生じたるくき。韓愈詩「ーー未レ徧牛猶枯」

【新曲】キンキク　あらたに作りたる音曲。魏文帝詩「絃歌奏二ーー一、遊宴拂二丹梁一」＝新聲・新調。

【新堂】シンダウ　はつぼたる。賈島詩「一點ーー報二秋信一」

【新教】シンケウ　基督教の一派、羅馬ローマ舊教に反對して獨逸のルーテル等が唱へしもの、プロテスタント。

【新月】シンゲツ　○陰曆三四日頃のつき、みかづき。＝初月。○色のあざやかなる月。白居易詩「三五夜中ーー色」

【新建】シンケン　あらたにたつ。後漢書「時許都ーー、賢士大夫、四方來集」

【新月】コン　あたらしき世帶もち。北史「詔給二內徙ーー耕牛、計口受レ田」

【新古】コン　新故・新舊に同じ。

【新國】コクク　あらたに建てたるくに。禮記「維興之日、從二ーー之法」

【新穀】コク　今年あたらしく出來たる穀類。論、陽貨「舊穀既沒、ーー既升」

【新昏】コン　新婚に同じ「詩、邶風」

【新婚】コン　あらたに結婚する。

【新製】コン　あらたに土地をひらく。

【新采】サイ　新しく取る、采は採。司馬光、蓮房詩「臨美知二ーー一、近レ根猶帶レ泥」

【新妝】サウ　つくりたてのけしやう。杜甫詩「借問漢宮誰得レ似、可憐飛燕倚二ーーー一」＝新粧。

【新抄】サウ　あらたにはじめつくる。沈亞之詩「ーー二仙亭一題二石壇一」＝新創。抄は鈔の正字。

【新造】ゾウ　○あらたにつくる。漢書、陸賈傳「乃欲レ以二ーー未レ集之越一、風二強于此一」又其の物「ーー船」＝新製。國○若き妻女。○遊女に附き添ひて世話をする女、なかゐ。

【新相知】シンサウチ　あたらしきしりびと。

【新參】シン　○あらたに參畋となる者。東都事略「袖中彈文、乃ーー也」○國あらたに仕へる。古參の對。

【新詩】シン　あたらしく作りたる詩。杜甫「ーー改罷自長吟」

【新秋】シウ　はつあき。＝初秋・孟秋。

【新柔】シウ　あらたに出でたる草木の芽。孫覿詩「野果拆二奇苞一、畦蔬剪二ーーー一」孟郊詩「野蔬拾二ーー一」

【新式】シキ　あたらしき法式。北史「不レ依二ーー一者、悉追二停之一」

【新習】シフ　あらたに習ふ。又、あたらしきならはせ。孟郊詩「時文有二ーー一」

【新人】シン　○新婚の人。○基督教ケリストにてこれ迄の罪を除かれて新しき生命を得たる人。

【新進】シン　新たに仕籍に入りし者。元稹文「江湘間、多有二ーー小生一、不レ知二天下文有二宗主一」

【新絃】シンゲン　つくりたてのよそほひ。蘇軾詩「我我雨煙鬢、曉鏡開二ーー一」

【新營】シンエイ　○新穀を廟にすすめて神を祭る。にひなめ。杜甫詩「野露及二ーーー一」○國天子が新穀を食ひたまふ儀。又、其の祭、每年十一月二十三日に行ふ。

【新極】シン　あたらしきおもむき。武少儀文「不レ易二舊所一、別成二ーー一」

【新鑄】シン　あらたにいる。舊唐書、食貨志「乾封ーー之錢、今有司貯納、更不レ須レ鑄」

【新訟】シウ　あたらしきうったへ。隋書「受二領ーー一、皆不レ立二文案一」

【新水】シンスイ　あたらしき春のみづ。李孝光詩「雪消ーー鴨頭綠」

【新正】シン　改まりし年の始、新年の正月。

【新脂】シン　あたらしくして柔か。周邦彥詞「夏果收二ーー一」

【新晴】シン　あらたにはれる。杜甫詩「久雨巫山暗、ーー錦繡文」

【新壻】シン　はなむこ。全唐詩話「姚家ーー是房郎」＝新郎。

【新製】シン　あらたに作る。陶潛詩「衣裳無二ーー一」

【新席】シン　新曲に同じ。

【新樂】シン　あたらしきこがね。杜甫詩「絲竹半含レ羞、ーー繼出レ牆」

【新說】シツ　あらたにつくりまうける。

【新說】シツ　あたらしき言說。

【新撰】シン　あらたにえらぶ。舊唐書、武宗紀「ーー成、同選」

【新鮮】シン　あたらし。李咸用詩「傾筐短甑蒸二ーー一」

【新鮐】シン　あたらしきむしろ。晉書、陶侃母湛氏傳「湛氏乃撤二所レ臥ーー一、自剝給二其馬一」

【新卒】シツ　あら手の兵卒。通鑒、唐紀「更募二ーー一以益レ之」

【新苦】クイ　あたらしきこけ。李德裕詩「松逕長二ーー一」＝新蘚。

【新胎】タイ　はじめてはらむ。庾信、謝レ賚二鹿子巾一啓「解レ角ーー、戴レ蕣初孕」

【新體】タイ　あたらしきていさい。王惲詩「舊聲今漸遠、ーー此無レ加」

【新體詩】タイシ　國新しき體の詩、近時西洋の詩に擬し作り初めし長歌。

【新刀】シンタウ　○あらたにきたへしかたな。○國慶長以後に作りしかたな。古刀の對。

【新稻】シンタウ　あらたにみのりたるいね。蘇軾詩「ーー香可レ飯」

【新鞭】シンベン　あたらしきたけのかは。程垓詞「竹粉翻二ーー一、荷花試二靚妝一」

【新知】シンチ　あたらしきしりあひ。＝新相識。

【新竹】シンチク　ことしだけ、わかたけ。司空圖詩「數竿ーー當レ軒上」

【新築】シンチク　あたらしくきづく。戴叔倫詩「東山有二遺塋一、南野起二ーー一」

【新陳代謝】シンチンタイシヤ　ふるきものは去りて、あたらしきものこれに代る、陳は舊。

【新茶】シンチヤ　あらたに製したるちゃ。劉禹錫詩「松花滿枕試二ーー一」＝新茗。

【新帝】シンテイ　あらたに卽位せられし天子。＝新皇。

【新條】シンデウ　○あらたに制定せし法令。舊唐書、食貨志「一依二舊法一、不レ用二ーー一」○あたらしき枝。姚合、楊柳枝詞「江上東西離別饒、舊條折盡折二ーー一」＝新枝。

【新調】シンテウ　○新曲に同じ。○國あらたにこしらへる、新規に調製する。

【新田】シンデン　あらたにひらきたる田。韻會「田一歲曰レ菑、二歲曰レ畬、三歲曰二ーー一、四歲則曰レ田」

【新內節】シンナイブシ　國淨瑠璃節の一種、鶴賀新內のはじめしもの、しんない。

【新年】ネン　あらたなるとし。後漢書、百官志「太史令一人、掌二天時景曆一、凡歲將レ終、奏二ーー曆一」

【新年宴會】シンネンエンクワイ　國○一月五日宮中にて祿臣に酒饌を賜はるさかもり。○新年のいはひの宴會。

【新任】シンニン　あらたに官に任ぜらる。

【新醋】シンシ　あらたにかもせるもろみざけ。陸游詩「一笑聲二ーー一」

【新方】シンハウ　○あたらしきかた。＝新式。○新らしき調劑。耿湋詩「老醫逃二舊疾一、朽藥誤二ーー一」

【新報】シンハウ　あたらしきしらせ。伊洛淵源錄「一人云有二ーー一云」＝新聞。

【新法】シンハフ　○あたらしき方式。＝新方。○宋の王安石が始めたる青苗法・保甲法などの法律「宋史、王安石傳」

【新版】シンハン　あらたにおこしたるはんぎ。又、其のはんぎにてすりし印刷物。＝新板・新刻。

【新蟠】シン　○子のよめ。○はなよめ（花嫁）少室山房筆叢「今俗以二新婚時一、男稱二新郎一、女稱二ーー一」＝新嫁娘。

【新聞】シンブン　みみあたらしき話。安得長者言「吳俗坐定、輒問二ーー一、此游閒小人入レ門之漸」

【新兵】シンペイ　あらたに入營せし兵士。

【新萍】シンヘイ　あらたに生じたるうきぐさ。王融賦「ーー泛レ沚、華桐發レ岫」

【新篇】シン　あらたにあみ作る。又、其の書物。李商隱詩「舊著思玄賦、ーー雜擬詩」

【新發意】シンホツイ　梵語は上求菩提、下化衆生の大心を發せし義。新に佛門に入りたるにいふ。法華經「ーー菩薩、供養無數佛」

【新米】シンマイ　○今年はじめて出來たるこめ。北史、劉懷傳「人有レ餉二ーー一一斛者一」＝新穀。○國あらたに仲間入りしたる者。＝新參。

【新味】シミ　はつもの。王灣詩「ーー瓜初割」

【新民】シン　民を敎へて惡を去り善に遷りて面目をあらためしむ。大學「康誥曰、作二ーー一」

【新茗】メイ　新茶に同じ。趙師使詩「一鏤水沈香散後、半甌ーー味回時」

【新陽】ヤウ　あたらしきはる。陸游詩「ーー蘇醒春前柳」＝初春・新春。

【新樣】ヤウ　あたらしきかた。唐書、柳公權傳「書法有レ名、劉禹錫稱爲二柳家一ーー」

【新羅】シンラ　古、朝鮮の一國。南史、新羅國傳「ーー在二百濟東南五十餘里地一」

【新郎】ラウ　はなむこ。新婦參看。＝新壻。

【新律】リツ　あらたにつくられたるおきて。北史、周高祖紀「初頒二ーー一」

【新立】リツ　あらたに位につく。左傳「營公ーー、鄰國及レ時來朝」

【新涼】リヤウ　はじめて催すすずしき氣。朱熹詩「書永倦二殘暑一、宵分喜二ーー一」

【新涼入二郊墟】シンリヤウカウキヨニイル　あたらしき涼風が村里におとづれ來る。韓愈詩「時秋積雨霽、ーー、燈火稍可レ親、簡編可二卷舒一」

【新涼燈火】シンリヤウトウクワ　新らしき涼氣生じ、燈火に對して讀書するによろし。朱松詩「新涼宜二燈火一」前條參看。

【新綠】シンリヨク　初夏の若葉のみどり、わかみどり。老綠の對。白居易詩「風吹二ーー一草芽拆」

【新曆】レキ　○あたらしく出來しこよみ「唐書、曆志」○太陽曆。太陰曆を舊曆といふの對。

【新蓮】シン　あらたに開きしはちす。孫登詩「ーー夾レ岸紅」

【新沐者必彈レ冠】アラタニモクスルモノハカナラズカンムリヲタニスル　新たにかみ洗ふ者は、冠の塵をはらふ、外物に汚さるるを懼るる義。史、屈原傳「ーー、新浴者必振レ衣」列子「新浴者振二其衣一、新沐者彈二其冠一」

十畫

斷　タク　斤

○けづる（削）「刻ー」「郢ー」○きる（斫）木をきる。孟、梁惠王「匠人ー而小之」

【斷論】ダンロン わをけづりてつくる。莊、天道「桓公讀二書於堂上一、輪扁一二一於堂下一」

【斷腕】ダンワン きりてみがく。國語「趙子爲レ室、斷二其椽一、而腐レ之」＝斷斲。

【斷】 斷（斤部十四畫）の俗字。

十三畫

【斲】 斲（前畫）の俗字。

十四畫

【斷】 ㊀タン・ダン 早 ㊁タン・ダン 翰

㊀たつ（絶）きる（截）きりはなす「一頭」「擊一」○きれ（片段）○見すてる、交を絶つ。㊁だゆ（絶）きめる、さだむ（決）「決一」「獨一」「裁一」「專一」○わかつ（分）易、繫辭「剛柔一矣」○一は守りて變ぜざる貌。又、專一にして善を守る貌。○國ことわる、わけを述べる。謝絶する。

【同訓異義】タツ 斷・絶・截・裁・製○斷は物を二つにたちきること、又物の中たえたることにも用ふ。斷碑・斷橋・斷雲の如し、轉じて決斷の義に用ふ、斷レ獄の如し。○絶は絲のきれたる義、物のきれてあとの無きをいふ、絶命・絶筆・絶交の如し。論語「在レ陳絶レ糧」論語「繼二絶世一」○截はきりたつ義、絶と略〻同じ、絶句を截句とも書く。○裁・製の二字は共に衣服などをたつことなり。轉じて事をきりもりして決斷するを裁斷・裁決と連用し、天子の詩文などを御製・聖製といふ、製一に制に作る、同じ。

【斷案】ダンアン ○判斷、斷定。○論理にて前提より推論せられたる斷定、結論。

【斷雲】ダンウン ちぎれたるくも。朱超詩「孤生如二一一一」

【斷轅】ダンエン 車のながえをきる。又、ちぎれたるながえ。杜甫詩「摧折如二一一一」

【斷厓】ダンガイ きりたちたる如きがけ。厓・崖同じ。周賀詩「一一曾向壁中禪」＝斷岸・絶壁。

【斷行】ダンカウ ○おしきりておこなふ。＝決行・敢行。○きれぎれになりて列をなさず。庾信詩「漏脈一一來」

【斷梗】ダンカウ 飄轉して定まらざる貌。元好問、出京詩「半生無二根著一、飄轉如二一一」

【斷港絶潢】ダンカウ ゼツクワウ 港は支流、潢は池、連絡の絶えたるに喩ふ。韓愈、送二王塤一序「學者必慎二其所一道、道二於楊墨老莊佛之學一、而欲レ之二聖人之道一、猶レ航二一一一、以望二至一於海一也」

【斷割】ダンカツ 刀にてたつ。又、物ごとをきりもりする。書經「水能潤濕、火能烹飪、金能一一、木能興作、土能生殖、穀能養育」

【斷岸】ダンガン きりたちたるきし。赤壁賦「江流有レ聲、一一千尺」＝斷厓。

【斷簡】ダンカン きれぎれになりしかきもの「一一零墨」＝斷篇・殘簡。

【斷巖】ダンガン きりたちたる如きいはほ。戴表元詩「一一蒼龍角、汲レ流紫雲根」

【斷棄】ダンキ たちすてる。交をたちて見すてる。書、盤庚「乃一二汝」

【斷疑】ダンギ うたがはしきを裁決す。易、繫辭「以斷二天下之疑一」

【斷機之戒】ダンキノイマシメ 學問を中途にて廢するいましめ。列女傳「及二孟子稍長就レ學而歸、孟母方績、問曰、學何所レ至與、孟子曰、自若也、母以レ刀斷二其織一、曰、子之廢レ學、若吾斷二斯織一矣、孟子懼、旦夕勤學不レ息、師二事子思一、遂爲二名儒一」

【斷金】ダンキン 極めて固きまじはり。易、繫辭「二人同レ心、其利一一レ」

【斷金契】ダンキンケイ 極めて固きちぎり。水經、注、嵩字仲山、宛人、與二山陽范式一有二一一一一」前條參看。

【斷金侶】ダンキンリョ 固きちぎりの友。吳澄詩「此中一一」

【斷環】ダンクワイ きれくづれる。陸龜蒙文「有二編簡一一者一緝レ之」

【斷橋】ダンケウ とぎれたるはし。杜甫詩「一一無二復板一」

【斷決】ダンケツ とりきめる。後漢書、馮異傳「時以二私心一一一、未二嘗不一有レ悔」＝斷定。

【斷冒】ダンボウ いひきる。

【斷限】ダンゲン さかひをさだめる。史通に「一一篇あり。」＝限斷。

【斷絃】ダンゲン ○つるいとをきる。元稹詩「孤琴在二幽匣一、時逝一一聲」○妻の死をいふ。

【斷縑】ダンケン 切ればしのかとり。畫繼「往往一一片紙、皆可二珍惜一」

【斷乎】ダンコ きっぱりしたる貌。蘇軾文「斷斷乎如三藥石必可二以伐レ病一」＝斷然。

【斷罟】ダンコ あみをたちきる。國語「里革斷二其罟一、而棄レ之」

【斷獄】ダンゴク 罪を裁判する。鹽鐵論「今一一一歲以レ萬計、犯レ法滋多」

【斷魂】ダンコン 甚だしく心をいためる。韋莊詩「自是春愁正一一一」＝斷腸。

【斷棧】ダンサン きれぎれとなりたるいかだ。陸游詩「低昂泛二一一一」

【斷獄】ダンゴク よくしらべて決斷する。後漢書、王吉傳「能一二疑獄一、發二起姦伏一」

【斷斬】ダンザン たちきる。後漢書「未レ有下不二一一以示二武威者一也」

【斷棧】ダンサン とぎれたるかけはし。陸游詩「馬經二一一危無路」

【斷私】ダンシ 私慾をたつ。諸葛亮文「一一レ降レ意、以養二將士一」

【斷趾】ダンシ あしをきる。唐書、刑法志「太宗曰、肉刑前代除レ之久矣、今復斷二人趾一、吾不レ忍也、於是除二一一法一」

【斷岫】ダンシウ けはしくきりたてる山のほら。皇甫松賦「歷二一一一而靜嶫」

【斷食】ダンジキ ある日限内、食をたちて食はず。佛本行經、若因二一一一當レ得二大福一者、其野獸等、應レ得二大福一」

【斷而敢行鬼神避レ之】ダンジテアヘテコウスレバキシンサケレヲ 斷じて行へば障礙に打ち勝ち得るをいふ。史、李斯傳「顧レ小而忘レ大、後必有レ害、狐疑猶豫、後必有レ悔、——、後有二成功一」

【斷章取義】ダンシャウシュギ 詩文を解するに、作者の本意に拘らず、取りて己の用となす義。孝經、開宗明誼章、孔傳「斷レ章取レ義、上下相成」

【斷取】ダンシュ たちきりて取る。王安石、釋惠崇畫詩「頗疑道人三昧力、異城山川能一一」

【斷酒】ダンシュ 禁酒する。白居易詩「病來從レ一一、老去可レ禁レ愁」

【斷樹】ダンジュ 水をきる。禮記「斷二一樹一、殺二一獸一」＝伐木。

【斷鐘】ダンショウ 鐘聲の斷續するをいふ。食枚詩「一一聲在二夕陽西一」

【斷織】ダンショク はたをたちきる。孟母の故事、半途に學を廢するを戒むるにいふ。列女傳「孟母以レ刀斷二其織一」斷機之戒參看。

【斷水】ダンスイ 水の出がとまる。又、水道などの水をとめる。

【斷正】ダンセイ 裁決して是非をただす。書書「凡一二一藏否、宜二先稽二之禮律一」

【斷齊畫粥】ダンセイクワシュク 貧にして力學するをいふ。書言故事「范希文修學最貧、在二長白山僧舍一、煮二粟二升一、作二粥一器、經レ宿遂凝、以レ刀畫爲二四塊一、早晚取二二塊一、斷二齊數十塹一、而啗レ之」齊はなづな。

【斷截】ダンセツ たちきる。魏書、高宗紀「一二一官物一、以入二於己一」＝截斷。

【斷絶】ダンゼツ ○たえる。杜甫詩「厚祿故人書一一、恆飢稚子色凄涼」○家の祭がたえる。後漢書、王符傳「不レ能レ使二其一一一」

【斷然】ダンゼン きっぱりとしたる貌。＝斷乎。

【斷線】ダンセン ○きれたる絲。孟郊詩「一一無二長纖一」○電氣のはりがねがきれて電氣が通ぜず。

【斷箭】ダンセン をれたる矢。五代史、契丹錄「殺傷相半、陣間一一遺骸、布厚寸餘」

【斷蹤】ダンソウ ちぎれたるいしずゑ。周霆震詩「荒碑一一悉與致」

【斷送】ダンソウ うしなひすてる。送り過ごす。韓愈詩「一二一一生一唯有レ酒」＝拋棄。

【斷腸】ダンチョウ たえて又つづく。唐太宗詩「哀笳時一一」

【斷綻】ダンタン ほころぶ。ほころび。韓維詩「補二裝一一一搜二尺寸一」

【斷斷】ダンダン 守りて變ぜざる貌。專心なる貌。書、秦誓「一一猗無二他技一」

【斷腸】ダンチョウ ○はらわたを絶ちきる。魏志「病若レ在二腸中一、便一一澣洗」○甚だしく心を痛むる。魏文帝詩「念二君客遊一思一一一」

【斷腸花】ダンチョウクワ 秋海棠シウカイダウの異名。錦字箋「舊傳昔有二女子一、懷レ人不レ至、淚洒レ地、遂生二此花一、色如二美婦一、而甚嫻、名二一一一一」

【斷定】ダンテイ たしかにきめる。翠夷直詩「一一今年不レ看レ花」＝斷決。

【斷脰】ダントウ くびをきる。賊國策「一一決レ腹」

【斷頭將軍】ダントウシャウグン 殿顏の故事。蜀志、張飛傳「嚴顏爲二劉璋一守二江州一、劉備遣二張飛一襲取二巴蜀之地一、獲レ顏、飛呵曰、何不二早降一、顏曰、卿等無狀、侵奪我州、我州但有二一一一、而無二降將軍一」

【斷念】ダンネン おもひきる、あきらめる。

【斷梅】ダンバイ 梅雨アノをはり。陸游詩「輕雷輾轢一一初」自注「鄉人謂二梅雨有レ雷、曰二一一一」

【斷髮文身】ダンパツブンシン 頭髮を剪りいれずみす。左、哀七「仲雍嗣レ之、一一、蠻以爲レ飾、豈禮哉」蠻は裸。

【斷碑】ダンピ かけたる古きいしぶみ。黃庭堅詩「一一零落臥二秋風一」

【斷臂】ダンピ ひぢを絶ちきる。歐陽修文「京師歲旱、有二浮屠人一、一レ禱レ雨」

【斷碧】ダンペキ きれぎれなるみどり。鮑侯詩「行雲飛一一一」

【斷片】ダンペン きれはし、かたわれ、かけ。

【斷編】ダンペン きれぎれの文書。宋史、歐陽修傳、凡周漢以降、金石遺文、一一殘簡、一切掇拾、謂二之集古錄一」＝斷簡。

【斷崇】ダンポウ けはしくとぎれたるみね。江淹文「臨二江上之一一一」＝絶崇。

【斷末摩】ダンマツマ 佛意識の明了位より閑絶位に移る間の苦、卽ち、臨終の苦。俱舍論「臨二命終時一、多爲二一一苦受所一逼」摩一に磨に作る。

【斷面】ダンメン 物のきりくち。

【斷落】ダンラク ○文章の一章一段のくぎり。品字箋「篇章一一一亦曰レ節」＝段落。○轉じて物事のひとくぎり。

【斷爛朝報】ダンランチョウホウ 王安石が春秋をそしりたる語。周麟之、春秋經解跋「王荊公初欲レ釋二春秋一、以行二天下一、而孫莘老之書已出、一見而忌之、自知レ不レ能レ復出二其右一、遂詆二聖經一、而廢レ之曰、此一一也、不レ列二於學官一、不レ用二於貢舉一云」莘老は孫覺の字、春秋經解を著す。

【斷例】ダンレイ 罪人を處分したる例。晉書、杜預傳、法者蓋繩墨之一一、非二窮理盡性之書一也」

【斷脫】ダンダツ うでをきりはなす。韓琦詩「一レ一未レ足レ戰」

廿一畫

【斷】チョク きる(斫・誅) 〒 劇は俗字

方部

【方】ハウ 陽

○しかく(四角)ましかく。○轉じてただし(正)「一正」「端一」○かた、むき、方角「一位」「四一」「他一」○むかふ(向)向ふ所、行くさき。論、里仁「遊必有一」○みち(道)禮、樂記「樂行而民鄉一」○てだて(法術)○義の宜しきなり「義一」○ことがら。○しな、種類。孟、離婁「立賢無一」○あや(文)○いた(板)四角の板。中庸「布在二策」○いかだ(泭・筏)いかだす、筏に乘りてわたる。詩、周南「漢之廣不可一」○ひとし(齊)○いま(今)○まさに(且)○くらぶ(比)「比一」論、公冶長「子貢一人」○わかつ(別)區別する。史、五帝紀「民神雜糅、不可一物」物は名狀する義。○かたはら(旁)○ならぶ(竝・併)「一軌」○さかふ(逆)孟、梁惠王「一」命虐民」○あたる(當)○まさに、いま「一今」○ちやうど、恰も。○たもつ(有)○おほいなり。○くに(國)○神仙の術。○醫術。○仿に同じ。國○かた、仕樣「書き一」○人を指して呼ぶ尊稱「殿一」

同訓異義 ハウ方・中・當・丁・直の別は中(一部三畫)の條を見よ。○ハウ方・正・政・適・的・祇・多・將の別は正(止部一畫)の條を見よ。

【方案】ハウアン 方法の工夫。=考案。

【方位】ハウイ 方角位置。朱子語錄「孤虛以二一一一言、如下俗言二某方利某方不利一之類上」

【方員】ハウエン 方圓に同じ、員は圓の古字。

【方圓】ハウエン 四角と、まると。孟、離婁「規矩一一之至也」=方員。

【方圓殊合鉤繩異態】ハウエンシユガフカウジヨウイタイスル 鉤は曲、繩は直、兩者の性相異なりて合はざるに喩ふ〔楚辭〕

【方轅】ハウエン 「冠帶交錯、一レ一接軫」

【刓方爲圓】ハウクワヲクワエンスル ながえをならぶ。四京賦 かどだちたるものを削りてまどかなるものとす。圓は圓。楚辭、九章「一一兮、常度未レ替」

【方軻】ハウカ ふねをならべる。曾鞏詩「魚鹽一レ一集」

【方駕】ハウガ ○車を竝べて行く。後漢書「臨洮道險、車不レ得レ一レ一」○匹敵する。劉峻文「道文麗藻、一一喜王一」

【方雅】ハウガ ただしくしてみやび。北史、婁昭傳「昭一一正直、有二大度深謀一」=端雅。

【方堅】ハウガ ただしきみさを。元經傳「何充器局一一、有二萬夫之望一」

【方解石】ハウカイセキ 鑛物の一、石灰質にして、碎きても常に斜方體をなし、光線を二重に屈折する特質を有するもの。

【方行】ハウカウ 普くゆきわたる。書經「一一天下、至二于海表一罔有レ不レ服」

【方向】ハウカウ むき、向ふ所の方角。=方嚮。

【方嚮】ハウカウ 進み行く方角、むき。歐陽修詩「行逐一一一但看レ日」=方向。

【方孝孺】ハウカウジユ 明人、字は希直、宋濂に從ひて學び、文を善くす、書室を名づけて正學といふ、惠帝の時、翰林學士となり、侍講に任ぜらる、燕王位を篡ふに及び、孝孺をして即位の詔を草せしむ、從はず、遂に殺さる、時に年四十六。

【方角】ハウカク 東西南北等のむき。=方位。

【方客】ハウカク 道士の稱。太玄經「大開二帷幕一、以引二一一一一」=方士。

【方額】ハウガク 四角なるひたひ。唐書、太平公主傳「太平公主、則天皇后所レ生、一一廣頤、多二陰謀一」=方顙。

【方技】ハウギ ○醫術。晉書、張華傳「華於二圖緯一一之書、莫レ不二詳覽一」○醫藥の書。漢書、藝文志「侍醫李柱國、校二一一一」

【方軌】ハウキ わだちを竝ぶ、兩車竝行する。史、蘇秦傳「車不レ得一レ一」

【方金】ハウキン 國こつぶきん、德川時代の貨幣の一、一朱金・二朱金など。

【方矩】ハウク かねざし(曲尺)玉篇「圜曰レ規、方曰レ矩」

【方外】ハウグワイ ○よすてびと。方は道、斯の道に由らざる人。後世、主ら佛教徒を指す。莊、大宗師「孔子曰、彼遊於方之外、而丘遊於方之內者也」○中國の方域外、卽ち、夷狄の地。楚辭「覽二一一之荒忽一兮」

【方外學】ハウグワイガク 儒教以外の教、佛教の稱。眞德秀文「雖三早從二方外之學一、而駐步不レ忘二君父一」

【方外侶】ハウグワイリヨ 世俗の外のともから、僧などの稱。僧皎然詩「遺遙一一、荏苒府中情」

【方外地】ハウグワイチ 中國の方域外に在る土地。漢書、嚴助傳「越方外之地、劉髮文身之民也」

【方皇】ハウクワウ さまよふ。荀、禮論「一一周浹、曲得二其次序一、是聖人也」=彷徨。

【方京】ハウケイ 四角なる倉庫。說文「圜謂二之囷、方謂二之京一」

【方計】ハウケイ 方略に同じ。

【方潔】ハウケツ ○ただしくしていさぎよし、方正潔白。後漢書、王丹傳「實性

一一、疾二惡强禦一」○紙の異名。

【方頤】ハウイ 四角なるほほ。梁書、太宗紀「一一豐下、鬚髯如レ畫」

【方言】ハウゲン 一地方に行はるる土語。漢の揚雄方言を著す。王維詩「因レ人見二風俗一、入レ境聞二一一一一」=土語。

【方機】ハウキ しめくくりありてただしきおこなひ。北史、婁駿傳「弱冠通二涉經史一、一一有二體度一、鄉里宗敬焉」

【方鼓】ハウコ ただしくしておごそか。晉書、王雅傳「王恭風神爾貴、志氣一一」=端嚴・方峻。

【方壺】ハウコ ○神仙の住むといふ島。列、湯問「渤海之東有二大壑一焉、其中有二五山一焉、一曰岱輿、二曰員嶠、三曰一一、四曰瀛州、五曰蓬萊」○腹圓くして口の四角なるつぼ。

【方穀】ハウコク こしきをならべる。魏文帝賦「列翠星陳、戎車一レ一」=方轂。

【方今】ハウコン ただいま。魏志、齊王傳「詔曰、一一百姓不レ足、而御府多作二金銀一」

【方劑】ハウザイ くすりの調合。又、調合せし藥。唐書、虛著「一一、終無二奢一於世一」=藥方。

【方相】ハウサウ 古の神に像りて疫を逐ふ者。四目なるを一一といひ、兩目なるを供といふ、送葬にも亦之を用ふ〔周禮〕

【方慢】ハウサウ 四角なるひたひ。五代史、東漢世家「郭無爲樣州人、一一廣嗓、好レ學多聞」=方額。

【方册】ハウサク しよもつ。陸倕文「布在二一一一」=方策。

【方策】ハウサク しよもつ。方は木の版、策は竹簡。中庸「文武之政、布在二一一一」=方册。

【方山冠】ハウザンクワン ○古の樂人の用ひしかんむり。後漢書、輿服志「一一、制似二進賢一、前高七寸、後高三寸、纓長八寸、似二進賢冠一、五采穀爲レ之、祠二宗廟一、天子八佾、四時五行、樂人服レ之、冠衣各如二其行方之色一」○唐宋時代は隱士の冠とす。

【方士】ハウシ ○仙術を行ふ人、方術の士、道士。史、始皇紀「○周代の官名。裁判官の類、采地の獄を司る者。

【方志】ハウシ ○ただしきこころざし。○一地方の事柄を記したる書。皇甫謐文「其鳥獸草木、則驗二之一一一」

【方舟】ハウシウ ふねをならべる。史、蘇秦傳「一レ一而下」

【方式】ハウシキ かた、一定の形式。

【方人】ハウジン ○人と己とを引きくらべる。論、憲問「子貢一レ一」○ハウジン 國一味同心の者の稱。

【方針】ハウシン ○羅針盤の方位をさしめす針。=指鍼。○めざす一定の目的「教育の一一」

【方慎】ハウシン ただしくしてつつしむ。北史、李孝伯傳「性一一忠孝」=眞慎。

【方社】ハウシヤ 四方の神と土地の神と。詩經「祈レ年孔夙、一一不レ莫」箋「祈二豐年一甚早、祭二四方與レ社、又不レ晚」

【方牀】ハウシヤウ 四角なるとこ。南史、賀革傳「革有二六尺一一一」

【方言】ハウゲン 一地方に行はるる土語。漢の揚雄方言を著す。王維詩「因レ人見二風俗一、入レ境聞二一一一」=土語。

【方術】ハウジユツ 方士のわざ、長生不死の法。又、卜筮・占驗・相など。史、始皇紀「召二文學一一之士一甚衆」=仙術。

【方峻】ハウシユン 心ただしく志たかし。唐書、楊於陵傳「器量一一、進止有二常度一、節操堅明、始終不レ失二其正一」

【方書】ハウシヨ ○方術の書。又、醫書。唐書、李聽傳「聽好二一一一」○四方の文書。漢書、張耳傳「秦時爲二御史一、主二柱下一一一」

【方諦】ハウテイ 月より水をとる鏡。晉書、天文志「一一可二以取二水于月一」

【方寸】ハウスン ○一寸四方の面積。漢書、食貨志「黃金一一而重一斤」○心をいふ。列、仲尼「吾見二子之心一矣、一一之地虛矣、幾聖人也」

【方寸之木可レ使レ高二於岑樓一】ハウスンノキカカタシテシテタカキニオクシンロウニ 比較の標準を失ふときは、至卑のものも至高のものより高き事あるにいふ。岑樓は樓の高く銳くして山に似たるもの。孟、告子「不レ揣二其本一而齊二其末一、一一」

【方寸地】ハウスンチ ○一寸四方程の土地。唐書、員半千傳「陛下何惜二玉陛一一、不レ使二臣披二露肝膽一乎」○心をいふ。方寸を見よ。

【方正】ハウセイ ただし。漢書、董仲舒傳「陛下舉二賢良一一之士一」

【方枘圓鑿】ハウゼイエンザク 枘は柄、鑿は穴、四角の柄に圓き穴の義。物の相合はざる喩。史、孟軻傳「持二方枘一、欲レ內二圓鑿一、其能入乎」=圓鑿方枘。

【方折】ハウセツ 四角にまがる。尸子「水圓折者有レ珠、一一者有レ玉」

【方壯】ハウソウ 四角なるいしずゑ。元稹詩「一一荊山採、修椽郢匠鉤」

【方俗】ハウゾク 地方の風俗。宋書、「可下分二遣大使一、巡中省一一上」

【方內】ハウダイ くにのうち。史、孝文紀「一一安寧」=國內。

【方楯】ハウタツ 四角なるゆか。宋書、長沙景王道憐傳「自レ非二三署一、不レ得レ上二一一一」

【方陳】ハウチン 方形のぢんだて。陳は陣。國語「以二萬人一爲二一一一」

【方丈】ハウヂヤウ ○一丈四方。孟、盡心「食前一一、侍妾數百人、我得レ志不レ爲也」○維摩の室方一丈ありしにより て寺院の正寢の稱。釋氏要覽「一一蓋寺院之正寢也、唐顯慶年中、敕二王玄策一往二四域一、至二毗耶黎城東北四里許一、維摩居士宅、示レ疾之室遺趾、彗石爲レ之、玄策躬以二手板一縱橫量レ之、得二十笏、故號二一一一」○轉じて僧の稱。○神仙の住むといふ海島の名〔史、封禪書〕

【方重】ハウヂウ 方正にしておもおもし。後漢書、李融傳「舉勳一一、甚得二大臣節一」=鎮重。

【方直】ハウチク ただしくなほし。晉書、郭璞傳「璞少―有二雅量一」

【方程】ハウテイ 數學の名。―式は代數學にて同價の兩式から未知數を索め出す算法。算經「九章名義、八曰、―」

【方底而圓蓋】ハウテイニシテエンガイ 四角な底の器に圓きふた。物の相合はざるに喩ふ。顏氏家訓「使三疎薄之人而節二量親厚之恩一、猶二――、必不レ合矣」＝圓蓋方底・圓鑿方枘。

【方田】ハウデン 田圃の縱橫を等分の長さにする義。通典「宋熙寧五年、修二――一」＝均田。

【方田均稅法】ハウデンキンゼイハフ 宋の王安石のはじめし新法、東西南北各千步を一方田とし、地味によりて租稅を五等に分つ制〔宋史、王安石傳〕

【方土】ハウド 地方のくに、一地方。書經、疏「盡二其――一所レ生之物」

【方冬】ハウトウ 十月の異名。杜甫詩「――變レ所レ爲」＝初冬。

【方瞳】ハウドウ 四角なるひとみ。拾遺記「有二父老五人一、――握二青筠杖一」

【方頭魚】ハウトウヨ あまだひ、額骨隆起して稍方形をなす海魚の名。

【方袍】ハウホウ 僧をいふ。金華子「――且多、其中必有レ妙二通易道一者一」

【方伯】ハウハク 周代、一地方の諸侯の上に立つ大諸侯。次條參看。

【方伯連帥】ハウハクレンスイ 周代に諸侯の上に位して一方を支配せし官。禮、王制「千里之外設二方伯一、五國以爲レ屬、屬有レ長、十國以爲レ連、連有レ帥」

【方法】ハウホウ しかた、事を行ふ條理。韓愈文「相二原隰之宜一、指二授―――一」

【方轡】ハウヒ たづなを竝べる。晉書、劉聰載記「伍人―レ、竝レ后載馳」

【方物】ハウブツ ○其の地方に產する物。書、旅獒「無レ有二遠邇一、畢獻二――一」○方は別、物は名、多くの物を各別に分ち名つける。史、五帝紀「民神雜糅、不レ可二――一」

【不レ可二方物一】フベカラズハウブツ 多くの物、混亂して別け名づくべからず。前條參看。

【方閑】ハウカン 道ただしく智ひろし。漢書、儒林傳、詳延二天下――之士一」注「方、道也、閑、博聞也」

【方便】ハウベン ○便宜にしたがひて人を導く方法。大藏法數「方謂二方法一、便謂二便宜一、猶善巧一也」維摩經「以二無量――一、饒二益衆生一」○てだて、臨機の處置。

【方便囊】ハウベンナウ 手さげぶくろ。衣巾・篦鑑・香藥・詞册などを入れるもの。清異錄「唐李王侯、競作二――一、重錦爲レ之」

【方命】ハウメイ 王命にさからふ。書、堯典「僉曰於鯀哉、帝曰吁咈哉、―レ―紀レ族」

【方面】ハウメン ○一方面の地。後漢書、馬融傳「――重寄」○四角ばりたるかほ。後漢書、高獲傳「爲レ人尼首―」

【方面寄】ハウメンキ 一方面を引きうける大將の任務。名臣言行錄「自謂當二――一不二敢辭一」

【方羊】ハウヤウ ○勞苦の貌。左、哀十七「衡レ流而――」○さまよふ。＝彷徉。

【方輿】ハウヨ 地をいふ、輿は物を載する義。宋玉賦「方地爲レ輿、圓天爲レ蓋」＝坤輿。

【方里】ハウリ たてよこ各一里の面積、一里四方。

【方略】ハウリヤク はかりごと。漢書、霍去病傳「顧二――如何一耳、不レ至レ學二古兵法一」

【方廉】ハウレン ただしくしていさぎよし。韓詩外傳「――而好レ義」＝方潔・方正廉潔。

四畫

【於】㊀ヲ ㊁ヨ・オ 魚虞

㊀ああ、歎息。又、感歎の詞。書、堯典「―鯀哉」又、―戲―乎と連用す。大學「―戲前王不レ忘」＝烏。㊁に。論、學而「敏二事一而愼二言一」＝乎・于。○にて、おいて「―是」○より、比較をあらはす。戰國策「使二趙重二九鼎大呂一」＝于・乎。○ゆく（往）○かはる（代）○ここに（此）○おける、兩者の關係比較をあらはす詞。韓愈、送二高閑上人一序「秋之―奕、伯倫之―酒」○お。○よる（依）○難きこと多き貌。

同訓異義 ア於・於戲・嗚呼・烏乎・嗟・吁等の別は嗚（口部十畫）の條の嗚呼を見よ。

○"於・于・乎・諸○於・于・乎・諸の四字は、共に、にと譯し、漢文の反る所に置く字なり、於は輕く、于は重く、于は下にかかり、於は上下にかかる、孟子に「吾聞下出二於幽谷一遷二于喬木一者上未聞下下二喬木一而入二於幽谷一者上」とあるが如し。○于は主として下に在る字に係る、於は體と用とを兼ねれども、于は體のみに係る、論語に「友二于兄弟一施二於有政一」とあるが如し、春秋に「戰二于密一」「會二于宋一」など、大抵地名には、于を用ひたり、論語に「入二于海一」「入二于河一」の類も、于の字、體に屬するを知るべし、于はここにと譯す、在の字の義あるによる。○乎は咏歎の意を含めり、主として上の字にかかる。論語「浴二乎沂一、風二乎舞雩一、咏而歸」○諸は之乎の二合字なり。論語に「子張書二諸紳一」とある如し。

【於邑】アイフ かなしみむすぼれる、煩悶愁苦する。史、刺客傳「大呼レ天者三、卒―悲哀、而死二政之旁一」歌は哀歌。

【於越】エツ 越の國、於は發語。春秋、定十四「五月―敗二吳于檇李一」注「―、越國也」＝于越。

【於戲】アヽ ○ああ、感歎の辭。詩、周頌「―前王不レ忘」＝於乎。○歎息の聲。東方朔、非有先生論「―可乎」

【於乎】アヽ ああ、感歎の辭。詩、大雅「―小子、未レ知二臧否一」＝嗚呼・於鳥。

【於菟】トヽ 虎の異名、楚國の方言。左、宣四「楚人謂二乳穀一謂二虎―一」隋書「―神龜、儼列二西北一」

【於皇】アヽ ああ、感歎の辭。詩經「―武王、無レ競維烈」＝於戲。

【旁】 旁（方部六畫）に同じ。

五畫

【旂】㊀イウ 尤 ㊁リウ 尤

㊀はたのながれ、族の垂れさがる所、はたあし。＝游。㊁冕の飾、垂れたる玉。＝旒（方部九畫）

【旂旒】キリウ はたあしのあるはた。後漢書、輿服志「建二其―一」

【施】㊀シ 支 ㊁シ・セ 寘 ㊂イ 寘 ㊃シ 紙

㊀ほどこす、しく「普―」○まうく（設）○わかつ（賦）○つく（著）○もちふる（用）○くはふ（加）○はる（張）○つらねしめす。○―は進み難き貌。又、喜悅の貌。○ゆるむ、弛と通ず。○かふ（易）○すつ（捨）㊁いさを、てがら（功勞）○めぐみ、あたふ（惠與）○ほどこす―布―」㊂うつる（移）詩、周南「―于中谷」○およぶ（及）「博―」詩、大雅「―于子孫」○ひく、のぶ（延）四すつ（捨）○かふ（易）

【施爲】シヰ ほどこし爲す、しわざ。韓愈詩「浮屠西來何―、擾擾四海爭奔馳」

【施行】シカウ ○政をおこなふ。史、蕭相國世家「便宜―――」○ギヤウ 貧倡・貧者などに金品をほどこし與ふ。大法句經「雖二復―一、爲レ身招レ患」

【施效】シカウ ほどこしいたす。漢書「進士不レ得二――一、斥逐又非二其愆一」

【施化】シクワ 萬物をそだてる。淮南子「天地之―レ―也、嘘レ之而生、吹レ之而落」

【施罟】シコ あみをはる。擊虞文「―レ―設レ網、人用不レ匱」

【施穀】シコク くつわをつける。陸游詩「赤手騎レ鯨不レ―レ―」

【施施】シシ ○進みがたき貌。詩、王風「彼留子嗟、將其來―――」○イシ 自得の貌。又、喜悅の貌。孟、離婁「―自レ外來」

【施脤】シシン ほどこしすくふ。後漢書、馬援傳「凡殖二財產一、賞二其能―――也」

【施鍼】シシン からだにはりをする。宋史、王克明傳「魏安行妻風痿、十年不レ起、克明―――、而步履如レ初」

【施舍】シシヤ ○恩德を布く、舍も施と同義。左、昭十三「―――不レ捨」＝施捨。○旅客の荷物をおろす所、はたご。國語「縣無二――一」○與ふると與へざると。國語「聖人之―也議レ之」

【施從】シジユウ 見えがくれに跡をつけゆく。孟、離婁「蚤起―――良人之所二之一」

【施政】シセイ 政令をしく。書經、傳「昭二行先王光大之道一、――于我童子」＝行政。

【施設】シセツ しきまうける。史、孫子吳起傳「論二吳起兵法世多有、故弗レ論、論レ其行事所二――一者上」

【施臂】シヒ あみをしく。元稹詩「雪中方睛レ桂、木上莫レ――」＝施罟。

【施髻】シケイ そへがみを加へる。莊子「禿而―レ―、病而求レ醫」

【施展】シテン しきのべる。白居易詩「平生賞心事、――十未レ一」

【施博】シハク ほどこすことひろし。淮南子「德之所レ施者博、則感之所レ行者遠」

【施法】シハフ おきてを布く。周禮「――於官府」

【施擊】シハン 大帶をつける。儀禮「庶母及二門內一――」

【施物】シブツ 僧寺に施す品物。魏書、任城王澄傳「――動至二萬計一」

【施與】シヨ ほどこす。吳志、魯肅傳「家富二財、性好二――一」＝惠與。

【施用】シヨウ ほどこしおこなふ。史、封禪書「各乖異難二――一」＝施爲。

【施餓鬼】セガキ 無緣の亡者の靈を弔ひて讀經供養する。

【施主】セシユ ○佛又は僧に物を施す人。―檀那。○葬式・法事などの供養をなす主。釋氏要覽「梵語陀那鉢底、唐言二――一」

【施療】セリヤウ 無料にて治療する。

六畫

【旅】 旅

○すすあるはた。爾雅、釋天「有レ鈴曰―」「大―」○のぼり龍と、くだり龍とを畫きし赤色のはた「龍―」

【旅夾板】ハツキヤウ 旅竿ばさみ。

【旅常】リヨジヤウ はた。日月を畫けるを常といひ、交龍を畫けるを旅といふ。〔周禮〕謝朓文「銘二彼―――、勒二斯鐘鼎一」

【旅旋】リヨウ 旅は龍を描けるはた。旋は龜蛇を描けるはた。詩、小雅「出車彭彭、―――央央」

【旃】 セン 旃 或は旃に作る

○はた、曲柄のはた、士衆を招くに用ふ。孟、萬章「庶人以」―」○けおりもの「―毛」＝氈。○あらはす（表）○これ、之・焉二字の合音。詩、魏風「上愼―哉」○―蒙は十干の乙〔爾雅〕

附錄　旂・之・此・是・維・斯・諸・伊の別は之（丿部三畫）の條を見よ。

【旂茵】　毛おり物のしとね。淮南子「席―」―傳＝旄象―」

【旂裘】　けおりのころも。史、匈奴傳「被―」―」

【旂旌】　はた。班固、南巡頌「運＝天官之法獵、建＝日月之―」―」

【旂檀】　印度・交趾等の熱帶の地に產する香木（晉書、穆帝紀）＝栴檀・檀香。

【旂陀羅】　刪殺者と譯し、四姓中の下等なるもの、性凶惡、行、禽獸にひとし。

【旂表】　あらはす。說文「―」―士衆―」＝旌表。

【旂毛】　けおりものの毛。漢書、蘇武傳「齧＝雪與―」―」並咽―之」＝氈毛。

【勉―旂】　勉めよと、勵ます語。高適詩「行矣各――、吾當―捲＝餘烈―」

【旆】

㊀ハイ　㊁ハウ　豪　號

㊀鷺牛。又、其の尾。○はたほこ（幢）鷺牛の尾を竿頭につけたる旗「干―」「羽―」㊁旄の毛ながし。○おいほれ「老―」耄に通ず。

【旆鉞】　旆ははたほこ、鉞はまさかり。皆天子の命を受けたる大將のもつもの。書、牧誓「左―秉＝黃鉞、右秉＝白旄―」

【旆丘】　丘の前方高く後方低きもの。爾雅「前高―、後高陵丘」

【旆牛】　からうし。山海經「潘侯之山有―獸焉、其狀如―牛、而四節生―毛、名曰―」―」＝鷺牛。

【旆旄】　老人と小兒と。孟、梁惠王「反＝其―」―」＝老幼。

【旁】

㊀ハウ・バウ　㊁ハウ・バウ　㊂ハウ　陽　藻　庚　旁は俗字

㊀ほとり（邊）○わき、かたはら（側）「路―」○かたよる（偏頗）○つくり、漢字の右方の稱「偏―」以上は傍に通ず。○大いなり。○ひろし（廣）○あまねし。○―礴は、まじる（混同）又、ひろがる。㊁よる（依）莊、齊物「―日月」○―午は交り横はる。又、分れ布く。㊂―は馬の馳驅して息まざる貌。又、馬の盛んなる貌。○國カタ　ついで、兼ねて。

【旁引】　ひろく考證する。杜牧文「尙宜――曲釋、褒―釋」＝旁搜・博引。

【旁行】　○あまねくゆきわたる。易、繫辭「――而不―流」○横書き。史、大宛傳「書―革―、以爲＝書記」

【旁格】　あまねくきはめる。南史、齊太祖紀「背我祖宗英叡、――幽明、末葉不―遺、仍多＝世故」

【旁求】　あまねくもとめる。書、太甲「―――俊彥、啓＝迪後人」＝旁招。

【旁觀者審當―局者迷】　身を利害の外に置く旁觀者の判斷は公平にして、當局者の心の卻りて迷ふをいふ。鹽鐵論「從―旁議者易―是、其當―局則亂」唐書、元濟傳「當局者迷、旁觀者審」

【旁系】　わかれたるちすぢ。直系の對。

【旁午】　○往來の繁きをいふ。交り横はる義。一縱一横をいふ。漢書、雋光傳「使者―――」○轉じて事の煩雜なるをいふ。

【旁妻】　妾―漢書、元后傳「多取―――」＝側室。

【旁枝】　わきに出でたるえだ。西陽雜俎「山有＝寶玉、木―――皆下垂」

【旁震】　四方にひびく。東京賦「擂＝洪鐘、伐＝靈鼓―――」八鄙」

【旁舍】　かたはらの小屋。史、高祖紀「高祖適從―――來」

【旁若無人】　人を人とも思はざる振舞をなす。史、刺客傳「高漸離擊―筑、荊軻和而歌＝於市中―相樂也、已而相泣、――」

【旁涸】　あまねくうるほふ。潘尼文「和氣四充、惠澤―――」

【旁烱】　あまねくてらす。漢書、明哲煌煌、―――無―」

【旁矚】　あまねくみる。蘇軾文「延―英―――、念＝故老之不―來」

【旁搜】　旁引に同じ。韓愈、進學解「獵―――而遠紹」

【旁綜】　あまねくすべあつめる。晉書「加以―――廣深、惇閎弘識―」

【旁側】　君のそば近きところ。又、侍臣。漢書、孝元皇后傳「內媚＝事―――」＝近習・近臣。

【旁唐】　廣がりはびこる、唐は廣。長笛賦「囉田―――」

【旁暢】　あまねくのぶ。史、始皇紀「武威―――、振＝動四極、禽＝滅六王―」

【旁註】　本文の側に書き入れする。又、其の註釋文。＝旁注。

【旁通】　つぶさに盡くす。易、文言「六爻發揮、―――旁―情也」

【旁牌】　たて（盾）蘇軾詩「長刀擔＝――」―」

【旁旁】　馳せて息やまざる貌。詩、鄘風「駟介―――」

【旁皇】　ひろく下に被りおよぶ。漢書、司馬相如傳「大漢之德、―――四塞―」

【旁礴】　混同して一にする。又、みちひろがる。莊、逍遙遊「之人也、之德也、將―――萬物―以爲―」＝旁薄・磅礴。

【旁睨】　廣くかたはらをみる。潘岳賦「酹＝悸目以―――」

【旅】

リヨ　ロ　語

○たび（客）「商―」○たびびと、たびする、―行する。○おほし（衆）○もろもろ（衆）○ならぶ（陣列）左、莊二六「庭實―百」○ついで（序）順序を立てて竝べる。○ともにする（俱）禮、樂記「進―退―」○よろひのさね。○やままつり（祭山）論、八佾「季氏―於泰山」○えびすのをさ、西戎の長。○軍兵五百人の稱。轉じて廣く軍隊の稱「軍―」「師―」「禁―」○振―は衆を整へてかへる。○播種に因らずして生ずる。○易の卦の名、艮下離上。

【旅衣】　たびごろも。崔湜詩「清霜換＝――」―」＝客衣・征衣。

【旅行】　たび。たびする。

【旅行券】　旅行免狀に同じ。

【旅行免狀】　海外へ旅行する者に對し外務大臣より下附する許可證。＝旅行券・旅券。

【旅獘】　○西旅に產する犬の一種。○書經の篇名。書、旅獒序「西旅底貢＝厥獒、太保乃作＝――」

【旅客】　たびびと。易林「路多＝袒騾、步刺＝我足、不―利＝――」＝旅人・羈客・客子・遊子。

【旅鷹】　たびのかり、遠方へ飛び行く鷹。何遜詩「霜洲――渡、朔風吹＝宿莽―」＝征鷹。

【旅寓】　やどや、たびのやどり。元稹詩「――雖―堪託、官僚自可憑」＝旅次。

【旅館】　やどや、旅人宿。高適、除夜詩「――寒燈獨不―眠、客心何事轉悽然」＝旅舍・旅亭・客館・旅次・旅宿・旅寓・逆旅・旅店。

【旅憩】　たびぢにてやすむ。李白詩「醉來脫＝貴劍、――高堂眠」

【旅券】　旅行免狀に同じ。＝旅行券。

【旅魂】　たび人のこころ。杜甫詩「空山獨夜――驚」＝旅情・客心・旅思。

【旅裝】　たびじたく。

【旅次】　たびのやどり。杜甫詩「老夫轉不―樂、――兼＝百憂―」

【旅思】　たびのかなしきおもひ。駱賓王詩「青陰芳春斷、黃沙――催」＝客心・客愁・旅愁・旅魂。

【旅愁】　たびのうれへ。杜甫詩「日出淸江望、暄和散――――」＝客愁・羈愁・旅思。

【旅人】　旅客に同じ（易、旅卦）

【旅人宿】　旅館に同じ。

【旅進旅退】　衆と共に進退する。王禹偁、待漏院記「有＝無―毀譽、――、窮―位而苟―祿、備―員而全―身者、亦無―所―取焉」禮、樂記「今夫古樂、進旅退旅」

【旅舍】　旅館に同じ。

【旅情】　たびごころ。楊愼詩「坡老――昌歜酒、雍陶鄉思米囊花」

【旅樹】　旅は道、樹は屏、道に設けたる屏。禮、郊特牲「臺門而――」＝旅次。

【旅館】　旅館に同じ。張籍詩「――今已遠」○たびのやどり。＝旅次。

【旅食】　他鄉にてくらす。戴復古詩「――思＝鄉味、砧聲起＝客愁―」

【旅炊】　たびにてかしぐ。陸游詩「――雜＝沙土、得―飽何暇―擇」

【旅生】　禾の種を播かずして生へたるもの。後漢書、光武紀「野穀――、蹄赤尤盛」

【旅前】　むれをなしてすすむ。易林「蒼鷺翠行、相得――」

【旅團】　二個聯隊の兵にて編成せし軍隊。

【旅亭】　やどや。＝客亭・客舍・逆旅・旅館。

【旅程】　たびの道のり。

【旅店】　やどや。項斯詩「――開偏早、鄉帆去未―收」＝旅館。

【旅途】　たびのみち、たびぢ。劉滄詩「――――誰見客青眼」＝客途。

【旅拜】　竝びつらなりてをがむ。宋書「見者皆――」

【旅抱】　たびのこころ。李商隱詩「歸期無＝雁報――有＝猿啼―」＝旅思・客心・旅情。

【旅百】　おほくの品をならべる。百品をならべる。左、宣十四「庭實――、奉―之以＝玉帛―」

【旅泊】　たびやどりす、ふなどまり。博異志「欣＝此――、接奉不―得＝鄭重―耳、恨恨而別」

【旅賓】　やどや、旅人宿。高適、除

【旅力】リョク せぼねのちから、旅は膂。一解、旅は衆、衆力の義。詩、小雅「――方剛、經二營四方一」

【旅商人】アキンド 國諸國を廻り歩きて商賣する者。＝行商人。

【旅客】カクキ 國でかせぎ。他國へ行きてかねまうけをする。

【旅籠】ゴタ 國○道中馬のかひばを盛るかご。又、たびの荷物を容れるかご。○はたごやの略。＝旅館・旅人宿。

【旗】七 畫

旂（方部十畫）の略字。

【旌】セイ シャウ 庚

○はた（旗）旗竿の上に旄カラの尾をつけ、之に析きたる鳥羽をつけたる旗。○旗の總名。「旆―」○あらはす（表示）賢人・孝子義僕などを表彰する「―忠」「―義」「―賢」「表―」○しるす（識別）表識して明かにする「―別」

同訓異義 ハタラ 旌・見・現・顯・著・形・暴・露・表・彰の別は見（部首七畫）の條を見よ。

【旌引】セイイン あらはし引き上ぐ。宋書、戴顒傳「前太尉參軍戴顒、辟士章元、秉二操幽遠、守二志不一渝、宜加二―一以弘二止退一」

【旌表】ヘイ はたと、きぬがさと。齊書、宗室遙昌傳「――飄颻、盪涉二淮泗一」

【旌竿】カン はたざを。常建詩「落日――懸」

【旌簡】カン あらはしえらぶ。韋曜、博奕論「博選二其材一、――髦俊一」

【旌旂】キ はたの總稱。廣雅「凡旗之名雖レ異、――爲二之總稱一」

【旌旗】キ はた。漢書、梁孝王傳「賜二天子――一」＝旌麾。

【旌麾】キ はた。麾はさしづばた。江總詩「北窗命二簫鼓一、南館列二――一」＝旌旗。

【旌旄】ボウ はた。王安石詩「夾レ砌陳二――、褰レ簾進二佩環一」

【旌揭】ケイ あらはしかかぐ。又、しるし（表揭）了謂賦「志二轅門一而――」

【旌賢】ケン 賢人をあらはす。後漢書、胡廣傳「德以――、爵以建レ事」

【旌顯】ケン あらはす。後漢書、公孫述傳「忠節志義之士、並蒙二――一」＝旌表。

【旌鼓】コ はたと、つづみと。晉書、輿服志「陳二乘輿車輦――於其殿庭一」

【旌賞】シヤウ 善行又は功績をあらはしほむ。宋書、孝武帝紀「――茂異」＝旌襃。

【旌敍】ジョ あらはして次第をついで定む。孫綽文「國無二逸民一、而賢善之流、必見二――一矣」

【旌節】セツ 使者の持ちゆく旗じるし。周禮「執二――一以宣二布于四方一」王昌齡詩「前驅引二――一、千里陣雲匝」

【旌擢】タク あらはしてぬき用ふる。北齊書、辛術傳「未レ蒙二――一」

【旌寵】チウ あらはしめでる。後漢書、朱穆傳「守レ死善レ道、宜レ蒙二――一」

【旌旋】セン はた。隋煬帝文「――飄颻而從レ風」

【旌旆】ハイ はた。宋書、鄧琬傳「――掩レ雲、軸艫咽レ海」＝旌旗・旆旌。

【旌旄】ボウ はた、さしづばた。杜甫詩「漢苑入二――一」＝旌旗。

【旌襃】ホウ あらはしほむ。＝旌賞。

【旌表】ヒヤウ 善行を賞めあらはす。南史、邵榮傳「八世同居、――門閭」

【旌別】ベツ あらはして善人と惡人とをわかつ。書、畢命「――淑慝、表二厥宅里一」

【旌命】メイ 賢才を明かにして能吏に任ず。晉書、山濤傳「搜二訪賢才一、――三十餘人一、皆顯二名當時一」

【旌銘】メイ 死者の名をしるせるはた、銘旗。後漢書、趙咨傳「表以二――之儀一」

【旌門】モン 祭祀宴會などの時に設くるはたにてつくりたる門。周禮、天官「爲二帷宮一設二――一」

【旌揚】ヤウ あらはしかかぐ。王昂文「垂二――之期一、崇二奬激之道一」

【旌庸】ヨウ いきをあらはす。庾信文「崇德――、異レ亡繼レ絕」

【旌勞】ラウ 功勞をあらはす。元史、順帝紀「右丞相脫脫、治レ河功成、宜レ有二異數以旌二其勞一」

【旌閭】リヨ 善行の人の名を里門にかきあらはす。唐書、張適秀傳「所レ居堂、產二芝草一、犬乳二鄰貓一、中宗以爲二孝感一、旌二其閭一」

【旌錄】ロク あらはししるす。顏延之文「光二昭茂績一、――齊勳一」

【旃】

旌（前條）に同じ。

【旃旗】キ はた。梁簡文帝詩「風急――斷、塗長鐵馬疲」＝旌旗。

【旋】

㊀セン ㊁セン 先 平

㊀めぐる、めぐらす、まはる、まはす「轉―」○かへる、かへす（反）還に通ず。○まとふ（遶）○まろし（圓）○りゅうづ（鐘懸）○ゆばり（小便）左、定三「夷射姑―爲」夷射姑は人名。○やや（差）○しばらく（俄頃之間）○また、かへって。史、始皇紀「―遂之琅邪」○璇に通ず「―璣」○便―ベン はたちもとほる。＝徘徊。㊁めぐる、まとふ（繞）僧用晦詩「東郊十里香塵―」

同訓異義 ムカフ 旋・歸・還・反・返・復・回の別は歸（止部十四畫）の條を見よ。

○ムク旋・繞・遶・環・行・巡・周・回等の別は繞（糸部十二畫）の條を見よ。○ヤウ旋・稍・差・較・莫の別は稍（禾部七畫）の條を見よ。

【旋幹】カン めぐらす。めぐる。陸游詩「上天何蒼蒼、四序浩――」＝斡旋。

【旋瀾】セン ふかくうづまくふち。淮南子「濫瀾――」

【旋歸】キ めぐりかへる。古詩「客行雖レ樂、不レ如二早――一」

【旋曲】キヨク めぐりまがる。淮南子「能進退履繩而――中レ規」

【旋軍】グン いくさをかへす。＝還軍・旋師。

【旋渦】クワ うづまき。寰橋詩「敎レ民風偃草、撫レ俗水――」＝盤渦。

【旋花科】クワ 植物分類法にて、花又雷の螺旋狀に卷く植物の總稱、朝顏の類。

【旋回】カイ 旋轉に同じ。＝旋廻。

【旋環】クワン めぐらす。めぐる。班婕妤、擣素賦「或――而紆鬱」

【旋乾轉坤】ケン 天地を回轉する義。成武を振ひ國家を平定するにいふ。韓愈、潮州謝上表「陛下卽位以來、躬聽斷、旋二乾轉一坤、天戈所レ麾、莫レ不二響順一」

【旋止】シ かへりきたる。曹植文「今我――、素雪云飛」

【旋師】シ いくさをかへす。＝還師・旋軍。

【旋醙】ジヨウ くびすをめぐらす、暫時の義。史、吳起傳「其父不レ――、遂死二於敵一」

【旋泉】セン うづまくいづみ。水經、注「昭山下有二――一、深不レ可レ測」

【旋轉】テン まはる、めぐる。北史「雲表見二一大鳥一射レ之、正中、其頸狀如二車輪一――而下、乃鳴也」＝旋回。

【旋施】ヘイ はたをめぐらす、軍をかへす義。狶延之表「大軍――、渾儀在レ路」＝反旆。

【旋反】ハン めぐりかへる。詩經「既不二我嘉一、不能――一」

【旋盤】バン 陶器をつくるろくろ。

【旋避】ヒ めぐりさける。婁度文「神魚鼓舞而――」

【旋轡】ヒ 馬をひきかへす、轡はたづな。

【旋風】フウ つむじかぜ。高適詩「一日千里如二――一」＝旋颿。

【旋風筆】フウヒツ 文詞を從横自在に作る才筆。方鎭編年「田承嗣簽二治文案一、如二流水一、吏人相謂曰、世罕レ有二此――一」

【旋覆花】フククワ 草花の名、をぐるま。

【旋瓢】ヒヤウ つむじかぜ。宋褧、朝元宮白牡丹詩「瑤圃廓落崑崙高、霓旌豹節凌二――一」＝旋風。

【旋毛】モウ つむじ、うづまきたるけ。開見後錄「碧雲霞殿馬也、莊憲太后、臨レ朝以賜二荊王一、王惡二其――一」

【旋沫】マツ めぐるあわ。李泌詩「――飜成二碧玉池一」

【旋頭歌】カ 國和歌の一體、上の句も下の句も五七七の三句より成る、本かと思へば末となり、末かと思へば本に旋カヘるが故に名つく。

【族】

㊀ゾク 屋 寄 ㊁ソウ

㊀やから、みうち、ともがら（類・屬）「宗―」「親―」「疏―」「戚―」「皇―」「貴―」三―は、父・子・孫。九―は上高祖に至り、下玄孫に至る稱。○一人の罪の爲めに父母妻子までも罪する。又、其の刑。書、泰誓「罪―人以―」○たぐる（類）「水―」「羽―」○むらがる（叢）あつまる（聚）○物事の交錯して結ほれる所。莊、養生主「每至於―、吾見其難爲」○やじり（矢鋒）＝鏃。○周代にて百家の稱。○うぢ（姓氏）㊁けしかける。＝嗾。○あつまる。＝蔟。○ふし、音樂の節奏。＝奏。○太―は正月の律の名。＝太簇。

同訓異義 ムラ 族に从ひ、矢に从ふ。

【族姻】イン むこ、又はよめの家族。張華文、隆禮崇二親戚一、旁施協二――一」＝姻類。

【族殺】サツ みうちを合せて殺す。五代史、司空頲傳「以爲レ通二書於梁、莊宗一――之」

【族子】シ ○親類のこども。漢書、嚴助、令糟吳人嚴夫子子也、或冒族家子也。○兄弟の子、姪。

【族稱】シヤウ 國人民の身分のとなへ。華族・士族・平民の區別のとなへ。

【族生】セイ むらがりおふ。族は叢なり。爾雅「水――爲レ瀕」

【族姓】セイ ○同姓と異姓と。書、呂刑「王曰、嗚呼敬レ之哉、官伯――」注「族、同族、姓、異姓也」○同じやから。晉書、諸葛恢傳「王導嘗與レ恢戲爭――」

【族籍】セキ 族稱と本籍と。

【族誅】チユウ 一人の罪によりて一族を誅する。

【族望】バウ 氏族と門望カイボウと。南史、周敷傳「倚敷――、深求二交結一」

【族譜】フ 一族のけいづ、氏族の系譜。南史、賈希鏡傳「――合百帙、七百餘卷」

【族別】ベツ ○親族のわかち。周禮、掌二三族之別一。○種類によりて分つ。道德指歸論「物以レ――」＝類別。

【族味】ミ 鵝の異名。清異錄「鵝捕之者、多論網而獲、故雌雄羣子、同被二鼎俎一、世人文其名、爲二――一」

【族滅】メツ 罪ありて一族をほろぼす。

【族類】ルイ 同じやから。史、春申君傳「――離散」

【旋】ゼ　紙
○旛ノ―は旌旗の風に從ふ貌。又、しなやかなる貌。又、雲のたなびく貌。又、盛んなる貌。

【旒】旒（方部九畫）に同じ

八　畫

【旐】テウ　篠
○はた、龜蛇を畫きし旗「玄武ノ―」○帛の長さ八尺ある旗。

九　畫

【旃】セン　寒
はたあし。旌旗の旒。漢書、揚雄傳「建ニ光耀之長ノ―一分」

【旒】リウ　尤　或は斿・旒に作る
○はたあし、旌旗の垂れ下る者、ふきながし。禮記「龍旂九ノ―」○かんむりのたれ、冕の前後に垂るる玉のかざり「冕ノ―」

【旒旗】たれのあるはた。潘岳文「敢託ニ―一ノ愛作ニ斯誄一」

【旒旌】十二のふきながしのあるはた。高唐賦、注「―ノ、謂ノ建ニ太常十二旒一」

【旒綫】はたあし。杜甫詩「忠貞負ニ冤恨一、宮闕深ニ―一」

【旒旒】ふきながしありて、長さ八尺あるはた。張說詩「―ノ飛ニ行樹一、帷宮宿ニ野煙一」

【旒冕】絲にて玉を貫きて前後にたれたる貴人のかんむり。隋書、樂毓「稽疑―ノ、蘊ノ誠學ノ敬」

十　畫

【旗】キ　支
○はた。古は熊虎を畫き、大將の建てしもの、衆と其の下に期するもの。周禮、大司徒「以ノ―致萬民」後は廣くはたの總名とす「牙ノ―」「義ノ―」○しるし（表標）左、閔二「佩衷之ノ―也」さし物は中心を示す目標の義。○東北の星宿。○二十八宿の一。＝箕。○清朝の軍隊の稱「滿州八ノ―」

【旗下】はたもと、大將の旗の下の義、大將に直屬する兵。後漢書、耿弇傳「―ノ衆尚十餘萬」＝麾下。

【旗鼓】はたと、きぬがさと。潘岳、關中詩「―ノ相望、偏師作ノ援」

【旗竿】はたざを。幸蜀記「有ニ寡鴉泊ニ於―ノ上一、其鳴甚哀」

【旗艦】司令長官の坐乘せる軍艦。

【旗旆】はた。劉放詩「風霆齊ニ命令一、龍虎會ニ―ノ―一」

【旗魚】かぢきまぐろの異名、長さ丈餘、口端銳く尖りて角狀を爲し、船の舵木を穿つことありといふ。

【旗旛】いくさばた。宋書、武帝紀「―ノ首ノ登則八表響震、偏師先ノ路則多壘雲徹」

【旗戟】はたぼこ。韓愈詩「晶光蕩相射、―ノ―一」

【旗鼓】軍用のはたと、つづみと。史、淮陰侯傳「信建ニ大將之ノ―一」

【旗鼓相當】互に軍勢を張り合ふ。轉じて伎倆をくらべる。管輅別傳「太守畢子春、欲ノ試ニ輅之才辯一、謂ノ輅曰、吾欲ニ自與ノ卿――一」

【旗幟】はた、幟は旗じるし。史、高祖紀「―ノ―皆赤」

【旗章】はたじるし。禮、月令「以爲ニ―ノ―一、以別ニ貴賤等級之度一」晉書、禮志「諸侯覲ニ天子一、各建ニ其―ノ―一」

【旗手】○はたもち。○軍旗を捧持する者、聯隊附の少尉が之をつとめる。

【旗色】○はたいろ、はたじるし。○國勢軍の勢。

【旗旌】はた。宋之問詩「和風吹ニ鼓角一、佳氣動ニ―ノ―一」＝旌旗。

【旗鼓】はた。唐書、張仲武傳「寶ニ馬牛駱駝―ノ―一、不ノ可ノ計」＝旗纛。

【旗亭】酒屋、料理店、旗を立ててしるしとするが故。史、三代世表「會ニ―ノ―下一」集異記「開元中、詩人王昌齡・高適・王之渙齊ノ名、一日天寒微雪、三詩人共詣ニ―ノ―一貰ノ酒小飲」

【旗旆】はた。唐書、禮樂志「咸通間藩鎭、稍復舞ニ破陣樂一、然舞者衣ニ畫甲一、執ニ―ノ―一、纔十人而已」

【旗僕】軍旗がたふる敗軍にいふ。呂覽「賢主之舉也、豈必ノ―將勢、而乃知ニ勝敗一哉」

【旗頭】國昔時、一地方のさむらひの長。轉じて仲間の首領

【旗本】國德川時代將軍直參の士にて目見え百俵以上萬石以下の者、旗下の士。

十　四　畫

【旛】ヘン　元
○はた（旗）幅の下に垂れ下れるしるしばた。○はたじるし。○旌旗の總名。後漢書、禮儀志「建ニ青ノ―一○ノ―は飛揚する貌。石鼓文「左驂ノ―」」

【旛旛】はた。蘇軾詩「天風吹ニ―ノ―一」

十　五　畫

【旝】クワイ　泰
○はた（旗）大將のさしづばた。左、桓五「ノ動而鼓」＝麾。○いしゆみ、石を發して敵をうつしかけの車。

【旞】スキ　寘
はた。全き羽を旌の上に繫ぐもの。

十　六　畫

【旗】ヨ　魚
○はた、鳥隼を畫きし旗、其の勇健に象る。州里にて建つる所「干ノ―」○あがる（揚）詩、小雅「髮則有ノ―」

【旗旗】はた。曹植詩「君子往守東南坼、―ノ―綵錯如ニ翔鷺一」

无　部

【无】ブ　虞
なし（亡）＝無。

同訓異義　无・無・靡・罔・亾・莫・勿・毋・沒・微の訓は無（火部八畫）の條を見よ。

【无咎】とがなし。とがめを免る。易、乾卦「―ノ―者善補ノ過也」

【无竈】かぎりなし。易經、坤厚載ノ物、德合ニ―ノ―一」＝無疆・無窮。

【无妄】易の卦の名。震下乾上、至誠にして邪心なし。易經「―ノ―之疾、勿ノ藥有ノ喜」

【无妄之災】故なくして咎を得る義「易、无妄、六三爻辭」

【无聞】きこえず。

【旡】キ　未
○のどつまる。○いきつまる。飲食氣逆不ノ得ノ息。

【既】五　畫
既（次條）の譌字。

七　畫

【既】キ　未　既は誤字
○すでに（已）もはや。○をはる（畢）「終ノ―」○つく、つくす（盡）「皆ノ―」左、桓元「日有ノ食之ノ―」○うしなふ（失）○すこしくらふ（小食）○毎月の給米＝餼。

同訓異義　小食なり、皀に从ふ、旡の聲。

同訓異義　既・已・業・業已○既は盡也、訖也と註す、過去の辭、將の反、もはやと譯す。○已は未の反、事の現にかくなりたる義なり、月已望といへば、十五夜をいひ、既望といへば、十六夜をいふにて知るべし。兵卒が、此方の岸に居りて、一人も川に入らざるをば、未濟といひ、一人にても渡り始めたれば、已濟といひ、全軍が渡り終れば、既濟といふ。刺客傳「親既以ニ天年一下世、妾已嫁ノ夫」○業は已然日ノ業と註す、已の輕輕く、然の字重し、事の然る上を主としていふ、既は過去にかかり、已は過去より現在にかかり、業は未來にもかけていふ、史記に「張良業爲取ノ履、因長跪履ノ之」の如し、もはや老人の履を取る賤役を甘んじて爲したる上は、勢已む可きにあらずと、彌々恭しく長跪して、履かしめたりとの意。○業已の二字連用するときは、意稍緩し。

○既・盡・殫・竭・索・罄・悉の別は盡（皿部九畫）の條を見よ。

【既已】すでに、とくに。莊子「―ノ爲ノ一矣、且得ノ有ノ言乎」

【既濟】易の卦の名。離下坎上。易經「―ノ亨小、利ノ貞、初吉終亂」

【既成】すでに出來あがる。

【既生魄】陰曆十七日の異名（書、武成）

【既設】すでに設け終る。

【既倒】すでにたふれる。韓愈、進學解「障ニ百川一而東ノ之、廻ニ狂瀾於―ノ―一」

【既知數】代數學にてすでに値の知れてゐる數。未知數の對。

【既定】すでに定まる。

【既得】すでに得たり。

【既得權】正當の手段にて、すでに得てゐる權利。＝先取得權。

【既望】陰曆十六日。書、召誥「惟ニ月ノ―一」赤壁賦「壬戌之秋、七月ノ―一」＝哉生魄。

【既廩】毎月の給米。中庸「―ノ―稱ノ事、所ノ以勸ニ百工一也」

【既往不ノ咎】すでに過ぎ去りし事はとがめ立せず、既往は過去。論、八佾「成事不ノ說、遂事不ノ諫、――」

【既】九　畫
既（前條）の俗字。

【旣】クワ　霽　闕の古字。
わざはひ。漢書、五行志「數其ノ―福」

日　部

【日】ジツ　ニチ　質　一音
○ひ（太陽）「旭ノ―」「烈ノ―」「落ノ―」

○ひかげ(晷影)詩經「春ー遲遲」○ひる(晝)朝から晩まで「晝ー」孟、離婁「夜以繼ー」○ひとひ(一日)一晝夜、二十四時間の稱。○ひび、毎ー。史、司馬相如傳「ー往而朝相如」○さきに(曩・往日)○のちのひ(來日)○こよみ(暦數)左、桓十七「天子有ー官」○ー者は時ーを占候するする者。○天子の象。○國ひ、天照大御神がーの神なるが故に、天皇の御事を申すに用ふる語「ー嗣」

【日移】ひうつり　ひかげがうつる。潘岳、笙賦「酒醴徒擾、樂闋ー」

【日永】ひながい。陸都刺詩「願ニ玆林塘幽、消ニ此閒ー」

【日官】暦を掌る官。左、桓十七「天子有ニ日官、諸侯有ニー」

【日月】○日と月と。易、乾卦「與ニー合ニ其明」○一日又一月。論、雍也「其餘則ー至焉而已矣」○つきひ。＝光陰。

【日月欲明浮雲蔽之】人の本性の動もすれば私慾の爲めに掩はるるに喩ふ。又、好臣が君の明を掩ふにも喩ふ(文子)淮南子には蔽を蓋に作る。

【日月無私照】公平に恩を施すに喩ふ。禮、孔子閒居「天無私覆、地無私載、ー」

【日月麗ノ天】日月の天に在るをいふ。麗は附。漢書、武帝紀「ー、高明所ニ以表ニ德、山岳題ニ地、柔博所ニ以成ニ功」

【與ニ日月ー爭ノ光】道德功業の盛んなるをいふ。史、屈原傳「推ニ此志ニ也、雖下與ニ日月ー爭ニ光可也」

【日月不ニ爲ニ一物一晦ニ其明上】明王は一人の爲めに法を枉ぐべからざる意に喻ふ。古文孝經、三才章、傳「ー明王不ニ爲ニ一人ー枉ニ其法」

【日月逝矣歲不ニ我與】歲月の人を待たざるをいふ(論、陽貨)

【日月逾邁】逾は益、邁は行なり、年老いて死期の近づくをいふ。書、秦誓「我心之憂、ー若ノ弗ニ云來ー」

【日母】ひ、太陽。日は陽德の母なる義。枚乘文「流寬無窮、歸ニ神ー」

【日晡】ひぐれ、晡は申の刻、今の午後四時。白居易詩「但惜春晡ノ晚、寧愁日漸晡」＝日餔。

【日餔】前條に同じ。史、呂后紀「ー時、鎧擊ノ產」

【日蒙】陽氣が陰氣に蔽はるる義、臣下の勢の强きに喩ふ。後漢書、鄧顯傳「ー則有ニ地裂ー」

【日力】日出から日沒まで、光陰をいふ。孟、公孫丑「去則極ニ日之力ニ而後宿哉」宋史、李綱傳「愛ニ惜ーー」

【日暦】日日の出來事を書きしるす(大戴禮)＝日記・日誌。

【日域】○日の出づる處。支那人、朝鮮を斥して日東といひ、日本を斥して日東といふ。揚雄、東揚賦「東震ーー」○日の照らす域內、天が下。魏書、李孝伯傳「世祖太武皇帝、英叡自ノ天、龍ニ翠ーー」

【日暈】ひがさ、雲氣が太陽をとりまきて環狀を爲す現象。晉書、天文志「白虹貫ノ日、ーー五重」

【日景】ひかげ。周禮「正ニーー」

【日午】まひる、正午。柳宗元詩「ー獨覺無餘聲、山童隔ノ竹敲ニ茶臼」

【日次】ひなみ。又、日のやどり。北齊書、北郊歌「ーー月紀、方極ニ九州」

【日常】つねひごろ、ふだん。＝平常。

【日乘】ひび の記錄。＝日記・日誌。

【日南】太陽が南方に至る。周禮「ー!!則景短多ノ暑、日北則景長多ノ寒」

【日日】まいにち。漢書、賈山傳「ーー射獵」＝毎日。

【日暮】ひぐれ。孟浩然詩「ーー孤舟何處泊、天涯一望斷ニ人腸ー」

【日北】太陽が北方に至る。周禮「日南則景短多ノ暑、ーー則景長多ノ寒」

【日沒】日が入る、日の入り。

【日夜】ひると、よると。史、秦紀「ーー哭泣」

【日用】ひごとにつかふ。易、繫辭「百姓ーー而不ノ知」

【日來】○ひごろ。來は助語。○日に來る。董仲舒文「更化則可ニ善治、善治則災害日去、福祿ーー」○日が出て來る。易、繫辭「日往則月來、月往則ーー」

【日落】ゆふひが入る。鮑照詩「ーー嶺雲歸」

【日輪】ひ、太陽。韓愈詩「中夜起下視、溟渤銜ニーー」

【日蓮宗】圓日蓮の始めたる宗旨、法華經一部を所依とすれば、俗に法華宗ともいふ。

【日錄】ひびの出來事をしるす。又、其の帳面。王氏類苑「王安石既罷ノ相、每ニ其執政日無ニ善狀ー、乃撰ニ神宗ーー、歸ニ過于上、掠ニ美于己」＝日記・日誌。

【日和】○日光がうららか。歐陽修文「風恬ーー」○圓ひより。天氣模樣、空もやう。

【日行】○ひあし。孟浩然詩「冬至ーー遲」○一日の行程。禮記「ーー百里」

【日角】額の中央の骨の隆起して日の如き狀を爲す、貴人の相。後漢書、光武帝紀「光武隆準ーー」隆準は鼻すぢが通つてゐる。

【日下五色雲見】瑞雲のあらはるるをいふ。宋史、韓琦傳「扇冠摹ニ進士ー、名在ニ第二ー、方唱ノ名、太史奏ー、左右皆賀」

【日刊】日日出版發行する「ーー新聞」

【日記】ひびの事を書きしるす。又、其の帳面。新序「周舍事ニ趙簡子」(中略)曰、願爲ニ諤諤之臣、墨ニ筆操ノ牘、隨ニ君之後、司ニ君之過、而書ニ之、日有ノ記也、月有ノ效也、歲有ノ得也」＝日誌・日錄・日暦・日乘。

【日軌】太陽の通過するみちすぢ。五代史、司天考「黃道者ーー也」

【日晷】ひかげ。隋書、天文志「揆ニ測ーー、求ニ其盈縮ー」

【日旗】日を畫きたるはた。杜牧詩「ーー龍旆想ニ飄揺ー」

【日勤】毎日役所などへ出てつとめる。

【日輿】ひびのたのしみ。杜甫、飲中八仙歌「左相ーー費ニ萬錢ー」

【日課】ひびの仕事のわりあて。陸游詩「老人無ニーー、有ノ興即題ノ詩」＝日程。

【日光】ひのひかり。魏書、孝文昭皇后高氏傳「初后、幼曾夢在ニ堂內ー立、而ーー自ニ懷中ー照ノ之、灼灼而熱」

【日官】暦を掌る官。左、桓十七「天子有ニーー、諸侯有ニ日御ー」

【日觀】泰山の頂上、日出を觀る峯の名。漢官儀「泰山東南山頂、名曰ニーー」

【日計不ノ足歲計有ノ餘】目前の利なきも、久しくして其の益を見るをいふ(文子、精誠)莊、庚桑楚「吾日計ノ之而不ノ足、歲計ノ之而有ノ餘、庶幾其聖人乎」

【日限】ひぎり、日數の限り。

【日魂】日の神。參同契「陽神ーー、陰神月魂」

【日祭】まひにちまつる。國語「蔡公謀父曰、ーー月祀、時享歲貢」

【日際】太陽のはとり。何遜詩「天末靜ニ波浪、ーー斂ニ烟霞ー」＝日邊。

【日削】いきほひが日日に減ずる。史、屈賈傳「屈原既死之後、楚日以削」

【日參】圓神佛へ毎日參詣する。

【日子】○ひづけ。南史、劉之遴傳「今本無ニ上書年月ーー」○日數。○日輪の子。北史、高句麗傳「我是ーー河伯之外孫」

【日支】○毎日支給する。宋史「人ーー錢二百、米二升」＝日給。○日本と支那と。

【日誌】ひびの出來事を記す。又、其の帳面。荀子「王者之功名、不ノ可ノ勝ニ日志ー也」志は誌に同じ。＝日記。

【日餘】日ながし。淮南子「陽氣勝則ーー而夜短」注「餘、長也」＝日永・日長。

【日進】日日にすすむ。謝靈運文「由ノ數而信、有ニーー之功ー」

【日進月步】日に月に進歩する。

【日新】日日に舊習を改めて自ら新にする。易、繫辭「ーー之謂ニ盛德ー」

【日者】○卜筮家の稱、日の吉凶を卜ふもの。史、日者傳「卜ニ筮占ニ候時日ー通ニ名ーー」○さきのひ、昔日。史、高祖紀「ーー荊王兼ニ有其地ー」＝往日。

【日章】○ひびに明かになる。中庸「君子之道、闇然而ーー」○太陽を畫ける旗。管子、兵法「擊ニーー則書行」

【日章旗】圓ひのまるのはた、我が國の國旗。＝旭日旗。

【日射病】あつさあたり。

【日出】ひので。詩經「羔裘如ノ膏、ーー有ノ曜」

【日出處天子】日本國の天子といふ意。隋書、倭國傳「大業三年、遣ニ使朝貢、其國書曰、ーー、致ニ書日沒處天子ー、無恙、帝不ノ悅」

【日色】太陽のいろ。王維詩「泉聲咽ニ寒石、ーー冷ニ青松ー」

【日炙】日がかたむく。ひぐれ。漢書、薛宣傳「躬有ニーー之勞ー、而上ニ佚豫之樂ー」＝日仄。

【日食】月が日と地球との閒に來りて日をおほふ義。禮記「ーー則天子素服、而修ニ六官之職ー」＝日蝕。

【日蝕】前條に同じ。史、天官書「春秋二百四十二年之閒、ーー三十六」

【日星】ひと、ほしと。岳陽樓記「ーー隱ノ耀、山岳潛ノ形」

【日精】菊の異名。晉林伐山「菊有ニ兩種、花大氣香、莖紫者、爲ニ甘菊花ー、此ーー也」

【日抄】日日ぬきがきする。又、其の書名。宋史「所ノ著ーー一百卷」＝日鈔。

【日夕】ひるよる。王粲、從軍詩「ーー涼風發、翩翩漂ニ吾舟」＝日夜。

【日當】圓日給に同じ。

【日旦】あさ。大戴禮「ーー就ノ業、而夕自省思、以翌ニ其身ー」

【日長】○日が長い。白居易詩「ーー晝加ノ餐、夜短朝餘ノ睡」＝日永。○年月ながし。晉書、李密傳「臣盡ニ節於陛下ニ之ーー」

【日中】○まひる。又、其の前後。說苑「肚而好ノ學、如ーーー之光ー」○春分の日。書、堯典、傳「ーー謂ニ春分之日ー」

【日程】毎日する仕事の見つもり。元史「考試以ニ論及經義詞賦ー、分爲ニ三科ー、作ニ三ーーー」＝日課。

【日東】日本國の稱。

【日透】日のほとり。李白詩「兩岸

青山相對出、孤帆一片日ー來」

【日俸】ニチホウ　ひぶの給料。○白居易詩「爲君貧遠二ー一ー」＝日給。

【日本】ニホン　やまと、わが國名。宋史、日本國傳「ー國本倭奴國也、自以日其國近二日所レ出、故以二ー一爲レ名」

【日本研】ニホンケン　日本製のすずり。宋景濂集「ー銘、夷而華、四海一家、此非二文明之化一邪」

【日本紀】ニホンキ　日本書紀の略稱。次條參看。

【日本書紀】ニホンショキ　三十卷、神代より持統天皇に至る編年史、元正天皇の養老四年、舍人親王撰す。

【日出三竿】ヒイデサンカン　日出でて三竿即ち三丈程の高さに至る。午前八時頃。南齊書「ー、朱黃色赤鼠」

【日出而作日入而息】ヒイデテサクシヒイリテイコフ　終日勞作して、日沒に至りて休む。帝王世紀「ー、鑿レ井而飲、耕レ田而食、帝力子レ我何有哉」

【日行】カウヒイ　晝夜つゞけざまに疾く行く義。史、孫子傳「棄二其步軍一、與二其輕銳一、ー逐レ之」＝倍レ道兼レ行。

【日不レ移レ晷】ヒフイシキ　時を經ざるにいふ。漢書、王莽傳「人不レ還レ踵、ー」

【日暮途遠】ヒクレトエン　年已に老いて期する所なほ遠きに喩ふ。史、伍子胥傳「吾ー、故倒行而逆施之」尉繚子「日窄道遠、逆有レ挫レ氣」

【日薄二西山一】ニセザン　年老いて死に臨んとするをいふ。薄は迫。李密、陳情表「但以劉ー、氣息奄奄、人命危淺、朝不レ慮レ夕」

【日中則移月滿則虧】ヒナカスレバツキミチルレバカケル　盛極まれば必ず衰ふるに喩ふ。史、蔡澤傳「ー、物盛則衰、天地之常數也」

【日中則昃月盈則食】ヒナカスレバソクツキミチルレバハミカクル　盛んなる者は必ず衰ふるに喩ふ。易、雙卦、彖傳「ー、ー、天地盈虛、與時消息、而況於人乎、況於二鬼神一乎」

【不レ日成】シテナラズ　日數を費さずして成就す。詩、大雅、靈臺「庶民攻レ之、不レ日成レ之」

【日改月化】ヒニアラタマツキニカワル　日日月月にうつりかはる。荀子「一晦一明、ー、日有レ所レ爲、而莫レ見二其功一」

【日削月割】ヒニケツゲカツ　日日月月におとろへゆく。六國論「ー、以趨二於亡一」

【就レ日望レ雲】ヒニツクモヲノゾム　太陽の光に就き、雲のおほふを望む如く、天子の德を仰ぐをいふ。史、五帝紀「放勳其仁如レ天、其知如レ神、就レ之如レ日、望レ之如レ雲」

【日就月將】ヒニナリツキニススム　日日月月に進歩する、就は成る、將は進む義。詩、周頌、敬之「維予小子、不二聰敬一止、ー、學有レ緝二熙于光明一」

【吠レ日】ヒニホユ　蜀の地は霧深く日を見ること少きが故に、犬は日を見てほゆ。見識狹き小人が君子の嘉言善行に接して驚き誹るに喩ふ。韓愈文「蜀中山高霧重、見レ日時少、每レ至二日出一、則羣犬疑而吠之」

【日陵月替】ヒニリヨウツキニタイス　日日月月におとろへる。眞觀政要「ー、以至二危亡一」

【日下開山】ヒノシタカイザン　國武藝又は相撲道にて天下無敵の者に與へる稱。日下は天下、開山は草創、過去現在に類無き義。

【第二日之力】ヒノキヘノチカラ　朝より暮までせい一ぱいつとめる。孟、公孫丑「去則ー、而後宿哉」

【日日新又日新】ヒビニアラタニシテマタヒニアラタナリ　日日舊習の惡を去りて自らあらたにす。大學「湯之盤銘曰、苟日新、ー」

【日亦不レ足】ヒモマタ　終日之を爲すも、爲し盡す能はず。書、泰誓「我聞吉人爲レ善、惟日不レ足、凶人爲二不善一、亦惟日不レ足」詩、小雅、天保「降二爾遐福一、維日不レ足」

【日外】ヒガイ　國かつて。＝前日。

【日本魂】ニホンダマシヒ　我が國民固有の精神、我が國民性。＝大和心・和魂。

一畫

【旦】タン　ダン

○あした(朝)「元ー」あかつき(曉)「平ー」「清ー」「早ー」○つとに(早)○ーーはあきらか(明)又、懇ろに誠ある義。○演劇にて婦女に扮する者、女形。○元ー正ー歲ーは正月元日のあさ。

解字　明なり、日が一の上に見はるるに从ふ、一は地なり。

【待レ旦】タイタン　夜の明けるをまつ。書、太甲「先王昧爽丕顯、坐以ーレ」

【旦晉】タンシン　旦暮に同じ。李蟠文「ーー交謝」＝旦暮。

【旦日】タンジツ　あした。史、項羽紀「ー、饗二士卒一、爲擊二破沛公軍一」＝明朝。

【旦夕】タンセキ　あさばん。白居易詩「ー、秋風多、衰荷半傾倒」＝朝夕・旦暮。

【旦暮】タンボ　あしたと、ゆふべと、昔は夕。管子「ー、從二事於此一」＝旦夕。

【旦旦】タンタン　○あさなあさな、毎朝。孟、告子「ー、而伐レ之」○あきらかなる貌。又、ねんごろに誠ある貌。詩、衞風「信誓ーー」＝怛怛。

【旦晝】タンチウ　ひるま(晝間)。孟、告子「ー之所レ爲、有レ梏二亡之一矣」

【旦朝】タンチウ　あさ、あした。宋玉、高唐賦「ー、視レ之如レ言、故爲立レ廟、號曰二朝雲一」巫山(五六〇頁二段)參看。

【旦潮】タンチウ　あさしほ。鮑照詩「浸淫ー一隙、潤浸宿雲滋」

【旦那】ダン　○檀陀那、梵語の略、僧侶に施しをする人。＝施主・檀家・檀越・檀那。國○主人をいふ。○をつと、亭主。＝其人。○商家のとくいさき。○身分卑き人が上流の人を呼ぶ稱。

【旦暮】タンボ　○あしたと、ゆふべと。又、あけくれ。顏氏家訓「古人云、千載一聖猶二ーー一也」＝旦昏。○迫りて急なるにいふ。史、晉世家、君老矣、ーー之人、曾不レ能レ待、而欲レ弑レ之」＝旦夕。

【旦明】タンメイ　よあけがた、旦日・翼明の義。儀禮「宗人曰、ーー行レ事、主人曰諾、乃退」＝平明。

二畫

【旭】キヨク　沃

○あさひ(朝日)「初ー」「朝ー」「紅ー」○日の旦に出づる貌。○あきらか(明)○ーーはおごれる貌。又、自得の貌。又、鼓動する聲。

【旭暉】キヨクキ　旭光に同じ。暉は日光。

【旭旗】キヨクキ　日の丸のはた。＝日章旗。

【旭旭】キヨクキヨク　○小人志を得ておごれる貌。爾雅「ーー蹻蹻憍也」○自得の貌。漢書、揚雄傳「喧喧ーー」○鼓動の聲。漢書、揚雄傳「洶洶ーー」

【旭光】キヨククワウ　あさひのひかり。＝旭暉。

【旭日】キヨクジツ　あさひ、初出の日。詩、邶風「ーー始旦」

【旭旦】キヨクタン　日の出。韋應物詩「開レ門臨二廣陌一、ーー車馬喧」

早

【早】サウ　皓　促音　サツ

○はやし「ー朝」「ー旦」○すみやか(速)「大ー計」○あした(晨旦)○つとに。○未だ其の時に及ばず「尙ー」さきんずる(先)○柞栗の屬。＝早。

【早鴉】サウアー　あけがらす。李白詩「東方日出啼二ーー一、城門人開掃二落花一」＝曉鴉。

【早晏】サウアン　はやきと、おそきと。元結詩「漫遊無二遠近一、漫樂無二ーー一」＝早晚。

【早開】サウカイ　はやくひらく。＝早發。

【早行】サウカウ　朝はやく出立する。書言故事「ーー曰二戰レ星而出一」劉駕、早行詩「馬上纔二殘夢一、馬嘶時復驚」＝早發。

【早學】サウガク　はやまなび。

【早起】サウキ　はやおき。＝蚤起・晨起・夙起・夙興。

【早歸】サウキ　はやくかへる。

【早急】サウキウ　いそぐ。＝火急・迅急・迅速。

【早計】サウケイ　はやまる。莊、齊物「汝亦太ーー」

【早慧】サウケイ　幼にして知慧さとし。北史、王紘傳「奇二其ーー一」＝夙慧。

【早曉】サウゲウ　よあけがた。＝拂曉・早旦。

【早昏】サウコン　次條に同じ。女中子「ー少婦、教レ人以レ儉」

【早婚】サウコン　年わかくして結婚する。詩經、疏「文王十五、生二武王一、武王有二兄伯邑考一、故知二人君ーー所三以重二繼嗣一」

【早歲】サウサイ　としわか、わかきよはひ。蘇軾詩「ーー便懷齊物志」

【早早】サウサウ　はやはや。杜甫詩「南楚青春異、暄寒ーー分」＝匆匆。

【早霜】サウサウ　はやく降りたるしも。易林「ーー晚雲、傷禾害レ稼」

【早晨晏起】サウシンアンキ　はやくいね、おそくおきる。禮記「孺子ー、惟所レ欲、食無レ時」

【早衰】サウスイ　はやくめとる。

【早熟】サウジユク　○はやくじゅくす。北史、高熲傳「江南土熱、水田ーー」○國ませる、幼くしておとなぶる。

【早出暮入】サウシユツボニユウ　朝はやく出で行き、日暮れてかへる。墨子「賢者之治レ邑也、ーー」

【早春】サウシユン　春のはじめ、はつはる。＝初春・孟春。

【早穗】サウスイ　わせのほ。范成大詩「ーー已垂垂、晚苗猶剪剪」

【早世】サウセイ　わかじに。左、昭三「無祿ーレ一隕、命、寡人失レ望」＝夭死。

【早成】サウセイ　はやくおとなぶる。蜀志、諸葛瞻傳「亮與二兄瑾書一曰、瞻已八歲、聰慧可レ愛、嫁二其ーー一、恐不レ爲二重器一」＝夙成。

【早雪】サウセツ　はやく降りたるゆき。

【早稻】サウタウ　わせ。白居易、春題二湖上一詩「碧毯線頭抽二ーー一、青羅裙帶展二新蒲一」

【早逮】サウタイ　はやく出世する。少年にして榮達する。呂溫詩「縱使他時能ーー、定知不レ作二黑頭人一」

【早旦】サウタン　早朝に同じ。

【早朝】サウチウ　あさ、つとめて。五燈會元「金果ーー猿摘去、玉華晚後鳳銜來」＝早旦・昧旦・早曉。

【早潮】サウチウ　あさしほ。陶翰詩「艤棹樂二ーー一、潮來如二風雨一」

【早梅】サウバイ　はやざきのうめ。唐太宗詩「槃雪臨二春岸一、參差開二ーー一」

【早白】サウハク　いそぎて申す。漢書「公不二ーー一、與俱受レ戮矣」

【早發】サウハツ　○朝早く出發する。＝早行。○早くひらく。＝早開。

【早晚】サウバン　○はやきと、おそきと。＝早晏。○おそかれはやかれ、いつか。李白詩「不レ知楊伯起、ーー向二關西一」○あさばん。白居易詩「ーー驪山有二此聲一」＝旦暮。

【早涼】サウリヤウ　はやくすずけだつ。劉禹錫詩「碧梧宮二ーー一」

【早速】サウソク　すぐに、すみやかに。

【旨】シ　紙　旨は俗字

○うまし(美味)詩、邶風「我有二蓄一」うまきもの。論、陽貨

「食」—不甘」○よし。うつくし（美）うまい。書、說命「王曰—哉」○むね。易、繫辭「其—遠」こころもち「大—」「聖—」「經—」「玄—」「微—」「密—」○こころざし（意。志）

【旨意】イシ　かんがへ、おもむき。易、繫辭、疏「—深遠」＝旨趣・意旨。

【旨遠】シエンエンン　むね深く遠し。春秋、序「言高則—、辭約則義微」

【旨肴】シカウ　うまきさかな。劉仔肩詩「—陳海陸」＝嘉肴。

【旨甘】カン　うまきくひもの。人の子が、親を養ふ美味。宋史、劉恕傳「家素貧、無以給—」＝美味・甘旨。

【旨酒】シシュ　うまきさけ。詩、小雅、鹿鳴「我有—、以燕樂嘉賓之心」＝美酒。

【旨酒嘉殽】シシュカカウ　旨き酒、良き肴。韓詩外傳「雖有—、不嘗不知其旨」

【旨趣】シシュ　むね、おもむき。孝經、序「秦三六家之異同、會五經之—」

【旬】　ジュン　眞

○とをか（十日）○轉じて十年の義。白居易、呈劉夢得詩「且喜同年滿七—」○あまねし（徧）○ひとし（均）○みつ（滿）

【旬歲】ジュンサイ　まる一年、滿一年。字解參看。＝滿歲。

【旬朔】ジュンサク　十日と、ついたちと。又、十日間。南史、謝靈運傳「遨遊山水、動盈—」

【旬日】ジュンジツ　とをか、十日間。南史、宋武帝紀「爭之—」乃從」

【旬年】ジュンネン　十年。魏志、劉廙傳「修之—、國富民安矣」

【旬餘】ジュンヨ　十日あまり。史、田齊世家「秦韓之兵毋東—」

【旱】　カン　翰　旱

○ひでり。久しく雨ふらず「久—」「炎—」「枯—」詩、大雅「—既太甚」○水の對稱「水—」俗に陸路を—道といふ。

【旱魃】カンバツ　ひでりにて作物が實らず、儉は飢饉。北史、魏孝文帝紀「西北州郡—」

【旱祭】カンサイ　雨乞祭。公羊傳「大雩者何、—也」＝雩。

【旱損】カンソン　ひでりの爲め作物の損害。

【旱道】カンダウ　陸路をいふ。水路の對。＝旱路。

【旱稻】カンタウ　をかぼ、ひでりにも害はれぬいね。齊民要術「—用二下田、白土膏黑土」＝陸稻。

【旱地】カンチ　陸地をいふ。

【旱天】カンテン　ひでりのそら。

【旱魃】カンバツ　ひでり。魃はひでりの神。詩、大雅、雲漢「—爲虐、如惔如焚」

【旱潦】カンラウ　ひでりと雨多きと、共に作物に害あり。宋史「雨雪—、軍民皆有給」

【旱路】カンロ　陸路。水滸傳第十回「卻是水路、全無—」＝旱道。

【旱則資舟水則資車】カンソクシシフスイソクシシクシヤ　ひでりには舟を仕入れ、洪水には車を仕入れ置きて價の高くなるを待ちて利を占むるをいふ。史、貨殖傳「故歲在金穰、水毀、木饑、火旱、——、物之理也」

【旰】　カン　翰

○ひぐれ（晩）○日が（暮）漢書、張湯傳「日—天子忘食」○—は盛んなる貌。

【旰旰】カンカン　盛んなる貌。王延壽、魯靈光殿賦「皓皓—」

【旰食】カンショク　○天子、又、諸侯が政に勤勞しておそく食事する。左、昭二十「楚君大夫、其—乎」○後世は天子に限りていふ「宵衣—」

○あした（朝）○あさひ、日初めて出づ。○大いなり。

【易】　㊀エキ・ヤク　㊁イ　陌　眞

㊀かふ、とりかへる（換）「交—」孟、梁惠王「以小—大」これ迄のものをかへる「變—」「改—」易、繫辭「聖人—之以書契」○かはる（變）○るもり（守宮）「蜥—」○五經の一、三—は連山・歸藏・周—。○うらなひ、うらなふ。卦爻の象によりて事物の變化を知る占ひの法。又、其の學。○場に同じ。㊁やすし。難の反對「容—」「平—」「至—」○てがる「簡—」孟、離婁「事在—而求諸難」○安らか、安全。中庸「君子居—以俟命」○おごたる（怠）　あなどる（慢）かろんず（輕）「慢—」「輕—」○をさむ（治）ととのへる。論、八佾「喪與其—也寧戚」○はぶく（省）○やはらぐ（和）

同訓異義　易・變・化・替・代・更・遷・渝・換の別は變（言部十六畫）の條を見よ。

○シヤ易・安・寧・康・泰・綏の別は安（宀部三畫）の條を見よ。

【易水】エキスイ　直隸省の順天府と保定府との間を流れ白河に合する川。秦の始皇を刺さんとて、荊軻、燕の太子丹と別れし處。荊軻、易水歌「風蕭蕭兮—寒、壯士一去又不還」

【易數】エキスウ　易理によりて吉凶をわきまへ知る術。宋書、陳瑾傳「通二于—、言二國家大事、後多驗」

【易聖】エキセイ　易道にすぐれし人。唐書、楊太經傳「還二於易、人謂二之—」

【易筮】エキゼイ　うらなひ。晉書、淳于智傳「智有二思義—能二—」

【易占】エキセン　易にてうらなふ。雲笈七籤「巨君傳二李山筮訣、遂善二于—」

【易俗】エキゾク　惡しき風俗を改めかへる。禮記、移風「—、天下皆寧」

【易斷】エキダン　○易にて判斷する。○ちぎれやすし。陳後主詩「柯新攀—」

【易地】エキチ　居る所の地位をかへる。孟、離婁「禹稷顏子、—」則皆然」

【易認】エキニン　とりかへおく。史、廉頗傳「趙括既代二廉頗、悉更二約束一、—軍吏」

【易轍】エキテツ　車のわだちをかへる、施政の方針を改めるに喩ふ。晉書「愛二—之勤、而得二覆車之軌」

【易之憂患】エキノイクワン　易經を作りし人の憂患ありしをいふ。歐陽修、送二楊寘序「——、詩之怨刺」易、繫辭「易之興也、其於二中古乎、作易者其有二憂患乎」

【易理】エキリ　○易の理。○イをさめやすし。舊唐書「利廣而易求、官少而—」＝易治。

【昊】　カウ　皓

○そら（天空）元氣の廣大なる義。○なつのそら（夏天）○おほいなり（大）○さかんなり。

【昊昊】カウカウ　さかんなる貌。爾雅、疏「夏萬物盛壯、其氣—」

【昊天】カウテン　○なつのそら。爾雅、釋天「夏爲—」○そら（天空）元氣の廣大なる義。又、天の神。周禮、春官「以二禋祀二祀二—上帝」

【昂】　カウ　陽

○あぐ、あがる（擧）仰ぐ。談藪「黍熟頭低、麥熟頭—」○氣があがり激する「激—」「軒—」○たかし（高）物價があがる。唐書、崔神基傳「物價踴—」○—は馬の行く貌。又、志行の高き貌。○日がのぼる（日升）

同訓異義　昂・擧・揚・稱・扛・颺・抗・掀の別は擧（日部十一畫）の條を見よ。

【昂昂】カウカウ　○馬のいさみ行く貌。楚辭、卜居「寧—若千里之駒乎」○轡じて志行のすぐれて高き貌。晉書、嵇紹傳「昨於二稠人中一始見二嵇紹、——然若二野鶴之在二雞羣一」

【昂然】カウゼン　たかくそびゆ。高啓詩「無心—上青漢」

【昂然】ゼン　自負する貌。韓愈詩「大雞—來、小雞竦而待」＝昂昂然。

【昂騰】カウトウ　たかくあがる、物のねだんがあがる。＝騰貴・上騰・踴昂。

【昕】　キン　文

○ひので（日出）あさ、よあけ。禮、文王世子「天子視學、大—鼓徵」○あきらか（明）

【昞】　ヘイ　庚　昞に同じ

○あきらか（明）○あかきあや（赤文）

【昞昞】ヘイヘイ　赤きあや。張衡、西京賦「赫——以弘敞」

【昫】　コツ　ツツ　物　月

○ほのぐらし（尚冥）○よあけ（旦明）

【昫昕】コツキン　よあけ。班固、幽通賦「——寤而仰思兮」

【昫爽】コツソウ　よあけ、爽は明。漢書、郊祀志「——」注「師古曰、謂二日尚冥、蓋未明之時也」

【昭】　ショウ　篠

昭（前條）に同じ。

【昭爽】ショウソウ　よあけ。

「ー闇昧」注「ーー、早朝也」

【昏】コン 元 或は昏に作る

○くらし(不明)「ー暗」「ー黑」日がくれてくらくなる。○ひぐれ「黃ー」「斂ー」○おろか「ー愚」「老ー」○へる(減)○かはる(代)晝の明に代る。○つとむ(彊)○みだる(亂)○めとる(娶)＝婚。○人生れて未だ命名せざる内に死ぬる、古、生れて三ヶ月にして命名す。左、昭十九「札瘥夭ー」○妻の父。左、昭二五、註「妻父曰ー、壻父曰姻」

同訓異義 昏・暗・昧・冥・暝・晦の別は暗(日部九畫)の條を見よ。

【昏鴉】コン アン くれがたのからす。杜甫詩「獨鶴歸何晚、ーー已滿レ林」＝暮鴉。

【昏闇】コン アン くらし。後漢書、范冉傳「吾生二於ーー之世一、値二乎淫侈之俗一」＝昏暗。

【昏姻】コン イン 夫婦のちぎりを結ぶ。白虎通「昏時成レ禮、故曰レ昏、婦人因レ夫而成、故曰レ因」＝婚姻。

【昏曀】コン イ くもりてくらし。陳子昂詩「ーー無二蓋夜一」

【昏季】コン キ 年わかくしておろか。隋書、王韶傳「臣昔在ーー、猶且用レ心、況逢二聖明一、敢不二罄竭一」

【昏棄】コン キ 心暗くみだれて事をなげやる。書、牧誓「ーニー厥肆祀一弗レ答」

【昏晦】コン クワイ くらし。馬臻、德清夜泊詩「遠色變二ーー一、卸帆依二淺沙一」＝昏闇・昏黑。

【昏黃】コン クワウ たそがれ。韓偓詩「烟月愁ーー」＝黃昏。

【昏曉】コン ゲウ 夕と朝と。杜甫詩「造化鍾二神秀一、陰陽割二ーー一」＝朝夕・昏晨。

【昏眩】コン ゲン 目くらくしてくるめく。桂海虞衡志「疼痛日ーー」

【昏黑】コン コク 日くれてくらし。杜甫詩「秋天漠漠向二ーー一」

【昏困】コン コン 目くらみ、氣力つかれる。甲申雜錄「忽ーー如レ夢」＝昏憒。

【昏昏】コン コン くらき貌。孟、盡心「今以二其ーー一、使二人昭昭一」

【昏札】コン サツ わかじに、人生れて未だ名を命ぜずして死するを昏といふ、夭死を札といふ。柳宗元、興州江運記「飢饉ーー」字解參看。

【昏恣】コン シ 心くらくしてほしいまま。元結文「忍行二ーー一、獨樂二其身一」

【昏晨】コン シン あさばん。後漢書、劉平等傳論「廬二于里門一、ーー不レ廢積歲餘」＝昏曉・朝夕・昏旦。

【昏曙】コン ショ ゆふべと、あした。楊浚詩「孤舟大江水、水涉無二ーー一」＝朝夕・昏曉・昏旦。

【昏鐘】コン ショウ ひぐれのかねの音。張九成詩「ーー發二林杪一」＝晚鐘・夕鐘。

【昏睡】コン スイ うとうととねむる。南史、劉峻傳「從レ夕達レ旦、時或ーー」

【昏醉】コン スイ 正體なくゑふ。晉書、劉曜載記「ーー奔退、馬陷二石渠一」

【昏絕】コン ゼツ 昏倒に同じ。

【昏惰】コン ダ 心くらくしておこたる。宋史、宋庠傳「御史言二庠ーー一」＝昏怠・闇惰。

【昏怠】コン タイ おこたる。五代史、四夷附錄「世宗南平二淮甸一、北伐二契丹一、乘二其勝威一、擊二其ーー一」

【昏倒】コン タウ めまひしてたふれる。陸龜蒙、告二白蛇一文「人老而毛髮皓白、耗眊ーー、不レ能レ記二子孫名字一」

【昏椓】コン タク 心昏亂して宮刑を受けし者、椓は陰刑。詩、大雅「孟賊內訌、ーー靡共」＝奄人。

【昏昔】コン チク よると、ひると。杜甫詩「沈吟坐二西軒一、飲食錯二ーー一」＝晝夜。

【昏定晨省】コン テイ シン セイ 夕には父母の寢所を安定にし、朝はごきげんを伺ふ、子が親に事ふる禮。曲禮「昏定而晨省」

【昏瞳】コン ドウ あきらかならぬひとみ。梅堯臣詩「細書刺二ーー一」

【昏憊】コン ハイ 心くらくしてつかれる、憊は疲。列子「晝則呻吟而即レ事、夜則ーー而熟寐」

【昏忘】コン バウ 智くらくして物忘する。南史、劉顯傳「ーー不レ可レ受レ策」

【昏眊】コン バウ 目くらし。歐陽修、謝レ賜二漢書一表「兩目ーー」

【昏耄】コン バウ おひぼれる。又、其の人。宋史、總敍傳「年ー」

【昏暴】コン バク 理にくらくあ又、其の者。書經「暴二有曆一、惡二ーー一」

【昏寐】コン ビ つかれてよくねる。漢說文「殺二當暑之清吟一、滌二通宵之ーー一」

【昏眯】コン ボク くらきひとみ。樓鑰詩「洗二我ーー十年病一」＝昏瞳。

【昏瞀】コン ボウ 目くらし。劉基詩「使二我一見開ーー一」

【昏瞀】コン ボウ くらし。書、益稷、傳「天下民ーー塾溺、皆困二水災一」

【昏墨】コン ボク いれずみ。梁武帝、定律銘「殺傷有レ法、ーー有レ刑」

【昏味】コン イ ○くらし。宋史、五行志「山氣遇レ夜輒ーー、蛇蟠始明」＝昏晦。○おろか。＝蒙昧・昏愚・闇愚。

【昏官】コン クワン くらし、事理に暗し。＝昏官・昏薨・昏闇。

【昏明】コン メイ くらきと、あかるきと。周禮、秋官、注「日入三刻爲レ昏、不レ盡三刻爲レ明」

【昏迷】コン メイ 心くらくしてまよふ。書經「ーー不レ惷」

【昏夜】コン ヤ よる。魏志、王朗傳「時帝頗出遊獵、或ーー還レ宮」

【昏亂】コン ラン 心暗くみだれる。＝昏惑。

【昏禮】コン レイ 結婚の儀式。禮、郊特牲「ーー、萬世之始也」＝婚禮。

【昏惑】コン ワク 道理にくらくまどふ。張衡賦「通人闇二于好惡一兮、豈ーー而能剖」＝昏迷。

【昆】コン 元

○のち、あと(後子孫)「後ー」○あに(兄)「ー弟」○あきらか(明)「ー明」○おほし(衆)○おなじ(同)「ー鳴」○山の名、崑に通ず。ー侖は崑崙に同じ。

【昆夷】コン イ 古、昆吾といふ西戎の國。歐陽修、日本刀歌「ーー道遠不二復通一、世傳二切玉一、誰能窮」＝混夷。

【昆季】コン キ 兄弟をいふ、季は末の弟。徐陵文「孤二三ーー、方可三戴レ天被二此慈恩一」

【昆後】コン ゴ あとつぎ、子孫。蔡邕文「仰二蓬古一、懼二ーーー一」＝後昆。

【昆吾瓦】コンゴ クワ 古史考「夏時昆吾氏、作レ瓦」

【昆吾劍】コンゴ ケン 昆吾の夷國にて作りたる利刀。黃眉故事「周穆王有二ーーー、削鐵如レ泥」

【昆孫】コン ソン 來孫の子、卽ち玄孫の孫。爾雅「來孫之子爲二ーー一」＝昆孫。

【昆刀切玉】コンタウ セツ ギヨク 昆吾の國より出づる利刀は、善く堅き玉をも切る。列、湯問「西戎獻二錕鋙之劍、火浣之布一、其劍長有尺、練銅赤刃、用レ之切レ玉、如レ切レ泥焉」錕鋙は昆吾。

【昆池】コン チ うみ。江總詩「玉軸ーー淚」

【昆蟲】コン チウ 多くの蟲類。昆は衆、一說に昆は明、明蟲とは陽に生じて陰に藏くるる義。漢書、成帝紀「草木ーー、咸得二其所一」

【昆弟】コン テイ あにと、おとうと。昆は昆。高允文「怡怡ーー、穆穆家庭」＝兄弟。

【昆布】コン ブ こんぶ、海草の名、狹き者を海帶といふ。本草「綸布、一名ーー、出二高麗一、如二捲麻一、黃黑色、柔韌可レ食、今海菩薩皆似レ綸、恐卽是也」

【昆明池】コン メイ チ 支那の四南夷傳「昆明國、有レ池方二百里、武帝欲レ伐二昆明一、作レ池象レ之、以習二水戰一」

【昔】ジャク 陽

時(日部六畫)の古字。

【昌】ジャウ 陽

○さかんなり(盛)「隆ー」「盛ー」「繁ー」○よし、美くし「ー言」○あたる(當)○ひのひかり(日光)○もの(物)莊、在宥「百ー皆生於土」○うつくし、嫉妬なる貌。○あやめ、しやうぶ(菖蒲)＝菖。○猖に通ず、ー披は亂れる。

同訓異義 昌・盛・隆・壯・熾の別は盛(皿部七畫)の條を見よ。

【昌運】ジャウ ウン さかんなる時運。自居易賦「叶二聖人之ーー一、飛而上レ天」＝隆運。

【昌言】ジャウ ゲン よきことば(美言)一解に理に當ることば。書、皐陶謨「禹拜二ーー一」＝善言。

【昌予】ジャウ ヨ さかんなる貌。

【昌歜】ジャウ ザン しやうぶの莖。左、僖三十「王使二周公閱來聘一、享有二ーー一」＝昌蒲菹。

【昌熾】ジャウ シ さかんなり。說苑「夫毅者國家所二以ーー一、士女所二以姣好一」＝昌盛。

【昌昌】ジャウ ジャウ さかんなる貌。李商隱詩「春風雖二自好一、春物太ーー」

【昌盛】ジャウ セイ さかんなり。南史、齊高帝紀「子孫當二ーー一」＝盛昌。

【昌朝】ジャウ チウ さかゆる當代の朝廷。鮑照文「夙當二ーー一、早値二恩洽一」＝熙朝。

【昌披】ジャウ ヒ しまりなく亂るる。昌一に猖に作る。離騷「何桀紂之ーー兮、夫唯捷徑以窘步」

【昌阜】ジャウ フ さかんに富む。左傳、韓氏其ーー于晉一乎、辭不レ失レ舊」＝昌富。

【昌富】ジャウ フ さかんにとむ。易林「充二滿帝室一、家國ーー」

【昌平】ジャウ ヘイ ○國運さかんにして世たひらか。＝承平・升平。○孔子の生れし鄉名、山東省曲阜縣の東南に在り。

【昌平黌】ジャウ ヘイ クワイ 國昌平坂學問所の一名、江戶湯島に在り、德川幕府の學問所、元祿三年忍岡より移し、孔子の鄉の名に因みて昌平と改む。＝茗黌・聖堂。

【昌本】ジャウ ホン しやうぶの根、藥用とす〔儀禮、公食大夫禮〕說苑「文王好食二ーー一」

【昌陽】ジャウ ヤウ しやうぶ、長生の藥とす。韓愈、進學解「醫師以二ーー一引上レ年、欲レ進二其稀苦一也」＝菖蒲・昌蒲・昌羊。

【昌樂】ジャウ ラク さかえたのしむ。史、匈奴傳「廢レ兵休レ卒養レ馬、世世ーー」

【昇】ショウ 蒸 升に通ず

○のぼる「上ー」あがる(上)日が上ノボる。○のぼす、あぐ。○たひらか(平)「ー平」

同訓異義 昇・升・陞・登・上・騰・騰・陟の別は升(十部二畫)の條を見よ。

【昇降】ショウ カウ のぼると、くだると。あがりおりり。

【昇級】ショウ キフ ○官位又地位が進みのぼる。＝昇任・昇進。○等級がのぼる。＝昇等。

【昇給】ショウ キフ 給料があがる、俸給が增す。＝增俸。

【昇汞】ショウ コウ 藥品の一、鹽化第二水銀。＝猛汞。

【昇進】ショウ シン 官位又地位があがる。＝昇級。

【昇敍】ショウ ジヨ 官位をのぼす。元稹文「文武竝用、必推二其才一、久次不レ遷、則有二ーー一」

【昇】ショウ のぼる。孟郊詩「鑿出幽隱端、氣象皆ーー」

【昇陟】ショウチク のぼる。水經、注「緇素之士、多泛ー舟ーー、取ー暢ニ山情ー」

【昇天】テンショウ ○天に登る。後漢書、虞延傳「延初生時、其上有ー物、若ニ二四練一、遂上ニーーー、占者以爲ー吉」＝升天。○基督教にて信者の死をいふ。

【昇殿】デンショウ 圖昔、宮中の御殿へのぼる、四位以上及藏人の六位の者には其の資格を與へられる。

【昇平】ヘイショウ 世が平かにしてしづか。＝升平。

【昃】シ・ク 職 通音ソク

○かたぶく、日が西に傾く。易、豐卦「日中則ー」○ひるすぎ(午後)日が午を過ぐ。

【昔】㊀セキ・シャク ㊁サク 陌 藥

㊀むかし(古)今の對「在ー」「往ー」「古ー」○きのふ(昨日)又、四五日前。ゆふべ。＝夕。○よる(夜・宵)莊、天運「通ー不ー寐矣」○さきに、以前。○ひさし(久)○ほじ(乾肉)㊁まじはる(錯)

【昔賢】セキケン 前代のすぐれたる士。王融詩「端溪慙ニーー、測水謝ニ前修一」＝前賢・先哲・前彥。

【昆】トン 元 あさひ。＝暾。

【昉】ハウ 養

【昔在】セキザイ そのむかし。＝在昔。

【昔歲】セキサイ こぞ、去年。左傳「ーー入ー陳、今玆入ー鄭」

【昔時】セキジ むかし。駱賓王詩「ーー人已沒、今日水猶寒」＝古時・往時・昔日。

【昔愁】セキシウ むかしのうれへ。賀知章詩「遂ー子成ニ今別一、令ニ人起ニーーー」

【昔日】セキジツ ○むかし。＝昔時。○さきの日、前日。

【昔人】セキジン むかしの人。崔顥、黃鶴樓詩「ーーー已乘ニ白雲一去、此地空餘黃鶴樓」＝古人。

【昔者】セキシヤ ○むかし、以前、往年。論、泰伯「ーーー吾友嘗從ニ事於斯一矣」○きのふ、昨日の義、者は助語。孟、離婁、曰、予來幾日矣、曰ーー」

【昔昔】セキセキ 夜夜といふに同じ。列、周穆王「繽神荒散、ーーー夢爲ニ國君一、又ーーー夢爲ニ人僕一」＝夕夕・每夜。

【昔談】セキダン むかしばなし。顏延之文「琢ー玉成ー器、無ー爽ニーーー」

【昔年】セキネン むかし、まへのとし。杜甫詩「ーーー有ニ狂客一」＝往年・前年。

【昔氣質】セキカシツ 圖老人のかたくるしく律儀一方なる氣風、昔堅氣。

○あきらか(明)○はじめて(始)○まさに(適)

【昄】ハン ヘン 潸 藏

大いなり。詩、大雅「爾土宇ー章」ー章は大明の義。

【旼】ビン 眞

ーーはやはらぐ(和)

【旼旼】ビンビン やはらぐ貌。史、司馬相如傳「ーー穆穆、君子之態」

【旻】ビン ミン 眞

○そら(天空)「宵ー」「九ー」「蒼ー」○あきのそら(秋天)○あはれむ(憫)

【旻天】ビンテン ○秋のそら。草木枯落してあはれなるそらの義。爾雅、釋天「秋爲ニーーー」○そら(天空)あはれみめぐむ義。書、大禹謨「日號ニ泣于ーーー于父母一」

【明】メイ ミャウ 庚 闡は籀字

○あきらか(昭)「昭ー」「鮮ー」○あきらかに。○あかし。○よあけ、夜があける「平ー」○あす、あした「一日」○てる、てらす(照)○たふとし(尊)○とほる(通)○そなはる(備)○はじめ。○あきらむ。○いさぎよし(潔)○つまびらか(審)疑なし。○あらはす、あきらかにす。大學「在ー明德」○目の精。檀弓「子夏喪ニ其子一而喪ニ其ー」○かみ、神靈「神ー」○賢人。○甚。○現世。幽の對「幽ー」○宋元璋の建てし王朝の名、十六帝、二百七十八年間、元の次、清の前。○啓ー。はあけがたに東方にかがやきあらはるる星の名、よあけの明星。詩經「東有啓ー」○圖空になる、ー屋ーー樽。

同訓異義 明・昭・灼・皎・晰・炳○明は昏闇・晦・昧・瞑などの反なり、廣く用ふる字なり、著明・明德・分明と連用す。○昭は明よりは義狹し、多くは道德の上に用ふ。左傳「光ニ昭先君之令德一」○灼は火の燃え立つ如く明かなるなり。詩經「桃之夭夭、灼灼其華」○皎は白けて清し。詩經「月出皎兮」○晰は明なり、昭晰・明晰と連用す。○炳は著しく明かなる義、炳若ニ日星一、其文炳也の如し。

【明史】シ 三百三十二卷、目錄四卷、二十四史の一、清の張廷玉等、世宗の勅を奉じて撰す。

【明七才子】サイシ 明代の七人の詩人。李山錄「隆萬間、李于鱗・王世貞・吳國倫・徐中行・宗臣・梁有譽・謝茂秦、號ニ七才子一、見ニ錢謙益所ー記」

【明十才子】サイシ 明代に相結びて徒をつくりし十人の詩人。李山錄「李夢陽、與ニ同ー時者、何景明・徐祯卿・邊貢・顧璘・鄭善夫・陳沂・朱應登・康海・王九思、號ニ十才子一、見ニ李夢陽傳一」

【明星】ミョウセイ あけのみやうじやう。金星。詩、鄭風「ーー有ー爛」＝太白星・啓明。

【明夕】ミョウセキ あすのばん。儀禮「厥ーー禽ニ朝于廟門之外一」

【明礬】ミョウバン アルミニウム及びカリウムの硫酸鹽、無色透明の結晶體、醫藥又工業上に用ふ。

【明礬石】ミョウバンセキ 明礬製造の原料とする硫酸及び礬土の化合物。

【明暗】メイアン 矢條に同じ。

【明闇】メイアン あきらかなると、くらきと。論衡「ーー不ー能ニ並知一」＝明暗・明幽。

【明衣】メイイ 布にて作りたる淸き衣、齋戒の時に著る。論、鄉黨「齊必有ニーー一布」

【明夷】メイイ 易の卦の名、離下坤上、賢人が暗君に遭ひて禍を蒙ることを說く、夷は傷、明にして傷はれる義。易、明夷卦「箕子之ーー利ー貞」

【明幽】メイイウ ○現世と冥土と。韓愈詩「病昧臥ニ林薮一、分知隔ニーーー」＝幽明。○あかるきと、くらきと。＝明暗・明晦。

【明允】メイイン あきらかにして忠ことなり。左、文十八「高陽氏有ニ才子八人一、(中略)齊聖廣淵、ーーー篤誠、天下之民、謂ニ之八愷一」

【明銳】メイエイ あきらかにするどし。唐書、元稹傳「性ーーー、遇ー事輒擧」

【明穎】メイエイ あきらかにしてさとし。宋書、三王傳「幼而ーーー、姿顏美麗」

【明曜】メイエイ あきらかにかがやく。晉書、樂志「ーーー參ニ日月一、功化侔ニ四時一」＝明耀。

【明耀】メイエイ あかるくかがやく。述異記「帝問ニ方朔一、何謂ニ澗穴珠一、朔曰、河底有ニ二穴一、深數百丈、中有ニ赤蚌一、蚌生ニ此珠一、徑寸、ーーー絕ー世」

【明遠】メイエン 明かにして深遠。晉書、賈充傳「雅量弘高、達見ーーー」＝昭遠。

【明河】メイカ あまの川。歐陽修、秋聲賦「星月皓潔、ーーー在ー天」＝銀河・銀漢・雲漢・天漢。

【明燎】メイリヤウ あかりを取るあな。方鳳詩「天光一道燭ニ扉內一、知此ーーー從ー何穿」

【明戒】メイカイ あきらかなるいましめ。韓愈詩「溫存感ニ深惠一、琢切奉ニーーー」

【明解】メイカイ あきらかにしる。又、あきらかにときあかす。後漢書、胡廣傳「練ニ達事體一ーーー朝章一」

【明效】メイカウ あきらかなるしるし。曹植文「伯樂馳ニ千里一、明君致ニ太平一、任ー賢使ー能之ーー也」

【明確】メイカク 明かにしてたしかなり、明瞭確實。

【明鑑】メイカン ○あきらかなるかがみ。唐書、魏元忠傳「ーーー所ニ以照ー形、往事所ニ以知ー今」＝明鏡。○すぐれたる鑑識。○心の虛明なるに喩ふ。莊、德充符「鑑明則塵垢不ー止、止則不ー明也」

【明規】メイキ あきらかなるのり。阮瑀文「傳ニ告後代人一、以ニ此篇ーーー」

【明暉】メイキ あきらかなるひかり。范成大詩「國景ーーー倚ー雲立」

【明義】メイギ 道理をあきらかにす。書經「敦ー信ーー、崇ー德報ー功」

【明輝】メイキ あきらかにかがやく。鸚鵡賦「合ニ火德之ーーー」

【明器】メイキ 葬式の用具、明とは之を神明にする義。儀禮「既夕陳ニーー于乘車之西一」注「ーーー藏器也」

【明殺】メイサツ 才智明かにして志氣つよし。唐書、吐蕃傳「性ーーー、用ー兵有ニ節制一」

【明鏡】メイキヤウ ○明かなるかがみ。漢書、韓安國傳「淸水ーーー、不ー可ニ以形逃一」＝明鑑。○明かにする。漢書、衞姬傳「深說ニ經義一、ーニ聖法一」

【明鏡止水】メイキヤウシスイ 心の本體の虛明なるに喩ふ。莊、德充符「鑑明則塵垢不ー止、止則不ー明也」同篇「仲尼曰、人莫ー鑑ニ於流水一、而鑑ニ於止水一」

【明鏡爲ニ醜婦之寃一】メイキヤウハシウフノエンヲナス 惡人の善人をいむに喩ふ。寃は讎。〔二程全書〕

【明疑】メイギ 明かにさとし。南史、宋江夏王義恭傳「幼而ーーー、姿貌端麗」

【明煦】メイク あきらかに暖かなるひかり。元稹詩「曉日初ーーー」

【明君】メイクン かしこき君主。＝明主・明天子。

【明訓】メイクン あきらかなるをしへ。＝明教・明戒。

【明火】メイクワ 日光よりとりたる火にて神に供するもの。明水を見よ。

【明果】メイクワ 智あきらかにして決斷よし。五代史、周世宗家人傳「爲ー人、ーーー有ニ大志一」

【明快】メイクワイ ○あきらかにさわやかなる。蘇軾詩「曉窗ーーー夜堂深」○議論文章などのすぢみちが明かにして氣もちよし。

【明晦】メイクワイ あきらかなると、くらきと、賢と愚と。梁武帝詩「相去既路遠、ーーー亦懸殊」＝明幽。

【明光】メイクワウ あきらかにひかる。又、其のひかり。＝明輝。

【明經】メイケイ ○聖人の經書をあきらめ知る。○官吏登用試驗の科目。事物紀原「漢始以ニーーー射策取ー人(中略)唐乃置ニーーー之科一」○ギケイウ圖王朝時代、大學寮にて、經書を修むる科。

【明慧】メイケイ あきらかにさとし。嵇衞、

鸚鵡賦「――聽善」

【明敎】ケイ ○あきらかなるをしへ。史、蘇秦傳「魏王曰、寡人不肖、未二常得一聞二――一」＝明訓。○敎をあきらかにす。

【明曉】ケウ あきらかにさとる。南史、孔顗傳「――二一政事」＝明通。

【明月】ゲツ ○明かなるつき。張若虛詩「海上――共レ潮生」○もちづき、滿月。班婕妤、怨歌行「團團似二――一」

【明月爲レ燭】ショクトナス 明月を以て燈火に代ふ。唐書、張志和傳「陸羽嘗問、數爲二往來一者、對曰、太虛爲レ室、――、與二四海諸公一共處、未二嘗少別一何有二往來一」

【明月之珠】ノイタマ 暗夜にもひかりを發するたま。李斯、諫二逐客一表「垂二――一服二太阿之劍一」

【明言】ゲンイ はっきりといふ、明瞭に斷言する。

【明瞭】ケイ あきらかにしてあやあり。蘇軾詩、岡巒蔚回合、金碧爛――」

【明驗】ケイ あきらかなるしるし。法苑珠林「譬二六越之――一」

【明顯】ケイ あきらかにあらはれる。淨住子「洞三徹三世、了二照萬有一、卓然――、英聖超羣」

【明愷】ガイ あきらかにさとる。又、さとし。晉書、傅咸傳「風格峻整、復性――」＝明悟。

【明公】コウ 名位ある者の尊稱。後漢書「孫堅謂二張溫一曰、――親帥二王師一、威振二天下一」＝明侯。

【明才】ケイ 事理に明かなるはたらき。管輅別傳「既有――一遭二朱陽之運一、於レ時名勢赫奕」

【明細】ケイ くはしくこまか。＝詳細。

【明罪】ケイ 角のひかるさい。洞冥記「吹勒國貢二聖四頭一、狀如二水兕一、角表裏有レ光、因名二――一」

【明妝】ケイ うるはしくさっぱりとしたるよそほひ。李羣玉詩「小姑洲北浦雲邊、二女――共儼然」

【明燒】ケイ あかるくしてかわく。左、昭、三、疏「以二所レ居下濕塵埃一故一、欲レ更二於――之處一」

【明窗淨几】ケイソウジョウキ あきらかなる窗と清きつくゑと。歐陽修、試筆「蘇子美嘗言、――、筆硯紙墨、皆極精良、亦自是人生一樂、然能得二此樂一者甚稀」

【明察】ケイ あきらかに知る、明細に觀察する。韓非、孤憤「不二――一、不レ能レ燭レ私」＝審察。

【明燭】ケイ あきらか。雲谷雜記「是夕果晴、星斗――」

【明示】ケイ あきらかにしめす。左傳「――二百官一」

【明志】ケイ 志をあきらかにす。諸葛亮文「非二澹泊一、無二以一――」

【明指】ケイ あきらかなる旨。漢書、王褒傳」＝明旨。

【明眎】シ 兎ウサギの異名、眎は視。曲禮「凡祭二宗廟一之禮、兎曰――」＝明視。

【明時】ケイ をさまれる太平の世。文明の世。曹植、求二自試一表「志欲三自效二于――一」＝昭代・清時。

【明秀】シウ きとくひいでる。晉書、王衍傳「神情――、風姿詳雅」

【明察二秋毫一】メイサツシウガウ 眼力のするどきにいふ。秋毫は細毛、獸毛は秋に至りて微細となる。孟、梁惠王「明足三以察二秋毫之末一」

【明識】シキ あきらかにしる。又、明かなる見識。遜逊文「雅才――、敏行能文」

【明日】ミヤウジツ あす、あくるひ。論、衛靈公「――遂行」＝翌日。

【明悉】ミヤウ あきらかに知りつくす。南史、袁樞傳「博學――二舊章一」

【明習】シウ あきらかにならふ。蔡邕文「――二易學一」

【明信】シン ○心あきらかにして誠あり。左、隱三「苟有二――一、澗谿沼沚之毛、蘋蘩薀藻之菜、(中略)可レ薦二於鬼神一、可レ羞二於王公一」○たしかなるおとづれ。朱熹文「亦不レ得二――一、令二人聽心一耳」

【明神】シン あらたかなるかみ。周禮、司盟「北面詛二――一」

【明眞】シン あきらかにしてまことあり。又、あきらかなる眞理。阮瑀詩「何患處二貧苦一、但當レ守二――一」

【明愼】シン あきらかにしてつつしむ。易經「君子以――」

【明箴】シン あきらかなるいましめ。高允詩「敬承二嘉誨一、永佩二――一」＝良箴・明戒。

【明者】シヤ 明智ある人。易經、注「闇者求レ明、――不レ諧二于闇一」

【明章】シヤウ あきらかにあらはす。禮記「聽二天下之內治一、――端願一」

【明滯】シヤウ けがれなくきよし。晉書「火珠皎然――、以レ瓢取呑之」

【明賞】シヤウ あきらかにほめる。又、賞を明かにする。韓非子「先王――以勸レ之、嚴刑以威レ之」

【明主】シユ 賢明なる主君。荀、君道「――急レ得二其人一、而闇主急レ得二其勢一」

【明珠】シユ ○ひかるたま。蔡邕文「――不レ璧、焉發二其光一」○すぐれたる人に比す。晉書、衛玠傳「與レ玠同遊、若二――之在一側、朗然照レ人」

【明珠闇投】アントウ あきらかなる光を發する珠を闇中に投ず、至寶も人に贈るに道を以てせざれば卻つて怨を招く義。史、鄒陽傳「明月之珠、夜光之璧、以闇投二人於道路一、人無下不二按レ劍相眄一者上、何則無レ因而至レ前也」

【明珠出二老蚌一】バウシユシユツイバウ 老蚌はどぶがひ、子の父に勝るに喩ふ。北齊書、陸卬傳「邢邵謂二其父一曰、吾以卿老蚌、遂出二明珠一」

【明淑】シユク あきらかにしてよし、淑は良。馮衍文「以二――之德一、樂二大使之權一」

【明應】シヤウ あきらかにして整ふ。南史、江革傳「爲レ政――、豪彊憚レ之」

【明主愛二一顰一笑】メイシユアイニヒンイツセウ 顰は愛ひて顰をしかめる、明君は一たび顰をしかめ、一たび笑ふをもみだりにせず、羣臣の己の意を迎へんことを力むるを以てなり。韓非、內儲說「吾聞、明主之愛二一顰一笑一、顰有二爲顰一、而笑有二爲笑一」

【明證】シヤウ あきらかなるあかし。潛夫論「曲木惡二直繩一、重罰惡二――一」

【明燭】シヨク あかるきともしび。ともしびをあかるくす。抱朴子「――宵舉、飛鼎羣起」

【明庶風】メイシヨフウ 東方よりふくかぜ。史記「――居二東方一、衆物盡出也」

【明水】メイスイ 神に供ふるみづ。周禮、秋官「取二明火於日一、取二――於月一」

【明制】セイ 公明なる法制。申鑒「王之政(中略)五曰――」

【明清】セイ ○あきらかにしてきよし。○シン明朝と清朝と。

【明旌】セイ ○あきらかにあらはす。子華子「――二善類一、而誅二勦醜厲一」○表具の一、死者の名を書く旗。＝銘旌。

【明盛】セイ 道あきらかにしてさかんなり。王融詩「幸哉――世、壯矣帝王居」

【明聖】セイ 知德明かにしてきよし。主に天子の智德を稱す。又、其の人。漢書、谷永傳「陛下發二――之德一」

【明劭】セイ あきらかにしてうつくし。齊書、樂志「皇烈載揆二――一」

【明詔】セウ あきらかなるみことのり。董仲舒文「陛下發二德音一、下二――一」

【明宣】セン あきらかにしめす。崔瑗、東觀箴、辛尹廟訪、文武――」

【明鮮】セン あきらかにあざやか。章應物詩「夏條綠已密、朱蕤綴――」

【明蟾】セン 明月をいふ。蟾はひきがへる、月中に在りといふ。劉基詩「永夜涼風吹二碧落一、深秋白露洗二――一」＝銀蟾。

【明聽】ソウ 目あきらかに耳さとし、才智のすぐれたる義。宋之問文「天高鑒レ下、遠貢二――一」＝聰明。

【明堂】ダウ ○古、天子巡狩の時、諸侯を朝參せしめし殿堂の名。孟、梁惠王「――者、王者之堂也」○天子が政を聽く所、陽に向ひて趨て八窗を開く、故に明といふ(周禮、考工記)＝朝廷。

【明道】ダウ ○あきらかなるみち。○みちをあきらかにす。漢書、董仲舒傳「明二其道一、不レ計二其功一」

【明道先生】メイダウセンセイ 宋儒程顥をいふ。十駕齋養新錄「程伯淳之歿也、文潞公題二其墓一、曰二大宋――程君之墓一」

【明駝于里足】メイアセンリ 健脚なる駱駝。駝は臥するに腹、地に貼せず、足を屈して明を漏す、故に明駝といふ。

【明駝】ダ 水が澄んですきとほる。＝澄澈・澄明。

【明天】メイテン 明日。

【明天子在上】メイテンシアリ 聰明なる天子が朝廷に在す(史、建元侯者年表序)韓愈、送二董邵南一序「爲レ我謝曰、――、可二以出而仕一矣」

【明殿】デン 墓の側に立つる殿堂。五代史、契丹錄「――若二中國陵寢下宮之制一」

【明度】ダ あきらかなる才器。晉書、山濤傳「君之――、豈當レ介意耶」

【明瞳】ドウ あきらかなるひとみ。元稹詩「醉圓雙胡鬢、波澄兩――」

【明德】ドク ○あきらかなる德行。書、君陳「黍稷非レ馨、――惟馨」○天よりうけたるくもりなき本性。大學「大學之道、在レ明――」

【明年】メイネン あくるとし、來年。劉廷芝詩「――花開復誰在」

【明眸皓齒】ガイボウ あきらかなるひとみと白き齒と、美人の形容。杜甫、哀江頭「――今何在、血污遊魂歸不レ得」

【明白】ハク あきらか、はっきり。六韜「――顯問」

【明發】ハツ 夜のあけんとするころ、光明開發の義。詩、小雅「――不レ寐、有レ懷二人一」

【明法】ハフ ○法律をあきらかにする。○あきらかなるのり。莊子「四時有二――一、而不レ議」○法律を主とす

る官吏登用試驗の科目の名。○ハイナウ

國王朝時代、大學寮にて、律令格式を修めし科。

【明見萬里】メイケンバンリ 極めて聰明なるに喩ふ。後漢書、竇融傳「竇憲既至三河西一、威震以爲天子明見萬里之外一」

【明妃】ミヤウヒ 尚漢元帝の妃の王昭君、晉の文帝（司馬昭）の諱を避けて昭を明に作る。杜甫詩「羣山萬壑赴荆門一、生長一一」尙有村」

【明媚】メイビ 山水の景色があざやかにうつくし。劇談錄「曲江池、花卉環周、烟水一一」李成文「泰山一一、夏木繁陰」＝鮮麗。

【明徹】メイテツ かすかなるもあきらかにする。禮記「夫禮者君之柄也、所下以別嫌一、儐二鬼神一、考二制度一、別二仁義一」

【明敏】メイビン 智明かにしてさとし。北齊書、文宣帝紀「內雖一一、外若不足」

【明府】メイフ 縣令をいふ。又、我が府縣知事の稱。類書纂要「稱二太守縣令一、皆曰二一一」

【明文】メイブン ○法典にあきらかに記しある文言。○休明なる文章。典引「答三三靈之蓄祉一、展二放唐之一一一」

【明聞】メイブン あらはれきこゆ。國語「今天王既封殖、越國以一一於天下一」注「明、顯也」

【明肆】メイシ 賢明なる君。肆は君。書、洛誥「周公拜手稽首曰、朕復二子一一一」＝明君。

【明辨】メイベン あきらかにわきまふ。中庸「愼思之、一一之、篤行之」

【明辯】メイベン あきらかなる辯舌。明かに辯ずる。隋書、李子雄傳「一一有二器幹一、帝甚任之」

【明巒】メイラン あきらかにしてさかんなり。顏延之詩「蓍軫豈一一、善遊皆聖仙」

【明命】メイメイ 天よりの命令。大學「顧二諟天之一一一」＝大命・休命。

【明明赫赫】メイメイカクカク あきらかにかがやく。詩、大雅、大明「明明在下、赫赫在上」

【明明地】メイメイチ あからさま、地は助語。

【明滅】メイメツ あかるくなり又くらくなる。杜甫詩「回首鳳翔縣、旌旗晚一一」

【明目】メイモク あきらかなるめ。又、目を明かにす。管子「聽耳一一、不爲二愛一金財一」

【明目張膽】メイモクチヤウタン 目を明かにし膽を張る、畏るる所なく、奮發して事に當るにいふ。唐書、章思謙傳「丈夫當二敢言地一、須要二——以報二天子一、爲能碌碌保二妻子一耶」

【明朗】メイラウ ほがらか。淮南子「文彩一一潤澤」

【明眞】メイシン 君は賢明に、臣は忠眞。唐書、房杜傳「君臣一一、志叶議從」

【明亮】メイリヤウ あきらかにほがらか。

【明麗】メイレイ あきらかにしてうるはし。碧雞漫志「春雨始晴、景色一一」

【明靈】メイレイ あきらかなるみたま。玉海「眞歲星之王氣、赫上帝之一一」

【明了】メイレウ はっきり。蘇軾文「應對一一如二成人一」

【明瞭】メイレウ あきらか。郭熙、山水訓「高遠者一一、深遠者細碎」

【明王】メイワウ ○かしこききみ。莊子「一一之治功蓋二天下一、而似不自己」○ミヤウワウ 三寶及び國土人民等を護る天部の神。

旺 ヨウ 藥

○ひかり、うるはし（光美）○ひがさ（日暈）○物の初めて盛んなる義「興一」「一盛」＝王。

【旺盛】オウセイ 物事がさかんなり。

五畫

昱 イク ヨク 屋

○あきらか（明）「焜一」○日の光。○あくるひ（明日）＝翌翼。

【昱昱】イクイク 日光のあきらかなる貌。傅休奕、紫花賦「渙渙一一、而奪二人目精一」＝耀耀。

映 エイ ヤウ 敬

○うつる、うつす、てる（照）光の反射。はゆ「照一」「暉一」「炳一」○あきらか（明）○かくれる、かくす（隱）○ひかげ（日陰・影）○未の時、午後二時。

同訓異義 ウツ 映・移・遷・徙の別は移（禾部六畫）の條を見よ。

【映輝】エイキ うつりかがやく。陸佃文「丹樓翠閣、一一湖山」

【映空】エイクウ そらにうつる。杜甫詩「衰荷且一一」

【映像】エイザウ 光線の屈折、又は反射により物のかげが生ずる。又、其のかげ。

【映山紅】エイサンコウ 躑躅花ジヤクの異名。遼生八牋「——、木名、山躑躅花、類二杜鵑一稍大」

【映日果】エイジツクワ 無花果イチヂクの異名。

【映射】エイシヤ 光がうつりてさしかがやく。＝映輝。

【映水】エイスイ みづにうつる。謝靈運賦「華一一而增光」

【映雪】エイセツ 雪にうつし照らす。孫氏世錄「孫康家貧、嘗一一讀書」

【映帶】エイタイ うつりあふ。王羲之、蘭亭集序「有二清流激湍一、一一左右」

【映徹】エイテツ うつりとほる。世說「雖一不能一、休明一世、足以一一九原」

【映發】エイハツ 互にうつりきらめく。宣和畫譜「以二墨之淺深一一、亦極二形似之妙一」

【映蔽】エイヘイ すだれにうつる。

昱 チン 元

いつくしむ、いつくしみ（仁）

昡 ゲン 霰

ひのひかり（日光）「一曜」

昫 ク 虞 遇

○あたたむ（溫・暖）＝煦。○日出でて暖か。

【昫煦】クク あたためる。淮南、原道「一一覆育」註「昫、溫恤也」＝煦嫗。

晷 ヒ 藥

○きのふ（前日）「一日」「一宵」を隔つる義。○さきに（過去）陶潛、歸去來辭「覺今是而一一非」

【昨今】サクコン きのふけふ、ちかごろ。＝近來・近日。

【昨日】サクジツ きのふ。史、灌夫傳「吾一一醉」許渾詩「高歌一曲掩二明鏡一、一一少年今白頭」

【昨朝】サクチヤウ きのふのあさ。高適詩「醉然顧二遠塵一、千載如一一一」

【昨年】サクネン きょねん、こぞ。

【昨晚】サクバン きのふのくれ。崔顥詩「一一南行一、遲、今朝北泝一河」＝昨宵・昨夕。

【昨非】サクヒ 昔日の非なりし事。陶去來辭「實迷一途其未一遠、覺二今是而一一」陸游詩「已築二茅茨一訟二一一」自注「余築二小軒一、以二一一一名一之」

【昨夢】サクム 昨夜のゆめ。又、過ぎ去りし事がらに喩ふ。陸游詩「化一蝶飛時嗟二一一一」

是 シ 紙 遇 ゼ

○ただし（正）なほし（直）よし（善）非の反對。陶潛、歸去來辭「覺今一而昨非」○この。論、學而「夫子至於一邦也」これ、上を承けて下を結ぶことば。孟、公孫丑「一集義所生」○ここに（此）「於一」

解字 もと昰に作る、天下の物、日より正しきはなし、故に日正に从ふ會意文字。

同訓異義 ゼ 是・之・此・推・旂・斯・諦・伊・時の別は之（丿部三畫）の條を見よ。

【是非之心】ゼヒノコヽロ 善を是とし惡を非とするこころ、善惡を辨別する本性。孟、公孫丑「無二——一非一人也」また「——、智之端也」

【是耶非耶】ゼヤヒヤ 是非に惑ひて決し難き意。史、伯夷傳「余甚惑焉、儻所謂天道——」＝是歟非歟。

【是正】ゼセイ ただし。又、ただす。後漢書、安帝紀「詔三五經博士一、一二一文字」

【是認】ゼニン よしとみとめる。又、承知する。

【有二是父一斯有二是子一】コノチチアツテコヽニコノヲトコアリ 子の賢なるは父の賢なるに由る義。孔叢子、居衛「子思曰、有二此父一、斯有二此子一、道之常也」一本、此を是に作る。

昞 ヘイ 梗

○日ながし（日長）○あきらか（明）○かよふ（通）○ひさし（久）○のぶ（舒）○遂する、のぶ。＝暢。

解字 日長し、日永に从ふ、會意文字。

春 シュン 眞

○はる、四時の第一、立一より立夏に至るまで、陰曆の正月・二月・三月の九十日間（陽曆の三月・四月・五月）「三一」「九一」「青一」「陽一」爾雅「一爲二青陽」○男女の情欲。詩、召南「有女懷一」、吉士誘之」○よはひ、年齡「一秋鼎盛」○としつき、歲月「三十一」○唐人多く酒に名つく。司空圖、詩品「玉壺買一」○小一は陰曆の十月、こはる。

【春鶯囀】シユンアウテン 樂曲の名。唐敎坊記「——、高宗時、羣律、晨坐聞二鶯聲一、命二樂工白明遠一寫之、遂有二此曲一」

【春意】シユンイ はるの長閑なること。杜甫詩「碧草遶一一一、沅湘萬里秋」

【春陰】シユンイン 花ぐもり。常建詩「晴天無二纖翳一、郊野浮一一一」

【春蚓秋蛇】シユンインシウダ 文字の細く曲りて力なきにいふ。晉書、王羲之傳「子雲近世擅二名江表一、備得一成一書、無二丈夫之氣一、行行如一繫二春蚓一、字字如一綰二秋蛇一」

【春雨】シユンウ はるさめ。陸游詩「深巷明朝賣二杏花一、小樓一夜聽二一一一」

【春江】シユンカウ はるのかは。蘇軾詩「竹外桃花三兩枝、一一水暖鴨先知」

【春郊】シユンカウ はるののべ。＝春野・東郊。

【春寒】シユンカン はるのさむさ。杜甫、人日詩「冰雪驚離一至、一一花較遲」

【春卉】シユンキ はるのくさ。梁簡文帝文「秋條下一葉、一一含一芳」

【春季】シュンキ ○はるのすゑ。○春の時節。＝春期。

【春季皇靈祭】シュンキクワウレイサイ 圖春分の日（三月二十日又は二十一日）に宮中にて歴代の天子のみたまを祭られる大祭。

【春祈】シュンキ はるのいのり。論衡「春二月雩、秋八月雩亦、――＝穀雨＝秋祈＝穀實」

【春祺】シュンキ はるのさいはひ。漢書、樂志「惟春之祺」注「祺、福也」＝春禧。

【春嬉】シュンキ はるのたのしみ、陽氣に浮かれて戯れ遊ぶ。

【春機】シュンキ ○春の日に織るはた。溫庭筠詩「文君織得――紅」○圖いろけ、男女間の情慾。

【春韭】シュンキウ 春のやはらかきにら。杜甫、贈＝衛八處士＝詩「夜雨剪＝――＝新炊間＝黄粱＝」

【春宮】シュンキウ ○皇太子の御殿。又、皇太子。竹書紀年「周穆王九年、築＝――＝」＝儲宮・東宮。○圖東の音を借りてかやと讀む、義は同じ。

【春興】シュンキウ 春のおもしろさ、春のたのしみ。

【春畫】シュンクワ 圖まくらざうし、わらひ繪。

【春光】シュンクワウ はるのけしき。林下清錄「――且莫去、留與＝醉人＝看」

【春官】シュンクワン 周代、禮法・祭祀のことを掌る官。周禮「――宗伯、曰＝禮官之屬＝」

【春臥】シュンクワ 上巳の節に行ふみそぎ。王維詩「故事修＝――＝」

【春慶塗】シュンケイヌリ 圖木地の見えるやうにうすく黄褐色にぬる漆塗、和泉の漆工春慶の發明せしもの。

【春曉】シュンゲウ はるのあけぼの。

【春暄】シュンケン はるのあたたかさ。詩、正韻「人遇＝――＝則四體舒泰」＝春暖。

【春恨】シュンコン 春のもの思ひ。王昌齡詩「欲レ捲＝朱簾＝――長」＝春愁。

【春草】シュンサウ はるのくさ。謝靈運詩「萋萋――生、王孫遊有レ情」

【春裝】シュンサウ はるのよそほひ。王士熙詩「海邊候吏促＝――＝」

【春霧】シュンム 春まゆを作るかひこ、はるこ。

【春山如レ笑】シュンザンノワラフガゴトシ 春の山の溫雅なる形容。郭熙、山水訓「春山淡冶而如レ笑、夏山蒼翠而欲レ滴」

【春事】シュンジ はるのしごと、農事。書、堯典、傳「――既起、丁壯就レ功」

【春秋】シュンジウ ○はると、あきと。禮、學記「――教以＝禮樂＝、冬夏教以＝詩書＝」○孔子の著はしたる魯國の歴史「――左氏傳」○孔子の春秋にしるされてある時代、周の平王より威烈王に至る時期。○としつき、歲月。又、よはひ、年齡。

【春秋高】シュンジウタカシ 年老いたる義。新序「先生老矣、――矣、何以教レ之」

【春秋富】シュンジウトム 年わかき義。史、齊悼惠王世家「皇帝――、未レ能レ治＝天下＝」＝春秋長。

【富＝春秋＝】ニトシウトム 年の幼きをいふ。將來の年齡に富む義。後漢書、樂恢傳「陛下――、纂＝承大業＝」

【春秋鼎盛】シュンジウカナヘリ 年齡が方々に壯なり、鼎は方なり。漢書、賈誼傳「天子――」

【春蒐秋獮】シュンシウシウセン 春の狩と秋の狩と。左、隱五「臧僖伯曰、春蒐夏苗、秋獮冬狩」

【春信】シュンシン はるのたより、春の來るしらせ、花開き鳥鳴くなどのたより。劉克莊詩「――分明到＝草廬＝」

【春壺】シュンコン 春のをはり。書、堯典疏「――之日、與＝立夏之初＝、時相交也」

【春社】シュンシヤ 春の社日。月令廣義「立春後五戊爲＝――＝」

【春情】シュンジヤウ ○うはき、いろけ、色情。＝春心。○春ののどかなる心をいふ。李羣玉詩「――不レ可レ狀、豔豔令＝人醉＝」＝春意。

【春首】シュンシユ はるのはじめ。韓愈文「去歲冬閒、雨雪頗多、今年――、宿麥未レ滋」＝春初。

【春樹暮雲情】シュンジユボウウンノジヤウ 遠方に在る友の相思ふにいふ。杜甫、春日憶＝李白＝詩「渭北春天樹、江東日暮雲、何時一樽酒、重與細論レ文」渭北は杜甫の居る地、江東は李白の居る地。

【春筍】シュンジユン ○春のたけのこ。蘇軾詩「――方解レ籜」○美人の指に喩ふ、筍・筍同じ。蘇軾、佳人詞「十指纖――纖長」＝春筍。

【春初】シュンシヨ はるのはじめ。齊書、周顒傳「――早韭、秋末晚菘」＝春首。

【春水】シュンスイ はるのみづ。陶潛、四時詩「――滿＝四澤＝、夏雲多＝奇峯＝、秋月揚＝明輝＝、冬嶺秀＝孤松＝」

【春蕊】シュンセイ はる生ずるなづな。陸游詩「――忽已花、老笋欲レ成レ竹」

【春宵】シュンセウ はるのゆふべ。蘇軾詩「――一刻直千金、花有＝清香＝、月有レ陰」＝春夕・春夜。

【春泉】シュンセン はるのいづみ。庾闡詩「手澡――潔、目翫陽葩鮮」

【春蠶】シュンサン 春のこけ。蠶は昔。盧照隣詩「――緣レ巖上」

【春醪】シュンヤウ はるづくりのさけ。孟貫詩「石泉――レ酒、松火夜煎レ茶」

【春潮】シュンテウ 春のうしほ。王勃詩「江曠――白、山長曉岫青」

【春葩】シュンハ はるのはな。劉勰、釋論「――含レ日似レ笑、秋葉泣レ露如レ泣」＝春花・春華。

【春坊】シュンバウ 皇太子の御殿。又、皇太子。官儀備要「太子宮曰――」晉書、愍懷太子傳論「繼＝明宸極＝、守＝器――」＝東宮・春宮。

【春芳】シュンハウ はるのにほひある草。梁元帝詩「處處――動、日日春禽變」

【春牛】シュンギウ はるのなかば。杜牧、惜春詞「――年已除」

【春盤】シュンバン 立春の日に、盤に食物を盛る。四時寶鏡「立春日、唐人作＝春餅生菜＝、號＝――＝」

【涉＝于春冰＝】シヨウヒヨウフヤタル 春の冰をわたる、危險の甚だしきに喩ふ。書、君牙「心之憂危、若レ蹈＝虎尾＝、涉＝于春冰＝」

【春服】シュンフク はるぎ。論、先進「莫春者、――既成」莫は暮。

【春分】シュンブン 二十四氣の一、啓蟄の次に來る氣節、晝夜平分の時なり、三月二十一日頃。周禮、典瑞、註「天子常――朝レ日、秋分夕レ月」

【春眠】シュンミン 春夜のねむり。孟浩然詩「――不レ覺レ曉、處處聞＝啼鳥＝」

【春夢】シュンむ はるのゆめ。物事のはかなきにいふ。侯鯖錄「內翰昔日富貴、一場――」

【春陽】シュンヤウ はる。晉書、樂志「經＝――＝而自喜、遇＝秋彫＝而不レ悅」

【春祠】シュンシ 天子の行ふはるまつり。論同じ。禮、王制「天子諸侯宗廟之祭、春曰レ祠」

【春融】シュンユウ はるの氣ののどかなるさま。沈佺期詩「烟景共――」

【春餘】シュンヨ はるのすゑ。任昉詩「靡景匿＝――＝、清陰澄＝夏首＝」＝春杪

【春蘭秋菊俱不レ可レ廢】シュンランシウキクトモニハイスベカラズ 各特色ありて棄てがたきにいふ。事文類聚「晏子餘、補＝鄂縣尉＝、時同列李朝隱・程行諶、皆以＝文法＝著稱、子餘獨以＝文學＝知レ名、或問＝長史陳崇業三子優劣＝、崇業曰、――也」

【春霧】シュンむ はるのながあめ。韓琦詩「咫尺東郊路、――絶未レ通」

【春王正月】シヤウワウノシヤウグワツ 春正月に同じ、王の字は王者の天下なる義を表はす。春秋「隱公元年、――」

【星】 セイ シヤウ 書

○ほし「明＝」「列＝」「景＝」「晨＝」○ほしの光。○日月等諸天體の總稱「恆＝」「衛＝」○――は星の如く白き色の點點たる貌「――散」「――羅」○ほとほり、二十八宿の一。○三台＝を三公に比するによりて顯要の人に喩ふ「諸＝相會」○天文。晉書、鳩摩羅什傳「博覽五明諸論及陰陽＝算＝、莫不＝畢盡＝」

【星移】セイイウツル 星の位置が移りかはる、年月がうつる。王勃、滕王閣詩「物換＝――幾度秋」

【星躔】セイテン あかりとり。蘇林伐山「小者曰＝――＝」

【星營】セイエイ 夜の陣營。薩都剌詩「露帳旌旗天接レ水、――鼓角月連レ山」

【星軺】セイエウ 遠方へ行く使者の車。軺は遙なり、四向して遠望する車。張謂詩「――計レ日赴＝祁峨＝、雲樹連レ天阻＝奚歌＝」＝使軺。

【星河】セイカ あまの川。河圖括地象「川德布レ精、上爲＝――＝」＝銀河・銀漢・星漢。

【星行】セイカウ ○夜未だ明けず星を戴きて行く。魏志、高貴鄉公髦紀「晨夜――、遠致＝本州＝、忠節可レ嘉」○極めて急ぎ行く。風俗通、十反「――電征、數日歸」＝星馳。

【星行電征】セイカウデンセイ いそぎてゆく。前條參看。

【星學】セイガク 日月・星辰等、纏べて天體に關する事を研究する學問。＝天文學。

【星漢】セイカン あまのがは。魏文帝詩「――四流夜未レ央」＝星河。

【星期】セイキ ○婚姻の期日。七夕の傳說に本づく。書言故事「報＝成レ婚日＝、曰レ請＝――＝」○日曜の休日。

【星火】セイクワ ○流星の光。轉じて、事の急なるに喩ふ。李密、陳情表「郡縣逼迫、催＝臣上道＝、州司臨レ門、急＝於――＝」○極めて小なる燐火。薛能詩「――爐邊夜坐寒」

【星光】セイクワウ ほしのひかり。朱熹詩「微月墮＝西嶺＝、爛然衆――」＝星輝。

【星官】セイクワン 天文を司る官。

【星座】セイザ ほしのやどり。典、天官書、注＝星次・星宿。

【星槎】セイサ 遠方に航行する舟、槎はいかだ。宋之問詩「賓至――落、仙來月宇空」＝星査。

【星彩】セイサイ ほしのひかり。杜荀鶴詩「月華――坐來收」＝星采・星芒。

【星霜】セイサウ 歲星は一年に天を一周し、霜は年毎に降る。轉じてとしつきの義。杜牧集「經＝幾年＝、曰＝幾換＝――」文天祥詩「千戈歷落五――」

【星散】セイサン 星の分ち布く如く四方に散ずる。蜀志、王平傳「馬謖大敗＝于街亭＝、衆盡――」

【星算】セイサン 天文と算數と。梁書、陶弘景傳「尤明＝陰陽五行風角＝――」

【星次】セイジ 星のやどり。唐書、曆志、考＝正――＝「爲＝一代之制＝」＝星座。

【星使】セイシ 天子の御つかひ。後漢書、李郃傳に勅使二人を益州に派遣せし時、天象に應じて二使星が益州の分野に向ひしといふ故事に本づく、今の全權公使などにも用ふ。高適詩「――出＝蜀賓＝」＝勅使・欽差大臣。

【星辰】セイシン ほし、辰は日月星のやどり。書、堯典「曆＝象日月＝――、敬授＝人時＝」

【星津】セイシン 星のやどり。陳後主詩「――雖レ可レ望、距得レ似＝人情＝」＝星次。

【星讖】セイシン 天文と未來記と。晉書、石季龍載記「禁＝鄴國＝、不レ得＝私學＝――」

【星宿】セイシユク ほしのやどり。漢書、劉向傳「書誦＝書傳＝、夜觀＝――＝、歲不レ寤達レ旦」＝星座・辰宿。

【星躔】セイテン 天文によりて宮闕を占ふ

わざ。五代史「周傑恥ニ以ー一事上ノ人、稱ノ病不ノ起」

【星星】セイセイ　ぽつぽつと白き貌。謝靈運詩「感感驚物歇、ーー白髮垂」＝點點。

【星馳】セイチ　いそぎてはしる。潘岳文「羽檄ーー、鉦鼓日戒」

【星傳】セイデン　急を要する宿驛の馬、はやうまの馬。權德輿詩「ーー指ニ湘江ニ」

【星躔】セイテン　星の躔次。宋史、韓顯符傳「ーー曉然易ノ辨」＝星度。

【星斗】セイト　ほし。斗は北斗。又南斗星。晉書、元帝紀論「馳ノ章猷、高靈感ノ陰、ーー呈ノ祥、金陵表ノ慶」

【星度】セイド　星辰運行の度合。

【星芒】セイボウ　ほしの光のほさき。張正見詩「彎ノ孤眉ニ月影、擎ノ劍動ニーー」

【星發】セイハツ　夜の中にいでたつ。

【星布】セイフ　ほしの如く散布する。後漢書、張衡傳「屯騎羅而ーー」＝星羅・星散。

【星驟】セイシュウ　いそぎてはしる。傅休奕「荒發ーー」＝星馳。

【星夜】セイヤ　ほしのある夜。潘岳文「昏晨盛夏盡熱又兼ニーー」

【星羅】セイラ　ほしの如くつらなる。四都賦「列卒周匝、ーー雲布」

【星歷】セイレキ　天文曆法。史、歷書、黃帝考ニ定ーーニ」＝星曆。

【星列】セイレツ　星の如くに列る。陳蓮賦「掌圃牧監、ーー碁布」

【戴星而往】タイセイニオウ　早朝に出て行く。呂覽「宓子賤爲ニ單父宰ニ、彈ノ琴不ノ下ノ堂而單父治、巫馬期爲ニ單父宰ニ、戴ノ星出戴ノ星入、而單父亦治」

【昭】セウ　蕭

○あきらか（日明）「ー明」「ー」照りかがやきてあかるし。○あきらかにす、著明にする。○あきらかに。論、堯日「敢ー告於上帝」○みる（見）○ひかる（光）○あらはる（顯・著）○廟の坐次にて太祖の廟を中央に置き、それに次ぎて左に置くもの。右を穆といふ、卽ちーは太祖の子にして、穆の父にあたる、天子は七廟。○姓。

同訓異義　昭・明・炤・皎・晰・炯の別は明（日部四畫）の條を見よ。

【昭闇】セウアン　くらきをあきらかにす。又、愚かなる心をさとく明かにする。傅毅詩「誰能ーレー、啓ニ我童昧ニ」

【昭燿】セウヨウ　明かにかがやく。光明なり。漢書、王莽傳「ーー章明、以著ニ黃虞之烈ニ焉」

【昭應】セウオウ　あきらかにこたへる。いちじるしく感應する。顏延之、曲水詩序「甚緯ーー、山瀆效靈」

【昭儀】セウギ　漢代、位の最も高き女官の名。漢書、外戚傳「ーー位視ニ丞相ニ」

【昭君】セウクン　王昭君の略、琴曲に「ーー怨」あり。

【昭回】セウカイ　ひかりが天に隨ひてめぐる。詩、大雅、雲漢「倬彼雲漢、ーニー于天」

【昭光】セウクワウ　あきらかなるひかり。漢書、揚雄傳「ーー振耀」

【昭煥】セウクワン　明かに輝かく。宋史、陳王傳「宗祀延洪、史策ーー」＝炳煥。

【昭敎】セウケウ　をしへをあきらかにす。又、明かなるをしへ。蔡邕文「ーニー於辟雍」

【昭顯】セウケン　あきらかにあらはれる。晉記總論「昔周之興也、后稷生ニ於姜嫄ニ而天命ーー」

【昭昏】セウコン　あきらかなるとくらきと。老子「俗人昭昭、我獨若ノ昏」

【昭示】セウシ　あきらかにしめす。張衡文「ーニー萬國、永永不ノ朽」＝明示。

【昭昭】セウセウ　○あきらかなる貌。韓詩外傳「ーー乎若ニ日月之光明」○小にしてあきらかなるもの。中庸「天斯ーー之多也」＝耿耿。

【昭前】セウゼン　古の事實に對し譽ありて光を放つ。劉眞文「在昔既無ニ堂構ーー之績、中ノ規不ノ密、明神弗ノ祐」

【昭然】セウゼン　あきらかなる貌。漢書、董仲舒傳「至德ーー、施ニ于方外」＝昭如・昭昭。

【昭祖】セウソ　せんぞの功をあらはす。晉書、禮志「ノレー揚鑾、封禪篇ノ首」

【昭蓋】セウヨ　よみがへる。禮、樂記「登臺ーーー」注「昭、曉也」＝回生・蘇醒。

【昭代】セウダイ　○よく治まれる御代。崔塗詩「不ノ擬逢ニーー、悠悠過ニ此生」＝聖世・聖代・明時。○現代を頌する辭。精亮詩「摩華詔ニーーー」

【昭著】セウチョ　あきらかにいちじるし。南史、齊高帝紀「驗ノ往撰ノ今、若ノ斯ーー」＝昭明。

【昭然】セウネン　あきらかにして盛んなり。宋史、樂志「鳥俄ーー」懋は茂。

【昭穆】セウボク　○宗廟の制、中央に太祖の廟あり、左に昭、右に穆あり。昭は一世、穆は二世。禮、王制「天子七廟、三昭三穆、與ニ太祖之廟ニ而七」○族人を次序するにもーーの位を以てす。

【昭明】セウメイ　あきらか。禮、祭義「其氣發ニ揚于上ニ爲ニーーー」＝昭著。

【昭朗】セウラウ　あきらか。唐高宗、册ニ代王ニ爲ニ皇太子ニ文「器業英邁、風鑒ーーー」

【昵】㊀ヂツ　質　㊁ヂイ　寄　もと暱に作る

㊀ちかづく（近）ちかづけなれさす「狎ー」「嬖ー」○したしむ（親）「親ー」○むつぶ（睦）○したしみふかき者。㊁亡父のたまや（禰廟）

【昵交】ヂツカウ　したしみなれなれしくする交友。陸機賦「ーー密友」

【昵狎】ヂツカウ　なれなれしくしたしむ。北史、齊後帝紀「自ノ非ニ寵私ーー、未ニ嘗交ノ語」

【昵戲】ヂツギ　ちかづきたはむれる。宋書、蔡興宗傳「蔡尙書當免ニーーー」

【昵近】ヂツキン　したしみちかづく。又、其の者。北齊書、安德王傳「殺ニ其ーー九人ニ」

【昵狎】ヂツコウ　親しく心やすし。＝入魂

【昵褻】ヂツセツ　王室に深きしたしみある諸侯。又、其の國。十六國春秋「晉王明德ーー、先帝所ノ愛」＝親落。

【昵比】ヂツヒ　したしみちかづく。書、泰誓「ーニー罪人ニ」

【昼】

書（日部七畫）の省文。

【昳】㊀テツ　屑　㊁イツ　質

㊀ひかたむく（日昃）午後二時頃、未の時。漢書、游俠傳「至ニ日ー皆會」㊁逸（辵部八畫）に通ず。

【昳麗】イツレイ　容貌がすぐれてうるはしき貌。昳は逸に通ず、光艷なり。戰國、齊策「鄒忌、修八尺有餘、而形貌ーーー」

【昧】バイ　隊　通音マイ

○くらし（冥・昧・闇）「冥ー」屈原、離騷「路幽ー以險隘」○くらます。○よあけがたのほのぐらき時、天の將に明けんとして未だ明けざる時「ー旦」「ー爽」○おろか、事理にくらし（昏愚）「蒙ー」「愚ー」○をかす（冒）「ー死」○むさぼる（貪）○樂の名、東夷の樂。○圖三ーは專一・一心などの義。金剛經註「道云ニ眞一、儒云ニ致一、釋云ニ三ー」

同訓異義　昧・暗・昏・冥・暝・晦の別は暗（日部九畫）の條を見よ。

【昧谷】マイコク　日の入る處、昧は冥、日入りて天下くらし、故に名づく。書、堯典「宅ニ四日ニーーー」＝虞淵。

【昧爽】マイソウ　昧は晦、爽は明、天明けんとして未だ明けざる時、朝まだき。書、太甲「先王ーー丕顯、坐以待ノ旦」

【昧死】マイシ　上書に用ふる語、昧は冒、死ををかす、冒ふ所不當ならば死を以て謝すといふ義。漢書、高祖紀「ーー再拜、言ニ大王陛下ニ」

【昧者】マイシャ　おろかなるもの。＝愚人。

【昧旦】マイタン　あさまだき、未明。詩、鄭風「女曰ニ雞鳴ニ、士曰ニーーー」＝昧爽。

【昧茫】マイボウ　くらし。陶宗儀詩「或雨而或晴、至ニ晚天ーー」＝茫昧。

【昧鄙】マイヒ　くらくいやし。盧綸詩「弱齡試ーー、遇ノ盛惟求ノ止」

【昧昔】マイセキ　くらし。おろか。權德輿文「疎愚ーー」＝昧蒙・昏昧・愚暗。

【昧沒】マイボツ　意味くらくして明かならず。柳宗元文「吾每ノ爲ニ文章、未ノ嘗敢以ニ昏氣出ニ之、懼ニ其ーー而雜ニ也」

【昧昧】マイマイ　くらき貌。楚辭、懷沙「日ーー其將ノ暮」

【昧蒙】マイモウ　くらし。おろか。＝蒙昧。

【昴】バウ　巧

すばる。二十八宿の一。詩、召南「嘒彼小星、惟參與ー」

【昴畢】バウヒツ　二星の名。史、天官書「ーー冀州」漢書、地理志「趙地ーーー之分野」

【昧】バツ　曷

くらし（日中不ノ明）

【昺】ヘイ　梗　昞に同じ

○あきらか（明）＝炳。○人名。宋代最後の皇帝。

【昞】ヘイ　梗　昺に同じ

昺（前條）に同じ。

【晡】ホツ　月　ハイ　麻

○ひのべ（日出）日將に曙ならんとす。○ーーホツは日始めて出でて未だ明かならず。楚辭、九思「時ーー兮旦日」

【昜】ヤウ　陽　陽の古字

○ひらく（開）○とびあがる（飛揚）○ながし（長）○ひかり（光）○おほし（衆）

六畫

【晏】アン　諫　翰

○そらがきよし（天清）○くもなし（無雲）○くれる（暮）○あざやかにして盛んなる貌。○おそし（晚）論、子路「何ー也」○ーーはやはらぐ（和柔）○やすし（安）「清ー」「靜ー」○たがふ（忒）○姓。ー嬰、字は平仲、春秋の時の齊の相。

【晏晏】アンアン　やはらぐ（和柔）貌。詩、衛風「總角之宴、言笑ーー」

【晏嬰】アンエイ　春秋齊の賢人、名は嬰、字は平仲、齊の靈公・莊公・景公に仕へて相となり、節儉力行を以て齊に重んぜられ、其の名、諸侯に顯る。

【晏嬰之狐裘】アンエイノコウキウ　極めて節儉なる義。齊の相、晏嬰（字平仲）が一枚の狐裘を三十年間著用せし故事。禮記「有若曰、一狐裘三十年、晏子爲知ノ禮」

【晏駕】アン　天子の崩御をいふ、天子は常に晨起して朝を視るべし、而るに崩じて出でず、臣子の情、之を死せりとするに忍びず、宮車晏なく駕して出づべしと思ふ。戰國秦策「秦王老矣一日一一、離レ有二子異人一、不レ足二以結一秦」史、范雎傳「宮車一日一一、是事之不レ可レ知者」＝晩駕。

【晏起】アン　おそくおきる。禮記「孺子早起一一」

【晏媽】アン　やすんじてたのしむ。高適詩「樊レ香即一一」

【晏子春秋】アンシシシウ　八卷、單に晏子ともいふ、晏嬰の言行を錄せしもの、作者未詳。

【晏子之御者】アンシシノゼンシヤ　齊の相晏子（名は嬰）の御者が、晏子の馬を御し意氣揚揚たるを見て、妻去らんことを乞ひしにより、御者自ら恥ぢ其の後大いに抑損せしといふ故事（史、晏嬰傳）

【晏出】アンシユツ　時に後れておそくいで來る。金史「一一蚤休者則二勵之一」

【晏如】アンジヨ　安んじておちつける貌。高適詩「四時常一一、百口無二饑年一」＝晏然。

【晏清】アンセイ　やすらかに清くをさまる。雲仙雜記「每レ生二神芝一、則天下一一」＝晏靜。

【晏然】アンゼン　やすらかなる貌。史、管仲連傳「燕王安得二一一而已乎」＝晏如・安然。

【晏息】アンソク　やすんじいこふ。詩、小雅「嗟爾君子、無二恆一一一」＝安息。

【晏兮】アンケイ　あざやかにして盛んなる貌。詩、鄭風「羔裘一一、三英粲兮」

【晏朝】アンチヨウ　やすらかにをさまれる朝廷。杜甫詩「海內久戎服、京師今一一」

【晏寢】アンシン　やすらか。宋書、禮志「方今中外一一、政刑清簡」＝安寢。

【晏眠】アンミン　朝おそくまでねむる。王逢詩「橫草無レ功日一一」

【晃】クワウ　養

○あきらか（明）○ひかる、ひかり（光）○かがやく、てる（耀）

【晃昱】クワウイク　ひかりかがやく。拾遺記「仙宮則一一明樂也」

【晃曜】クワウエウ　かがやく。曹植頌「光采一一、配二彼朝日一」

【晃耀】クワウエウ　前條に同じ。宋書「冬華相一一、光彩嘩若レ神」

【晃晃】クワウクワウ　かがやく貌。郭璞、鹽池賦「光旰旰以一一」

【晃山】クワウザン　圓日光山の異稱、日光の合字。

【晃蕩】クワウタウ　光の定まらざる貌。蘇軾詩「曦靄含二高峯一、一一射二峭壁一」

【晃朗】クワウラウ　明かなる貌。潘岳賦「天一一以彌高兮」

【晄】

晃（前條）に同じ。

【皎】ケウ　蘇　或は皎に作る

○あきらか。○月白し。

【皎皎】ケウケウ　月の白き貌。楚辭、九歌「夜一一今既明」＝皎皎。

【時】シ　支　昔は古字

○とき、過ぎ行く月日のひま「一間」○一年の區分。書、堯典「敬授二人一」四一は春・夏・秋・冬。○をり（期）適當の期節。孟、梁惠王「斧斤以一入二山林一」○其の可に當る。孟、萬章「孔子聖之一者也」○よ（世）年代。漢書、司馬相如傳「朕獨不レ得レ與二此人同一哉」○辰、一日間の區分「十二一」○よし（善）○この。孟、梁惠王「一日害喪」○これ（是）書、堯典「黎民於變一雍」○中。○ここに。孟、梁惠王「子一保レ之」○うかがふ（伺）をりをはかる。論、陽貨「孔子一其亡也、而往拜レ之」○ねぐら。＝塒。○哲學にて無始より無終に亘る長さ、空間の稱。○文法にて動詞・助動詞の示す過去・現在・未來の稱。

同類語　時・之・此・是・維・惟・旃・斯等の別は之（ノ部三畫）の條を見よ。

【時異】イ　其のときをことにす。漢書「勞逸異者、所レ遇之一一也」

【時雨】ウ　○ふるべき時にふるよき雨。禮記「天降二一一、山川出レ雲」○國レ秋冬の際に、降りみ降らずみする雨。

【時雨之化】ウノクワ　教化の普く及ぶをいふ。草木の好雨を得て發生するに喩ふ。孟、盡心「君子之所二以教一者五、有下如二時雨化レ之者一」成語考「學業感二師之遺威一、日二仰沾一一」

【時運】ウン　其のときのまはりあはせ。班彪賦「餘一一之所レ爲兮、永伊鬱其難愬」

【時英】エイ　○梅の異名。○時彥に同じ。

【時疫】エキ　はやりやまひ。＝流行病。

【時下】カ　このごろ。＝目下・現今。

【時假】カ　ときの相場。名山藏「有司市二俠レ祀牲犧、但準二洪武一一」

【時好】カウ　其の時のはやり。新論「非二苟違レ性、隨一一一也」

【時効】カウ　法律上、一定の期間、ある事實の繼續するによりて、權利を生じ、又は消滅する義。

【時豪】ガウ　其のときの勢力ある者。晉書、王沈傳「爲二一一所レ抑」＝時傑。

【時駿】カン　時局の艱難。顏延之、從軍行「苦哉遠征人、畢力幹二一一」＝時患・時屯。

【時宜】ギ　其の時の宜しきにかなふ義。漢書、食貨志「動欲レ慕レ古、不レ度二一一」＝時中。

【不レ逢二時宜一】ハウジギ　時勢の宜しき所を辨へ知らず。漢書、元帝紀「俗儒一一」

【時氣】キ　じこう。後漢書、明帝紀「務順二一一、無レ使二煩擾一」

【時幾】キ　はづみ、をり。書、益稷「帝庸作、歌曰、勅二天之命、惟時惟幾」

【時機】キ　をり。時のはづみ。魏徵文「應二一一一、以鼓レ之、越二軍策一、以決レ之」＝機會。

【時食】ジキ　時に應じて鳴くとり。朱熹詩「一一悅二新陽、潛魚躍二輕冰一」＝時鳥。

【時局】キヨク　其の時の形勢。時勢の局面。

【時會】クワイ　ときを定めて會合する。周禮、大行人「一一以發二四方之禁一」

【時患】クワン　其の時世のわづらひ。元結詩「不レ能レ救二一一、諷諭以全レ意」＝時病・時弊・時難・時艱。

【時敎】ケウ　時を以て敎ふるをしへ。又、其のときのをしへ。禮、學記「一一必有二正業一」

【時傑】ケツ　其の時代に秀でたる人物。獨孤及詩「明主命二使臣一、皇華得二一一」＝時豪。

【時彥】ゲン　其の時代にすぐれたる士。晉書、庾冰傳、廣引二一一一、詢二於政道一」＝時髦。

【時候】コウ　ときの時節に同じ。高適詩「一一何蕭索、鄉心正鬱陶」

【時刻】コク　限りたるとき。宋書、蕭嶷傳「每旦入二朝太后一、未二嘗失一一」

【時祭】サイ　時祀に同じ。檀弓「望レ墓而爲レ壇、以一一」

【時歲】サイ　ときの。齊書、高帝紀「春秋遞運、一一之常存」

【時祀】シ　四時のまつり。呂覽「一一盡レ敬而不レ新、竊也」＝時祭。

【時事】ジ　其のときに起る事がら。史、六國表「喪二六國一一」

【時時】ジ　をりをり。傳燈錄「心如二明鏡臺一、一一勤拂拭」

【時羞之饌】シユウ　其の時節の食物を神前に供へる。韓愈、祭十二郎文「使下雄中遠具二一一、告レ汝十二郎之靈上」

【時日】ジツ　○ときと日と。曲禮「卜筮者、先聖王之所下以使レ民信二一一」敬二鬼神一、畏レ法、令レ也」○ヒノ是日に同じ。孟、梁惠王「一一害喪」

【時習】シフ　○ときどき復習する。論、學而「學而一一之、不二亦說一乎」○其の時世のならはせ。＝時俗。

【時人】ジン　其の當時の人。南史、陸慧曉傳「辭並雅麗、一一歎服」

【時辰】ジン　ときと。又、とけい。

【時辰儀】ギ　時計。

【時宗】シユウ　圓淨土宗の一派、一遍上人のはじめしもの。＝六時往生宗・遊行派。

【時稍】シヨウ　ときのほまれ、時人の稱譽。全唐詩話「渥在二舉場一、甚有二一一」＝時譽。

【時世】セイ　其の時代。荀子、「一一不レ同、譽何由生、不レ得レ爲レ政、功安能成」＝時代・時序。

【時世粧】セイサウ　當時の流行のよそほひ。白居易詩「一一、一一、自出二城中一、傳二四方一」＝時世妝。

【時政】セイ　其の時のまつりごと。青瑣詩話「極二孔孟之淵源、變二一一之要道一」

【時勢】セイ　ときのなりゆき。戰國策「權藉者、萬物之率也、而一一者、百事之長也」

【時節】セツ　其のとき、其のをり。杜甫詩「落花一一又逢レ君」

【時俗】ゾク　ときのならはし。張衡、四京賦「豈一一之足レ慕」

【時代】ダイ　ときと年代と。宋書、禮志「歷二晉至レ宋、一一移改」＝時世。

【時代思想】シダイシサウ　當時一般の思想を代表し得べき最も勢力ある思想。

【時代物】モノ　○國○年代を經たる品物。○歷史上の事實をしくみし芝居の狂言。又は小說。

【時態】タイ　其のときのありさま。鄭谷詩「一一懶二隨人上下一」

【時中】チウ　時に隨ひて其の宜しきを得。中庸「君子之中庸也、君子而一一」

【時鳥】チウ　○時節に應じて鳴く鳥。杜鵑、悲哉行「一一多二好音一」○國杜鵑キヤストの異名。

【時牌】ハイ　ときを示す爲めに揭げる札。王禹偁詩「壁上一一催二晝夜一」

【時望】バウ　當代の人望。王儉文「貽厥之寄、久鬱一一一」

【時評】ヒヤウ　時人の批評。

【時服】フク　其の時節の服。檀弓「其斂以一一一」

【時文】ブン　○魏晉以後科擧に用ひし四六排儷體の文。古文の對。歐陽修文「是時天下學者揚劉之作、號爲二一一、能者取二科第一、擯二屈名一、以誇レ衆」○國現代に行はるる普通文。

【時病】ビヤウ　其の當時の弊害。宋史、陳騤傳「騤疏三十條、皆切二於一一一」＝時弊。

【時弊】ヘイ　その時代のあしきならはし。晉書、姚萇載記「省二非急之費一、以救一一一」

【時懇】コンレイ　つとめる。書經「咨禹汝平二水土一、惟一一哉」

【時務】ム　其の時のつとめ。蜀志、先主傳、注「儒生俗士、豈識二一一、識二一者在二俊傑一」

【時夜】ヤ　雞が鳴いてその時をつげる。又、其の時。莊、齊物「見レ狶而求二一一一」

【時晉】時稱に同じ。晉書、傅元傳「以二――一選入二著作一」

【時雍】民やはらぎてやすし。雍は邕。書、堯典「黎民於變――」饒起詩「漢家無事樂二――一」

【時令】○年中の行事。後漢書「百僚師尹、其勉修二厥職一、順二行――一」○轉じて時節の義とす。

【時論】其のときの論議、時人の評論。魏志、常林傳「――以二林節操清峻一、欲致二之公輔一」

【救ル時】時代の弊を救ふ。時の衰運をひきかへす。唐書、姚崇傳「崇爲二――一宰相一」

【時異事異】時節が違へば、人の行事も亦隨ひて異なり。漢書、東方朔傳「使三秦儀與ル儂並生二於今之世一、曾不ル得二寧故一、安敢望二常侍郎一乎、故曰、――」

【時殊風異】時節が違へば、風俗も亦隨ひて異なり。宋書、徐羨之傳「一國之事、本二之一人一、雖二世代不ル同、――一、至二於主運臣賢一、古今一ル揆」

【時乎】今はよき時なりと嗟歎する語。史、淮陰侯傳「功者難ル成而易ル敗、時者難ル得而易ル失也、――時不二再來一」

【時哉】時乎に同じ。書、泰誓「――不ル可ル失」

【不ル遇ル時】よき時節に出合はぬ、運がわるし。史、李將軍廣傳「惜乎子――」

【時不ル可ル失】よきをりの逃すべからざるをいふ。戰國策、燕不ル可ル易、――」

【時者難ル得而易ル失】よきをりの逃すべからざるをいふ。時乎巻看。

【與ル時俯仰】時世の風に從ひてうきしづみする、世につれる。通鑑、宋紀、志慮忠純、不二與ル時俯仰一」＝與ル時浮沈。

【晉】シン　臘　晉は俗字

○すすむ(進)「――謁」○さしはさむ(插)○おさふ(抑)○一鼓は長さ六尺六寸ある兩面のつづみ(周禮、地官)○王朝の名、司馬炎、魏の禪を受けて建つ、西―東―合せて十五帝、一百五十六年にして宋に禪る。○春秋時代の國名、周の成王、其の弟叔虞を唐に封ず、其の子徙りて―に居る、今の山西太原縣の東北に當る、後、山西・直隸の兩省に割據し、春秋の末、其の大夫趙・韓・魏三家に分割せらる、故に三―とも稱す。○地名、今の山西省の異稱。○易の卦の名、坤上離下。

【晉】晉（前條）の俗字。

【晌】シャウ　養

○まひる(正午)○半―は少しの時間。＝片時・片晌。

【晒】曬(日部十九畫)の略字。

【晁】朝(月部八畫)の古字、又、鼂に作る。

七畫

【晧】カウ　篠　皓に作る

○ひので(日出)の貌。○しろし(光白)○あきらか(明)

【晞】キ　微

○かわく(乾)詩、秦風「白露未―」○ひので(旦)あける、夜明けんとして光氣升ぼる。詩、齊風「東方將―」○さらす(暴)

【晦】クワイ　隊

○つごもり(月盡)みそか(月終)陰暦の月の最終日、二十九日、或は三十日。○くらし(昏)明、又顯の反對「―明」「顯―」○くらます、かくす「韜―」「隱―」○かすか(微)左、成十四「志而―」○よる(夜)左、昭元「陰陽風雨―明」○きり(霧)○しほむ(彫衰)江淹詩「寂歷百草―」

同訓異語　晦・暗・昏・昧・冥・暝の別は暗(日部九畫)の條を見よ。

【晦晦】くらき貌。莊子「媒媒―、無心而不ル可二與謀一、彼何人哉」

【晦顯】くらますと、あらはすと。世に知られざると、知られると。歐陽修、晏元獻公神道碑「其世次―、徙遷不ル常」＝隱顯。

【晦藏】くらましかくす。歐陽修文「爲ル人剛簡不二矜飾一、能自―」＝韜晦。

【晦朔】つごもりと、ついたちと。莊、逍遙遊「朝菌不ル知二――一」

【晦澀】文字の意味明かにとぼらず。

【晦匿】已の才智などをくらましかくして人に知らさぬ、愚かなる人の風を裝ふ。隋書、高祖紀「高祖芒懼、深自―」＝晦藏・韜晦。

【晦昧】くらし、やみ。又、暗愚。禮記、疏「萬物衰老、取二―之義一也」

【晦盲】目くらし。又、世みだれてくらやみとなる。荀子「闇乎天下之―也」

【晦名】名をくらます。錄異記「草服紫冠、―ル―厚位、鞅ル屣自給」

【晦明】夜と晝と。字解參看。

【晦冥】をぐらし。冥は暝。漢書、高帝紀「雷電――」＝晦暝。

【晦夜】やみよ。十洲記「――即見二此山一」

【晦惑】理にくらくまどふ。蔡邕文「藏二――之辭一」＝昏惑。

【晥】クワン　潸

○あきらかなる貌。＝皖。○縣名、廬江郡に屬す。

【晛】ケン　霰　銑

○ひあらはる(日見)○ひかり(日光)○あきらか(明)

【晤】ゴ　遇　寤に通ず

○あきらか(明)「英―」「神―」○あふ(遇)むかふ(對)面會する「面―」○とく(解)

同訓異語　晤・遇・逢・遭・値・合・會の別は遇(辵部八畫)の條を見よ。

【晤歌】相面してうちとけてうたふ。詩、陳風「彼美淑姬、可二與――一」

【晤言】遇ひてかたる。詩、陳風「彼美淑姬、可二與――一」

【晤話】相對してうちとけてかたる。詩、陳風「彼美淑姬、可二與――一」＝晤言。

【晤對】あふ、面會する。謝靈運詩「――無二厭歇一、聚散成二分離一」

【昇】コン　元　昆に通ず

○のち(後)○あに(兄)

【昇孫】來孫の子(爾雅)

【昇弟】あにと、おとうとと。爾雅「父之――」＝昆弟。

【晨】シン　眞

○あした、あさ、しののめ、つと(早旦)「清―」「霜―」○夜のひきあけ、よあけ(昧爽)○あしたす、雞が夜あけをしらせて鳴く。書、牧誓「牝雞之―、惟家之索」○あきらか(明)○二十八宿の一なる房星の異名。

【晨炬】あさのけぶり、あさがすみ。顏延之、陶徵士誄「――暮靄、春煦秋陰」

【晨鼎】あしたのもや。杜甫詩「――朝可ル鑿」

【晨行】あさはやくゆく。周禮、槃二――者一禁二宵行者夜遊者一」＝晨征。

【晨起】あさはやくおきる。溫庭筠詩「――動征鐸、客行悲二故鄉一」＝晨興・夙起。

【晨晷】あしたの日の光。謝莊、宋明堂歌「――促二夕漏一」＝晨光。

【晨暉】あさひのひかり。宋書、樂志「潔誠夕鏗、端服――」＝晨光。

【晨食】あさのとり。鮑照詩「飢猿莫二下食一、――不二敢飛一」

【晨光】あさ日のひかり。景福殿賦「――內照、流景外延」＝晨暉。

【晨雞】朝早く鳴く雞。陳叔達詩「散關猶未ル送、此夕待二――一」

【晨霜】あしたのしも。王融詩「亭亭隻月流、鵬鵬――結」

【晨參】あさめし。東晳、補亡詩「――爾夕膳、潔二爾――一」＝晨食。

【晨鐘】よあけのかね。杜甫詩「欲ル覺聞二――一、今三人發二深省一」

【晨炊】あさはやくかしぐ。史、淮陰侯傳「寄食數月、亭長妻患之、乃――蚤食、食時信往、不二爲具一食」

【晨征】あさ早く出で行く、つとにゆく。趙至、與二嵇茂齊一書「鳴雞戒ル旦、則飄爾――」＝晨往・晨行。

【晨星】○あけがたのほし。韋應物詩「絲竹促二飛觴一、夜醼達二――一」＝曉星。○物のすくなきに喩ふ。次條參看。

【晨星落落】あけがたの天に星の位に二三點見ゆるが如く、友人の次第に少くなるにいふ、落落はまばら。劉禹錫文「所ル謂同年之友、當二其盛時一、連轡舉ル鐙(中略)今來落落、如二晨星相望一」

【晨省】早朝父母の安否をたづねる。曲禮「昏定而――」

【晨霧】あさ雨がはれる、あさばれ。韋應物詩「――澄二景光一」＝曉霽。

【晨照】あさ日のひかり。宋孝武帝文「俟二玉羊之――」

【晨旦】あした。梅堯臣、觀二鬬雞一詩「應三當激二孟賁一、豈獨專二――一」＝晨朝。

【晨朝】あさまだき。杜甫詩「――降二白露一、遊憶哲青氓」＝晨旦・早朝。

【晨潮】あさしほ。書禹記「――下、晚潮上」

【晨曦】あさひ。朱熹詩「千嵐蔽二夕陰一、百嶂明二――一」＝曉曦・晨曦。

【晨入夜歸】朝早く官舍に入り、夜家に歸る。韓愈、上二張僕射一書「凡執事之擇二於愈一者、非ル爲二其能――一也」

【晨入夜出】あさはやく入り、夜おそくいづ。神仙傳「淮南王劉安、每二宴見一、談二說得失一、及歌二諸賦頌一、――」

【晨牝】牝雞晨の略語、字解參看。嬉女子が政に與るにいふ。陸機、悲懷太子誄「如何――、殲二我朝鵠一」

【晨風】○朝かぜ。潘岳賦「――淒以激ル冷」○鷐の異名。詩、秦風「鬱彼――、鬱彼北林」

【晨飆】あさのつむじかぜ。溫庭筠詩「彤亂――急、香多夜雨晴」

【晨雾】あしたと、いふべと。杜甫詩「天台隔三江一、風浪無――」＝

晨昏・朝夕・晨宵。

【晨霧】シン あけがたのきり。梁簡文帝、梅花賦「雜二霜露一之一一」＝曉霧。

【晨明】メイシン あけがた。淮南子「日出二于暘谷一、浴二于咸池一、拂二於扶桑一、是謂二一一一」＝黎明。

【晨門】シン もんばん（門番）あしたに門を開くことを掌る者。論、憲問「一一曰、奚自」＝關人・關人。

【晟】セイ 敬 庚

○あきらか（明）○さかんなり（盛）に通ず。

【晢】㊀セツ 屑 ㊁セイ 霽

㊀あきらか（明）「昭一」○てらす（照）㊁ほしのひかり（星光）

【晢晢】セイセイ 星のひかる貌。詩、陳風「昏以爲レ期、明星一一」

【晰】セキ

晢（前條）に同じ。

【晝】チウ 宥 チュ 昼は俗字

○ひる、日出より日沒までの稱。夜の對「平一」「清一」「靜一」左、莊二二「飲二桓公酒一、樂、公曰、以レ火繼レ之、辭曰、臣卜二其一、未レ卜二其夜一、不レ敢」○ひるま（日中）まひる（日正中）○齊の邑名。孟子「三宿而後出」一」

【晝耕】チウカウ ひる耕作する。魏書、崔光傳「一一夜誦、備書以養二父母一」

【晝閉】チウカイ ひるのあひだ、日中。

【晝錦】チウキン 富貴にして故郷にかへるに喩ふ。北史、毛遐傳「明帝改二北地郡一爲二雍州一、鴻賓爲二刺史一、詔曰、此以二一一榮レ鄉」宋の韓琦（魏公）一一堂を作る。

【晝想夜夢】チウサウヤム 晝の思が夜の夢となる。列、周穆王「一一神形所レ遇」潛夫論、夢列「晝有レ所レ思、夜夢二其事一」

【晝視】チウシ ひる見る。飛燕外傳「吾一一后一、不レ若二夜視之美一」

【晝日】チウジツ ひるま。後漢書、邊韶傳「韶會一一假臥」

【晝寢】チウシン ひるね。論、公冶長「宰予一一」＝午睡。

【晝宵】チウセウ ひると、よると。淮南子「喜怒與二一一寒暑一並明」

【晝伏夜行】チウフクヤカウ 晝はかくれて夜にあるく。元史、張晉亨傳「跋二涉險阻一一一、僅免二于難一」戰國策「伍子胥霊戴而出二昭關一、夜行而晝伏」

【晝夜】チウヤ ひると、よると。論、子罕「逝者如レ斯夫、不レ舍二一一」

【晝如レ錦】ヒルニシキノゴトシ 花の咲きそろへる形容。李白詩「咸陽三月時、千花一一」

【晫】ハイ ホツ 隊 月

くらし（暗）「晻一」

【晩】バン 阮 通音バン、或は勉に作る

○ゆふべ（夕）「昨一」○くれ、ひぐれ（暮）○おくれる、おそし（後）早の對「早一」史、李斯傳「君何見之一」○する（末）「一春」「一唐」

【晩鴉】バンアウ ゆふぐれのからす。周權詩「流水殘雲帶二一十一」＝晩烏。

【晩鶯】バンアイ ゆふぐれのもや。黃庭堅文「吳君惠三示文湖州一一積卷、觀レ之歎息彌日」＝夕靄・暮靄・晩煙。

【晩驚】バンアウ 春の末のうぐひす。柳宗元詩「平野春草綠、一一啼二遠林一」

【晩烏】バンウ ゆふぐれのからす。歐陽修詩「一一藏柳棲二殘照一」＝晩鴉。

【晩煙】バンエン ゆふがすみ、ゆふげのけむり。唐太宗詩「一一含二樹色一、棲鳥雜二流聲一」＝暮煙。

【晩夏】バンカ なつのすゑ、陰暦の六月。駱賓王詩「荷香館二一一、菊氣入二清秋一」

【晩稼】バンカ おそくうゑたるいね。張籍、喜雨詩「猶及二秋田一一青一」＝晩禾。

【晩駕】バンガ 天子の崩御をいふ。通鑒、周紀「宮車一一」注「晩、晏也、義與二晏駕一同」晏駕參看。

【晩霞】バンカ ゆふやけ、ゆふばえ。沈佺期詩「聚藻垂二寒露一、仙杯落二一一」＝夕霞。

【晩學】バンガク 中年以後に至りて學を修める。陳書、儒林傳「一一讚仰、徒深二荷席之歎一」＝後學。

【晩苦】バンカン おくれて持つつぼみ。楊萬里詩「且看桃花一一開」

【晩暉】バンキ ゆふ方の日のひかり。李嘉祐詩「萬木迎二秋序一、千峯駐二一一」＝晩照・斜暉・落暉。

【晩凋】バンチウ おそく霰氣を催す。張廷瑛文「秋則早寒、春則一一」

【晩禾】バンクワ おくてのいね。劉長卿詩「黃雀啾啾伴二一一」＝晩稻。

【晩菓】バンクワ おくれてみのりたるこのみ。李建勳詩「一一經レ秋赤、寒蔬近レ社青」

【晩花】バンクワ おそ咲きのはな。梁簡文帝文「朝葉與二密露一共鮮、一一與二薰風一俱落」

【晩光】バンクワ ゆふひのひかり。董思恭詩「梁前朝影出、橋上一一舒」

【晩景】バンケイ ○ゆふぐれのけしき。張何、文君還錦賦「一一彌秀、晴江轉春」○夕日の光。

【晩悟】バンゴ おくれてさとる。蘇軾詩「飛鳶悔二前失一、黃犬悲二一一」

【晩婚】バンコン 年たけて結婚する、中年以後の結婚。早婚の對。

【晩歲】バンサイ 老いたるよはひ。北史、楊侃傳「苟有二良田一、何憂二一一」

【晩飡】バンサン 次條に同じ。蘇軾詩「煮蔬爲二一一一、安識肉與レ酒」

【晩餐】バンサン ばんめし。何景明詩「茗葉松花進二一一」＝晩餉・晩飡。

【晩霞】バンカ なつかひこ。許渾詩「籬上青桑待二一一」

【晩就】バンシウ 晩成に同じ。陸機賦、感二魂姿之一一」

【晩秋】バンシウ あきのすゑ、陰暦の九月。盧綸詩「鳴雁飛初夜、羌胡正一一」

【晩進】バンシン 後進に同じ。唐書、張薦傳「大行二一時、一一莫レ不二傳記一」＝晩輩・新進。

【晩餉】バンシヤウ ばんめし。陸游詩「野店谿橋供二一一一」＝晩餐。

【晩酌】バンシヤク 夕方に飲むさけ、ねざけ。白居易詩「朝睡足始起、一一醉即休」

【晩熟】バンジユク おそくみのる。禮、月令「仲夏之月、行二春令一、則五穀一一」

【晩春】バンシユン はるのすゑ。梁元帝纂要「三月曰二末春一一」

【晩鐘】バンシヨウ 夕ぐれのかねの音。韋應物詩「蒼茫寒色起、迢遞一一鳴」＝暮鐘。

【晩食以當レ肉】バンシヨクニモツテニクニアツ おそく食事するときは、空腹の爲めに粗食も肉の如くうまきをいふ。顏闔が善く窮に處せし法。戰國策「一一、安步以當レ車」

【晩翠】バンスイ 冬枯の時にも變らざるみどり。范質、戒二從子杲一詩「遲遲澗畔松、鬱鬱含二一一一」

【晩生】バンセイ あとから生れたる者の義、同輩に對して己を卑下するの稱。＝小生・小弟・拙生・後生。

【晩成】バンセイ おそく出來あがる。老子「大方無レ隅、大器一一」

【晩淒】バンセイ ゆふがたのものさびしさ。孟郊詩、寒竹舍二一一一」

【晩晴】バンセイ ゆふがたにはれる。杜甫詩「湖闊俟二雲霧一、樓孤待二一一一」＝晩霽。

【晩霽】バンセイ 夕方の雨あがり。宋之問詩「一一江天好」＝夕霽。

【晩照】バンセウ ゆふひ。王勃詩「浦樓低二一一、鄉路隔二風煙一」＝夕照・夕陽。

【晩節】バンセツ ○晩年に同じ、節は時。杜甫、遣悶詩「一一漸於二詩律一細」○末時に同じ。史、魏其武安傳「及二孝景一一一」○晩年の節操。楊萬里賦「顧堅二一一於歲寒一」

【晩榕】バンヨウ 晩酌のさけ。陸游詩「菰芹薦二一一一」

【晩唐】バンタウ ○唐の晩年。宋史、食貨志「昔一一民務二穀檟一、則增二其租一」○唐時代の詩を、初唐・盛唐・中唐・一一の四に分つ稱。

【晩稻】バントウ おくてのいね。劉禹錫詩「場黃堆二一一一、籬碧見二冬青一」＝晩禾。

【晩晩】バンバン ゆふべのながめ、夕かたの眺望。岑參詩「山河宜二一一一、雲霧待レ君開」＝晩望。

【晩潮】バンテウ ゆふしほ。戴叔倫詩「閑外逢二秋月一、天涯過二一一一」＝暮潮。

【晩笛】バンテキ ゆふぐれのふえの音。元好問詩「一一驚鷲二一一一、數點入二秋雲一」

【晩冬】バントウ ふゆの十ゑ、陰暦の十二月。

【晩登】バントウ ○夕方に高き處にのぼる。高啓詩「一一臨滄海、惻愴懷古情」○おそくみのる。鍾會、菊花賦「早植一一、君子德也」

【晩年】バンネン 老いたるよはひ、老後のよはひ。高適詩「一一學二垂綸一」＝晩歲。

【晩梅】バンバイ ○實を結ぶこと晩き梅。范成大詩「熱透一一紅的皪、展開新蕚翠扶踈」○おそ咲の梅。早梅の對。

【晩泊】バンパク 日暮に舟を停めて宿する。孟浩然詩「河橋晩泊レ船」

【晩帆】バンパン 日暮れて行く舟のほ。陰鏗詩「天際一一孤」

【晩飯】バンパン ゆふめし。顧瑛詩「人家溪樹裏、一一柁樓前」

【晩風】バンフウ ゆふかたのかぜ。陳子昂詩「一一吹二畫角一、春色耀二飛旌一」

【晩苗】バンビヤウ おそくうゑしなへ。范成大詩「早穗已垂垂、一一猶翦翦」

【晩暮】バンボ ゆふぐれ。轉じて、晩年の義。李尤詩「年歲一一時已斜、安得力士翻二日車一」

【晩陽】バンヤウ ゆふひ。錢起詩「微雨侵二一一一」＝夕陽。

【晩來】バンライ 日くれがた。杜甫、喜雨詩「一一聲不レ絕、應レ得夜深聞」

【晩雷】バンライ ゆふかたに鳴るかみなり。杜審言詩「日氣含二殘雨一、雲陰逐二一一一」

【晩潦】バンリヤウ 夕方のすずしさ。杜甫詩「一一看二洗馬一、森木亂二鳴蟬一」

【晡】ホ 處 餔に通ず

○さるのとき（申刻）今の午後四時。○ゆふへ、くれがた。白居易詩「朝一頓餅餌」

【晡下】ホカ 午後四時すぎ、ななつさがり。

【晡時】ホジ 午後四時。淮南、天文訓「日至二於悲谷一、是謂二一一一」

【晡夕】ホセキ ゆふかた。宋玉、神女賦「一一之後、精神恍惚、若レ有レ所レ喜」＝薄暮。

八畫

【晻】㊀アン 感 ㊁エン 琰

㊀くらし（冥）＝暗。○ささふ（障）㊁一一は日に光なし、くらし。

【晻靄】アンアイ 樹木のしげりてくらき貌。王安石詩「峯巒碧參差、木樹青一一」

【晻靄】アンアイ 霧たちこめてくらし。離騷「揭二雲霓之一一一矣」

【晻曖】アンアイ くもりてくらし。蜕希孟賦

「自ーー而晃耀、又霎魅而玲瓏」

【暗昧】アンマイ くらし。漢書「深惟二其故一而反ーーー」＝暗昧。

【暗暗】アンアン 日に光なき貌。楚辭、九歌「日ーー而下頹」

【晩】エン 阮

ひかげかたむく。

【晩晩】ベンベン 日がくれる。楚辭、哀時命「白日ーー其將レ入兮」

【暑】キ 紙

○ひかげ（日景）日の光「日ー」「寸ー」「短ー」韓愈、進學解「焚膏油以繼ーー」燈光と日光とつづけて晝夜勉强する。○はしらかげ（柱景）表を立てて日を度かる。○はかる（規）

【暑景】キケイ ひかげ（史、天官書）何承天、請改二漏刻一奏「更增二損舊刻一、參以二ーーー一、刪定爲レ經」

【暑刻】コキク とき。梁書、賀琛傳「俾二見二高祖一與語上常移二ーーー一」＝光陰・時刻。

【景】㊀ケイ・キャウ 梗 ㊁エイ 梗

㊀ひかり（光）○さかひ（境）○あきらか（明）○おほひなり（大）○しろし（白）○したふ（慕）○あふぐ（仰）「ー慕」「ー仰」○かたち（像）○けしき、やうす、おもむき「風ー」「勝ー」「佳ー」「絕ー」「好ー」「光ー」○うはぎ（上衣）○星の名。○うつくし（韶）○南方より吹く風。○ー教は、波斯國にて火を拜する宗教。＝丙教。㊁かげ（物之陰影）「日ー」＝影。

【景從】影が物の形につきまとふ如く附き從ふ。賈誼、過秦論「天下雲會響應、贏糧而ーーー」＝響應。

【景倒】影がさかしまに水中にうつる。杜甫詩「忽風翻而ーーー」

【景雲】めでたきくも。晉書、天文志「ーー太平之應」＝卿雲・慶雲。

【景曜】太陽。晉書、律歷志「揆二天行一而序ーーー」

【景行】大いなる道。高明なる德行に喩ふ。詩、小雅「高山仰止、ーー行止」＝大道。

【景氣】○やうす、ありさま。＝景況。○元氣、意氣。○國語、賈上の狀況、貨物のさばけぐあひ。

【景況】ありさま、やうす。＝情況。

【景仰】あふぎしたふ。金史、熙宗紀「孔子雖レ無レ位、其道可レ尊、使二萬世一ーーー」景行參看。

【景光】○めでたきひかり。又、恩德・榮譽等の義に用ふ。後漢書、郎顗傳「可下垂二ーーー一致中休祥上也」＝祥光。○としつき、光陰の義。蘇武詩「願君崇二令德一、隨レ時愛二ーーー一」

【景刻】とき。謝靈運詩「愛レ客不レ告レ疲、飲讌遣二ーーー一」

【景象】○けしき。＝景色。○かげと形と。

【景色】宋之問詩「岑壑ーー佳」＝風景・景趣・景物・風致。

【景初曆】魏の明帝の時、撰みたることよみ。景初は其の年號。晉書、武帝紀「改二ーーー一爲二太始曆一」

【景澄】けしきがすみてきよし。支曇諦、廬山賦「ーー則巖岫開レ鏡、風生則芳林流レ芬」

【景星】めでたきほし。史、天官書「天晴而見二ーーー一」＝瑞星・德星。

【景星鳳凰】めでたき星と鳳凰と。賢人に喩ふ。韓愈、與二李拾遺一書「朝廷之士引レ頸東望、若二ーーー之始見一也、爭レ先覩レ之以爲レ快」

【景迹】○おこなひ、行跡。夏侯湛文「遙遙ーー、君子攸レ欲」○蠅の一種。歐陽修、憎二蒼蠅一賦「尤忌二赤頭一、號爲二ーーー一」

【景祚】おほいなるさいはひ。晉書、樂志「流二ーーー一願萬世一」＝景福。

【景致】けしき、致はおもむき。＝風致・景趣・景色。

【景徵】めでたきしるし。謝靈運文「龜筮元謀、符瑞ーー」＝休徵・瑞徵。

【景天】螢火の異名。古今註「螢火、一名耀夜、一名ーー」

【景風】○みなみかぜ。史、律書「南方ーー夏至至」○四南の風（淮南、天文訓）○四時の和風（爾雅、釋天）＝祥風。

【景福】大いなるさいはひ。詩、小雅、小明「神之聽レ之、介二爾ーーー一」＝景祚・大福。

【景物】○けしき。杜甫詩「三春ーー滋」＝風景。○國興を添ふる爲めに寶品に添へて贈呈するもの。＝景品。

【景慕】あふぎしたふ。柳宗元詩「凝レ情空ーー」＝仰慕。

【晶】セイ 庚

○ひかり（精光）○あきらか、ぎらぎらと明るく光る。宋之問詩「八月涼風天氣ー」○するしゃう「水ー」晶精通ず。○結ーシャウは純粹なる礦物が特有する一定の形象。

【晶瑩】あきらかにひかる。宋之問詩「ーー目何在、瀟灑心欲レ無」

【晶光】きらめくひかり。韓愈詩「ーー蕩相射、旗鼓翩以森」＝光晶。

【晶晃】あきらかなるひかり。蔣防詩「ーー浮二輕露一」

【晶瑩】あきらかにひかる貌。韓愈詩「堆金疊玉光ーー」

【晶晶】きらめき光る貌。歐陽修、秋月賦「皎皎搖搖、ーー盈盈」

【晴】セイ 庚 本、姓に作る

○はる、雨やみて雲散ず、空がすみわたる。陰の對「新ー」○はれ、うららかなる天氣。陳與義詩「孤松立快ー」

【晴陰】はれると、くもると。はれと、くもりと（白居易、大湖石詩）＝晴曇。

【晴雨】はれと雨ふりと。

【晴雨計】空氣の氣壓の高低によりて晴雨を卜し得る器械。＝風雨表。

【晴雲秋月】胸中の清くすきとほる喩。宋史、文同傳「操韻高潔、自魏二奚笑生一、善二詩文一、篆隸行草飛白一、文彥博守二成都一、奇レ之、致二書同一日、與可襟韻灑落、如二ーーー一、塵埃不レ到、司馬光・蘇軾尤敬二重之一」與可は文同の字。

【晴昊】あをぞら。方岳詩「三峯倚二ーーー一」＝晴空。

【晴好雨奇】山水の景色の晴雨共に佳なる義。蘇軾、飲二湖上一初晴復雨詩「水光瀲灩晴方好、山色空濛雨亦奇」

【晴旭】ほがらかなるあさひ。宋仁宗詩「ーー輝輝禁槊開」

【晴空】はれたるそら。李白詩「回溪十六度、碧嶂壺二ーーー一」＝晴天・晴虛。

【晴景】はれたるけしき。溫庭筠、詠二山雞一詩「石壑動二ーーー一、山禽啼二翠微一」

【晴春】ほがらかなるはる。鄭谷詩「山城多二曉煙一、澤國少二ーーー一」

【晴雪】はれたるあをぞら。陳陶詩「白皚皚二ーーー一」

【晴川】はれたる川づら。崔顥詩「ーーー歷歷漢陽樹」

【晴旦】はれたるあした。朱德潤詩「明朝烟雨開二ーーー一」

【晴晝】はれたるひる。蘇軾詩「玉溜神龍遊、雨雷亂二ーーー一」

【晴天】はれたるそら。杜牧詩「欲レ開未開花、半雨半ーー」＝晴空・晴虛。

【晴霽】晴陰に同じ。

【晴朗】そらがはれてほがらか。世說「天甚ーー」

【晴嵐】はれたる日に山氣の蒸しのぼるもの。鄭谷詩「ーー染二近畿一、宜和畫體、御府所レ藏、有二李成夏景ーー圖一」

【晴和】そらがはれてのどかなり。白居易詩「ーー日出天」

【晢】セキ 陌 晢とは別字

あきらか「明ー」

【晢晢】白に从ふ者は白色の晢となし、日に从ふ者は明辨の晢となす、二字は義各異なり。

【晰】セキ 錫

あきらか（明）

【智】チ 寘 遲じて知に作る

○ちゑ、「才ー」「多ー」○しる（知）○さとる。○事理に明か、かしこきひと（賢人）愚の反對「賢ー」○はかりごと。

【智意】ちゑ。魏志、王公傳「生五六歲、ーー所及、有若二成人之智一」

【智育】理解力・推理力を啓發する教育。

【智慧劍】鈍利にして決斷ある智力を劍に喩（ていふ。維摩經「以二——一破二煩惱網一」

【智永】陳の僧、俗姓王氏、會稽の人。永禪師と號す、書を善くし殊に草書に巧なり。

【鬬レ智】智慧くらべをする。史、項羽紀「漢王謂二項王一曰、吾寧ーーー、不レ鬬レ力」

【智巧】○かしこきたくみ。史記「豈可レ以二ーーー一得レ哉」＝巧智。○わるぢゑ、狡猾。

【智鑒】さとくして物事をみわける。南史、宋高祖紀「聰明有二ーーー一」

【智器】ちゑはたらきある者。王隱、晉書「有二ーーー文漢一」＝才器。

【智金】ヂキン 雁の異稱。抱朴子「ーーー銜レ蘆以避レ網」

【智計】ヂケイ かしこきはかりごと。晉書、陶侃傳「當下以二歲月一ーーー一試之」

【智慧】ヂケイ さとし。老子、十八章「大道廢有二仁義一、ーーー出有二大僞一」俗に知惠に作る。

【雖レ有二智慧一不レ如乘レ勢】ヂケイアリトイヘドモフレカラズノセイ 智慧ある人も、時勢に伴ひて事を施爲せざれば、功を成すこと能はざる義。孟、公孫丑「齊人有レ言、曰、——、雖レ有二智慧一不レ如レ待レ時」

【智筭】ちゑすぐれたるはかりごと。晉書、賈模傳「深沈有二ーーー一」＝智算・智謀・智計・智數。

【智囊】最も奥にある臼齒。人の智識の發達する年頃即ち二十歲後に生えるもの、おやしらずば。

【智識】ちゑ。宋史、李庭芝傳「ーー恆出二長老之上一」＝知識。○佛語善ーーは佛道を悟りし名僧。

【智仁勇】智と仁と勇との三德。中庸「知仁勇三者、天下之達德也」知は智と同じ。

【智者】ちゑある人。戰國策「愚者暗二於成事一、ーーー見二於未萌一」商子、更法「ーーー作レ法而愚者制焉」

【雖レ有二智者一不レ能二其後一】スヒトイヘドモソノゴニアタハズ 前に誤れる計を爲すときは、後に智者ありと雖も其の後を善くして功を成しがたし。孫子、作戰

「諸侯乘二其弊一而起、――矣」

【智者一失】チシャノシツ　智者も時には過失あるに喩ふ。史、淮陰侯傳「廣武君曰、臣聞、智者千慮、必有二一失一、愚者千慮、必有二一得一」

【智者見二未萌一】チシャハミミバウニ　ちゑある人は事の未だ起らざる前にさとり知る。戰國策「愚者暗二於成事一、智者見二於未萌一」

【智將】チシヤウ　智謀すぐれたる大將。東軒雜錄「魏公曰、――不レ如二福將一」

【智術】チジユツ　ちゑはかりごと。蜀志、諸葛亮傳「欲レ信二大義一于天下一而――淺短」

【智數】チスウ　ちゑありて謀に長ず。魏志、文德郭后傳「后有二――一、時時有レ所二獻納一」＝智術・智謀。

【智小而謀大】チセウニシテボウタイナリ　小智の人、徒に大謀を爲すをいふ。易、繫辭「――、力小而任重」

【智囊】チナウ　ちゑ多き人。史、樗里子傳「滑稽多智、秦人號曰二――一」

【智能】チノウ　ちゑはたらき。史、馮唐傳「得レ盡二其――一」

【智欲圓而行欲方】チホエンナラントコトヲホツシカクナラントヒハバナリ　智は、圓轉活脫にして萬事に應ぜんことを欲し、行は、方正嚴格にして、禮に合せんことを欲す。淮南、主術訓「凡人之論、心欲レ小而志欲レ大、――」

【智謀】チボウ　ちゑあるはかりごと。漢書、元后傳「忠信質直、――有レ餘」＝智略・智計・智術・智數・智算。

【智辯】チベン　○才智と辯舌と。○賢き口まへ。＝辯智。

【智謀短淺】チボウタンセン　ちゑあさし。漢書、孔光傳「臣光――」

【智過二萬人一】チクワバンニンニ　ちゑの非凡なるをいふ。淮南、脩務訓「――者謂二之英一、千人者謂二之俊一、百人者謂二之豪一、十人者謂二之傑一」

【智勇雙】チユウソウ　智謀と勇氣とをあはせかねる。史記「智勇可レ謂レ兼レ之矣」

【智略】チリヤク　ちゑはかりごと。六韜「無――一――權謀一」＝智計・智謀。

【智慮】チリヨ　ちゑあるかんがへ。＝知慮。

【智力】チリヨク　ちゑのはたらき。魏志、太祖紀「吾任二天下之――一、以レ道御レ之、無所不可」

【普】ホ　麌

○あまねし（徧）「――徧」「――天率土」○ひろし（博）○大いなり。○歐羅巴の國名、――魯西の略「――佛戰爭」

同訓異義　普・周・徧・遍・洽・浹の別は周（口部五畫）の條を見よ。

【普衍】フエンひろくゆきわたる。潘岳賦「偉二壬澤之――一、嘉二植物之並敷一」

【普恩】フオン　あまねきめぐみ。薛逢詩「欲レ識――無二邊近一」

【普洽】フカフ　あまねし。史子「大化――」＝普浹。

【普及】フキフ　あまねくおよぶ。佛偈「願以二此功德一、――於一切一」＝普覃。

【普化僧】フクワソウ　禪宗の一派、普化宗の僧、一に、虛無僧といふ、尺八を吹きて托鉢するもの、唐の普化禪師を開祖とす、我國にては、鎌倉時代に法燈國師之を傳ふ。

【普現】フゲン　あまねくあらはる。范成大詩「兜羅世界網、――無二邊際一」

【普賢】フケン　菩薩の普く衆生を濟度するものの名、常に白象に騎る所を圖す、一に賢首といふ。大日經疏「普是遍二一切處一義、賢最勝妙善義」

【普告】フコク　あまねくつぐ。魏書、節閔帝紀「可二――令レ知一」＝布告。

【普施】フセ　あまねくほどこす。史、五帝紀「高辛――利レ物、不レ於二其身一」

【普請】フシン　○あまねく同志に請ひて共に事を爲す。法苑珠林「一切聖凡、亦皆――」○諸人に寄附を請ひて建築する。轉じて、建築の義。釋氏要覽「佛令鳴二鍵稚一、總集共爲上之、此――之始也」

【普率】フソツ　普天率土の略。普天之下參看。

【普陀】ダフ　山名、浙江省定海縣の東海中に在り、氣候溫和、風景奇特、西洋人の避暑地たり。＝補陀山・補陀落迦。

【普覃】フタン　あまねく及ぶ。常衮文「德音頻降、霈澤――」＝普及。

【普通】フツウ　○よのつね。＝通常。○一般。特別・專門等の對「――學」○一般に、おしなべて。

【普通教育】フツウケウイク　國民として必要なる普通學の知識を授ける教育。初等教育と中等教育とをいふ。專門教育の對。

【普天之下率土之濱】フテンノシタソツドノヒン　率は循、濱は涯、天の普く覆ふ所、地の連續せるかぎりの義。詩、小雅「溥天之下、莫レ非二王土一、率土之濱、莫レ非二王臣一」孟子、萬章篇に引きて溥を普に作る。

【普汜】フハン　次條に同じ。淮南、本經訓「覆露照導、――無私」

【普汎】フハン　あまねくゆきわたる。魏書、孝莊帝紀「內外百寮、――加二一級一」＝普遍・普汜。

【普徧】フヘン　あまねくゆきわたる。徧は遍に同じ。＝徧普・普汎。

【普遍】フヘン　前條に同じ。

【普霽】フサイ　あまねくたまふ。梁書、武帝紀「――二內外從官軍主左右錢米一」

九　畫

【暗】アン　闇　闇に通ず

○くらし、明かならず（日無レ光）「一黑」○おろか（愚）智慧がない「一愚」「迷一」○くらがり、やみ「一夜」○おくぶかし（深奧）○かすかにかくれる（幽隱）○あんに、それとなく、人知れず。○そらんず、諳に通ず「一記」「一算」

同訓異義　暗・昏・昧・冥・瞑・晦○暗は明の反、日月・燭火・道理・心識のくらきに通用す、闇に同じ。○昏は夕なり、暮るるなり、轉じてくらしと訓む、黃昏はたそがれなり、昏禮も日暮を用ふる故なり、後に昏字を婚に作る。○昧は夜あけなどの、ぱっとして暗きをいふ、暗昧・昏昧・愚昧などと用ふ。書經「兼レ弱攻レ昧」昧爽は、未明をいふ。○冥はぱっとして、つかまへ所なきなり、冥冥・蒼冥は天なり、渺冥は遠く遙かにして、さだかに見えぬなり、佛書に冥途といふも、暗くして、はかり知られぬ意なり。○瞑は冥に同じ、後世は分別して用ふ、瞑は日のくもりてくらきなり。○晦はつもごりと訓む、まっくらやみなり、明字・顯字の反なり。

【暗藹】アンアイ　うすぐらし。揚雄、甘泉賦「儐――兮、降二清壇一」「一解、衆くして盛なる貌。

【暗暗】アンアン　○深空なる貌。又、幽隱の貌。吳融詩「空門付與悠悠夢、寶帳迎回――春」○それとなく「――裡」

【暗闇】アンイン　くらきまど。薛道衡詩「――懸二蛛網一、空梁落二燕泥一」

【暗暈】アンウン　くらき日がさ。王安石詩「殘燈生――一、重簾集二爽條一」

【暗香】アンカウ　どこからとなく來るかをり。許渾詩「高竹動二疎翠一、早蓮驚二――一」

【暗香浮動月黃昏】アンカウフウドウツキノワウクワウコン　梅の香が何處ともなくにほひ來てたそがれの月が出る。林逋、梅花詩「疎影橫斜水淸淺、――」

【暗溝】アンコウ　暗渠に同じ。＝地下溝。

【暗號】アンガウ　符牒を以てする合圖のしるし。又、其の符號。堯山堂外紀「與二士人一相約爲二――一」

【暗合】アンガフ　兩者の言行が期せずして一致する。晉書、山濤傳「濤不レ學二孫吳一、而暗與レ之合」＝闇合。

【暗記】アンキ　そらんじおぼゆ。後漢書、應奉傳「凡所二經履一、莫レ不二――一」＝諳記。

【暗渠】アンキヨ　地下を通るみぞ。梅堯臣詩「古寺入二深樹一、野泉鳴二――一」＝暗溝。

【暗愚】アンググ　事理に暗くおろか。＝愚昧・蒙昧・暗昧・闇愚。

【暗君】アングン　おろかなきみ、暗愚なる君主。明君の對。

【暗黑】アンコク　○まっくら。＝闇黑。○俗に公明正大ならざる義「――面」○世が亂れる「――時代」

【暗黑時代】アンコクジダイ　世が甚だしく亂れて戰爭のたえまなき時代。

【暗恨】アンコン　人知れぬうらみ。白居易詩「別有二幽愁――生一」

【暗殺】アンサツ　やみうち、ひそかにころす。

【暗算】アンザン　むなざん、算盤などを用ひずして心の中にてかんぢゃうする。＝暗數。

【暗示】アンジ　それとなく示す。又催眠術などにて被術者に與へる一種の豫告。

【暗室】アンシツ　幽暗にして人なきへや。南史、阮長之傳「一生不レ侮二――一」

【暗麝】アンシヤ　茉莉花の異名。格物叢話「茉莉花東坡目爲二――一」

【暗弱】アンジヤク　體よわく性おろか。＝闇弱。

【暗誦】アンシヨウ　そらんじて讀む。杜甫詩「羣書萬卷常――」

【暗數】アンスウ　こころのうちにてかぞへる。方回詩「――二青梅一、立二樹陰一」

【暗礁】アンセウ　かくれいは、水面下にかくれてゐるいは。

【暗射】アンシヤ　○的なくして弓いる。元好問詩「長箭不二――一」○そらでいひあてる「――圖」

【暗疏】アンソ　そらにて書きうつす。唐書、虞世南傳「一二之誤一」

【暗澹】アンタン　うすぐろくして鮮かならざる貌。白居易詩「一盞――將何比、淺碧籠裙襯二紫巾一」

【暗中飛躍】アンチユウヒヤクヤク　闇やみの中にてとびはねる、人知れず活動する。

【暗中模索】アンチユウモサク　やみの中にて手さぐりにて物をさがす。隋唐佳話「許敬宗性輕傲、見レ人多忘之、或謂其不聽、曰、卿自雖レ識、若遇二何劉沈謝一、――著亦可レ識」何は何遜、劉は劉孝綽、沈は沈約、謝は謝朓。

【暗燈】アンタウ　くらきともしび。張耒詩「童子持二經守一――一」

【暗夜】アンヤ　やみよ。宋書、謝景仁傳「兵敗衆散、時已――」

【暗淚】アンルイ　人知れぬなみだ。賈島詩「白髮相並出、――兩行分」

【暗令】アンレイ　あいことば。武備要略「若近レ賊處欲レ行――一、聽二中軍傳二遞一人一」

【暐】キ　尾　燿に同じ

○ひかりの盛んなる貌。○日のひかり。

【暐曄】キヤ　ひかりの盛んなる貌。曹植文「玄素之――」

【暈】ウン　問

○かさ、ひがさ、つきがさ「日――」「月――」○轉じてぼんやりと、ひがさ・つきがさの如き形したる模樣。韓愈詩「夢覺曇生――」○めまひ、くらむ、船など

に醉ふ(眩)「眩ー」「船ー」

【暈】日月の旁に氣ありて圍繞すること軍營の相圍むに似たり、故に日に从ひ軍に从ふ。

【暈圍】日月のまはりに生ずるかさ。韓非子「日月ーニ於外」＝日暈。

【暈船】ふなよひ、ふねに醉ふ。

【暎】ニイ 敬 映に同じ

○てる。てらす(照)○うつる。うつす。

【暍】エツ 月 曷

○あつさあたり(傷暑・中熱)○ーは熱氣の極めて盛んなる貌。

【暍死】あつけにて死する。漢書、武帝紀「夏大旱、民多ーー」

【暍人】熱を病む人。淮南子「武王蔭ニーー于樹下、左擁而右扇之」

【暇】カ 霰 或は假に作る

○ひま、いとま(閑・閒)やすみ、無事閑散の時「休ー」「賜ー」「官ー」「閒ー」○國ー乞ヒトヒは別を告ぐる。＝訣別。

【暇逸】ひまにてあそびをる。書、酒誥「不ニ敢自暇自逸」戴表元詩「不ノ許私ーー」＝逸豫・暇豫。

【暇日】ひまにして無事の日。孟、梁惠王「壯者以ニーー、修ニ其孝弟忠信」

【暇餘】いとま、てすきの時。＝餘暇。

【暇豫】ひまにてあそぶ。景福殿賦「鳩ニ經始之黎民、輯ニ農功之ーー」＝暇逸。

【暉】キ 微 又、輝に作る

○ひかる、ひかり(光)「素ー」「落ー」「晩ー」「斜ー」○かがやく。

【暉煜】ひかりかがやく。梁簡文帝文「ーー金鑠、陸離寶勒」

【暉映】かがやきうつる。晉書、左貴嬪傳「車服ーー」＝耀映。

【暉暉】○日光のかがやく貌。韓愈詩「ーー簷日暖且鮮」＝耀耀。○空の晴れて明かなる貌。江總詩「二月春ーー」

【暉芒】ひかり。新論「太白ーー、雞必夜鳴」＝光芒。

【暉麗】ひかりがうるはし。唐太宗詩「禁苑春ーー、花蹊綺樹粧」

【暎】ケイ 霰 暎とは別字

たがふ(違)はなれる。

【暎違】はなれ(だたる。何遜詩「萬里就ーー」＝離隔。

【暎合】はなれると合ふと。謝靈運賦「究ニ風波之ーー」＝離合。

【暎索】離れ散ずる。蘇舜欽詩「一旦又ーー、千里或闊疎」＝離散。

【暄】ケン 元

○あたたか(溫)日煖タタか「春ー」「負ー」○はるのすゑ(春晩)○敍寒ー、カンケンヌは時候の挨拶をのべる。

【暄煖】あたたか。溫庭筠文「言感ニ剛謨、信比ニーーー」

【暄寒】時候の挨拶をいふ。南史、蔡撙傳「及ニ其引進、但ーー而已、此外無ニ復餘言」＝寒暄・暄涼。

【暄和】暖かくのどか。隋書、田德懋傳「春日ーー、氣力何似」＝暖和。

【暄妍】あたたかにして景色がうつくし。張九齡詩「靈境眞幽絶、芳時重ーー」

【暄暖】あたたか。朱元詩「春寺尋ニーーー」＝溫暖・暄煖・暄煦。

【暄風】春のあたたかきかぜ。梁元帝纂要「春風曰ニーー・陽風」

【暑】ショ 霰

○あつし、あつさ(熱氣)易、繫辭「日月運行、一寒一ー」「炎ー」「隆ー」「殘ー」「避ー」○大ー小ーは夏の季節。○轉じて夏の義に用ふ。千字文「寒來ー往」

【暑威】あつさのいきほひ。＝炎威。

【暑雨】夏の炎天に降る雨。書、君牙「夏ーー、小民惟曰怨咨、冬鄭霧、小民亦惟曰怨咨」

【暑鬱】むしあつし。抱朴子「ーー陰隆、不ノ能ノ消ニ雪山之凍ニ」

【暑暍】あつさにあたる。論衡「盛夏暴行、ーー而死、熱極爲ノ毒也」

【暑氣】あつさ。淮南子「ーー多ノ天、寒氣多ノ暮」

【暑月】あつき季節。左傳「ーー多ノ衣、所ニ以示ニ疾」

【暑濕】あつくしてしめる、濕一に溽に作る。禮、月令、疏「腐草此時得ニーー之氣、故爲ノ螢」＝暑溽。

【暑海】むしあつし。徐陵、答ニ族人ニ書「素秋方屆、ーー稍闌」＝溽暑。

【暑中】國夏のあつき間。又、夏の土用十八日間の稱「ーー見舞」

【暑館】夏時に用ふるたかむしろ。蘇轍詩「ーー臥ニ清風ニ」

【暑熱】あつし、あつさ。漢書、西域傳「烏弋地ーー華平」＝炎熱。

【暑魃】なつのひでりがみ、ひでり。范成大詩「ーー方肆行」

【暑伏】夏の土用。暑月三伏の時。水經、注「楊溪水清泠、甚於大溪、縱ーー之長、尙無ニ能澡ニ其津流ニ也」

【暑夜】夏のあつき夜。戴叔倫詩「ーー宿ニ城南ニ、懷ノ人夢不ノ成」＝暑夕、夏夜。

【暖】㊀ダン 早 ㊁ケン 元 阮

㊀あたたむ、あたたかし「ー氣」「春ー」「溫ー」「飽ー」＝煖。㊁やはらか(柔)なる貌。莊、徐無鬼「有ニ暖姝者」

【暖姝姝】柔懦にして物に逆はざる貌。莊、徐無鬼「有ニ暖姝者、學ニ一先生之言、則ーーー、而私自悅也、自以爲ノ足矣」＝暖姝。

【暖衣】あたたかにきる。孟、滕文公「飽食ーー、逸居而無ノ教、則近ニ於禽獸」

【暖香】暖かなる氣のかほり。雲仙雜記「寶雲溪有ニ僧舍、盛冬若春至、則然ニ薪火、ーー一炷、滿室如ノ春」

【暖氣】あたたかさ。張華詩「重衾無ニーー、挾ノ纊如ノ懷ノ冰」

【暖日】あたたかきひ。陸游、冬晚山房書ノ事詩「凍雲鎖ノ水封ニ梅蕊、ーー烘ノ窗繹ニ研冰」

【暖翠】春の晴れたる山の色。吳景奎詩「江上數峯浮ニーー」

【暖席】せきをあたたむ。又、あたたかき席。淮南子「墨子無ニーー、孔子無ニ黔突」「無ニーー」は東四に奔走して席の暖まる暇なき義。

【暖熱】あたたかし。蘇軾詩「艷歌一曲回ニ陽春、坐使ニ高堂生ニーー」

【暖房】家を修して宴を開く、やうつりのさかもり。王建、宮詞「太儀前日ーー來」＝煖房。

【暖飽】あたたかに著、あくまで食ふ。飽食暖衣の略、暖衣參看。

【暖風】あたたかきかぜ。禮、月令「行ニ春令ニ則ーー來至」

【暖爐】○ゐろり。東京夢華錄「十月朔、有司進ニーー炭、民間皆置酒、作ニーー會」＝煖爐。○西洋家具の一、ストーブ。

【暖和】あたたかにやはらぐ。

【暖簾】國日光をふせぐ爲めに垂れる布帛のとばり、商家にて店の入口に垂れる。

【暗】㊀ピン・ミン 軫 ㊁ピン・ミン 眞

㊀つよし(强)書、康誥「ーー不ノ畏ノ死」㊁もだゆ(悶)＝悶。

【暘】ヤウ 陽

○ひので(日出)○あきらか(明)○はれ(晴天)○かわかす(日乾物)書、洪範「曰雨曰ー」

【暘烏】日の異名。劉禹錫詩「扶桑未ノ換ーー彩、腐草猶爭爝火光」＝陽烏。

【暘谷】東方の日の出づる所。書、堯典「分命ニ羲仲、宅ニ嵎夷、曰ニーー寅賓ニ出日」

【暘】十 畫 陽

○あきらか(明白)○しろし(白)＝皓。

【暘然】しろき貌。漢書、司馬相如傳「ーー白首」＝皓然。

【暤】カウ 皓 或は皓に作る

○きよし。○あきらか(皓旰)

【暴】

顯(頁部十四畫)の古字。

【暢】チャウ 漾 鬯に通ず

○のぶ、のびる(舒)○のびのびする、のどかになる「和ー」「舒ー」「ー適」「酣ー」○とほる(通達)易、坤卦「美在ニ其中、而ー於四支」○文章言論などの意味がよく通達する「通ー」「流ー」○みつる(充)長ずる。

同訓異義 フ暢・舒・述・陳・宣・展・申・伸等の別は述(辵部五畫)の條を見よ。

【暢洽】あまねく物にゆきわたる。薛道衡、晴高祖頌「玄功ーー、不ノ局ニ於形器ニ」

【暢外】養生の一法。天隱子「手當摩擦、肌膚溫熱、熨ニ去冷氣、謂ニ之ーーー」

【暢月】陰曆十一月の異名。一陽來復して、陽氣ののび充つる義。暢は充。呂覽、仲冬紀「仲冬之月(中略)命ノ之曰ニーーー」

【暢敍】のべついづる。王羲之、蘭亭集序「一觴一詠、亦足ニ以ーニ幽情ー」＝敍暢。

【暢遂】草木がのび長じて其の性を遂げる。唐無名氏、律呂相召賦「草木以ノ之而ーー、乾坤於焉而交接」＝暢茂。

【暢達】のびて通ずる、のび長ずる。吳越春秋「孰知ニ其非ニーーー之兆ー」

【暢適】心がのびやかにたのしむ。陸游、居室記「讀書取ノ一ニ性靈、不ニ必終ニ卷」

【暢茂】のび長じて盛んなり。孟、滕文公「草木ーー、禽獸繁息」＝暢遂。

【暝】㊀ベイ・メイ 霰 ㊁ベイ・メイ 青 もと冥に作る

㊀かすか(幽)○くらし(晦)㊁よる(夜)

同訓異義 ノ暝・暗・昏・昧・晦・冥の別は暗(日部九畫)の條を見よ。

【暝天】夜のくらきそら。伍衡詩「山磐數磨敵ニーーー」

【暝投】日暮れてやどる。李白詩「ーー淮陰宿」

【暝帆】をぐらく遠く見ゆる舟の

ば。陸機詩「天際――孤」

【暝暝】メイメイ　さびしき貌。劉孝綽詩「誰能對二斐燕一、――守二空房一」＝寂寞。

十一畫

【暗】　暗（日部十畫）に同じ。

【暖】カン　或は煖に作る

○かわく「乾――」「旱――」かわかす（乾）○あつし（熱氣）○さらす（曝・曝）○しほむ（萎）乾きてしほむ。詩、王風「――其乾矣」

【暖暖】カンカン　日光のはげしくあつき貌。沈佺期詩「是時盛夏中、――多二瘵疾一」＝羸疾。

【暖暖】カンカン　はげしき日のあぶり照す貌。禮子「――然如二日之正中一也」

【暘】ケイ　圜

○栄くの星のきらめく貌。○小さき星。

【暫】ザン　勤　暫に作るは非

○しばし、しばらく、不久（須臾）久の反對。○わづかのあひだ、まもなく。○にはかに（卒、猝）一面は猝然面會する。宗欽詩「披襟一面、定交一言」

同訓異義　暫・姑・且・少・薄○暫は不レ久也と註す、少しの間の意なり、暫時と熟す。中庸或問「驚二世駭レ俗之事、則可レ暫而不レ得レ爲レ常矣」○姑は且也と註す、暫の意はなし、まあと訓す。孟子「姑舍二汝所レ學而從レ我」○且は姑に近し。○少はすこしの間といふ義、少時の時を省きたるなり、少間・少爲と運用しても、しばらくと訓む。○薄は今しばしの義、いささかとも訓む。詩、召南「薄言還歸」○須臾・須斯・少間・少爲・間なども亦しばらくと訓む。

【暫遊】イウ　しばらくあそぶ。李中詩「絕頂松堂喜二――一、一宵玄論接二浮丘一」

【暫時】ザン　しばらく。高啓詩「――握レ手還分レ手、暮雨南陵水寺鐘」＝少時。

【暫時分手】ザンジブンシュ　しばしの間、わかれる。高適、送李少府貶二峽中一王少府貶中長沙上詩「聖代卽今多二雨露一、――莫二躊躇一」

【暫且】ザンショ　しばらく。＝暫時。

【暫留】ザンリウ　しばしとどまる、しばらくの間逗留する。

【暫】セツ　屑

なる（狎嫚）日日狎れちかづく＝褻。

【暫御】セツギ　なれちかづく侍臣。詩、小雅「曾我――、潛潛日瘁」＝侍御。

【暱】ヂツ　質　昵に同じ

○ちかづく（近）○したしむ（親）「親――」詩、小雅「無二自――焉」なじむ。

【暱愛】ヂツアイ　したしみあいする。謝惠連詩「還川阻二――一、修渚曠二清容一」

【暱近】ヂツキン　○近きにある者をしたしむ。左傳「親レ親――尊レ賢、德之大者也」○したしみちかづける。

【暱就】ヂツシウ　したしみつく。左傳「是用痛心疾首、――寡人」＝暱近。

【暴】　㊀バウ　㊁ボク　㊂ホク　號　屋　覺　㊁の通音バク

㊀あらす、そこなふ（害）○あらし、てあらし「亂――」「猛――」「强――」しへたぐ（虐）あし（惡）孟、告子「凶歲子弟多――」○みだす（亂）又、其の者。○とし、はやし（疾）はげし。詩、邶風「終風且――」○てうちにする、空手にて搏つ（手搏）「――虎」○にはか（猝）㊁さらす（曬）日光にあてる（日乾）孟、告子「一日――之」俗に曝に作る。○さらし出す、露出する。李華、弔古戰場文「――骨砂礫」○かわく、かわかす（晞・乾）○あらはす（顯）○あらはる（露）知れる「――露」㊂おこる、うごもつ（墳起）

同訓異義　暴・見・現・顯・著・形・露・表・彰・旌の別は見（部首七畫）の條を見よ。

○カ、暴・遽・餓・驟・頓・卒・猝の別は遽（辵部十三畫）の條を見よ。

【暴惡】バウアク　あらくれてわるし。又、其の者。柳宗元文「偸嗜――者」

【暴威】ボウイ　亂暴なるいきほひ。

【暴溢】バウイツ　みなぎる。南史、陳後主紀「淮流――、漂二沒舟乘一」＝怒溢。

【暴飲】バウイン　むやみに酒をのむ。＝牛飲。

【以レ暴易レ暴】バウヲモテバウニカフ　甲の暴を除く爲めに乙の暴を以て之に代へる。伯夷、叔齊が周の武王を諫りし辭。史、伯夷傳「――、不レ知二其非一矣」

【暴苛】バウカ　無法にしてあらくきびし。宋史、陳希亮傳「徐州守――、以二細過一繫二民產數十家一」＝暴虐。

【暴行】バウカウ　あらあらしきふるまひ。

【暴豪】バウガウ　あらくつよし。史記「令下與二――之徒一同夜頭」

【暴客】バウカクあばれ者、盜賊など。ぶ、樂師「重門擊レ柝、以禦二――一」＝暴漢。

【暴慢】バウカン　あらあらし。韓式家訓「素――者、欲下其親古人之小心謝レ己、尊レ賢容レ衆」

【暴虐】バウギヤク　あらあらしくないがしろにす。左傳「――二其君一而去二其親一」

【暴慢】バウマン　あらあらしくほしいままにして人をあなどる。論、泰伯「動二容貌一、斯遠二――一矣」

【暴勇】バウユウ　あらあらしき勇氣。

【暴落】バウラク　物の價がにはかに下落する。

【暴論】バウロン　あらくしてみだりなり。後漢書、蘇楷傳「政刑――、災異尤數」

【暴利】バウリ　むやみにむさぼる利益。

【暴掠】バウリヤク　あばれて物をかすめとる。史、高祖紀、懷王約三入レ秦無二――一」＝暴鈔。

【暴戾】バウレイ　あらあらしく理にもとる。史、伯夷傳「――悲唯」

【暴厲】バウレイ　あらあらしくはげし。唐書、張公素傳「性――、眸子多レ白」

【暴横】バウワウ　あらあらしくしてほしいまま。後漢書、馮異傳「今諸將皆壯士、崛起多二――一」＝横暴。

【暴肌】バウキ　はだへをあらはしさらす。斐務文「沾レ體――」

【暴骨】ボウコツ　骨を原野にさらす。左傳「――以還、不レ可二以爭一」

【暴師】バウシ　軍隊を日光、雨露にさらす、兵を原野に露營させる。漢書、樊噲傳「――二翻上一以待二大王一」

【暴虎】バウコ　野ざらしになる。韓詩外傳「召伯――二遠野一」

【暴虎馮河】バウコヒヤウカ　虎を手打ちにし、黃河をかちわたりす、無謀の冒險をいふ。論、述而「子曰、――、死而無レ悔者、吾不レ與也」

【暴恣】バウシ　てあらくほしいまま。蘇軾詩「古人難二――一、作レ事今世驚」＝暴横。

【暴疾】バウシツ　○あらくはやし。詩經、箋「既覓日風矣、而又――」○にはかに發したる病。唐書、李勣傳「嘗――」＝暴病。

【暴秦】バウシン　亂暴なる秦國。漢書、陸賈傳「賈曰、皇帝起二豐沛一、討二――一誅二强楚一、自二天地剖判一以來、未二始有一也」

【暴滬】バウシン　はげしき下痢。

【暴狀】バウヤウ　亂暴なるありさま。

【暴食】バウシヨク　むやみにくらふ。＝馬食。

【暴政】バウセイ　暴虐なる政事。

【暴漲】バウチヤウ　みなぎる。宋史、陳堯佐傳「每二汾水――一、州民輒憂擾」＝暴溢。

【暴徹】バウテツ　あらきかたき。魏書、高閭傳「――輕侵、則設二防固一以禦之」

【暴殄】バウテン　あらしほろぼす、殄は絕。書、武成「――二天物」

【暴徒】バウト　亂暴なるふるまひをするともがら。

【暴怒】バウド　あらあらしくいかる。

【暴動】バウドウ　亂暴なるふるまひ。＝暴擧。

【暴騰】バウトウ　物價がにはかにたかくなる、にはかに騰貴する。

【暴風】バウフウ　にはかに起る貌。荀、富國「――如二水源一」

【暴風】バウフウ　あらきかぜ。禮、月令「孟冬行二夏令一、則國多二――一」

【暴風雨】バウフウウ　おほあらし、大風大雨。

【暴富】バウフフ　にはかにかねもちとなる、にはか分限、なりきん。瑯嬛記「王豐爲二駿城令一、治レ民有レ法、民多雅」

【暴露】バウロ　あらあらしくさらす。後漢書、崔駰傳「――一レ體於世、因以于レ誅」

【暴著】バウチヨ　○めだちてあらはれる。唐書「政績――、善治二律令一」○知れる、發覺する。後漢書、竇融傳「皆近事――」＝顯露。

【暴露】バウロ　○あらはる、露は顯。○風日雨露にさらされる。戰國策「終身、――於外」

【暮】ボ　遇　莫に作る

○くる、日沒して冥くなる「朝――」「薄――」史、伍子胥傳「吾日――途遠」○ひぐれ、ゆふべ（夕）よる（夜）「――夜」○轉じて年の末「歲――」又、年が寄る、老いる「――年」「衰――」屈原、離騷「恐二美人之遲――」○おそし（晩）○圓月日を送る、生計をいとなむ。

【暮雀】ボジヤク　ゆふぐれのからす。高適詩「門柳蕭蕭――――」＝晚鴉。

【暮靄】ボアイ　ゆふぐれのもや。杜牧詩「――生二深樹一、斜陽下二小樓一」

【暮陰】ボイン　ゆふぐれのかげ。謝莊詩「夕天霧二晚氣一、輕靄澄――――」

【暮羽】ボウ　ゆふぐれの鳥。王褒詩「空林鳴――、虛谷應二朝鐘一」＝暮禽、暮鳥。

【暮雨】ボウ　ゆふぐれのあめ。李夢詩「山驛秋雲冷、江帆――低」

【暮雲春樹】ボウンシユンジユ　遠く隔たりたる友

を思ふ情にいふ。杜甫、春日懷二李白一詩「渭北春天樹、江東日暮雲、何時一樽酒、重與細論文」＝渭樹江雲。

【暮烟】ボエン 次條に同じ。

【暮煙】ボエン ゆふけむり。呂溫詩「鳥聲隔二一一一」

【暮夏】ボカ なつのすゑ。＝晩夏。

【暮笳】ボカ 日ぐれに吹く胡笳の聲。劉長卿詩「一一吹二塞月一、曉甲帶二朝霜一」

【暮靄】ボアイ ゆふぐれのもや。王昌齡詩「一一照二新晴一」

【暮角】ボカク ゆふかたに吹く角笛のね、角は軍中にて用ふる樂器。劉禹錫詩「岳陽樓頭一一絕、蕩漾巳過君山東」

【暮景】ボケイ ゆふぐれの日かげ。傅亮、感物賦「在二四成之一一、肅二皇命于禁中一」

【暮禽】ボキン ゆふぐれの鳥。王維詩「一一相與還」＝暮鳥。

【暮景】ボケイ ○日暮の景色。杜甫、送二李卿一詩「一一巴蜀僕、春風江漢清」○老境をいふ。宋史「修途一一、力不レ逮レ心」＝老景。

【暮鼓】ボコ 日暮に鼓をうち時を報ずる。王貞白、長安道詩「曉鼓人已行、一一人未レ息」

【暮歲】ボサイ ○年のくれ。白居易詩「一一風動レ地、夜寒雪連レ天」＝歲暮。○老年。謝靈運詩「申二遠期于一一」＝暮年。

【暮山】ボザン ひぐれのやま。王勃、滕王閣序「淦水盡而寒潭清、極光凝而一一紫」

【暮思】ボシ 夕暮に思ひかなしむ。劉長卿詩「帝子不レ可レ見、秋風來二一一」＝暮情。

【暮齒】ボシ 老年に同じ。方干詩「一一甘二衰謝一、逢レ人惜二別離一」＝暮齡。

【暮秋】ボシウ あきのすゑ。梁元帝纂要「九月月二一一」＝晩秋。

【暮悲】ボシ くれがたの寂しき物おもひ。砌詠詩「悽然多二一一」

【暮商】ボシャウ 陰曆九月の異名。商の音は秋に屬するが故。梁元帝纂要「九月曰二一一、亦曰二季商一」＝暮秋。

【暮春】ボシュン はるのすゑ。詩、大雅「維暮之春、亦又何求」＝莫春、晩春。

【暮鐘】ボショウ くれのかねのね。章應物詩「秋山起二一一、楚雨連二滄海一」＝夕鐘、晩鐘。

【暮色】ボシク 日ぐれのけしき。柳宗元、始得二西山一宴游記「蒼然一一自遠而至」

【暮雪】ボセツ ゆふ方のゆき。沈約、桐賦「枝封二一一、葉映二蓋虹一」

【暮節】ボセツ ○陰曆十二月の異名〔初學記〕○九月九日（重陽）の異名。白居易詩「一一感二茱萸一」

【暮砧】ボチン よるうつきぬた。杜甫、秋興詩「寒衣處處催二刀尺一、白帝城高急二一一」

【暮潮】ボチウ ゆふしほ。劉長卿詩「畫角知二秋氣一、樓船逐二一一」

【暮天】ボテン ゆふぐれのそら。杜荀鶴、題二新雁一詩「一一新雁起二汀洲一、江墓花疎水國秋」

【暮年】ボネン 老いたる年。魏武帝詩「烈士一一、壯心不レ已」宋書、范泰傳「一一事レ佛甚精」＝晩年、暮齒、晩節。

【暮帆】ボハン 日暮に帆をかけて行く舟。李頎、題二葉母校書朋業一詩「行客一一遠、主人庭樹秋」

【暮雨】ボウ くれごと、毎夕。宋玉、高唐賦「朝朝一一、陽臺之下」

【暮夜】ボヤ よる。後漢書、楊震傳「一一無二知者一」＝莫夜。

【暮齡】ボレイ 年に同じ。齊書、劉善明傳「惡レ色憎レ聲、一一尤甚」＝晩年、暮齒。

【暮陸二肥馬塵一】ボリクニヒバジン 富貴の人にへつらふ義。杜甫詩「朝扣二富兒門一、一一」

十二畫

【曀】エイ・アイ

眞 厲 霽

○かざす、おほふ（翳）○くもる（陰）くらし「陰一」○くもりてかぜふく（陰而風）詩、邶風「終風且一」

【曀曀】エイエイ 日光をおほひ翳して くらき貌。詩、邶風「一一其陰」

【曀曀】エイエイ くもりて吹くかぜ。爾雅「陰而風爲二一一」

【曄】エフ・イフ

葉 緝

○てる、ひかる、かがやく（光）「赫一」○あきらか（明）○いなびかり（震電）いなづまの閃く貌。後漢書、張衡傳「列缺一其照レ夜」列缺は震電。○一一は盛んなる貌。

【曄煜】イエフ さかんなる貌。班固、東都賦「鐘鼓鏗鈞、管絃一一」

【曄晔】エフ ○かがやきて盛んなる貌。漢書、敍傳「世宗一一、思レ弘二祖業一」＝曄然。○ひかりてつやある貌。四皓歌「一一紫芝、以可レ療レ饑」

【曄然】エフ 盛んなる貌。馬融、長笛賦「奄忽滅沒、一一復ず」

【暨】キ

未 置

○と、ともに（與）左、昭七「一一齊平」書、堯典「汝羲一一和」○あづかる（與）書、禹貢「朔南一一聲教」○および、および（及）史、始皇紀「東至二海一、一一朝鮮」○いたる（至）○一一はたけくいさましき（果毅）貌。禮、玉藻「戎容一一」○日顏る見ゆ、あらはる。

【曉】ケウ・ゲウ

麻

○あかつき、あけぼの、よあけ（曙）「清一」○遇ふ。○あきらか（明）○しる（知）さとる（通）「通一」さとす（喻）「一一喻」教へ知らしめる。史、西南夷傳「指二一南越一」○まうす（白）漢書、元后傳「未一一大將軍」○とく（說）○さとし（慧）

【曉】ケウ 曉・覺・悟・喻・了の別は覺（見部十三畫）の條を見よ。

【曉】ケウ あけがらす。蘇軾詩「吹笛墮二秋葉一、讀書隨二一一一」＝曉鴉。

【曉】ケウ あさのもや。徐彥伯詩「青潭一一鎖二仙蹤一」

【曉】ケウ あけがらす。羅鄴詩「夢斷南窗啼二一一」＝曉鶯、曙鶯、曙烏。

【曉】ケウ あさの間のひま。王勃賦「酌二丹墀之一一、候二青禁之宵餘一」

【曉】ケウ あかつきのもや、あさやけ。皇甫曙詩「朝旦微風吹二一一、散爲二和氣一滿二家家一」

【曉】ケウ さとり知る、あきらかにする。左傳「明允篤誠」疏「明者達也、一二一事務、照二見幽微一也」

【曉】ケウ あかつきに鳴る角笛の音。沈佺期詩「將軍聽二一一、戰馬欲二南歸一」

【曉】ケウ あかつきに見る。杜甫詩「一一紅濕處、花重錦官城」

【曉】ケウ 朝早くおきる。溫庭筠詩「一一動二征鐸一」＝早起、夙興、晨起。

【曉】ケウ よあけのあかり。蘇頲詩「一一雲外洗、晴色雨餘滋」

【曉】ケウ さとしをしふ。埤雅「故鶏鳴一二、以一一之」

【曉月】ケウ あけがたのつき。沈佺期詩「一一臨レ窗近、天河入レ戶低」

【曉悟】ケウ さとる。さとす。列子「窮年不二相一一一」＝了解、曉解。

【曉】ケウ あかつきを報ずるつづみのおと。李咸用詩「一一軍容肅」五代史、司天考「顯德元年正月庚寅、有二大星一墜有レ聲如レ雷、牛馬皆逸、京城以爲二一一、皆伐レ鼓以應レ之」＝曙鼓。

【曉】ケウ さとしつぐ。北史、韋珍傳「一一悉以二酒脯一代用」

【曉】ケウ あさのけしやう。沈佺期詩「斜光映二一一」

【曉】ケウ あかつきのしも。謝靈運詩「一一楓葉丹」＝晨霜。

【曉】ケウ あけがたのやま。杜甫詩「鼓角悲二荒塞一、星河落二一一一」＝曉峯、曉巒。

【曉】ケウ あかつきのあられ。梁簡文帝詩「一一飛二銀礫一、浮雲暗未レ開」

【曉】ケウ さとししめす。魏書、王澄傳人「二一情禮一」＝諭示、曉諭

【曉】ケウ さとりならふ。後漢書「每存二愛濟一、又一二一遺事一」

【曉】ケウ あけがたのあかるき色。孟郊、送レ人詩「一一奉二明月一、征人逐二軍勳一」

【曉】ケウ あかつきのほし。張嘉貞詩「潭將二春雪一比、文共二一一一連一」＝晨星。

【曉】ケウ あけがたの雨あがり。皇甫曾詩「一一心始安、林端見二初旭一」＝晨霽。

【曉】ケウ あさと、ゆふべと、あさばん。漢書「一一號泣」＝朝夕、晨夕。

【曉】ケウ あけがたのゆき。溫庭筠詩「綠鬟參差殘二一一一」

【曉】ケウ よあけの時刻、よあけを告げるとき。箭は漏刻の壺の中の矢、時刻を示すもの。杜甫詩「五夜漏聲催二一一一」

【曉】ケウ あきらかに通ずる。南史、沈攸之傳「二一吏事一、自强不レ息」＝曉暢、曉通、通達。

【曉】ケウ あけがた。戴良詩「一一發二東膠一、落景次二高密一」

【曉】ケウ 明かにさとり通ずる、通達する。蜀志、諸葛亮傳「二一軍事一」＝曉達。

【曉】ケウ あけがたのそら。陳子昂詩「明月墜二高樹一、長河沒二一一一」

【曉】ケウ あさひ。劉宰詩「要レ上二扶桑一看一一一」＝旭日、朝暾、晨曦。

【曉】ケウ あさめし。岑參詩「夜眠楚煙濕、一一湖山寒」

【曉】ケウ あきらかにさとす。後漢書「一二一曲直一、退無二怨者一」＝曉喻。

【曉】ケウ あかつきのかぜ。唐明皇詩「馬色分二朝影一、雞聲逐二一一一」

【曉】ケウ あさの讀經のこゑ。陸龜蒙詩「一一陽烏當二石磬一」

【曉】ケウ よあけのきり。章應物、對レ雨詩「颯至池館涼、霧然和二一一」

【曉】ケウ さとす。漢書「欲三以一一衆庶一、不二亦難一乎」＝曉諭、曉諭。

【曉】ケウ ○前條に同じ。○〔詔〕告示文。

【曉了】ケウレウ 明かにさとる。淨住子「一因緣法」＝了解。

【曉】ケウ あさのつゆ。白居易、荷珠賦「宿雨霽而猶在、一一裊而正鮮」

【曉】ケウ あけがたの水時計（漏刻）の聲が聞える。梁武帝、閨閣篇「期門一一」

【曉】ケウ あさめし。

【曉】ケウ 煙濕、一一湖山寒」

【遲】チ

○ひのぼる（日光升）ひので。○羅は國名、亞細亞の東南に位し、緬甸の東、安南の西に在り。

【曙】ショ

○暖一は明かならざる貌、く

ちし（暗）○おほふ。○かざす（翳）

【曇】 ドン 覃

○くもる、雲が天に布ゞく。晴の反對。○くもり。○黑雲の貌。○瞿―クは釋迦の稱。○國クヤリはっきりせぬ、光がほんやりする、つやが失せる「鏡が―る」

【曇曇】ドンドン ○黑雲の貌。江淹詞「海外陰兮氣――、江上月兮光灼灼」○くもる貌。鮑照賦「望二波際一兮――」

【曇華】ドンゲ ○多年生草、莖高さ四五尺、夏月花開く、色紅黃にして甚だ美なり、月を經て謝せず、一名、美人蕉。○優―の略稱。

【曇天】ドンテン くもりたるそら。晴天の對。

【曈】 トウ 東

○ひので（日出）○―曨は日が明かならんとする貌。李商隱詩「鳳池春瀲灩、雞樹曉―曨」轉じて心情の明かになりかかる貌。陸機、文賦「情―曨而彌鮮」

【曈曨】トウロウ 日の明かならんとする貌。李商隱詩「海日高――」

【曉】 トン 元

あさひ（旭）「朝―」「曉―」「海―」ひので（日始出）楚辭、九歌「―將出兮東方」＝暾。

【曉曉】トントン ○日光の圓滿なる貌。岑參詩「風暖日――」○火の光の盛んなる貌。唐書、五行志「火精赤―飛來」

【曚】 レウ 蕭

曚とは別

あきらか（明）

【曆】 レキ リャク 錫

歷に通ず

○こよみ、日月星辰の運行を推算して季節、時令を定める法「日―」「新―」「舊―」又其の定めたる法の記錄。○まはりあはせ（運命）「一數」「一命」○年壽、壽命。○年代。漢書、諸侯王表「周過其―、秦不及期」○日月星辰の行度。○としつき（歲月）○日記。○かず（計數）○かたどる（象）「一象」

【曆紀】レキキ こよみ、日月が天に行曆して、二十八宿三百六十五度の分紀を生ずる義。素問、上應二天光星辰―――」

【曆官】レキカン こよみの事をつかさどる役人。＝曆正。

【曆日】レキジツ ○こよみ。事物紀原「物理論曰、曩昔神農正二節氣一、奪二寒溫一、以爲二旱晚之期一、故立―――」○こよみにて定められたる日。太上隱者詩「山中無二―――一、寒盡不知年」

【曆象】レキシヤウ ○こよみを推し天文を觀る、象は天文を觀察する器。書、堯典「―――日月星辰、敬授二人時一」○日月星辰の稱。易經「―――謂二日月星辰一也」

【曆書】レキショ こよみに關する書。史記、自序「作二―――第四一」＝時憲書。

【曆數】レキスウ ○こよみ。書經「五曰―――」○帝王相繼ぐ、まはりあはせ（運命）論、堯曰「天之―――、在二爾躬一」

【曆正】レキセイ 曆官に同じ。左傳「鳳鳥氏―――也」

【曆年】レキネン ○としつき、歲月。○こよみにて定めたる一年、太陽曆にては三百六十五日。

【曆法】レキハフ こよみのつくりかた。唐書、曆志「―――尚矣」

【曆尾】レキビ こよみの終。宋祁詩「―――無二餘日一」＝歲除。

【曆命】レキメイ 曆數と天命と、運命の轉。文選、辨亡論「―――應レ化而徵、王師既レ運而發」

【曖】 アイ 十三畫 隊

○おほふ（覆）日が明かならず。○かざす（翳）おほひかくす「隱―」○晻―は暗ゥき貌。

【曖曖】アイアイ くらき（昏昧）貌。晏子春秋「星之昭昭、不レ如二月之―――一」

【曖乎】アイコ 情意のこもれる貌。韓非子「明君之行レ賞也、―――如二時雨一、其行レ罰也、畏乎如二雷霆一」

【曖然】アイゼン うす暗き貌。沈佺期詩「―清軒蕭、浩思非レ所レ任」

【曖噫】アイイ おほふ、おほはれてくらし。

【曖昧】アイマイ あきらかならず、物のまぎらはしきにいふ。晉書、杜預傳「不レ敢以―――之見一自取中後累上」

【曦】 ギ 十四畫 微

○さきに、以前、前日（往、昔）＝向嚮。○むかふ。＝向。○あきらか（明）明かにす。莊、秋水「證―古今」

【鄉者】キヤウシヤ 前日の轉。呂覽、觀表「―――右宰穀臣之觴二吾子一也」

【曜】 ヨウ 十四畫 嘯

○ひかり、かがやき、ひのひかり（日光）○かがやく、ひかる（耀）○てる（照）○日月星の總稱。日・月と火・水・木・金・土の五星

とを日にわりあてて呼ぶ稱「日―」「水―」又其の七―日卽ち七日間を一週間といふ。○靈―は天をいふ。―靈は日の別稱。

【曜威】ヨウカヤクカム 威光をかがやかす。東京賦「三農之隙、―――中原」

【曜煜】ヨウイク ひかりかがやく。梁簡文帝詩「雕梁紛―――」＝炳煜・照曜・晃曜。

【曜曜】ヨウヨウ 光のかがやく貌。顏延之、郊祀歌「遙輿遠駕、―――振振」

【曜魄】ヨウハク 北斗星。尙書大全「北辰謂二―――一」

【曜野】ヨウヤ のにかがやく。王粲文「揚レ輝吐レ火、―レ蔽レ澤」

【曜靈】ヨウレイ 日、太陽。楚辭、天問「角宿未レ旦、―――安藏」

【曛】 クン 文

○夕日の光（日入餘光）○赤黃色。○日がくれる。李華、弔古戰場文「風悲日―」○ひぐれ、たそがれ（黃昏）謝靈運詩「夕―風氣陰」

【曛靄】クンアイ ゆふやけ。＝晚靄。

【曛黃】クンクワウ たそがれ。南史、朱异傳「酣二飲其中一、每迫二―――一」＝黃昏・日暮・曛夕・纁黃（楚辭）

【曛黑】クンコク 日くれてくらし。舊唐書、李渤傳「時已―――、不レ問二色目一」

【曛日】クンジツ ゆふひ。謝靈運詩「夕慮曉月流、朝忌―――馳」＝夕陽・落暉・斜照。

【曛霧】クンム 黃色を帶びたるきり。鮑照詩「―――蔽二九天一」＝黃霧。

【曙】 ショ 御

○あけぼの、あかつき（曉）あした（旦）夜のひきあけ「拂―」○あける、夜があける、東方明か。

【曙鵝】ショガ あけがらす。楊巨源詩「唯有二懷鄉客一、東飛羨二―――一」＝曉烏・曉鵝。

【曙驚】ショキヤウ よあけになくうぐひす。李頎、宿二香山寺一詩「東林―――滿、惆悵欲二言旋一」＝朝鶯・曉鶯・晨鶯。

【曙烏】ショウ あけがらす。宋之問詩「採レ花驚二―――一」＝曉烏。

【曙影】ショエイ あけぼのの日かげ。王褒詩「―――初分レ地、暗色始成レ光」＝曙色。

【曙戒】ショカイ あさはやく起きて終日の戒をする。管子「―――勿レ怠」

【曙更】ショカウ あけがたの時刻。錢起詩「引滿不レ辭レ醉、風來傳二―――一」＝曙漏。

【曙曉】ショギ あさひ。陳沂詩「天門開二―――一」＝朝曉。

【曙光】ショクワウ ○あけぼのひかり。岑參詩「雞鳴紫陌―――寒、鶯囀皇州春色鬧」＝曙色・曙暉・曉光。○國善き物事の來らんとするきざし「平和の―――」

【曙月】ショゲツ あけがたのつき。王維詩「―――孤鶯囀、空山五柳春」＝曉月。

【曙笠】ショゴ よあけののち。方干詩「―月華猶冷濕」

【曙日】ショジツ あさひ。王褒詩「平湖開二―――一、細柳發二新春一」＝曉日。

【曙鐘】ショショウ よあけのかねのね。李嶠、餞二駱四一詩「星月懸二秋漢一、風霜入二―――一」＝曉鐘。

【曙星】ショセイ あけがたのほし。方干詩「―――沒盡提レ網去」

【曙雪】ショセツ よあけのゆき。李頎詩「千巖―――旌門上」＝曉雪。

【曙風】ショフウ よあけのかぜ。江淹詩「戾戾―――急」＝曉風。

【曙飆】ショウ よあけのつむじかぜ。劉永之詩「雪色征袍拂二―――一」

【曙野】ショヤ よあけののべ。王勃、採蓮賦「凝二―――之絳氣一、愛二晴天之碧雲一」

【暴】 ボウ 東 覺

暴（日部十一畫）の本字。

【曚】 モウ 東 董

くらし、日未だ明かならず。

【曚昧】モウマイ ○くらし。蜀志、鄧正傳「昔在鴻荒、―――肇初」○月がくらし。＝曚昧（祭邕、瞽師賦）

【曚曨】モウロウ 日の光未だ明かならず（集韻）

【曠】 クワウ 十五畫 藥

○あきらか（明）障礙物無くして明かなる貌。後漢書、竇融傳「―如發蒙」○ひろし（豁）「開―」「宏―」○むなし（空）「空―」○大いなり。○むなしくす、あける、からにする。孟、離婁「―」安宅不レ居」缺く。むだにする「―官」「―職」○すたる、すつ（廢）○男子の壯年にして妻なきもの「―夫」○とほし（遠）○ひさし（久）「久―」「―久」

同訓異義 曠・空・虛の別は空（穴部三畫）の條を見よ。

【曠夷】クワウイ ひろくしてたひらか。唐書、賀知章傳「性―――、善二談說一」

【曠衍】クワウエン うち開けてひろし。劉歆文「高巒峻阯、臨眺―――」

【曠恩】クワウオン 廣大なるめぐみ。郭璞、南文「官―覃―――、徧暨二攀品一」

【曠海】クワウカイ ひろきうみ。薛能詩「唯恩―――無二休處一」

【曠快】クワウクワイ ひろくして心よし。幽游

時、「耳目差―」

【曠懷】クワイ　ひろき心。又、心をひろくす。杜甫詩「――拂二氣翳一」

【曠曠】クワウクワウ　ひろびろしたる貌。史、日者傳「天地―」

【曠郎】ロウ　ひろく大いなり。白居易詩「――了如レ空」

【曠官】クワウクワン　官職を怠りてむなしくする。韓愈、諍臣論「冒進之患生、―之刺興」

【曠原】ゲン　ひろびろしたるはら。穆天子傳「自二四王母之邦一、北至二于―之野」＝曠野。

【曠古】コウ　古を空しくする。前例の無き義。＝未曾有・空前。

【曠歲】サイ　年月をむなしく過ごす。又、久しき歳月。朱熹詩「―――一登歴」＝曠年。

【曠士】シ　心ひろくしてゆったりと自得せる士。李白詩「所レ貴―懷、朗然合二太清一」

【曠日持久】ヒジクウ　ながくもちこたへる。漢書、韓信傳「曠日持レ久、糧食單竭」

【曠日彌久】ビヤウ　空しく日を過ごして久しきにわたる、事のながびくにいふ。史、刺客傳「太傅之計、――、心惛然、恐不レ能二須臾一」

【曠職】シヨク　○職務を怠りて空しくす。＝曠官。○官職の缺けたるまま置く。北史、薛端傳「設レ官分レ職、本庶二時務一、苟非二其人一、不レ如二―一」

【曠世之度】ドクワイ　曠は空、當世にたぐひなしと自負する程の大いなる度量。晉書、郗超傳「卓犖不羈、有二――一」

【曠絶】ゼツ　むなしくたゆ、後がなくなる。江淹、傷二友人一賦「叔世而―」

【曠代】ダイ　曠世に同じ、一世を空くしてならぶものなし。陸游、賀二游蟲正旦表「以二父子之親一、而行二堯舜―之事」＝絶代。

【曠蕩】タウ　ひろびろしたる貌。後漢書、馬融傳「堈場區宇、恢昭―」黄庭堅詩「人生要二得意一、壯士多―」

【曠逸】イツ　心ひろくして通達する。晉書、張翰傳「時人貴二其―一」

【曠淡】タン　次條に同じ。晉書、王述傳「但―、微不レ及耳」

【曠澹】タン　心ひろくして淡泊。武少儀文「恰心―、篤志廉直」＝曠淡。

【曠士】シ　むなしくあらして、耕作せざる地。禮記「無二―一、無二游民一」漢書、食貨志「朝無二廢官一、邑無二敖民一、地無二―一」

【曠度】ドクワイ　ひろき度量。梁肅、慕銘「融融和風、緯緯―」＝宏量・廣度。

【曠年】ネン　久しき歳月。東晉文「―果稔、不レ墮二其志一」＝曠歲。

【曠廢】ハイ　なむしくすたる。又、すたれたること。宋史、禮志「太宗尚二儒雅一、勤二於政事一、修二明典章一、大抵―一舉矣」

【曠放】ハウ　心ひろくほしいまま。晉書「向秀曰、嵇意遠而疎、呂心曠而放」＝不羈。

【曠望】バウ　ひろきながめ。高適詩「迢遞溟海際、―滄波開」

【曠邈】バク　ひろくとほし。楊炯賦「佇二閒庭之―一」＝茫漠。

【曠夫】フ　曠は空、壯年にして妻なき男。孟、梁惠王「內無二怨女一、外無二―一」

【曠碧】ヘキ　ひろくしてあをし。沈亞之、乞巧文「天―以凝レ暮」

【曠野】ヤ　ひろびろしたるのはら。詩、小雅「匪二兕匪一虎、率二彼―一」＝曠原。

【曠朗】ラウ　ひろびろとほがらかなり。晉書、張華傳「野―而無レ塵」

【曝】

暴（日部十一畫）の俗字。

【曝衣】イ　衣を日光にさらす。項斯詩「船裏誰鳴レ鼙、沙頭自―レ―」

【曝書】ショ　書物のむしぼし、土用干。シ四民月令「七月七日、曝二經書及衣裳一、不レ蠹」＝曬書。

【曝背】ハイ　○せなかを日にさらす。南史「小人常日―レ、此不レ足レ爲レ勞」○せなかを日光にて煖める。蘇軾詩「―談二金鑾一」

【曝露】ロ　風雨にさらさる。杜甫詩「―墻壁外」＝暴露。

十六畫

【曦】

ギ　支

○日のいろ（日色）○日のひかり（日光）「丹―」「朱―」「赫―」「朝―」「曙―」

【曦光】クワウ　日のひかり。韓愈詩「―霧二曦物一、景耀鑠二寶殿一」

【曨】

ロウ　東

○ひので（日出）○くらし、瞳―はほのぐらし、日の明かならんとする貌「曚―」

【曨曨】ロウ　うすぐらき貌。劉孝威詩「―隔二淺紗一、的的見二林華一」

十七畫

【曩】

ダウ　養

○さきに、前日。＝嚮・嚮。○むかし（既往・前者）○ひさし（久）

【曩勤】ナウ　さきにたてたるいさを。陸機文「知二―之可レ矜」

【曩時】ナウ　曩日に同じ。賈誼、過秦論「非レ及二―之士一也」

【曩日】ジツ　さきのひ、さきごろ。梁簡文帝文「北寰無レ山、豈自高二于―一」＝曩時・曩昔。

【曩者】シヤ　さきの日。者は助辭。左、襄二四「―志レ入而已」＝曩昔・昔者・前者。

【曩昔】セキ　さきの日。思菟賦「追二思―遊宴之好一、感二恩而嘆」

十九畫

【曬】

サイ　紙　卦　俗に省きて晒に作る

さらす（暴）日にて物を乾す。

【曬書】シヨ　書物を日にさらす、蟲干。世說「郗隆、七月七日、見二富家皆曝二衣帛一、卽出日中仰臥、人問二其故一、曰我曝二腹中書一耳」＝曝書。

二十畫

【曭】

タウ　養

くらし（日不明）

曰　部

【曰】

エツ　月　曰は正字

○いふ（云）いはく、口を開きてものいふ。○斯く言はれてある。孟、滕文公「魯頌―、戎狄是膺」○のたまふ、のたまはく、いふの敬語。○まをす、まをさく。○となふ（稱）○ここに（發端之辭）詩、秦風「我送二舅氏一至二渭陽一」また―若と連用するも同じ。＝聿・粤。

解字詞なり、口に从ふ乙の聲、亦口气の出づるに象る。

同訓異義　曰・言・謂・云・道の別は言（部首七畫）の條を見よ。

【曰雖言】ガイハクイヒ　自ら答へていふ、決してたやすく口にて述べがたし。孟、公孫丑「敢問、何謂二浩然之氣一、――也」

【曰若】ニヨ　發語の辭。書、堯典「―稽二古帝堯一」

二畫

【曳】

エイ　霽

○ひく（牽引）引きよせる。○ひきずる。詩、唐風「子有二衣裳一、弗―弗婁」

同訓異義　曳・牽・引・挽・援・延・惹・彈・搜・曳の別は牽（牛部七畫）の條を見よ。

【曳牛】ギウ　うしをひく。北史、伊馱傳「馱少勇健、走及二奔馬一、善射、力―レ卻行」＝牽牛。

【曳裾】キヨ　もすそを地にひきずる。鄭陽文「曳二長裾一、飛二廣袖一、奮二長纓一」漢書「飾二固陋之心一、則何王之門、不レ可レ曳二長裾一乎」

【曳杖】ヂヤウ　つゑをひく。禮記「孔子蚤作、負レ手―レ、消二搖于門一」

【曳白】ハク　紙筆を手にするも、文を作ること能はざるをいふ。唐書、苗晉卿傳、李林甫爲二尚書一、以二詮事一、委二者・前者。

【曲】キヨク　○まがる、まがる。直の反對。○かがまる「屈―」「―折」ゆがむ。○よこしま、ねぢけ「邪―」「姦―」○つぶさに、ことわけ。○す（薄）養蠶の器、す（簀）史、周勃世家「勃以織二薄―一爲生」○えびら。○ふし、音樂のふし「音―」「樂―」○くま（隈）すみ（隅）かたるなか（僻地）「鄉―」

【曲引】キヨクイン　音樂のふし（嵇康、琴譜）

【曲影】キヨクエイ　まがれるかげ。史、平津侯傳「未レ有下樹二直表一而得二―一者上也」

【曲下】キヨクカ　ふしひくし。陸機文「徒悅レ目而偶レ俗、固摩高而―」

【曲解】カイ　事實をまげてときあかす。正解の反對。

【曲學阿世】アセイガク　邪曲の學問を修めて、世俗におもねる。史、儒林傳「轅固之徵也、薛人公孫宏亦徵、側レ目而視レ固、固曰、公孫子務二正學一以言、無二曲學以阿レ世」

【曲鞫】キヨクキク　つぶさに事情を問ひきはめる。鞫にしらべる。張融、答二周顒一書、欲三必二―其辭一」

【曲籠】キヨクロウ　細微なることにつつしむ。宋史「平居無事、小廉―、似レ可レ無過」

【曲藝】ゲイ　○小さき技能。元稹詩「―爭二工巧一」○圖さまざまの變りたる藝、かるわざ。

【曲言】ゲン　それとなく意味を含ませて說くことば。直言の對。子華子「太古之聖人所二以範レ世訓レ俗者、有二直言者一、有二―者一」

【曲線】セン　いささかなるきらひ。何承天文「盛明之世、事從二簡易一、―細忌、皆應二蕩除一」＝細線・小線。

【曲肱之樂】ハククワウシノ　貧しき中にて道を樂む。論、述而「子曰、飯二疏食一、飲レ水、曲レ肱而枕レ之、樂亦在二其中一矣」

【曲士】シ　○鄉曲ナウキヨクの人。莊子「―不レ可二以語一於道一者、束二於教一也」○心のよこしまなる人。柳宗元、與二大學諸生一書「繩墨之側、不レ拒二枉材一、而儒之席、不レ拒二―一」

【曲私】シ　ねじけてよこしま。荀子「志不レ免二于―一」＝私曲。

【曲壺】キョク　こまごまとときつくす。北史、王昕傳「摹二擬倉楚一、一二風制一」

【曲樹】キョクシュ　をりまげて造りしうてな。李父詩「一一廻廊繞レ淵幽」

【曲浦】キョクホ　まがれる浦。儲光羲、游湖詩「荊溪多二一一、乘レ興莫二先歸一」＝曲浦。

【曲繩】キョクジョウ　のりをまげる。晉書、熊遠傳「姫公不レ一二一于天倫」

【曲水流觴】キョクスイリウショウ　曲折せる水流に盃を泛べて飲む、三月三日の酒宴。晉の永和九年三月三日、王羲之、文人を會稽山陰の蘭亭にあつめ此の遊を爲す。其の蘭亭集序「此地有二崇山峻嶺茂林脩竹一、又有二清流激湍一、映二帶左右一、引以爲二流觴曲水一」

【曲成】キョクセイ　變に乘じ物に應じてつぶさにひとつびとつになす。易、繫辭「範二圍天地之化一而不レ過、一二一萬物一而不レ遺」

【曲尺】キョクシャク　○かねざし。四書大全辨大學序「句股之術、如二今木匠一一」○直角にまがれる形。王周石詩「卻見長江一一流」＝矩形。

【曲折】キョクセツ　○をれまがる。○こみいりたることがら。史、李將軍傳「衞青欲三上書報二天子失レ軍一一」

【曲説】キョクセツ　一方にかたよりて正しからざる議論。管子「可二以一一、而不レ可二以廣擧一」

【曲全】キョクゼン　よくまがりて後にまったきを得との老子の教。老子「曲則全」後漢書「老氏一一、進レ道若レ退」

【曲常】キョクジョウ　つぶさにことごとくあたる。荀子「其餘雖二一一、猶將レ無レ益也」

【曲知】キョクチ　一隅のみを知りて大道に通ぜざる義〔荀子〕

【曲暢】キョクチョウ　つぶさに通達する。朱熹、大學序「一一旁通」

【曲直】キョクチク　まがれると、なほきと。書經、傳「木可三以揉二一一一」＝正邪・善惡。

【曲聽】キョクテイ　まげて人の説に從ふ。漢書、游俠傳「夜見二仇家一、仇家一一」

【曲躅】キョクテウ　晉曲のてゝし。白居易、琵琶行「未レ成二一一先有レ情」

【曲磴】キョクトウ　まがりくねりたる石段。何景明詩「鉤レ雲盤二一一、沿レ月遡二廻溪一」

【曲突徙薪】キョクトツシン　火災を豫防するために煙突をまげ、薪を他へ移す、わざはひを未發に防ぐ義。漢書、霍光傳「曲レ突徙レ薪亡二恩澤一、焦レ頭爛レ額爲二上客一耶」

【曲馬】キョクバ　圖馬を使ひてするげい、きょくのり。

【曲房】キョクバウ　まがりくねりたる密室。枚乘文「縱二恣乎一一隱閉之中一」

【曲庇】キョクヒ　道理をまげて人をかばふ。宋史、納二厚賂一、一二一之一」

【曲眉】キョクビ　まがりてうつくしきまゆ。韓愈、送二李愿一序「一一而豐頰、清聲而便體」

【曲筆】キョクヒツ　事實をまげて書く。後漢書、臧洪傳「晏嬰不レ降二志于白刃一、南史不二一一一以求二存」

【曲阜】キョクフ　山東省兗州府の縣名、太古の神農氏及び魯の周公旦の都、又孔子闕里の古地、洙泗兩水其の北を流る、縣城内に孔子の廟庭墳墓あり。

【曲譜】キョクフ　謠物ウタヒモノ又音樂の調子の抑揚高低を記したるもの。＝樂譜。

【曲僻】キョクヘキ　よこしまにしてかたよる。

【曲浦】キョクホ　まがれる入江。薛道衡詩「一一騰二煙霧一、深浪駭二鯨鱗一」

【曲木】キョクボク　まがれる木。說苑「樹二一一者、惡得二直景一」

【曲踊】キョクヨウ　上に向ひてをどる。左傳「一一三百」陸龜蒙詩「四夫能二一一、萬騎可二橫行一」

【曲禮】キョクライ　こまかなる禮式。禮記、釋文「一一、委曲說二禮之事一」又、それを記せし禮記の篇名。

【曲柄】キョクヘイ　椅子の一種。寺院などにて用ふ。

【曲物】マゲモノ　圖へぎ板をまげてまろく造りしいれもの、わげもの。

【史】　史（日部二畫）の俗字。

三畫

【更】㊀カウ・キャウ　㊁カウ　庚　敬　夏は本字

㊀かふ、かはる（換變）あらたまる、あらためる（改）論、子張「其一也人皆仰之」○つぐ（續）○つくのふ（償）○ふ（經・歷）○すぐ（過）經過する。史、大宛傳「必一二匈奴中」○かはるがはる。○夜間の時刻のかはりめ、一夜を五一に分つ稱、初一は今の午後八時、二一は十時、三一は十二時、四一は午前二時、五一は四時、夜を警むる者が更代して守る義。○漢代の戍卒の稱、卒一踐一過一の三品あり、更番にて替代する義。轉じて時刻。㊁さらに、また、再び。王之渙詩「一上一層樓」○ますます（益）愈甚だしき義。杜甫詩「一覺良工心獨苦」○圖新らし。一地は舊き建物などの全く無き土地。

同訓異義　更・改・革・悛の別は改（攴部三畫）の條を見よ。○かへ・變・化・易・替・代・遞・渝・換の別は變（言部十六畫）の條を見よ。

【更衣】イカウ　○著物をきかへる、ころもがへ。高啓詩「一一直二夜房一」○圖女御の次の位の女官。

【更革】カウカク　さらにあらためる、革は改。＝更始。

【更換】カウクワン　とりかへる。徐寅詩「侯王一一恨蘇一轉」＝交換。

【更互】カウゴ　かはるがはる〔中庸章句序〕＝交互。

【更鼓】カウコ　夜中時刻をしらせる爲めにうつ大鼓。東軒筆錄「一一分明、必有二美政一也」

【更興】カウコウ　かはるがはるおこる。後漢書、桓譚傳「威德一一、文武迭用」

【更始】カウシ　舊きものをあらため新らしくはじめる。又、あらたまりてはじまる。禮記「其在二天地之中一者、莫レ不二一一一焉」＝更新・革新。

【更事】カウジ　世事を經歷する。隋書、李雄傳「吾兒既少、一レ一未レ多」

【更新】カウシン　改めてあらたにす。唐書、伏孫伽傳「與二天下一一一」＝更始。

【更生】カウセイ　死にたる者がさらにいきかへる。拾遺記「仙人寧封、食二飛魚一而死、二百年一一」＝蘇生・回生・再生。

【更正】カウセイ　あらためなほす。

【更筮】カウゼイ　改めてうらなふ。禮記、疏「前卜不レ吉則止、不レ得レ因二一一一」

【更箭】カウセン　夜のふけゆく時刻、箭は漏刻の矢。薩都剌詩「枕邊漏水催二一一」

【更選】カウセン　あらためとえらぶ。後漢書、班超傳「吏如二班超一、何故不レ遣而一一乎」＝改選。

【更端】カウタン　事のいとぐちをかへる。禮記「君子問一レ一、則起而對」

【更籌】カウチウ　夜の時を計る器、とけい、籌はかずとり。庾肩吾詩「燒香知二夜漏一、刻燭驗二一一一」

【更張】カウチャウ　琴の絲をあらためはる、今までゆるみたるもの事を改めおこす。「改絃一一」

【更定】カウテイ　あらためさだめる、改正する。漢書、汲黯傳「一二一律令」

【更遞】カウテイ　かはるがはる交代する。易經「剛柔相摩疏「陽剛而陰柔、故剛柔共相切摩、一一變化也」＝更迭。

【更迭】カウテツ　互にいれかはる。詩經、疏「終歲列宿一一而見」＝交替・更遞。

【更番】カウバン　かはるがはる番にあたる、交代して衞る〔舊唐書、張說傳〕＝交番。

【更僕】カウボク　僕は擯相、それをあらため代ふるは時刻の永きをいふ。禮、儒行「遽數之不レ能レ終二其物一、悉數レ之乃留、一レ一未レ可レ終也」留は久、擯相が久くして倦み疲れたるにより、之を代へるも、冒ひ盡す可からざる義。

【更老】カウラウ　三老五更をいふ。潘岳賦「熒一一一以崇年」

【更漏】カウロウ　時を報ずる漏刻ドケイ唐國史補「利惠遠以二山中不レ知二一一一、乃取二銅葉一製レ器」

【更紗】サラ　圖色色の模樣を押して染めたる金巾。ポルトガル語のあて字。

四畫

【匆】　忽（心部四畫）に同じ。

【昏】　書（日部六畫）の省文。

五畫

【曷】カツ　曷

○いづくんぞ（盍）なに、なんぞ（何）○いつか、何の時か。左、昭元「吾子其一歸」○蟲の名、すくもむし、蛇蝎の蝎に同じ。史、范雎・蔡澤傳「先生一鼻白肩」

同訓異義　曷・何・胡・盍・那等の別は何（人部五畫）の條を見よ。

六畫

【書】シ　魚

○かく、しるす、記錄する。論、衞靈公「子張一諸紳」○もじ（文字）六一は、指事・象形諧聲・會意・轉注・假借。○かきかた（書法）「楷一」「草一」○ふみ、ほん「一籍」「史一」「兵一」「字一」「佛一」○てがみ「一簡」「手一」「雁一」「信一」「返一」「家一」「一札」韓愈、答陳商書「辱二惠一、語高而旨深」○戒命、詔敕。○五經の一、虞夏商周の政事を記す。論、爲政「一云、孝乎惟孝」＝書經・尚書。

【書案】シアン　つくゑ。歐陽修文「至哉天下樂、終日在二一一一」

【書意】シイ　○書法の精神。逃書賦「漢王童年、自得二一一一」○ふみのこころ「史、匈奴傳」

【書帷】シイ　書齋のとばり。隋煬帝、秦孝王誄「琴臺夜閉、一一畫閉」＝書幃。

【書幃】シイ　書齋のとばり。杜甫詩「高軒當二艷頃、淵色靜二一一一」＝書帷。

【書院】シイン　○唐以來の學校の稱。玉海「唐明皇置二麗正一一、蒙二文學之士一」○讀書するへや。＝書齋。○圖貴人の家のおもてざしき。

【書淫】シイン　讀書にふける人。晉の皇甫謐の故事。晉書、皇甫謐傳「謐耽二玩典籍一、忘二寢與一食、時人謂二之一一一」

【校レ書如レ掃レ塵】ショウスルガゴトシハラフ　書物は幾回校合するもなほ誤あるをいふ。夢溪筆談「宋宣獻博學、家藏二異書一、皆手自仇校、常云、一一、一面掃則一面生、每三四校、猶有二脫誤一」

【書屋】シヲク　書物をいれるへや。李商隱詩「陶令棄レ官後、仰眠一一中」＝書

棲。

【學レ書加レ泝二急流一】ニテガヤマバカリシ書を學ぶは急流に泝るが如く容易に進み難き喩。蘇軾文「――、用二盡氣力一、不レ離二舊處一」

【以レ書御者不レ盡二馬之情一】ショヲモチテギヨスルモノハウマノジヤウヲツクさざれば、役に立たざるをいふ。戰國、趙策「諺曰、――、以レ古制レ今者、不レ達二事之變一」

【讀レ書亡レ羊】ヒツジヲウシナフ心、外に馳せて道を失ひたる喩。莊、駢拇「臧與レ穀二人相與牧レ羊、而俱亡二其羊一、問二臧奚事一、則挾レ策讀レ書、問二穀奚事一、則博塞以遊、二人者事業不レ同、其於レ亡レ羊均也」

【書架】カ　書物だな。梅堯臣詩「重疊雪花方浸浸、宿麗――自層層」＝書棚。

【書香】カウ　讀書する氣風ある家。傳家寶、無レ論二――子弟與二村童一、因レ材教導」

【書客】キヤク　○文字をかく人。張籍詩「――多呈レ帖、翠倫與合レ弦」○木筆の異名。三柳軒雜識「木筆爲二――一」＝辛夷。

【書學】ガク　文字の書き方の學。書道の學問。後漢書、鄧隲傳「教レ之以二――一」

【書眼】ガン　書物を見るまなこ。皮日休詩「――若二藥餌、酒腸如二漏巵一」

【書驗】カン　てがみ。文心雕龍「符者孚也、徵召防僞、事資二中孚一、三代玉瑞、漢世金竹、末代從レ省、易以二――一矣」＝書簡。

【書簡】カン　てがみ。陸璣、詩疏「蜾蠃取二桑蟲一、負レ之、于二木空中或――筩筒中一、七日而化、爲二其子一」＝書翰・書札。

【書記】キ　○かきしるす。又、書物。漢書、賈山傳「涉二獵――一、不レ能レ爲二醇儒一」○かきやく。白居易詩「青衫――何年去、紅旆將軍昨日歸」

【書櫃】キ　ほんばこ。王安石、勸學文「有即起二書櫃一、無即致二――一」＝書笈。

【書笈】キフ　書物を入れたるおひばこ、笈は負ふやうに造りし本箱。神仙傳「有二二侍者一、一負二――一、一擔二藥箭一」＝書篋・書箱。

【書經】キヤウ　五十八篇、虞夏商周四代の政道を記せるものを孔子の刪定せられしもの、五經及び十三經の一。＝書・尚書。

【書記】グワ　文字と繪畫と。唐書、惠文太子範傳「聚二――一、皆世所レ珍者」

【書幌】クワウ　書齋のたれぎぬ。北戸錄「梁蕭文答二徐摛一書曰、特設二――一、乍置二華牀一」＝書帷。

【書卷】クワン　しよもつ。古は卷物とせしによる。南史、臧榮傳「孤貧勤學、行止――不レ離レ手」＝書册。

【書契】ケイ　支那太古の文字。易、繫辭「上古結レ繩而治、後世聖人、易レ之以二――一百官以治、萬民以察」

【書篋】ケフ　書物ばこ。春秋後語「夜發二――數十一、得二周書陰符一而讀レ之」＝書匣・書箱。

【書劍】ケン　書物と、つるぎと、古の書生の常に事とするもの。陳子昂、送別出塞詩「平生聞二高義一、――百夫雄」

【書庫】コ　○書物ぐら。宋史、職官志「淳化五年始置二――一、監官」＝文庫。○博學の人の稱。北史、公孫茂傳「少好レ學、博學涉二經史一、時人稱爲二――一」

【書佐】サ　かきやく。漢書、王尊傳「太守奇レ之、除補二――一」＝書手。

【書癖】ヘキ　書物を讀むへや。杜牧詩「曾話平生志、――幾見レ留」歐陽修、東齋記「或曰、齋謂二夫閑居平レ心以養二思慮一、若二於レ此而齋戒一也、故曰レ齋」＝書室。

【書箱】サウ　書物ばこ、ほんばこ。晉書、王祥傳「置二――一鏡奩之具一」＝書篋・書笥。

【書札】サツ　てがみ。李白詩「白雁上林飛、空傳二――一」＝書簡・書牘。

【書册】サク　書籍に同じ。禮記「先生――琴瑟」朱熹詩「――埋レ頭何日了、不レ如拋卻去尋レ春」＝書卷・書策。

【書肆】シ　書物を賣るみせ。揚子法言、吾子「好レ書而不レ要二諸仲尼一、――也」＝書鋪・書林。

【書式】シキ　○文字のかきかた。＝書法。○屆書・願書などの一定のかきかた。

【書信】シン　おとづれ、ふみのたより。晉書、陸機傳「笑語レ犬曰、我家絶無二――一、汝能齎レ書取二消息一不」

【書紳】シンシンシヨス　忘れざるやう大帶に書きしるす。論、衛靈公「子張書二諸紳一」

【書社】シヤ　廿五家を一里とし、里に一社を立て月日と田數とを書して之を藏む、故に廿五家の地を――といふ。史、孔子世家「楚昭王將レ以二――地一封二孔子一」

【書狀】ジヤウ　書札に同じ。

【書手】シユ　かきやく、書記の人。唐書「選二五品以上子孫工レ書者一爲二――一」＝書佐・書吏。

【書種】シユ　學問をする人。陸游、赭訓「子弟才分有レ限、無二如レ之何一、但――不レ絶足矣」

【書生】セイ　○學問する生徒。後漢書、袁安傳「道逢二三――一、爲指二一處一」○國他家に寄食して家事に使用せられ旁ら學問する者。＝學僕。

【書聖】セイ　書道にすぐれたる人。梁書、王志傳「嘗謂レ志爲二――一」

【書跡】セキ　書きし文字の形、筆のあと、みづぐきのあと。南史、蕭子雲傳「其――雅爲二武帝一所レ重」＝書蹟・筆跡・手跡。

【書籍】セキ　ほん、しよもつ。晉書、張華傳「雅愛二――一、嘗徙レ居載レ書三十乘」＝書册。

【書題】ダイ　かかげしるす。李參詩「憐君不二解說一、相憶在二――一」

【書體】タイ　文字のかきざま。北史、江式傳「――與二孔子一相類、即前代之古文矣」＝字體。

【書刀】トウ　古、支那にて、竹の札に文字を書きし時、其の竹を削るに用ひし小さき刀。東觀漢紀「建初中、以二――賜二馬嚴一」

【書道】ダウ　文字をかくみち、入木道。

【書丹】タン　朱砂にて石に書きする。隸釋「石經、蔡邕自――、使二工鐵刻一」

【書癡】チ　讀書にのみふけりて他事を顧みざる者をそしる語、癡はばかもの、讀書狂。唐書、竇威傳「竇氏子弟皆喜レ武、獨威尙レ文、諸兄詆爲二――一」劉從益詩「蹉跎歲晚坐二――一」

【書帙】チツ　○書物を包むおほひ。拾遺記「劉二樹皮一、編以爲二――一」○書物。張謂詩「不レ用レ開二――一」＝書卷・書册。

【書廚】ヂユウ　書物を藏むる棚。博學なれども實用をなさざる者を嘲る語。齊書、陸澄傳「讀レ易三年、不レ解二文義一、欲レ撰二宋書一、不レ成、王儉戲之曰、陸公――也」＝書籠。

【書牒】チヨウ　字をかくふだ。急就篇「竹簡以爲二――一」

【書傳】デン　古賢人の著述。後漢書、班超傳「超有二口辯一、而涉二獵――一」

【書蠹】ト　○書物が、蟲ばむ。趙抃詩「雨久藏――、風高老屋斜」○ほんのしみ。＝蠹魚。

【書牘】トク　字をかくふだ。又、てがみ。史、匈奴傳「漢遺二單于――一、以二尺一寸一」＝書簡・書翰。

【書棚】ホウ　しよもつだな。皮日休詩「餓烏窺二食案一、鬬鼠落二――一」

【書不盡レ言】ショハツトウヅクサズ　文字にては十分に其の意の通ぜざる義。易、繫辭「――、言不レ盡レ意」

【書者心畫也】ショハシンナリ　書を見て其の人物を知るべきをいふ。法言、問神「言者心聲也、――、聲畫形、君子小人見矣」文字を心畫といふは此に本づく。

【書法】ホウ　○文章のかき方。左傳「董狐古之良史也、――不レ隱」○文字のかき方。唐書、百官志、注「書レ書、出二蔡中一――以授レ之」

【書判】ハン　楷書の法と判決文辭との巧拙を見て人を選拔する。唐書、百官志「身言――」

【書足レ記二名姓一】ショハイセイヲルシルスニナタル　書は已の姓名を記すれば足る、故に深く學ぶを要せずとの義。史、項羽紀「籍曰、――而已、劍一人敵、不レ足レ學、學二萬人敵一」漢書には名姓を姓名に作る。

【書風】フウ　文字のかきぶり、書道の流儀。

【書辯】ベン　讀書を好むくせ。高適詩「公才山吏部、――杜荆州」蘇軾詩「閉レ門僅子成――」＝讀書癖。

【書圃】ホ　書物の多くあるところ。史、司馬相如傳「修二容乎禮圃一、翔二乎――一」＝書林。

【書面】メン　園てがみ。＝書札。

【書目】モク　書物の目錄。姚合詩「――記二牙籤一」

【書物】モツ　書籍に同じ（後漢書、戴封傳）

【書林】リン　○書物を多く集めし處。後漢書、和帝紀「帝幸二東觀一、覽二――一、閱二羣籍一」○轉じてほんや。＝書肆。

【書類】ルイ　國かきもの、記錄文書、「重要――」

【書籠】ロク　○書物を入れるはこ。范成大詩「凝塵滿二――一」○多く書を讀みて、其の義に通ぜざるに喩ふ。晉書、劉柳傳「時右丞傅廸、好廣讀レ書、而不レ解二其義一、柳惟讀二老子一而已、廸每輕レ之、柳云、卿讀レ書雖レ多、而無レ所レ解、可レ謂二――一矣」＝書廚。

七畫

【曹】サウ　ソウ　豪

○なかま、ともがら（輩）「我――」「爾――」史、平準書「分――循行郡國」○たぐひ（偶）○むれ（羣）○おほし（衆）○獄事を治むるつかさ「法――」轉じて廣く事を同くする屬官の義「官――」○兩――は原告と被告と。＝兩造。○つぼね、やくしよ。○國名、周の文王の子、――叔振鐸の封ぜられし所、今の山東省――州府の地。

【曹偶】グウ　なかま、ともだち。漢書、鼂布傳「布率二其――一、亡之二江中一、爲レ盜」＝同輩。

【曹操】ソウ　曹孟德を見よ。

【曹子】シ　○へや。○國（へや住の貴公子。

【曹司】シ　國○つぼね、禁中の用部屋、官人女官等のつめ所。○昔の大學寮の教場。

【曹參】サン　漢の沛の人、高祖を佐けて天下を定め、平陽侯に封ぜらる、蕭何に代りて丞相となり、一に何の約束に遵ふ。

【曹人之刺】ソウジンノシ　君主の其の位に堪へざる者をそしるにいふ。昔、曹國の人、詩經の候人の詩を作りて刺りしに起る。晉書「博臺二天下儁雄茂材獨行君子一、以答二――一」

【曹遂】ダウ　英語のあて字、酸化ナトリウム。又炭酸――の略語。

【曹大家】ダイカ　後漢の班昭、字は惠姬、班の女、班固の妹、曹壽の妻たり。固、漢書を著はし、未だ竟へずして卒す、帝、昭に詔して東觀に就きて

これを國を成さしむ。數一召して宮に入れ、后妃諸貴人をして師事せしむ、號して——といふ、家は姑と同じ、大家は女の尊稱。

【曹長】ソウチヤウ　陸軍下士官の一、特務曹長の下、軍曹の上に位す。

【曹洞宗】ソウトウシユウ　◎禪宗の一派、六祖の弟子行思にはじまる、道元禪師のはじめて本邦に弘めしもの。

【曹操】ソウサウ　ともがら、なかま。南史、臧洪傳「容貌甚偉、——皆敬之」

【曹孟德】ソウマウトク　魏の武帝をいふ、曹は氏、名は操、孟德は其の字、漢の相國曹參の後、操少くして機警、權數あり、任俠放蕩にして行業を治めず、漢に仕へて戰功あり、漢帝操を以て丞相と爲し、冀州牧を領せしめ魏公に封ず、已にして爵を進めて王と爲し、天子の車服を用ひしむ、漢建安二十六年薨ず、年六十六、子曹丕漢の禪を受くるに及び、追尊して太祖武皇帝と謚す。

【曹瞞】ソウマン　魏の曹操の幼字を阿瞞といふ、故に曹操を——といふ。蘇軾詩「欲ㇾ將二鞍馬一事中——上」

【曹劉】ソウリウ　○曹植と、劉楨と。文心雕龍、攝班之倫、——以下、圖二狀山川一影二寫雲物一」○曹操と、劉備と。

【最惠國】サイケイコク　國際上通商等に關して最も利益ある條約を締結せる國。

【最敬禮】サイケイレイ　もっとも鄭重なる敬禮法、直立不動の姿にて、手を膝の下までたれ、うやうやしく腰を屈する禮式。

【最後】サイゴ　最終に同じ。漢書、張禹傳「——出而尊貴」

【最期】サイゴ　◎しにぎは。末期ゴッ＝臨終。

【最上】サイジヤウ　もっとも。もうへ。唐國史補「蘇州進ㇾ藕、其——者、名曰二傷荷藕一、或云、葉甘爲ㇾ蟲所ㇾ傷」

【最終】サイシユウ　をはり。

【最初】サイシヨ　はじめ、一番はじめ。最後の反對。

【最小】サイセウ　もっともちひさし。劉向新序「延陵季子昆弟四人、季子——」

【最少】サイセウ　○もっともすくなし。○もっともわかし。

【最前】サイゼン　◎さきに、まへかた、先刻。

【最多】サイタ　もっともおほし。南史、何思澄傳「東海三何、子朗——」

【最大】サイダイ　もっともおほいなり。＝最鉅。

【最中】サイチウ　○もなか。まんなか（正中）○◎ナカ——の月に似たる菓子の名。

【最早】モハヤ　◎○いまは、もう。○かくなる上は、とても「——詮方なし」

【最惡】サイアク　○もっとも、いとも、第一、至高にして上なし。○第一にすぐれたるもの。後漢書、崔寔傳「常爲ㇾ邊——」邊功第一たる義。○官吏の成績のすぐれたる義。殿の反對「殿——」○あつむ（聚）すべて（都・凡）史、絳侯世家「——從二高帝一」

【最下】サイカ　もっとも。最上の反對。

【最好】サイカウ　もっともよし、韓偓、三月詩「四時——是三月、一去不ㇾ廻唯少年」

【最鉅】サイキヨ　もっとも大いなり。韓愈文「海於二天地間一、爲ㇾ物——」＝最大。

解字　最は犯して取るなり、曰に从ひ取るに从ふ、曰に从ふは人前を冒犯するなり、故に上功を最といふ、俗に曰に从ふは非。

同訓異義　最・尤○最は最上・最初などと熟す、國語のいとと同じ、又殿最といふは、殿は、軍のしんがり、最はさきがけなり。○尤ははなはだの意、けやけしと譯す、すぐれて異なれるをいふ、韓文に「惟回鶻於ㇾ唐最親、奉ㇾ職尤謹」とあるにて、最・尤二字の用法を辨知すべし。

【最愛】サイアイ　もっともかはゆがる、いちばん大切にする。陸龜蒙詩「——笙調聞二北里一」

【最惡】サイアク　◎あつむ（聚）すべて（都・凡）史、絳侯世家「——從二高帝一」

【最下】サイカ　もっともした。最上の反對。

【最好】サイカウ　もっともよし、韓偓、三月詩「四時——是三月、一去不ㇾ廻唯少年」

【最鉅】サイキヨ　もっとも大いなり。韓愈文「海於二天地間一、爲ㇾ物——」＝最大。

【最惠國】サイケイコク　國際上通商等に關して最も利益ある條約を締結せる國。

【最敬禮】サイケイレイ　もっとも鄭重なる敬禮法、直立不動の姿にて、手を膝の下までたれ、うやうやしく腰を屈する禮式。

【最後】サイゴ　最終に同じ。漢書、張禹傳「——出而尊貴」

【最期】サイゴ　◎しにぎは。末期ゴッ＝臨終。

【最上】サイジヤウ　もっとも。もうへ。唐國史補「蘇州進ㇾ藕、其——者、名曰二傷荷藕一、或云、葉甘爲ㇾ蟲所ㇾ傷」

【最終】サイシユウ　をはり。

【最初】サイシヨ　はじめ、一番はじめ。最後の反對。

【最小】サイセウ　もっともちひさし。劉向新序「延陵季子昆弟四人、季子——」

【最少】サイセウ　○もっともすくなし。○もっともわかし。

【最前】サイゼン　◎さきに、まへかた、先刻。

【最多】サイタ　もっともおほし。南史、何思澄傳「東海三何、子朗——」

【最大】サイダイ　もっともおほいなり。＝最鉅。

【最中】サイチウ　○もなか。まんなか（正中）○◎ナカ——の月に似たる菓子の名。

【最早】モハヤ　◎○いまは、もう。○かくなる上は、とても「——詮方なし」

【曾】ソウ　ゾウ　蒸

○かつて（經）＝嘗。これまでに、過去の事を言ひあらはす辭。＝嘗。○すなはち（乃・則）論、學而「——是以爲ㇾ孝乎」○かさぬ、かさなる「——祖」「——孫」「——城」＝層。○あぐ、あがる（舉）○する（末）○增に同じ。○ます。＝增。

同訓異義　曾・嘗の別は嘗（口部十一畫）の條を見よ。

【曾遊】ソウイウ　まへかたあそぶ。＝昔遊。

【曾益】ソウエキ　ましふやす。孟、告子「——其所ㇾ不ㇾ能」＝增益。

【曾孫】ソウソン　字は子固、宋の建昌南豐の人、孝友を以て聞ゆ、官、中書舍人に至る、文章は歐陽修と名を齊うす、世に南豐先生といふ、唐宋八家の一人。

【曾國藩】ソウコクハン　清朝の名臣、字は伯涵、滌生と號す、湖南湘鄉の人、道光十八年の進士、官、武英殿大學士に至る、長髮賊を平定して功あり、同治十一年卒す、年六十二。

【曾子】ソウシ　曾參を見よ。

【曾臣】ソウシン　末の臣、謙辭なり。左、襄十八「——彪將下率二諸侯一以討上焉」＝末臣。

【曾參】ソウシン　孔子の門人、名は參、字は子輿、曾點の子、魯の南武城の人、孔子より少きこと四十六歲、志孝道に存す、孔子之に因りて孝經を作る。＝曾子。

【曾城】ソウジヤウ　二階以上かさなりたるしろ、崑崙山、三級あり、上を——といひ太帝の居と爲す。後漢書、張衡傳「登二閶風之——一兮」＝層城。

【曾祖父】ソウソフ　ひぢぢ、ひいぢぢ、祖父の父。＝曾大父・曾祖王父。

【曾祖母】ソウソボ　ひばば、ひいばば、祖母の母。＝曾祖王母。

【曾孫】ソウソン　ひまご、孫の子、曾は重る義。爾雅「孫之子爲二——一」

【曾陪】ソバイ　かつて陪隨する。蘇軾詩「他日——探二禹穴一、白頭重見賦二南山一」

【曾閔儁】ソウビン　曾參と閔損とに等しき孝行のともがら。二人は孔子の門人共に孝を以て聞ゆ。元稹詩「昔公孝二父母一、行與二曾閔一儔」

【替】テイ　齊

○かはる、かふ（代）「交——」○すつ、すたる、すてらる（廢）○ほろぶ（滅）魯語「令德——矣」○やむ（廢止）晉語「薦可而——不」不は否。

同訓異義　替・變・化・易・代・更・換の別は變（言部十六畫）の條を見よ。

【替懈】カイ　やめおこたる。北夢瑣言「世之干ㇾ祿、先責二名第一、既得ㇾ之後、鮮ㇾ不二——一」

【替換】クワン　かふ。又、かはる。楊萬里詩「新茜年頭將二——一」＝易換。

【替人】ジン　前の人にかはるべき人。

【替衰】スイ　すたれおとろふ。＝衰替。

【會】クワイ　エ　泰

○あふ（合）であふ、めぐりあふ、行きあふ「再——」「一者定離」○あつまる（集）よりあふ、一つになる「一合」「集一」○周代諸侯の相見禮「一同」○ちかひ（盟）○あつまりの團體「青年一」「講習一」○をり（機）「機一」○さとる（理解）「一得」「了一」○一歲の計算、計算。又、其の帳簿。孟、萬章「孔子嘗爲委吏一矣、曰一計當而已」○むれ、くみ。○かならず（必）きっと、決定の意。顏氏家訓「人生在世一當有業」○たまたま、ちゃうど。史、司馬遷傳「一東從」上來」○ゑ、いろどる、繪に通ず。○ふた（蓋）○かんむりのぬひめ。詩、鄭風「弁如星」

同訓異義 會・遇・逢・遭・値・合・晤の別は遇（辵部九畫）の條を見よ。○クワイ 會・偶・適の別は偶（人部九畫）の條を見よ。

【會陰】エイン 陰門と肛門との界、蟻門渡 アリノワタリ

【會式】エシキ 佛○寺院にて行ふ佛事のよりあひ。○日蓮宗にて毎年十月十三日祖師日蓮の忌日に行ふ祭。＝御命講・御影講。

【會釋】エシャク 國あいさつ、おじぎ。

【會者定離】エシャヂヤウリ 佛會ふものは、亦必ず別れることある義。世の無常を觀じたる語。遺教經「世皆無常、會必有離」

【會得】エクワイトク 心にさとりしる、がてんする。十國春秋「宋太宗時、或言劉昌言ニ國語ニ恐奏對難レ會、太宗曰、我自ーーー」＝會了・領會。

【會意】イクワイ ○心にあふ。晉書、陶潛傳「每レ有ニーーー、欣然忘レ食」＝會心。○漢字の構造法の名、六書の一、字と字とを合せて一つの文字を爲すもの、人言を信とし、日月を明とする類。

【會友】クワイウ 同志の友を集める。論、顏淵「曾子曰、君子以レ文ーレー、以レ友輔レ仁」

【會飲】クワイイン よりあひて酒をのむ。雲笈七籤「顏眞卿爲ニ湖州刺史ー、與ニ門客ーーー」

【會講】クワイカウ 多數の人が聚りて書物を講ずる。齊祭責要「ーーー會食・會茶、擊レ版如レ前」

【會合】クワイカフ あつまり合ふ。曹植詩「浮沈各異レ勢、ーーー何時諧」

【會議】クワイギ あつまりて相談する。獨斷「凡喪章皆啓レ封、其有ニ疑事ー、公卿百官ーー」＝會商。

【會遇】クワイグウ めぐりあふ。史、孔子世家「以ニーーー之禮ー相見、揖讓而登」

【會計】クワイケイ 出納を計算する。孟、萬章「孔子嘗爲ニ委吏ー矣、曰、ーー當而已矣」

【會稽山】クワイケイサン 浙江省紹興府城の東南に在り、古、吳王夫差の越王句踐を圍みし所。

【會稽之恥】クワイケイノチイサイ 戰敗の恥辱、越王句踐の父、吳王闔閭に破らる、句踐因りて闔閭を破る、闔閭の子夫差、又句踐を攻めて之を會稽山に圍む、句踐勞つきて遂に和を乞ふ、之を——といふ、其の後、越王、范蠡を謀臣となし、臥薪嘗膽の苦を積み、遂に又、夫差を敗りて——を雪ぎぬ。史、貨殖傳「句踐十年國富、遂報ニ强吳ー、刷ニ——ー」

【會見】クワイケン あふ、面會する、對面する。

【會悟】クワイゴ さとる。南史、羊元保傳「ーーー多遇」＝領會・解悟。

【會葬】クワイサウ はうむりにあつまる。左、隱元「衞侯來ーーー」

【會集】クワイジフ あつまる。春渚紀聞「子弟每ーーー」

【會心】クワイシン 心によく適ふ。世說「ーーー處不ニ必在ー遠」

【會社】クワイシヤ 多人數が集りて營利事業をいとなむ法人組織の團體。＝俗 公司。

【會商】クワイシヤウ 會議に同じ、會合して商議する。商ははかる。

【會聚】クワイシユ よりあつまる、よせあつむ。公羊傳「古者諸侯、必有ニーーー之事ー」漢書、董仲舒傳「入有ニ父子兄弟之親ー、出有ニ君臣上下之誼ー、ーー相遇、則有ニ耆老長幼之施ー、粲然有レ文以相接、驩然有レ恩以相愛、此人之所ニ以貴ー也」＝會集。

【會所】クワイソ あつまり場所。南史、宋武帝紀「至ーーー賜レ饌」

【會食】クワイショク あつまりて食ふ。蘇軾詩「高堂ーーー羅ニ千夫ー」＝會飯。

【會萃】クワイスイ あつむ。宋史、顏復傳「命下禮官ーニー古今典範ー爲ニ五禮書ー」

【會政】クワイセイ 政の成績を考へる。周禮「ーレー致レ事」

【會席】クワイセキ ○よりあひのむしろ、集會の席。○國ーー料理の略、茶の湯の懷石風につくりし料理、轉じてひろく上等の料理をいふ。

【會戰】クワイセン 雙方出合ひてたたかふ。孫子「知ニ戰之地ー、知ニ戰之日ー、則可ニ千里而ーーー」

【會堂】クワイダウ ○衆人のよりあひをする家「公ーーー」○耶蘇教の寺。＝教會。

【會單】クワイタン 國答礼手形、小切手、支拂命令書。

【會談】クワイダン あつまりて話す。＝會話。

【會緻】クワイチ あつまりてこまか（密）張華文「ーーー密固、絕際無間」

【會弔】クワイテウ 寄り合ひてとむらふ。後漢書、周舉傳「令下將ニ大夫以下ーーー上」

【會同】クワイドウ ○會は時見卽ち常期なく事あれば來朝する義、同は殷見卽ち衆見の義。詩、小雅、車攻「赤芾金舄、ーーー有レ繹」○二水合して一となる。書、禹貢「雷夏既澤、灉沮ーーー」

【會讀】クワイドク あつまりて讀書する。

【會贄】クワイヒツ よりあひをするに要する入費。

【會賦】クワイフ 數を計りて其の稅を賦す。淮南子「財用贏ニ子ーー」

【會盟】クワイメイ 會合してちかふ。左、昭三「有レ事而會、不レ協而盟」

【會面】クワイメン であふ、面會。杜甫詩「爲知二十載、重上君子堂、主稱ーー難、一樽累ニ十觴」

【會立】クワイリツ あつまりたつ。史、張釋之傳「三公九卿盡ーーー」

【會了】クワイレウ よくわかる。＝了會・領會。

【會獵】クワイレフ ○より合ひてかりをする。○戰爭を申しこむこと、を腕曲にいふことば。魏武帝遺ニ孫權ー書「與ニ將軍ーーニー於吳ー」

【會話】クワイワ ○むかひ合ひてはなしをする。＝對談・對話。○國外國語にてはなす。又、其のはなし。

十畫

【竭】ケツ 厩 晨

○さる（去）○武くして壯んなる貌。○乾・桀の借字。詩、衞風「庶士有ーー」

【竭來】ケツライ 去ると來ると。漢書、司馬相如傳「回レ車ーーー兮」＝去來。

月部

【月】ゲツ 月 通 晉 クワツ

○つき、太陰、地球の衞星「明ーー」「皓ーー」「涼ーー」「曉ーー」○つきかげ、太陰の光影。○一年を十二分したる間の稱。月を數へる單位の稱。蘇軾詩「邇來三ーー食無鹽」○月ごとに、毎月。中庸「日省ーー試」

【月城】ゲツジヤウ 四のはての遠きくに。齊書、樂志「ーーー來賓、日際奉土」

【月陰】ゲツイン ○つきかげ。謝靈運詩「ーーー洞ニ野色ー、日華麗ニ池光ー」＝月影。○月がくもる。江淹詩「戾戾曙風急、團團明ーーー」

【月輩】ゲツハイ つきのかず、月のまはりに生ずる環狀の雲氣（史、天官書）孟浩然詩「太虛生ニーーー」

【月下】ゲツカ ○月の光のさすところ。文同、蓮賦「張ニ翠幄於ーーー兮」○月がくだり低れる。王勃賦「景沈ニ四墓ー、ーーニ東濱ー」

【月下冰人】ゲツカヒヨウジン むすぶの神、轉じて婚姻のなかうど、次の月下老の故事と、晉の令狐策が夢に冰の上に立ちて冰下の人と語りたるを占ひて、冰上の陽と冰下の陰と言を交へるは媒介の事なりと解きし故事とに本づく。晉書、藝術傳「索紞字叔徵、善ニ術數占候ー、令狐策夢立ニ冰上ー、與ニ冰下人ー語、紞曰、冰上爲レ陽、冰下爲レ陰、陰陽事也、君在ニ冰上ー、與ニ冰下人ー語、爲ニ陽語ヲ陰、媒介事也、君當ニ爲ニ人作ヒ媒、冰泮而婚成、會太守田豹、因レ策爲レ子求ニ張公徵女ー、仲春而成レ婚焉」

【月下老】ゲツカラウ 緣結びの神。續幽怪錄「韋固旅ニ次宋城ー、遇ニ異人ー、倚レ囊坐、向ニ月下ー檢レ書（中略）因問ニ囊中赤繩子ー、云此以繫ニ夫妻之足ー、雖ニ仇家異域ー、繩一繫レ之、終不レ可レ易」

【月刊】ゲツカン 月月に刊行する「ーーー雜誌」

【月季】ゲツキ 薔薇の一種、かうしんばら。會部方物記「ーーー花卽東方所レ謂四季花者、翠蔓紅蕤、到少ニ霜雪ー、此花得ニ終歲十二月輒一開ー」＝長春花・月月紅。

【月給】ゲツキフ 月俸に同じ（宋史、畢士安傳）

【月琴】ゲツキン 樂器の一、琵琶の形に似て四絃十二柱あり。＝阮咸。

【月宮】ゲツキウ つきのみやこ。天寶遺事「明皇與ニ申天師ー、中秋夜遊ニーーー」劉禹錫詩「青鳥去時雲路斷、姮娥歸處ーーー深」＝月府。

【月宮殿】ゲツキウデン つきのみやこの中に在りといふ御殿。＝廣寒宮。

【月窟水】ゲツクツスイ 月の中の巖窟中より湧き出づといふ水。李白、蘇武詩「渴飲ニーーー、飢餐ニ天上雪ー」

【月華】ゲツクワ つきのひかり。梁元帝詩「共向ニ江頭ー眺ニーーー」＝月光・月彩。

【月晦】ゲツクワイ つごもり、陰曆の月末の三十日。劉長卿詩「ーーー逢ニ休澣ー、年光逐レ宴移」

【月光】ゲツクワウ つきのひかり。李白詩「牀前看ニーーー、疑是地上霜」＝月華。

【月光讀書】トククワウ 月の光にて書を照らして讀む。齊書、江泌傳「泌少貧、晝斫レ薪、夜讀レ書、隨ニ月光ー握レ卷升レ屋」

【月計】ゲツケイ 一節月の勘定。經銀堂雜志「有ニーーー、然後歲計可レ知」

【月桂】ゲツケイ ○つきかげ、月光。月中に桂樹ありといふ傳說による。○科第（高等官試驗）に及第するをいふ。避暑錄「世以ニ登科ー爲ニ折桂ー、其後以ニ月中有ニ桂、故以謂ニ之ーーー」＝折桂。

【月桂冠】ゲツケイクワン 月桂樹の葉にてかざれる冠、古、希臘シヤリにて競技の優勝者にかむらせたるもの。轉じてひろく勝利のしるしとする。

【月桂樹】ゲツケイジユ 披針狀の葉を有し、黃白の花を著ける、實は卵形にて葉とともに香料とす。ローレル。

【月卿】ゲツケイ ○執政の大臣。書經「卿士惟月」に本づく。馬祖常詩「行襲諸俗期ニ星使ー、歸奏著靈拜ニーーー」○國三位以下の公卿「ーーー雲客」

【月經】ゲツケイ つきやく、めぐり。＝月事・天癸。

【月彩】ゲツサイ つきのひかり。沈約文「日華ーーー、焰燿天外」＝月華。

【月朔】ゲツサク つきのはじめ。書、五子之歌「季秋ーーー」唐書、百官志「五品以上ーーー以レ表參ニ起居ー」＝月吉。

【月參】ゲツサン 毎月まゐる。北史、薛慎傳「毎月一參」

【月子】ゲツシ 月をいふ。子は助辭。汪元量詩「ーーー纖纖雲夾見」＝月兒。

【月氏】ゲツシ 一に月支に作る、漢の世に、慈讓の西に國を建てし種族の名（史、大宛傳）

【月次】ゲツジ ○つきなみ、毎月。○月のやどり、月の天空に於ける位置。臨倭、刻漏銘、歲隨閣茂、ーーー姑洗」

【月姉】ゲツシ 月の異名、月を嫦娥といふによる。司空圖詩「ーーー殷勤曾不レ住」＝月娥。

【月事】ゲツ 月經に同じ。黄帝内經「一一以ル時下、謂ニ婦人天癸匝月而至一也」

【月樹】ゲツ つき見のうてな。顔延之詩「風觀要ニ春景、一一迎ニ秋光」

【月謝】ゲツシャ 毎月師に納める禮金。＝授業料。

【月時】ゲツ 月月に進歩する、將はすすむ。詩、周頌「維予小子、不ニ聰敬一止、日就一一、學有レ緝ニ熙于光明一」杜牧詩「一似ニ小兒學一日就復一一」

【月食】ゲツショク 月蝕に同じ。禮記「一一則后素服而修ニ六宮之職一」

【月蝕】ゲツショク 地球が日と月との間に挾まりて、日の光を遮ぎる爲めに、月光の全部又は一部隱るる象。宋書「朔則交會、望則一一」＝日食。

【月夕】ゲツセキ ○つきのあるゆふべ。謝靈運詩「火逝首秋節、新明弦一一」＝月夜。○陰曆八月十五夜の稱「提要錄」

【月旦】ゲツタン ○ついたち、朔日。○許劭の故事により人物の批評。後漢書、許劭傳「初劭與ニ從兄靖俱有ニ高名一、共覈ニ論鄉黨人物一、每月輒更ニ其品題一、故汝南俗有ニ一一評焉」

【月團】ゲツダン 上等の茶の名。盧仝、謝ニ孟諫議惠ニ茶歌「開レ緘宛見ニ諫議面一、首閱一一三百斤」

【月兎】ゲツト 月の異名。黄滔詩「光交一一寒」＝玉兎・蟾兎・銀蟾。

【月波】ゲツハ つきかげのうつりたるなみ。王惲詩「滿庭風竹一一涼」＝金波。

【月梅】ゲツバイ つきにてらされるうめの花。陳與義詩「一一疎影夜香聞」

【月魄】ゲツパク 月の異名。梁簡文帝、相宮寺碑銘「珠生ニ一一、鐘應ニ秋霜一」＝月魂・月靈。

【月白風清】ゲツパクフウセイ 月はしろく風はすずし。赤壁賦「一一、如ニ此良夜一何」

【月半】ゲツハン ○月のなかば、即ち十五日。書經、疏「日月相望、故以ニ一一一爲レ望」○上弦・下弦の月。釋名「弦、一一之名也、其形一旁曲、一旁直、若ニ張レ弓施レ弦也」

【月賦】ゲツフ 或まとまりし金額を月にわりあてて小分けして拂ふ「一一拂」

【月鑑】ゲツカン 圓月と、すっぽんと、似もつかざる程の大いなるちがひある譬。＝霄壤・雲泥。

【月俸】ゲツホウ 月月の給料。周禮、注「祿若ニ今月奉一也」宋史「眞宗、祥符年間、加ニ文武職官一一一俸」奉通ず。＝月奉・月給。

【月末】ゲツマツ 月の終り。通鑑考異、梁武紀「今移ニ之於一一一」＝月尾。

【月明】ゲツメイ つきよのあかるき義。

【月面】ゲツメン ○月のおもて。○月の如くうるはしき顔。梁簡文帝、千佛願文「紺髮日光、蓮眸一一」＝玉顔。

【月夜】ゲツヤ つきよ。魏書、李諧傳「或林ニ嬉於一一、或宴ニ於景斜一」＝月夕。

【月寮】ゲツリン 次條に同じ。唐書、王龜傳「譁言一一薄、以動ニ士心一爲レ亂」

【月廩】ゲツリン 月月にあてがふ扶持米。宋史、兵志「給ニ官馬一一一」元史、世祖紀「命ニ宿衛一受ニ一一一」＝月寮。

【月輪】ゲツリン つきの異名。李參詩「一一吐ニ山郭一、夜色空清澄」

【月令】ゲツレイ 毎年定め行ふべき政令を十二ヶ月に區別して記錄したるもの。禮記に一一篇あり。轉じて時候の義とす。

【月齡】ゲツレイ 新月の正中時より起算せし時間の稱、陰曆の日のよりどころとなるもの。

【月靈】ゲツレイ 月の異名。齊書、樂志「一一誕レ慶、雲端開レ祥」＝月魄。

【月露】ゲツロ つきよのつゆ。劉禹錫詩「一一滿庭人寂寂、霓裳一曲在ニ高樓一」

【月露風雲】ゲツロフウウン 詩文を作るも、月露風雲を形容するに過ぎず、無用の閑文字をいふ。隋書、李諤傳「競ニ一韻之奇一、爭ニ一字之巧一、連篇累牘、不レ出ニ一一之形一、積レ案盈レ箱、唯是一一之狀」

【月彎】ゲツワン 月が弓なりになる。蘇軾詩「茫茫夜潭靜、皎皎秋一一」

【月明星稀】ツキアキラカニホシマレナリ 蜀先主の奔走を譏れる句。魏武帝、短歌行「一一、烏鵲南飛、繞レ樹三匝、無ニ枝可レ依」

【月落烏啼霜滿レ天】ツキオチカラスナキシモミテンニミチワタル 曉天の景を詠ぜし句。張繼、楓橋夜泊詩「一一、江楓漁火對ニ愁眠一」

【月麗ニ于箕一】ツキヒヲキニカカル 月、箕星にかかる、風吹く兆、箕は風を好む星。春秋緯「一一、風揚ニ砂矣」

【月毛】ゲツモウ 圓馬の毛色、葦毛の赤ばみたる色

【喘レ月】ツキアヘグ 人の畏懼の甚だしきにいふ、吳牛喘レ月（三一七頁一月）を見よ。

【歩レ月】ツキヲアユム つきかげをふんでありく、月夜に歩行する。蘇軾詩「當年一一來ニ幽谷一」

【月麗ニ于畢一】ツキヒヲアミニカカル 月畢星にかかる、雨ふる兆、畢は雨を好む星。詩、小雅「一一俾ニ滂沱一矣」

【月見】ツキミ 圓陰曆八月十五夜及び九月十三夜の明月をめで賞する年中行事。＝觀月。

【月滿則虧】ツキミチテハカケル 盛んなる者は必ず衰ふるに喩ふ。史、蔡澤傳「語曰、日中則移、一一、物盛則衰、天地之常數也」

【月盈則食】ツキミチテハムシル 盛んなるものは必ず衰ふることあるに喩ふ。易、豐卦、彖傳「日中則昃、一一」

三畫

【有】㊀ イウ・ウ ㊁ イウ・ウ 有 有

㊀ある、あり、物の實在。無の反對。孟、梁惠王「庖一一肥肉」廐一一肥馬」○う（得）○とる（取）取得する。詩、周南「采ニ采芣苢一薄言一一之」○たもつ、もつ（保）「一一國」「所一一」「奄一一」○州の義。詩、商頌「奄ニ有九一一」○國號又は他の語の上に冠する助辭「一周」「一衆」「一政」○何の字の下に置きて何かあらんと訓み、何程の事もなし、又、たやすしの義とす。論、里仁「能以ニ禮讓爲國乎、何一一」又、何とも思はぬ義。左、僖二四「蒲人狄人於余何一焉」○大一は易の卦の名、乾下離上。㊁また、又に通ず。書、堯典「朞三百一六旬一六日」再び。孟、滕文公「邪說暴行一作」

同訓異義 アリ 有・在・或○有は無に對して用ふ。左傳「有レ文在ニ其手一、曰爲ニ魯夫人一」○在は沒または去と對す、有の字の下は物なり、在の字の下は居處なり「市有レ人」「人在レ市」また「死生有レ命、富貴在レ天」などにて其の則を知るべし、在は俗に、にありといふ。○或は、あることならばと疑ふ意にて、もしくはとも訓す、字書に「未定之辭」と註せり「或ニ繼レ周者一」の如し。

○タモツ 有・又・復・還・也の別は又（部首二畫）の條を見よ。

【有爲】ユウイ ○爲す所の事あり。孟、公孫丑「將ニ大一一之君、必有ニ所レ不レ召之臣一」○職務がある。李白詩「莫レ戀漁樵興、人生各一一」

【有意】イウイ こころあり。史、蘇秦傳「今乃一一ニ四面而事ニ秦一」

【有益】イウエキ やくにたつ、ためになる。漢書、蓋寬饒傳「日一一、月有レ功」＝有利。

【有夏】カイウ 支那本國の稱。有は助辭夏は大の義。書經「肇ニ我邦於一一」＝中國・中華。

【有害】ガイウガイ どくになる、弊害がある。不利益になる。漢書、溝洫志「通レ渠有ニ三利一、不レ通有ニ三害一」

【有效】イウカウ ○ききめがある、有驗。○其の物のやくに立つ效力がある「一一期間」

【有價證券】ショウカシ 時價にて賣買する證券。

【有閒】カイン ○しばらくありて。東京賦「憮然一一、乃莞爾而笑」＝有頃。○疾の少しく癒ゆる義。左傳「晉侯一一」

【有機】キウ 動植物の如く機能ありて、生活枯死の變りあるもの「一一物」「一一體」

【有脚陽春】ヤウキヤクヤウシユン 到る處に恩德を施す義、春は仁にして萬物を發生せしむ、故に足ある春といふ。開元遺事「宋璟愛レ民恤レ物、時人咸謂ニ一一一」

【有虞氏】ユウグシ 舜をいふ、堯の禪を受けて天子となる、其の先、虞（今の山西省平陸縣）に國するを以て一一と稱す。有は助辭。

【有光】ユウクワウ ひかりあり、ほまれあり。書經「于ニ湯一一」

【有形】ユウケイ かたちあり。文子「一一則有ニ聲、無ニ形則無ニ聲」

【有頃】ユウケイ しばらくありて。戰國策「居一一、倚ニ柱彈ニ其劍一」＝有閒。

【有隙】ユウゲキ すきまあり、仲惡し。戰國策、燕策「與ニ寡人一一一」＝有郤。

【有限】ユウゲン かぎりあり。徐陵文「散ニ一一之微財一、供ニ無期之久客一」

【有限責任】ユウゲンセキニン 商人の營業上損失の責任、ただ出す所の一定の資本に限らるる者をいふ。

【有口】ユウコウ くちやかまし。漢書、呂后紀「王ニ諸呂一、畏ニ大臣一一者一」

【有功】ユウコウ いさをあり。漢書、彊勉行レ道則德日起、而大一一」

【有罪】ユウザイ つみがある。又、其の者。詩、小雅「舍ニ彼一一一」

【有造】ユウゾウ 造は爲す、造成する所ある義。詩、大雅、思齊「肆成人有レ德、小子一一」

【有司】ユウシ やくにん。書、立政「文王罔レ攸兼于庶言庶獄庶慎、惟一一之牧夫、是訓用違、庶獄庶慎」＝官吏。

【有志】ユウシ こころざしあり。又、其の人。禮記「孔子曰、大道之行也、與ニ三代之英一、丘未ニ之逮一也、而一一焉」

【有私】ユウシ 公平ならざる心あり。無私の對。後漢書、第五倫傳「或問レ倫曰、公一一乎」

【有事】ユウジ ○しごとあり。論、爲政「一一弟子服ニ其勞一」○平生と變りたることあり、事件がおこる。

【有秋】ユウシウ よき收穫トリあり。書經「若農服レ田力レ穡、乃亦一一」白居易詩「海內時無レ事、江南歲一一」＝有年。

【有識】ユウシキ ものしり、見識ある人。後漢書、朱浮傳「凡舉レ事毋下爲ニ一一者所ニ笑、而爲ニ見ニ仇者所ニ快」＝識者。

【有識之士】ユウシキノシ 事理に明かなる人。後漢書、何皇后紀「一一、心獨怪レ之」

【有識晒】ユウシキヒ 見識ある人のあざけり。隋書、蘇夔傳「頗爲ニ有識所ニ晒」

【有心】ユウシン ○わざとする。＝故造・故意。○心に思ふ所がある。詩、小雅、巧言「他人一一、予忖ニ度之」

【有信】ユウシン まことあり。漢書、高帝紀「上曰、稀常爲ニ吾使一、莫一一」

【有章】ユウシヤウ 文ヤあり。詩經「其容不レ改、出レ言一一」左傳「動作有レ文、言語一一、以臨ニ其下一、謂ニ之有ニ威儀一也」

【有情】イジョウ　喜怒哀樂などの情あり、なさけあり。無情の對。莊子「夫道——有信、無爲無形」

【有趣】イシュ　おもむきあり。孟浩然詩「滔泗自——、何必五湖中」

【有終】イシュウ　をはりを全うす。易、謙卦「謙亨、君子——。吉」詩、大雅、蕩「靡レ不レ有レ初、鮮二克——一」

【有衆】ユウシュウ　たみ、人民。朝廷又君主より人民をよぶ稱。有は助辭。書、胤征「嗟予——」

【有初】ユウショ　はじめあり。有終參看。

【有職】ユウショク　○つかさどるところあり。荀子「治レ國有レ道、人主——」○國ユウショク故實をしらぶる學問。又、其の人。＝故實家。

【有數】ユウスウ　○數ふるばかり、少なし「——の人物」白居易詩「如二我與レ君心、相知應二——一」＝屈指。○自然の道理がある、數は術。莊子「——存二焉於其間一」

【有待之身】ユウタイノミ　○後來事を爲さんと時機を待つ身。禮記、愛二其死一以レ有レ待也、愛二其身一以レ有レ爲也。○ユウタイ凡夫の身。法華經科註「初心有待、若得二供養一所レ修事成」

【有道】ユウドウ　道德あり。又、其の人。論、學而「就二——一而正焉」

【有道之士】ユウドウノシ　道德ある人。列、楊朱「列禦寇、蓋——也」

【有智無智校三十里】ユウチムチカクサンジュウリ　智ある者と智なき者との差の甚だしきをいふ。世說「魏武嘗過二曹娥碑下一、楊脩從、碑背上題作二黃絹幼婦外孫虀臼八字一、魏武問二脩解不一、答曰解、魏武曰、卿未レ可レ言、待二我思之一、行三十里、魏武曰、吾已得、令二脩別記一所レ知、脩曰、黃絹色絲也、于レ字爲レ絕、幼婦少女也、于レ字爲レ妙、外孫女子也、于レ字爲レ好、虀臼受辛也、于レ字爲レ辭、所謂絕妙好辭也、魏武之記與レ脩同、歎曰、我才不レ及レ卿、乃覺三十里一」

【有土】ユウド　國をたもつ。又、其の國君。書經「遠二于上下一、敬哉——」

【有毒】ユウドク　害毒あり。左、僖三二「臧文仲曰、君無レ謂二鄭小一蜂蠆一レ、況國君乎」

【有德】ユウトク　道德ある人。書、皐陶謨「天命二——一、五服五章哉」管子「擾二——一則國安」

【有年】ユウネン　五穀皆熟す。春秋、宣十六「冬大——」＝有秋・豐年。

【有望】ユウボウ　のぞみがある、みこみがある「——の事業」

【有苗】ユウビョウ　古、南方の蠻族。書、大禹謨「惟時——弗レ率」＝三苗。

【有朋】トモアリ　朋友がある。論、學而「——自二遠方一來、不二亦樂一乎」

【有北】ホク　極北の地。詩經「投二畀——一」疏「——太陰之鄉」

【有無】ウム　○あると、なきと。史、越世家「交二易——一之道通」○國ウムいやおう、諸否。

【有名】ユウメイ　名高し。韓愈文「愈也道不レ加レ修、而文日益——」

【有名無實】ユウメイムジツ　名前のみ美にして實質の伴はざる義。漢書、黃霸傳「澆淳散樸、並行僞貌、——」

【有餘】ユウヨ　あまり、ありあまる。史記「貧富之道、莫二之予奪一、而巧者——レ、拙者不レ足」

【損二有餘一】ソンユウヨ　餘りあるを減らす。老子、「天之道、——、補二不足一」

【有用】ユウヨウ　つかひみちがある、やくに立つ。無用の對。莊、人間世「人皆知二——之用一、而莫知二無用之用一」

【有鄰】ユウリン　同類のもの集り來る義。論、里仁「子曰、德不レ孤、必——レ」

【有力】ユウリク　○ちからがある。莊、大宗師「夜半——者負レ之而走」○勢力がある。韓愈、應二科目一時與レ人書「——者哀二其窮一、而運二轉之一」

【有力者】ユウリクシャ　勢力ある人。呂覽「——賢、暴傲著章」

【有爲轉變】ウイテンペン　佛うきよの事物のうつりかはり易きをいふ。有爲は諸種の因緣の生ずる現象。金剛經「一切有爲法、如二夢幻泡影一」

【有卦無卦】ムケ　國陰陽師のいふ幸運の年まはりに當ると當らざると。

【有象無象】ムゾウ　○天地間に存する有形無形の物の總稱。＝萬物・森羅萬象。○たくさんにあるつまらぬ物。

【有素僧】ソウ　佛未だ得道せざる僧。大智度論「持戒不レ破、身口清淨、能別二好醜一、未レ得レ道、是名二——一」

【有頂天】ウチョウテン　○佛九天中の最も高き處、無色界の最高天。法華經「從二阿鼻獄一、上至二——一」＝非想天。○國うはのそら、夢中。

【有髮僧】ウハツソウ　かみをそらざる僧。客越志「寺屋盡傾、惟一——在」

【有耶無耶】ウヤムヤ　國どっちつかず、あいまい。＝不分明。

【有漏】ウロ　佛煩惱ナボン中に迷ふ、世俗の凡夫の稱。漏は過をもらす義、煩惱をいふ。無漏の對。金剛經、註「終是——之因、而无二解脫之理一」

【有明】アリアケ　國○よあけまである月あかり。又、其の月輪。○よどほしともすあかり。＝常夜燈。

【有樣】サマ　國ものごとのなりゆきのさま、おもむき。＝容態・情態・狀況・景況。

【有體】アリテイ　國事實どほり、ありのまま「——に白狀する」

四畫

【肭】ダク　屋　肭の俗字

縮ーはついたちに月の東方に見ハラれる義。

【服】㊀フク　屋　㊁匐（勹部九畫）に同じ。

㊀きもの「衣ー」「美ー」「禮ー」「儒ー」「朝ー」「法ー」○廣く身に著くるもの、冠・履・劍など「冕ー」○もふく、喪中に著るきもの「喪ー」五ーは斬衰・齊衰・大功・小功・緦麻。又、喪に居る。○きる（著）佩ぶ、轉じて身につける、肌を離さぬ、忘れぬ「ー膺」○おもふ（思）○したがふ（從）聽從する「心ー」「威ー」「敬ー」「畏ー」「臣ー」「賓ー」「悅ー」○くだる（降）「降ー」呂覽、論威「敵已ー矣」○おこなふ（行）○つかさ（職）つとめ、職務。書、旅獒「使ー無廢其ー」○つとむ。其の職務をつとめる「ー務」「ー官」「ー田」○をさむ（治）○もちふる（用）○藥を飲む「ー藥」俗に藥を數ふるに一ー一といふ。○えびら、矢を盛る器「矢ー」＝箙。○四頭だての馬車の中央に在りて轅ナガをはさむ馬。他の左右の馬を驂といふ。詩、鄭風「兩ー上襄、兩驂雁行」○こと（事）○ならふ、ならす（習）「ー習」漢書、鼂錯傳「ー其水土」○ふくろふ（鴞）＝鵩。○周代の王畿の外の區域の稱、五ーは侯ー甸ー綏ー要ー荒。㊁はらばふ。

【服役】フクエキ　○兵役に從ふ。罪囚の苦役につく。○つかはれてつとめる。韓愈詩「ーー不レ爭言不レ讎」

【服忌】フキ　ぶくと、いみと。＝忌服。

【服義】フクギ　正義に從ひよる。孔子家語「畏レ天而敬レ人、ーレ而行レ信」

【服御】フギョ　天子の御用の衣服車馬の類。職國策「無レ非二大王之ーー一」

【服玉】フクギョク　かんむりをかざるたま。周禮、注「ーー冠飾二十二玉一」

【服劍】フクケン　つるぎを佩ぶ、おびたるつるぎ。淮南子「ーレ者期二子銛利一」

【服罪】フクザイ　つみにしたがひ服す、恐れ入る。蜀志、諸葛亮傳評「ーレ輸レ情者、雖レ重必釋」＝伏罪。

【服裝】フクソウ　みなり、よそほひ。

【服事】フクジ　○事につく。管子「ーレ任レ官」○歸服しつかへる、從ひつかへる。論、泰伯「三分天下一、有二其二一、以ーニ殷一」

【服習】フクシュウ　したがひなれる。聽從して習熟する。左傳「安二其教訓一而ーニ一其道」宋史「軍不二ーー一三也」

【服車】フクシャ　公事に用ふるくるま、公用の車。周禮、巾車、ーー之乘」

【服章】フクショウ　衣服のかざり、裝束のしるし。後漢書、注「漢明帝備二其ーー一」

【服從】フクジュウ　服ししたがふ。禮記、明君在レ上、則諸臣ーー」＝率從。

【服色】フクショク　著物のいろ、支那にては時代のかはると共にーーをあらたむ、夏の黑色、殷の白色、周の赤色を尙タフぶの類。禮、大傳「改二正朔一、易二ーー一」

【服食】フクショク　○服用する飲食物。書、旅獒「畢獻二方物一、惟ーー器用」○道家の養生法、丹藥を服用する義「神仙ーー方」は書名、十卷あり。

【服飾】フクショク　○衣服のかざり。漢書、王莽傳「ーー甚偉」○制服につけるしるし。周禮、春官「設二其ーー一」＝服章。

【服制】フクセイ　喪服の制度。又ひろく上下の身分相當の衣服のきまり。書經、傳「觀二示法象之ーー」

【服屬】フクゾク　○したがふ。漢書、黥布傳「諸侯兵皆ーー楚者、以二布數以レ少敗レ衆也」＝從屬・服從。○忌服のかかるみより。漢武帝詔「凡是宗戚有二ーー一者、並可レ賜二沐食一」

【服秩】フクチツ　制服と秩祿と。晉書、百官志「僕射ーー印綬、與レ今同」

【服田】フクデン　耕作に從ふ。書經「若二農ーレ力レ穡、乃亦有レ秋」

【服匿】フクトク　匈奴にて酒酪を盛る器。樂器に代用す。缶の類。漢書、蘇武傳「賜二武馬畜ーー窖廩一」

【服念】フクネン　おもふ。書經「要囚ーー、五六日至三于旬時一」

【服之不レ衷身之災也】フクノフチウシンノサイナリ　衣服の身に相當せざるは、人に怪まる、故に、身の災となる礙、衷は適。左、僖二四「鄭子藏出二奔宋一、好二象飾一、鄭伯聞而惡レ之、使二盜誘一之、八月、盜殺二之於陳宋之閒一、君子曰、ーー」

【服馬】フクバ　四頭立の馬車の中央にありて轅ナガをさしはさむ馬、他の左右の馬を驂といふ。詩、鄭風「兩服上襄」隋煬帝文「ーー顧而不レ能レ行」

【服佩】フクハイ　身につける。又、心に銘じて忘れず。＝佩服。

【服物】フクブツ　すべて身につける衣服器物の稱。禮記「以具二ーー一、以修二宮室一」

【服兵】フクヘイ　兵隊をそろへる。國語「中夜乃令レ一ーレ擾甲、係二馬舌一出レ火竈上」

【服務】フクム　つとめにつく「ーー規律」

【服藥】フクヤク　くすりを飲む。唐書「ーー以求二長年一」

【服用】フクヨウ　○身に著けもちふる。禮記「獻二其上一、而后敢ーニ一其次一」○國藥を飲む。

【服膺】フクヨウ　胸に著く、膺はむね、記憶して片時も忘れず。中庸「得二一善一、則拳拳ーー」

【服翼】フクヨク　蝙蝠カウモリの異名。揚子方言「蝙蝠自レ關而東、謂二之ーー一」

【服勞】フクロウ　ほねをりの仕事にしたがひつとめる。論、爲政「有レ事弟子服二其勞一」

【朋】ホウ　蒸

○とも、ともだち、師を同うする學友、同門のあひでし（友は同志のとも）「―友」「交―」「親―」○道藝・性行・事業を同うする者。易、坤卦「西南得―」○なかま（與）むれ（羣）○たぐひ（黨類）―は鳳の古字、鳳飛べば衆鳥之に從ふ、故に―黨の義とす。○つゐのたる（兩尊）「―酒」○古、貨幣に用ひし二つの貝。詩、小雅「錫我百―」

【朋愛】アイ　いつくしむとも。張說詩「斗酒貽二―一、蹴蹋出二御溝一」

【朋友】イウ　ともだち。論、公冶長「願車馬衣輕裘、與二―一共、敝之而無レ憾」＝友朋。

【朋友講習】カウシウ　同志の友相集りて學問を研究する。易、兌卦「麗澤兌、君子以――」

【朋義】ギ　ともだちのみち。韓維詩「尤見二―一教」

【朋故】コ　ともだち。盧照鄰詩「對レ酒懷二―一」＝朋知。

【朋儕】サイ　ともがら。元稹詩「銀翰屈二―一」＝同儕。

【朋書】ショ　なかま、ともがら。何遜詩「樞機慎二僕隸一、媒孽畏二―一」＝朋傳・朋輩。

【朋執】シフ　ともだち。盧思道、諫辭「內無二怙恃一、外寡二―一」

【朋黨】タウ　○なかま。○同類相結びて黨外の者を排斥する團體。歐陽修、朋黨論「―之說、自レ古有レ之」

【朋知】チ　ともだち。謝靈運詩「再與二―一辭」

【朋傳】デン　ともだち。蘇軾詩「我年二十無二―一、當時四海一子由」＝侶傳・朋儕。

【朋徒】ト　なかま。後漢書、儒林傳「―相視怠散」＝朋輩。

【朋輩】ハイ　身分年齡の同じくらゐなるとも。世範「不レ可三相規如二―一」＝同輩・朋儕・侶傳・儔侶。

【朋比】ヒ　かたよりて親みくみす。唐書、選舉志「鄉兄弟、―二―貴勢」

【朋類】ルイ　ともだち、なかま。魏志、鄧艾傳「艾心懷二至忠一而性剛急、不レ能レ協二同―一」

【朋儕】レイ　なかま。晉書「摩蓋二―一、稱爲二領袖一」＝同僚。

【有レ朋自二遠方一來ル】トモエンバウアリ　學問上達すれば朋が遠方よりたづね來りて教を請ふ。論、學而「――、不二亦樂一乎」

五畫

【朐】ク　虞

くびき（車軛）左、昭二六「繇」―汰軛」＝軥。

【朏】ヒツ　月尾　ハイ　隊

みかづき（三日月）

六畫

【朔】サク　覺

○ついたち、月の第一日「―旦」「月―」釋名、釋天「―、蘇也、月死復蘇生也」○轉じてはじめ（初始）禮、禮運「皆從二其―」○こよみ、古、天子が歲末に諸侯に頒ち與へたる來年十二箇月のこよみ。論、八佾「子貢欲去二告朔之餼羊一」轉じて天子の政令「奉―」○きた（北）の方「―方」「―北」「陰―」書、堯典、疏「―、北方也、―、盡也、北方萬物盡、故言―也」

【朔燿】イウ　北むきのまど。陸雲、登臺賦「闢二南窗一而蒙レ暑兮、啓二―一而履レ霜」

【朔氣】キ　北方の氣。上官儀、詠レ雪詩「禁園凝二―一、瑞雪掩二晨曦一」

【朔禽】キン　雁の異名、北方の鳥の義。謝靈運、山居賦「――避レ涼」＝朔雁。

【朔晦】クワイ　陰曆のついたちと、みそかと。漢書、李尋傳「――正二終始一、弦爲二繩墨一、望成二君德一」魏志、高堂隆傳「弦望――」

【朔月】ゲツ　月のついたち。儀禮、士喪禮、注）禮、玉藻「――少牢五俎四簋」＝期日。

【朔日】ジツ　ついたち。陰曆の月の第一日。詩經「十月之交、――辛卯」

【朔雪】セツ　北方のえびすの地のゆき。李白詩「迢迢五原關、――亂二邊花一」

【朔旦】タン　ついたちのあさ。書、大禹謨「正月――、受二命于神宗一」史記「――冬至、與二黃帝時一等」

【朔旦冬至】トウジ　ついたちのあさ、冬至の節に會ふ。十一月甲子朔旦冬至は、曆を制する起元となるなり（宋書、曆志）

【朔地】チ　北方のえびすの地、朔北の地。＝朔土・朔野。

【朔方】ハウ　○北の方。書、堯典「申命二和叔一、宅二―一、曰二幽都一」＝朔北。○北方の地名、――郡は今の內蒙古の鄂爾多斯。

【朔望】ボウ　陰曆の月のついたちと十五日と。後漢書、岑彭傳「以二――一問二大夫人起居一」宋史、岳飛傳「――設二祭于其家一」

【朔漠】バク　北方流沙の地、北方の沙漠の地。雪賦「河海生レ雲、――飛レ沙」杜甫詩「一去紫臺連二――一」

【朔風】フウ　きたかぜ。夏侯湛詩「――動二秋草一、邊馬有二歸心一」＝北風・朔吹。

【朔漠】バク　北方のつむじかぜ。何遜詩「――吹二宿莽一」

【朔邊】ヘン　北方のかたよりたる地。張正見詩、將軍定二――一、杜審言詩「爲許從レ我赴二――一」

【朔北】ホク　北方の地。李陵書「幾死二――之野一」

【朒】ヂク　屋　朒の正字

○ついたちづき。陰曆の朔に東方に見える月。○縮―はちぢまる、心寬かに伸びざる貌。漢書、五行志「王侯縮―不レ任事」

【朕】チン　寢

われ（我）おのれ、古は上下貴賤の別なく自稱に用ひしが、秦の始皇の二十六年以後、定めて天子の自稱とす。獨斷「古者上下共之、答繇與帝舜言、稱―、屈原曰「皇考」至「秦獨以爲尊稱」漢遂因之而不レ改也」

【朕兆】チウ　きざし、しるし。温岐賦「窮二勝負于――」

【朕】チン　篠

○みそかづき、晦に西方にあらはれる月。○月かたむく

【朕】チン　侵

（月側）

七畫

【朕】セン　先

ちぢまる、ちぢむ（縮）へる。漢書、董仲舒傳「民日削月―」人民が日日月月に弱る。

【望】バウ・マウ　陽　バウ・マウ

○のぞむ、遠く見わたす「遠―」「眺―」○ねがふ（願）「希―」「企―」○のぞみ「志―」○ねがひ「欲―」○やうす（外貌）○―ははづる（慚愧）一說に、立ち去りて後を顧みざる貌、又、心を失ふ貌。○うかがふ（覗）「覘―」○ほまれ、人に仰がれる「人―」「德―」○うらむ、うらみ責む「怨―」史、袁盎傳「絳侯―＝袁盎」○もち、陰曆十五日の夜。此日、日月相望み向かふ、故にいふ。蘇軾、後赤壁賦「是歲十月之―」○柴をたきて山川の神を祭る。又、其の祭。書、舜典「―于山川」

【同訓異義】望・臨・涖・蒞・眺　○望は高きをのぞみ、遠きを望むなり、又人に仰ぎて、見上げられるにも用ふ、人望・名望の類なり。詩經「萬民所レ望」また高遠を望むより、心に不滿に思ひてうらむ義にも轉用す、怨望・觖望の如し。○臨は高きより見下すなり。詩經「戰戰兢兢、如レ臨二深淵一」又身分の尊き人が、卑き人にのぞむにも用ふ、君臨・臨レ政の類。○涖は莅に同じ、臨と同義にしてせまし。孟子「莅二中國一而撫二四夷一」○眺は遠くをながめ望むなり、可二以遠眺望一の類。

【望雲之情】ジヤウ　子の親を思ふこころ。舊唐書、狄仁傑傳「仁傑登二太行山一、反顧、見二白雲孤飛一、謂二左右一曰、吾親舍二其下一、瞻悵久之」

【望遠】エン　とほきをのぞむ。韓愈文「窮居而野處、升レ高而―レ―」

【望遠鏡】キヤウエン　遠距離にある物體を明かに見るに用ふるめがね、反射――と屈折――との二種あり、とほめがね。＝縮遠鏡・千里鏡。

【望氣】キ　空の雲氣を見て吉凶を占ふ。史、武帝紀「上乃遣二―佐候二其氣一」

【望鄉】キヤウ　ふるさとをこひおもふ。韋莊詩「帶レ雨晚駝鳴二遠戍一、―レ―孤客倚二高樓一」＝思鄉・懷鄉。

【望魚】ギ　たちのうを。＝太刀魚。

【望外】グワイ　おもひのほか、期待せし以上「――の幸」

【望蜀】ショク　切に望む意。孟、梁惠王「民望之、若二大旱之望二雲霓一也」

【望月】ゲツ　○もちづき、滿月、陰曆の十五夜の月。○月をながめる。韋應物詩「四樓―レ幾回圓」

【望見】ケン　はるかにのぞみみる。漢書、郊祀志「天子自二雒中一――焉」

【望祭】サイ　山川のまつり。字解參看。書、舜典、傳「九州名山、大川五嶽、四瀆之屬、皆一時―二之一」

【望子】シ　かんばん。廣韻「青帘、酒家――」帘は旗の一種。

【望祀】シ　柴を燔きて山川をまつる。周禮、夏官「男巫掌――」史、秦始皇紀「至二雲夢一、―二虞舜於九疑山一」＝望祠・望秩。

【望春】シユン　辛夷の異稱。

【望舒】ジヨ　月の馭者。楚辭「前二――一使二先驅一兮」

【望色】ショク　顏色をながめ見る。史、扁鵲傳「越人之爲レ方也、不レ待二切脈、――レ聽レ解」

【望蜀】ショク　利を貪りて足ることを知らざる義、足る上にもなほ足らんことを求むる。後漢書、獻帝紀「司馬懿言二於曹操一曰、今克二漢中一、益州震動、進兵攻之、勢必瓦解、操曰、人苦レ無レ足、既得レ隴復―レ―」

【望族】ボク　鄉黨に推重せらるる家がら。秦觀文「王謝二氏、最爲二――一、江左以來、公卿將相、出二其門一者十七八」

【望臺】ダイ　ものみやぐら。＝望樓。

【望塗】ボク　出世をのぞむ。柴邊を希望

する。陳子昂文「臣本蜀之匹夫、官不レ—レ—」

【望秩】ボウチツ　望祀に同じ。漢書「禱二祀神祇一—二—山川」

【望塵】ボウヂン　○ちりの起るを見る。五代史「周德威勇而多智、能—レ—知敵數」○客の來るを待つ義。晉書「石崇與二潘岳一諂二事賈謐一、廣成君、每レ出崇降二車路左一、—レ—而拜」

【望帝】ボウテイ　杜鵑ホトトギスの異名。華陽國志「周失二綱紀一、蜀王杜宇稱レ帝曰二—一、爲レ蜀除二水患一有レ功、後禪レ位、升二西山一隱焉、時適二二月子規鳴一、因名二子規一、曰二杜宇一、曰二—一—」成都記「—魂化爲レ鳥、名曰二杜鵑一」

【望洋】ボウヤウ　○失意の貌。禮、檀弓「—焉、如二有レ從而弗レ及」○慙づる貌。一解、去りて顧みざる貌。孟、公孫丑「—然去レ之」

【望風】ボウフウ　○風采を想望する。李陵文「—レ—懷想」○風聲を仰ぎ望む。阮籍文「—レ—震慄」

【望夫石】ボウフセキ　遠方に行く夫の離別を悲み、遂に其後姿を望み、こがれ死にて化せしといふ石。神異經「武昌北嬀望レ夫、化而爲レ石」

【望蜀】ボウショク　のぞみしたふ。劉禹錫詩「—結不レ解、貽二爾新詩文一」＝仰慕。

【望羊】ボウヤウ　遠く視る、とりとめなし。史、仲尼世家「其爲レ人、黯然而黑、幾然而長、眼如二—一」＝望洋。

【望洋】ボウヤウ　廣くしてあてもなき貌。吳萊詩「寄レ言漆園叟、此去眞—一」＝望羊。

【望履】ボウリ　長者貴人に謁せんことを願ふ義。面を拜すといふを謙して其の履を望むといふ。陸游詩「袖レ詩叩二東府一、再拜求二—一」

【望槽】ボウロウ　ものみやぐら。左傳、注「樓車、車上—一」＝望樓・望臺。

【望樓】ボウロウ　○ものみやぐら。邵謁詩「唯有ヨ—一對二明月一」○國遠望に適する海岸に設けある海軍用の物見臺。

【朗】　ラウ　養　又、朗に作る

○ほがらか、あきらか（明）「清—」「高—」「爽—」「明—」「疏—」○清く徹トホる「—詠」

【朗詠】ラウエイ　○清くほがらかに歌ふ。孫綽、遊二天台山一賦「—二—長川一」＝朗吟。國○古、漢詩文の秀句を訓讀に和げて謠ひし節フシ。○和漢—集は四條公任撰、和歌と漢詩文との類似の者を竝擧し—の資とす。

【朗吟】ラウギン　ほがらかにうたふ。鄭谷詩「惟有二—一賞二晚景一」＝朗詠。

【朗月】ラウゲツ　あきらかなるつき。陸機詩「—照二閑房一」＝明月。

【朗悟】ラウゴ　智あきらかにさとし。宋史、高宗紀「資性—一、博學强記」＝敏悟・朗達・聞悟・明悟・英朗・聰朗。

【朗照】ラウセウ　ほがらかにひかりてらす。雲笈七籤「三光—一、五神澄清」

【朗嘯】ラウセウ　ほがらかにうそぶく。王績文「高吟—一、挈二榼攜レ壺」

【朗然】ラウゼン　ほがらかなる貌。晉書、衛玠傳「若二明珠之在レ側、—一照レ人」＝朗朗。

【朗達】ラウタツ　ほがらかにしてひろ〳〵通達する。晉書、孫盛傳「神情—一、常有二世外之懷一」＝通朗・明達。

【朗旦】ラウタン　夜がからりとあけたる頃。支遁詩「鳴禽戒二—一」

【朗暢】ラウチヤウ　ほがらかにしてのびやか。文賦「論精微而—一」＝朗通。

【朗笛】ラウテキ　ほがらかなるふえの音。陸機賦「賞鼓密而含レ響　—一疎而吐レ音」

【朗讀】ラウドク　ほがらかによむ。賈奎詩「閉レ門謝二塵鞅一、展レ卷自—一」＝朗誦。

【朗抱】ラウハウ　くもりなきこころ。抱は懷抱。李羣玉詩「—一雲開レ月、高情鶴見レ秋」

【朗拔】ラウバツ　あきらかにしてすぐれる。陸機文「風度蕭曠、器識—一」

【朗朗】ラウラウ　ほがらかなる貌。世說、容止「時人目二夏侯太初一、—一如二日月之入レ懷」＝朗然。

【朗】　八畫

【期】　キ　支

○あふ（會）會ふべき時。○ときめたる日時「愆—」「弛—」○とき（時）「花—」○あてる（當）目あてをつける。○かならず（必）左、哀十六「—死、非レ勇也」○をはる（卒）○まつ（待）○ちぎる（約）「心—」詩、鄘風「—我乎桑中」○まこと（信）○かぎる（限）約束の日を限る。○さだめる。○ひとまはり（一周）＝朞。○百年。曲禮「百年曰—一頤」○一年の喪「—服」○—はどもる（口吃）

【期頤】キイ　百歲の齡。曲禮「百年曰—一」頤は養、飲食居處皆人に養はれる。

【剋期】コクキ　期限を定める。後漢書、鍾離意傳「解二徒桎梏一與—レ—俱至」＝刻レ期。

【弛期】シキ　期限をのばす。韓詩外傳「羣臣請レ—レ—」

【期閒】キカン　豫め定めし年月日時の閒。

【期期艾艾】キキガイガイ　口のどもる義。書言故事「口訥曰二——一」史、張丞相傳「周昌爲レ人吃、又盛怒曰、臣口不レ能レ言、然臣期期知二其不可一」期は必。世說、言語「鄧艾口吃、語稱二艾艾一」

【期會】キクワイ　時を約して集る。又、其の

をり。史、項羽紀「—一面擊レ楚」

【期月】キゲツ　○滿一箇月。中庸「擇二乎中庸一而不レ能二—一守一也」○滿一周年。論、子路「苟有二用レ我者一、—一而已可也」

【期限】キゲン　時閒のかぎり。劉孝威詩「乘レ障無二—一、思レ歸安可レ論」

【期日】キジツ　日を定める。又、定めたる日、日限。周禮、命三萬民時斬レ材、有二—一」

【期成】キセイ　必ず成さんと志す「—一同盟會」＝必成。

【期成原因】キセイゲンイン　當然の結果を生ずる原因。

【期節】キセツ　をり、時節。＝季節・時候。

【期待】キタイ　あてにしてまつ。王褒詩「眄二余猶二弟兄一、往往過二—一」

【期內】キダイ　一定の時限內。周禮「—一之治聽、期外不レ聽」

【期年】キネン　滿一箇年。史、燕世家「不二—一、千里馬至者三」＝一周年。

【期望】キバウ　あてにしのぞむ、期待して望む。劉浩詩「—一秋風回、一掃無二餘翳一」

【期服】キフク　一箇年の喪。＝齊衰

【期滿免除】キマンメンジヨ　法律上、一定の期限を經過するによりて刑の執行又は義務の履行を免ぜられる義。

【期門】キモン　○後漢の時の天子の護衛兵（後漢書、儒林傳）○軍門。李華、弔二古戰場一文「主將驕敵、—一受レ戰」

【朞】　キ　支

めぐる（匝）一周。書、堯典「—三百有六旬有六日」期に通ず。

【朞年】キネン　滿一箇年。＝期月。○滿一ヶ月。

【朞月】キゲツ　○滿一箇年。＝期月。○滿一ヶ月。

【朞年】キネン　滿一箇年。晉書、周處傳「志存二義烈一、言必忠信、克レ己—一」

【朝】　テウ　蕭　又、晁に作る

○あした、あさ（旦）轉じて一日、一時などの義に用ふ。論、顏淵「一日之忿忘二其身一」○つと（早）○めす（召）○とふ（訪）尋ねる。史、司馬相如傳「臨邛令繆爲レ恭敬、日往—一相如一」○あつまる（會）禮、王制「耆老皆二于庠一」○君主が政をとり行ふ所「—廷」論、鄉黨「—與二下大夫一言」○やくしょ（官廳）○我が君主の治下。○一人の君主在位閒の稱。○一系の君主がつづきて統御する閒「漢—」「唐—」「南北—」○朝廷へ出る、參內する、臣が君にまみえる「參—」○向かひ行く、至る。書、禹貢「江漢二朝宗于海一」○花—は花ざかりのあさの義にて陰曆二月十五日の異稱。

【朝霧】チウム　あさのもや。江淹賦「—一方卷、鄙氣已鄙」

【朝衣】チウイ　朝廷に出づる制服。岑參詩「北山疎雨點—一—」＝朝服。

【朝威】チウイ　天子の威光。後漢書、趙岐傳贊「分卿出レ礪、專命二—一」

【朝意】チウイ　朝廷の意思。又天子のおぼしめし。＝朝旨。

【朝葬】チウサウ　朝廷ののり。武后文「上不レ汨二於—一、下無レ招二於官謗一」＝皇葬。

【朝右】チウイウ　朝廷の高官。南史、何承天傳「性剛愎、不レ能レ屈二意—一」

【朝隱】チウイン　朝廷に仕官すれども隱士の心操を守る義。揚子法言、淵騫「或問、柳下惠非二—一者一歟」

【朝雲】チウウン　○あさのくも。宋玉、高唐賦「旦爲二—一、暮爲二行雨一」○蘇軾の妾の名。蘇軾、朝雲詩序「予家有二數妾一、相繼辭去、獨—一隨レ予南遷」

【朝雲暮雨】チウウンボウウ　男女のちぎり、情交。前條參看。巫山（五六〇頁上段）の故事に本づく。

【朝謁】チウエツ　朝廷にて君に謁見する。杜甫詩「槐門頻—一、何如穩畫眠」

【朝宴】チウエン　朝廷のさかもり。顏延之詩「陪廁廻二天願一、—一留二聖情一」

【不レ崇レ朝】フスウチウ　朝の閒、朝はあさ起きてより食事するまで。詩、衞風「誰謂二河廣一、曾不レ容レ刀、誰謂二宋遠一、曾—一」

【朝恩】チウオン　朝廷のめぐみ。舊唐書、李元通傳「吾荷二—一、作二藩東夏一、當守二臣節一、以レ忠報レ國」

【輟レ朝】テツチウ　廢朝に同じ、朝廷の政事を休む。事物紀原「唐會要、開元十八年十一月、張說奏、—一—惡二元會一」

【朝家】チウカ　帝王のいへ。戴復古詩「—一遣レ使嚴二祀典一」＝皇家・皇室・帝室・王家。

【朝賀】チウガ　朝見して賀詞を述べる。又、其の賀詞、よどと。韓愈詩「大開二明堂一受二—一」

【朝衙】チウガ　あさ早く朝廷に出勤する。白居易詩「城上鼕鼕鼓、—一復晚衙」＝早衙。

【朝綱】チウカウ　朝廷ののり。薛能詩「諫紙應二無用一、—一自有レ倫」

【朝霞不レ出門】チウカフズモン　朝やけは雨ふる兆、故に門を出でずといふ俚諺。范成大詩「朝霞不レ出レ市、暮靄行二千里一」暮靄は晴れる兆。

【朝歌夜絃】チウカヤケン　朝夜の別なく音樂を奏する義。杜牧、阿房宮賦「——、爲二秦宮人一」

【朝紀】チウキ　政府ののり。朝廷の風紀。＝朝綱。

【朝規】チウキ　朝廷のおきて。沈約文「必能孚二—一、子遵鄙一」＝官規。

【朝飢】チウキ　あさうり、朝の空腹。李白

詩「他筵不レ下レ箸、此席忘ニ一一」

【朝寄】チヤウキ　朝廷よりの委任。晉書、謝安傳「安雖レ受ニ一一、然東山之志、始末不レ渝」

【朝貫】チヤウクワン　貫くして權勢ある朝臣。齊書、王秀之傳「未ニ嘗詣ニ一一」

【朝暉】チヤウキ　あさひ　ひのひかり、暉は日光。杜甫詩「千家山郭靜ニ一一」、范仲淹、岳陽樓記「一一夕陰、氣象萬千」＝晨暉。

【朝儀】チヤウギ　朝廷に於ける儀式、典禮。周禮、夏官「正ニ一一之位、辨ニ其貴賤之等ニ」

【朝議】チヤウギ　朝廷の相談。歐陽修詩「前年辭ニ諫署ニ、一一不レ容レ乞」＝廟議。

【朝曦】チヤウギ　あさひ。李德裕詩「含ニ輕煙於夕景、泫ニ零露于一一」＝朝旭・朝暾。

【朝菌】チヤウキン　あさ生えて晩に枯れるといふきのこ。轉じて極めて短命なる譬に用ふ。莊子「一一不レ知ニ晦朔、蟪蛄不レ知ニ春秋」＝蟑蛄・槿花・朝露・朝槿。

【朝槿】チヤウキン　むくげ、朝に開き夕にしぼむ。故にうつろひ易きものに喩ふ。王僧孺詩「妾意在ニ寒松、君心逐ニ一一」＝木槿。

【朝覲】チヤウキン　天子にまみゆ。孟、萬章「一一訟獄者、不レ之レ益、而之レ啓」

【朝旭】チヤウキ　あさひ。馮子振賦「一一晉而西檣透明」＝朝暾・曉暾。

【朝化】チヤウクワ　朝廷の教化。隋書、申ニ國威于萬里、宣ニ一一于一隅ニ」

【朝會】チヤウクワイ　臣下が朝廷にあつまる。晉書「元熙元年、改レ元不ニ一一」

【朝光】チヤウクワウ　あさひのひかり。宋史、律歷志「鷄唱詞、一一發、萬戶開、羣臣謁」

【朝官】チヤウクワン　今の勅任官以上。宋史新編「凡ニ品以下、常參之者、謂ニ之一一、祕書郎以下、未ニ常參ニ者、謂ニ之京官ニ」

【朝觀夕覽】チヤウクワンセキラン　朝夕にみる。張玄遠、名畫記「高平公進ニ書畫ニ表曰、前代帝王、多求ニ遺逸ニ、一一、收ニ鑒于斯ニ」

【朝闕】チヤウケツ　帝王の居所。李中詩「慷慨辭ニ一一、迢遙涉ニ路塵ニ」＝宮闕。

【朝見】チヤウケン　臣下が參內して天子に拜謁する。＝朝謁・朝覲。

【朝肴】チヤウケン　朝廷のめぐみ。魏書「荷ニ一一、未ニ敢仰從ニ」＝朝恩・天恩。

【朝憲】チヤウケン　朝廷ののり。梁書、謝幾卿傳「性通脫、會レ意便行、不レ拘ニ一一」＝朝章。

【朝權】チヤウケン　まつりごとの權力。晉書、陶侃傳「侃季年懷ニ止足之分、不レ與ニ一一」＝政權・政柄・朝柄。

【朝謨】チヤウケン　お上のしかり。＝天謨。

【朝貢】チヤウコウ　諸侯又蠻國などが天子に來朝してみつぎものをたてまつる。＝朝獻。

【朝座】チヤウザ　朝廷の席次。宗文視詩「東蜚蓋ニ一一、西桃獻ニ夜宮ニ」

【朝裁】チヤウサイ　朝廷のさばき。＝天裁。

【朝霜】チヤウサウ　あさしも。左思詩「秋風何烈烈、白露爲ニ一一」

【朝參】チヤウサン　官人が朝廷にまゐる。杜甫詩「顏怪一一懶」

【朝散大夫】チヤウサンダイフ　朝官のみにして其の職掌なき大夫、文武官吏の德望ある者に賜はる資格。文獻通考、職官考「一一、隋置散官、唐因レ之」

【朝三暮四】チヤウサンボシ　宋の狙公の故事により、詐術を用ひて人を愚弄するにいふ。列、黃帝「宋有ニ狙公者ニ、愛レ狙、養レ之成ニ羣、能解ニ狙之意ニ、狙亦得ニ公之心ニ、將レ限ニ其食ニ、先誑レ之曰、與ニ若芧ニ、朝三而暮四、足乎、衆狙皆起而怒、俄而曰、與ニ若芧ニ、朝四而暮三、足乎、衆狙皆伏而喜、物之以ニ能鄙ニ相籠ニ、皆猶ニ此也、聖人以ニ智籠ニ衆愚ニ、亦猶ニ狙公之以ニ智籠ニ衆狙ニ也、名實不レ虧、使ニ其喜怒ニ哉」

【朝士】チヤウシ　○周代の官名。周禮、秋官「一一掌ニ建邦外朝之灋ニ」○朝廷に仕官せる士。劉禹錫詩「休レ唱貞元供奉曲、當年一一已無ニ多」

【朝市】チヤウシ　○官府と市場と。○朝開く市。周禮、司市「一一朝時而市、商賈爲レ主」

【朝次】チヤウジ　朝廷の席次。後漢書「修レ身行レ義、應レ在ニ一一」＝朝列。

【朝旨】チヤウシ　朝意に同じ。

【朝臣】チヤウシン　○朝廷に出仕する役人。史、灌夫傳「上問ニ一一」○天子の近臣。姓氏の名、第二等に位するもの。又四位以上の爵位ある人の敬稱。

【朝秦暮楚】チヤウシンボソ　住所の定らざる義、朝は秦に在りて暮には楚に在る。晁補之、北清亭賦「托ニ生理于四方、固朝秦而暮楚」

【朝社】チヤウシヤ　朝廷と社稷と。王微詩「社情抃ニ驅馳、孤氣掛ニ一一」

【朝章】チヤウシヤウ　朝廷の典章。後漢書、胡廣傳「達ニ祿事體、明ニ解一一」

【朝從】チヤウジユウ　朝見と扈從とと、參內とお供と。史、淮陰侯傳「信知ニ漢王長ニ惡其能、常稱レ病不ニ一一」

【朝宿邑】チヤウシユクイフ　諸侯の大功ある者に對し、入朝する時、宿泊する爲めに賜はる京郊の采地。公羊傳「天子之郊、諸侯皆有ニ一一」

【朝種暮穫】チヤウシユボククワク　朝うゑてくれにかる、時日の無き喩。晉書、祖納傳「一一、善惡未レ定矣」

【朝膳】チヤウゼン　○あさめし、朝の食事。＝朝飧。○おんしやうぜん　朝餐。○國朝飯、又天子の朝の供御。

【朝升】チヤウシヤウ　あしたに官位がのぼる。張耒詩「終身軒冕亦何賴、況有ニ一一而暮黜ニ」

【朝鐘】チヤウシヤウ　あさつくかねの音。李咸用詩「一一暮鼓不レ到レ耳、明月孤雲長挂レ情」＝晨鐘・曉鐘。

【朝政】チヤウセイ　朝廷のまつりごと、廟堂の政治。張衡、東京賦「詢ニ一一」

【朝隮】チヤウセイ　朝早く雲氣上る。詩、曹風「蒼今蔚今、南山一一」

【朝生暮死】チヤウセイボシ　朝生は木槿ゲキキン。朝榮え夕に死す。人の短命に喩ふ。戰國策「君危ニ於累卵ニ、而不レ聽ニ於朝生ニ」

【朝夕】チヤウセキ　○あさゆふ。左、昭三「小人近レ市、一一得レ所レ求」＝旦暮・朝暮・朝晡・朝昏。○あさづとめと、夕づとめと。周禮、夏官「道僕」注「朝見曰レ朝、暮見曰レ夕」○あけくれ、ふだん、平生。

【朝齏暮鹽】チヤウセイボエン　朝にはなづなを食ひ、暮には鹽をなめ、極貧の生活。韓愈、送窮文「大學四年、一一」

【朝宗】チヤウソウ　○諸侯の天子に謁見する義。春見を朝、夏見を宗といふ。○轉じて、多くの河水の海にあつまり注ぐにいふ。書、禹貢「江漢一一于海ニ」

【朝奏夕召】チヤウソウセキセウ　朝上書して夕に召される、早く任用せらるる義。唐書、魏元忠傳「布衣之人、懷レ奇抱レ策、而望ニ一一、豈易レ得哉」

【朝奏暮召】チヤウソウボセウ　前條に同じ。史、主父偃傳「乃上ニ書闕下、一一、入見所言九事、其八事爲ニ律令ニ、一事諫レ伐ニ匈奴ニ」

【朝飧】チヤウソン　あさめし。杜甫詩「一一是草根、暮食乃樹皮」＝朝餐・朝饗・朝食・朝鑿。

【朝鑿】チヤウソン　前條に同じ。李端詩「貴者已一一」＝朝饗。

【朝堂】チヤウダウ　一國の大政の出づる所、朝廷をいふ。後漢書、明帝紀「公卿百官以ニ帝威德懷レ遠、祥物顯應ニ乃竝集ニ一一、奉レ觴上壽ニ」＝朝廷・政事堂。

【朝直】チヤウチヨク　朝廷のとまりばん。鄭谷詩「一一叨居省閣閒」

【朝廷】チヤウテイ　一國の大政の出づる所。禮記「一一之美、濟濟翔翔」

【朝庭】チヤウテイ　前條に同じ。

【朝朝】チヤウテウ　まいあさ。梁簡文帝詩「綠葉一一黃、紅顏日日異」＝旦旦。

【朝朝暮暮】チヤウテウボボ　毎朝毎晩。宋玉、高唐賦「白居易、長恨歌「蜀江水碧蜀山青、聖主一一情」

【朝嘲】チヤウテウ　鳥があさなく。禽經「山鳥一一、水鳥夜啄」

【朝敵】チヤウテキ　國天子に敵するもの。

【朝典】チヤウテン　朝章に同じ。

【朝暾】チヤウトン　あさひ。韋應物詩「帝宅夾ニ清洛、丹霞捧ニ一一」＝曉暾・朝旭。

【杖レ朝】ジヤウチヤウ　老人の年八十に至るものは朝廷にて杖をつくことを許される。禮、王制「五十杖ニ於家、六十杖ニ於鄉、七十杖ニ於國、八十杖ニ於朝ニ」

【朝紡】チヤウバウ　朝、絲をうむ。李子卿、聽ニ秋蟲ニ賦「不ニ語一一、含ニ嘲夜織」

【朝班】チヤウハン　朝廷の席次、班は列次。唐會要「景龍三年左臺御史崔湜、彈ニ一一不ニ肅」＝朝列。

【朝飯】チヤウハン　朝めし。蘇軾詩「卻到ニ龜山ニ未ニ一一」

【朝服】チヤウフク　朝廷に出づる制服。論、鄉黨「吉月必一一而朝」＝朝衣。

【朝聞夕改】チヤウブンセキカイ　朝に過を聞けば、夕に改める。晉書、周處傳「古人貴ニ一一、君前途尙可ニ且患ニ志之不レ立、何憂ニ名之不ニ彰」

【朝聞夕死】チヤウブンセキシ　あさ人道の教を聞きて知れば其の夕に死しても遺憾はない。論、里仁「子曰、朝聞レ道、夕死可矣」に本づく。

【朝柄】チヤウヘイ　政の權力。漢書、劉向傳」＝朝權。

【朝聘】チヤウヘイ　諸侯が天子の御機嫌をうかがふ。左、襄八「公如レ晉、朝且レ聽ニ一一之數ニ」

【朝晡】チヤウホ　あさの膳。陳子昂文「一一夕膳、餧レ色承レ歡」＝朝饗。

【朝晡】チヤウホ　あしたと、ゆふべと。魏志、董卓傳、注「一一上レ飯、何用レ米爲」、白居易詩「一一殞ニ餅餌ニ、寒暖賜ニ衣裳ニ」＝朝夕・朝昏・朝暮。

【朝謨】チヤウボ　朝廷のはかりごと。沈約文「一一謹廟、宰略遐震」

【朝暮人】チヤウボイ　命の旦夕に迫れる人。罪ゆりて、間もなく死に就く人。漢書、楊惲傳「大僕定有ニ死罪數事、一一也」

【朝務】チヤウム　朝廷のまつりごと。南史、齊豫章王嶷傳「嶷不レ參ニ一一而言レ事、密謀多見ニ信納」

【朝饗】チヤウキヤウ　あさのきり。七命「踐ニ一一、越ニ春面ニ」唐太宗詩「寒野凝ニ一一、霜天散ニ夕霞ニ」＝曉霧。

【朝命】チヤウメイ　朝廷の命令。耶律楚材詩「奉レ表遵ニ一一、欲レ王建ニ霸業ニ」

【朝名市利】チヤウメイシリ　名を爭ふは朝廷に於てし、利を爭ふは市上に於てする義。戰國策「張儀曰、臣聞、爭レ名者於レ朝、爭レ利者於レ市、今三川周室、天下之市朝也」

【朝野】チヤウヤ　朝廷と民間とを。晉書、杜預傳「一一清晏」張協詩「昔在四京時、一一多ニ歡娛ニ」

【朝陽】チヤウヤウ　○山のあさひに向ふ處。爾雅、「山東曰一一」詩、大雅、卷阿「梧桐生矣、于ニ彼一一」○あさひ。呂溫詩「背喜一一滿、心憐暮鳥遲」＝旭日・朝旭・朝暾・朝暉・朝曦・晨暉。

【朝蠅暮蚊】チヤウヨウボブン　朝には蠅あつまり、暮には蚊さわぐ、小人のはびこるに喩ふ。韓愈、雜詩「朝蠅不レ須驅、暮蚊不レ可レ拍」

【朝來】チヤウライ　あさはやくより。世說「四山一一、致ニ有ニ爽氣ニ」

【朝令暮改】チヤウレイボカイ　朝に令を下して、夕にあらためる。法令の頻繁に改まる義。蘇鐵、論ニ貴レ粟、急改暴虐、賦斂不レ時、朝令而暮改」

【朝列】チヤウレツ　朝官の列位。謝靈運詩「脫レ冠謝ニ一一」＝朝班。

【朝露】チヤウロ　あさのつゆ、はかなきものの喩。漢書、蘇武傳「人生如ニ一一、

○月部（八—十六畫）朝・朦・朧・朮・朴・朱・朶・朵・朸・朹・朻・朼・朽・朾・朿・杀・杁・杂・杂・杂

【木舟】モクシウ　○石斛に似たる草の名。本草「一一中盧如木、長尺餘、但色深黃光澤耳」○常綠喬木の一種、庭に栽ゑて賞玩す、夏、四瓣の小白花を著く。

【木居士】モクコシ　自然木にて造れる神佛の像。韓愈、題「――」詩「火透波穿不レ計春、根如二頭面一、幹如レ身、偶然題作二――一、便有二無窮求一福人一」

【木造】モクザウ　木にてつくる「――家屋」

【木像】モクザウ　木造の似姿ニガタ　木造の偶像。葛長庚文「――入レ廟、而汗流」

【木耳】モクジ　きくらげ。本草「――生二于朽木之上一、無二枝葉一」

【木食】モクジキ　國にたきしたる食物を食はず、木の葉又は實ばかりくふ「――仙人」

【木芍藥】モクシヤクヤク　牡丹ボタンの異名〔通志〕

【木星】モクセイ　太陽系中の第九に位する最大遊星、五個の衛星を有す。＝歲星。

【木犀】モクセイ　もくせい、桂カツラの一種。

【木珊瑚】モクサンゴ　けんぽなしの異名。

【木賊】モクゾク　とくさ、草の一種、有節無葉一二尺の莖を叢生す、莖は物を研磨するに用ふ。

【木奴】モクド　柑橘の異名。玉堂閒話「柑號二――一、橘亦曰二――一」襄陽耆舊傳「李衡種二橘千株一、曰、吾有二千頭――一」

【木豆】モクトウ　木造のたかつき。爾雅「――謂二之豆一、竹豆謂二之籩一」

【木馬】モクバ　木造の馬、乘馬練習、又遊戲用とす。

【木杯】モクハイ　木にて造りしさかづき。唐書、韋嗣立傳「――藤盤」

【木笑蓉】モクセウヨウ　芙蓉に同じ。王安石詩「水邊無數――、露滴胭脂色未レ濃」

【木母】ボク　梅の異名、梅は梅に通ず。爽堅志「――、梅也」

【木本】モクホン　○さのねもと。國語「伐レ木不レ自二其本一、必復生」○樹木。草を草本といふの對。

【木綿樹】モクメンジユ　わたの木。張勃、吳錄「交趾安定縣有二――一、高丈餘、翻譯名義集「刦貝卽木綿也（中略）狀如二芙蓉一有レ殼、剖以出レ花、如二柳絮一、可二初爲一レ布」

【木蘭】モクラン　○一種の香草。○あららぎ。漢書、司馬相如傳「――爲二君欄一」○もくれんげ。洛陽花木志「――似二木筆一、但木高丈餘、開花與二牡丹一同時發」

【木蓮】モクレン　芙蓉フヨウの異名。花木志「――、葉似二辛夷一、花類レ蓮」＝拒霜・木芙蓉。

【木王】モクワウ　あづさの異名。古今註「梓爲二――一」

【木從繩則正】キジユウニシタガヘバ　曲木も繩をあてて削れば、正しく成る。書、說命「――、后從レ諫則聖」

【木實】ボク　國旅人が食料を自辦し、廚炭の代金のみを宿屋に拂ふはたど

「――宿」＝木錢セン

【木強則折】キヤウナレバ　木の強きものは、風雪などに折れ易し。柳に雪折れなしといふ里諺の反對。淮南、原道訓「兵強則滅、――、革固則裂、齒堅二於舌一、而先レ之敝」

【木戶】ボク　國○城の門。○通路、又、演藝場の出入口。

【就レ木】ツクニ　棺に入る、死をいふ。左、僖二三「又如レ是而嫁、則――焉」

【緣木而求レ魚】ウオヲモトメ　望みて到底得べからざるに喩ふ。孟、梁惠王「以二若所レ爲、求二若所レ欲、猶二緣レ木而求レ魚也」＝上レ山求レ魚。

【木遣歌】キヤリ　國多人數にて重物を動かす時、力を揃へる爲めに歌ふ歌。

【木乃伊】ミイラ　○乾きて固まりたる人體、古、埃及エジプトにて死體に藥を塗りて腐敗を防ぎたるもの。＝耕錄「回回地、有下年七十八歲老人、自願二捨レ身濟レ衆者一、絕不二飲食一、惟澡レ身啖レ蜜、經レ月便溺、皆蜜、既死、國人殮以二石棺一、乃滿用レ蜜浸、鎖二志歲月於棺蓋一、瘞レ之、俟二百年後一、啓レ封、則蜜剩也、凡人損二折肢體一、食二少許一立愈、雖二彼中一亦不二多得一、俗曰二蜜人一、番言二――一」＝死屍。○轉じて、すべて生物の化石せしもの。

【朮】ヒン　蘇

○あさぎれ（麻片）○麻の莖と皮とを分ける。

【札】サツ　黠

○ふだ、薄く小さき木簡、紙なき時代に文字を記せし者。＝牒。○かきもの、てがみ（文書）「書一」「筆一」「手一」「芳一」○わかじに（夭死）「夭一」左、昭二「民不夭一」○かい（櫂）○よろひのさね（甲葉）「甲一」左、成十六「射之徹七一焉」○――は物の聲。國○ツ紙幣。○ダフ社寺のまもりふだ「守一」

【札輪】カツリン　てがみ、かきもの。魏書、夏侯道遷傳「閒二習尺牘一――、往來莅有二意理一」＝簡札・翰札。

【札記】サツキ　各條に分ちて記述する、條舉して記する。札は小木簡。

【札瘥夭昏】サツコウサツ　札は大疫にて、瘥は小疫にてわかじにする、夭はわかじに、昏は生れて未だ三月に滿たずして死する、一說にきちがひ。左、昭十九「鄭國不夭、寡君之二三臣、――」

【札札】サツサツ　○蟬のこゑの形容。爾雅、注「其鳴無レ韻、但――然」○鋤にてすきかへす聲。柳宗元、田家詩「――未耜聲」○はたを織る聲。古詩「――弄二機杼一」、

【札牒】ツチ　てがみ。＝札翰。

【朮】㊀ジツ　質　㊁ヂツ　質

㊀もちあは（黏粟）＝秫。㊁をけら、うけら、やまあざみ（山薊）山野に自生する藥用植物の一、白赤二種あり「白一」「赤一」「蒼一」

【末】バツ　曷　通音マツ

○する。本の對。こずゑ（梢）＝木杪。○物事の大切ならざる部分、枝葉の事がら。論、子張「抑一也、本之則無」○あきうど（商賈）史、始皇紀「上、農除、一」○はし（端）はて「天一」○をはり（終）「一世」「始一」「顚一」「篇一」○おゆ（老）老年、晚年。中庸「武王一受命」○てあし（四肢）「一疾」○いただき（顚）○くつ、こな「粉一」「細一」○なし（無）論、憲問「果哉一之難也」○よわし（弱）○とほし（遠）○つひに（終）書、立政「我則一惟成德之彥」彥は賢人。○なかれ（勿）禮、文王世子「命膳夫曰、一有原」原は再びする。○うすし（薄）あさし（淺）○ひくし（低）いやし（微賤）○戲劇ジバの脚色の名、老生に扮する者。

【末裔】マツエイ　子孫、裔は衣のすそ、故に末孫に喩ふ。急就篇、注「楚左史倚相、――爲二左氏一」＝後胤・後裔・末葉。

【末葉】マツエフ　する。の世。漢書、徐樂傳「何謂二土崩一、秦之――是也」＝末世・末造・後胤・末代。

【末學】マツガク　○淺薄なる學問、未熟の學問。陳書、儒林傳「沈不害上書曰、臣――小生、詞無レ足レ算」＝淺學。○學者の謙稱。＝後學。○重要ならざる枝葉の學問。

【末香】マツカウ　細末の香。興起行經「雨二楠楚――一」

【末學膚受】マツガクフジユ　淺薄にして本なきの學、僅に皮膚に及ぶ義。張衡賦「客所レ謂――」

【末技】マツギ　實用にならざるわざ。漢書「潁川之民、好二――一、不二田作一」張蓮、勵志詩「――之妙、動レ物感レ心」

【末季】マツキ　する。の時。曹植文「子生二――一、沈二溺流俗一」

【末光】マツクワウ　日月の末光、天子の威光の餘りをいふ。漢書、蕭何傳參傳贊「漢興依二日月之一一」＝餘光。

【末官】マツクワン　いやしき役。江淹詩「――至二南荊一」＝末吏。

【末宦】マツクワン　卑き官職。任昉文「往來――、祿不二代耕一」

【末藝】マツゲイ　つまらぬわざ。王僧孺文「章句小才、蟲篆――」＝末技・小技。

【末言】マツゲン　あさはかなる言葉。

【末減】マツゲン　末は薄、減は輕、刑罰を輕くする義。左、昭十四「三數二叔魚之惡一、不レ爲二――一」

【末期】マツゴ　國しにぎは。＝臨終。

【末坐】マツザ　末席に同じ。坐は座に通ず。晉書、楊憑傳「于――列レ之」

【末座】マツザ　しもざ、する。の座席。韋碣詩「小儒――頗傾レ耳」

【末造】マツザウ　する。の世に造りし事、轉じて末世の義とす。禮、郊特牲「諸侯之有二冠禮一、夏之――也」＝末代・季世。

【末作】マツサク　商工等の業、農を本となすが故。晉書、食貨志「農夫苦二其業一、而――不レ可レ禁也」

【末產】マツサン　商工の產業。管子「故――不レ禁、則野不レ辟」＝末作。

【末子】マツシ　する。の子。＝季子。

【末寺】マツジ　本山より分れたるてら。

【末疾】マツシツ　手足のやまひ。左、昭元「風淫――、雨淫腹疾」

【末臣】マツシン　身分卑き家來。崔瑗文「惟我――、頑蔽無聞」

【末社】マツシヤ　國○本社に付屬せる小社。○遊客の興をとりもつ者、たいこもち「幇間――」

【末書】マツシヨ　つまらぬ注釋の書

――、祿不二代耕一」

【末世】マツセイ　○道德のすたれたる時代。又、滅びかかりし時代。左傳「叔向曰、齊其如何、晏子曰、――也」＝衰季世・季世。○する。の世。後漢書、杜喬傳「臣聞古之明君褒罰必以二功過一、――闇主誅賞各緣二其私一」＝末代・末葉。

【末梢】マツセウ　木の末端、こずゑ。○物の先端「――神經」

【末席】マツセキ　しもざ。姚康詩「自慙陪――、便與二九霄一通」＝末座。

【末戚】マツセキ　遠きしんるゐ、とほえん。杜甫詩「孤陋添――」

【末節】マツセツ　枝葉のことがら。禮、樂記「鋪二筵席一、陳二尊俎一、列二籩豆一、以二升降一、爲二禮者一、禮之――也」＝末事。

【末俗】マツゾク　末世のあしきならはせ。漢書、朱博傳「今――之弊、政事煩多」

【末孫】マツソン　遠き子孫。大戴禮「禹崩、十世乃有二――桀一」

【末代】マツダイ　する。の世。拾遺記「――猶學焉」＝末世・末葉。

【末端】マツタン　はし、する。

【末胄】マツチウ　後世の子孫。劉向、九歎「伊伯庸之――兮」＝末裔・末裔。

【末派】マツパ　○する。のながれ。羅隱詩「正憂――淪海一」＝末流。○或流儀のわかれ。

【末葉】マツヨウ　下につくやから。＝末派・末流。

【末班】マツパン　する。の位次。潛岳、西征賦「俄命予以二――一」＝末席。

【末尾】ビフ　すゑ。
【末富】フフ　商人が利を逐ひて富を致す義。史記「本富爲レ上、ーー次レ之」
【末法】ボフ　佛滅後の時期に立てたる三名目の一、正法五百年、像法千年の後、一萬年の間の稱。末法燈明記「於二ーー中一、但有二言教一而无二行證一」○
【末民】ミンフ　工商のたみ。農を本とするに對していふ。漢書、食貨志「官富實、而ーー困」
【末利】リフ　すゑの利、商工の利をいふ。後漢書、桓譚傳「理レ國之道、舉二本業一、而抑二ーー一」
【末流】リフ　○子孫、又、末派、末裔。人物志「ーー之質、不レ可二勝論一」○末俗をいふ。班固賦「唯子頗識二落典一、又徒馳二騁乎ーー一」
【末僚】レウ　下級の官吏。朱瑒文「早造二ーー一、預參二下席一」＝僚末。
【末路】ロ　○一生の終りの時。＝晩年。○なれのはて。「英雄ーー」漢書、鄱陽傳「秦作二曲臺之宮一、懸二衡天下一、至二其晩節ーー一、張耳陳勝、連二從兵一、以叩二函谷一、咸陽遂危」
【末靡】マビ　斷末摩の略、命の終らんとする時、多く斷末摩苦受に逼られ、別物あることなきをいふ。翻譯名義集「梵語ーー此云二死穴一、或云二死節一、以三病觸二此處一有レ關二絶生一、故雖レ死而心頂熱也、緣二第八識未レ捨故」

【末大必折】スエダイヒツセツ　枝葉大なれば本根が折れる。以て支族大にして本家を亡ぼすに喩ふ。左、昭十一「ーー、尾大不レ掉」

【未】ビ　ミ　未

○ひつじ、十二支の第八位、時刻にては午後二時、方角にては西南。爾雅「太歲在ーー、曰協洽」○いまだ、いまだし、まだすまぬ。已に然るの對稱「ーー然」論、季氏「學レ詩乎、對曰ーー也」○あらず、ず(不)不よりは辭婉なり。○いまだ、何せずとかへり訓みて打消す語。論、子罕「子曰、ーーの思也、夫何遠之有」○いなや(否)王維詩「寒梅著花ーー」○將來「ーー來」
【未月】ビゲツ　陰曆六月の異名。
【未央】ビオウ　○いまだなかばならず。詩、小雅「夜如何、其夜ーレー」○未だ盡きず、央は盡○漢武帝、李夫人賦「惜二藩華之ーレー」○漢の宮殿の名、陝西省長安に在り。三輔黃圖「ーー宮、周廻三十八里」
【未雨綢繆】ビウチウ　禍を未だ萌さざる前に防ぐ義。詩、豳風、鴟鴞「迨二天之未一陰雨一、徹二彼桑土一、綢二繆牖戶一」に本づく。
【未開】カイ　○いまだ人智又は土地が開けず。○いまだ花が開かず。元稹詩「丁寧採芳侶、須レ識ーー叢」
【未敢】カン　いまだあへてせず。左傳「寡君猶ーレー、況下臣君之隸也」
【未完】クワン　いまだ全たからず、まだ十分に出來ず。
【未決】ケツ　いまだきまらず「ーー囚」
【未決囚】ケツシウ　いまだ罪の定まらざる囚人をいれておく監獄。
【未見書】ケンシヨ　いまだ見たることなき書物。五雜俎「讀下未二曾見一之書上、歷下未二曾到一之山水上、如下獲二至寶一、嘗二異味上、一段奇快、難二以語一人也」
【未婚】コン　いまだ結婚せず。杜甫詩「昔別君ーレー、兒女忽成レ行」
【未濟】サイ　○いまだすまず。○易の卦の名。坎下離上。易經「ーー亨、小狐汔濟、濡二其尾一、无レ攸利」
【未死心】シシン　死後なほ忠義奉公の心の存する義。馬子才、岳王墓詩「可レ怜一片西湖土、埋卻英雄ーー」
【未詳】シヤウ　いまだつまびらかならず。
【未嘗有】ミシヤウ　未だかつて有らず。墨、修身「可二以爲一士一於天下一者、未二嘗有一也」＝未嘗有。
【未熟】ジユク　○いまだみのらず。禮記「五穀不レ時、果實ーレー」○修業がまだたらず。因果經「觀二諸衆生熟與二ーーー」
【未衰】スイ　いまだおとろへず。蘇軾詩「當年我作二表忠碑一、坐覺江山氣ーレー」
【未遂】スイ　いまだ成しとげず、未だ實行し得ず「ーー犯」劉滄詩「東西ーレー歸田計、海上青山久廢レ耕」
【未成】セイ　いまだ出來あがらず。史記「毛羽ーレー、不レ可二以高翼一」
【未成年】セイネン　いまだ一人前にならぬ。又、其の者、現制にては男子二十一歲、女子十七歲を以て成年とする。＝未丁年。
【未然】ゼン　いまだ然らず、いまださうならざる前。漢書、劉向傳「明者起二禍于無形一、消二患于ーー一」文中子「昭二治亂於ーー一」
【未嘗有】ミシヤウ　昔より絶えてなし。親元量壽經「歎二ーー一、郭然大悟」＝未嘗有。
【未知】チ　いまだしらず。
【未著】チヤク　いまだつかぬ、未だ物が屆かぬ。
【未定】テイ　いまだ定まらず。尹文子「雉兔在レ野、衆人逐レ之、分ーレー也」
【未丁年】ミテイネン　いまだ丁年に達せず、卽ち二十歲未滿。
【未凋】チウ　いまだしぼまず。陸游詩「秋葉紅ーレー」
【未納】ナフ　租稅などをいまだをさめず。
【未亡人】ビボウジン　寡婦ハモの自稱、夫死すれば、己も共に死すべきに未だ死亡せずとの義、しにそこなひの人。

左、昭二八「夫人聞レ之、泣曰、先君以二是舞一也、習二戎備一也、今命尹不レ尊二諸仇讎一、而於二ーーー之側一、不二亦異一乎」俗に、他人の寡婦の敬稱とするは誤れり。
【未發】ハツ　○いまだ外に發せず、事がいまだ起らず。○喜怒哀樂が未だ起らず。
【未萌】ボウ　○いまだ草木が芽を出さず。○いまだ事故のきざさざる義。漢書、所下以安二社稷一、絶ーーー上也」
【未滿】マン　いまだ定數にみたず「十歲ーー」
【未聞】ミブン　いまだききしことなし。「前代ーー一法言、淵騫「七十子之於二仲尼一也、日聞レ所レ不レ聞、見所レ不レ見」
【未敷蓮】ミフレン　佛全く開かざる蓮花。和密念佛抄「觀音手執二ーー一作二開敷勢一、卽此表示也」
【未返】ヘン　いまだかへらず。駱賓王文「逝將レ歸而ーレー」＝未歸。
【未明】メイ　夜未だ明けざる時。齊書、虞思道傳「ーー而行」＝黎明。
【未來】ライ　○まだ來らざる時。求心錄「ーー心不レ可レ得」＝將來。○佛死後の世。世界を過去・現在・ーーに分つ。地持論「願ーー世爲二衆生一、故云云」
【未來永劫】ミライエイコフ　いつまでも、とこしへ。＝永久・永遠・無限。
【未來記】キライ　未來の事を探め知りて書き置きし記錄。＝豫言書・讖書。
【未丁】ヒヤウ　まだをはらず。李白詩「江上相逢借二問君一、語聲ーレー風吹斷」貫休詩「三千功ーー、大道元無程」
【未了因】ミレウイン　佛前世の因緣を現世に於て、未だ結びつくさざる義。蘇軾詩「與レ君世世爲二兄弟一、更結來生ーーー」
【未練】レン　○いまだなれず。＝未諫。○國心殘り、あきらめられず。
【未レ易才】ヤクサイ　未だ得やすからざる才、晉書、王珣傳「王掾當レ作二黑頭公一、ーーー也」＝未レ易レ得才。
【未嘗入二城府一】ジヤウニフジヤウフ　僻地に居住して未だ嘗て城下に行きたることなし。後漢書、龐公傳「龐公者、南郡襄陽人也、居二峴山之南一、ーーー」
【未レ有下仁而遺二其親一者上】ミイウジンニシテイヒソノシンヲ　○江河の深淺の知れざる如く、事情の測り知り難きにいふ。吳質文「卽以二五目到レ官、初至承レ前、未レ知二深淺一、然觀二地形一、察二土宜一、云云」○人の心の測り知るべからざるにいふ。北史、魏高陽王雍傳「少傲儻不レ恆、孝文曰、吾亦未レ能レ測二此兒之淺深一」
【未レ能レ免レ俗】ベンゾクヲ　いまだ世俗と緣を絶つこと能はず。晉書「ーーー、聊復爾爾」
【未レ辨二東西一】ベントウザイ　未だ方角をもわきまへず、物の道理に通ぜざる義。白居易詩「ーーー過二生一」
【未レ見書】ケンショ　未だ見たることなき書物をよむ。後漢書、黃香傳「應宗詔レ香、讀二東觀一、讀二所レ未レ見書一」未見書參看。
【未レ知二鹿死一誰手】シカノシスルヲシラズ　天下が誰の手に歸するかを知らずといふ義。中原の鹿を獵師が逐ふ狀を諸豪傑が天下を得んと爭ふに比していふ。晉書、石勒載記「脫遇二光武一當レ並二驅於中原一ーーー」

【本】ホン　阮

○もと。末の對。○草木のね「根」○草木の一株を一ーといふ。○木、植物「草ーー」「木ーー」「草」○物事のはじめ。又、大切なる部分。孟、離婁「家之ーー在レ身」○はじまり、根源。禮、郊特牲「報ーレ反レ始」○もとづく(原)ーをたづねる。論、子張「ーーレ之則無」○むかし(舊)元來、其の以前。○書物。後漢書、延篤傳、注「借ーー誦レ之」○もときん、元金「子ーー」子は利子。韓愈、柳宗元墓誌銘「子ーー相侔」○自稱の詞「ーー國」「ーー官」○或語に添へて「其」又「當」の字の義「ーー月」「ーー校」○國或語に添へて眞正の義「ーー妻」「ーー式」

羅字 木下を本と曰ふ、木に从ひ一其の下に在り、草木の根抵なり。

周訓 本・原・舊・故・元・素・雅・固・職・主○本は木に對していふ、同じ事物の上にて、あとさきを正していふ「衞律者、本長水胡人」の如し。○原は水源の義より助辭とす、根元をたづねていふ、食貨志に「姦邪不レ可レ禁、原起二於錢一」とあるが如し。○舊はまへかどと譯す、新の反なり。書經「台少子、舊學二于甘盤一」○故は舊也、昔也と註す、今に對して以前はかやうであつたといふ義、舊よりは輕し。漢書、伏生傳「故爲二秦博士一」○元は始也、首也と註す、元年・元日などと熟す。○素は白き帛のことなり、下地からと譯し、平素と熟す。史記高祖本紀「沛公素寬大長者可レ遣」○雅は雅素と熟す、素に同じ、もとよりと訓む、またつねにとも訓む「太后雅愛レ之」の如し。○固は本然之辭と註す、まことにとも訓む、もちろんと譯す、孟子に「固所レ願也」とあり。○職は專也、主也と註す、主ぎにと譯す、專ら其の事をつかさどる義より轉用す。

左傳「言語漏洩、則職女之由」○主はもととして訓む。本意の在る所をいふ。史記「主爲二趙李一、報レ德復レ怨」

【本惡】ホンアク　わるもののかしら。禮記、疏「雖レ飼二刑禁一、而非二其ーーー」＝元惡。

【本位】ホンイ　基本とする標準「金貨ーー」

【本意】イホン　根本のこころ。後漢書、強敏傳「孔子垂二經典一、皐陶遵二法律一、原二其ーー一、皆欲レ禁二民爲一非也」

【本營】ホンエイ　總大將の居るぢんや「大ーー」＝本陣。

【本家】カホン　○さと、おやもと、實家。後漢書、梁節傳「其無レ子者願レ還二ーーー一自選擇」○國おほもとのちすぢの家。分家・別家の對。＝宗家。

【本綱】カホウ　おほもとのすぢ、くくり。韓非子「吏者民之ーー也」

【本覺】ホンガク　佛本來の妙理をさとり知るさとり。始覺の對。

【本幹】カホン　ねもと。史、諸侯年表「强二ーーー一、弱二枝葉一之勢也」

【本紀】ホンキ　紀傳體の歷史にて帝王の事を紀せし部分。史記に十二ーー・十表・八書・三十世家・七十列傳と分けたるに始まる。

【本氣】ホンキ　國しうき、まじめ、眞面目。＝正氣シヤウキ

【本義】ホンギ　○文字の最初の意義。轉義の對。○書物の本來の意義。宋史「朱熹易ーー十二卷」○義にもとづく。荀子「爲湯ーレ勝レ信、而天下治」

【本據】ホンキヨ　本づきよるところ。後漢書、荀彧傳「將レ失ーーー」＝根據。

【本科】ホンクワ　主たる學科、正科。選科等の對。

【本懷】ホンクワイ　本來のおもひ。ぼんまう。晉書、載記「今登二一袍一、以明二ーーー」

【本官】ホンクワン　○もとのやく、己の主として掌る官職。兼官の對。○官吏が他に對して己をいふ自稱。

【本貫】ホンクワン　原籍地。正字通「ーー鄉籍也」＝本籍。

【本願】ホングワン　もとのねがひ。晉書、涼武昭王傳「今日之舉、非二ーーー一也」＝本懷。

【本敎】ホンケウ　人の根本となるをしへ。呂覽、孝行「民之ーー曰レ孝」

【本計還】ホンケイクワン　國其の人の生れたる干支にめぐりかへる、即ち六十一歲。＝還曆・華甲。

【本業】ホンゲフ　○農業。商工を末業といふの對。後漢書「修二神農之ーー一、勉二軒轅之奇策一」○主として勤むべき職業。副業の對。史、商君傳「大小戰レ力、ーーー耕織一」

【本源】ホンゲン　おほもと、おこり。舊唐書、儒學傳序「窮二法度之ーーー」杜甫詩「委レ心識二ーーー一、於レ事少二滯礙一」＝本原・根本。

【本悟】ホンゴ　眞正のさとり。楞嚴經「所レ得二密言一、迥同二ーーー一」＝眞悟。

【本國】ホンコク　わがくに。列、周穆王「及レ老而還二ーーー一」＝鄉國・本邦。

【本根】ホンコン　おほもと。舊唐書、狄仁傑傳「ーーー一搖、憂患不レ淺」＝根本。

【本妻】ホンサイ　正當のつま。妾などの對。冥祥記「遂業二ーーー一」＝正妻・嫡妻。

【本草】ホンザウ　木と草と、くさき「ーー學」

【本草綱目】ホンザウカウモク　三十九卷、明の李時珍撰す、十六部、六十類に分ち、一千八百九十二種の動植鑛物を記述す。

【本草學】ホンザウガク　支那の藥物學。

【本山】ホンザン　國○一宗のおほもとの寺「禪士宗ーーー」○この寺。＝當山・當寺。

【本支】ホンシ　本家と分家と。本は宗子、支は庶子。詩、大雅、文王「文王孫子、ーーー百世」

【本支百世】ホンシヒヤクセイ　本家と分家との子孫の永く榮ゆる義。前條參看。

【本志】ホンシ　もとよりのこころざし。韓愈文「悼二ーーー之變化一、中夜涕泗交レ頤」＝本心・本懷。

【本旨】ホンシ　本來のむね。蔡邕文「前儒特爲二章句一者、皆用二其意一、傳非二其ーーー一」＝本指・本意。

【本始】ホンシ　もと、はじめ。史、始皇紀「原二念休烈一、追二誦ーーー一」＝本初。

【本事】ホンジ　國佛又は菩薩の本傳本紀をいふ。法華經「或說修多羅伽陀及ーーー」

【本指】ホンシ　本來のむね、もとの意旨。指は旨。史、張耳傳「具道二ーーー一」＝本旨。

【本師】ホンシ　本宗としてたふとび從ふ師匠。史、樂毅傳「樂臣公學二黃帝老子一、其ーーー號曰二河上丈人一」

【本質】ホンシツ　本來のたち、固有の性質、實質。

【本心】ホンシン　人人固有の良心。孟、告子「此之謂レ失二其ーーー一」

【本眞】ホンシン　本來のまこと。漢書、揚雄傳「事有二ーーー一」

【本趣】ホンシユ　もとからのむね。晉書、阮籍傳「此亦籍之胸懷ーー也」＝本旨・本指。

【本初】ホンシヨ　はじめ。＝本始。

【本色】ホンシヨク　固より有せるいろ。轉じて特色又、本領、本來の面目の義。晉書、天文志「凡五星不レ失二其ーーー一」

【本職】ホンシヨク　○其の人の主なる職業。＝本業。○官公吏などが職務上の自稱。＝本官。

【本性】ホンセイ　○もとよりのうまれつき、本來の性質。荀、性惡「豈人之ーーー也哉」○國しかたし、かな心「ーーを失ふ」＝正氣シヤウキ

【本姓】ホンセイ　生家のみやうじ。後漢書、高帝紀、注「寧有二劉繼一ーー實存、史遷不二肯詳載一」

【本籍】ホンセキ　己の身分を登錄してある戶籍。寄留籍の對。＝原籍・本貫。

【本然】ホンゼン　もとより然るべき義。

【本然之性氣質之性】ホンゼンノセイキシツノセイ　程朱學にて本然の性は、純然たる天より附與せられたる性、氣質の性は、血氣混混して後、生ずる性なりと說く。朱子語類「有二天地之性一、有二氣質之性一、天地之性、則太極本然之妙、萬殊而一本也、氣質之性、則二氣交運而生、一本而萬殊也」

【本錢】ホンセン　○もときん。＝元金・母財。○賣本金。舊唐書、明皇紀「各與二ーーー一千貫一、收レ利供レ驛」

【本祖】ホンソ　せんぞにもとづく。禮記「萬物本乎天、人本乎祖」

【本宗】ホンソウ　一族中の本家。又、ひろくおほもとの轉に用ふ。

【本則】ホンソク　おほもとの規則。

【本俗】ホンゾク　昔時よりのならはし。

【本尊】ホンソン　國主としてあがめまつる所の佛、即ち寺の本堂の中央に安置する佛菩薩。聖無動經「見二ーー圓滿悉地一」

【本態】ホンタイ　もとのすがた。白居易詩「併坐黑白失二ーーー一」

【本體】ホンタイ　○まことのすがた　その物の正體。通鑑、晉武紀「遣二ーーー一」＝本身。○哲學にて現象の根柢となるもの。＝眞如・實相。

【本堂】ホンダウ　寺院內にて主たる佛堂。＝本宮。

【本宅】ホンタク　○わがすまひ、自宅。宋書、徐湛之傳「歸居二ーーー一」＝本邸。○常住のすまひ。別莊などの對。

【本地垂跡】ホンチスイシヤク　國日本の神は、天竺なる本地の佛の跡をこの地に垂れて出現せしものとし、天照大神を阿彌陀佛の垂跡なりと唱ふる如き佛家の說、兩部神道の說も此に本づく。

【本陣】ホンヂン　本營に同じ。

【本朝】ホンテウ　○わが朝廷。又、わがくに。孟、萬章「立二乎人之ーーー一、而道不レ行恥也」＝島朝・國朝。○地方の州郡に對して君主の朝廷をいふ。漢書、蕭望之傳「望之雅意在二ーーー一」

【本朝文粹】ホンテウブンスイ　十五卷、藤原明衡が嵯峨天皇の弘仁年中より一條天皇の寬弘年中までの文を編輯せしもの。

【本統】ホントウ　おほもとのちすぢ。宋史、禮志「所以一二ーーー一、明レ尊レ尊也」

【本能】ホンノウ　哲學にて生來自然に有する一定の性向、教育經驗等の力をからずして自らはたらく能力、飲食男女の欲など。

【本能主義】ホンノウシギ　哲學にて本能の要求即ち肉體上の嗜欲を滿足するを以て人生の目的なりとする倫理說。＝享樂主義。

【本人】ホンニン　たうのひと。＝當人。

【本邦】ホンパウ　わがくに。唐書、讓皇帝曰、蓋レ見二ーーー一人將レ身投二外裔一」＝本國。

【本復】ホンフク　國病がなほる、治癒する。＝全快・平癒。

【本分】ホンブン　○己の本來の地位。分は去聲に讀む。荀、非相「見レ端不レ如レ見二ーーー一」○身にそなはる分際。宋書、劉粹傳「＝本顯・本懷。

【本末】ホンマツ　もとと、すゑと。はじめと、をはりと。大學「物有二ーーー一、事有二終始一」

【本丸】ホンマル　國ねじろ、城の中にて總大將の居る所。＝本城・牙城。

【本名】ホンミヤウ　本來のなまへ。唐高貴傳「忘二其ーーー一」

【本命】ホンミヤウ　生れたる年の干支。白居易詩「夢得君知否、俱過ーーー年」

【本務】ホンム　必ずつとむべきつとめ。隋書、序「夫孝三皇五帝之ーー、萬事之紀綱也」

【本文】ホンモン　註釋文などに對して其のもとの文。後漢書、徐防傳「ーー略存」＝正文。

【本門】ホンモン　國衆生本有の妙理を明かにする法門。法華經科註「ーー破二執レ近之情一、生二本地深信一」

【本來】ホンライ　もとより。＝元來。

【本來面目】ホンライメンモク　天然自然にして一點の人意をまじへざる心の本性。傳燈錄「道明求二法于六祖一、六祖曰、那箇是明上座、ーーー一六祖法壇經「不レ思善、不レ思惡、時節ーーー一」

【本來無一物】ホンライムイチブツ　心はもと虛無にして、一物をも存せざる義。傳燈錄「菩提本非レ樹、明鏡亦非レ臺、ーーー何處惹二塵埃一」

【本領】ホンリヤウ　○木の根本と衣の領とと、よりて大木の義とす。劉寶客嘉話「ーーー何雜」○國舊時よりの領地。

【本論】ホンロン　おほもとの議論、主要なる論說。

【本立而道生】ホンリツシテミチウマル　五倫の道は孝弟の本立ちて而る後に生ずるをいふ。論、學而「君子務レ本、ーーー、孝弟也者、其爲レ仁之本與」

【報レ本反レ始】ホウホンハンシ　其の恩に報謝する義。禮、郊特牲「唯社、丘乘供二粢盛一、所二以報レ本反レ始也」注「謂二其恩一之謂レ報、謂二其功一之謂レ反」

【机】キ

○つくゑ、おしまづき、ひぢつき。俗に几に通ず。○木の名、さるなし。

【机案】キアン　つくゑ。＝几案。

【机下】キカ　手紙の名あてのわきにかく

二　書

【紙】

敬語、直接に其の人に手わたしせず、先づ机下まで致す義。＝几下・研北・梧右。

【机上之論】キジョウノロン　實地に適せざる空論。

【机木】キボク　さるなし、にれに似たる木。山海經「單狐之山多ニ――」注「狀如レ檢、可ニ燒以糞ニ田」

【朽】キウ　宥

○くつ、くさる、木が腐る「枯ー」「腐ー」「敗ー」○おとろへる、老衰「老ー」「衰ー」晉書、張忠傳「年ー齒落」○ほろびる、つきる「三不ー」左、襄二四「死而不ー何謂也」○くさし（臭）＝殘。

【摧レ朽】サイキウクダク　くち木をくだく、力を用ひず、容易に出來る喩。北史、高閭傳「六軍電發、有レ若レ摧レ朽」＝摧枯・摧枯。

【拉レ朽】ラウフラフス　くさりたるものをくだく、物事のたやすきに喩ふ。晉書、甘卓傳「將軍之舉ニ武昌ニ若ニ摧レ枯ー耳、何所ニ顧慮ニ乎」＝摧朽。

【朽枪】クウイ　くちたるひのき。李建勳詩「――ー枝斜絲髮垂」

【朽壞】クウイ　くちやぶれる。晉書、樂志「專事ニ軍旅、樂器在レ庫、逡至ニ――」＝朽敗・朽腐。

【朽貫】クウ　錢を積むこと久しくして錢ざしかくちる。又、其の錢ざし。後漢書、王符傳「寧見ニ――千萬、而不レ忍レ貫ニ一錢」

【朽骨】コウ　くちたるほね。晉書、元帝紀「生ニ榮華于枯叢、育ニ豐肌于――」

【朽索】ウク　くちたる繩。書、五子之歌「予臨ニ兆民、凜乎若ニ――之馭ニ六馬」六馬は六頭立の馬車の馬、甚だ難くして危きに喩ふ。

【朽棧】ウ　くちたるかけはし。韓愈詩「恍若レ乘ニ――」

【朽壞】シウ　くさりてぼろぼろになりし土。國語「山有ニ――ー而自崩」

【朽株】シウ　くちたる木のかぶ。司馬相如文「枯木ー――」

【朽樹】シウ　くさりたる木。陳與義詩「空中ー――抱ニ孤條ニ」＝朽木。

【朽折】ウ　くちて折れる。白居易詩「畫梁ー――紅蘭蔽」

【朽駑】ウ　才が衰へて鈍き義。王韶之詩「伊余ー――」

【朽斷】ウ　絲などがくちてきれる。歐陽修詩「惟羣萬讀書、簡稿多ー――」

【朽釘】ウ　くちたるくぎ。寺塔記「藝ニ一物、如ニ――」

【朽條】ウ　くちたるなは。易林「――腐索、不レ堪ニ施用ニ」＝朽索。

【朽鈍】ウ　くちてにぶし、おいぼれて遲鈍なり。玉燕詩「願利ニ――資」

【朽敗】ウ　くさりくづれる。後漢書、劉平等傳序「器物取ニ――者」＝朽壞・朽腐。

【朽廢】ウ　腐りて用に立たなくなること。

【朽腐】ウ　くちくさる。易林「冬藏ー――、當ニ風于道」＝朽敗。

【朽壞】ウ　くちやぶれる。易林「山石――、稍崩墮落」＝朽壞。

【朽木】ウ　くちたる木、無用の人に譬ふ。論、公冶長「宰予晝寢、子曰、――不レ可レ雕也、糞土之牆、不レ可レ朽也、於レ予與何誅」

【朽木糞牆】フウボクフンショウ　くちたる木や腐りし壁は彫刻もぬりかへも出來ず、志氣の昏惰なる人には教を施すべからざるに喩ふ。前條參看。漢書、董仲舒傳「今漢繼ニ秦之後、如ニ――ー矣、雖レ欲ニ善治ニ之、亡レ可ニ奈何ニ」＝朽木糞土。

【朽滅】ウ　くちほろぶ。李白詩「豐功利ニ生人、天地同ニ――ー」

【朽老】ウ　年老いて氣力がおとろへる。又、其の者。南史「――筋力盡、徒步還ニ南門」＝衰老・老朽。

【朽樹】ウ　くちただれる。通典「沈水者――、而心節獨生」＝朽腐。

【朽棧】ウ　くちけがれる。韓愈文「今無ニ故取ニ――之物」

【朴】キウ　尤　有

○高き木。○下りて曲れる木。＝樛。

【朿】シ　寘　東とは別字

とげ（刺）のぎ、草木の芒。

【朱】シュ　遇

○あか、あけ（赤）論、陽貨「惡紫之奪ニ――也」あかし。○しゅずみ、あかいろの塗料。○あかいろのもの（ロ―はくちべに）○赤心木、松柏の屬。○侏儒の侏に通ず。○一提は縣名、四川省犍爲郡に屬す、善銀を出す、因りて銀を――提といふ。○鐵の略字とす「――銀」

【朱鞦】シウ　赤きたづな。薛昭蘊、浣ニ溪沙ニ詞「花色風ニ人競賞、盡是繡鞍ー――」

【朱櫻】シウ　あかきゆすらうめ。唐本草「熟時深紅者、謂ニ之ー――」

【朱殷】シン　あかぐろし、殷は赤黑、血の少しく日を經たる色。左、成二「余折以御、左輪ー――」李華、弔ニ古戰場ニ文「萬里ー――」

【朱韡】シュ　赤き色のとばり。陶潛、閒情賦「褰ニ――ー而正坐」＝朱帷。

【朱衣象笏】シュコウ　あかきころもと、象牙のこつと。唐の制、侍御史、國家に大事あれば、朱衣繡裳を著く。又、五品以上の官は象牙の笏を執る。韓愈、送ニ殷員外使ニ回鶻ニ序「選ニ尚書屬員外郎、兼ニ侍御史、――、承ニ命以行」

【朱衣點頭】シュイ　試驗に應じたる文章の選に中るをいふ。點頭はうなづく。侯鯖錄「歐陽公知ニ貢舉ニ、每遇レ考ニ試卷ニ、坐後書覺ニ一朱衣人時復點頭ニ、然後其文入レ格、始疑ニ侍史ニ、及レ回ニ視之ニ、無レ所レ見、因語ニ其事於同列ニ、爲レ之三歎」

【朱衣吏】イシュ　衙導をなす官吏。唐書、賈餗傳「拜ニ常州刺史ニ、蓋制兩省官出使、得ニ――ー前導」

【朱印】シュイン　○朱肉をつけて押すいんぎやう。○武家時代、官許の證印「御――地」――船は外國貿易の鑑札ある船。

【紓レ朱】シュフ　あかき色の印のひもを身に帶ぶ。後漢書、宦者傳「高冠長劍、――レ懷レ金者、布ニ滿宮闕」

【朱夏】シュ　なつ、夏の氣は赤し、故にいふ。傳咸、木槿賦「逮ニ――ー而凋英」＝朱明。

【朱鬣】ガイ　赤きたてがみ。王鑒詩「絳旗若レ吐電、――如レ振レ鬣」

【朱鞦】シウ　赤ぬりのたるき。魏都賦「――森布而支離」

【朱莩】シウ　赤きはなぶさ。王勃文「趨レ庭洽訓、共歡ニ――之篇」

【朱干】シュ　赤くぬりたるたて。禮、明堂位「――玉戚、冕而舞ニ大武」

【朱汗】シュ　血のいろなせるあせ、勞する甚だしき譬。杜甫詩「馬驕――落、胡舞白題斜」＝汗血。

【朱鼎】シュ　赤ぬりのてすり。杜甫詩「涔沱――濕、白居易、百花亭詩「――在ニ空虛ニ、涼風八月初」＝朱欄。

【朱顏】シュ　○年わかく顏あかし。李端詩「勿レ以ニ――紓ニ、而忘ニ白髮侵」○酒に醉ひたるあからがほ。宋玉、招魂「美人既醉、――酡顏」

【朱冪】シュ　字は元晦、一の字は仲晦、謚して文といふ、其の學大抵理を窮めて以て其の知を致し、躬に反して以て其の實を踐み、而して居敬を以て主となす、慶元六年卒す、年七十一、徽國公に追封し、孔子の廟庭に從祀せらる「宋史、道學傳」

【朱櫃】キ　赤ぬりのひつ。雲笈七籤「發ニ元天之――」

【朱曦】ギ　夏の日、夏は日色殊に赤し、故にいふ「郭璞、遊仙詩」

【朱橘】キツ　實小にして色火の如きちはな。梁元帝、元覽賦「三色黃柑、千戶――」

【朱槿】シン　赤きむくげの花。王維、瓜園詩「黃鸝鳴ニ深木ー――照ニ中園ー」＝紅槿・朱蕣。

【朱宮】キュウ　赤ぬりのどてん。楚辭、九歌「魚鱗屋兮龍堂、紫貝闕兮――」

【朱果】クヮ　柿の異名「事物合璧」李白詩「於焉植――ー」

【朱華】クヮ　赤き色のはな。曹植詩「――冒ニ綠池」＝朱葩。

【朱光】クヮウ　○赤きひかり。曹植詩「揮羽遙ニ清氣、悍目發ニ――ー」○太陽。謝朓、七夕賦「――既夕、涼雲始浮」

【朱鄰】シュクリン　赤ぬりのつくりがは。詩經「載驅薄薄、鏡鄰――」

【朱闕】ケツ　赤ぬりの宮門。左思、吳都賦「――雙立、馳道如レ砥」＝禁門・宮闕。

【朱硯】シュ　しゅすずり。米芾硯史「花蕊石作ニ小――」

【朱月】コウ　門月を赤く塗る資格、古、天子が功ある諸侯に賜ひし九錫の一。漢書、王莽傳「――納陛」

【朱口】コウ　美人のあかき口。古詞「――發ニ豔歌、玉指弄ニ嬌絃」

【朱公】コウ　雞ニハトリの異名「風俗通」

【朱砂】シュ　しゅとするすな。南史、陶弘景傳「神丹可レ成、而苦レ無ニ藥物ー、帝給ニ黃金ー――曾青雄黃等」

【朱子】シュ　宋の朱熹の敬稱。＝朱文公。朱熹參看。

【朱子學】ガクシュ　宋の朱熹の唱へし學說、理を窮め知を致し、躬行實踐を尙び、理氣心性の研究を主とす。＝道學・程朱學・宋學。

【朱子文集】ブンシュウ　宋の朱熹の文集一百卷、續集十一卷、別集十卷、其の文は大抵六經に原づき、理を以て勝る。

【朱紫】シュ　衣服や官印のひもの朱や紫のもの、高位高官の人の譬。白居易詩「鬢髮已班白、衣綬方――」高適詩「部曲皆公侯、輿輦亦――」

【朱提】シュ　四川省の地名、善き銀を出だすによりて、銀の異名とす。五雜俎「今人銀鎔謂ニ之ー――」按、漢書地理志注、――出レ銀」漢書、食貨志「――銀重八兩、爲ニ一流ー」

【朱實】シツ　草木のあかき子。西京賦「――離離」

【朱脣皓齒】シュシ　あかきくちびるとしろきはと、美人の容貌。楚辭、大招「――、豐肉微骨」

【朱雀】シャク　四方の星のやどりの中にて南方に配せられるもの。雀ー――に爵に作る。三輔黃圖「蒼龍・白虎・――・玄武、天之四靈、以正ニ四方ー、王者制ニ宮闕殿閣ー取ニ法焉」

【朱朱】シュ　雞の異名。風俗通、雞本朱氏翁所レ化、故呼レ雞曰ニ――ー」一說ニ雞を呼ぶ聲。

【朱之瑤】シュシ　朱舜水を見よ。

【朱儒】シュ　短小なる人、一寸ぼふし。「左傳」＝侏儒。

【朱樹】シュ　あかまつ。山海經「崑崙山上有ニ――ー」

【朱舜水】シュシュンスイ　明の浙江餘姚の人、名は之瑤、字は魯璵、舜水と號す、明亡びて我が邦に歸化し、水戶侯の賓師たり、天和二年歿す、年八十三、私謚して文恭といふ、舜水文集の著あり。

【朱絲欄】ラン　あかいろの界紙ノ南齋記「句容縣崇明寺大藏經五千函、皆藏紙――書、函在ニ輪藏殿ー」

【朱綏】スイ　赤きかんむりのひも。柳宗元文「病類之駒、絡以ニ和鈴、繫以ニ

―」

【朱紘】シュコウ　赤きうすもの。儀禮、士昏禮、注「素衣――　韓愈詩「――數幅垂三中堂」」

【朱組】シュソ　赤きくみひも。禮、玉藻「玄冠――纓、天子之服也」＝朱綬。

【朱陳好】シュチンノヨシ　支那の徐州の朱陳村は朱・陳の兩姓のみにて世世婚姻をなす、故に兩家婚姻を通ずる義とす。白居易、朱陳村詩「徐州古豐縣、有ㇾ村曰二朱陳一、去ㇾ縣百餘里、桑麻青氣氣、一村惟兩姓、世世爲二婚姻一」

【赤錠子】シャクジョウシ　朱ずみ。

【朱鳥】シュチョウ　○赤色のとり。○南方の星宿の名。史、天官書、南宮――」淮南子「南方火也、其獸――」

【朱天】シュテン　四南の天。淮南、天文「四南方曰二――一」

【朱殷】シュイン　赤ぬりのごとてん。梅堯臣詩「石樓――藏二林中一」

【朱彤】シュトウ　あか。王禹偁詩「樓榭飾二――一」

【朱頓】シュトン　古の大富豪、陶朱・猗頓の二人。轉じて大富豪の義。＝陶猗。

【朱肉】シュニク　圖朱色の印肉。

【交ㇾ朱則赤】スルトキハシュニマジレバセキ　圖朱に交はれば赤くなる、人は友人の善惡によりて感化せられる喩。傅休奕、太子少傅箴、近ㇾ龜必黑、近ㇾ朱必赤」に本づく。

【朱髦】シュボウ　あか馬のたてがみ。瑞應圖「王者不二誅戮一、則龍馬乘黃、潔馬十――並集」

【朱紱】シュフツ　朱裳に同じ、裳に亞の文を畫くもの。漢書、韋賢傳「黼衣――」注「――爲二朱裳一畫爲二亞文一也、亞古弗字也」

【朱粉】シュフン　赤色のこな。南史、王裕之傳「飾以二――一」＝丹粉。

【朱文公】シュブンコウ　朱熹の敬稱、文は其の諡。朱熹參看。

【朱陛】シュイ　赤く塗れる朝廷のきざはし。梅堯臣詩「大楹爛爛、――煌煌」

【朱飆】シュヘウ　夏の熱きつむじ風。抱朴子「――櫟石、不ㇾ能ㇾ壓二齋丘之木一」

【朱鏞】シュウ　あかきいろのくつわ。潘岳詩「――既揚、四轡既整」

【朱墨】シュボク　○しゅずみ。墨池編「有下造二――法一」蘇軾詩「末路益可ㇾ羞、――手自研」＝朱錠子。○物事の異なるに喩へいふ。魏志、王肅傳、注「更爲作二――別異一」○朱と墨とにて帳簿にしるす。轉じて、官務を執る義。北史、蘇綽傳「始制二文案一、程式一朱出墨入、及二計帳戶籍之法一」とあるに本づく。劉禹錫、古詞「吾觀二蘇令綽一、――一何工」

【朱明】シュメイ　○夏の異名。爾雅「夏爲二――一」注「氣赤而光明」＝朱夏。○シュ明朝をいふ、天子の姓朱なるが故にいふ。

【朱門家】シュモンヘ　高貴の人は門扉を赤ぬりにす、故に顯官貴人の邸をいふ。郭震、詠蛩詩「苦吟莫向朱門裏、滿耳笙歌不聽君」杜甫詩「出入――、蓽屋列二鮫鼎一」

【朱楊】シュヤウ　赤き幹のかはやなぎ。孫楚、登樓賦「俯依二青川一、仰翳二――一」

【朱闌】シュラン　次條に同じ。

【朱欄】シュラン　赤ぬりのてすり。李嘉祐詩「高閣――不ㇾ厭ㇾ遊、蘇蘇白水繞二長洲一」＝朱闌。

【朱輪華轂】シュリンクワコク　漢の制、高貴の人は馬車の輪を赤ぬりにし、轂をはなやかに飾る。漢書、劉向傳「王氏一姓、乘二――一者三十三人」

【朱路】シュロ　帝王乘用の大車。禮、月令「乘二――一駕二赤駵一」路は輅。

【朱樓】シュロウ　赤ぬりのうてな。後漢書、馮衍傳「伏二――一而四望兮」＝朱閣。

【朶】ダ　彙　朶に同じ

○しだれる、花實の垂るる貌。○えだ、花の枝「千――」「萬――」「花――」○垂れさがれるもの「耳――」○うごかす(動)易、頤卦「觀我――頤」○手にて物を捉ふ。

【朶朶】ダダ　樹木の垂れる貌。說文「樹木垂――」

【朶】ダ　朶（前條）に同じ。

【朶頤】イダ　あごを動かして物を食はんと欲する貌。強國が弱國を併呑せんとするさまなどにいふ。易、頤卦「觀我――」＝朶頤。

【朶雲】ダウン　人のてがみの敬稱。唐書、韋陟傳「常以二五朶雲一爲二書記一、使二侍妾主レ之、其牋答授レ意而已、皆有二楷法一、陟唯署レ名、自謂所レ書陟字、若二五――一、時人慕レ之、號二郇公五雲體一」陟は郇國公に封ぜらる、故にいふ。

【朶朶】ダダ　おほくのえだ。又、枝のたれる貌。

【朴】ハク・ボク　藥　覺　通音ホク

○きのかは(木皮)○うはべをかざらず「敦――」「質――」＝樸。○喬木の一種、ほほ、花大にして香氣あり、皮厚くして藥材とす、故に一名厚――といふ、四川省の產佳なり、故に川――といふ。○大いなり。○未だ膳とならざる鼠。

【朴駿】ボクガイ　かざりけなくすなほにしておろか。抱朴子「田舍――」＝朴魯。

【朴實】ボクジツ　かざりけなくまこと。＝朴忠。

【朴澀】ボクシウ　かざりけが無くぐづぐづする。南史、焦度傳「爲ㇾ人――」

【朴硝】ボクセウ　藥の名、狀食鹽に似、水を以て煎鍊して結晶體を成す、色は淡黃にして形粗、消化劑とし、鞣ねて牛馬の革を柔かにするに用ふ。

【朴素】ボクソ　かざりなし。きぢのままにてうはべを飾らず。後漢書、馬皇后傳「車騎――、無二金銀之飾一」＝素朴・質朴。

【朴忠】ボクチウ　かざりなくして誠實。漢書、卜式傳「上以二式――一、拜爲二齊王大傅一」＝忠朴・醇朴・樸誠。

【朴直】ボクチク　かざりなく正直。杜甫詩「磊落良親事、致ㇾ君――詞」

【朴茂】ボクモ　かざりけなくてあつし。宋史、選舉志「士以二純明――之美一、而無二敎學變成之法一、此取士之甚敝」韓愈文「吾子始自ㇾ山出、有二――之美一」＝樸厚。

【朴野】ボクヤ　かざりなくいやし、素朴にして野卑。宋史、安石外示二――一、中藏二巧詐一」＝朴陋・鄙朴。

【朴魯】ボクロ　かざりけなく愚か。宋史、地理志「京人皆――純直」

【朴陋】ボクロウ　かざりなくいやし、質にして文ㇾなし。尙書故實、佛像本自二四域一來、――人不ㇾ生ㇾ敎、今之藻繪雕刻、自二戴顒一始也」＝朴野。

【朸】リキ　圖

○もくめ(木理)年輪。○いへのすみ(屋隅)○圖あふこ、物をになふに用ふる棒、てんびん棒。

【杇】ウ　三畫　麌

○みづのみ、ゆのみ(飲水器)荀、君道「方則水方」○ゆあみだらひ(浴器)○――は自ら足れりとする貌。荀、儒效「――富人」＝于于。

【杇】ヲ　處　遇　或は圬に作る

○こて(泥鏝)壁をぬる具。○ぬる。論、公冶長「糞土之牆、不可――也」

【杠】カウ　江

○はたざを、旗竿。○こばし、小橋。孟、離婁「歲十一月徒――成」○星の名。○牀の前の横木。

【杆】カン　寒

○たて(盾)漢書、尹賞傳「被鎧――」＝干。○てこぼう(梃)○優れたる木。○圖てすりの義、欄――は闌干スタリ

【杏】キャウ　梗

○あんず。梅に似たる果樹、實は梅より大にして甘し。格物叢話「――實味香於梅、而酸不及、核與肉自相離」○銀――ギャウはいてふの木、ぎんなん。

【杏園】キャウエン　陝西省長安縣の西、曲江池邊に在り、唐時、新に進士の試に及第せし者、多く此に遊宴す。劉滄、及第後宴二曲江一詩「及第新春選二勝遊一、――初宴曲江頭」

【杏花】キャウクワ　あんずのはな。戴叔倫詩「一汀煙雨――寒」

【杏華】キャウクワ　前條に同じ。張籍詩「處處仙居隱――」

【杏壇】キャウタン　學問所をいふ。論語、莊、漁父「孔子遊二乎緇帷之林一、休坐二乎――之上一、弟子讀レ書、孔子弦歌鼓レ琴」――の遺址は山東省曲阜縣の聖廟の殿前に在り。

【杏仁】キャウニン　あんずの核の中の肉、藥用とす。本草綱目「――氣薄味厚」

【杏林】キャウリン　董奉の飲亭により、醫家をいふ。神仙傳「董奉居二廬山一、爲レ人治レ病、重者種二杏五株一、輕者種二一株一、如レ此數年、計得二十萬餘株一、鬱然成レ林、杏子大熟、號二董仙――」

【杞】キ　紙

○枸――クは灌木の一、一名仙人杖、嫩葉は食ふべし、根皮を地骨皮といひ藥用とす。○――柳はかはやなぎ。○一種の喬木、豫章ノクスに似て木理細潤、器具に造るべし。○周代の國名、夏の後、今の河南省開封府――縣。論、八佾「――不レ足レ徵」

【杞憂】キユウ　無用のしんぱい、とりこしぐらう。列、天瑞「杞國有下人憂二天崩墜身無二所寄一廢二寢食一者上、又有下憂二彼之所レ憂者上、因往曉レ之曰、天積氣耳(中略)奈何憂二崩墜一乎、其人曰、天果積氣、日月星宿、不レ當レ墜邪、曉レ之者曰、日月星宿、亦積氣中之有二光耀一者、只使レ墜、又不レ能レ有レ所二中傷一、其人曰、奈二地壞一何、曉者曰、地積塊耳(中略)奈何憂二其壞一、其人舍然大喜、曉レ之者亦舍然大喜」

【杞憂】キユウ　くこと、いばらと。詩、小雅「湛湛露斯、在二彼――一」

【杞梓】キシ　二木の名、共に良材、杞は樹柳の如く葉麤にして白色、梓ツサは楸に似たる喬木。孔叢子「聖人官レ人、猶二大匠用レ木、取二其長一、棄二其短一、故――連抱、而有二數尺之朽一、良工不レ棄」

【杞人之憂】キジンノユウ　前の杞憂を見よ。

【杞柳】キリウ　かはやなぎ、こぶやなぎ、こりやなぎ、白楊の一種、木質柔韌に

して杯棬又行李に製すべし。孟、告子「性猶二杞柳一也、義猶二桮棬一也」注「杞柳也」

【杇】 杇（木部二畫）の誤字。

【杌】 ㊀ゴツ ㊁ゲツ 月・月

㊀樹に枝なし。○木の短く出づる貌。○一隉は安からざる貌、あやふし。㊁きりかぶ（株）○橋一は惡獸の名。又人名とす。

【杌隉】あやふく安からざる貌、隉は危。書、秦誓「邦之一一、曰由二一人一」

【杈】 ㊀サ 麻 ㊁サ 佳

㊀えだ（枝）○また、さんまた（岐枝）○やす、先端がまたになりてゐる漁具、捕魚の具。周禮、天官「鼈人」注「以」一刺二泥中搏取一也」○一把はさらへ、農器。○一杷は蓑差たる貌。㊁やらひ。＝行馬・柵。

【材】 サイ ザイ 灰

○ざいもく、まるた、木の勁直にして用ふるに堪へる者（木挺）「木一」○廣く建築又は什器などに用ふる材料「鐵一」「石一」○木の實、榛・栗の屬。○はたらき、ちゑ、伎能「薄一」「茂一」書、咸有一德「任官惟賢一」＝才。○たから、財に通ず。○うまれつき、たち（性質）中庸「必因二其一而篤焉」○だうぐ（具）○もと、しろ、物品をつくる原料「一料」皮・革・齒・牙・骨・角・羽・毛など。左、隱五「其一足以備器用」○はかる、きりもりする、適宜に處置する。論、公冶長「無所取一」裁に通ず。

【角レ材】才力をたたかはす。漢書、賈誼傳「非二親一レ一而臣下之也」

【材幹】ザイ○はたらき、うでまへ、幹は伎倆。史記、大將軍「一一絕レ人」大將軍は衛青。後漢書「程烏李育以レ有二一一一」皆擢二用之一」＝材器。○材木をいふ。漢書「一一器械之資」

【材器】ザイはたらき、きりゃう。漢書、王吉傳「一一名稱、稍不レ能レ及レ父、而祿位隮隆」＝材幹・才能。

【材伎】ザイはたらき。荀子「選二閱一一之士一」＝材藝。

【材官】ザイ材幹ある騎士の官。史、申屠嘉傳「以二一一一蹶張一、從二高帝一」

【材藝】ザイちゑと、わざと。藝は又、藝に作る。漢書、定陶共王康傳「長多二一一一、習二知音聲一」五代史「多二一一、能射二錢中孔一」＝才藝・才能。

【材藝】ザイ前條に同じ。

【材士】ザイ體格のつよき者。史、始皇紀「盡徵二其一一五萬人一」

【材臣】ザイはたらきある家來。管子「豪傑一一、不レ務レ竭レ能」

【材大難レ用】才あれども不遇なる義。杜甫詩「志士幽人莫二繼嗟一、古來材大難レ爲レ用」

【材能】ノウはたらきと藝能と。史記「上以二醇信一一一所レ王皆天下勁兵處一」＝材藝。

【材武】ザイはたらきと、武勇と。

【材物】ザイしろもの。史記「水火一一」

【材本】ザイもと、もとで。＝資本。

【材木】モクイ建築又製作用の木。孟、梁惠王「一一不レ可二勝用一也」＝木材。

【材馬】ザイはたらきと勇氣と。晉書、張方傳「世貴賤、以二一一一得二幸于河間王顒一」＝材武。

【材吏】ザイうでまへのある官吏。唐書、嚴挺之傳「號二一一一」＝能吏。

【材料】レイ物を作るたね。宋史、職官志「曰二營造一曰二一一」

【杉】 サン 咸

すぎ、常綠喬木の一、幹直く、針狀の葉を有し、其の材は種種の用に供せられ、皮は屋根を葺くに用ふ「老一」「一材」「一檜」

【杉檜】サンすぎと、ひのきと。韓愈詩「夜風一何喧、一一壓磨厲」

【杉籬】サンすぎの生垣。李商隱詩「伊人下築自幽深、桂巷一一不レ可レ尋」

【束】 ㊀ソク ㊁シュ 遇 沃

㊀たばぬ、つかぬ。晉書、庾翼傳「宜一一之高閣」○しばる（縛）くくる「一縛」「縛一」「拘一」○つなぐ（絆）○たば。又、たばねたる物を數ふるにいふ、布帛五疋。又、矢五十本。又、脯十脡の稱。○縮まる、迫まる「窘一」○斂まる、聚まる「斂一」○謹み戒む。㊁ちぎる（約）「約一」史、高祖紀「待二諸侯至一、定要一耳」國○そく。稻百把。又、紙十帖の稱。○つか、指四本を竝べたる長さの稱、一握。又、其の長さ。○轉じて短き義「一の間」

【束矢】ソクやをつかぬ。つかねたる矢。詩經「角弓其觩、一一其摟」

【束修】ソクシウ約束修整の略、品行を正しくする義。後漢書、鄧后紀「光叅既以二武功一、書之竹帛、兼以二文德一、敕二化子孫一、故能一一不レ觸二羅網一」

【東條】ジウ○つかねたる脩ジウ古、進物に用ふ。漢書、朱邑傳「無二疆外之交、一一之餘一」○始めて師に見ゆる時の贄ニ論、遞而「自レ行二一一一」以上、吾未二嘗無二誨焉一」轉じて入學の時納むる謝金。

【東湯】ソクシウ しめりたるものを束ぬ、濕物は束ね易し、下を治むるの殿念ジウなるに喩ふ、濕は溼。漢書、寡成傳「操レ下急、如レ一一一」

【東身】ソクシン其の身を守りて謹む。後漢書、卓茂傳「一一自修、執レ節淳固」＝束躬。

【東薪】シン たばねたるたきぎ。詩、唐風「綢繆一一」

【東裝】シウ よそほひを著く。陸游詩「客枕何時穩、匆匆又一一」＝裝束。

【東手】シウ ○手をつかぬ、何事をも爲さざる義。史、春申君傳「父子老弱、係レ脰一一」○抵抗せずして歸服する。晉書、杜預傳「所レ過城邑、莫レ不レ一一」

【束芻】スウ まぐさをつかぬ。つかねたる一たばの秣マグ詩、唐風「綢繆一一、三星在レ隅」詩、小雅「生芻一束、其人如レ玉」賢人の去るを惜み、生芻一束を以て其の乘る所の白駒にまぐさかふ、其の人の德の美なること玉の如し。轉じて賢人の死を悼むにも用ふ。

【東篠】ゼウ つかねたるしの竹。魚孟威文「雜二一一一爲レ堰、閉二散木一爲レ門」

【東帶】タイ 冠を著け帶をむすぶ、威儀を整ふる義。論、公冶長「赤也一一立二於朝一、可レ使レ與二賓客一言レ」

【東條】タウ つかねたる組み紐。都穆文「黃衣一一、儼乎如レ生」

【東馬】バク 馬をつなぐ。左傳「士皆釋レ甲一一、而飲レ酒且觀レ優」

【東帛】バク 絹十端を一束とせるもの。漢書、儒林傳「武帝使二使一一加レ璧、安車蒲輪、駕」騶迎レ之」

【東縛】バク しばる。又、かせ。史、禮書「誘進以二仁義一、一一以二刑罰一」

【東髮】ハツ ○始めて冠する義。又、成童の年をいふ。大戴禮「一一而就二大學一」漢書、敍傳「一一修レ學、偕列二名臣一」＝結髮。○國婦人の西洋風の髮の結方カタ

【村】 ソン 元 通じて邨に作る

○むら、さと（墅）「一落」「一里」「山一」「江一」「漁一」陶潛詩「暖暖遠人一」○ゐなか（聚落）○俗に鄙野イヤの義「一氣」「一漢」○國むら、地方行政上の區劃の一、郡の下に在り「町一」

【村娃】アイ ゐなかの美女。陸龜蒙詩「海俗蘆竭レ室、一一練束レ衣」

【村邑】イフ むら、邑は大村。宋書、潘綜傳「攻二破一一一」

【村國】コク ゐなかの家のその。雍陶詩「一一門巷多相似、處處春風拱數花」

【村場】ジウ むらざと、ゐなかの土手。杜甫詩「豁行盡日無二一一一」

【村翁】オウ むらのとしより。杜甫詩「歲時伏臘走二一一一」＝村老・村叟。

【村媼】オウ ゐなかのばば。

【村家】カ 村舍に同じ。方干詩「日與二一一事漸同、燒レ松暇レ茗學二鄙翁一」

【村歌】カ むらの人の歌ふ歌。白居易詩「一一與二社舞、客陋主人筒」＝山歌・俚歌。

【村郊】コウ むらざと、郊は城外。唐彥謙詩「一一多二父老一、面垢頭如レ蓬」＝村野。

【村巷】コウ むら。又、むらのこみち。柳宗元詩「雞鳴一一白、夜色歸二暮田一」＝村閭・村里。

【村校】コウ ゐなかの學校。元稹、白氏長慶集序「嘗於二平水市中一見二一一諸童競習レ詩」＝鄉校。

【村學】ガク ゐなかの學校。盧仝詩「莫レ學一一生、粗氣强叫吼」＝村校。

【村學究】ガクキウ 淺薄なるゐなかの學者。瑯琊代醉稿「楊用修曰、杭州有二杜拾遺廟一、有二一一一、題爲二社十姨一、遂作二女像一以配二劉伶一」＝村儒・村學師・村夫子。

【村甲】カフ しゃうや（莊屋）無寃錄、注「一一如二木國里正類一」＝村長・里正。

【村漢】カン むらのをとこ、ゐなかもの。書畫金湯「落劫九、一日、入二一一手一」＝田舍漢。

【村妓】ギ ゐなか藝者。白居易詩「一一不レ辭出、恐君驚然昭」

【村氣】ケ ゐなかびたるふう。隋唐嘉話「薛聰馬一一」

【村嫗】オウ むらざと。高適詩「一一日落行人少、醉後無レ心怯二路岐一」＝郊墟。

【村會】クワイ 國一村の自治に關する事を議決する機關「一一議員」

【村鼓】コウ むらにて擊つたいこの音。杜甫詩「一一時時急、漁舟箇箇輕」

【村市】シ ゐなかのまち。白居易詩「燈火穿二一一一、笙歌上二驛樓一」

【村神】シン むらの神。又、其の社。實島詩「孤靈臨二石鏡一、極浦映二一一一」

【村舍】シヤ ゐなかのいへ。方干詩「雨天一一未催レ蠶」＝村家・村屋。

【村社】シヤ 國むらの鎭守シンの社。鄉社に次ぐ社格の社、村にて奉幣する。

【村酒】シン ゐなかざけ。張喬詩「寂寞逢二一一一一漁家一醉吟」＝村醪・村釀。

【村樹】ジユ むらの樹木。梁元帝、登レ陡望レ水詩「旅泊依二一一一、江樓極二戍樓一」

【村儒】ジユ ゐなか學者。事文類聚「遊旅中遇二一一一」＝村夫子・村學究。

【村書】シヨ つまらぬ書物、俗書。陸游詩「授二罷一一閉レ門睡」＝兎園冊。

【村叟】村翁に同じ。叟は長老。開何記「訪二問一一一」

【村俗】ゐなかのいやしきならはし。＝俚俗・鄙俗。

【村醪】ゐなかにて造りたる酒。

臨游詩「細傾二一一一醪一新蟻」＝村酒・村醪。

【村笛】ゐなか人の吹くふえの音。白居易、琵琶行「豈無二山歌與一一一」

【村店】ゐなかのみせ。羅隱詩「一一酒旗沽二竹葉一」

【村童】ゐなかのこども。杜甫詩「桑揚憐二火蟻一拾レ穗許二一一一」

【村坊】むらざと。唐書、食貨志「凡稅斂之數、書二於縣門一一一與レ衆知レ之」

【村夫子】ゐなかの先生。臨游詩「今朝偶遇二一一一一一一得齊民一卷書」

【村茗】ばんちゃ、ゐなかの茶。

【村野】ゐなか。劉禹錫詩「別墅落城外、月明一一通」＝村郊・村里。

【村老】ゐなかのとしより。＝村翁・村叟。

【村落】むらざと、落は聚落。元稹詩「農收一一盛、社樹新團圓」

【村閭】むらの入口の門。又村ざと。白居易詩「回觀一一閉、十室八九貧」＝里閭。

【村路】むらのみち。張謂、早梅詩「一樹寒梅白玉條、迥臨二一一一傍二溪橋一」＝村徑。

【杖】

㊀ ヂャウ ㊁ ヂャウ 養 漾

㊀つゑ、歩行を扶くる所以の具。○喪式の時に攜へるつゑ「苴一」○つゑつく。禮、王制「五十一一於家、六十一一於鄉、七十一一於國、八十一一於朝」○人をむちうつ棒。○五刑の一、五刑は笞一一徒・流・死。○てこ（木梃）○ほこのえ、戈戟の柄。○うつ、たたく。㊁とる、もつ（持）＝仗。○よる（憑倚）左、襄八「一一信以待一晉」

【杖鉞】まさかりをつゑつく。漢書、五行志「把レ旄一一一誓二士衆一抗二威武一」

【杖家】五十歳をいふ。字解參看。

【杖鄉】六十歳をいふ。字解參看。

【杖笞】つゑ。又、竹のつゑをつく。韓偓詩「一手攜レ書一一一レ一」

【杖擊】むちうつ。晉書、陶侃傳「聞者以一一一之」＝撻擊。

【杖劍】ただ一劍のみをたよりとする輩。史、陳丞相世家「平身閒行、一一一亡渡レ河」

【杖國】七十歳をいふ。字解參看。

【杖罪】つゑにてむちうつ刑に當るつみ。宋史、太宗紀「一一釋レ之」

【杖策】つゑ。又、むちをつゑつく。後漢書、鄧禹傳「禹一一一軍門」「戰二上延二攬英雄一」

【杖殺】つゑにてうちころす。唐書、重潤傳「后怒一一一之」＝笞殺・撻殺。

【杖錫】錫杖をつゑつく。崔顥詩「傳燈遍二都邑一一一一遊二王公一」

【杖節】旌節をつゑつく。晉書、宣帝紀「一一一立二軍門一」

【杖鏁】むちうつ。列子「數罵一一、無レ不レ至也」＝朴鏁。

【杖竹】たけをつゑつく。水經、注「有レ人、著二大冠絳單衣一一一」

【杖朝】八十歳をいふ。字解參看。

【杖頭百錢】晉の阮脩が酒を買ふ爲め、常に百錢を杖頭に掛けたる故事。晉書、阮脩傳「性簡任不レ脩二人事一、常步行以二百錢一掛二杖頭一、至二酒店一便獨酣暢、雖二當世富貴一而不二背顧一、家無二儋石之儲一、晏如也」

【杖鉢】僧の持つ錫杖と食鉢とを。又巡錫托鉢の僧。李嶠詩「荊南旋一一一一」

【杖罰】杖で打つ刑罰。北史、魏常山王傳「遂加二一一一、令二其致レ死」

【杖扶】つゑつく、たすける。杜甫詩「經歩仍須二竹一一一」

【杖矛】ほこをつゑつく。史、鄙生傳「沛公遽釋レ足一一一曰、延レ客入」

【杖棒】つゑ。周書、泉企傳「力戰拒守、矢盡、以二一一一扞レ之」

【杖藜】あかざのつゑをつく。杜甫詩「一一一徐歩立二芳洲一」

【泣レ杖】漢の韓伯兪、性至孝、或時母笞ウチしに、大いに泣けり、母故を問ふ、伯兪答へて曰く、前日笞たるる毎に常に痛めり、母の健康なるを知る、今や痛まず、力の衰へたるを知る、故に泣くと（戰苑、建本）＝兪一に愈に作る。

【杖】

㊀ チィ ダイ 賄 蟹

㊀木獨生す。詩、唐風「有二一之杜」木盛んなり。㊁かぢ、船尾の小梢。

【杜】

ト 虞

○あまなし、やまなし、こりんご（甘棠）山野に自生する果樹、春五瓣の小白花を著け、秋櫻の實に似たる小果を結ぶ。○ふさぐ（塞）とづ。史、商君傳「一一門不レ出」○一衢カンは香草の名、葵の屬、冬花開く。

【杜字】杜鵑ホトトギスの異名。もと蜀王望帝の名、其の魂化して此鳥となる

との傳說に本づく（蜀王本紀）禽經「江左曰二子規一、蜀右曰二一一一」＝子規・杜鵑・杜魄・蜀魂。

【杜康】古、酒を作りし人。轉じて酒の異名。魏武帝、短歌行「對レ酒當レ歌、人生幾何、譬如二朝露一、去日苦多、慨當二以慷一、憂思難レ忘、何以解レ憂、唯有二一一一」

【杜衡】香草の名、かんあふひ。＝杜蘅。

【杜隔】ふさぎへだてる。

【杜葵】かんあふひの異名。

【杜鵑】○子規ホトトギスの異名。邵氏聞見錄「散二步天津橋上一、聞二一一一聲一」＝杜宇。○杜鵑花の略「紅一一」

【杜鵑花】つつじの一種、さつき。圓書「杜鵑一名躑躅、一名山石榴、一名映山紅、有二深淺紅及紫者一、白居易詩、九江三月杜鵑來、一聲啼得一花開、蓋花開正屬二杜鵑之候一」

【杜口】口をふさぐ。史、范雎傳「一レ一裏足、莫二肯嚮レ秦耳」＝緘口。

【杜狗】蠻姑ケの異名（揚子方言）

【杜穀樹】捕の異名。

【杜子美】杜甫を見よ。

【杜若】○やぶめうがの異名。李中詩「鵲噪啼二竹樹一一一嫋二汀洲一」○圖誤りて燕子花カキツバタの異名とす。

【杜如晦】唐の創業の功臣、字は克明、少くして英邁、大節あり、太宗即位後、右僕射となり、房元齡と共に朝政を管す、房能く謀り、杜善斷す、世に房杜といふ、萊國公に封ぜらる、貞觀四年卒す。

【杜少陵】杜甫を見よ。

【杜絕】ふさぎたつ。ふさがりたゆ。後漢書「一一一邪僞請託之原」

【杜塞】ふさぐ。ふさがる。吳越春秋「賞無二所一一一、奉邪一一一」＝杜閉。

【杜讒】ふさぎ退ぞけろ。後漢書、賈紹傳「一一一忠功一、以疑二衆望一」

【杜魄】子規ホトトギスの異名。李遠詩「一一呼レ名語」＝蜀魂・杜宇。

【杜父魚】いしぶし（石伏）かじか。はぜに似て小、清流の石間に棲み味甚だ美なり。

【杜甫】唐代の詩人、字は子美、少陵と號す、其の詩雄渾沈痛にして、忠厚の情を見る、李白と詩名を齊しうし、李杜といふ、代宗の太曆五年卒す、年五十九、杜工部集二十卷あり。

【杜牧】晚唐の詩人、字は牧之、樊川と號す、官、中書舍人に至り、大中六年卒す、年五十、世、小杜といひ、以て杜甫（老杜）に分つ。

【杜門】もんをふさぐ。史、商君傳「一一一不レ出、已八年矣」

【杜蓮】やぶみやうがの異名。本草「杜若、一名一一」

【杜撰】著作に誤多きをいふ。野客叢談「杜默爲レ詩、多不レ合レ律、故言二事不レ合レ格者一、爲二一一一」

【杜多】圖僧をいふ。名義集「我說二彼人一、名爲二一一一、今訛稱二頭陀一」＝沙門・桑門・抖擻。

【呆】

バイ 灰 呆は正字

○槑の省字にて、梅の古字、又、某に作る。○俗に、癡獃の獃となすは誤。○圖あきれる。

【宋】

バウ マウ 陽

○うつばり（梁）韓愈、進學解「大木爲一一」○むなぎ（棟）

【杓】

㊀ ヘウ ㊁ テキ ㊂ シャク 蕭 錫 藥

㊀え（柄）○星の名、北斗星の第五より第七に至るをいふ「斗一一」○ひく（引）淮南、道應「孔子勁一國門之關而不肯以力聞」○つなぐ（繫）㊁まと（標的）㊂ひしゃく。水などをくむ器「栖一一」○まるきばし（横木橋）「略一一一」

【杙】

ヨク 職

くひ（橛）牛馬等をつなぐくひ。周禮、牛人、注「一可二以繫一牛」＝橛。

【以レ杙爲レ橛】小さきくひを大黑柱に使ふ、人材の任用を誤まる譬（韓愈、進學解）

【李】

リ 紙

○すもも、桃に似たる果樹。春、白色五瓣の花を著け、實は甘くして酸味あり「桃一一」「苦一一」「一樹」○をさむ、理に通ず、行一一は使者、行きて事を理むる者、行理に同じ。左、僖十三「行一之往來」○姓「一淵」「一白」

【李下之冠】うたがひを受け易き事がらをいふ。古樂府「君子防二未然一、不レ處二嫌疑間一、瓜田不レ納レ履、李下不レ整レ冠」

【李花】すもものはな。劉詵、春陰詩「北宮晴雨裏、一樹一一明」

【李四】すももは種ゑて四年目に果を結ぶをいふ。埤雅、諺曰、桃三一一梅子十二」

【李耳】○周の老聃をいふ、李は姓、耳は名（史、老子傳）○虎の異名。風俗通、俗說虎本南郡李氏翁所レ化、呼二一一一則喜、呼レ字則怒」＝李父。

【李斯】楚の上蔡の人、荀卿を師とす、秦の客卿となりて、始皇帝を輔けて天下一統の功を立て、郡縣の制を創立す、二世皇帝立つに及び、讒に遇ひて棄市せらる。

【李商隱】字は義山、玉溪子と稱す、唐の詩人、開成二年の進士、詩

文瑰遇奇古、尤も律詩に長ず、温庭筠と名を齊しくし温李と稱す、後世其の詩派を號して四崑體といふ。

【李成】リセイ 宋の吳の人、五代の末、詩酒を以て公卿の間に遊ぶ、善く山水を摹寫す、酒酣にして筆を落せば、經林萬狀、世傳へて以て寶となす。

【李唐】リタウ ○王朝の名、唐をいふ、李は其の高祖李淵の姓、二十世、二百八十九年にして滅ぶ。周朴詩「羣玉才名冠二—一」○宋の畫人。畫史彙傳「—年八十、善二山水人物一筆意不凡」

【李桃】リタウ 櫻桃ウメノの異名。釋名「櫻桃俗名二—一、又名二奈桃一」

【李杜】リト ○後漢の李固と杜喬と「後漢書、李固杜喬傳」○後漢の杜密と李膺と「後漢書、杜密傳」○唐の李白と杜甫と「唐書、文藝傳」

【李杜韓柳】リトカンリウ 風の李白・杜甫・韓愈・柳宗元の略稱、李杜は詩に長じ、韓柳は文に長ず。

【李間】リカン 南宋の學者、字は愿中、延平に住す、朱熹之に師事す、世に延平先生と號す。

【李梅】リバイ すももと、うめと。鹽鐵論「—多實者、來年爲之衰」

【李白】リハク 唐代の詩宗、字は太白、青蓮と號す、性、酒を嗜み、終日醉ふ、玄宗召して翰林學士とす、其の詩、高妙清逸、杜甫と竝稱して李杜といふ、寶應元年卒す、年六十二、李太白集三十卷あり。

【李父】リフ 虎の異名。揚子方言「陳魏閒謂レ虎爲二—一、江淮謂二之李耳一」

【李密】リミツ 晉人、字は令伯、父早く沒し、母、人に再嫁せしを以て、祖母劉氏に養はる、武帝徵して太子洗馬と爲す、詔書屢〻下る、密、陳情表を上りて固辭す、帝詔を下し、嘉褒して、其の終養を許す、天下其の至孝を稱す。

杣 〔國字〕

○そま(樵)○山林より伐り出したる材木、そまき。○きこり、そまびと。＝樵夫。

杢 〔國字〕

もく(木工)

杳 四畫 ヨウ

○くらし(冥)○ふかく、ひろし(深廣)はるか「—一」「—然」「深—」○さびし(寂)「—無二消息一」

別解 冥シクなり、日の木下に在るに从ふ、會意文字。杲カウの反對。

【杳杳】ヨウヨウ くらくしてはるかなる貌。張衡、思玄賦「日—一四匿」＝窅窅。

【杳窅】ヨウヨウ 深遠なる貌、窅は深遠。鮑溶詩「—青雲望」＝杳冥。

【杳乎】コヨウ ふかくして廣き貌、はるかなる貌。管子、內業「杲乎如レ登二於天一」—如レ入二於淵一」

【杳窱】ヨウヨウ おくぶかし。水經、注「四周—一」＝幽邃・杳窅。

【杳然】ヨウゼン はるかなる貌。李白詩「桃花流水—レ去、別有二天地非二人間一」＝杳乎・杳冥・窅然。

【杳冥】ヨウメイ はるかに遠き貌。杜甫詩「—入二雲漢一」＝杳杳・杳窱・杳渺・杳然・杳乎。

【杳窱】ヨウヨウ ふかくして遠き貌。權德輿詩「蒼蒼窮二—一、新潭漾二淪漣一」＝杳冥。

【杳渺】ヨウベウ はるかに遠き貌。白居易詩「拳石蒼蒼翠、尺波烟—一」

【杳味】ヨウイ はるかにしてくらし。拾遺記「悠哉—一」＝杳冥。

【杳冥】ヨウメイ おく深くしてくらし。楚辭「—兮蓋晦」張衡、西京賦「雲霧—一」＝杳昧・窈冥・窅冥。

杯 麻 通じて牙に作る

○やしの木、安南地方に多く產す、樹は棕櫚に似たり。左思、吳都賦「椰—」椰。○椒—は木の枝の參差としてあちこちに出づる貌〔魯靈光殿賦〕＝槎。

杭 カウ 陽

○ふなわたし。又、船にて渡る。詩、衞風「誰謂二河廣一、一葦—之一」＝航。○州名、浙江省に屬す、日清馬關條約により開きて商埠と爲す。○圖くひ(杙)

杲 カウ 皓

○あきらか(明)日光の明かなる貌。○たかし(高)

別解 明なり、日の木上に在る會意文字。

【杲杲】カウカウ 日のあきらかなる貌。詩、衞風「—出日」

【杲乎】コウ 高き貌。管子、內業「—如レ登二於天一」

果 ㊀クワ ㊁ワ 哿 哿

㊀くだもの、このみ(木實)「—實」「碩—」「珍—」「嘉—」「茶—」菓の正字。○むくい(應報)原因より生ずるなりゆき「結—」「因—」○かつ(勝)○はつ、はたす(決)おもひきりよし。論、子路「行必—」○はたして、あんのごとく、豫期せし通り。○いさむ(勇敢)「—敢」「勇—」○をはり、はて。○はては、つひに。○飽ア く貌。○さる。猿に通ず。○じがばち、蠮に通ず。㊁はんべる(侍)孟、盡心「二女—」＝操。

【果銳】クエイ 思ひ切りよく心するどし。南史、朱超石傳「超石亦—一」

【擲レ果滿レ車】ツルマツクワニミツル 潘安仁は美男なる故、外出する時、婦女來りて果を擲ち、車に盈つ。世說、注「安仁至美、每レ行、老嫗以レ果擲レ之、滿レ車」

【果悍】カカン おもひきりありて强し。漢書「燕士—一、卽引弩椎二擊之一」

【果敢】カカン おもひきりてはたす。王安石、祭二歐陽文忠公一文「—一之氣、剛正之節」

【果毅】クワギ ○勇氣ありて敵を殺し、功を立てる。晉書、泰誓「爾衆士、其尙迪—一、以登二乃辟一」○決斷ありてつよし。抱朴子「奮—一之壯烈」＝剛果・勁果。

【果刑】クワケイ 罪ある者を必ず處罰す。沈亞之、賢良方正寰對「—一信賞、國之筋絡也」＝必罰。

【果勁】クワケイ 思ひ切りよくして氣力つよし。魏志、袁紹傳「北兵數衆、而—一不レ及レ南」

【果決】クワケツ おもひきりよし。潘岳賦「遠二子嬰之—一、敢討レ賊以紓レ憤」歐陽修詩「遲疑與二—一—一」＝果斷。

【果躁】クワサウ あちあらしくかるはづみ。

【杰】ケツ 庶

○人の名。○豪傑の傑(人部十畫)の俗字。

杭 ㊀ゲン・グヮン ㊁グヮン・ゲン 元 諫

㊀一種の喬木、皮厚く、味苦澁、煎たる汁にて衆果を藏すれば腐敗せずといふ。○ふぢもどき(草の名)㊁もむ(按摩)〔史、扁鵲傳〕

桎 ゴ 質

○やらひ、木を交互にして以て遮闌と爲すもの。○桎—は こまよせ、うまどめ。＝行馬。

枸 コウ 尤

○かうぞ(楮)紙を製する原料。＝構。○まがる(曲)苟、性惡「檿栝之生、爲二—一木一也」

枝 ㊀シ ㊁キ 支 支

㊀えだ(條)木の幹より分れ生ずるもの。支に通ず。○てあし(手足)孟、梁惠王「爲長者折—一」按摩をとる。＝肢。○物事のわかれ、えだは「—流」○ふし(手節)○わかる(分)ばらばらになる、支離する。易、繫辭「中心疑者其辭—一」○ちる(散)○梧はささふ(支持)抵繫する。○つっかひばしら(支柱)○十二支。幹—は干支。㊁むつゆび(手足多指)＝跂。

【枝胤】シイン わかれのちすぢ。牛僧孺文「—一蔑秩、累累而賢」

【枝葉】シエフ ○えだと、はと。國語「人之有レ學、猶二木之有二—一也一」○子孫の義。左傳「公族、公室之—一也、若去レ之則本源無レ所二庇廕一矣」○轉じて、事の主要ならざる義、えだは。

【枝折】シヲリ 國○山路などに道しるべのため木の枝を折りてめじるしとすること。轉じて案內、道しるべの義。○讀みかけたる書物の間に挾みてしるしとするもの。＝栞。

【枝柯】シカ えだ、柯も枝。晉書、石崇傳「嘗以二珊瑚樹一賜レ之、高二尺許、—一扶疎、世所二罕比一」＝枝條。

【枝解】シカイ 四肢を切りはなす刑。史、蔡澤傳「功已成矣、而卒—一」

【枝幹】シカン ○十干と十二支と。呂覽、「—相配以成二六旬一」後漢書、律曆志「作二甲乙一以名レ日、謂二之幹一、作二子丑一以明レ日、謂二之枝一」＝支干・干支。○えだと、みきと。世說「—一扶疎」○手足と軀幹と。釋名「五行

鬱ノ木、故其體狀有二――一也」

【枝葉】シケイ 草木のえだと、くきと。參同契「――相連」

【枝梧】ゴ ささふ、さからふ。抵抗する。枝は小柱、梧は斜柱、撐支ハリサの義あり、因りて抵禦に喩ふ。梧又搖・に作る。史、項羽紀「諸將皆懼服、無二敢――一」＝支吾。

【枝梢】シセウ えだと、こずゑと。白居易詩「――颯二青翠一、韻若二風中絃一」

【枝戚】シセキ わかれのしんるゐ、別家。沈炯文「皇家――、莫レ不二榮荷一、江東冠冕、俱知二憑賴一」＝枝族。

【枝族】シゾク わかれたるやから。魏志、三少帝紀評「必參二――一、終二于曹爽一」＝支族・枝戚・枝胤。

【枝隊】シタイ 本隊より分れたる部隊。＝支隊。

【枝撐】シタウ ささへる。杜甫詩「河梁幸未レ坼、――聲鑿窣」＝支持・支柱。

【枝蹄】シテイ 獸のひづめのわれてゐるもの、牛の蹄の類。＝偶蹄。

【枝頭】シトウ えだのさき。朱熹詩「好鳥――亦朋友、落花水面皆文章」

【枝杪】シバウ えだと、こずゑと。羅隱詩「葉光閑汎艷、――靜氛氳」＝枝梢。

【枝流】シリウ えだ河。＝支流・支水。

【枝指】シシ むつゆび（六指）の類、岐生の指。莊、駢拇「駢拇――、出二乎性一哉」

【枕】

㊀シン 寢 枕 通音 ㊁チン 沈

㊀まくら「孤――」「警――」○まくら論、述而「曲肱而――之」○車後の横木。○魚の腦中の骨。＝丁。○のぞむ（臨）「――水」「――江」㊁牛を繫ぐくひ。

【枕戈】チンクワ ほこをまくらとする。非常を戒むる義、心軍國に存して安眠せず。晉書「日厭忘レ食、――待レ旦」五代史、雜傳「常披甲――而臥」

【枕塊】チンクワイ 土くれを枕にする、古、親の喪に居る禮。儀禮「寢レ苫――」

【枕經籍書】チンケイセキショ 讀書に耽るをいふ。班固、答賓戲「徒樂三――紆二體衡門一」

【枕肱】チンコウ ひぢをまくらとする。論、述而「飯二疏食一、飲レ水、曲レ肱而枕レ之、樂亦在二其中一矣」

【枕藉】チンセキ 互にまくらしてよりかかる。漢書、酷吏傳「一發視皆相――死」、赤壁賦「相與――乎舟中」

【枕上】チンジヤウ ○まくらもと、まくらべ、上はほとり。岑參詩「――片時春夢中」＝枕頭・枕邊。○枕のうへ。閒燕常談「歐陽文忠公曰、吾平生作二文章一、多在二三上、馬上・――、廁上也」

【枕書】チンショ 蘇軾詩「――熟睡呼不レ起」

【枕席】チンセキ まくらと、しとねと。戰國策「得三爲レ王拂二――一」拂二――一」とは衾を同らして臥すといふ讓辭。

【薦二枕席一】チンセキヲススム 夜の伽ギを奉する。宋玉、高唐賦「妾巫山之女也（中略）願――」＝拂二枕席一。

【不レ安二枕席一】チンセキヤスンゼズ 心に憂ありて夜、安眠が出來ず。呂覽「身――、口不レ厚二甘味一」

【枕肘】チンチウ ひぢをまくらとする。杜甫詩「日斜――レ廢已熟」＝枕肱。

【枕軍】チングン まくらと、たかむしろと、廢具。禮、內則「飲二――、灑二掃室堂及庭一」蕭穎士詩「淵冪連二――、峯勢入二增軒一」

【枕頭】チントウ まくらもと。＝枕上・枕畔・枕邊。

【枕蓐】チンジヨク くくりまくら。陸游詩「采二得黃花一作二――一」＝括枕。

【枕畔】チンハン まくらもと。蘇舜欽詩「――冷香通二醉夢一」＝枕上・枕頭。

【枕邊】チンペン まくらもと。韋應物詩「――書卷話二風閒一」＝枕上・枕頭・枕畔。

【枕流】チンリウ 水流に枕する。晉書、孫楚傳「――レ漱レ石」

【高レ枕】タカクマクラス おちつきてねる、安心する、安堵する。漢書、高后紀「――、而王二千里一」

【安レ枕】アンチンス やすらかにねむる。漢書、英布傳「時公對曰、使三英布出二于下計一、陛下――、而臥矣」＝安眠・安二枕席一。

【枕木】チンボク 國物の下にかって上のものをささへる木。「鐵道の――」

【枕言葉】マクラコトバ 國或語の上につける修飾語。「ちはやふる」神「足曳の」山の類。＝枕詞・冠辭。

【枕草子】マクラノソウシ 三卷、清少納言の隨筆、文章簡潔にして輕妙なり。

【枓】

㊀シュ 有 ㊁トウ

㊀ひしゃく（杓）水を酌む器。禮、喪大記「沃二水用レ――」㊁ますがた。柱の上の方形の材木、又、斗に作る「――栱」

【杵】

ショ 麌

○きね、臼の中の物を搗く具。○たて、戰に用ふる武具。書、武成「血流漂――」○きぬたのつち、擣衣之槌「砧――」○天――は、彗星。

【不レ相レ杵】シヤウセズ 臼をつく者が悲しみのあまり杵うたをうたはず、相はきねうた。史、商君傳「瞽者――」

【杵臼】シウキウ きねと、うすと。王炎詩「竹間――相敲擊」

【杵臼之交】シウキウノまじはり やとひにん仲間の交際。後漢書、吳祐傳「公孫穆來遊二大學一、無二資糧一、乃變レ服客傭、爲レ祐賃舂、祐與語大驚、遂共定二交于杵

臼之間一」採一に沙に作る。

【杵臼】シウキウ きぬたの聲。謝靈運、擣衣詩「極長――哀」＝砧聲。

【松】

シヨウ 多

古、案には俗字に作る。

○まつ、常綠の針葉樹、其の材、用途甚だ廣し「孤――」「蒼――」「老――」「勁――」○まつの木の長壽にして歲寒にも色を變へざるより、節操・長壽などの譬に用ふ「――柏操」○江の名、蘇州の太湖に出で上海を經て黃浦江と合し海に入る「――江」

【松瑪】シヨウバ まつと、たけと。儒光義詩「節操方二――一」＝松竹。

【松飆】シヨウヒウ まつかぜのおと。白居易詩「――徒煩聽、桃夭不レ足レ觀」＝松籟・松聲・松籟。

【松影】シヨウエイ まつのかげ。鶴林玉露「每二春夏之交一、蒼蘚盈レ堦、落花滿レ徑、門無二剝啄一、――參差、禽聲上下」

【松蛭】シヨウシツ すす。曹植詩「――出二青――、筆出二鮫蒐鞘一」＝松煤。

【松下】シヨウカ まつの木のした。孫莘、訪二羊尊師一詩「――問二童子一、言師采藥去」

【松青】シヨウセイ まつのやに。本草「松脂別名――」＝松脂・松肪・松香。

【松江之鱸】シヨウカノロ 吳松江（今の江蘇省松江府華亭縣にあり）に產するすずき、美味を以て聞ゆ。赤壁賦「巨口細鱗、狀如二――一」松、一音ズン。

【松毬】シヨウキウ まつふぐり。＝松子。

【松菊】シヨウキク まつと、きくと。歸去來辭「三徑就レ荒、――猶存」

【松菊主人】シヨウキクシユジン まつと、きくとのあるじ。唐書、韋表微傳「將爲二――一、不レ愧二陶淵明一」

【松菊緣】シヨウキクエン 松と菊とを愛する因緣。朱松詩「規模琴書室、料理――」

【松菌】シヨウキン 松の根に生するきのこ。殷仲文詩「薄言寄二――一」＝松蕈。

【松炬】シヨウキヨ たいまつ。皮日休、入二林屋洞一詩「忽然白蝙蝠、來樸――明」＝松明。

【松魚】シヨウギヨ 鯛かつを（鰹）＝鮞鯉魚。

【松黃】シヨウクワウ まつのはな。本草發明「松花卽――、拂取正以二蒲黃酒一服、令二輕レ身療レ病」

【松喬之壽】シヨウケウノジユ 赤松子と王子喬とのことぶき、二人は共に長壽せし仙人。漢書、王吉傳「心有二堯舜之志一、則體有二――一」＝喬松之齡。

【松鈒】シヨウイ 松の葉、鈒に似たる故。癸辛雜識「凡松葉皆雙股、故世以爲二――一」

【松杉】シヨウサン まつと、すぎと。劉長卿詩「猿鳥鳴啾啾、――雨聲多」楊萬里、游二定林寺一詩「穿二壺――一行二盡石、一菴猶隔白雲岑」

【松子】シヨウシ まつの實。杜甫詩「風落收二――一、天寒剝二蜜房一」＝松實。

【松脂】シヨウシ まつやに。本草集解「老松餘氣結爲二茯苓一、千年――化爲二琥珀一」＝松膠・松膏・松香。

【松楸】シヨウシウ 二木は墓地に植うる木、よりて墓地の代名詞とす。李遠詩「謝公何歲掩二――一」

【服二松實一】フクシヨウジツ 松の實を食ひて仙術を學ぶ。神仙傳「偓佺好食二松實一、能飛行如二走馬一、其服者皆至二三百歲一」

【松蕈】シヨウジン まつたけ。本草集解「――生二松陰一、采無二時、凡物松出、無二不レ可レ愛者一」＝松菌。

【松樹千年終是朽】シヨウジユセンネンシユウゼクキウ 松は常綠樹なれども、千年の後には枯れて朽ち果つ、天下の物皆死せざるなきに喩ふ。白居易、放言詩「――、槿花一日自爲レ榮、何須聽レ世常憂レ死、亦莫二鍾レ身浸厭一世、生去死來都是幻、幻人哀樂繫二何情一」

【松翠】シヨウスイ まつのみどり。朱慶餘詩「山深――冷、覆篩菊花秋」

【松篁】シヨウクワウ まつと、しのだけと。王昌齡詩「幽娟――徑」

【松蘇利】シヨウソリ すずりの異名。

【松濤】シヨウタウ まつかぜのおと。歐陽元詩「輪長蓋閑來暇、茗、下レ簾危坐聽二――一」＝松籟。

【松竹梅】シヨウチクバイ まつ・たけ・うめ 歲寒の三友といふ。李邕詩「醉裏呼レ童展レ畫、笑題二――花一」

【松煤】シヨウバイ まつを焼きて得たるすす。洞天清錄「至二魏晉、始有二墨丸一、乃漆煙――、夾和爲レ之」

【松柏】シヨウハク 松と、このてがしはと。論、子罕「歲寒然後知二――之後レ凋也」

【松柏操】シヨウハクサウ 松柏の四時其の色を變へざるに比して、人の操の堅きにいふ。南史、樂頌傳「與二松柏一比レ操、風霜等レ烈、豈不レ美耶」

【松明】シヨウメイ 松の木の心の油ある者をもやすをいふ、たいまつ。戴石屏詩「――夜當レ燈」＝松炬。

【松膠】シヨウケウ 茯苓の異名、松根に生じ藥用とす。蘇軾詩「結二茅築山一、――」

【松蘿】シヨウラ 蔦の一種。本草「――、一名女蘿」詩、小雅「蔦與二女蘿一」毛文「女蘿在レ草、曰二兎絲一、在レ木曰二――一」

【松籟】シヨウライ まつかぜのおと。元曉、總亭詩「――韻宮商」＝松濤・松聲。

【松露】シヨウロ ○松のつゆ。王勃詩「――霜餘早、――夢蓬萊」○圓松の木の下の砂に生ずるもの、球狀にして食用に供す。＝奏苓。

【桑】

松（前條）に同じ。

【納】

ノウ 合

○ほぞ、鑿に插し入れる栓。楚辭、九辯「圓鑿而方――兮、吾

固知其鉏鋙而難入」

【柟鑿不二相容一】ヒイチャウ 四角なるほどは圓きほど孔にはまらぬ。字解參看。

【析】セキ 錫

○さく、わる（破木）○わかつ、わかる（分）「分ー」「剖ー」「條分縷ー」○分れ居る。書、堯典「厥民ー」○とく（解）「解ー」

同音異義 木を破るなり、木斤に从ふ會意文字。

同音異義 析・分・別・判・頒・班・訣の朏は分（刀部二畫）の條を見よ。

【析肝】カンカン きもをさく、まごころを示す。赤誠を披瀝する。史、鄭陽傳「剖レ心ーレ相信」

【析薪】シンシン たきぎをわる。詩、齊風「ー ー如レ之何」 父祖の業を失墜せざる義。負荷を見よ。

【析出】シュツ 化學にて化合物を分析し、或物質を分離して出す。

【析別】ベツ わかれはなれる。後漢書、馬皇后紀「太后感二ー ー之懷一、各賜二王赤綬一」＝離別。

【枏】ダン・ナン 覃 ゼン 豏 俗に楠に作る

○うめ（梅）○ゆづりは（交讓木）一說に豫章に同じ、楠の正字なりと。廣羣芳譜「ー生二南方一、故又作楠」

【杻】チウ 有

○てかせ（手械）「鉗ー」○もちのき（櫧）葉は杏に似て尖り、皮は赤く、木理は曲多くして直少し。

【杝】チュン 眞

うるしに似たる木。＝椿。

【杝幹】カンン 漆に似て、古昔多く琴の材に用ひし木。書、禹貢「ー ー栝柏、礪砥砮丹」

【桅】㊀チ・ト 語 ㊁ジ 御 ㊂ジ 語

㊀ひ、はたおりの具、よこいとを通はす具（機之持緯者）＝筴。○うすし（薄）㊁水を汲み出す槽○くむ、出す、排泄する。管、禁藏「ー井易」水」㊂どんぐり、櫟の實。栗の屬。＝芋。○つるばみ（栩）

【投レ桅】トウトウズ 投杼之疑（七三三頁一參看。

【杼機】キ ひと、はたと。はたを織るに用ふる具。郭泰詩「寒女雖二妙巧一、不レ得レ乘二ー ー一」＝機杼。

【杼梭】ソ ひと、をさと。又、はたを織る義。梅堯臣詩「應レ莫レ勸二蠶織一、生計非二ー ー一」

【杼軸】ジク 杼はひ、機の緯を持する具、軸はをさ、經を受くる具。轉じて文章を組み立つる義とす。陸機、文賦「雖レ二ー ー於予懷一、恤二他人之我先一」＝杼柚。

【杼栗】ジツリツ とちの實と、くりの實と。莊、山木「衣二裘褐一、食二ー ー一」

【東】トウ 東

○ひがし、ひんがし、日の出る方。禮記「大明生二于ー一」○ひがしす、ー方へ行く。左傳「秦師遂ー」○はる（春）五行說にてーは春に當るが故。○ー君は日。又春の神。○ー宮は世子又太子。○安ーは縣名、奉天省に屬す。○活ーはおたまじゃくし（科斗）○圃ー西は物の義、ー西南北に產する所の物の義。○國あづま。相模國箱根以ーの八國の總稱「關ー八州」

同音異義 日・木中に在るを東と曰ひ、上に在るを杲と曰ひ、下に在るを杳と曰ふ、木は若木なり、日の昇降する所。

【東夷】イトウ ○東方のえびす、東の方の野蠻人「ー ー西戎南蠻北狄」○國 古代東國の人を嘲りていふ。

【東閣】トウ 東宮の門。白居易詩「從容下二南山一、顧盼入二ー ー一」

【東雲】ウン ○ひがしのくも。宋書、袁豹傳「延二首ー ー一」○國しののめ、あけがた。

【東榮】エイ いへの東方にあるのき。禮、喪大記「ー ー」注「榮、屋翼也」

【東瀛】エイ ひがしのうみ。王融、浮行頌「河彼流水趨二ー ー一」

【東宛】エン 箏の異名。道藏「箏、一名ー ー」

【東垣執戟】シツゲキ 鼠の異名〔河東記〕

【東家】トウ ○雇人より其の主人をいふ語。古時、主位は東方に在り、賓位は西方に在りし故。○ひがしどなりの家。漢書、王吉傳「ー ー有二大棗樹一」

【踰二東家牆一】トウカショウ 東隣の墻根を越えて其の處女を挑む。孟、告子「ー ー而攘二其處子一、則得レ妻、不レ攘則不レ得レ妻、則將攘之乎」

【東家丘】トウカキウ 丘は孔子の名、孔子の西隣に住せし人が、孔子の聖人たることを知らずして、東家の丘と呼びし故事。孔子家語「魯人不レ知二孔子聖人一、乃曰、ー ー者知レ之矣」

【東階西階】トウカイサイカイ 東西のきざはし。客は西階より昇り、主人は東階より昇る。曲禮「主人篤レ客而入、主人就二東階一、客就二西階一」

【東海揚塵】トウカイヤウジン 海の陸に變ずるにいふ。神仙傳「麻姑謂二王方平一」

曰、自二接待一以來、見二東海三變爲一桑田一、向到二蓬萊一、水乃淺二於往者一、略半也、豈復爲二陵陸一乎、方平乃曰、東海行復揚レ塵耳」

【東海夫人】トウカイフジン 淡粢の異名。

【東鄉】トウキャウ 東方に向ふ、鄉は嚮。史、陰侯傳「王曰、丞相數言二將軍一、將軍何以數二寡人計策一、信謝、因問二王曰、今ー ー爭二權天下一、豈非二項王一邪」＝東向・東嚮。

【東行四走】トウカウシウ いそがはしく東西に奔走する。易林「ー ー、褒二其犬馬一」＝南行北走・東奔西走。

【東漢】トウカン 後漢の別稱、東京卽ち洛陽に都したる故。前漢を西漢といふの對。

【東去西來】トウキョサイライ 東に去り西より來る、東西に奔走する義。＝東奔西走。

【東宮】グウ 太子をいふ。東は易の震卦、震は長男にして東に屬す、故に太子はー ー に在り。詩、衞風「ー ー之妹」疏「太子居二ー ー一」＝青宮・春宮・東儲。

【東君】クン ○日の異名。史、封禪書「晉巫祠、五帝ー ー雲中司命之屬」注「ー ー、日也」○春の神。王初、立春後詩「ー ー珂珮響珊珊」＝東帝。

【東皇】クワウ 春の神。又、春。尙書緯「春爲二ー ー一、又爲二青帝一」＝東帝。

【東郭魏】トウクワクウ 東郭先生の履は底破れて皮なく足にて地を踐む、貧の甚だしきこと。史、滑稽傳「東方朔號二東郭先生一、久待二詔公車一、貧寒衣履不レ完、雪中行、履有レ上無レ下、足盡踐レ地、道中之人笑レ之」

【東觀】クワン 漢代の祕書監、卽ち宮中藏書の處。後漢書、竇章傳「鄧康閑二其名一、薦入二ー ー一、爲二校書郎一」

【東京】トウケイ ○洛陽のみやこの異名。長安を西京といふの對。○トウキン佛廟西フクの東洋植民地、安南・暹羅シヤに接す。○國トウクワウ首府の名。＝東都。

【東后】トウ 東方の諸侯。書、舜典「柴望二秩于山川一、肆覲二ー ー一」

【東西】トウザイ ○東と西と。周禮、地官、大司徒疏「ー ー爲レ廣、南北爲レ輪」○東洋と西洋と。○圃物の義、字解參看。○國興行物などにて口上を述べる時、客をしづめるためにいふ語、もと相撲に始まる。

【東西南北人】トウザイナンボクジン 住居の一定せざる人。禮、檀弓「今丘也ー ー也」

【東作】トウ 春の耕作、農作の義。書、堯典「寅賓二出日一、平二秩ー ー一」

【東三省】トウサンセイ 支那の東北部、奉天吉林・黑龍江の三省。

【高二臥東山一】カウグワンニ 世の俗塵をさけて山中に隱居する。晉書、謝安傳「屢違二朝旨一、ー ー」

【東牀】トウシャウ 女壻、卽ちむすめのむこ。太尉、郗鑒、門生をして女壻を王導の家に求めしむ、王氏の子弟みな矜持す、唯一人ー ー に在りて坦腹して食ひ、獨り聞かざるが若し、鑒曰く、正に此れ、佳壻なりと、之を訪へば乃ち羲之なり、遂に之に妻はす、羲之は王導の從子〔晉書、王羲之傳〕

【東序】ジヨ 古の大學、王宮の東に在るによる。禮、王制「夏后氏養二國老于ー ー一、養二庶老于西序一」西序は小學。

【東司】トウ 禪家にてかはや。登司卽ち厠ヤの神の名の轉訛。

【東陲】トウスイ 國のひがしのはて、陲は邊。＝東垂・東陬・東隅。

【東遷】トウセン ○東方にうつる。○周の平王が都を豐鎬地方より東方の洛陽に遷したるをいふ。左、隱六「我周之ー ー、晉鄭焉依」

【東瞻西望】トウセンサイボウ あちこちみまはす。＝東眺西望。

【東漸】ゼン 東方にすすむ。書、禹貢「ー ー二千海一、西被二于流沙一」

【東岱】タイ 岱は泰山、東方に在り、故にいふ。後漢書、皇甫規傳「烏鼠至二于ー ー一」＝東岳。

【東道主】トウダウシュ 東は主人の位、主人となりて來客の世話する義。左、僖三十「燭之武、見二秦伯一曰、若舍レ鄭、以爲二ー ー、行李之往來、共二其乏困一、君亦無所レ害」

【東冢】トウ ○河南府洛陽の稱。＝東京。○國東京の異稱。

【東坡】バ 宋の蘇軾字は子瞻の號、もと黃州に謫居せし時、其の地名（湖北省黃岡縣治の東に在り）に取る「ー ー巾」「ー ー肉」「ー ー全集」

【東方朔】トウサクバク 前漢の人、字は曼倩、武帝に仕へ、常に諧謔を以て帝に愛せられ、又、帝の過を救ふ、最も詞賦に長ず。

【東風】トウ こち、春の風。禮、月令「孟春之月、ー ー解レ凍」＝春風。

【東風吹二馬耳一】バジフフク 漠然として感動する所なき譬、馬の耳に念佛。李白詩「世人聞レ此皆掉レ頭、有レ如二東風吹二馬耳一」

【東平】ヘイ 漢の國の名、山東省泰安府に屬す。ー ー王蒼

【東壁】ヘキ 文章を司る二星の名。轉じて文學の義とす、壁一に辟に作る。晉書、天文志「ー ー二星、主二文章一、天下圖書之祕府也」

【東北】ホク ○ひがしと、きたと。○東北

【東旦】タン ひがしの天が明ける。支遁詩「圓光朗二ー ー一、金姿豔二春精一」

【東儲】チヨ 皇太子をいふ。南史、齊文惠太子傳「及レ正二位一ー ー、善立レ名」

【東帝】テイ 春の神。＝東皇・東君。

【東天】テン ひがしのそら。又、あけがたのそら。＝曉天。

【東天紅】コウテン 國○ひがしが赤らむ。○轉じて雞のなきごゑの形容にいふ。

【東都】トウ ○河南府洛陽の稱。＝東京。○國東京の異稱。

【東坡】バ 宋の蘇軾字は子瞻の號、もと黃州に謫居せし時、其の地名（湖北省黃岡縣治の東に在り）に取る「ー ー巾」「ー ー肉」「ー ー全集」

【東方朔】トウサクバク 前漢の人、字は曼倩、武帝に仕へ、常に諧謔を以て帝に愛せられ、又、帝の過を救ふ、最も詞賦に長ず。

【東風】トウ こち、春の風。禮、月令「孟春之月、ー ー解レ凍」＝春風。

【東風吹二馬耳一】バジフフク 漠然として感動する所なき譬、馬の耳に念佛。李白詩「世人聞レ此皆掉レ頭、有レ如二東風吹二馬耳一」

【東平】ヘイ 漢の國の名、山東省泰安府に屬す。ー ー王蒼

【東壁】ヘキ 文章を司る二星の名。轉じて文學の義とす、壁一に辟に作る。晉書、天文志「ー ー二星、主二文章一、天下圖書之祕府也」

【東北】ホク ○ひがしと、きたと。○東北

の閑、うしとらの方位。易、說卦「艮――之卦也」＝艮位。

【東奔西走】トウホンセイソウ　宋の張載が書齋の東まどに掲げたる文、言行を謹むべきことを述ぶ。

【東洋】トウヨウ　亞細亞アジア大陸のひがしの方の稱、即ち我邦及支那の汎稱。＝大東。

【東萊博議】トウライハクギ　四卷、宋の呂祖謙の著、左傳の評論なり、東萊は著者の號。

【東籬】トウ　○ひがしのまがき。○――君子クンシは菊の異名。晉の陶淵明の故事。陶潛、飲酒詩「采二菊――下一、悠然見二南山一」

【東流】トウリウ　○ひがしにながれる水。書、禹貢「――入レ漢」○支那の川はみな東流するを以て、單に川の稱とす。莊子「海不レ辭二――一、大之至也」○ルトウ　爾東方に弘まる。翻譯名義集「大法――、爲レ日諒久、雖二風移政變一而弘レ之不レ易」＝東漸。

【東營】トウ　周代、營の國を山東と山西との二に別ちていふ。北山移文「學二遯――一、習二隱南郊一」

【杷】㊀ハ　㊁ハ　麻

㊀さらひ、土をならし、又は穀類をかきあつめる農具（平田器）（收麥器）「鐵――」○枇――ビは果樹、高さ丈餘、葉は馬耳に似、冬、白花を著け、其の實は黃色にして味甘美なり。又樂器、もと胡人が馬上にて鼓するもの。＝批把琵琶。㊁え、つか（柄）＝欄。

【蓜】ハ　ハイ　卦

○はな、葩ハの總名。○あさ（麻紵）

【杯】ハイ　匠

極・盃は俗字

○さかづき（飲酒器）「玉――」「金――」「螺――」○ひろく液體を盛りたる器物。又其の器物を數ふるにいふ「酒三――」「一――羹」

【舉レ杯】キヨハイアグ　さかづきをとりあげる、酒を飲む。李白詩「――レ――邀二明月一」＝稱レ杯。

【傾レ杯】ケイハイカタムク　さかづきをかたむけて酒を飲む。蘇軾詩「――レ――不二敢餘一」

【銜レ杯】ガンハイフクム　酒を飲む。劉伶、酒德頌「――レ――漱レ醪」杯酒參看。

【杯圈】ハイケン　次條に同じ。

【杯棬】ハイケン　木をまげて作りしさかづき。禮、內則「母沒而――不レ能レ飲焉、口澤之氣存焉爾」＝杯圈。

【杯心】ハイシン　さかづきのまんなか。陳遭詩「晴日倒レ紅生二笑頰一、煙梧搖レ綠漾二――一」

【杯觴】ハイショウ　さかづき。劉禹錫詩「白家惟有二――興一」

【杯酌】ハイシヤク　さかもり。戴叔倫詩「莫レ怪沙邊倒、偏宜――餘」＝杯讌。

【不レ勝二杯杓一】ヒシヤクニタヘズ　のみ過ごして酒席に居るにたへられぬ。史、項羽紀「沛公――、不レ能レ辭」

【杯酒】ハイシユ　さかづきのさけ。漢書、司馬遷傳「未下嘗銜二――一、接中慇勤之歡上」

【杯水】ハイスイ　さかづきのみづ。孟、告子「今之爲レ仁者、猶下以二――一、救中一車薪之火上也」

【杯洗】ハイセン　國酒席にて杯をあらふ器。＝盃洗。

【杯池】ハイチ　さかづきの如き小さきいけ。李賀詩「――白魚小」

【杯中蛇影】ハイチユウジヤエイ　神經質にてうたがひまどふ心ある喩。晉の樂廣、河南の尹に遷る、嘗て親客あり、久闊また來らず、廣其の故を問ふ、答へて曰く、前に座にありて酒を賜ふことを蒙る、飲むに方りて忽ち盃中に蛇あるを見て、意甚だ之を惡む、既に飲みて疾むと、時に河南の廳事の壁上に角弓あり、漆畫もて蛇を作る、廣意ふ、盃中の蛇は卽ち角弓ならんと、また前處に置酒し、客に謂ひて曰く、盃中また見る所ありや不ヤや、答へて曰く、見る所初の如しと、廣乃ち其の所以を告ぐ、客豁然として意解け沈痾頓に愈ゆ（晉書、樂廣傳）

【杯中物】ハイチユウモツ　さかづきの中のもの、卽ち酒。陶潛、責レ子詩「天運苟如レ此、且進二――一」

【杯盤狼藉】ハイバンロウセキ　酒席の終に近づきて、酒杯・器皿などの散亂するにいふ。史、滑稽傳「――、堂上燭滅」蘇軾、前赤壁賦「殼核已藉、――」

【椈】ハイ　國　別に柿に作る

○きふだ（木橫）こけら。○こっぱ（木片）晉書、王濬傳「木――蔽二江而下一」○へぎ、薄くそぎたる板。

【柿】ハイ　椈（前條）に同じ。果樹の柿（木部六畫）とは別。

【枚】マイ　匠

○みき、もと（幹）說文「枝曰レ條、幹曰レ――」○かず、ひとつ、ひとっぴとっかぞへる「一――」＝箇。○うまのむち（馬箠）左、襄十一「以――數二圖」○鑵の乳。○狀、箸の如く、口に橫にふくませ、紐にて頂にむすび聲を發するを防ぐもの。漢書、高帝紀「章邯夜銜――擊二項梁定陶一」○――はこまか（細密）なる貌。國○ひら、薄く平たき物を數へるに添へる語「紙一――」「板三――」

○昔、金銀貨幣を數へるに用ひし語、金一――は七兩二分、銀一――は四十三匁。

【銜レ枚】カンバイフクム　字解參看。楚辭「願――而無言兮」

【枚數】マイスウ　○かず。左傳「識二其――一」○國マイ紙・板等の薄き物のかず。

【枚筮】バイゼイ　其の事と指サシきずしてひろく吉凶をうらなふ（左、昭十二）

【枚枚】バイバイ　こまかき貌。詩、魯頌「閟宮有レ仙、實實――」

【枚卜】バイボク　一一かぞへうらなふ。書、大禹謨「――ニ――功臣、惟吉之從」

【枚舉】バイキヨ　一一かぞへあげる。書、無逸、傳「因二其先後次第一而――之辭也」

【枋】ハウ　陽

○ふしづけ。○車の材に適する木。＝檀木。○蘇――スハは東印度に產する喬木、莖に刺あり、黃色の花開く、其の幹の煎汁は、紅色の染料と爲すべし。＝蘇木。

【板】ハン　圖　通音バン　又、版に作る

○いた（片木）「平――」「負――」又、――の如く薄く平たきもの「鐵――」○はんぎ「出――」＝版。○ふだ（刺・籍）○みことのり（詔書）「詔――」○ふみ（書牘）○牆を築く者一丈を――といふ、一解、八尺をいふ。○手――は笏シヤク束帶の時に持つもの。晉書、王坦之傳「倒執手――」○拍――は樂器、打ちて拍子を取るもの。○――はそむく（反側）又道を失ひてみだれる。詩、大雅、板篇「上帝――」

【板櫟】ハンレキ　いたびさし。晉書、桓嗣傳「廳作二――一、命以茅代レ之」

【板屋】バンオク　いたぶきやねの家。詩、秦風「在二其――一、亂二我心曲一」

【板行】バンカウ　はんにほりて世にひろめる、板刻して發行する。＝版行・印行・出版・上梓。

【板幹】バンカン　ついぢを支へる柱。柳宗元文「斬二――一、竪二柱礎一」

【板木】ボン　國はん、文字・圖畫などをほりつけたる木。＝印板・刻板・版木。

【板魚】ボンギヨ　ひらめ（鮃）北戶錄「北目魚、南越志謂二之――一」

【板刻】バンコク　書籍を版にきざむ。蘇耕錄「――閣亭甲集十二刻、內有二定武――一」＝版刻。

【板蕩】バンタウ　國がみだれうどく、詩經に板と蕩との二篇ありて共に政道の亂れたるをいふによる。唐書、蕭瑀傳「疾風知二勁草一、――識二誠臣一」

【板榜】バンボウ　いたのふだ。張祜詩「重廊標二――一、高殿鎖二金環一」

【板本】バンポン　はんにほりたる書物、印刷せし本。――は五代の馮道に始まる。寫本の對。＝版本・刻本・印本。

【板金】バンキン　國板の如くに薄くしたる金屬。

【板子】ゴイタ　國舟ぞこにあろあげいた。

【枇】ヒ　支

――杷は果樹、一名、盧橘。杜甫詩「――杷樹樹香」又、樂器。＝琵琶・批把。

【枕】フ　處

――疎ソは枝葉の四邊に布く義。陶潛詩「遙遙屋樹――疎」――は通じて扶に作る。

【枌】フン　文

○にれの一種、白楡。本草綱目「楡有二赤白二種、白者名――」○むなぎ（棟）芽に通ず。○國そぎ、木を薄くそぎし板。こけらよりは大いなり。

【枌楡】フユ　○にれ。禮、內則「薑芥――」○故鄉の義。漢書、郊祀志「高祖膰二豐――社」もと――を植ゑて社神とせしによりて鄉名とす。四京賦「豈伊不レ懷二舊二于――」

【杪】ベウ　篠

○こずゑ（梢）木のさき。韋應物詩「高齋出二林――」○ちさし（小）木の細き枝。○いただき、はし。○すゑ、歲又は月の末「秋――」「歲――」「月――」

【杪歲】ベウサイ　としのすゑ。晉書、桓彝傳論「交二霜雪於――、晦二風雨於將晨一」＝歲杪・歲暮・歲尾。

【杪秋】ベウシウ　あきのすゑ。魏徵詩「首夏別二京輔一、――滯二三河一」

【杪春】ベウシユン　はるのすゑ。李端詩「江上花開盡、南行見――」

【杪冬】ベウトウ　ふゆのすゑ。梁元帝纂要「冬曰――」＝季冬・末冬・晚冬。

【杪頭】ベウトウ　こずゑ。いただき。傳咸賦「未レ升レ半而九息、何時逾二乎――」

【杪杪】ベウベウ　細小なる貌。漢昭武王、遠志賦「――余躬、遐遐西邦」

【林】リン　侵

○はやし、もり、平土に叢木あるをいふ「山――」「上――」「茂――」「深――」「森――」「花――」「杏――」○樹木。○盛んなお貌。詩、小雅「有レ王有――」○おほし（衆）「――立」○物の多く叢り集まる義、事物の淵藪をいふ「儒――」「藝――」「辭――」○野外。○綠――は荊州の山名。後漢書、劉玄傳「諸亡命聚二藪於綠一中一」轉じて盜をい

ふ。○吉ーは省名、東北は露領に連り、南、奉天に連り、西、黑龍江に接す。

【林露】リンロ はやしに立つもや。草廬物詩「期月分ニ――」＝林霧。

【林衣】リンイ はやしの木の葉。衣は衣服に比す。宋之問詩「――掃レ地輕」

【林槿】リンキン はやしのこかげ、槿は樹蔭。玉篇「楚謂二兩木交レ蔭之下一曰レ槿」王勤文「遂披ニ――一」

【林園】リンエン 樹の茂りたるその。舊唐書、路嗣恭傳「子恕私第、有二佳――一」

【林下】リンカ はやしのもと。王維詩「客來深巷中、犬吠寒――」

【林下風】リンカノフウ 山林に幽棲せる隱士の風。世說「王夫人神情散朗、故有二――氣一」

【林學】リンガク 森林の培養・保護・林政等の事を研究する學術。

【林間】リンカン はやしのあひだ。白居易、送二王十八歸レ山寄二題仙遊寺一詩「――暖レ酒燒二紅葉一、石上題レ詩掃二綠苔一」

【林坰】リンケイ 野外の地。杜甫詩「朝儀限二霄漢一、客思廻ニ――一」

【林檎】リンゴ 果樹の名、幹枝花葉すべて海棠カイに似、果は光澤ありて味美なり。東京夢華錄「銀杏栗子――之類」＝梓。

【林慙澗愧】リンザンカンギ 節操なき僞隱者が山中に居れば林も澗も皆之を恥づる義。孔稚珪、北山移文「其林慙無レ聲、澗愧不レ歌」

【林趾】リンシ はやしの木の下。潘岳詩「落英隕ニ――一」

【林麝】リンシヤ さかんに多き貌。李子卿賦「戈矛――、士馬櫛比」

【林鍾】リンショウ 十二律の一、陰曆六月に配す。禮記「律中ニ――一」注「季夏氣至、則――之律應」＝林鐘・百鐘。

【林政】リンセイ 山林に關する行政。

【林泉】リンセン 山林泉石、庭園。賞知章詩「主人不二相識一、偶坐爲ニ――一」

【林藪】リンソウ ○草木の茂れる所、草深きなか。後漢書、儒林傳「四方學士、多懷二挾圖書一、遁二逃――一」＝林薄。○物の多く聚る所。典引「仁義之――」＝林府・淵藪。

【林叢】リンソウ 草木のしげみ。＝林薄。

【林塘】リンタウ はやしと、つつみと。趙嘏詩「數畝――槐二一家一」

【林中多二疾風一】リンチユウニシツプウオホシ 鹽鐵論「――、富貴多二諛言一」

【林中不レ寶薪】リンチユウニクキヤウヲズ 林の中には薪多し、故に寶るとも買ふ者なし、すべて物は需用者ある所に用ふべしとの義。淮南、齊俗訓「――、湖上不レ寶レ魚、所レ有レ餘也」

【林薄】リンバク ○草木のむらがりしげれる所、薄はくさむら。西京賦「蕩二川瀆一、薮ニ――一」○草木のしげれる野外。晉書「士諤レ登レ朝、競赴ニ――一」

【林霏】リンヒ はやしに立つもや。歐陽修、醉翁亭記「日出――開、雲歸而巖穴暝」＝林霧。

【林府】リンフ 物の多く集れるところ。陸機、文賦「遊二文章之――一、嘉二麗藻之彬彬一」＝林藪・淵藪。

【林杪】リンベウ はやしの木のこずゑ。柳宗元詩「縈廻出ニ――一」＝林梢。

【林木】リンボク はやしをなせる木。陳信詩「霜天――燥、秋氣風雲高」

【林逋菁レ鶴】リンホヒセイカクヲ 宋の隱君子林和靖の故事。世說、棲逸「林逋隱二居孤山一、常畜二兩鶴一、縱レ之則飛入二雲霄一、盤旋久之、復入二籠中一、逋常泛二小艇一、西湖諸寺、有二客至一、逋所居一、則一童子應レ門、延レ客坐、爲開レ籠縱レ鶴、良久、逋必棹二小船一而歸、蓋常以二鶴飛一、爲二客至之驗一」

【林莽】リンマウ 草木の深く茂れる地。莽はくさむら。揚雄、長楊賦「羅二千乘于――一、列二萬騎于山隅一」

【林務官】リンムクワン 國 大林區署の高等官、森林に關する事務を掌る。

【林立】リンリツ 林の如くむらがり立つ。

【林林】リンリン むらがる貌。柳宗元、元貞符「總總而生、――而羣」

【林麓】リンロク 平地の林と、ふもとの林と。禮記「――川澤、以レ時入而不レ禁」

【林深則鳥棲】ハヤシフカケレバトリスム 人仁義を積めば、萬物招かずして歸趨するに喩ふ。貞觀政要「――、水廣則魚游、仁義積則物自歸レ之」

【枉】ワウ 養

○まがる、まゞ、ゆがめる（屈曲）孟、萬章「――尺而直尋」○しへたげ、抑へ屈する。無實の罪におとす「寃――」「誣――」唐書、高仙芝傳「軍中皆呼――」＝寃罪。又、しへたげにあへる者。○よこしま（邪曲）又、其の者。「姦――」「邪――」「羣――」論、爲政「舉レ直錯諸――」○曲げて就き從ふ「――駕」「――車」

【矯レ枉過レ直】キヤウワウクワチヨク 曲りたる者を矯めなほして、眞直ぐに過ぐ。仲長統、昌言「論遠二至清一、則復入二於――之弊一」

【枉駕】ワウガ のり物をまげる、貴人の來訪を敬ひ稱す、御來車。蜀志、諸葛亮傳「將軍宜ニ――一顧レ之」＝枉車。

【枉己】ワウキ まげて己の守る所を棄てる。孟、萬章「未レ聞ニ――一而正レ人者一」

【枉曲】ワウキヨク ○まゞ、法を曲げて罪する。後漢書「鄉亭吏部、亦有下任二決斷一者上、而類多ニ――一」○よこしま。＝邪曲。

【枉風】クワウフウ ○貴人の身を屈して、來り臨む義。諸葛亮、出師表「猥自――、三顧臣於草廬之中一」＝枉顧・枉駕。○抑サヘつけられて屈伏する。寃罪におとされる。

【枉顧】コワウ まげてかへりみる、貴人の來訪の敬稱。眞士元詩「――問勞長者車」＝左顧・枉駕。

【枉告】ワウコク 事實をまげていつはりつげる。＝枉訴・誣告。

【枉罪】ワウザイ むじつのつみ、ぬれぎぬ。＝寃罪・寃枉。

【枉矢】ワウシ ○直からざる矢、己の矢を謙していふ。禮、投壺、主人請曰、某有ニ――一哨壺一、請以樂レ賓、○火射に用ふる矢。○星の名。漢書、天文志「――狀類二大流星一、蛇行而倉黑」

【枉車】ワウシヤ 枉駕に同じ。戰國韓策「聶政曰、仲子不レ遠二千里一、枉二車騎一而交レ臣」

【枉道】ワウダウ 其の道をまげて人に媚びる。論、微子「――而事レ人、何必去二父母之邦一」

【枉横】ワウワウ まげて罪におとしいれる、無實の罪におとす。禮、月令「申二骸百刑一、毋二或――一」

【枉奏】ワウソウ おびやかしうばふ。後漢書、竇憲傳「帝召レ憲切責曰、今貴主尙見ニ――一、何況小人哉」

【枉法】ワウハフ おきてをまげ用ふる。南史、循吏傳「未二嘗――一申レ恩」

【枉素】ワウソ 事をまげみだる。李蟠文「繩二糾其――一」

【枉步】ワウホ 步をまげて讓る。唐書、朱敬則傳「兄仁軌常誨二子弟一曰、終身讓レ路、不レ枉二百步一、終身讓レ畔、不レ失二一段一」

【枉欲】ワウヨク むさぼる心をおさへる。後漢書、荀爽傳「人能――レ從レ禮者、則福歸レ之」＝克己。

【枉戮】ワウリク おきてをまげてつみする。魏志、董卓傳「豈可下慮二其謗一已、而――レ善人上哉」

枅

〔國字〕

○ます。＝升。○芝居などの觀寬席の方形のしきり。

枠

〔國字〕

○わく。絲をまきつける具。をだまき。○細き竹木を組み合せて造りしもの、器具の外緣となるもの。＝木匡。

五畫

柚

㊀ イウ・ユ　㊁ ヂク　宥屋

㊀ゆず、柑類の一種、冬、冬、芳香酸味ある黃色の實を結ぶ「――子」「橘――」㊁機ハタの經ヨコイトをまく具。詩、大雅「杼――其空」軸に通ず。

枻

㊀ エイ　㊁ セツ　霽屑

㊀かい、かぢ（楫）舟を行やる具「停――」「蘭――」屈原、漁父辭「鼓――而去」＝楫。㊁ゆだめ。弓弩を正す器。荀、非相「檠――、正弓弩之器」＝檠。

枧

㊀ エイ　㊁ ヤウ　庚陽

㊀うめ（梅）○あんず（杏）㊁なかば、屋の中央。

架

カ　禡

○たな（棚）物品を載せ置き又は掛け置く臺「書――」「筆――」○くひ（杙）○ころもかけ、いかう「衣――」○のき、やね（屋宇）「閒――」○かける、空中にかけわたす「――橋」○――は鳥の聲。○かまふ（構）組み立てる。詩、周南「鵲巢」「維鵲作巢、冬至――之、至春乃成」

【架架】カカ 鳥の聲の形容。荊楚歲時記「有鳥如レ烏、先レ雞而鳴、――格格」

【架空】カクウ ○そらにかけ渡す。唐太宗詩「飛簷迴――」○よりどころなき義「――の論」

【架橋】カケウ はしをかけわたす。陸游詩「――築レ道村翁事」

【架棚】カホウ 木のかけひ（木樋）＝木架水槽。

【架上】カジヤウ たなのうへ「――の書」

【架松】カショウ 棚をかけたる如く樣にはひし松。王十朋詩「――卻二頹墨一、樹竹來二清風一」

【架設】カセツ かけわたす「橋梁を――す」

【架築】カチク 橋をかけ堤をきづく。徐賢妃文「非レ無ニ――之勞一」

枷

カ　麻

○からさを、かり取りたる稻麥などの穗をたたきて其の實を落す具「連――」○くびかせ（項械）罪人の首にはめる刑具。○ころもかけ、いかう。曲禮「男女不レ同二椸――一」○架（前條）に通ず。

【枷鎖】カサ くびかせと、くさりと、共に罪人をつなぐ刑具。

【枷脰】カトウ くびかせをつける。脰はうなじ（頸）韓愈文「取二之江中一、――レ械レ手」

柯

カ　歌

○え、をののえ（斧柄）詩、豳風「伐――伐――、其則不レ遠」○えだ（枝）枝の大いなる者「枝――」「庭――」「霜――」杜甫、古柏行「――如二青銅一、根如レ石」○くき（草莖）○三尺の長さの稱〔考工記〕

【柯葉】カエフ えだと、はと。陶潛詩「――自摧折、根株浮二滄海一」＝枝葉。

【伐レ柯伐レ柯】カカバツカカバツ 斧の柄にする木

をきり取りて柄を作る、其の大小長短は現に持つ所の斧の柄を標準とす、人の道も遠く求めずとも近く眼前にあるとの喩。字解參看。

【柯條】ケウ えだ。詩經、疏「松木雖ノ生ニ高山ニ而ーー枯槁」＝枝條。

【枴】カイ　蟹　タイ

つゑ、老人の杖。五代史、漢紀「賜以ニ一木ニ」

【柙】カフ　洽　アフ

○をり(檻)動物などを捕へ入れるもの。論、季氏「虎兕出ニ於ー」○をりに入れる、おさへとどめる、強制する。罪人を拘へて檻に入れる。管、中匡「ー以予ノ齊」○はこ。＝匣。又箱に入れる。莊、刻意「有ニ干將之劍者、ー而藏之」○香木の名。

【柑】カン　覃　カン　潤

かうじ、みかん。蜜柑の一種、葉は楕圓形、花は白色五瓣、冬、黃赤色の實を結ぶ「ー子」「ー橘」「黃ー」

【柬】カン　潸

○えらぶ(擇)分別して選擇する。＝揀簡。○てがみ、書簡「書ー」○なふだ(名刺)

【枳】㊀キ・シ　紙　㊁シ　支

㊀からたち、きこく、橘に似たる一種の樹、葉は橙の如く、枝に刺多し、花は五瓣白色、秋球狀の實を結ぶ、生垣に作り、實を藥用とす。考工記「橘踰ノ淮而化爲ノーー」「南橘北ー」○そこなふ(害)㊁また(股)＝岐。

【枳棘】キヤクシヨクヨク　からたちと、いばらと、共に惡木。後漢書、循吏傳「ーー非ニ鸞鳳所ニ棲、百里豈大賢之路」鸞鳳は共に靈鳥にてーーの如き惡木には棲まず、卑下の地は賢才の居るべき所に非ざるに喩ふ、百里は縣。

【枳椇】キクケンぼなし。＝木蜜・雞爪子。

【枳枸】キクウ　からたち、きこく。＝枳殼。

【枳殼】キコク　からたちの水。橘に似て刺ケト多く、籬とす。雍陶詩「處處春風ーー花」＝拘橘・臭橘。

【枳首蛇】キシシユダ　兩頭のへび。爾雅、釋蟲「ーー、岐蛇也」＝兩頭蛇。

【柩】キウ　有

○ひつぎ、はやをけ。人の死體を入れる箱「靈ー」「ー輿」釋名「在ニ牀曰ニ尸、在ニ棺曰ニ柩」

【柩車】キウシヤ　ひつぎを載せるくるま。

【柩肉未ニ冷】キウニクイマダヒヤカカイラズ　はやをけの中の死體がまだひえきらぬ、死後時を經ざる義。

【枵】ケウ　蕭

○むなし(空・虛)○へる、すく(饑耗)

【枵空】ケウクウ　むなし、から。宋史「比屋ーー」＝空虛。

【枵然】ケウゼン　おほいなる貌。文選、注「ーー、大貌」

【枵腹】ケウフク　○うう、すきはら(空腹)正字通「凡物饑耗曰ニ枵ー」○器がからになる。范成大詩「匏瓜設ーー、蒲柳無ニ眞委ニ」

【枯】ケツ　屑　カツ

○きりかぶ、伐りたる木の株カブ「枯ー」○ひこばえ。きりかぶより生じたる芽。＝蘖。

【枯去】ケツキリさる。＝斬伐。

【枸】㊀コウ・ク　㊁コウ・ク　有　㊂ク　麌　㊃ク　麌

㊀からたち、きこく「ー橘」○木の枝曲マガる。㊁ーー杞コクは灌木の一、高さ七八尺、淡紫色の花を著け赤き實を結ぶ、葉を食用とし、根を藥用に供す。＝苦杞・地骨。㊂わだかまる(盤錯)○きりかぶ(斷木)㊃ーー櫞は檸レモンの一名。＝香櫞。

【枸櫞】クエン　檸檬レモンの一名。＝香櫞。

【枸櫞酸】クエンサン　柑類の果實中にある鹽基性の酸、無色無臭の結晶にして水に溶解す。

【枸橘】クキツ　からたち、きこく。＝枳殼。

【枸杞】クコ　灌木の一、字解參看。唐書、地理志「貢ニーー黃精」

【枸木】クボク　まがれる木、枸は曲。荀、性惡「夫ーー必待ニ檃括烝矯ニ然後直」＝曲木。

【枯】コ　麌

○かる、かれる、草木の生氣が絕える「凋ー」○轉じて人の死をいふ。曹松詩「一將功成萬骨ー」○水かわく「乾ー」「涸ー」周禮、天官、疏「山澤無ニ水爲ニ一」○からす。○おとろへる(衰)「榮ー」○からだがやせおとろへる「ー槁」「倦ー」○かれき(槁木)

【枯榮】コエイ　かれると、さかえると。又衰えると盛んなると。李白詩「如何同枝葉、各自有ニーーー」白居易詩「離離原上草、一歲一ーー」＝榮枯・盛衰。

【枯葉】コヨウ　かれたる葉。庾肩吾詩「ーー落ニ古社ニ寒鴉歸ニ孤城ニ」

【生ノ枯起ノ朽】コウオキコウ　將に死せんとする者を活すに喩ふ。抱朴子「雖ノ有ニーーー之藥ニ、猶謂不ノ及ニ和鵲之所ニ合也」＝起ノ死回ノ生。

【枯ノ枯】コウコウ　かれ木を折る義、極めてたやすき譬。晉書、劉元海載記「鼓行而進、猶ノ摧ノ朽ノ耳」＝摧ノ朽・摧ノ枯・拉ノ朽。

【摧ノ枯】サイコウ　前條に同じ。宋史、曹彬傳「以ニ國家兵甲精銳ニ、翦ニ太原之孤壘ニ、如ニ摧ノ拉ニ腐耳、何爲不可」

【摧ノ枯拉ノ朽】サイコウラツクウ　かれたる木をくだき、くちたる木をつぶす、物の破り易きに喩ふ。晉書「將軍之舉ニ武昌ニ、若ニ摧ノ枯拉ノ朽、何所ニ顧慮ニ乎」

【枯荷】コカ　かれたるはちす。梅堯臣詩「ーー復送ノ雨、度雁寧知ノ數」

【枯槁之士】コカウシ　おちぶれたる士。莊子「兵革之士樂ノ戰、ーー宿ノ名」

【枯涸】コカク　水かわく。謝靈運詩「饑鱗困不ノ興、渴汲水ーー」

【枯旱】コカン　草木がかれる程の大ひでり。漢書、于定國傳「太守論殺ニ孝婦ニ、郡中ーー」

【枯幹】コカン　かれたるみき。梁書、侯景傳「大風一振、ーー必摧」

【枯朽】コウ　かれくちる。史、諸侯表「摧ニーーニ漢、易ノ爲ノ力」後漢書、陳龜傳「雖ノ含ニ生氣ニ實同ニーーー」＝枯腐。

【枯僵】コキヤウ　木がかれて倒れる。漢書、昭帝紀「柳樹ーー自起生」

【枯魚】コギヨ　ほしたるうを、ひもの。家語「ーー銜ノ索、幾何不ノ蠹」＝枯鱗。

【枯竭】コケツ　かれつきる。南史、孫法宗傳「脛髓無ニ完皮ニ、血脈ーー」＝枯涸。

【枯硯】コケン　つかひふるしたるすずり。陳與義詩「獨題懷古句、ーー生ニ明珠ニ」

【枯骨】ココツ　死人のかれくちたるほね。蜀志、先主傳「家中ーー、何足ノ介ノ意」

【枯柴】コサイ　かれたるしば。

【枯燥】コサウ　かわく。放翁題跋「地ーー不ノ可ノ耕」

【枯索】コサク　かれて生氣なし。論衡、穀草ーー」

【枯死】コシ　かれる、かれて死ぬ。

【枯壤】コジヤウ　水氣なくして草木の生ぜざるやせ地、壤はとち。＝瘠土・不毛之地。

【枯株】コシユ　かれたるきりかぶ。事文類聚「風雷昨夜破ニーーー、借問天公有ノ意無」

【枯樹】コジユ　○かれたるき。＝枯木。○葉の落ちし樹「寒鴉ーーー」晉書、觀ニ其字勢ニ疎瘦如ニ墜冬之ーーー」

【枯松】コショウ　かれたるまつ。皇甫曾詩「石狀埋ニ積雪ニ、山路倒ニーーー」

【枯焦】コセウ　かれかわく。搜神記「天地否隔、萬物ーー、百姓喝喝、無ノ所ニ控訴ニ」

【枯槀】コカウ　枯れはてたる不毛の沙原。

【枯折】コセツ　かれてをれる。杜甫詩「菱荷ーー臨ニ風濤ニ」

【枯蟬】コセン　せみのぬけがら。＝蟬蛻ゼイ

【枯篠】コタク　かれたる竹の皮。鮑照詩「君不ノ見ーー走ニ階庭ニ」

【枯淡】コタン　活氣なくさっぱりとしてゐる、無欲にして澹泊。宋史、鄭樵傳「平生甘ニーーー、樂ニ施與ニ」

【枯池】コチ　水のかわきたるいけ。李白詩「窮魚守ニーーー」

【枯竹ノ護ニ朽骨ニ】コチクニクフコツマモル　古人にくみして固く舊說を守る、古紙なかりし時代に竹簡ダケに文字を書す、故に枯竹といふ。柳宗元、陸文通墓表「あれはてたるはか。杜甫詩「斯人各ーー」

【枯腸】コチヨウ　かれたるばらわた、文藻の乏しきにいふ。盧仝詩「三椀搜ニーーー、惟有ニ文字五千卷ニ」

【枯潤】コヂユン　かれしぼむ、物事の衰ふるにいふ。孟郊詩「執ノ手復執ノ手、惟冒無ニーーー」

【枯條】コデウ　かれたるえだ。陶潛詩「寒風拂ニーーー、落葉掩ニ長陌ニ」＝枯枝。

【枯荻】コテキ　かれたるをぎ。北史、賀若弼傳「陰ニ戰船ニ以ノ黃、與ニーーー同ノ色」

【枯肺】コハイ　かわきたるはいの臟、かれて乾きたる胸。朱松詩「汲ノ井沃ニーーー」

【枯廢】コハイ　おとろへて役に立たず。徐陵文「風患彌留、半體ーー」

【枯麥】コバク　かれたるむぎ。杜甫詩「老雁泥ニ春饌、哀號待ニーーー」

【枯腐】コフ　かれくさる、すたれ失せる。陸龜蒙詩「ーー尙求ノ律、膏肓猶謁ノ醫」＝枯朽・腐朽。

【枯吻】コフン　詩句のたやすく口に浮び出でざる義。顧瑛詩「坐來詩句生ニーーー」＝燥吻。

【枯蓬】コホウ　かれたるよもぎ。駱文盛詩「不ノ勝ニ清淚濕ニーーー」

【枯木】コボク　かれたる木。又、葉落ちたる木の形容。曹植、七啓、辯言之觀、使ニ窮澤生ノ流、ーー發ノ榮」＝枯樹。

【枯木發ノ榮】コボクハツエイス　衰へたる者を再び盛んならしめる喩。又、死を起して生に回す義。前條參看。

【枯木死灰】コボクシクワイ　かれ木と、つめたきはひと、人の無欲無爲の有樣にたとふ。

【枯木華開】コボクハナヒラク　多年の心願の屬きたるに喩ふ。博物志「昔有ノ人好ノ道、而不ノ知ニ求ノ道之方、唯每朝拜跪向ニ一枯木ニ不ノ倦、枯木一旦、忽然生ノ華」

【枯蔓】コマン　かれたるつる。戴復古詩「春風不ノ到處、ーー挂ニ疎籬ニ」

【枯楊生ノ稊】コヤウセイテイ　かれたる柳よりまた、穉を生ず、老夫が少妻を得て、よく生育の功をなすに喩ふ。稊は穉。易、大過「ーー、老夫得ニ其

女妻ニ無レ不レ利」

【枯落】コク かれおつ。中論「草木猶有ニ一一而興レ時謬者ニ」

【枯林】コン 葉のかれ落ちたるはやし。杜甫詩「大哉霜雪幹・歲久爲ニ一一」

【枯鱗】コン ほしたるうを、ひもの。隋書、王孝籍傳「咳唾足ニ以活ニ一一、吹噓可ニ用飛ニ窮羽ニ」＝枯魚。

【査】サ 麻

○いかだ、うきき。＝槎・楂。○みる、かんがふ、しらべる（考察・檢點）「檢ー」○かす、沈澱物「ー滓」俗に渣に作る。國○調ー。はしらべる「戸口調ー」○ー公は巡査の俗稱。

【査牙】ガ けはしくかどかどしき貌。蘇軾詩「枯腸得レ酒芒角出、肺肝ー一生ニ竹石ニ」＝槎牙。

【査滓】シ かす。張憲詩「無レ因レ淨ニ一一來共上堂鐘」＝渣滓。

【査定】サイ しらべさだめる。＝檢定。

【査點】サン 俗 しらべる、檢査する。＝檢點。

【柴】㊀サイ 佳 ㊁シ 寘

㊀しば、山野に自生する小さき雜木（小木散材）大にして析つべき者を薪といひ、小にして合せ束ぬべき者を一たいふ「ー荆」「薪ー」「茅ー」○ふさぐ（塞）○まもる（護）淮南、道應「ー箕子之門ニ」○まがき（籬）唐の王維に、鹿ーの詩あり。○しばを燔きて天を祭る。書、舜典「至ニ于岱宗ー」＝祭。㊁つむ（積）積み重なれる物。詩、小雅「助レ我舉ー」

【柴毀】サイ 喪にあひて悲のあまり、やせおとろへる、易の說卦の卦象によりて柴に瘠の義あり。晉書、許孜傳「ー一骨立、杖而能起」＝哀毀。

【柴火】クワイ ○そだの火、しばを燒く火。○俗 たきぎ（薪）

【柴扃】ケイ 柴戶に同じ、扃は門戶。杜牧詩「新城非ニ敢里ニ終日想ニ一一」

【柴荊】ケイ ○しばや、いばらなどの雜木。○轉じて、あばらやの義。謝靈運詩「恭承故人意、促裝返ニ一一」

【柴戶】コイ しばにて造れる戶。顧非熊詩「鹿跡入ニ一一、樹身穿ニ草亭ニ」＝柴門・柴扉・柴扃。

【柴桑】サイ 山の名、江西省九江縣の西南九十支那里に在り、漢は取りて縣名とす。晉の陶潛此に家す。入蜀記「晚（八月二日）抵ニ江洲ニ州治ニ德化縣ニ卽唐之潯陽縣、ー一栗里皆其地也」

【柴市】シイ 北京の敎忠坊の西北隅に在り、宋の文天祥殉國の地。

【柴薪】シイ そだ。しばと、たきぎと。＝薪柴。

【柴車】シイ ○かざらざる車。通鑑綱目集覽「ー一、車之不ニ裝飾ニ者、卽棧車也」○醜惡なる車。後漢書、趙壹傳「ー一草屏、鬱ニ宿其旁ニ」

【柴壇】ダイ 天を祭る時に柴を焚くには。宋書、禮志「大祝令以レ案奉ニ玉璧牲體諸饌物ニ登ニ一一」

【柴望】バウ 柴はしばを焚きて天を祭る、望は山川を望み其の神を祭る。書、武成「ー一大告ニ武成ニ」＝柴望。

【柴扉】ヒイ しばの戶びら。王維詩「山中相送罷、日暮掩ニ一一」＝柴扃・柴戶。

【柴門】モン ○しばにて造れる門。隱者の家などにいふ。杜甫詩「白沙翠竹江村暮、相送ー一月色新」＝柴戶・柴扉。○門をとぢる。後漢書、楊震傳「子レ是ー一絕ニ貢客ニ」＝杜門。

【柵】サク 陌 又、柵に作る

○やらひ、ませがき、竹木を結びてたてたる垣「豚ー」「籬ー」「柴ー」○しがらみ、水中に立てたる垣「水ー」○とりで、こじろ（砦）「城ー」「堡ー」○かけはし（棧）

【柵塘】サク しがらみをたてたるつつみ。梁書、嚴植之傳「嘗緣ニ一一行、見ニ悉人臥ニ塘側ニ」

【柵門】モン さくを結びたるもん。

【柵壘】ルイ 木のやらひをたてたるとりで、壘は土壁。北史、楊津傳「士衆勞疲、ー一未レ安」

【柵】柵（前條）に同じ。

【柞】㊀サク 藥 ㊁サク 陌

㊀ははそ、いす、常綠喬木の一、葉は野蠶の飼料とす。㊁かる、きる（伐）木を伐り除く。詩、周頌「載芟載ー」芟は草をかり除く。○せまし（陿・狹）

【柞蠶】サン 蠶の一種、形、野蠶に似、色は初め綠色、後、黃褐色に變ず、柞又櫟の葉を食して褐色のまゆを作る。

【柞櫟】レキ ははそ。陸機文「栩、今ー一也、徐州謂レ櫟爲レ柞、或謂レ之爲レ栩」

【柿】シ 紙 柿とは別

かき、果樹の一、葉は楕圓形にして闊く、花は淡黃色、秋末、赤色甘美の實を結ぶ「霜ー」爾雅翼「ー有ニ七絕ニ一、一壽、二多陰、三無ニ鳥巢、四無ニ蟲蠹、五霜葉可レ玩、六佳實可レ啖、七落葉肥大、可ニ以臨書ニ」

【柿】柿（前條）の俗字。

【枲】シ 紙

からむし、麻の一種、夏、青色の小花を著く、莖の皮より纖維をとりて織物の原料とす。

【枲耳】シ 卷耳の異名。

【相】シ 漾

○すき（臿）＝耜。○てぐるま、土を徙して運ぶ輦

【柶】シ 寘

さじ（匕）兩頭の屈曲せるさじ、飲食物をすくひとる具。儀禮、聘禮「加ー于鱓」

【柔】ジウ 尤 鞣音ニウ

○やはらか。しなやか（軟弱）かたくない。剛の反對「ー軟」○やさし、おだやか「ー順」「ー和」○身體又心が、よわし「ー弱」「ー惰」「ー懦」○やはらぐ、やすんず（安）「懷ー」書、舜典「ー遠能邇」邇○したがふ（服從）○わかめ（草木新生）○ー日は十干の乙・丁・己・辛・癸に當る日。剛日の對。

【柔婉】エン やさしくしてすなほ。北史、齊宣帝后傳「后性ーー不ニ妬忌ニ、嬪御等、咸愛而仰レ之」

【柔遠】エン 遠方の民を安んじなつけて服從せしむ。書、舜典「ー一能レ邇、惠ニ康小民ニ」＝懷遠。

【柔懿】イ やはらかくあてやか。李白詩「芳草歇ニ一一」

【貴レ柔】ジウ やはらかなる德をたふとぶ。呂覽「老鴉ーレ、孔子貴レ仁」

【守レ柔】ジウ 柔順を守るは強の道なる義。老子、五十三章「見レ小曰レ明、ーレ曰レ強」

【柔毫】ガウ やはらかなる毛。洞冥記「囚名ニ一一獸」＝柔毛。

【柔輪】ジウ 鉦の異名。左思詩「翦冠弄ニ一一」

【柔金】キン 金をやはらかにす。書經、疏「錫所ニ以ーレ一也」

【柔謹】キン やはらかにしてつつしむ。後漢書、東夷傳「以ニ一一爲レ風」

【柔強】キウ やはらかにしてつよし。唐書「筋力ー一」＝強韌。

【柔訓】クン 女のをしへ。章夏嗣文「各裏ニ一一、常貽ニ話言ニ」＝柔範。

【柔惠】ケイ 柔順に同じ。惠は順。

【柔愿】ゲン やさしくしてつつしみ深し、愿は謹。唐書「ー一力レ田」

【柔靑】ケイ やはらかにしてなめらか。西京雜記「肌膚ーー如レ脂」＝軟滑。

【柔暖】ダン やはらか、暖も柔和。埤雅「鵝毛ー一而性冷」

【柔桑】サウ 桑のわかば。詩、豳風「爰求ニ一一」箋「ー一稺桑也、蠶始生宜ニ稺桑ニ」

【柔日】ジツ 十干のうち、乙・丁・己・辛・癸にあたる日。其の餘を剛日といふの對。曲禮「外事用ニ剛日、內事用ニ一一」內事とは冠婚葬祭など。

【柔荑】ジウ しとやかなる音の箏の琴。李白詩「含レ情美ニ一一」

【柔質】シツ よわよわしき體質。李中詩「ー一自多情」

【柔情】ジウ 婦人のやさしきこころ。洛神賦「ー一綽態、嫻ニ于語言ニ」

【柔弱】ジウ よわし。文中子「ー一者生之幹也、堅強者死之徒也」＝軟弱。

【柔濡】ジュ やはらかにしてうるほふ。劉禹錫文「剔ニ去剛正、納ニ之ー一」

【柔淑】シュク 女のすなほにして貞良なる德。化書「有ニ一一之態、則荊孝可ニ以行ニ婦道ニ」

【柔術】ジュツ 國 やはら、やはとり、から手にて敵を制する武藝。徒手にて搏擊する技。＝柔道・拳法。

【柔順】ジュン やはらかですなほ。易經「ー一利レ貞、君子攸レ行」

【柔茹】ジュ やはらか。韓非子「緩心而無レ威、ー一而寡レ斷」

【柔性】セイ やはらかなるたち。宋之問詩「望レ水知ニ一一」

【柔脆】ゼイ やはらかにしてもろし。老子「萬物草木之生也ー一」

【柔毳】ゼイ ○やはらかなる細き毛、にこげ。蘇子賦「ー一以爲レ裘」＝柔毛。○やはらか。

【柔輕】ケイ やはらかにして毛色の純なるいけに。「ー。殷淡、宋享廟樂歌「神靈孔昭、嘉ニ是ー一」

【柔然】ゼン 種族の名、古の北狄の一。＝蠕蠕。

【柔情】ジウ よわくしておこたる。＝柔弱懶惰。

【柔懦】ダ 心よわく、氣小さし、柔弱にして臆病。國史補「李吉甫任ニ相國ニ八年、多智ー一」

【柔態】タイ やさしきかたち。李山甫詩「強扶ー一酒華醒」

【柔道】ジウ ○やはらかなる道、柔順の道。後漢書、光武紀「吾理ニ天下一、亦欲レ以ニ一一ニ行ニ之」○國 柔術に同じ。

【柔膚】フ やはらかにしてあぶらぎる。諸寺奇物記「ー一如ニ芭蕉ニ」

【柔荑】イ やはらかなるつばな、女子の手の白く美くしきに喩ふ、荑はつばなの芽の出たて。詩、衞風「手如ニ一一、膚如ニ凝脂ニ」

【柔兆】チウ 十干の丙の異名（爾雅）

【柔敏】ビン やはらか。國 書、舜典「ー一」

【柔軟】ジウナン　やはらか。＝柔輭。

【柔軟體操】ジウナンタイサウ　體操の一、から手にて行ひ身體の發育・矯正・強健を目的とするもの。

【柔輭】ジウゼン　やはらか、輭は軟の正字。南史、姚察傳「身體――、顏色如レ嬰」＝柔軟。

【柔範】ジウハン　柔順を旨とする婦女のをしへ。晉書、后妃傳序「蔚二尊儀一而修二四德一、體二――一而弘二六藝一」

【柔綿】ジウメン　やはらかにしてこびつつらふ。唐書、庾準傳「準無二學術一、以二――一自進」＝曲媚。

【柔撫】ジウブ　やはらげ安んずる、懷柔して慰撫する。宋書、高麗國傳「――四封」

【柔毛】ジウモウ　○やはらかなるけ。列子「――之屬以二――綿幕一」○羊の異名。曲禮「凡祭宗廟之禮、羊曰二――一」

【柔皮】ジウヒ　はだがやはらかにしてきめがこまかなり、曼は皮膚が美くしくして澤あり。漢書、佞幸傳贊「――之傾レ寓、非二國女德一、蓋亦有二男色一焉」

【柔亦不茹剛亦不吐】ジウヤクフジョカウガヤクハクトス　柔かなりとて食はず、堅しとてはき出さず。弱き者をも侮らず、強き者をも畏れざるにいふ。詩、大雅、烝民「維仲山甫、――、不レ侮二矜寡一、不レ畏二彊禦一」

【柔夏】ジウカ　柔順にして善良なり。淮南子「溫惠――者詩之風也」

【柔能制レ剛】ジウノウセイガウ　弱き者が反りて強き者を制する義。三略「――、弱能制レ強」老子「柔勝レ剛、弱勝レ強」

【柔纏】ジウテン　しづかに漕ぐ櫓。僧洪惠詩「夢隨二――一到二西吳一」＝柔櫓。

【柔和】ジウワ　やさし、おだやか。史、張釋之傳「輒二吾馬――一」＝溫和・溫順・柔順。

【柒】

漆（水部十一畫）の俗字。俗に七の字に借用す。

【柘】

シヤ　遇　麻

○やまぐは、桑の一種「桑――」○諸――はさたうきび。＝甘蔗。○圖――榴。は石榴の誤用。

【柊】

シユウ　東

○ひひらぎ、ひらぎ、常綠喬木の一、葉はかたくして光澤を有し、緣邊、尖りて針狀をなす、花は白色。＝巴天戟・杠谷樹・枸骨・剛穀。○――楸はつち、さいづち（椎・槌）

【柷】

シユク　屋

樂器の名、形、桶の如く、左右に動く柄をつけしもの、音樂を始むる時、合圖ガにならす具。

【柷敔】シユクギヨ　共に樂器の名、柷は音樂を始むる時に、敔は終る時に鳴らす。書、益稷「合止――」

【柏】

松（木部四畫）に同じ。

【染】

セン　琰　豔　通音　セン

○そむ、布帛の類に色をつける。○そまること、しみ、よごれ「汙――」○しむ、ひたす「浸――」「漬――」○筆を墨などにひたして書畫を書く。李白詩「瀟――中山毫」○そまる、習俗に化せられる。書、胤征「舊――汙俗」○病がうつる「感――」「傳――」○けがす、よごす。○在――はやはら（柔）げる貌。○愛――は明王の一、三目六臂にして、頂に獅子の面あり、威怒の相をなす。○圖しむ、はげしく感ずる「身に――みて寒し」

【染愛】センアイ　心のふかきいつくしみ。白居易詩「張籍何爲者、――浩無際」

【染汚】センオ　けがす。＝染汙・汚染・穢染。

【染家】センカ　染戸に同じ。列仙傳、實二與――一」

【染感】センカン　そまる、しみこむ。＝感染。

【染輸】センユ　筆を墨にそめて字を書く。南史「――便成文無加點」

【染蒸】センジヨウ　うつりが、かをりにそむ。梁簡文帝文「侈玉沈溫、依レ蘭――」＝薰染。

【染化】センクワ　徐にしみうつる。教を感ずとして善に化する。感化する。晉書、華譙傳「稱――日久、風教遂成」

【染畫】センクワ　色をかく。梁簡文帝文「摸――、猶高二賈彪一」

【染戶】センコ　そめもの屋、かうや　北夢瑣言「有二――許環一、一旦暴亡」＝染家。

【染工】センコウ　そめものや、染色を業とする者。北史「――王詩鑑者、與レ諸百藝」＝染人・染戶。

【染草】センサウ　そめくさ。詩、鄭風「春秋一斂――之物」＝染料・染料。

【染指】センシ　指を物の中に入れる。其の物の味を試むる義。左、宣四「子公怒――、嘗レ之而出」

【染書】センシヨ　ならはし。宋史、赤猿人忠之善墨、以二――一而成之也」＝習慣。

【染遠】センエン　色にそまる。卿賞詩「雲度樓頭互隱見、花侍羽毛工――」＝漸染。

【染髮】センハツ　ひげをそめる、年老いて壯者に伍せんがため。造邦賞勳條「武臣賞勳入朝奉情二耳老、命二大醫院一使レ染二其髮一」漢書、王莽傳、莽染二其須髮一、遂二所レ徵杜陵史氏女一爲二皇后一、備二殯御等百二十人一、日夜

與二方士一考二驗方術一、縱二淫樂一」須は髮。

【染薪】センシン　南天燭ナンテンの異名（本草綱目）

【染色】センシキ　いろをつける。又、そめいろ。後漢書、馬皇后紀「此贈特宜二――一」

【染紙】センシ　そめものと、おりものと。又、染めると織ると「――學校」

【染衣】センイ　あかねの色にそめる。詩經、注「今人――者、乃假二蘇方木一」

【染筆】センピツ　書畫を書く。＝灑染。

【染綠】センリヨク　みどりにそめる。梁元帝詩「鏡沾疑――」

【染料】センレウ　そめくさ、物をそめる原料。

【柁】

タ　賀

かぢ（正舟木）＝舵柁。

【柁樓】タロウ　かぢをとる船室のやぐら。劉子翬詩「路窮二煙渚一靜、山入二――一青」

【柂】

柁（前條）に同じ。

【柂樓】カロウ　ふねのかぢ。拾遺記「以二紫文桂一爲二――」

【柰】

ダイ　ナイ　隊　泰　通音ナ、俗に奈に作る

○なに、なんぞ、いかん、いかに。＝那。散文には――何と連用すれども詩賦には多くは――の一字のみを單用す「無――」「不――」の如し。王維詩「强欲從君無――老」○からなし。廣韻「――有二青白赤三種」

同訓異義　奈何・如何・何如・何若・奈の別は如（女部三畫）の如何の條を見よ。

【奈何】ナイカ　○どのやうに、いかんぞ。楚辭、九辨「君不知兮、可二――一」○二字の間に他の文字を入れて用ふることあり。司空圖詩「春色年年奈――我何」＝如何・何如・若何。

【柝】

タク　藥

○ひやうしぎ（拍子木）合圖又は警戒のために擊ちならす、二箇の角材。○ひやうしぎを擊ちて夜を警しむ「擊――」「警――」「寒――」「夜――」易、繫辭「重門擊――以待暴客」

【偃レ柝】エンタクフス　夜まはりの拍子木をふせて用ひず、世が治まりて盜賊の警戒を要せざる義。鮑照、河清頌序「遙城――」＝弛柝・解柝。

【弛レ柝】タクユルフ　夜まはりの拍子木を擊つことをゆるやかにする、警戒をゆるめる。張衡文「聊城――」

【柱】

㊀チユ　㊁チユ　麌　遇　通音チユウ

㊀はしら（樓）屋根を支へる垂直の材。漢書「腐木不可以爲――」○廣く物を支へるものの稱「支――」○ことぢ（琴柱）琴瑟などの絃を支へて音調を節するこま。㊁ささふ（支持）柱と通ず。韓愈、王適墓誌銘「鼎也不可以――車馬」○そしる（刺）漢書、朱雲傳「連――五鹿君」

【柄】

枵（木部四畫）に同じ。

【柢】

㊀ヂ　㊁ヂツ　紙　質

㊀質は梨の如き一種の木。○車の下に在りて輪を止むる木。○――は茂りて盛んなる貌。左思、吳都賦「總萃――、蔓葉蘂蘂」○明かに察する。唐書、王彥威傳「捷二――姦冒」㊁とどむ（止）「――杜」は杜絕の義。

【柷】

㊀チツ　㊁セツ　屑　質

㊀しきみ（闕）門限。㊁桔――は鄭の城門の名。

【柱】

㊀チユ　㊁チユ　麌　遇　通音チユウ

【柱梘】チユカン　はしらと、たるきと。＝柱棟。

【柱下史】チユカシ　○老子をいふ。史、老子傳「周守藏室之史也」注「老子爲二――、即藏室之柱下、因以爲二官名一」＝柱史。○漢の侍御史の別稱（漢官儀）

【柱國】チユコク　家は柱によりて支持す、因りて國の柱となりて守る要地に喩ふ。戰國策「安邑者魏之――也、晉楊者趙之――也、鄢郢者、楚――也」

【柱質】チユシツ　はしらの石ずゑ、質は礎。戰國策「公宮之室、皆以二練銅一爲二――一」＝柱礎。

【柱石】チユセキ　○はしらの石ずゑ。又、はしらと、いしずゑと。＝柱礎・柱質。○轉じて國家の重任を負ふ大臣。大將に喩ふ。漢書、靈光傳「田延年曰、將軍爲二國――一」

【柱石之寄】チユセキノヤドリ　おもき任務。後漢書、朱浮傳「委以二太都一任以二威武事一有二――一」

【柱石臣】チユセキシン　はしらいしずゑと頼む重臣。後書、元后傳「位懸二將相一、國家――也」

【柱礎】チユソ　はしらの下のいしずゑ。晉書、大秦國傳「琉璃爲二牆壁一、水精爲二――一」

【柱棟】チユトウ　はしらと、むなぎと。

【柱屋】チユヒ　はしらと、とびらと。

【柱樓】チユロウ　はしらと、うつばりと。推

南千「聖主之用レ人也、猶二巧工之制二木也、大者以爲二舟航一、小者以爲二楫檝一」

【柱聯】ハシラカケ　はしらかけ、はしらかくし。又、其れに書く聯句。甲乙剩言「環慶御史蔡騁事、寫李獻吉、天清障塞收二禾黍一、日落祭山散二馬羣一、爲二一一、但改レ落爲レ轉、眞所レ謂點レ金成レ鐵也」

【膠柱而鼓レ瑟】ニカハシテシテコヲウツニ　ことぢにかはして瑟をひく。變通の才なきに喩ふ。史、藺相如傳「王以レ名使レ括、若二膠レ柱而鼓レ瑟耳」括は趙括、老子には鼓を調に作る。

【柠】

ネイ　蒸

椿（木部九畫）に同じ。

【柢】

テイ　霽

○ね（根）木の根「深根固一」○轉じて物事のもと「根一」○ねざす、根を生ずる。又、本づく。

【棬】

トツ　月

楫一トツハほだ、きりかぶ（木頭）

【柏】

ハク　ヒャク　陌

柏は俗字

○側一ザレハクの扁一ヘンの類の常綠喬木の總稱。○四時色を變へざるによりて松と共に節操の堅きに喩ふ「松一操」○大いなり、伯に通ず。○せまる、迫に通ず。○圖かしは（槲）又、かしは飯の略語「おー」

【柏葉酒】ハクヨウシユ　屠蘇ソ酒の如き酒。之を飲めば邪氣をはらふといふ。庾肩吾詩「廟開――、試奠五辛盤」＝柏酒。

【柏葉壽】ハクヨウジユ　柏の葉は常綠なるを以て、長命の義に用ふ。武平一詩「願持二――、長奉二萬年歡一」＝松柏壽。

【柏舟操】ハクシウ　柏舟は詩經の篇名、衞の太子共伯の妻共姜が、夫の死後、操を守りて再嫁を肯んぜずして作る、よりて夫死して節を守るにいふ。詩、鄘風、柏舟、序「柏舟、共姜自誓也、衞世子共伯蚤死、其妻守レ義、父母欲二奪而嫁一之、誓而弗レ許、故作二是詩一以絕レ之」

【柏車】ハクシヤ　山にて用ふる大車。周禮「車人――、轂長一柯」

【柏酒】ハクシユ　邪氣を拂ふために元旦に飲む酒（荊楚歲時記）＝柏葉酒。

【柏臺】ハクダイ　○御史臺の別稱。漢代、御史府中に柏樹を列植せし故。○清代、按察使の別稱。

【柏白皮】ハクビヒ　このでがしはの根の皮。

【柏梁臺】ハクリヤウダイ　漢の元鼎二年、武帝の築きたる臺ウテの名（史、平準書）漢武舊事「――以二香柏一爲レ臺、香閣二數十里一」＝柏梁體ハクリヤウタイ　詩體の名、七言にして每句に韻を押す、漢の武帝が柏梁臺の落成せし時、羣臣を集めて作らしめたる七言聯句の詩に始る。隊餘叢考「漢武宴二柏梁臺一、賦レ詩、人各一句、句皆用レ韻、後人遂以二每句用レ韻者一爲二――一」

【柏樹】ビヤクジユ　圖松に似たる一種の常綠樹、たけ低くして枝横出し、庭木とす。＝柏心・柏身。

【柏手】カシハデ　圖○飲食の膳部、古昔、かしはの葉に食物を盛りたる故にいふ。○禮拜の時に兩手をうち合せて鳴らす。拍手の誤訓か。

【枰】

ヘン　寒

はち、物を盛る器。＝盤・槃。

【秘】

ヒ　ヒツ　質　質

○六尺六寸あるほこのえ（戟柄）周禮、考工記「戈一六尺有六寸」○ゆだめ（檠）弓材のゆがみを正ダす具。＝矯栝。

【枹】

㊀フ　虞　尤
㊁ハウ　肴

㊀たいこのばち。鼓槌、鼓を擊つ杖。左、成二年左執レ轡、右援レ枹而鼓一＝桴。㊁むらがり生ずる木（叢生木）＝苞。

【枹鼓】フこばちと、つづみと。國語「執二――于軍門一、使二百姓加二勇焉一」

【柎】

㊀フ　虞
㊁フ　遇
㊂フ　虞

㊀器のあし（闌足）○いかだ（桴）管、兵法「方舟投一」＝桴。○はなぶさ、うてな（萼）㊁樂器。＝拊。㊂つく（注）○ゆづか（弓弛）＝弤。○つか（刀弛）○俞一ユは古の良醫。漢書、藝文志「太古有二岐伯・俞一」

【枰】

ヘイ　庚

ごばん（碁局）又、すごろくばん（博局）「碁一」「一局」

新字　碁局なり、木に从ひ平に从ふは上平かなるによる會意。

【柄】

ヘイ　敬

○え（柯・櫂）器物のとって（把）○轉じてとりて材料とする「談一」「話一」「笑一」○もと（本）○ちから、いきほひ（權力）「文一」「政一」「威一」左、襄二三「既有二利權一、又執二民一」○圖から。體格、又身分。又布帛の

模樣恰好。

【柄臣】ヘイシン　政の權力をにぎれる臣。漢書、朱雲傳「賤人圖二――一」

【柄用】ヘイヨウ　おもく用ひられて政權を握る。漢書、谷永傳「永知三王鳳方見二――一、陰欲二自托一」

【某】

㊀ボウ　有
㊁バイ　灰

某は俗字

㊀それ、それがし、名を知らざる人、又は事物の代名詞。○しかじかの事。○自己の謙稱。㊁うめ、梅の古字、別に楳に作る。

【某某】ボウボウ　たれそれ、名を指さずして二人以上の人をいふ時に用ふることば。＝某菜。

【柳】

リウ　有

○やなぎ、落葉喬木の一、葉は披針狀、枝は絲の如く細長くして垂れ下る。○しだれやなぎ（枝の垂れざるを楊といふ）「垂一」「楊一」「一岸」○星の名、ぬりこ、二十八宿の一、南方に在り「一宿」＝鶉火。○一谷は日の入る處（書、堯典、疏）＝昧谷。

【柳闌】リウアン　柳の茂りてくらき蔭。溫庭筠詩「――山犬吠、蒲流水禽立」＝柳塘。

【柳暗花明】リウアンクワメイ　柳がくらく茂り、花の色あきらか、田舍の春の美くしきけしきをいふ。陸游詩「山重水複疑レ無レ路、――又一村」

【柳意】リウイ　柳の意思、詩人が想像していふ。李商隱、向レ晚詩「花情羞脈脈、――悵微微」

【柳陰】リウイン　やなぎのかげ。司空圖、詩品「碧桃滿樹、風日水濱、――路曲、流鶯比鄰」

【柳影】リウエイ　やなぎのかげ。梁簡文帝詩「――長横路」

【柳營】リウエイ　幕府の異稱。漢の將軍周亞夫、細柳に軍して胡に備へ、號令嚴明なりしかば、文帝大いに歎賞せし故事に本づく。劉禹錫詩「――蓮府遞相歡」

【柳腰】リウエウ　○柳のしなやかなる枝の形容。庾信詩「上林――細、新豐酒徑多」○美人のしなやかなるこしに喩へていふ。溫庭筠詩「轉盼如レ波眼、娉婷似レ――」＝細腰・纖腰。

【柳葉】リウヨウ　やなぎのは。戰國周策「楚有二養由基者一、善射、去二――一、百步而射レ之百發百中」

【柳葉眉】リウヨウビ　柳の葉の如く細く美くしき眉。楊維楨詩「湖上女兒――」＝柳眉。

【柳煙】リウエン　やなぎにたなびくけむり。杜牧詩「春風野岸名花發、一道帆檣萱二――一」

【柳下惠】リウカケイ　周の世の賢人。淮南子「展禽之家有二柳樹一、身行二惠德一、因號二――一」

【柳下鍛】リウカタニ　晉の嵇康が夏月に柳樹の下にて鍛冶をなせし故事。晉書、嵇康傳「康性絕巧、而好レ鍛、宅中有二一柳樹一、甚茂、乃激レ水圍レ之、每二夏月一居二其下一以鍛」

【柳眼】リウガン　やなぎの新芽。歲華紀麗「廟芽吐レ玉、――挑レ金」

【柳花】リウクワ　やなぎのはな。唐書、南蠻詞陵傳「以二――椰子一爲レ酒、飲レ之輒醉」

【柳公權】リウコウケン　唐の華原の人、博く經術に通ず、尤も書に巧なり、穆宗嘗て筆法を問ふ、對へて曰く、心正則筆正と、帝其の筆諫たるを悟る、文宗の朝、累遷して太子太保に至りて致仕す。

【柳骨】リウコツ　柳公權の書の骨法を得たる義。蘇軾、跋二范文正公祭二曼卿一文上「曼卿之筆、顏筋――、散落二人間一、實爲二神物一」

【柳枝】リウシ　○やなぎのえだ。＝柳條。○韓愈の愛妓の名。○白樂天の妾の名。白居易詩「往年江口拋二桃葉一、去歲樓中別二――一」＝樊蠻。

【柳絲】リウシ　やなぎの枝のしだれたる形容。賈島詩「梅花如レ雪柳如レ絲」白居易詩「更有二愁腸似二――一」

【柳絮】リウジヨ　○やなぎのわた。柳の實の熟して亂れ飛ぶこと、綿の如きもの。晉書、王凝之妻謝道韞傳「謝安嘗内集、俄而雪驟下、安曰、何所レ似也、安兄子朗曰、撒二鹽空中一差可レ擬、道韞曰、未レ若二――一因レ風起一」○轉じて雪の異名とす。

【柳色】リウシキ　やなぎのみどり色。劉長卿詩「――孤城裏、驚摩細雨中」

【柳宗元】リウソウゲン　字は子厚、柳州と號す、唐の河東の人、博學鴻詞の科に及第し、累進して監察御史に拜し、禮部員外郎となる、後、王叔文の黨に坐して永州司馬に貶せられ、元和十年、柳州刺史に徙され、同十四年卒す、年四十七、文名一時を蓋ふ、韓愈と並稱して韓柳といふ。

【柳態】リウタイ　やなぎの枝ぶり。轉じて、しなやかなるすがた。柳淡、聽レ箏詩「似レ逐春風知二――一、如レ隨啼鳥識二花情一」＝柳容。

【柳塘】リウタウ　やなぎのあるつつみ。古今詩話「梅聖愈曰、昔嚴維、――春水漫、花塢夕陽遲、則天容時態、豈不レ如レ在二目前一」＝柳隄。

【柳堤】リウテイ　次條に同じ。

【柳隄】リウテイ　やなぎのあるつつみ。溫庭筠詩「不レ語垂レ鞭上二――一」＝柳塘。

【柳條】リウデウ　やなぎのえだ。梁簡文帝詩「――復著レ地、楊花好上レ衣」＝柳枝。

【柳眉】リウビ　美人のまゆに喩ふ。李商隱、眞娘墓詩「――輕吐、蕙蘭葉、檻莢遲舒實笑錢」＝柳葉眉。

【柳遷】やなぎの木のほとり。杜甫「――退朝花底映、鑠鑠――遷」

【柳柳州】唐の柳宗元、柳州の刺史たり。王漢「――詩、今人遷謫――、解道千山絶二飛鳥一」

【柳絮】柳の絲は垂下し蕩の擧はこびる、春の景色の美くしき形容。杜甫詩「――花裏殿」

【柳橋】國○角樽の類、祝儀に用ふる酒樽。○川柳の句集。

【柳絲花紅】物の天然のまゝにして少しも人工を加へざるにいふ。禪家にてさとりを開きし形容。蘇軾詩「――眞面目」

【柃】レイ 書

樣ーにはひさがき、柳ヤナギに似て低き樹。

【栂】〔國字〕

とが、つが。常綠喬木の一、葉は細長、果は毬狀にして扁平、木理は緻密にして建築、又は器具を造るに用ふ。

【栃】〔國字〕

とち、一に、栃に作る。深山に生ずる喬木の一、葉は七枚の小葉を具へ、夏、淡黃色の花を著け、果は栗に似て食用とす。

【柾】〔國字〕

まさ、まさめ、材の木理ヤの正しく通りたるもの「桐の―」

【案】アン 六 書

又、桉に作る

○つくゑ、ひぢつき、几の屬「書―」「几―」○わん(椀・盂)こばち、ぜんなどの食器。○さかひ(界)○ついで(次第)「―堵」○かんがふ。漢書、賈誼傳「―之當今之務」○かんがへ(考)○なでる(撫)「―劍」○よる(憑據)○みる(視・診)「―脈」○とどむ(頓)○おさふ(按)○しらべがき、したがき「文―」「草―」○官府の文書の成例及訟獄の判決文。

【案行】延び廣がる貌。史、司馬相如傳、其南則有二平原廣澤一登降陀隮、―壇曼、緣以二天江一限以二巫山一」

【案行】○しらべあるく。＝巡察。○行くことをひかへる。史、司馬相如傳「車―ゾ、騎就」隊」

【案考】○かんがへる。○試驗する。

【案外】國おもひのほか、想像せしよりも。＝意外。

【案件】○うったへのかどで、訴訟事件。○しらべ調すべき事がら。

【案几】つくゑ。至寶誤「抑―無二僅僕一、室恤――」＝几案。

【案書】かんがへはかる。後漢書、律歷志「――以求二諸律一、無不二如レ數而應一者上矣」

【案檢】次條に同じ。

【案驗】證據だてでしらべる。漢書、丙吉傳「終無レ所二――一」＝案檢。

【案功】てがらの有無を考へただす。管子「案二其功一而行レ賞」

【案罪】つみをしらべる。

【案察】しらべみる。＝按察・檢察・按驗・案檢。

【案山子】かかし、鳥おどし。案山は几の如く平たく低き山の義、山田なり、山田を守る主たる義。傳燈錄、道膺禪師傳」

【案上】机の上。韋應物詩「幸無二職事牽一、且覽二――書一」＝案頭・几上。

【案籍】せきをしらべる。後漢書、馮異傳、追二惟勳烈一、按圖―レ―」

【案致】罪をしらべきはめる。漢書、魏相傳「收捕―二―其罪」

【案牒】やくしょの帳面。唐書、陸贄傳「吏員稽翻、則――業滯、僞冒蠹レ眞、吏緣以爲レ姦」＝案帳・官簿。

【案堵】次第をみださず、各自牆の內に安んじて動搖せず。史、高祖紀「吏民皆――如レ故」＝安堵。

【案頭】つくゑの上。杜甫詩「將卷悄然車馬絕、――乾死讀書傷」＝几上・案上。

【案牘】しらべを要する書類。唐書、李絳傳「天委長二於吏事一、治レ家亦勿二檢――簿書一如二公府一」

【案內】國○てびき、みちしるべ、あない。○しらせ、通知「――狀」

【案比】年次をかんがへくらべる。案驗して比較する。後漢書、江革傳「每、至二歲時一、縣當二――一」

【案摭】なでやすんずる。漢書、郊祀志、嗚呼孝哉、――我國」

【案文】○文章を作らんとして考へる。又、文意を考へる。樂書「――讀レ之、無二有二滯礙一」○官府などのしたがきの文書。

【案摩】からだをなでさする、もみほぐす。素問「經絡不レ通、病生二于不仁一、治レ之以二――一」孟、梁惠王「折枝」趙注「――折二手節一解二體枝一也」枝は肢。

【案問】罪をしらべとふ。＝按問。

【桉】

案（前條）に同じ。

【槐】

㊀イ 支 齊

㊁チ

㊀さねぶとなつめ（赤棟）㊁めぐは（女桑）

【栘】イ 支

○にはうめ（果樹）白楊に似たる木、一名、失―。○―中監は官名、―は地名。漢書、昭帝紀「―中監蘇武」

【栘樹】柳の一種、葉まるし、しでやなぎ。古今註、―亦曰二移柳一、亦曰二蒲柳一」作鞭搖。

【栘柳】しでやなぎの異名。

【桃】

祖（木部五畫）に同じ。

【桁】

㊀ガウ・ギャウ

㊁カウ

㊂カウ

豪陽 庚

○けた、家又は橋などの外廻りの柱上にわたす材。○そろばんの珠を貫く串、又其の位どり。㊁かせ（械）あしがせ。○うきばし（浮橋）＝航。㊂ころもかけ、いかう（枷・衣架）「衣―」

【桁衣】いかうにかけたる衣。庾信、對燭賦「――南―――不レ亮」

【桁上】ころもかけのうへ。古樂府「遙視二――一、無二懸衣一」

【桁楊】足がせ首がせを加へらるる者。莊、在宥「――者相推也、刑戮者相望也」

【校】カウ ケウ 效

古、挍と通用す

○まなびや（學宮）「學―」「―舍」「鄉―」「―堂孟、滕文公「夏曰―」○かせ（刑械・木因）罪人の手足又首などにはめる刑具。○きそふ（角）○くらぶ（比）優劣を較べる。禮、學記「比年入學、中年考―」○むくゆ（報）しかへしする。論、泰伯「犯而不―」○かんがふ（考）○しらべる（檢）漢書、食貨志「黃朽而不可―」○かぞへる（計）○ただす（正）書物の誤を正す「―正」「―勘」○とどむ。○たたかふ（交戰）○てすり（欄格）○廄ヤの埒又ませを結びて禽獸を遮る物。○陣營中のしきり、他人の妄に出入するを防ぐ爲めに將帥の居る所に設ける、轉じて將帥の義とす「將―」

【校尉】天子の宮城をまもる武官。漢書、百官公卿表「司隸城門―――」

【校醫】學校にて囑託して常備する醫者。＝學校醫。

【校友】學校ともだち。＝學友・同窗。

【校問】しらべげみす。魏書、太宗紀「巡二行諸州一――守宰一」＝檢問・檢査。

【校學】諸侯の國に設立せる學校。漢書、平帝紀「――置二經師一人一」

【校聚】かんがへしらべる。聚は考究。梁昭明太子、答二湘東王一書「――仁義」

【校勘】數種の異本を比べかんがへて定める。阮元の十三經注疏――記の類。

【校讎】たくらべきそふ。北史、獨孤羅傳「亦不下與二諸弟一――上」

【校次】かんがへて順序をきだめる。周禮、注「――二其人之在否一」

【校試】しけん。唐書、選舉志「――不レ以レ實者、皆有レ罰」＝考試。

【校讎】かんがへしらべる、讎は兩人相對してひき合せ誤を正す。宋史、鄭樵傳「聚レ書數千卷、皆自――」

【校習】かんがへならふ。吳志「宰輔二修術學一、――射御一、以周二世務一」＝究習。

【校人】○池沼澤などの事を司る小やくにん。孟、萬章「使二――畜二之池一」○玉の馬政を掌る者「周禮」

【校舍】まなびや。後漢書、儒林傳序「別立二――一、搜二遷高能一、以授二其業一」＝學舍。

【校書】○書物をくらべ合せて正す。蜀志「向朗年踰二八十一、猶手自――、刊二定謬誤一」○妓女の異稱、唐の元稹、使蜀に在りし時、妓女薛濤（隨一に濤に作る）辭辯あり、稹の側に侍りて書を校せし故事に本づく（全唐詩話）胡曾詩「萬里橋邊薛――、枇杷花下閉門居」

【校序】がくから、序も校。＝庠序。

【校數】くらべ合せてかぞへる。

【校正】くらべ合せて正す、主に印刷物又は在來の書物の誤を正すにいふ。＝校勘・校訂。

【校戰】力をくらべたたかはす。李昂詩「羽林練士拭二金甲一、將軍――出二玉堂一」

【校則】學校にて定めたるきそく。

【校度】かんがへはかる。柳宗元文「時二析是非一――古今一」＝精度。

【校定】書物をくらべ合せて正す。唐書、韋述傳「遷著二書萬卷、皆手――」＝讎定。

【校訂】校正に同じ、訂は正。

【校比】かんがへくらべる。周禮「以二歲時一――」＝比較。

【校武】武力をくらべかんがふ。揚雄、長楊賦「――力狡獸――」＝――熟食」

【校本】誤を正したる書物。＝校定本。

【校覽】しらべ見る。北史、魏太宗紀「帝臨二百寮一、躬自――」

【校理】書物の誤をかんがへただして整理する。班固、西都賦「――二――綜文」

【校力】力をくらべる。晉書「――

興一ロー、當二以レ計破ロ之一＝角レ力。

【校了】コウ 校正しをはる、訂正ずみ。

【校獵】レウ 埒ラツをつくり圍みて禽獸をかる。漢書、成帝紀「從二胡客一、大一一」

【校合】カウガフ 校正に同じ。

【校倉】ソウ 圖古、角材を積みて圍みたるくら。

【栲】カウ コウ 圖 藥

○栲チヤウに似たる一種の喬木。＝山栲。○一栲ラウは柳條を曲げて作り、物を盛る器。盧延讓詩「一栲量金買二斷春一」○圖古、かぢの木の皮の纖維にて織りし白布「白一」「一衾」

【格】㊀カク・キヤク 陌 ㊁カク・キヤク 藥 陌

㊀いたる(至)きたる(來)書、堯典「一汝舜」「來一」我が誠意に感動して來るに用ふ。中庸「神之一思」思は助字。○とほる、感通する。書、說命「一二于皇天一」○かはる(變革)○きはむ(窮究)「一一物」○のり、きそく(法式)「字一」「正一」禮、緇衣「言有二物一而行有一也」○ただす(正)書、冏命「一二其非心一」ただし。論、爲政「有二恥且一」○のぼる(登)○さからふ、くひちがふ(牴牾)○ころす(殺)○あぐ(擧)○たな(庋架)○あたる、てむかふ、敵する。史、張儀傳「驅二羣羊一攻二猛虎一不一明矣」○とらふ(捕)○めあて(標準)○さだめ(格例)○文法上、名詞代名詞等が他の語に對して有する關係「主一」「目的一」○ぶんげん、くらゐ「資一」○はかる(度)○うつ。＝挌。○しな(階段)○線を縱横に畫して界とせしもの「一天井」「一子」○一は鳥の聲。○樹の高く長き枝。㊁やむ(廢)とどまる、中止する「廢一」○はばむ(阻)「阻一」○すまふ(角戲)○くひ(杙)○樹の枝。○扞一カンは互にそむきて相入らず。○圖古、律令を發布する爲めに、其の時勢に適するやうに發布せし命令「三代一」

同訓異義 格・至・到・臻・詣等の別は至(部首六畫)の條を見よ。○格・正・規・繩・糾・匡・訂等の別は正(止部一畫)の條を見よ。

【格格】カク 鳥の聲。荆楚歲時記「有レ鳥如レ烏、先レ雞而鳴、架架一一」

【格訓】カク ただしきをしへ。梁武帝文「用二天之道一、分二地之利一、靈先聖之一一也」

【格外】グワイ なみはづれ、常例以外。南史、王綸之傳「一一之官、便今日爲レ重」

【格擊】ゲキ うちあふ。漢書、五行志「良等一一、或死或傷、皆狗也」＝挌擊。

【格言】ゲン 道にかなひて法戒となることば。魏志、崔琰傳「此周孔之一一、二經之明義」＝金言・至言。

【格五】ゴ 圍碁の一法、五目ならべ。漢書、吾丘壽王傳「以レ善二一一一一召待詔」

【格虎】コ とらをてうちにす。唐書、禚亮傳「高祖獵親一レ一」＝搏虎。

【格殺】サツ 手にてうちころす、手うちにする。後漢書、董宣傳「叱レ奴下レ車、因一二一之一」＝挌殺。

【格子】シ 細く四角なる木を縱横に組みたるもの。

【格獸】ジウ 獸を手うちにす。魏志、任城王彰傳「膂力過レ人、手格二猛獸一」

【格式】シキ ○のり、きそく。北史、蘇威傳「律令一一多威所定」唐書、蘇瓌傳「一朝一一、皆所二刪正一」○圖身分、階級。

【格心】シン ○ただしきこころ。禮記「教レ之以レ德、齊レ之以レ禮、則民有二一一一」○心をただしくす。

【格尙】シヤウ けだかし、高尙。魏志、王凌傳評「風節一一」

【格制】セイ くらゐ、かく。野老遺聞「唯一一高耳」＝品位・資格。

【格詔】セウ みことのりをさしおもて奉行せず「漢書、淮南王傳」

【格戰】セン うち合ひたたかふ。華陽國志「衣二總服一一一」

【格磔】タク 鵲鴣の鳴く聲。本草「鵲鴣生二江南一、鳴曰二鉤輈一一一」

【格段】ダン 圖とりわけ。＝格別。

【格致】チ 格物致知の略語。

【格調】チウ ○詩歌の體裁と、てうしと。○人の品格。方干、贈二美人一詩「心路玲瓏一一高」

【格的】テキ まと、めあて。淮南子「夫射儀度不レ得、則一一不レ中」＝目的。

【格鬬】トウ くみ合ひたたかふ、北齊書「親兵一一、終莫二肯從一」＝搏鬬。

【格納庫】ナフコ 圖飛行機などを入れる建物。

【格範】ハン ただしきのり。參同契「司レ天者、立レ表測レ影、以爲二一一一」

【格物致知】ブツチチ 事物の理をきはめて、我が知を致しきはむ。大學「欲レ誠二其意一者、先致二其知一、致レ知在レ格レ物」＝格致。

【格別】ベツ 圖とりわけ、特に。＝格段・特別・別段。

【格虜】カツリヨ 主命を拒みて奉ぜざるやつこ。史、李斯傳「嚴家無二一一一」

【格令】レイ きそく。宋史、陳彭年傳「三曰簡二一一一」＝律令。

【格例】レイ きまり、しきたり。

【核】カク コツ 月 陌

○このみのさね、果物の實の心にありて仁二を含むもの、又其の形したるもの「一子」曲禮「鯽果於君前其有一者、懷二其一一」○くだもの、梅・桃の如く果の中央に一あり、一の中に仁あるもの。○籩に盛るもの、籩實「殺一」殺は豆實。○かたし(堅實)「精一」漢書、司馬遷傳「其文直而其事一」○きびし(深刻)○すぶ、かぬ(綜)○ただす、きはむ、しらべる、覈に通ず。漢書、宣帝紀「綜二一名實一」○まこと、ただし。

【核果】カク 果實の內果皮の堅硬にして核を成すもの、梅・桃の類。

【核桃】カク 胡桃クルミの異名(本草綱目)

【核膜】カク 細胞核をつつむ薄き皮。

【栞】カン 寒 刊に通ず

○しをり(枝折)山林を行くに木の枝を折りて道のめじるしとするもの。○みちしるべ、てびき。○しをる。木の枝を折りて道しるべとする。書、禹貢「隨二山一刊二木一」○圖しをり、讀みかけたる書物の中にはさみてめじるしとするもの。＝枝折。

【栞木】カン 木を折りて路しるべとする。字解參看。

【桅】キ ㊁クワイ 灰 紙

㊀黃木の名、染料とす。㊁ほばしら(帆竿)

【柏】キウ 宥

烏一ウはたらはぜ。葉は秋に入りて紅葉す、實は蠟燭を製す。＝烏臼。

【梶】キウ 陽

○かまち、牀の端にわたす横木。又、戶障子などの周圍のわく。○ひつぎの口(棺門)

【棋】キウ 麌

○大いなるくひ(大杙)○ますがた、柱の上に置く方形の木「料一」「斗一」

【棋枰】キウ ますがた。蘇軾詩「忽行二榕木中一、跨レ空飛二一一一」

【栩】ク 虞

○くぬぎ(櫟)○一一はよろこぶ貌。莊、齊物「夢爲二蝴蝶一一一然蝴蝶也」

【栝】クワ 陽

一椰クワはくろつけ、暖地に產し、高五六丈、棕櫚に似たる木、材は黑褐色の斑條ありて堅く、種種の用に供す、皮毛は繩又は刷毛などに作る。＝栝根。

【栝】クツ 曷

○びやくしん、檜の一種。書、禹貢「杶幹一柏」○たむ、ためぎ、物の邪曲を正し直くする器。＝檃栝。

【栝樓】ロウ きからすうり(黃烏瓜)

【桓】クワン 寒

○漢代、宿驛のしるしに雙つ立てたる木、郵亭の表。○古、棺を穴に下すに便するため、四隅に立てたる柱。禮、王制「二家視二一楹一」○一一は勇武なる貌。○盤一一は進み難き貌、たちもとほる。○葉は柳に似、實は棟に似て皮は黃白色の木の名。

【桓楹】クワン 木をけづりて石碑の如くし墓穴の四隅に立てて棺を下すもの。字解參看。

【桓溫】クワン 字は元子、東晉の人、荊・梁等の軍事を都督し、軍功あり、官、大司馬に至り、九錫を加へらる、簡文帝を立て、陰に篡奪を謀る、勢威翕赫たり、尋で疾を以て卒し、宣武と諡せらる。

【桓桓】クワン たけき貌。詩、周頌、桓「一一武王、保二有厥土一」

【桓圭】クワイ 長さ九寸の玉、周代、公爵の人が其の位のしるしとしてもちしもの。周禮、春官「公執二一一一、侯執二信圭一」

【桓山之鳥】ザンノトリ 家語「回聞——生二四子一焉、羽翼既成、將レ分二四海一、悲鳴而送レ之」

【桓撥】ハツ 武を以てをさめる。撥は治。詩經「玄王一一」

【桓表】ヒヤウ 古、驛亭の入口などに立つる木のはしら、我が國の鳥居に似たるもの。＝華表・和表。

【桂】ケイ 齊

○かつら、香木の名、肉桂・巖桂(木犀)等の總稱「芳一」「月一」○一林は郡名、今の廣西省の治、轉じて廣西省を簡稱して一といふ。

【桂庵】アン 圖奉公人の世話をするもの。又、其の業。口入屋。もと人名なりといふ。＝桂庵・庵安。

【折レ桂】セツケイル 進士の試驗に及第す

る。桂林一枝参看。温庭筠詩「猶喜敎人新ー」＝登第・及第・登科。

【桂薑】ケイキョウ 肉桂ケイと、しょうがと。文心雕龍「夫ー同レ地、辛在二本性一、文章由レ學、能在二天資一」

【桂玉之艱】ケイギョクノカン ○他國にて、桂よりも貴き薪と、玉よりも貴き食とにて暮すくるしみ。戰國策楚、蘇秦曰「楚國之食貴二于玉一薪貴二于桂一」○轉じて物價の高き都會にて苦學するにもいふ。

【桂花】ケイカ もくせいの花。王維詩「冷露無聲濕二ーー一」黃花の者を金桂、白花の者を銀桂、赤色の者を丹桂といふ。＝桂華。

【桂月】ケイゲツ つきの異名。王勃、墨池賦「顧馬已歇、ーー猶臨」＝桂蟾・桂輪・桂魄。

【桂子】ケイシ ○かつらの實。宋之問詩「ーー月中落」○人の子をいふ美稱。五代史「竇禹鈞五子、儀・儼・侃・餗・僖俱及第號二五龍一馮馬贈レ詩云、燕山竇十郎、教レ子有二義方一、靈椿一株老、丹桂五枝芳」○にくけい「ーー油」

【桂芝】ケイシ 靈芝の異名。搜神記「彭祖（中略）歷レ夏至二商末一號二七百歲一常食二ーー一」

【桂狄】ケイテキ もくせいの咲く秋の時節。李郢詩「石室煙含古ーー」

【桂花】ケイカ 紫蘇ソの異名（本草綱目）

【桂櫂】ケイタク かつらのかぢ。轉じて美くしき櫂。陳基詩「沙棠爲レ舟桂爲レ槳、驚起鴛鴦飛兩兩」

【桂蕊】ケイズイ 皇后のみうち。蔡邕文「有二椒房ーー之託」

【桂籍】ケイセキ 進士に及第せし人名簿。蘇軾詩「飛二鵬ーー一他年事」

【桂竹】ケイチク 桂陽縣に產する竹。山海經、中山「雲山無二草木一、有二ーー一甚美、傷レ人必死」

【桂魄】ケイハク つきの異名。無名氏、管中窺天賦「ーー未レ圓」＝桂月。

【桂粉】ケイフン おしろい。桂州の產、最も名あるが故「桂海虞衡志」＝鉛白・鉛華・鉛粉。

【桂輪】ケイリン 月の異名。唐中宗文「澄二ーー一而含レ影」＝桂蟾。

【桂林一枝】ケイリンイッシ ○進士に及第せしを譽して僅に桂の一枝を手折りしに過ぎずといひし故事。晉書、郗詵傳「詵對策上レ第（中略）武帝問曰、卿自以爲二何如一、詵對曰、臣舉二賢良一、對策爲二天下第一一、猶二桂林之一枝、崑山之片玉一、帝笑」○轉じて人品の清貴にして俗を拔くに喩ふ。

【桁】 ケイ 齊 先 ケン

けた、ますがた、柱の上にわたし棟を承ける角材。淮南、主術「短者以爲二朱儒一、櫨二屋櫨。

【桄】 コウ 陽 ワウ

○木の名。廣韻「桄榔、木名、出二交趾一、皮如二馬鬃一、可レ爲レ繩、堪二爲一レ索、一名桄榔子、一名桄榔皮、一名桄榔鬃、一名桄榔毛

【桑蟜】サウ むくげの一種、桑に似たるもの。西陽雜俎「蟜朱蟜似ノ桑、南中呼爲ニ――一」

【桑螵】サウ 蜂をかふわざ。晉書、石季龍載記「衛國有ニ田疇不ノ聞――不ノ修者」

【桑鵙】サウ かひこの異名。爾雅「蟓、――、疏「食ニ桑葉一作ノ鵙者名ノ蟓、卽今蠶也」

【桑戶】サウ 桑の枝をまげて戶樞とす。貧家の形容。戰國策「蘇秦特窮巷掘門、――桑樞之士耳」＝桑樞。

【桑弧】サウ くはの木のゆみ。禮、射義「男子生、――六、蓬矢六、以射ニ天地四方一」

【桑扈】サウ ○斑鳩の異名。まめまはし。左、襄四「――、竊脂爲ノ蜀驅ノ雀者也」○官名。獨斷「――氏、農正、趨ニ民養蠶一」

【桑孔】サウ 桑弘羊と孔僅、共に漢代の理財家。宋史「就使韓白復生、――輩出、能爲ニ陛下一强ノ兵理ノ財、何補ニ治亂安危之數一」

【桑穀】サウ くはと、かぢの木と、穀は精。書經序「――共生ニ于朝一」漢書、郊祀志「帝太戊有ニ――生ニ於庭一、一暮大拱、懼、伊陟曰、妖不ノ勝ノ德、太戊修ノ德――死」

【桑蠶】サウ 桑をつみ、かひこをやしなふ。漢書、五行志「皇后――以治ニ祭服一」＝蠶桑。

【桑耳】サウ くはの木に生ずる茸。本草「――、一名桑蛾」

【桑梓】サウ くはと、あづさと、古は牆下に桑と梓とを栽う、子孫より見れば、其の父祖の栽ゑし所なるが故に之を敬ふ。轉じて故鄉の義とす。詩、小雅、小弁「維桑與梓、必恭敬止、靡ニ瞻匪ニ父、靡ニ依匪ニ母一」

【桑苴】サウ くはの實。詩、衞風「氓嗤鳩兮、無ノ食ニ桑一――」甚一に甚に作る。

【桑柘】サウ やまぐは。禮、月令「季夏之月、命ニ野虞、毋ノ伐ニ桑一――」

【桑綫】サウ くはを植ゑ機をおる。道德指歸論「衣食耕種、――有ノ餘」＝養蠶紡綫。

【桑樞】サウ 貧しき人のいへ、桑戶に同じ。莊、讓王「原憲蓬戶不ノ完、桑以爲ノ樞、甕以爲ノ牖、上漏下濕、坐而絃歌」

【桑中之喜】サウチウノヨロコビ 男女不義の樂み。詩經、鄘風の桑中篇は淫奔の事をそしりて作りしが故。左、成二「有ニ三軍之懼一而有ニ――一」

【桑苧】サウ あさと、からむしと、養蠶紡績の料。宋史、陳堯叟傳「勸ニ諭民間、廣植ニ――一」＝桑麻。

【桑田】サウ くはばたけ。神仙傳「已見ニ東海三爲ニ――一」

【桑田碧海】サウデンヘキカイ 桑田變じて碧海となる。時勢の變遷の甚だしき譬。盧照鄰詩「――須臾改」劉廷芝詩「已見松柏摧爲ノ薪、更聞桑田變成ノ海」

儲光羲詩「獨往不ノ可ノ挽、滄海成ニ桑田一」＝桑田變成ニ碧海一。

【桑蠶】サウ くはのきくひ蟲。爾雅「蟓、――」注「卽蛣蟓」

【桑土綢繆】サウドチウ 風雨の來らんとする前に鳥が桑の根をとりて巢の穴をふさぎて風雨を防ぐ。患難を未發に防ぐに喩ふ。桑土は桑の根。詩、豳風「迨ニ天之未ニ陰雨一、徹ニ彼桑土一、綢ニ繆牖戶一、今女下民、或ニ敢侮ノ予」＝未雨綢繆。

【桑年】サウ 四十八歲の稱、桑の俗字桒を分てば十十十八となる故。蜀志、楊洪傳、注」

【桑飛】サウ みそさざいの異名。揚子方言「――謂ニ鷦鷯一也」

【桑鄰】サウ くはの葉をつむ女。列子「道見ニ採――、悅而與言」陶潛、歎農詩「――宵興、農夫野宿」

【桑蓬之志】サウホウノシ 男子四方に遠遊する志。禮、射義「男子生、桑弧六、蓬矢六、以射ニ天地四方一、天地四方者、男子之所ノ有ノ事也」

【桑濮音】サウボクノ 淫亂の音。昔、衞君が濮水の上、桑林の間に聞きしといふ琴の音。禮、樂記「鄭衞之音、亂世之音也、比ニ於慢一矣、桑間濮上之音、亡國之音也、其政散其民流」

【桑麻交】サウマノ 田園に閒居して桑や麻の話などする世外の交。杜甫詩「雖ノ作ニ尙書郎一、不ノ及村野人、蕩蕩――、公侯爲ニ等倫一」

【桑門】サウモン よすて人、僧侶。陳書、陳詳傳「出家爲ニ――一」＝沙門。

【桑野】サウ ○ひがしの方。淮南子「日至ニ於――一、是謂ニ憂食一」○くはをうゑたる野。孟浩然詩「――就ニ耕父一、荷鋤隨ニ牧童一」＝桑郊。

【桑榆】サウ ○夕ぐれの日かげ、日暮。後漢書、馮異傳「失ニ之東隅一、收ニ之――」○轉じて、老人の死期に迫れるにもいふ。舊唐書、太宗紀「筋骨將ノ盡、――且ノ迫」

【桑林】サウ 殷の天子の樂の名。左傳「宋公享ニ晉侯於楚丘一、請ノ以ニ――一、荷罍辭」

【桒】 支

○桑（前條）の俗字。

【椹】 ジ

○ますがた（斗栱）＝櫨。○しばぐり、栗の屬。○きのこ、芝の屬。

【桎】 質

○あしかせ（足械）械の足に在るは――、手に在るは梏。○苦められる、しばられる。莊、達生「故其靈臺一而不――」靈臺は心。○ふさぐ（窒）さす（刺）○くさび（楔）

【桎梏】シツコク 足かせして獄にいれる。抱朴子「夷吾――、而建ニ匡合之績一、廬侯困厄而著ニ入秦之勳一」＝囚桎。

【桎梏】シツコク 足かせと手かせと。孟、盡心「――死者、非ニ正命一也」＝梏桎。

【栒】 シュン 軫

鐘磬を懸くる横木。＝簨。

【梍】 セイ 齊

○くひ、小さき杙。○國もみぢ。＝紅葉。

【栖】 セイ サイ 齊 或は棲に作る

○すみか、ねぐら、とや、鳥類がすみかとして居る、棲息する。○轉じてひろくすみかの義に用ふ。○すむ、止息する。陶潛詩「聊得ニ從ノ君一」○――遲はいこふ、やすむ。○――は忙しき貌。

【栖鴉】セイ ねぐらのからす。王士禎詩「――流水空蕭瑟」＝栖烏。

【栖烏】セイ ねぐらにとまるからす。李賀詩「――上ニ井梁一」＝栖鴉。

【栖息】セイ すみやすらふ。陶弘景文「官私行止、並有ニ――一」＝栖息。

【栖惶】セイ くまたか（蘇軾、赤壁賦）

【栖心】セイシン ○心をやすめる。魏書、顯祖紀「――浩然」○やすらふ心地。

【栖栖】セイ いそがはしき貌。急迫の貌。論、憲問「何爲是――者歟」＝棲棲、皇皇。

【栖息】セイ すみいこふ。何遜詩「――同ニ蝸舍一、出入共ニ荊扉一」＝棲息・栖憩。

【栖遲】セイチ 官職などにしばられず、遊息してゐる。晉書、潘岳傳「遂――十年」＝棲遲。

【栖泊】セイハク とまる。高適詩「漁樵屢――」

【栓】 セン 先

○きのくぎ（木釘）穴にさしこみて物の動かざるやうにするもの。○つらぬく（貫）物）○俗に甑などの口を塞ぐもの。○國 北海道に產する喬木、建築用とす。

【栓子】セン びんの口にさすせん。又、其の形せるもの「脂肪――」

【栫】 セン 厳

○たてしば、魚を捕ふる具。○まがき（籬）○かこむ（圍）左、襄十「――之以ノ棘」

【栴】 セン 先 或は檈に作る

――檀は印度・交趾等の熱地に產する香木の名、色紫なるを紫檀といふ。＝旃檀。

【栴檀】センダン ○香木の名。字解參看。觀佛三昧經「――根芽、漸漸生長、纔欲ノ成ノ樹、香氣昌盛」＝檀香。○國 棟の一名。

【栴檀從ニ二葉一香】センダンハ ノヨリフタバノカ 國 栴檀の木はふたばの時よりすでに香し。英雄は小兒の時より常人に異るに喩ふ。前條參看。

【桃】 ダウ 豪

○もも、果樹の一、葉は披針狀、春、五瓣紅色、又白色の花を開く、夏秋の交に甘美の實を結ぶ。「夭――」「扁――」「碧――」禮、月令「仲春――始華」○含――は櫻――ユスラ○胡――はくるみ。○――林は華山の東に在る地名。書、武成「放牛於――林之野」

【桃夭】タウエウ 嫁期トイイリにあたる義。詩、周南「桃之夭夭、灼灼其華、之子于歸、宜ニ其室家一」より出づ。歸は嫁、夭夭はわかく美くしき貌、よめに行く女を桃の美くしきに比す。

【桃葉】タウエウ ももの葉。又、晉の王獻之の愛妾の名。王獻之詩「――復――、渡ノ江不ノ用ノ楫」

【桃園】タウエン ○ももぞの。○蜀の劉備が、關羽・張飛と三人義を結びし處。

【桃膠】タウカウ ものやに。廣雅「虎魄生ニ地中一、初時如ニ――一」＝桃腦。

【桃花臉】タウクワケン ももの色の美くしきかほ。蘇伸詞「爲問――、一笑爲ノ誰容」＝桃臉。

【桃花酒】タウクワシユ 桃花を漬したる酒。之を飲めば病を除き、色を好くすといふ。

【桃花水】タウクワスイ 桃の花の開く頃、冰解けて漲り流るる水。漢書、溝洫志「來春――盛、必漢溢」杜甫詩「春岸――、雲帆風樹林」

【桃花馬】タウクワバ 白毛にして紅點ある馬。杜牽言詩「――上石榴裙」

【桃花粉】タウクワフン べに。雲麓漫鈔「燕脂以ニ紅藍汁一、擬爲ノ之、宮人塗ノ之、號ニ――一」＝燕脂。

【桃花面】タウクワメン うすべに色の顏。

【桃脯】タウ ももの實の冬にいたりてなほ枝にあるもの。本草「桃實已乾ニ著木上一、經ノ冬不ノ落者、名ニ――一」＝桃奴。

【桃源】タウゲン 世間を離れたる別天地。陶潛、桃花源記「晉太元中、武陵人、捕ノ魚爲ノ業、緣ノ溪行、忘ニ路之遠近一、忽逢ニ桃花林夾ニ岸、林盡水源得ニ一山一有ニ小口一、從ノ口入、行數十步、豁然開朗（中略）男女衣著、悉如ニ外人一、黃髮垂髫、怡然自樂、見ニ漁人一、乃大驚（中略）自云、先世避ニ秦亂一、率ニ妻子邑人一來ニ此絕境一、問今是何世、乃不ノ知ノ有ノ漢、無論ニ魏晉一」

【桃弧】タウ ももの木のゆみ、災をはら

ふに用ふ。桃は仙木にて、古、邪氣不祥をはらふに用ふ。左、昭四「唯是――棘矢、以除二其災一」

【桃氏】シウ　かたなかぢ。周禮、冬官、段氏爲二鎧器一「――爲レ刃」＝刀匠。

【桃牀】タウ　ねだい。＝眠牀・臥牀。

【桃雀】タウ　鷦鷯ショウサウの異名。易林、――、鷦鷯、巢二于小枝一、搖動不レ安、爲レ風所レ吹」

【桃蟲】タウ　みそさざいの異名。爾雅「――、鷦」

【桃膠】タウ　ももの樹のやに。＝桃膠。

【桃仁】ニン　ももの實のさね、桃の核中の肉。

【桃符】フ　おふだ、どふら、神符。桃の木にて作る。山海經「海中有二鬱壘山一、山有二桃木一、桃下有二二神一、能啖二百鬼一、故今元旦設二――於門一」

【桃李】リ　○ももと、すももと。詩經「何彼穠矣、華如二――一」○廣く世せる賢士。又、門弟子の義。唐書、姚元崇傳「數十人、皆狄仁傑所レ薦、或謂二仁傑一曰、天下――、盡在二公門一矣、仁傑曰、薦賢爲レ國非レ爲レ私也」

【桃李不言下自成蹊】ハ　桃李は華實あるを以て、招かざれども、人爭ひ赴きて徑ミちを成す。轍ある人は言はざれども、人自ら歸服するに喩ふ。史、李將軍傳贊「太史公曰、傳曰、其身正、不レ令而行、其身不レ正、雖レ令不レ從、其李將軍之謂也、余嘗二李將軍一、悛悛如二鄙人一、口不レ能二道辭一、及二死之日一、天下知與不レ知、皆爲悲レ哀、彼其忠實心、誠信二於士大夫一也、諺曰、――、此言雖レ小、可二以喩一レ大也」

【桃林處士】シヨウリン　牛の異名。史、周本紀「武王已克レ殷、縱二馬於華山之陽一、放二牛於桃林之虛一、偃二干戈一、振レ兵釋レ旅、示二天下不一復用一也」事類全書「寄國假二宿太傅莊南山下一、月夜有レ叩レ關、稱二桃林班特處士因訪一、繼而南山班寅將軍來謁、因爲置酒、及レ明視、門外唯牛蹄虎跡而已」

【桃茢】ロウ　ももの本と、あしの穗と、不祥をはらふに用ふ。檀弓「君臨二臣喪一、以二桃茢一――執レ戈」、韓愈、諫レ迎二佛骨一表「巫覡不レ先、――不レ用」

【桌】卓（十部六畫）に同じ、俗に几案をいふ。

【株】チュシュ　虞

○かぶ、木の幹の最下部、根に近き所、土中に在るを根、土上に在るを――といふ。○木を伐り倒せし下部ののこり、きりかぶ（斷木）○木の數をかぞへるにいふ「桑八百――」○國かぶ、特に限られたる商工上の營業權。又、銀行會社などに於ける出資者の權利「一券」「一式」「一金」

【株枸】クシュ　かれ木のきりかぶ。

【株梧】ゲウシュ　きりかぶ、きりくひ。

【株櫟】レキシュ　くひ、かぶ（列子）

【株守】シシュ　何時までも舊習を守りて變通を知らざる者を嘲りていふ。背、宋に一農夫ありて、たまたま兎の株にふれて死せしを見、耕作を廢めて專ら株を守り、また兎を得んと欲して世の笑草となりし故事（韓非、五蠹）に本づく。王建詩「乃知兎――、殊勝虎穴探」＝守株。

【株戮】リクシュ　連累してみなごろしにする。唐書、路嗣恭傳「――――舶商、沒二其財數百萬一、私二有之一」

【株連蔓引】アンインレンシュ　かぶをつらね、つるをひっぱる如く、手づるによりて殘らず連累者を罪する義。＝株蔓。

【株券】ケンシュ　株式を見よ。＝株券。

【株式】シキシュ　數多の人が資本金を出し合ひて銀行會社等を組織したる資本の單位の稱。＝股分。又、其の會社を――會社、資本主を株主、資本に對する權利の證書を株券といふ。

【株主】シシュ　株式を見よ。

【栻】チヨク　職

楓子樹の心木にて作りたる吉凶を占ふに用ふる具。或は式に作る。

【桐】トウ　東

○きり、落葉喬木の一、葉は大いに、花は脣狀淡紫色、材は白く柔かくして輕く、箱・下駄等の製作に適す。禮、月令「仲春之月、――始華」○梧――は青桐府に屬す。

【桐城派】シヤウハ　清の方苞・姚鼐は皆桐城の人、其の古文自ら一派を成す。世よりて――の稱あり。

【桐油紙】ユシ　桐油桐の實をしぼりとりたる油をひきし防水紙。合羽などに用ふ。

【桐壺】ツボ　國書、禁中にありし殿舍の一。

【栢】柏（木部五畫）の俗字。

【栰】ハツ　月　通音ベツ

いかだ。＝筏。

【栳】ラウ　豪

栲――はやなぎごり、栲（本畫）の字解參看。

【栾】樂（木部十九畫）の俗字。

【栗】リツ　質　東は古字

○くり、果樹の一、葉は長橢圓形、初夏、穗狀の花を著け、秋、とげある殼に包まれたる褐色の實を結ぶ「嘉――」「芋――」○つつしむ（謹敬）書、禹典「寬而――」○かたし（堅）○いかめし、おごそか、きびし（威嚴）司馬法「位欲レ嚴、政欲レ――」○おそる、をののく（戰）論、八佾「使二民戰一――」○――烈は風寒し。○ちぢむ（縮）○くしけづる。○――はおほし（衆）又、おそれる。○穀物の實入りよし。○行――は道しるべの樹（表、道樹）

【栗階】カイリツ　階級を超えて急ぎおもむく、栗は蹙、階を蹙む。儀禮、燕禮「――、不レ過二三等一」

【栗殼】カクリツ　くりのかは。本草「――栗之黑殼也、主治二反胃泄瀉一、煮レ汁飲レ之」

【栗子】シリツ　くりの實。

【栗刺】シリツ　くりのいが。

【栗扶】フリツ　くりの實のしぶかは。

【栗里】リリツ　晉の陶潛の住せし地名（梁昭明太子、陶靖節傳）王韓、自二建昌州一還經二行廬山下一記「過二靜石觀一、卽陶靖節故居――也」

【栗栗】リツリツ　○おぼき貌。詩、周頌「蘇之桎桎、稼レ之――」○おそれる貌。後書、元帝紀、朕戰戰――、日夜思二過失一」＝慄慄・戰栗。

【栗烈】レツリツ　風の甚だしくさむき貌。詩、豳風、七月「一之日觱發、二之日――」

【栗鼠】スリツ　きねずみ、常に樹上に棲む小獸。埤雅「鼠類、一名鼯、今――似レ之」

【煨栗】クワイリツ　火中に入れて栗をやく。又、其のやきし栗。張澄詩「火爐――レ話二親情一」

【栗毛】クリツ　國馬の毛色の名、體は淡赤色、たてがみの茶褐色の馬。＝騮。

【椹】シン　侵

○やがらに用ふる木。○――松は松の一種。南史、孝義傳「庾沙彌母亡、晝夜號痛、墓忽生二松百餘株一」

【梓】〔國字〕

かせ、かせひ、かせぎ。つむに取りし絲をかけて束ねる具。

【樗】チヨ　七　書　魚

○さるがき。＝椿。○椿に似たるなつめ（棗）司馬相如、子虛賦「樝梨――栗」

【械】カイ　卦

○かせ、かし（桎梏）罪人の手足首などにはめる刑具「手――」○いましめ、かせをはめて自由を束縛する「――繫」○うつは、器具の總稱「器――」○たくみ（巧術）○からくり、しかけ「機――」○つはもの、兵器武具「兵――」

【械器】カイ　うつは。孟、滕文公「以二粟易二――一者」＝器械。

【械繫】ケイ　かせをはめ獄につなぐ。史、蕭相國世家「乃下二相國廷尉一――之」

【械梏】コウ　かせ。＝桎梏・械杻。

【械杻】シウ　かせ、杻に手がせ。蘇軾詩「君命四二廢閒一、巖石爲二――一」

【械桎】シツ　かせ。＝械杻。

【械用】カイ　だゞぐ、器物をいふ。荀子「農夫不二斲削一、不二陶冶一而足二――一、工賈不二耕田一而足二菽粟一」＝器用。

【梗】コウ　極

○やまにれ、木に刺あり（山枌楡）○木の枝。草の莖。○やまし、やまひ（病）詩、小雅「於レ今爲――」○ふせぐ、災を禦ぐ。○ただし、なほし（正直）○おほむね、あらまし（大略）「――概」○たけし（猛）強し「頑――」○とけあるもの。○ふさぐ、ふさがる（阻塞）「――塞」○とけ、のぎ。○土――はでく（土偶）莊、田子方「吾所學者土――耳」○桔――は秋草の名。桔（木部六畫）を見よ。

同訓異義　梗・塞・杜・壅・窒の別は塞（土部十畫）の條を見よ。

【梗概】カイ　あらまし。槩は概に同じ。張衡、東京賦「言二其――一如レ此」＝梗概。

【梗概】カウ　ただしき貌。孔叢子「――究直」

【梗草】カウ　桔梗キキウの異名（本草綱目）

【梗死】シウ　喉がつまりて死ぬ。

【梗澀】シウ　ふさがる。晉書、王承傳、道路――、人懷二危懼一」＝梗塞。

【梗正】セイ　強くしてただし。南史、蔡撙傳「風骨――、氣調英曉」

【梗塞】カウ　ふさがりて通ぜず。秦觀、新晴文「道途――、物價騰踴」

【椈】カク　覺

○たるぎ（榛）圓きを椈、方なるを――といふ「朱――」「椽――」○木の枝の平かなるもの（平柯）易、漸卦「鴻漸二于木一、或得二其――」○國ごりんご（棠梨）の一

種、材を黄色の染料とす。

【桿】カン　杆（木部三畫）の俗字。

【楊】キク　屋　かんじき。山に登る時、すべらぬ爲めに鐵の釘を履の下にうちつけしもの。又、それをはく。漢書、溝洫志「禹治水、山行則―」＝圏釘鞋。

【梏】クン　区　―檻はさるがき、柿の小なる者。

【梡】クヮン　旱　○まないた、四本足の俎。○斷りたる木。

【梟】ケウ　蕭　○ふくろふ、みみづくの一種、毛角なく、晝はかくれ、夜出でて鳥鼠の類を捕食す、長じて母を食ふといふ、不孝の鳥。＝鴞・鴟鴞。○たけし（健）＝驍。あらくつよし、すぐれる（雄）「―雄」「―猛」淮南、原道「爲＝天下―」○いただき（山巔）○すぐれたるもの（雄傑）○さらす。さらし、罪人の首を斬りて獄門にかける、古の極刑「―首」○―盧は樗蒲ボウの采の名。

【梟悍】カン　あらあらしくつよし。

【梟騎】キケウ　たけき騎兵。漢書、高帝紀「致二―一―一助レ漢」

【梟健】ケウ　あらあらしくたけし。

【梟鴟】シケウ　ふくろふ。抱朴子「――屯飛、則鴛鳳幽集」＝鴟梟。

【梟將】ケウ　勇猛なる大將。史、留侯世家「九江王黥布楚――」

【梟首】シュ　首をさらす。さらしくび。漢書、樂布傳「貫以二謀反一―二―離陽」

【梟悍】カン　あらあらしくして理にもとる。北史、李平傳「天迷二其心一、構二此―一」

【梟破獍】ケウハキヤウ　梟は、ふくろふ、母を食ふといふ鳥、破獍は父を食ふといふ獸、よりて惡人に喩ふ。漢書、郊祀志「古天子常以レ春解レ祠、祠二黄帝一用二―――一」

【梟木】ボク　首をさらす木、どくもん臺。

【梟猛】マウ　あらくたけし。南史、薛安都傳「譽爽世―、咸云萬人敵」

【梟名】メイ　驍勇なるほまれ。後漢書、劉焉傳「劉備有二―一」注「梟即驍也」＝驍名。

【梟勇】ユウ　あらあらしくつよし。

【梟雄】ユウ　あらくつよし。後漢書、袁紹傳「除レ忠害レ善、專爲二―一」

【梟雲】ウン　梟はふくろふ、惡鳥。鸞は鳳凰に似たる靈鳥。よりて小人と君子とに喩ふ。

【梟盧】ロ　ともに樗蒲ボウのさいのめの名、よりて、ばくちの義とす「呼レ梟呼レ盧」は賭博をなすをいふ。

【梟師】シ　圏上古の野蠻人の長の稱。

【梧】㊀ゴ　㊁ゴ　虞　遇　㊀あをぎり、桐の一種、樹皮の青くして滑澤なるもの「碧―」○枝―はささふ（支持）漢書「莫敢枝―」㊁魁―は壯大なる貌。史、留侯世家「魁―奇偉」○迕に通ず、抵―は相觸迕する義。

【梧陰】イン　あをぎりのかげ。顧瑛詩「竹色――積二翠嵐一」

【梧右】ウ　机のそば、人に送る手紙の宛名ナアの脇付に書く語。＝梧下・几下・梧前。

【梧葉】ヨウ　あをぎりの葉。韋應物詩「況玆風雨夜、蕭條――秋」

【梧下】カ　梧右に同じ。

【梧擂】カ　あをぎりと、ひさぎと、共に良材。孟、告子「舍二其―一養二其柮棘一則爲二賤場師一焉」

【梧前】ゼン　梧右に同じ。

【梧竹】チク　あをぎりと、たけと。羊士諤詩「蕭條―――月、秋物映二園廬一」＝碧梧翠竹。

【梧桐】トウ　あをぎり。詩、大雅「―――生矣、于二彼朝陽一」郗雍詩「―――月向二懷中一照、楊柳風來二面上一吹」

【梧桐一葉】イチヨウ　青桐の一葉に立秋を知る。曝芳譜「立秋之日、如二某時立秋一、至レ期一葉先墜、故云、――落、天下盡知レ秋」＝一葉落知二天下秋一（文錄、唐人詩）

【梏】コク　沃　○てかせ、てかし、刑罰の具（手械）「桎―」「―械」○くびをつらぬく（貫頸）左、襄六「以レ弓―二華弱於朝」○みだす（亂）○しばる、つなぐ、束縛して自由をさせぬ。

【梏械】カイ　てかせ。

【梏桎】シツ　○手かせと、足かせと。漢書、刑法志「中罪―――」＝桎梏。○轉じて、拘束して自由をさせぬ義。

【梏亡】バウ　みだしほろぼす。梏は亂、しばりて草木の成長を害する。孟、告子「有レ―――之矣」

【梱】コン　阮　○しきみ、門の内外のしきり（門橛）曲禮「外言不入二于―一、内言不出二于―一」＝閫・門限。○うつ（扣・叩椓）○圏こり、こうり、竹又は柳などにて造りしいれもの。＝行李。○包裝せし荷物、又それを數へるにいふ。【梱外之任】ニンガイ　將軍の職務。周禮、大司徒、軍形、疏「梱外之事、將軍裁レ之」＝閫外之寄。

【梭】サ　歌　ひ、織機ハタの具、くだを入れて緯ヨコを通はすもの。＝杼。

【梭巡】ジユン　往來してしらべる、梭の緯イトを行ヤリ往復して已まざるに喩ふ。＝邏察・巡察。

【梭杼】ショ　はたのひ。江淹詩「洮黄夕不レ織、寧聞―――音」＝機杼。

【梭投】トウ　はたのひをかよはす、光陰の經過の急なるに借りて喩ふ。陳造詩「病念レ還レ家可レ奈レ愁、客中日月念―――」＝擲梭。

【桫】サ　歌　―羅は木の名、枕榔に似て樹甚だ高く、葉は橢圓にして尖る、花は淡黄、材は堅實にして建築に用ふ。＝娑羅。

【梓】シ　紙　○あづさ、あかめがしは、楸の屬、喬木の一、葉は互生し、芽の色甚だ赤し、初夏黄白色の花開き、秋實を結ぶ。埤雅「―爲二百木長一、故呼―爲二木王一」○さかづき（杯）○文書を板に彫刻する。又、其の版バン「上―」「―行」○木製の器を治むる職「―人」○桑―は二木共に父の植うる所、よりて故郷の義とす。○橋―は父子の義。尚書大傳「橋者父道也、―者子道也」

【梓柩】シウ　梓宮に同じ、柩はひつぎ。

【梓宮】キウ　天子のひつぎ、あづさにて造る故。漢書、成帝紀「成帝崩、未レ幸二―――一」

【梓材】ザイ　○あづさの材。張華文「如二彼―――、弗レ勤二丹漆一」○尚書の篇名。

【梓人】シ　大工の棟梁トウリヤウ。梓は百木の長。周禮、考工記「―――爲二筍虡一」柳宗元に―――傳あり。

【梓匠輪輿】シヤウリンヨ　梓人匠人は木工、棺槨を造る工人。輪人・輿人は車工。孟、滕文公「子何尊二――、而輕レ爲二匠―者上哉」

【上レ梓】ジヤウ　文書を版木にほりつける。轉じて書物を出版する。

【梓木】ボク　あづさの木。搜神記「有二大―――生二家之端一、根交二於下一、枝錯二於上一」

【梓里】リ　ふるさと、父母が植ゑて置きし桑梓のある所の義。詩、小雅「維桑與梓、必恭敬止」劉迎詩「吾不レ愛二錦衣、榮歸舊二―――一」＝桑梓。

【梓弓】ユミ　國梓にて作る弓「引く」「張る」などの枕詞として用ふ。

【梔】シ　支　くちなし、灌木の一、初夏白色六瓣の花を著け、黄赤色六稜の實を結ぶ、實は黄色の染料とす。＝梔子・山梔・木丹。

【梔子】シ　くちなし。三柳軒雜識「―――爲二神客一」＝越桃。

【桼】シツ　質　漆（水部十一畫）に同じ。

【梫】シン　侵　とねりこ（青皮木）其の皮を秦皮といふ、色青く、藥用とす。

【梫】シン　侵　かつら（桂）白き花の桂「―桂」

【桜】ズキ　支　たら（楡）＝椶。

【梢】セウ　看　○こずゑ（杪）「枝―」○樂人の執る竿、音樂を調節する具。○こしば（小柴）○擊ちて之を去る。○はたあし、旗の旄。○かぢ（舵尾）＝篙。○―は小なり。又、こずゑの風にそよぐ聲。又、尾を垂れる貌。

【梢子】セウ　せんどう。字彙「今人謂二篙師一爲二―――」

【梢梢】セウ　○こずゑの風に動く貌。鮑照賦「風―――而過レ樹」○ちさし、わづか。博雅「―――、小也」○尾の垂る貌。李賀詩「竹馬―――搖二綠尾一」

【梲】㊀セツ　㊁タツ　屑　易　㊀うだつ、うだつ、梁上の短き柱。論、公冶長「山節藻―――」に藻の圖をゑがく、贅澤ゼイタクなる建築の義。㊁ほう、つゑ（大杖）淮南、說山「揮―而呼狗」

【梳】ソ　魚　○くし（櫛）齒の疏なる者を―、密なる者を篦といふ。○くしけづる（理髮）揚雄文「頭蓬不レ暇―」○轉じて理め導く。韓愈文「蜂屯蟻雜、不可爬―」

【梳櫛】ソシツ　髮をくしけづり、手をあらふ。蘇軾詩「傳聞使者來、策レ杖就―――」＝櫛盥。

【梳櫛】シツ　○髮をくしけづる。隋書、禮

○木　部　（七畫）梢・梭・梛・梳・梳・梳・梢・梢・梢

儀志「盥訖詣二太子前一―一」○くし。

【梳洗】ソセン くしけづりあらふ。崔湜詩「――懶無レ情」＝梳沐。

【梳頭】ソトウ 梳髪に同じ。丘爲詩「終年不レ向レ郭、過レ午始―一」杜甫詩「百年渾得レ醉、一月不レ―レ―」

【梳髪】ソハツ 髪をくしけづる。唐書、五行志「唐末京都婦人―レ―、以二兩髻一抱レ面」＝理髪・梳頭。

【梳沐】ソモク くしけづりかみあらふ。瑞桂堂暇錄「夫人方二―一、有二舊友來訪一」＝櫛沐。

【梳翎】ソレイ 鳥がはねをそろへる。鄭顥詩「風動鶴―レ―」

【梛】 ダ ナ 歌

○枸―は楊柳に似たる木。夏、淡紅花を開く。○國―葉は對生にして其の形竹に似たる常綠喬木。＝竹柏。

【梯】 テイ ダイ 齊

○はしご（木階）きざはし「―階」虎韜「視城中、則有雲―飛樓」○階―は上の階級に進む手引の義とす。國語「毋曠其業以爲亂―」○よる（凭）○突―は隅角なき者。

【梯階】カイ はしご。＝階梯。

【梯航】カイ ○はしごをかけて登り、船にてわたる、海山を越えて遠方に行く。梁簡文帝、大法頌序「航レ海梯レ山」賀知章詩「冠冕中華客、―一異域臣」○轉じて手引・案内の義。金丹大要「善之一字、乃入レ道之―也」

【梯形】ケイ はしごがた。數學にて四角の或一雙の相對する邊が互に平行するもの。

【梯磴】トウ 山にのぼるだんだんのみち。蘇軾詩「上レ山絕二―一、墮レ海迷二津涯一」＝梯磴。

【梯梁】リヤウ はしごと、かけはしと。元結文「非二―一以通レ險、當レ無二路兮可レ入」

【梯子】シ 國高き所に登る爲めにかける足場。＝木階・梯階・階梯。

【梃】 テイ チヤウ 迥

○すぐなるまるき棒（木枚）つゑ（杖）孟、梁惠王「可レ使二制―一、以撻二秦楚之堅甲利兵矣一」○てこ（槓杆）○―然はつよくただしき（勁直）貌。○幹莖又長さのあるものを數ふるにいふ。魏書、李孝伯傳「酒二器、甘蔗百―」

【梃銀】ギン 國慶長年中に作る、銀のべ棒、又は板を貨幣として切りて通用せしもの。＝丁銀。

【桿】 テイ 寒

○つくゑ（几）○はしら、柱の類。○さを（杠）○牀の横木。

【條】 デウ 蕭

○えだ（小枝）詩、周南「伐二其―一枚」枚は幹。○ながし（長）書、禹貢「厥木惟―」○すぢみち「―理」書、盤庚「若二網在綱、有―而不紊一」○嘯ツく貌。詩、王風「其歗矣」○とほる（達）○のぶ（暢）のびのびする「―達」漢書、禮樂志「聲氣遠―」○をしへのかで。「教―」○箇條書きになりてゐる規則。おきて「―例」「―約」○一一ならべ擧げて其の理由を明かにのべる「―奏」「―陳」○なは（繩）○えだをきりおとす（枝落）詩、豳風「蠶月―桑」○柚ユズの類。詩、秦風「有―有梅」○東北の風。○―はみだれる（擾）國○故に、よりて等の義、書簡文の用語「何何に候―」○細く長き物を數ふるにいふ。

【條疋】ヒキ 箇條によりて分類する。唐書、儒學傳「―一粗立」

【條項】カウ 條目に同じ、項はかど。＝條款。

【條規】キウ 箇條書にしたる規則。

【條畫】クワク すぢみちを立てて計り定める、一一箇條を逐ひて記錄する〔宋史、河渠志〕

【條貫】クワン すぢみち、貫はすぢがつらぬき通る。左傳、序「經之―一、必出二於傳一」史、屈原傳「明二道德之廣崇、治亂―一」＝條理。

【條款】クワン くだり、箇條。＝條目。

【條決】ケツ すぢみちを明かにしてきめる。

【條件】ケン ○くだり、事件の條目。北史、郎基傳「衆逐二―一、申二臺省一」○定めたる約束の事がら。

【條舒】ジヨ のびやか。＝舒暢。

【條制】セイ 法律の箇條。

【條析】セキ すぢみちを明かにして、わかつ〔唐書、張嘉貞傳〕

【條對】タイ 一一箇條書にして答へる。漢書、梅福傳「詣二行在所一、―一急政一」＝條答。

【條達】タツ ○木の枝ののびる如く四方にのび通ずる。戰國策「地四平、諸侯四通、―一輻湊」○のびやか。然康文「恬愉無レ選、而神氣―一」

【條答】タフ 一一箇條を立ててこたへる。蜀志、費禕傳、注「事事―一」＝條對。

【條陳】チン 一つ一つ條を逐ひてのべる。漢書、李尋傳「臣謹―二一所一聞」

【條暢】チヤウ のびやか。漢書、律歷志「指順取レ象、然後陰陽萬物、靡レ不二―一成一」＝條達。

【條暢】チヤウ 前條に同じ。禮記「感二―之氣一」＝條暢。

【條條】デウ ○みだれる貌。孟郊詩「―脆如レ蘭」＝蕭蕭。○國一一の箇條。

【條風】フウ 八風の一、東北より吹き來る風。萬物に條達する義。山海經、注「東北風爲二―一」

【條文】ブン かどがきにしたる文。

【條目】モク 法律などの箇條、目次。漢書、公孫賀傳贊「增二廣―一」＝條款。

【條約】ヤク ○條文を以て約束する。又、其の約束。唐書、南蠻南詔傳「數攻二―一衆不レ悅」○國と國との間の相互の權利義務を定めたる約束「―一國」

【條理】リ すぢみち。孟、萬章「始二―一者、智之事也」

【條例】レイ ○一つ一つすぢみちをたてて例をかぞへ擧げる。晉書、劉寶傳「撰二春秋―一二十卷一」○箇條書にしたる法令。

【條列】レツ 一つ一つ條理を明かにしてならべ立てる。後漢書、張堪傳「悉―一上言、秋毫無レ犯」

【梃】 テン 先

【桶】 ○トウ ○ヨウ 董 腫

㊀をけ、水を盛る器、もと六升を受くる木製の方器。今は圓器をいふ「水―」「飯―」の如し。○うるしをけ。㊁ます（斛）史、商君傳「平二斗一―」甬に通ず。

【梏】 ハイ 灰 孟は俗字

さかづき。＝杯（木部四書）

【梏巵】ハイ 木をまげて作りし容器、さかづき、水のまげもの。孟、告子「性猶二杞柳一也、義猶二―一也」

【梏勺】ハイ さかづきと、酒をくむ杓と。＝梏杓。

【不レ勝二梏杯一】ハイ 十分に酒に醉ひて、飲酒のあひてが出來ず。史、項羽紀「張良入謝曰、沛公――」

【梅】 バイ マイ 灰 或は楳・莓・罵・毎に作る

○うめ、果樹の一、早春、葉に先ちて香氣ある美花を著け、梅雨の頃、實が黃熟する「白―」「紅―」「寒―」「早―」「探―」「野―」○つゆ、さみだれ、梅の實の黃熟する頃のながあめ「―雨」「入―」又、其の期節の稱「―天」「―節」○―マイは喪に居る時の容。＝昧昧。

【梅鷺】バイ うめにうぐひす。王維詩「紫梅發初遍、黃鳥歌猶澀」

【梅雨】バイ つゆ、さみだれ。蘇軾詩「四月―一」注「梅熟時雨」一說、梅は黴と音通、つゆの頃は衣服柱礎等に黴ビが生ずる故に黴雨とも書く。＝梅子雨・黃梅雨。

【梅夏】カイ つゆ、梅雨の節。唐明皇文「喜二麥秋之有レ登、玩二―一之無レ事」

【梅杏】バイキヤウ うめと、あんずと。杜甫詩「櫃梨且緩碧、―一半傳レ黃」

【咏二梅花一】バイクワヲエイズ 梁の何遜が梅花の盛開せる下に吟咏せし故事。梁書「何遜、字仲言、東海剡人、爲二梁法曹水部員外郎一、揚州廨宇有レ梅盛開、遜常吟二咏其下一、後居二洛陽一、思レ梅不レ得、請三再任二揚州一、從レ之、既至、適花盛發、大開二東閣一延二文士一、嘯傲終日」

【梅花國】バイクワコク 梅花の多くある土地。徐渭詩「萬樹――、垂レ簾試一凭」

【梅花粧】バイクワシヤウ 婦女が額上に梅花を貼するにいふ。粧は妝に同じ。初學記「宋武帝女壽陽公主、人日臥二於含章殿簷下一、梅花落二額上一、成二五出之花一、拂レ之不レ去、皇后留レ之、自後有二――一」

【梅花村】バイクワソン ○梅花を多く栽ゑたる村。○地名。廣東新語「――在二山口一、前對二麻姑玉女一峯、深竹寒溪、一往幽折、人多以レ藝レ梅爲レ生、牛羊之所二踐踏一、皆梅也」

【梅兄】ケイ 梅と、ぢんちゃうげとを兄弟に見立てていふ。黃庭堅詩「山礬是弟梅是兄」山礬は瑞香ズイカウケン

【梅妻鶴子】バイサイカクシ 林和靖の故事。詩話總龜「林逋隱二于武林之西湖一、不レ娶無レ子、所居多植レ梅蓄レ鶴、泛二舟湖中一、客至則放レ鶴致レ之、因謂二――一」

【梅市】シイ 梅を賣る市。成都古今記「十一月有二――一」

【梅信】シン うめの花がさき初めたるより。皮日休詩「――徵像地隱紅」

【梅漿】シヤウ うめず（禮、內則、注）

【梅醬】シヤウ うめびしほ（本草集解）

【梅葅】シヨ 梅の實の漬けたるもの、うめぼし。禮、內則、疏「王肅云、桃葅――」

【梅天】テン さみだれのそら。盧綸夜鑑「非レ陰非レ霽如二――一」

【梅毒】ドク かさ、梅は黴と音通。＝黴毒。

【梅寐】バイ つゆ、さみだれ。張璪詩「吳儂畏レ雨如レ畏レ虎、不レ道――是時雨」＝梅雨。

【梅林止レ渴】バイリンシカツ 梅林あるを聞きて、渴を醫したりといふ故事。世說「魏武嘗行役、與二軍士一失二汲道一、軍

蓄湯、乃令曰、前有二大梅林一、饑渴甘酸可二以解一渴、士卒聞レ之、口皆出レ水」

【梅梅】ライライ　喪に居る時の貌。禮、玉藻「視容瞿瞿――」＝昧昧。

【梅酢】スノ　國鹽漬の梅の實の汁。＝梅鹵・梅漿。

【梅鹵】ノボ　國昔、禁中に在りし殿舍の名。

【梅干】ボシ　國鹽漬にしたる梅の實、紫蘇の葉を加へてつけしもの。＝鹽梅・霜梅。

【梖】バイ　泰

一多はばいたら、印度地方に產する常綠喬木の一。彼の土の佛經、多く此の葉に寫す。故に貝葉經と名づく、一は通じて貝に作る。＝貝多・貝多羅葉。

【梆】ハウ　江

○木を斷り、背上に孔を穿ち、若くは竹を截り筒を作り、兩頭に節を留め、旁に孔を穿つ、古、官府にて之を擊ちて人民を號召する合圖とす。○ひさうしぎ（柝）○國敲一ハウは擊柝の義。

【梶】ビ　尾

○こずゑ（木杪・梢）○國かぢ、楮の一種、製紙の原料とす。又、船を進める具。＝楫。又、車の前にある木、手に持ちて牽く所、かぢぼう。

【桴】㊀フウ・フ　㊁フ　虞　尤

㊀むね（棟梁）○ばち（擊レ鼓杖）禮、禮運「蕢一而土鼓」＝枹。○一炭はけしずみ。＝浮炭。○一思はへい（屏）禮、明堂位、注「屏謂二之樹一、今一思也」㊁いかだ、竹木を編みて舟に代用するもの。大を筏といひ、小を一といふ。論、公冶長「乘レ一浮於海」

【桴鼓】つづみをばちにてうつ。

【桴筏】いかだ。北史「可二一一一」

【桂】ヘイ　齊

○一柶はこまよせ。＝行馬。○ひとや（牢獄）

【桲】ボツ　月

○からざを、穀物を打つもの。（連枷）○つゑ（杖）○檻一ボツは林檎に似たる果物、まるめろ。

【梵】ボン　陷

○けがれなき清淨の義。○しやうみやう、つとめ。○婆羅門教の眞理。○一天王、轉じて、佛教・寺・僧又印度の事にいふ。「一鐘」「一唄」「一刹」○一語は印度古代の語。

【梵音】オン　○佛のこゑ、如來清淨の音聲。○佛經をよむこゑ。○梵語。

【梵家】カ　てら。白居易詩「早晚移栽到二――一」＝寺院・伽藍・佛寺・梵刹・梵宮・梵坊・梵王宮。

【梵閣】カク　てら。白居易詩「洛城秋霽後、――暮燈時」＝梵宮・佛堂・佛殿。

【梵樂】ガク　印度の音樂、佛教の音樂。宋之問詩「天歌將二――一空裏共裴回」

【梵學】カク　佛法の學をいふ。甘澤謠「――之外、音律大通」

【梵行】ギヤウ　佛門五行の一、清淨なるおこなひ。

【梵宮】キウ　てら。朱慶餘詩「流水離二經閣一、閒雲入二――一」＝梵刹・梵王宮。

【梵偈】ゲ　佛法の詩詞、偈は讚美の詩。

【梵磬】ケイ　佛寺にて用ふる石の樂器、けい。馬祖常詩「鶴馴看二――一、猫定聽二齋鏖一」

【梵夾】ケフ　佛教の經文おきやう、貝葉に經を書き板を以て之を夾む故。通鑑、唐懿宗紀「於二禁中一自唱レ經手二錄――一」

【梵語】ゴ　印度古代の言語、サンスクリット。李嘉祐詩「禪心超二忍辱一、――問二多羅一」

【梵妻】サイ　僧侶の妻、だいこく。＝梵嫂。

【梵嫂】サウ　僧のつま。輟耕錄「京師大相國寺僧有レ妻、曰二――一」＝梵妻。

【梵册】サツ　佛教の書物。唾玉集「――整齊」＝佛書・梵本・梵帙。

【梵刹】サツ　てら。刹は竿、幡柱を立てて僧の居る處を表示するが故。張耒詩「傳警軍城靜、鳴鐘――清」＝佛寺・梵宮・梵王宮。

【梵讚】サン　梵語にて唱ふる佛德を頌する文。

【梵字】ジ　印度の古代の文字。其の母字を悉曇子字を體文、點畫を摩哆といふ。段成式詩「翻了四天偈、燒餘――香」

【梵唱】シヤウ　○佛法のうたひもの。○讀經をいふ。＝梵唄。

【梵衆】シユウ　色界初禪天なる梵王の民、轉じて佛徒、僧衆をいふ。劉軻文「端齋嚴恪、儀二刑――一」

【梵鐘】シヨウ　寺のつりがね。樊阜詩「牛樹殘陽又――」＝寺鐘。

【梵天】テン　○佛――王の略、宇宙創造の主、大梵・梵輔・梵衆の三天の總稱（淨名經）○佛の住む世界「――國」○國ボン　修驗道にて祈禱に用ふる幣束。

【梵典】テン　梵字にて書きたる經文。＝梵册。

【梵殿】デン　てら。何景明詩「葉暗秋燈――深、花香晚飯書廚靜」＝佛殿。

【梵納】ナウ　僧侶、納はころも。王縉文「――之行、楞伽之心」

【梵貝】バイ　ほらがひ。文獻通考「貝之爲レ物、其大可レ容二數升一、蓋之大者也（中略）今之梵樂用レ之以和二銅鈸一、釋氏所レ謂法螺」

【梵唄】バイ　經を讀むこゑ、唄は誦。楞嚴經「――嘽唄、自然敬奉」

【梵坊】ボウ　てら。秦觀詩「餔餐就二――一」＝梵宮・梵王宮。

【梵本】ホン　梵字の書。頻眞子「翻二譯四天所レ得――經論一」＝梵册。

【梵王】ボウ　梵天王の略、色界初禪天の主、又三界の主。法華經「爾時諸――、諸天帝釋」

【梦】夢（夕部十一畫）の俗字。

【棚】ヤ　麻

やし、果樹の名（棚子）一は柾又棚に作る。張堯封詩「一花好爲酒、誰伴醉如泥」

【棖】ラウ　陽　又、椰に作る

○たかきき（高木）○桄一クワウはくろつけ、桄（木部六畫）を見よ。

【梨】リ　支　棃に同じ

なし。果樹の一、春晚、葉に先ちて白色五瓣の花を著け、夏秋の交、甘美の實を結ぶ。

【梨雲】ウン　梨の花の多きを白雲に比していふ。陳櫓詩「――柳絮共微茫」

【梨園】ワン　もと俳優の技を習ふ所、轉じてしばゐ、又、やくしやの仲間の義とす。唐書、禮樂志「明皇既知二音律一、又酷愛二法曲一、選二坐部伎子弟三百一、教二于――一、號二皇帝――弟子一」

【梨園弟子】ライエン　俳優。前條參看。

【梨花】ワ　なしのはな。蘇軾詩「――淡白柳深青、柳絮飛時花滿レ城」

【梨花一枝春帶レ雨】ハルヲオビタリ　美人の涙を帶べる形容。白居易、長恨歌「玉容寂寞淚闌干、――」

【梨雪】セツ　なしの花を雪に喩へていふ。歎莊詩「隔レ牆――又玲瓏」

【梨園】ソウ　なしと、なつめと。章應物詩「貧居煙火濕、歲熟――繁」

【梨無レ主】ナシシユ　梨の樹に所有主なし。元史、許衡傳「過二河陽一、渴甚、道有レ梨、衆爭取啖レ之、衡獨危二坐樹下一、自若、或問レ之、曰、非二其有一而取之不可也、人曰、世亂此無レ主、曰、――、吾心獨無レ主乎」

【梨地】ナシ　國うるしぬりの名、梨の實の皮の如くに金銀の粉を蒔き散らしたるもの。

【梨壺】ツボ　國昔、禁中にありし殿舍の名。＝昭陽舍。

【梩】リ　支

○つちぐるま（畚）土を徙すくるま。一說に、ふご、かご。○すき、くは（鍤）孟、滕文公「反二葬一而掩二之」

【栁】柳（木部五畫）の本字。

【梁】リヤウ　陽

○はし、車馬の通ずるを得る水橋。孟、離婁「十二月興一成」○つつみ（隄）○石を以て水を絕ち其の中を空にして魚の往來を通ずる所「石一」○やな（水堰）河中に木を竝べ立てて水を塞ぎ魚を捕へる仕掛。孟、梁惠王「澤一無禁」詩、小雅「飲筍在一」「魚一」○うつばり、はり、屋の棟を支へる大なる橫木「屋一」「一棟」○朝代の名、武帝蕭衍建つ、四代五十五年にして陳に禪る。○五代の時、太祖朱溫建つ、二代十六年にして後唐に亡ぼさる、前者に對して後一といふ。○國名、戰國の時、魏の惠王都を大一に徙し、亦一と號す。○州名、古の九州の一。禹貢「華陽黑水惟一州」今の四川・雲南・貴州の地。○冠一は冠上の橫脊。○陸一は亂れ走る貌。

【梁極】エイ　うつばりと、大いなるはしらと。又、重任を負ふ人に喩ふ。唐書、韋皐等傳贊「皆爲二國一一、光奮二一時一」

【梁苑】エン　次條に同じ。苑は花園。李白詩「荊門倒二扈宋一、――傾二鄭枚一」

【梁園】エン　漢代、梁の孝王の名高きその。杜甫詩「醉舞――夜、行歌泗水春」＝梁苑。

【梁桷】カク　うつばりと、たるきと。韓愈、新修滕王閣記「棟極――、板檐之腐黑挽折者」

【梁材】ザイ　うつばりにする材。爾雅「今大廟――用二此木一」

【梁山】サン　山の名、今の山西省離石縣の東北なる、呂梁山。詩、大雅「奕奕――、維禹甸レ之」奕奕は大いなる貌、甸は治、禹、――を治めて水災を除く。

【梁山泊】サンパク　即ち梁山張澤湖をいふ。北宋の劇賊宋江、砦を結びし

虞、山東省壽張縣の東南、梁山の下に在り、即ち古の鉅野澤、下流汶濟二水、會して濼を成す、宋代黄河決して其の中に匯入し、綿亘數百里、後、黄河南に徙り、歲久うして塡淤し、遂に平陸と成る。

【梁棧】かけはし、さんばしゝ虞集詩「復著二一一横二清溪」

【梁津】わたしば。楚辭「麾二蛟龍一以一一兮」＝津梁。

【梁上君子】盜賊をいふ。陳寔の故事。後漢書、陳寔傳「時歲荒、有レ盜夜入二其室一、止二于梁上一、寔陰見レ之、呼二子孫一、正レ色訓レ之曰、夫人不レ可レ不二自勉一、不善之人、未二必本惡一、習以レ性成、遂至二於此一、——是矣、盜大驚、自投二於地一、稽顙請レ罪」

【梁書】五十六卷、唐の太宗貞觀年中、姚思廉、勅を奉じて撰す、本紀六卷・列傳五十卷、志表なし、五代の梁の歷史。

【梁塵】うつばりのちり、歌聲の善きを賞して、聲梁塵を動すといふ。劉向別錄「魯人虞公、發レ聲清越、歌動二一一」

【梁槐】うつばりと、むなぎと、重任を負ふ人に喩ふ。魏書、李沖傳「位當二端揆一、身任二一一」＝棟梁。

【梁父】泰山の支阜ノカタカ山東省新泰縣の西に在り、古の天子、泰山に封じ、一一に禪す。

【梁父吟】諸葛亮の詩。梁父一に梁甫に作る。曰く「步出二齊城門一、遙望二蕩陰里一、里中有二三墳一、纍纍正相似、問是誰家冢、田疆古冶氏、力能排二南山一、文能絕二地理一、一朝被二讒言一、二桃殺二三士一、誰能爲二此謀一、相國齊晏子」二桃殺二三子一（七七頁四段）參看。

【梁甫吟】前條に同じ。

【梁木】うつばりにする木。哲人に喻ふ。禮、檀弓「泰山其頹乎、一一其壞乎」

【梁麗】うつばり、麗は欄ラウ一說に車の名。莊、秋水「一一可二以衝一レ城、而不レ可二以窒一レ穴」

【桁】リヨ 齊

ひさし、のき。屋根の端「屋一」「樓一」

【栁】〔國字〕

しきみ（櫁）山中に自生する常綠有毒性灌木、芳香あり、枝葉を佛前に供す。＝多香木・櫨香・舶茴香。

【梦下】〔國字〕

ふもと、やまのすそ（麓）

八 畫 麻 傅

【椅】㊀イ ㊁イ 支 紙

㊀いひぎり。桐に似たる木、梓ナツの一種。詩、鄘風「一桐梓漆」㊁いす、こしかけ、後方によりかかりあるこしかけ。＝椅子。

【椅几】けそく、おしまづき。蘇軾詩「願君如二此木一、凜凜傲二霜雪一、斷爲二君一一、滑淨不レ容レ刮」

【椈】ニキ 陌

木の名。

【椹】ニン 寑

○木の名、實は紅林檎に似て赤く味よし。○梓一は大木、材は貞勁にして船を作るに堪ふ。

【棄】キ 寘 弃は古字

○すつ、すてる（捐）「放一」「委一」「屏一」「拋一」「遺一」「自暴自一」○わすれる（忘）かまはずしてすて置く。詩、召南「不レ我遐一」○周の先祖后稷の名。○一棄臣は君主の死をいふ。

【棄捐】すつ。劉向、戰國策序「孟子荀卿儒術之士、一一於世」＝捐棄。

【棄骸】すてたるかばね。蘇軾詩「漲レ湖巡レ城拾二一一」

【棄毀】破りすてる。南史、沈恂傳「閉レ門卻掃、無所二交接一、時有二文章一、隨即一一、不レ令二流布一」＝破棄。

【棄疾】うたがひをすてる。荀子「知莫レ大二乎一一、行莫レ大二乎無一過」

【棄卻】○うちすてる。搜神記「將二髑髏一安二頭上一、便搖レ之落者一一」＝棄去。○法律の語、上訴を裁判所にて取り上げず。

【棄去】すてさる。韓愈詩「是非竟何有、一一非二吾倫一」＝棄卻。

【棄軀】いのちをすてる。蘇軾詩「覺レ鏡自嫌欲レ一一」＝捐軀「晉書」

【棄灰刑】灰を道路に棄つる者を罪する刑。韓非子「殷之法、棄二灰於衢一者刑」

【棄業】仕事をやめる。韓愈文「廢レ事一一、忘二寢與一食」＝廢業。

【棄擲】己の權利をすてる。

【棄妻】逐ひ出されし妻。馬融賦「放臣逐子、一一離友」＝棄婦。

【棄市】殺して屍を市中にさらす。史、秦紀「有二敢偶一語詩書一一一」

【棄兒】すてご。通鑑、唐紀「一一滿レ路」

【棄世】○世俗を超脫する。莊子「夫欲免偽レ形者、莫レ如一一レ、

一一レ則無レ累」○人の死をいふ。李白詩「王公希代寶、一一一何早」

【棄唾】吐きたるつばき、すてて惜げも無きものに喩ふ。蘇軾詩「向來名宦事、回レ首如二一一一」＝唾棄。

【棄地】すて置ける土地。柳宗元文「問二其主一、曰、唐氏之一一、貧而不レ售」

【棄擲】すてなげうつ、うちやる。＝擲棄・投棄。

【棄背】すててそむき去る。王羲之文「周嫂一一、切割二心情一」

【棄廢】すてて用ひず。又、すてたる事がら。宋史「太宗尙二儒雅一、勤二於政事一、修二明典章一、大抵一一舉矣」＝捐棄・廢棄・擲棄。

【棄法】おきてむすてる。新論「未レ有二一一一而成二治也」

【棄瑕】ふでをすてる、文事にたづさはることをやめる。庾信文「非レ有二班超之志一、遂以一一」＝投筆。

【棄婦】棄妻に同じ。顧況詞「古人離二一一一、一一一有二歸處一」

【棄物】廢物に同じ。老子「聖人常善救レ物、故無二一一一」

【棄養】父母の死をいふ、人の子は父母を孝養すべき者なるが故。

【棄約】約束したる事をなげやりにして守らず。詩經、疏「棄其約」

【棊】キ 支

或は碁・棋に作る

○こま、將棋、又、すごろくのこま。○ご、ごいし（碁石）「奕一」博物志「堯造圍一、丹朱善之」○ごをうつ。

【棊奩】どうち。韓偓詩「目隨二一一一靜、心共二曉僧一閒」

【棊局】ごばん。晉書、天文志「天員如二張蓋一、地方如二一一一」員は圓。＝博局。

【棊子】どいし。王羲之文「石首魚、腦中有レ石、如二一一一」＝棊石。

【棊戰】棊をうちて勝負を爭ふ。圍碁の爭。陸游詩「僧招主二一一、客讓主二詩盟一」＝棋戰。

【棊峙】次條に同じ。魏書、李憲傳「雲擾而海沸、亦岳立而一一」

【棊跱】どいしの如くに並び立つ。跱は峙。吳志、陸遜傳「方今英雄一一、射狐闚望」＝棊峙。

【棊敵】どの對手。黃庭堅、雨中花詞「誰共茗邊一一一」

【棊盤】ごばん。靈臾「鮮畫一一」＝棊局。

【棊布】どいしの如くちらばる。陳遵、岩山亭賦「羣國牧豎、星列一一」＝棊畝。

【棊枰】どばん、枰は博局。陸龜蒙、幽居賦序「伸宣方玩二子一一、叔夜遂眠二于餘竈一」宋史、王繼恩傳「執二博局一一一自隨」＝棊局・棊盤。

【棊列】どいしの如く並ぶ。後漢書、宦者傳「府署第館、一一二于都鄙」

【棋】キ 支

棊（前條）に同じ。

【椐】㊀キヨ ㊁キヨ 魚 御

○まがき（疎籬）○ふしこぶある木、杖と爲すべし、即ち靈壽杖。○一一は相隨ふ貌。枚乘、七發「一一彊彊」

【棘】キヨク 職

○いばら、うばら、灌木の一、莖堅く刺多く、生垣に造る。○刺ゲのある小木の總稱「荆一」○こなつめ（小棗）○すみやかに、せまる（急）詩、小雅「玁狁孔一」＝亟。○やす、つかる（羸）○かなしみてあわてる、哀遽の貌「人」今、新に父母の喪に遭ふ者、自ら稱して一人といふ。○ほこ。左、隱十一「子都拔一而逐之」戟に通ず。○ひとや「牢獄」囚を執へ繫ぐ所、周圍に一を植ゑたる故。○九一は外朝。又、外朝の位階。一木之聽を參看。○國事の理サバめ難き者を一手といふ。

【棘圍】進士の試驗場。韻府「章承貽詩、蓬巷蔑時聞二吉語一、一一何日免二重來一」唐、禮部閱試の日、棘を以て之を圍むが故。

【棘猴】棘刺を見よ。

【棘矢】いばらにて造りたるや。左、昭四「桃弧一一、以除二其災一」

【棘刺】いばらのばら。韓非子「衞人有下能以二一一之端一爲二母猴一者、必三月齋然後能觀之、燕王因以二三乘一養之」

【棘茨】いばら、茨は荊棘。陸游詩「蘚路環莫レ組、石罅生二一一一」＝茨棘。

【棘者】やせたるもの。呂覽、一一欲レ肥、肥者欲レ棘」

【棘叢】いばらのむらがり生じたるところ。孟郊詩「投二彼霜雪會一、翦除荊一一」

【棘皮動物】背と腹との區別あるのみにて左右前後の別なき動物の總稱、うに・なまこなど。

【棘木之聽】罪狀を糾問する義。禮、王制「史以二獄成一、告二於大司寇一、正聽レ之、正以二獄成一、告二於大司寇一、大司寇聽二之棘木之下一」註に左の九棘は孤卿大夫位し、右の九棘は公侯伯子男位す。

【棘門】にこ・やりなどをならべたる門。周禮、掌舍、注「一一以レ戟爲レ門」

【棘鰲魚】鯛タヒの異名「圖書、南蠻志」